

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

山陽新幹線建設に伴う調査 II

(岡 山 以 西)

1974, 3

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

山陽新幹線関係の報告は、すでに昭和47年「埋蔵文化財発掘調査報告」として岡山市以東関係分を刊行いたしました。今回は、岡山市以西から広島県境までの路線内ならびに同付帯工事にかかる7ヶ所の遺跡の報告をおおやけにすることになりました。この報告書は昭和46年8月二子御堂奥古窯址の調査着手以来、昭和48年6月川入遺跡調査終了までの2ヶ年の調査とその後の整理作業を含めた3ヶ年に及ぶ調査の集成であります。

このたびの約50km間に確認された7ヶ所の調査地は、遺構の粗密の差が著しく、特に川入遺跡、上東遺跡などは路線の延長1km前後におよぶ大規模な低湿地遺跡で、時代も縄文時代から歴史時代にわたる複合遺跡であったため、長期間の調査を必要といたしました。

遺跡の保存については日本国有鉄道、大阪新幹線工事局岡山工事事務所とたびたびにおよぶ協議のすえ、川入、上東遺跡では橋脚幅を35mにするなどの長大スパンによる橋脚間保存処置を取ってきました。

発掘調査は、いろいろな面で非常に困難をきわめましたが、山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員各位、岡山市、倉敷市、金光町、鴨方町など地元教育委員会関係からは、幾多のご協力を得ました。また、地元作業員をはじめ、国鉄大阪新幹線工事局岡山工事事務所の方々からは多大のご協力を賜わり、調査を担当した県専従職員の努力の結果、ようやく本書を上梓できるはこびになりました。ここに深く感謝の意を表するとともにこの報告書を今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てていただければ幸いです。

昭和49年3月

岡山県教育委員会

教育長 小野啓三

例　　言

① この報告は、山陽新幹線建設に伴い、日本国有鉄道の委嘱を受け、岡山県教育委員会が行った岡山以西における発掘調査の報告である。

② 山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員は、岡山以東と同じく岡山県遺跡保護調査団から推選をうけ下記の諸氏を委嘱した。（職名は1974年3月現在）

　山陽新幹線埋蔵文化財対策委員（アイウエオ順）

小野一臣（県立玉島高校教諭）

鎌木義昌（岡山理科大学教授）

近藤義郎（岡山大学法文学部教授）

西岡憲一郎（自家商業）

西川宏（山陽学園教諭）

春成秀爾（岡山大学法文学部講師）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

三杉兼行（甲浦郵便局局長）

渡辺健治（美作考古学会会長）

対策委員各位からは、しつこい激励を受け終始有益な助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

③ この報告をまとめるにあたって

自然遺物の鑑定は、岡山大学農業生物研究所 教授 笠原安夫

木器、木材の鑑定は、岡山大学農学部 教授 畑柳鎮

石材の鑑定は、岡山県教育センター 指導主事 上野等

獣骨の鑑定は、東京農工大学 教授 林田重幸

助教授 鈴木孝志

又花粉分析の鑑定は、東北大学理学部大学院 安田喜憲

以上の諸先生に分析、測定をお願いし、有益な教示と助言を受けた。また笠原、畠柳、林田、鈴木、安田諸先生からは、特別に玉稿をいただいた。記して感謝の意を表したい。

④ 発掘調査は、1971年8月16日二子御堂奥古窯址群の調査に着手し、以下別表のように1973年6月末岡山市川入遺跡の終了まで九二年間を費した。

整理作業は、1973年7月より1974年3月31日まで旧ろう学校（岡山市西古松）にプレハブを建てて行った。

⑤ 調査遺跡の概略

遺 跡 名	種 類	調 査 期 間	担 当 者
二子御堂奥古窯址群 (倉敷市二子)	飛鳥、白鳳、奈良、平安時代の須恵器、瓦窯址	1971.8.16 ~ 12.20	葛原 克人 池畠 耕一 伊藤 晃
御 堂 奥 遺 跡 (倉敷市二子)	古墳時代～平安末・鎌倉初期	1971.12.21 ~ 3	葛原、池畠、伊藤、村上 幸雄
宮地池散布地 加賀池散布地 (浅口郡金光町占見)	縄文時代～江戸時代	1971.2.1 ~ 3.10	伊藤、池畠、村上
上 東 遺 跡 (倉敷市上東)	弥 生 時 代 江 戸 時 代	第一次調査 1972.3.13 ~ 6.30 第二次調査 1972.7.1 ~ 1973.6.10	伊藤、池畠、村上、大谷 猛、藤田憲司 伊藤、柳瀬 昭彦、池畠、藤田、村上、樋口 啓子
川 入 遺 跡 (岡山市川入)	弥 生 時 代 平 安 時 代	1972.4.1 ~ 1973.6.30	正岡 陸夫、大谷、枝川 陽
島 地 貝 塚 (倉敷市玉島)	縄文時代～歴史時代	1972.5.1 ~ 11.30	下沢 公明 新東 晃一
益坂散布地 (鴨方町益坂)		1972.4.1 ~ 4.30	下沢、新東
整 理 作 業		1973.7.1 ~ 1974.3.31	柳瀬を中心調査参加者が随時参加

⑥ 調査費用（含職員人件費）

単位は千円。(m²)は契約面積

年度	分布調査	二子御堂奥古窯址群	御 堂 奥 寺	上 東 遺 跡	川 入 遺 跡	島 地 貝 塚	宮地池散布地	加賀池遺跡	益坂散布地	報告書作成費	小 計
45	800	(国庫400) (原費400)				70補障トレンチ含む					800
46	3,697 (750m ²)	7,888 (1,600m ²)	2,036 (1,304m ²)			493 (100m ²)	1,972 (400m ²)				16,086 (4,154m ²)
47			23,189 (4,287m ²)	26,814 (4,562m ²)	6,830 (1,300m ²)			935 (300m ²)			57,768 (10,449m ²)
48			12,976 (1,878m ²)	3,313 (480m ²)					15,661		31,950 (2,338m ²)
小計	800	3,697 (750m ²)	7,888 (1,600m ²)	38,201 (7,469m ²)	30,127 (5,042m ²)	6,830 (1,300m ²)	493 (100m ²)	1,972 (400m ²)	935 (300m ²)	15,661	106,604 (16,961m ²)

⑦ 発掘調査にあたっては、関係市町村教育委員会からは諸々の御援助を受けた。また二子御堂奥古窯址調査開始以来、御堂奥遺跡、上東遺跡終了にいたるまで、終始作業員の中心となって御世話をいたいた内田竹三氏をはじめ小野一臣先生の率いる玉島高校地歴部の諸君川入遺跡では、高塚力氏をはじめ、藤野琴右エ門、高木昇、高木正一、高木三郎、犬飼元四郎、熊代梅夫、高木智枝子、高木千代子、高木弘子、高木静子、高木淑子、秋山文子、熊代肇、犬飼克子

二子御堂奥古窯址、御堂奥遺跡、上東遺跡では、浅倉秀昭、犬飼島吉、板谷隆雄、板谷庄一、板谷博、内田竹三、内田慧、内田秀雄、楠楠太、楠真喜雄、楠広一、那須重男、難波斐夫、難波善吉、難波和戈、林義夫、吉田勇、吉田謙三、中田駒一、坪井金平、坪井安雄、犬飼孝恵、犬飼弘子、犬飼澄子、板谷美代子、小野文江、楠静子、楠見寿女、武本武津子、坪井恵美子、坪井和江、坪井こいの、練尾雅子、細田美代子

島地貝塚では、仲豊雄、難波柳太郎、片山広雄、古川久一、片山功、片山健二、宗沢繁一、白髪一雄、磯崎豊、田辺重太郎、中塚友十、田辺婦美子

宮地池、加賀池遺跡では、定金治太一、久戸瀬仁郎、久戸瀬軍一、鎌谷寿夫、石部輝吉、畠山皓、鎌谷文江、久戸瀬ヒサシ、石部照子、白神たかこ

益坂散布地では、西本克己、安田勝利、安田考一、高橋長太郎、山口松太、前田信一、今井省三、田辺延子、田村末子、石部房代、安田愛子、今井文子、今井澄子、藤井久子、西本澄江、今井みどり、高橋季子、高橋ミサエ、安田美子

西古松収蔵庫では、小川弘子、片山光重、黒住幸子、田上哲子、中瀬繁子、難波毅子、難波操、長谷川郁子、平岩章子、藤原富美子、森田澄子、安富花子、山吹達児、吉原和恵又整理にあたっては特に、学生、竹田勝、江見正己、安川豊史等々に絶大なる協力を得た。記して謝意を表する次第である。

- 本書の各遺構断面図の数字は海拔標高を示している。また上東遺跡では、それぞれの遺構、例えば、住居址→H、土壙→P、井戸→井、溝→Dなどの略号を用いている。
- 土器実測図に附した番号は、川入遺跡は遺構ごとに、その他遺跡は通し番号にしている。
- 本書の遺構写真は各遺跡ごとの担当者が撮影したものである。遺物写真の上東遺跡に関するものについては、写真家、坂本一夫氏によるもの、あるいはその指導を受けて柳瀬が撮影したものである。また、木器の写真は山崎治雄氏の写真を譲り受けたものである。

また、御堂奥遺跡、二子御堂奥古窯址群に関する遺物写真は、岡山県立博物館学芸員上西節夫氏の手をわざわわした。

- 上東遺跡の調査にあたっては、遺構には、調査単位区ごとに番号を付し、橋脚位置、工事用道路の別にしている。例えば、亀川橋脚位置、東鬼川市調査区からは順に、J—10（第1橋脚位置及び工事用道路、J—15、（第1橋脚と第2橋脚間の工事用道路、J—20、J—25、J—30とし、西鬼川市調査区からはJ—35、J—40、J—45、J—50、田

所調査区，J—55，J—60，下田所調査区，J—65，J—70，J—75，J—80，才の元調査区，J—85，J—90としている。立溝，才の町，亀川，才の元，五反田は，そのままの名称を用いている。

川入遺跡については，グリッド方式で発掘調査をすすめ，東よりの微高地を大道西Ⅰ，Ⅱ調査区，西よりの微高地を法方寺調査区と呼ぶこととした。

二子御堂奥古窯址群の調査は，後に報告する第2号窯の窯体主軸線を基準とし，3×3mのグリッドを窯体及び灰原へはり，遺物はグリッド単位で層序的に採集している。

- 各遺跡の遺物の実測，トレスは図目次に付しているが，上東遺跡のものに関しては，土器は，竹田，江見，藤田，池畠，柳瀬，伊藤が実測し，トレスは岸武津子の授助を得て，池畠，柳瀬，伊藤が行った。木器は柳瀬の，石器は安川の実測，トレスである。
- この報告書は，「山陽新幹線建設に伴う調査 Ⅱ」としているが「Ⅰ」は岡山以東関係の報告書をこれにあてる。

総　　目　　次

序　　文

例　　言

第 I 部	序	説	1
第 II 部	川入遺跡の調査		15
第 III 部	上東遺跡の調査		97
第 IV 部	御堂奥遺跡の調査		237
第 V 部	二子御堂奥古窯址群の調査		255
第 VI 部	島地貝塚の調査		305
第 VII 部	加賀池, 宮地池遺跡及び益坂散布地の調査		321
第 VIII 部	川入・上東遺跡出土資料の自然化学的 鑑定及び考察		337

第 I 部 序 説

第1章 行政的対応の諸問題

調査に着手するまでの経過と問題点

1972（昭.47）年3月、当初東京を起点とし名古屋・大阪を経て岡山を終点とした国鉄の新幹線構想は、さらにニスカレートして九州博多まで貫通する運びとなり、岡山県教育委員会においても文化財保存の観点に立ったそれへの対応が急務重要な課題となるにいたった。

それより先、1969（昭.44）年下半期、すでに国鉄当局によって独自に岡山駅舎以西の路線がいっせい発表されたという事実は、九州経済圏からの強い要請によるものであったと思われる。

ともあれ県教委としては、この路線発表の段階までに、文化庁からの国庫補助金をうけて文化財の所在調査に取り組むといったことはまったくなかったのである。かくして以後のいっさいの文化財保存にかかる諸問題がこのことによって規定された事実はおおいがたい。では何故にこうした分布調査がたち遅れたか。その原因の一つは、津島事件以来、考古学研究者から県教委の遺跡保存にたいする姿勢がとわれ、以後本事業の対策委員会に諮問することもなく、県内研究者の意見あるいは見解を反映しえないという情況を生み出していたことである。したがってただちに分布調査への協力関係を呼びかけることができなかつた事実をまず指摘しなければならない。（この点については別に項を改めて後述するであろう。）

そして第二には、昭和42年に文化財保護委員会（現文化庁）と日本国有鉄道との間に締結された「日本国有鉄道の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」にもとづき「工事施行に際しての意見聴取及び協議」が軽視された点をあげることができよう。もっとも国鉄としては、文化庁発刊の「遺跡地図」に依拠しながら、また時として県教委の文化財保護行政の主管課におもむき、担当官の個人的見解をただしたりしながら、本計画について一定の見通しをたてつつあつたことは、いまからすれば国鉄サイドの理解にもとづく「意見聴取」であったと推察できるのであるが、加うるに岡山県の特殊性としては、岡山駅舎を中心として県内を東西に二分され、以東部分においてはなお発掘調査を継続しながら、以西においては分布調査事業に取り組まざるを得ない状況に追いつまれたことがあげられる。あまつさえ、県北では中国縦貫道の建設にも拍車がかかり、その関連遺跡にも多数の調査員を投入せざるをえない条件下にあった。

こうした中で路線発表をおこなつた国鉄は、一拋に用地買収にとりかかり、地元折衝の難行した岡山市花尻地区を除く予定路線上に驚くばかりの速さで幅広の打ち込み作業を実施した。事前であるべき分布調査事業にその後やっと取り組むこととなつたわけで県段階における分布調査事業の早期取り組みのための努力の欠落を反省すると共に、本府本社間における協議の迅速化が問題解決の出発点であり終局点であることをあらためて通感する。

とりあえずその間の対国鉄折衝にかかるる資料を簡約すると以下のとおりである。

1969（昭44）年11月県教育委員会は雄町遺跡軌道敷部分の調査時点以来、岡山以西の遺跡の問題を含めた協議を国鉄と行ってきたが、1970（昭45）年3月、第1回の協議を行い、(1)昭和45年度に県教委は国庫補助を受け分布調査を行う。(2)すでに判明している路線上の遺跡については、県職員が4月

中に現地踏査を行い、その上で発掘調査方法、期間、費用等を再協議する。(3)上東遺跡については、今秋より調査要員をある程度出すことが可能である。等々の確認を行った。

5月(21日)は、県職員の現地踏査の報告結果その位置、規模、調査日数及び経費等の報告を行い、次の資料を提供した。

(資料、1の1、1の2)

資料1の1

表一1 山陽新幹線建設予定地(岡山市以西)埋蔵文化財分布状況

昭和45.5.12 文化課

遺跡名	所在地	延長	摘要
① 川入遺跡	都窪郡 吉備町	500m (250~300m)	旧板倉川自然堤防上に営まれた遺跡で弥生時代から歴史時代に至る遺物の散布がある。 (発掘調査予定単価㎡当たり6,000円)
② 上東遺跡	都窪郡 庄村	1,000m (900m)	弥生時代低地性大集落として著名で弥生時代の大遺跡であり奈良・平安時代の遺構も知られている。 (発掘調査予定単価㎡当たり6,000円)
③ 御堂奥庵寺	タタタ	80m (50m)	平成時代寺院跡(発掘調査予定単価㎡当たり4,000円)
④ 島地貝塚	倉敷市 玉島	100m (50m)	縄文時代、弥生時代の遺物を出土するが、古墳時代から歴史時代に至る貝層の堆積も確認されている。 (発掘調査予定単価㎡当たり6,000円)
⑤ 敷布地	浅口郡 金光町	70m (50m)	充分調査されていないので内容は不明

資料1の2

表一2 山陽新幹線(岡山~大門)埋蔵文化財発掘調査工程

打合せ行程(S45.5.21)

杆程及び遺跡名	所在地	発掘調査 延長 m	発掘調査 所 要 月 数	埋蔵文化財調査			摘要
				45年 度	46年 度	47年 度	
新大阪起点 168K300M付近 川入遺跡	都窪郡吉備町	500 (250~300)	18				島地貝塚調査のパートで発掘調査
新大阪起点 169K600M付近 上東遺跡	都窪郡庄村	1,000 (900)	48				46年頭初より2パートを投入47年度末までに完了
新大阪起点 171K200M付近 御堂奥庵寺	都窪郡庄村	80 (50)	1				45年度秋より1パートを投入、46年度で調査完了。46年度頭初に島地貝塚に係る調査の状況により範囲拡大することあり。
新大阪起点 188K500M付近 島地貝塚	倉敷市玉島	100 (50)	5				46年度当初より御堂奥庵寺跡調査のパートが調査する。
新大阪起点 192K800M付近 敷布地	浅口郡金光町	70 (50)					充分調査されていないので内容不明

註 1 発掘調査延長欄の上段はボーリング調査を含めた範囲
下段()内発掘調査の必要な範囲を示す。

10月（23日）には、具体的調査行程、調査巾等々の協議を行ったが、45年度10月からは、岡山県以東、雄町遺跡の側道敷部分の調査が未完であったため、岡山以西の調査に着手することができなかつた。

11月（10日）には、これまでの協議をもとに、大阪新幹線工事局岡山工事事務所長から岡山県知事及び教育長あての公文書を受け取り（資料2の1、2の2）県教委は、12月23日付で資料3の回答を行つた。（資料3）

資料2の1

大幹工岡第1368号

昭和45年11月10日

岡山県教育委員会

教育長

あて

大阪新幹線工事局

岡山工事事務所所長名

山陽新幹線建設につきましては種々ご高配を賜わり感謝します。

さて当所では山陽新幹線（岡山以西）の線路選定を終り、工事施行の時期となつてまいりましたが事業地に関係のある標記について、埋蔵文化財包蔵地の在否その他について貴委員会のご意見をお書きいたしたいので、下記により協議します。

記

1 場 所 岡山市～笠岡市間（新大阪起点164K420M～209K420M）

2 図 面 図 面 6葉

3 文化庁と日本国有鉄道との埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書にもとづいて、回答願います。

資料2の2

岡山県知事

あて

大阪新幹線工事局

岡山工事事務所所長名

山陽新幹線建設につきましては、多大のご配慮を賜わり厚くお礼申し上げます。

お蔭をもちまして、岡山以東の工事は順調に進捗しておりますが、このたび、いよいよ岡山以西の工事に着手する段階を迎ましたが標記につきましては、昭和44年11月18日に貴県（文化課）と下協議として以来調査工程と工事工程について数回にわたって、協議を重ねてまいりました。

当所としましては、既定計画である昭和50年4月開業をめざして、業務を進めていますが埋蔵文化財の発掘調査については、工事工程47年度中に完了しなければ所期の開業が不可能と考えられます。ご承知のとおり現在国鉄は財政再建10ヶ年計画の推進期間中であり、国鉄財政の現状からみて、1日

も早く新幹線建設工事を完了し、営業を開始しなければならない実情にありますので、この発掘調査は是非47年度中に完了しなければならない事態にたちいたっております。

上記事情をご賢察のうえ、特段のご配慮を賜わりますようよろしくお願ひ申し上げます。

記

- 1 場 所 岡山市～笠岡市間（新大阪起点164K420M～209K420M）
- 2 埋蔵文化財包蔵地図面 1葉
- 3 埋蔵文化財包蔵地箇所の工事工程表

資料 3

教文財第3614号

昭和45年12月23日

日本国有鉄道大阪新幹線工事局

岡山工事事務所長

あて

岡山県教育委員会

教育長名

山陽新幹線建設（岡山以西）に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて（回答）

文化財の保護につきましては常々ご高配を賜わり感謝いたしております。

さて、昭和45年11月10日付大幹工岡第1368号によりご協議のありました標記の件につきましては、当教育委員会といたしましても、山陽新幹線建設事業の公共性にかんがみ、文化財の保護とあわせて遺憾なきを期すため、目下分布調査を実施しております。

したがって今後も更に新たな遺跡の確認されることも考えられますが、現在の知見にもとづいて、とりあえず下記のとおり回答いたします。

なお、今後ともご高配を賜るよう重ねてお願ひいたします。

記

別添のとおり

1 埋蔵文化財包蔵地の場所ならびに現状

遺跡名	所在地	キロ程	現状
川入遺跡	都窪郡吉備町 川入	168k40m～ 168k520m	水田中に旧板倉川河道の痕跡が残り、河岸一帯が自然堤防の微高地形を示している。この微高地上の一帯に弥生時代後期から奈良時代、平安時代にわたる土器片の散布がみられこの微高地一帯に遺跡が広がっていることが認められる。
上東遺跡	都窪郡庄 村	168k900m～ 169k900m	庄村岩倉から上東にかけて水田地帯一帯に広がる微高地上には、広範にわたって弥生時代、奈良時代の遺物散布があり、特に上東字鬼川市付近一帯は大量の上東式土器の出土が知られている。
御堂奥塙寺跡	都窪郡庄 村	171k160m～ 171k300m	山麓の畑中に瓦片等の遺物の散布がみとめられ、畑のあぜにはばかり一町の寺院跡の面影を残している。
島地貝塚	倉敷市玉 島	188k380m～ 188k500m	貝塚のある小丘陵は、付近一帯の水田地帯が干拓されるまで小島をなしていたもので本貝塚は、この小島の海岸線に遺された遺跡である。山陽本線工事等でかなり破壊されたが今日も畑中に貝殻の散布がみられる。

2 措置に関する意見

遺跡名	措置に関する意見
川入遺跡	発掘調査が必要であるが、この地域が吉備中枢部に対する港として、重要な地位にあることからみて、重要な遺構が発見されることも考えられる。したがって万一重要な遺構が発見された場合には遺構の保存について配慮が必要である。
上東遺跡	予定地付近は上東遺跡の中心部にあたり、文化財の保護上好ましくないと考えられるので、路線の変更が望ましい予定の地域に建設工事を行なう場合は遺跡の保護に特別な配慮が必要であり長期にわたる大規模な発掘調査が必要である。
御草奥窓寺跡	発掘調査が必要である。遺跡の保護を配慮した設計が望まれる。
島地貝塚	発掘調査により完全な記録の保存が必要である。
福永散布地	発掘調査が必要である。

国鉄に提出した資料の問題

県教育委員会は、国鉄との協議の際、種々の資料を作成して会議に臨んでいた。しかし、これらの資料は国鉄に対して文化財保護の観点に立った具体的な処置を協議する内容をも含む重要な資料であり、行政担当者間における意見交換は、現場ごとに全体会議を持ってそれなりに一定の見解をまとめあげ、しかし後、国鉄に折衝にのぞむよう努力したところである。しかし、対策委員会にはかることがなかったため、以前から対策委員会で二子窯址の存在とその保護をたびたび指摘されていたにもかかわらず国鉄に提出した公文書（教文財3614号=資料一3）の中には欠落したまま挙げられていなかったり、またその後の（第一次調査後）橋脚巾を拡げて遺跡の保存を要望した文書（資料一4）の中にも内容的に問題のある部分もあった。とりあえず、保存に係る対国鉄への要望書を掲げておこう。

資料 4

上東遺跡の位置について

上東遺跡は、岡山市の市街地から直線距離にして約7km西方にあたり、倉敷市上東（旧都窪郡庄村）に所在する弥生時代の大集落として著名である。

付近には、河道巾約20mの足守川が南流している。足守川は、明治初年までかなりの荒れ川であったが、国鉄吉備線の敷設工事に導入された工法が河道の築堤に応用され、はじめて現在みる安定した足守川になったという。したがって、原始古代からしばしば旧河道は流身を変更しているのであるが、そのつど河道の両岸には細長い低丘陵状の自然堤防が形成され、それが古代人にとっては、安定した居住地帯となっていた。

今から約2,300年前、水稻耕作が招来されて以来、狩猟・採集経済から訣別したわれわれの先祖は自からの手で食物をつくりだす生産経済へと驚異的な飛躍をとげたのであるが、その場合、なによりも低湿地にちかく、流水を自由に利用できることが生産を保障する必須条件であったことはいうまでもない。そのため、この足守川の河床および周辺には、高田遺跡、新邸遺跡、惣爪遺跡、岩倉遺跡など周知の遺跡が河道にそって南北に連なっている。わけても、その南端に位置する上東遺跡は、現在までに採集された膨大な土器量からして、弥生時代の終末に近い段階における集落の様相を把握する

うえで学術上の意義はきわめて大きい。それはまた、古墳時代の前夜にあたる時期でもあり、集落の構成や墓地のあり方など古墳を生み出す母体としてその実態が注目される。

また、上東遺跡、川入遺跡の歴史資料としての重要性は、次のことがらからも目瞭である。

岡山駅以東の雄町遺跡でも確認されたことであるが、岡山平野の弥生時代遺跡の周辺には、同時代の水田跡が埋没している。これらの弥生時代中期以後の水田跡は岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授の分析・研究からオホバコやタカサゴウなどの畑地雜草も水田付近に繁殖していた半乾田であったことが明らかになった。

この事実は、これまで弥生時代水田跡が、静岡県登呂遺跡（後期）に代表される木製矢板で区画された湿田であるという考え方をくつがえす重要な問題を提起した。なぜなら、水田の単位面積あたりの生産力は、湿田にくらべて半乾田の方が高いというのみでなく、湿田から乾田までの諸形態のなかでこの半乾田状態の水田が最高であるという事実を背景にしてこそ巨大な前方後円墳に代表される古墳文化の成立を理解できるからである。

このように遺跡の性格が明瞭になってくると、住居跡や土壙墓が検出されない個所も、水田遺構としてきわめて重要な意義をもつことは言うまでもない。

弥生時代水田土壤中には、これらの作物の種子・水田雜草・畑地雜草の種子の他に各種植物の花粉もふくまれているので、種子の残存していない植物の繁殖も証明できる。

この他、弥生時代各時期、古墳時代～古代各時代の灌漑用水路もこれまでの試掘溝で確認されており、農業生産技術の進歩を研究するうえできわめて貴重な資料を包含していることが明らかである。

以上のような理由で、住居跡、墳墓のみでなく水路・水田等農業生産に直接関係のある諸遺構をもふくめて遺跡全体を後世に伝えることが遺跡保存の重要な観点であることが指摘できる。

これまで知られていること

上東遺跡は、戦前からすでに弥生式土器の出土地としてひろく知られ、郷土史家板谷重郎治氏・吉田謙三氏など中備史談会を組織する方々によって、土器をはじめとする遺物が採集され公表されてきた。多くの場合、地下げ工事や側溝の改修など、主として農業生産と不可分にかかわり不時発見されたもので、それでもしばしば完形土器を発見している。

戦後、考古学の著しい発達にともない、この地域の弥生式土器類が注目され、学界に弥生時代後期の標式土器として定着する。「上東式土器」として呼称されるものがそれである。考古学は、民族の遺産である遺跡・遺物を研究対象とするが、歴史学の一分科学であることは多言を要さないであろう。あらゆる事象を歴史的に考察する前提として、まず年代を決定する必要があるが、考古学では土器型式が重要な鍵となる。土器ほど時代的な推移を反映した遺物は他にないからである。文字のない、したがって年代を適確に示す遺物・遺跡の少ない古代において、先祖の生活を復原するには、土器を指標とした相対的年代によって歴史的段階を規定する以外に方法はないのである。

上東式土器は、前期・中期がそうであるように、貯蔵用の壺、煮沸用の甕、供献用の高杯の三つの器種を備えている。とくに、壺に特徴があって、上東式の長首壺といわれ、中部瀬戸内には広範囲におよんでいる。また、雄大な器台が数多く製作されるのも、この時期の特色である。

今までにわかったこと

南北2km、東西1kmの範囲が上東式土器の散布地である。したがって、この範囲内に弥生時代後期に農業生産を基調に営まれた大集落址が埋没していることが予想されてきた。

このたび、新幹線建設に伴う第1次調査に基づき、月報に示すとおり、遺跡の性格がより鮮明になったといえる。

まず第1に、弥生時代前期の土器片が採集されている事実が示すように、水稻耕作が導入されるやいなや、直ちに集落を形成した遺跡の一つであり、今までの認識をこえ弥生時代前期にまで遡る遺跡であること。

第2に、弥生時代後期の代表的遺跡とされる時期については、限定的な本線敷内のトレンチ調査および側道敷の若干の調査結果からしても、大小の堅穴住居址、水田へ導入する水路など、生活址と生産址との有機的関連を想定させる貴重な遺跡であること。

第3には、さらに古墳時代の住居址をはじめ、各種の遺構が検出され、奈良、平安時代まで継続した遺跡であることが、まれにみる縁釉片や硯などの発見によって裏付けられる。

また、総じて各時代の遺構の保存状況は良好で、しかも重複遺跡であるために、単純遺跡と比較した場合、物理的に調査期間を延長せざるをえない。

なお、遺構の密度がきわめて高い地域は、東鬼川市から下田所地区までの約300m範囲である。

川入遺跡の位置について

川入遺跡は岡山市の西方8kmにあって、足守川の旧河道周辺部に広がる集落址である。現在、河道は巾の狭い蛇行した溝になっているが、その両岸には自然堤防が南北につづいている。この一段高くなった部分に、弥生時代前期以降の集落址がある。

東岸部分

表面にも、弥生式土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、布目瓦等が散布している。弥生式土器は、弥生前期末と弥生中期以降後期がある。弥生中期に属する柱穴等は、住居址の存在を示し、弥生終末期とされる酒津式土器を含んだ方形住居址2軒を確認している。古墳時代の土師器、須恵器もある。布目瓦は表面にも散布しているが、トレンチ調査の段階で奈良時代後期の字丸瓦、平瓦を多数出土しているので、大きな建造物があったことを確認できる。同時代の須恵器、土師器、平安時代の須恵器、土師器の出土もみられる。平安時代に属する柱穴列も側道敷のトレンチで検出し建物の存在を確認した。奈良時代以降の建物は、周辺の地名に「テラカド」の名があり、あるいは、寺院址とも考えられる。又は、この地域がかつての「津」(みなど)といわれているところで、青磁、白磁片が散布しており、それに関係したもの可能性もある。

両岸部分

弥生時代中期以降の集落がいとなまっていた。弥生時代中期の遺構は上層が古墳時代の包含層によって、ほぼ完全に保護されており、わずかなトレンチ調査からも、保存のよい住居址群の存在が充分予想される。なお、古墳時代の溝もあり、用水路かとも考えられ、この地域がほとんど未調査の段階でも、住居群とそれにともなう生産地域が確認されよう。

この二ヶ所については、特に遺構の密集度が高く、調査には多くの時間を必要とする。

分布調査の問題

分布調査事業については、路線発表後、すなわち1969年（昭和44年）10月、文化庁からただちに事前の分布調査を急ぐよう指示をうけたにもかかわらず、本県では先述の諸情勢により正式に分布調査を実施したのは、1970（昭45）年度事業としてであった。当初、この事業を進めるために、「山陽新幹線埋蔵文化財分布調査委員会」の設置を計画し、委員会の構成を次のとおり予定していた。

- (1) 委員 山陽新幹線埋蔵文化財分布調査委員会の委員は、当該市町村教育委員会教育長をもってあてる。
- (2) 顧問 上記調査委員会には、専門研究者よりなる顧問をおき調査の万全を計る。
- (3) 調査員 関係市町村文化財保護委員及び必要に応じ地元研究者に依頼。
- (4) 補助員 学生、人夫（若干名）

そして、1970（昭45）年9月25日、関係市町村教育委員会教育長または担当職員が集まり、一応の了承のうえ、本委員会の事務局は新幹線の通過距離のもっとも長い倉敷市教育委員会におき、困難な事務処理をお願いすることとなった。ところがすでに、「埋蔵文化財発掘調査報告——山陽新幹線建設に伴う調査——」（以後、第一分冊という）に記したとおり、1969（昭44）年5月、岡山市津島遺跡に武道館建設をはじめたことを契機として、県教育委員会と県内研究者との間に遺跡の保護保存について行政的対応の姿勢をめぐりはげしい対立が生ずるにいたり、それ以来、山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会の開催はとどおり、なお、この1970年度まではこうした状態が継続していた。したがって本事業についても、倉敷市教育委員会教育長名をもって、研究者各位に顧問として参加を要請したが、研究者から拒否回答をうけたことは、今から考えるとやむをえないなりゆきであった。その後、1970（昭45）年12月17日、県教育委員会は対策委員会に対し、今後その意見を尊重することを約し遺憾の意を表した。そこで、本事業の「調査委員会」は、研究者代表を顧問として招請する別個の機構として発足するのではなく、従前からの「対策委員会」として追認する形をとり、実動する運びとなった。かくして対策委員会の主導の下に本事業が活発化することとなったが、すでに各市町村においては、文化財保護委員などを中心に、巾50mの余裕をもって路線内における遺跡所在調査を進めていたため、配分された予算を圧迫しないようとの申し入れがあり、また対策委員会からは、成果物としてできあがる遺跡分布図は、保存のために活用すること、必要に応じてハンドオーガーを使用して、土壤構造の知見をえること、などの意見が提示された。

このような経緯のもとに、分布調査は1970（昭45）年度事業であったにもかかわらず、1971（昭46）年もおしまった時期にやっと成果をまとめあげることができた。事業のスタートでつまづいたために多忙な中で事務局をひきうけていただいた倉敷市教委をはじめ、関係市町村教委には多大な迷惑をおかけすることとなり、研究者各位に対しては、すでに長年にわたって調査されていた遺跡所在地を短期間のうちに再確認ねがわなければならぬというハードスケジュールとなった。

関係機関および協力者各位に深くお詫びするとともに心から謝意を表するだいである。

橋脚保存処置について

山陽新幹線岡山以東建設に伴う雄町遺跡の場合においては、遺跡そのものが新幹線の工事中に発見されたため、工事工程にそったかたちで重要な遺構が出土した地点 2ヶ所の標準スパンを拡げ16m、25mスパンでとぶ処置を取ってきた。この時点では遺跡の両側では建設工事に伴う重機が走り発掘調査の遺構の図化ができるやいなや一部を切り売りするという状況のもとで、やっとなしえた現状保存処置であり、遺跡の全面積からすればきわめて小範囲しか現状凍結できなかった。

しかし、今回の川入、上東両遺跡では、昭和47年7月13日の協議において一応橋脚巾35mで通過する措置をとることとなった。これは以東の雄町遺跡の場合とは異り、両遺跡ともまず第一次調査としてトレンチ調査を試みその結果遺構の存在する場所、範囲を提示して、その範囲内では通常8mの橋脚巾を何メートルにするかの協議であった。そのため、保存処置が取られる場所は最初から調査を行わないという方向で、協議後一定スパンの橋脚位置からどのような重要な遺構が出土しても保存はほとんど不可能に近いというデメリットも出てきた。しかし、これは「現状保存」の処置を取るための一つの試みであり、十数メートルから、数十メートル、さらに無限に拡げて行く努力の試金石として理解していただきたい。

これらにより川入遺跡では4ヶ所、上東遺跡では7ヶ所の橋脚保存処置を取った。

二子御堂奥窯址の調査にいたる問題点

二子御堂奥古窯址は倉敷隧道東口付近に存していることは、対策委員会でもたびたび指摘されていた。にもかかわらず、国鉄に提出した公文書の中に入っていたため、隧道工事、それに伴う付帯工事等はこのことを配慮しないままに1971（昭46）年4月に隧道入口において岡山県では最初の起工式を行い工事発注されている状況であった。それまでの協議は路線内ののみで、付帯工事等については一切協議されることがなかったことにもよるが、公文書の中に入れられていないことがこういう結果をまねいたといわざるをえない。

その後、対策委員会の要請を受けて、国鉄と協議を重ねた結果、隧道工事に伴う付帯工事関係の調査を急拵8月から着手することになったのである。

対策委員会からは『トンネル工事はすでに着工され、すでに窯本体が破壊されているのではないか』という意見とともに『トンネル東入口の決定は取りもなおさず上東、川入両遺跡推定地をさけ得ないにちがいないのではないか』ということを指摘された。

二子御堂奥古窯址の調査は、トンネル工事あるいは付帯工事と併行して行ったため諸々の困難を生じたが、最終段階で5基確認された。このため調査中から国鉄と保存のための協議をくり返し、予定建造物等を設計変更し、4基は再度土盛りをし保存処置を取ったが1基（4号窯）はトンネル入口から7メートルしか離れていたため保存処置をとることができなかった。

本線敷と側道敷の分離調査の問題

かつて岡山以東の調査経過の中で最も重要な課題で、本線敷と側道敷の分離調査が問題になった。いうまでもなくより厳密な発掘調査を行うためにはこの点についてはくり返し確認してきたいことであり、このたびの川入、上東遺跡については、この問題に対して非常に努力をしたにもかかわらず、建設時期がひっ迫くし、県も中国縦貫道の工事等に伴う調査が急を要したことなどにより、川入、上東遺跡に調査員を送れず縦貫道の調査と競合関係を呈するようになった。また調査中において工事発注され分離調査をせざるを得ない状況になった。今後ともこの問題にも努力していかなければならぬ。

以上のような状況のもとで、二子御堂奥古窯址群の調査以後、1971（昭46）年度事業として、御堂奥廃寺推定地、加賀池、宮地池散布地、上東遺跡（第一次調査）を1972（昭47）年度事業として、県営山陽団地内の調査を一時中止したり、縦貫道から新幹線関係にまわったりするなど人員操作により、ようやく10名の調査員を動員して、上東遺跡（第二次）、川入遺跡（第一次、第二次）、島地貝塚、益坂散布地の調査を進め、1973（昭48）年度における川入、上東遺跡の調査は6月段階まで現場での作業を終了し、7月以降、整理、報告書作成作業を進めてきた。

以下は各遺跡ごとの報告である。

第2章 山陽新幹線埋蔵文化財 保護対策委員会記録

例言で記したように、岡山県遺跡保護調査団から推選された前記9氏を1971（昭49）年7月、委員に委嘱し、二子御堂奥古窯址以来、整理作業＝報告書作成におよぶまで単に委員会を開催した時だけでなく、ことあるごとに現場におもむいて頂き、3年間あらゆる面にわたって、御指導と御協力を得た。二子御堂奥窯址群の保存も川入、上東遺跡の橋脚保存処置も委員各位の主導的な援助のもとに一定の成果をおさめ得たものと考えている。

以下対策委員会の開催日、審議事項を一覧表にして整理しておこう。

日 時	場 所	協 議 事 項
46. 7. 31		山陽新幹線埋蔵文化財岡山以西問題の取扱いについて そ の 他
46.10. 2～3	二 子 窯 址	二子窯址現地見学会
47. 1. 22		二子窯址の保存処置について 御堂奥廃寺の調査について その他（今後の発掘計画等について）
47. 3. 13	上東遺跡調査事務所	現場査察、トレント調査計画の審議
47. 5. 6	上東遺跡調査事務所	現場査察、川入遺跡トレント調査計画の審議
47. 6. 13	川入遺跡調査事務所	現場査察、川入遺跡トレント調査報告、上東遺跡調査状況報告
47. 7. 2	島地貝塚調査事務所	現場査察、調査計画の審議
47. 9. 19	三 光 莊	上東、川入、島地の調査状況報告（スライド使用） 上東、川入遺跡の橋脚位置について
47. 9. 30	川入遺跡調査事務所	現場査察、調査方法について
47. 12. 16	博 物 館	上東、川入遺跡調査状況報告、島地貝塚の終了報告、側道敷と軌道敷の分離調査について
48. 1. 18	博 物 館	上東、川入遺跡調査状況報告、調査終了の確認方法と資料の整備について
48. 3. 8	博 物 館	上東、川入遺跡調査状況報告（スライド使用）、一つのまとまった遺跡について同時に調査する。
48. 6.		川入、上東遺跡の調査終了について（現場視察）
7.	三 光 莊	川入、上東遺跡の調査終了について 整理作業の件について
12. 19	西 古 松 収 藏 庫	○整理作業の進行状況
3. 18	三 光 莊	○報告書の作成について
4. 15	博 物 館	○ タ

第3章 足守川下流域の地形と歴史的環境

秀吉の水攻めで知られる備中足守川は、足守の山ふところに源を発し、足守平野をぬけて東に蛇行し吉備の中山と日差山東端、王墓山の山あいから、江戸時代以降の干拓地をぬけて笹ヶ瀬川と合流し児島湾に注ぐ延長わずか30km程の小河川である。しかし、かつては総社平野で新本川と合流し東西に合流した高梁川の1支流が南進して倉敷市酒津に河口を開き、一方は東進し、南流する足守川を含め水量を増し、板倉付近で再び荒川となって綱目状に別れ、主流は宮内、川入をぬけ撫川、庭瀬付近に至っている。高梁川と足守川の合流する惣瓜以南の平野が安定した状態を呈するのはかなり遅く、この平野内の微高地に足跡をはっきり残し得たのは、弥生時代もやっと中期になってからであった。

児島はまさに孤島であり、江戸時代以来の大規模な埋め立てによって今でこそ広い平野が形成されている。また足守川下流にみられる小丘陵はやしま まつしまも早島・松島などの名をとどめるように、かつては島であり、上東、川入一帯は、この多島性の内海を前面にする遠浅の河口であった。

この足守川下流域周辺には弥生時代以前にも縁辺の丘陵中腹あるいは当時の海岸線と思われる地点に貝塚を形成している。西岡貝塚、山地貝塚、矢部貝塚、西尾貝塚はその陸地側の貝塚であり、羽島貝塚、大内田貝塚等は島の貝塚である。

弥生時代になると、丘陵部に近い自然堤防上に岩倉遺跡、南対岸の島嶼部北端に、関戸貝塚、高尾貝塚などの弥生前期に属する遺跡がみられる。

今次の調査においては遺構の残存状況がかならずしも確定的でなかったが、川入、上東両遺跡から同期の遺物が存在し、弥生前期の集落が旧河道の左右の微高地にても存在したことを裏付けている。

弥生時代中、後期になると数多くの遺跡が自然堤防上に進出し、現足守川流路内からも数多くの遺物が出土している。吉備考古館に保管されている夥しい土器および土器片は足守川川床から採集されたものが多い。また、かつて発掘調査された新邸貝塚もその一つで、中期後半の遺物が出土している（註一1）。高田遺跡、惣瓜遺跡、藤の木遺跡、上東遺跡、川入遺跡などのように広大な範囲をしめる遺跡が存在する。水田の獲得を軸として沖積地へ進功しているとはいえ、弥生後期の上東平野は沖積化が十分に進功していたとはいはず、満潮時にはかなり奥深く海水が入りこんできていたことは想像に固くない。今次の上東遺跡調査においてあらゆる遺構から弥生時代後期を中心にして弥生時代中期から古墳時代の土器製塙の痕跡がみられた。

上東遺跡北側には上東一円を一望する標高50~60mの王墓山の低丘陵が位置する。その西の支脈の女男岩と辻山田遺跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての墳墓群が調査されて特殊壺や器台・家形土器などが出土しており（註一2），また北西丘陵には特殊器台等を出す墳墓も知られている。眼下に拡がる上東遺跡に居住していた集団によって営まれた墓地として興味深い遺跡である。

吉備中山頂部には120m前後の前方後円墳、中山茶臼古墳が、その南裾部には130mの前方後円墳、ギリギリ山古墳（花尻車塚）が存在し、前半期の古墳も見られる。しかし対岸の早島地域には前半期

の古墳がほとんど見られない。むしろ、足守川中流域に前半期古墳が集中している。例えば、方墳、前方後方墳、前方後円墳を主体とした約百基からなる大崎、上土田古墳群が（註一3）左岸丘陵に同じく高松地域には佐古田堂山古墳を中心とした古墳群が、また右岸の高松から山手にかけては造山、小造山、宿寺山、作山古墳など巨大な前方後円墳をはじめ、多数の前半期に含まれる古墳が集中している。後半期には横穴式石室を中心にして、約百基からなる王墓山古墳群があり、王墓山古墳からは貝殻石灰岩（波形石）の組み合せ石棺内から四仏四獸鏡が数多くの須恵器などとともに出土している。また上東平野の西方丘陵中腹には、二子古墳群が、中山西斜面には横穴式石室を主体にした10基前後の古墳がみられる。

備前、備中の境を成す、足守川流域のこの狭い平野内に寺院址と考えられている場所が7ヶ所以上推定されている。

白鳳時代の創建と考えられる、日畠廃寺（大手赤井堂屋敷とも呼ばれている）をはじめ奈良時代後半には、柿梨堂、川入遺跡（溝に伴って瓦の出土している地点）惣瓜廃寺・矢部廃寺・三田廃寺等々が存し、平安時代には堂敷山廃寺、日差山廃寺等が西丘陵山上に存している。また今回の調査された二子御堂奥古窯址群で焼成された瓦がこれらの寺院はもとより備中の各寺へもたらされた可能性を秘めていることは興味深い点である。奈良時代を中心としたこれらの古窯址の成品はすぐ近くまで入りこんだ入江の中を水運を利用してはこぼれていたのであろう。

このように足守川下流域においては、各時代の遺跡がみられ、新幹線はこの平野の中心部を東西に横切り、川入、上東、御堂奥廃寺、二子御堂奥古窯址群がその調査対象となったのである。

註

- 註一(1) 近藤義郎「備中新邸貝塚」古代学研究8号、1953
(2) 民間企業による宅地造成工事により調査が行われた。間壁忠彦、間壁葭子、「倉敷の古代」「古代吉備王国の謎」1972.にその概要が述べられている。
(3) 岡山市教育委員会 出宮徳尚、根木修両氏の分布調査結果に負うところが大きい。

第Ⅱ部 川入遺跡の調査

川入遺跡

目 次

はじめに	19
第1章 調査区の設定と調査経過	19
第2章 川入周辺の古地形	21
第3章 八幡西調査区	23
第1節 遺構	23
第2節 遺物	23
第4章 入溝調査区	27
第5章 大道西Ⅰ調査区	28
第1節 概要	28
第2節 遺構	28
第3節 遺物	46
第6章 大道西Ⅱ調査区	50
第1節 遺構	50
第2節 遺物	55
第7章 法万寺調査区	58
第1節 概要	58
第2節 遺構	60
第3節 遺物	82
第8章 高縄手調査区	91
第9章 まとめ	94

図 目 次

第1図 川入周辺の古地形（作成：正岡睦夫）	22
第2図 八幡西調査区土手状遺構実測図（実測：正岡・大谷猛，製図：枝川陽）	24
第3図 八幡西調査区土層断面図及び溝内出土遺物実測図（実測・製図 枝川）	25
第4図 瓦拓本及び実測図（作成：正岡）	26
第5図 入溝調査区、土層断面図（実測：正岡・大谷，製図：正岡）	27
第6図 溝状遺構出土土器実測図（実測・製図：正岡）	27
第7図 大道西Ⅰ調査区平面図（実測：枝川・正岡・大谷，製図：枝川）	折り込み
第8図1 103号住居跡実測図（実測・製図：枝川）	30
第8図2 101号住居跡実測図（実測：大谷，製図：枝川）	30
第9図 101号住居跡出土遺物実測図（実測・製図：枝川）	31
第10図1 102号住居跡出土遺物実測図（実測・製図：枝川）	32
第10図2 103号住居跡出土遺物実測図（実測・製図：枝川）	32
第11図 102, 105号住居跡実測図（実測：枝川・正岡・大谷；製図：枝川）	33

第12図 井戸101 平面, 断面実測図 (実測・製図: 枝川)	34
第13図 井戸101出土遺物実測図(1) (実測・製図: 枝川)	35
第14図 井戸101出土遺物実測図(2) (実測・製図: 枝川)	36
第15図 築地状遺構実測図 (実測: 正岡・大谷, 製図: 大谷)	37
第16図 築地状遺構周辺出土瓦拓本, 実測図 (作成: 大谷)	39
第17図 神力寺出土瓦拓本 (作成: 大谷)	39
第18図 平瓦叩き目拓本 (作成: 大谷)	40
第19図 築地状遺構周辺出土遺物実測図 (実測・製図: 大谷)	41
第20図 土鍤・鉄器実測図 (実測・製図: 大谷)	41
第21図 建物101 柱穴内出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	42
第22図 土壙101平面, 断面実測図 (実測: 正岡, 製図: 大谷)	42
第23図 土壙101 出土土器実測図 (実測・製図: 大谷)	42
第24図 溝101, 103出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	43
第25図 1 西側傾斜面土層断面図 (南壁) (実測・製図: 正岡)	44
第25図 2 溝103, 104断面図 (南壁) (実測・製図: 正岡)	44
第26図 溝106 西側傾斜面平面図 (実測: 正岡・大谷, 製図: 正岡)	46
第27図 大道西Ⅰ 調査区出土土器実測図(1) (実測・製図: 正岡)	47
第28図 大道西Ⅰ 調査区出土土器実測図(2) (実測・製図: 正岡)	48
第29図 青磁, 白磁実測図 (実測・製図: 枝川)	49
第30図 土鍤実測図 (実測・製図: 正岡)	49
第31図 石器実測図 (実測・製図: 正岡)	50
第32図 大道西Ⅱ平面, 断面図, 土壙201 実測図 (実測: 枝川・正岡・大谷, 製図: 枝川)	52
第33図 井戸201 井戸平面, 断面実測図 (実測・製図: 枝川)	53
第34図 井戸201出土遺物実測図 (実測・製図: 枝川)	54
第35図 大道西Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図 (実測・製図: 枝川)	56
第36図 法万寺調査区平面図 (実測: 枝川・正岡・大谷, 製図: 正岡)	折り込み
第37図 1 法万寺微高地東端土層断面図 (南向) (実測: 正岡・大谷, 製図: 正岡)	59
第37図 2 法万寺微高地西端土層断面図 (北向) (実測: 正岡・大谷, 製図: 正岡)	59
第38図 1 301号住居跡実測図 (実測: 正岡, 製図: 枝川)	61
第38図 2 302号住居跡実測図 (実測: 大谷, 製図: 枝川)	61
第39図 第3橋脚建物平面図 (実測: 枝川・正岡・大谷, 製図: 大谷)	63
第40図 井戸301 平面, 断面実測図 (実測・製図: 大谷)	64
第41図 井戸301出土土器実測図 (実測: 正岡, 製図: 大谷)	65
第42図 井戸302 A 断面図 (実測・製図: 大谷)	65
第43図 井戸302 A・B 平面, 断面実測図 (実測・製図: 大谷)	66
第44図 井戸302 出土遺物実測図 (1) (実測・製図: 大谷)	68

川入遺跡

第45図 井戸302—B 出土遺物実測図(2) (実測・製図: 大谷)	69
第46図 井戸302—B 出土木器実測図 (実測・製図: 大谷)	69
第47図 土壙302実測図 (実測・枝川, 製図: 正岡)	70
第48図 土壙302 出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	71
第49図 土壙303 実測図 (実測・製図: 正岡)	70
第50図 土壙303 出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	72
第51図 人骨出土状況実測図 (実測・製図: 正岡)	72
第52図 溝出土土器実測図 (実測・製図: 大谷)	73
第53図 溝311出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	75
第54図 1 溝312~320土層断面図 (実測: 正岡・大谷, 製図: 正岡)	76
第54図 2 溝321, 322土層断面図 (実測: 正岡・大谷, 製図: 正岡)	76
第55図 溝314出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	77
第56図 溝321出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	79
第57図 溝322出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	80
第58図 馬骨出土状況実測図 (実測・製図: 大谷)	82
第59図 法万寺東側傾斜面出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	83
第60図 東側傾斜面出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	84
第61図 東側傾斜(上), 微高地上面(下)出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	85
第62図 微高地上面(上), 西側傾斜面(下)出土土器実測図 (実測・製図: 正岡)	86
第63図 包含層出土土器実測図 (実測・製図: 大谷)	87
第64図 緑釉, 青磁実測図 (実測・製図: 枝川)	88
第65図 法万寺出土土錘実測図 (実測・製図: 正岡)	88
第66図 石器実測図 (実測・製図: 正岡)	89
第67図 金環実測図 (実測・製図: 大谷)	90
第68図 高繩手調査区平面および土層断面図 (実測: 枝川・正岡・大谷, 製図: 枝川)	92
第69図 高繩手調査区出土遺物実測図 (実測・製図: 枝川)	93
第70図 石器, 土錘実測図 (実測・製図: 正岡)	93

川入遺跡表目次

第1表 法万寺溝一覧表 (作成: 正岡)	81
第2表 法万寺土錘一覧表 (作成: 正岡)	89

図版目次

図版1 川入遺跡付近航空写真	1
図版2—1 川入遺跡遠景 (足守川堤防より東方を望む) (撮影: 枝川)	2
図版2—2 八幡西調査区土手状遺構 (東から) (撮影: 正岡)	2

川入遺跡

図版 3—1	大道西Ⅰ 調査区遺構全景（西から）（撮影：正岡）	3
図版 3—2	大道西Ⅰ 調査区築地状遺構（西から）（撮影：正岡）	3
国版 4—1	大道西Ⅰ 調査区103号住居跡遺物出土状況（南から）（撮影：枝川）	4
図版 4—2	大道西Ⅰ 調査区102, 105号住居跡（東から）（撮影：正岡）	4
図版 5—1	大道西Ⅰ 調査区溝106と水田跡（東から）（撮影：正岡）	5
図版 5—2	大道西Ⅱ調査区井戸201（南から）（撮影：枝川）	5
図版 6—1	法万寺調査区側道敷遺構全景（東から）（撮影：正岡）	6
図版 6—2	法万寺調査区第2 橋脚位置全景（東から）（撮影：正岡）	6
図版 7—1	法万寺調査区第3 橋脚位置全景（東から）（撮影：正岡）	7
図版 7—2	法万寺調査区溝（北から）（撮影：枝川）	7
図版 8—1	法万寺調査区井戸302（南から）（撮影：大谷）	8
図版 8—2	法万寺調査区井戸302（南から）（撮影：大谷）	8
図版 9—1	法万寺調査区井戸301遺物出土状況（南から）（撮影：枝川）	9
図版 9—2	法万寺調査区馬骨出土状況（南から）（撮影：大谷）	9
図版10—1	大道西Ⅰ 調査区築地状遺構周辺出土の瓦（撮影：枝川）	10
図版10—2	大道西Ⅰ 調査区築地状遺構周辺出土順恵器（撮影：枝川）	10
図版11—1	大道西Ⅱ調査区井戸201出土状況（撮影：枝川）	11
図版11—2	大道西Ⅱ調査区井戸201 の出土遺物（撮影：枝川）	11
図版12	法万寺調査区井戸302 出土遺物（撮影：枝川）	12
図版13—1	高縄手調査区溝全景（撮影：正岡）	13
図版13—2	大道西Ⅰ 調査区井戸101 出土遺物（撮影：柳瀬）	13

はじめに

川入遺跡は岡山市川入、福井にひろがる弥生時代前期から奈良・平安・鎌倉時代にわたる遺跡である。上東遺跡より東 1 km に位置している。東京国立博物館に川入の北方約 $400m$ で出土した遺物が保管されているが、それについては永くわすれられていたため、昭和35~36年に作成された全国遺跡地図（岡山県版）には遺跡として確認されていなかった。岡山以西にのびる山陽新幹線建設に伴う工事について国鉄当局と文化財保存の協議の際、県文化課で遺跡であることを指摘した。その後、昭和45年4月、文化課職員数名で分布調査を実施し、昭和46年3月、分布調査を研究者に委託して遺跡を最終的に確定した。現地での調査は昭和47年5月に着手し同48年6月で完了した。

第1章 調査区の設定と調査経過

分布調査によって最終的に確認された遺物散布地は、備中八幡神社の東、花尻において約 $60m$ （大阪より $167km$ $140m$ ~ $167km$ $200m$ ）と川入、福井を中心とする約 $1,160m$ （ $167km$ $580m$ ~ $168km$ $740m$ ）である。1972年5月から、それぞれの地域について原則として $20m$ おきに $2 \times 3 m$ のトレンチを設定し、遺構のひろがりと古地形の調査をおこなった。したがって花尻については調査区を設定せず、八幡西より西について「字名」をとってそれぞれ調査区とした。東より「八幡西」「入溝」「大道西Ⅰ」「大道西Ⅱ」「法万寺」「高縄手」の各調査区である。大道西については、墓地と畠のある部分が東側の微高地とは別の微高地を形成し、柱穴・井戸などの遺構が存在することからそれぞれ「大道西Ⅰ調査区」「同Ⅱ調査区」とした。「大道西Ⅰ調査区」と「法万寺調査区」は遺構が密集していることから $4m$ 間隔のグリッドを設定して遺物の区分、小ピットの番号整理等を行った。基軸は調査区域が細長いことから真北をとらず、遺構の広がりを考慮して、その間で任意の路線中心を結んで割り付けた。なお、大道西Ⅰ調査区と法万寺調査区では、遺跡保存のため橋脚幅を通常 $8m$ から $35m$ に広げ、橋脚下を発掘しないで残した。

トレンチ調査の結果を6月13日に新幹線対策委員会に報告し、委員会から「古地形の復元と条里制の遺構について配慮する必要がある」との意見をえて、各トレンチ間にさらにトレンチを設定した。花尻では、粘土層が厚く上層に備前焼、陶器片が若干含まれる以外は何も確認されなかった。以下、月別の調査経過を記することにする。

7月に入って中撫川高縄手において条里制に伴う可能性のある水路を $100m$ にわたって調査した。一時、川入遺跡の保存協議の資料作成のため、大道西Ⅰと法万寺の両微高地のトレンチ調査を行った。8月は八幡西の調査を行う。周辺の方が水位が高いため、周りを土手でかこみ、排水しなければならぬ状態にあり、泥と水のため作業は困難をきわめた。 $40m$ のトレンチを検討して、溝と杭列の部分を全面的に広げて調査した。杭列は幅 $6m$ の土手状遺構の護岸用に使用されたものであることを確認した。10日から大道西の調査を始める。用水路の東側は微高地の東側傾斜面にあたる。ここでは若干の遺物が含まれるだけで遺構はなく、ゆるやかに東に傾斜していた。溝の西側について保存予定地

を除き全面掘り下げた。ここで奈良時代の瓦、須恵器、土師器を多量に検出し、黄褐色の基盤層で築地状遺構と弥生時代以降の溝を検出した。保存予定地を除き全面の表土を掘り下げて、堅穴住居址を4軒検出した。その内2軒のそれぞれ約半分は用地外と保存地区に含まれる。微高地の西側斜面（旧河道の岸）では斜面を少し下がったところに溝があり、西に灰色粘土が水平にのびているの確認をした。これは水田の跡と考えられる。10月は建物101の追求を行い用地外にのびていることを確認した。また101号住居址の調査を行い、作付のある一部を残して21日までに完了した。16日からは中撫川法万寺の調査に着手した。側道敷の工事予定が当初12月からとなっていたため、軌道敷を分離して、側道敷の調査を先行した。東側傾斜面（川岸）には低位面が存在し、遺物堆積層がみとめられて層位ごとに掘りあげた。11月は側道敷部分、微高地上面の遺構の調査と西側傾斜面確認のトレンチを延長した。12月は微高地上面にある柱穴群の調査を終了して、下層の溝を調査する。溝は何本にも分れていて時期的にもそれぞれ異なる複雑な様相を呈していた。溝以外では古墳時代前期の堅穴住居址1軒の一部と住居の埋土を切ってつくられた井戸1個、弥生時代中期後半の方形土壙1個の調査等を行った。1月に入っては、いよいよ工事発注が行われ、法万寺の側道敷について最終的つめを行った。古墳時代前期の堅穴住居址1軒の半分、弥生時代中期で堅穴住居址の可能性のある方形土壙1個、建物、井戸の調査を行った。溝の埋土上層に所在した馬骨の取上げを行い、各溝の埋土と水田土壤と考えられる部分について上層を除去した後、下部の調査を行った。2月は井戸の調査を行う一方、大道西の補足調査を行って新たに弥生時代後期の堅穴住居址1軒を確認した。

3月に入って、1～5日の間、大道西Ⅰ調査区の湿地帯のトレンチについて検討し、土層断面図を作成した。これによって湿地帯を完全に横断した図面を完成し、水田化の過程を検討することができた。6日からは大道西Ⅱ調査区の調査に着手する。微高地の周辺部にトレンチを設定し、微高地上面と斜面について全面的に表土はぎを実施した。23日までには傾斜面の包含層を掘りあげて、土層断面と柱穴群の実測を行った。井戸と土壙が検出されて13日から掘り下げを行い、実測ののち、27日には井戸枠の抜取り作業を行う。下部は砂層でものすごい出水のうえ、井戸枠は大きく困難な作業であった。12日からは法万寺調査区の第1橋脚部分の表土はぎ作業にも着手した。

25日は東北大学理学部地理学教室の安田喜憲氏の来岡を願い、花粉分析用資料の採取を行う。27日には岡山大学農学部畔柳鎮教授らに現地へ来ていただき樹種の鑑定をお願いした。対策委員会は8日に開いて、調査状況を説明し、大道西Ⅰ調査区の工事着手について検討した。

4月には前月にひきつづき第1橋脚部分の調査を行い6日までに完了した。9日からは第2橋脚位置の遺構検出に着手する。14日には土層の遺構検出を終了し、23日までには柱穴の半断面作業と記録を作成した。その後、全面を黄褐色粘土の基盤層まで掘り下げる。9日からは第3橋脚位置の表土はぎ作業にも着手した。

5月には第2橋脚位置の下部遺構検出作業を行い、柱穴の他に大きな南北方向の溝を検出した。これは12月までに調査を完了した。第3橋脚位置についても掘り下げ作業をすすめ、遺構検出によって、建物2棟のほか東西方向の溝等を検出した。図面作成ののち全面を10cm掘り下げて遺構の検出に努めた。東端部に側道敷にあらわれていた大型の溝の一部がかかるため掘り下げる。西側の傾斜面掘り下げを含めて、31日までに完了した。

川入遺跡

6月は川入遺跡の現地調査の最後のつめを行った。1日に法万寺西端部を全面的に清掃し、発掘後の写真撮影をした。7~15日の間で第2橋脚位置に残していた人骨の掘りあげと実測作業を行い、上面をエマルジョンとセメンダインで個定し、ガーゼと石膏でかためた。その後、周辺を掘り下げて木枠をつくり下部の土をつけたまま取りあげた。現地調査を一応終り、新幹線遺跡保護対策委員の現地視察をおこなった。資材等を月末までに収蔵庫へ運搬して遺物整理を行った。出土した馬骨については東京農工大学の林田重幸教授らに来岡願って検討いただいた。

また、9日と10日の土、日曜日を利用して「川入遺跡出土遺物展示会」を調査事務所で開き、近隣の人出土遺物を公開した。見学者は、1,000人くらいあり、一応の成果をうることができた。

(正岡)

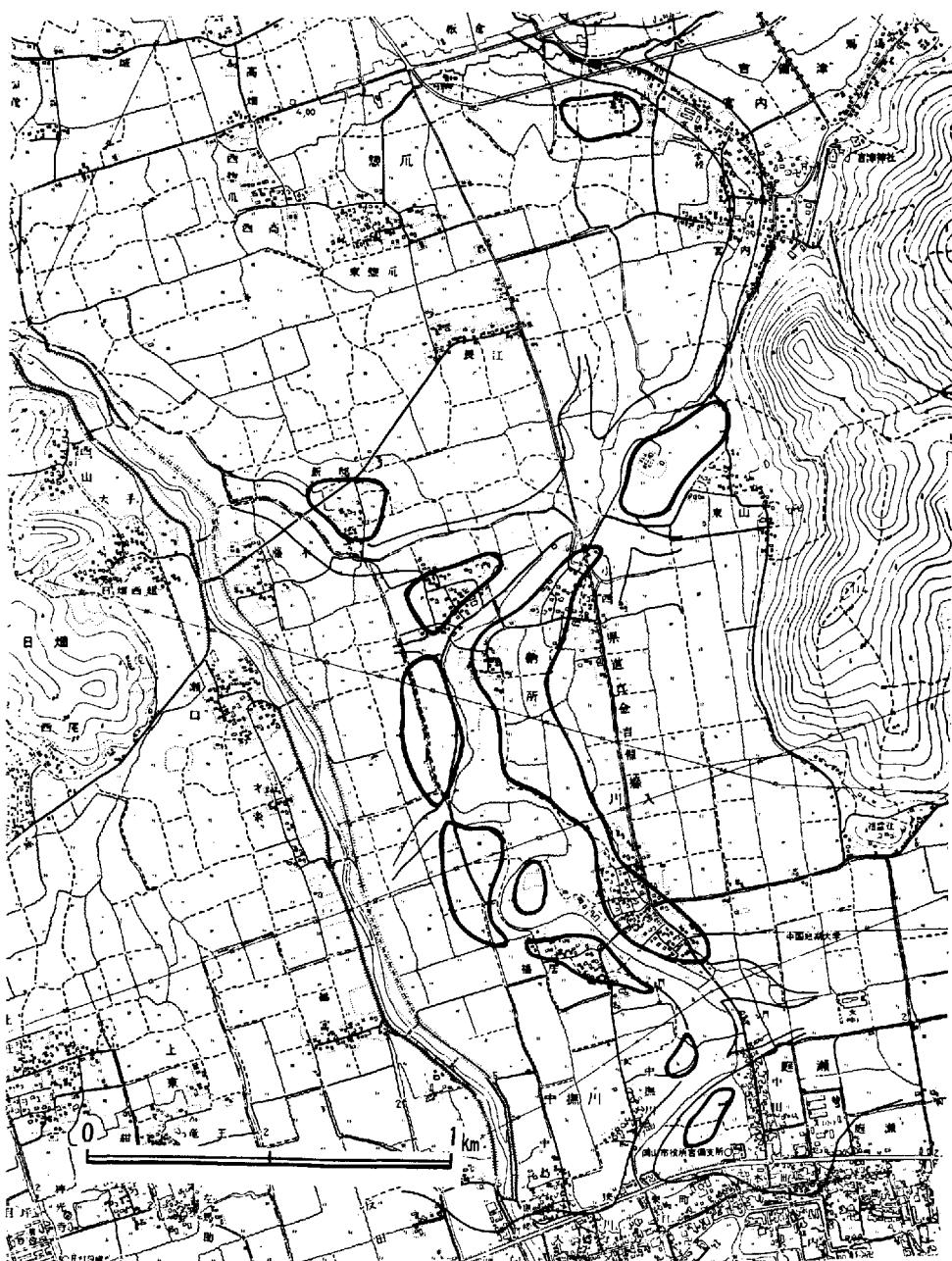
第2章 川入周辺の古地形

現在の足守川の東にも旧河道がある。旧河道の変遷を直ちにおさえることはできないが、この旧河道によって形成された自然堤防のつらなりが新邸から庭瀬まで確認される。また、北東部にのびてさらに西に屈曲する旧河道もみとめられる。これは吉備津神社のところで西において高松の方向につづいている。自然堤防は詳しく観察するといくつかの微高地になっていて、それぞれに集落が形成され、その周辺部に水田等が展開し全体が遺跡としてとらえられる。弥生時代から古墳時代にかけての海岸線は若干の出入りはあるが、庭瀬付近を境に東西方向を指していたと考えられる。旧河道とその両岸の自然堤防の幅は約400mで東と西にそれぞれ後背湿地が形成されている。

川入周辺の微高地の概況について、1 現在の水田面の比高差、2 土器片の散布、3 地下げ作業のききとりなどから、かつての微高地、つまり自然堤防を復元して東岸では川入を中心に川入部落の上手が広く、南が狭くなっている。広いところでは約200mで狭いところは約70mあり南北約800m続く（大道西Ⅰ調査区を含む）。西には現在墓地のある長径100mぐらいの高みが残っている（大道西Ⅱ調査区を含む）。さらに北に小西を中心に微高地がみられ、その間に小規模な微高地が点在している。南では岡山市吉備支所のすぐ北側に幅約100m、南北約200mの微高地がある。ここでは酒津式土器以降、奈良、平安時代までの遺物が確認されている。庭瀬駅によったところは市街地になつていて明確にはわからぬが、古墳時代以降の微高地があるらしい。西岸についてみると「法万寺」と称する三角形状で南北約200m、東西約150mの微高地がある。その北側にはかなり安定した微高地が日畠東組までの間に広がっている。南では福井のあたりで現在の集落が南東方向にのびているが、これがあまり高くない微高地である。中撫川にかけても微高地がのびているらしいが現状では明確に把握できない。また、旧河川は氾濫をくりかえしたようで高繩手において上層の土中には弥生式土器、石器などが含まれている。そのため、上手の微高地が水流によって削平されたことも推測される。

(正岡)

川入遺跡



第1図 川入周辺の古地形

第3章 八幡西調査区

東よりでは吉備の中山がつらなっており、西は広く水田地帯になる。この調査区は、大道西調査区の自然堤防の東側に広がる後背湿地帯である。そのため、ボーリングなどの観察でも推積層は、ほとんど灰色粘質土である。現在でも水田地表は、海拔1.6mぐらいで周辺にくらべてもっとも低い地域である。

遺構は表土下約70cmで南北に幅約7mの護岸用の杭列をもった土手状遺構とその東約20mでは、南北に走る溝を確認した。

第1節 遺 構

1) 土手状遺構（第2図、図版2-2）

表土下約70cmでほぼ南北に走っており、土手状になっている。幅は上面で約3m、基底部分では7mあり、両側に護岸の為と思われる杭列がある。高い部分の両側とやや下った部分の両岸の4列と外にも分散した状態で検出した。上面では石が混入しており、上面をかためたように見られる。

杭の太さは、約6～8cmで、長さは約60cm～70cm残っている。

遺物は石の間に平安期の土師器片が少量出土し、また、西側の斜面で焼成が瓦質に近い淡灰白色を呈した杯（第3図14）が出土した。

時期は石の間の土器片などから推察すれば、平安時代の遺構と思われる。

2) 溝

幅は約1m30cmあり、深さ約70cmでほぼ南北に走っている。長さは路線内だけのため、約6mだけの検出である。南側ではやや広くなっている。

溝の西岸では、一部高くなっている西側に傾斜して、土手状遺構でまた高くなる状態である。

溝の中の黒色粘土の中には湧水が多く検出が思うようにできなかつたが数ヶ所に杭がみられた。また、植物遺体が多く含まれている。

遺物は上面では瓦片、下層では木片などといっしょに須恵器片、土師器片が出土した。

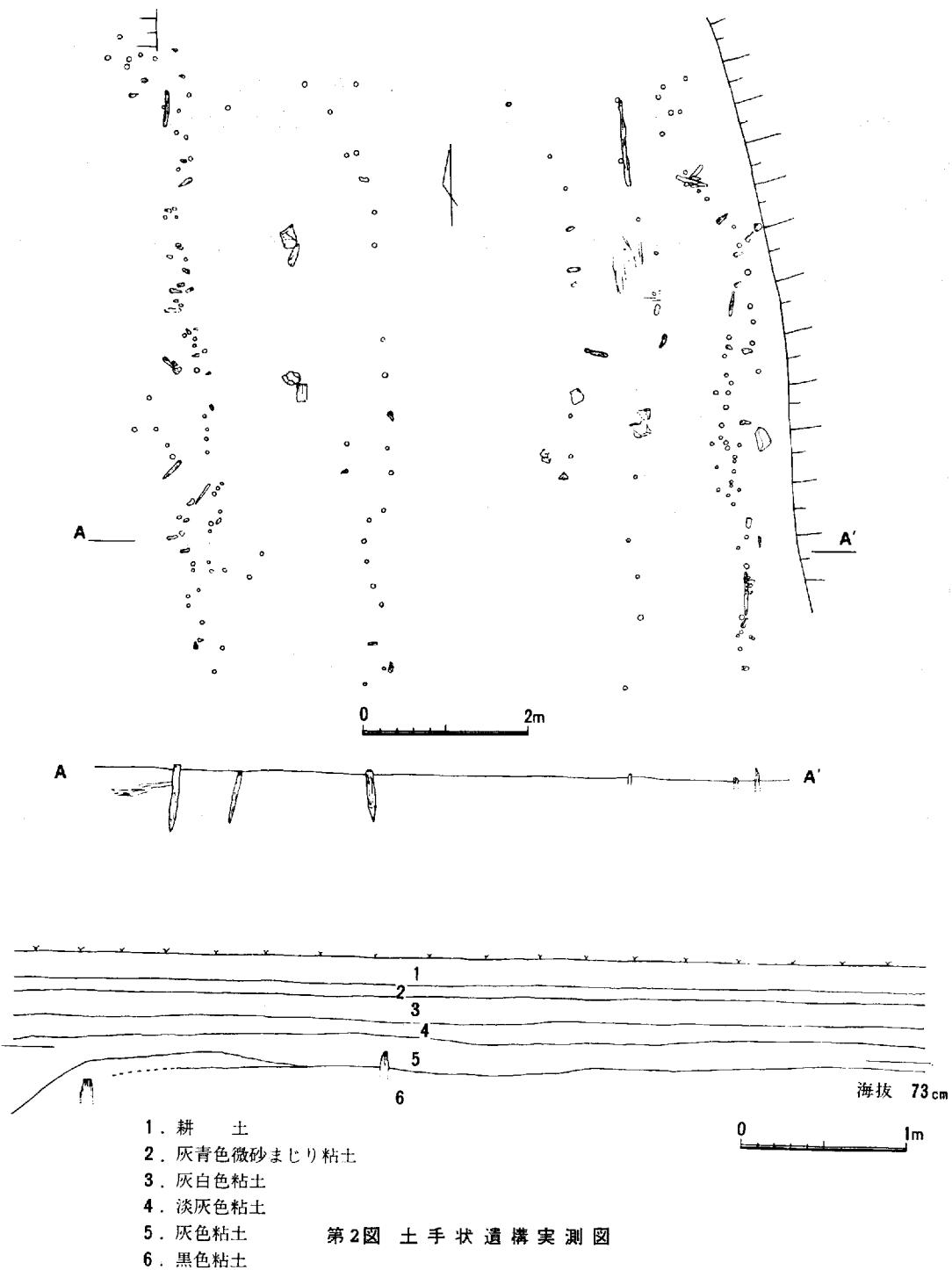
この溝の時期については、これら出土の土器片から推察すると7～8世紀頃と思われる。

第2節 遺 物（第3図）

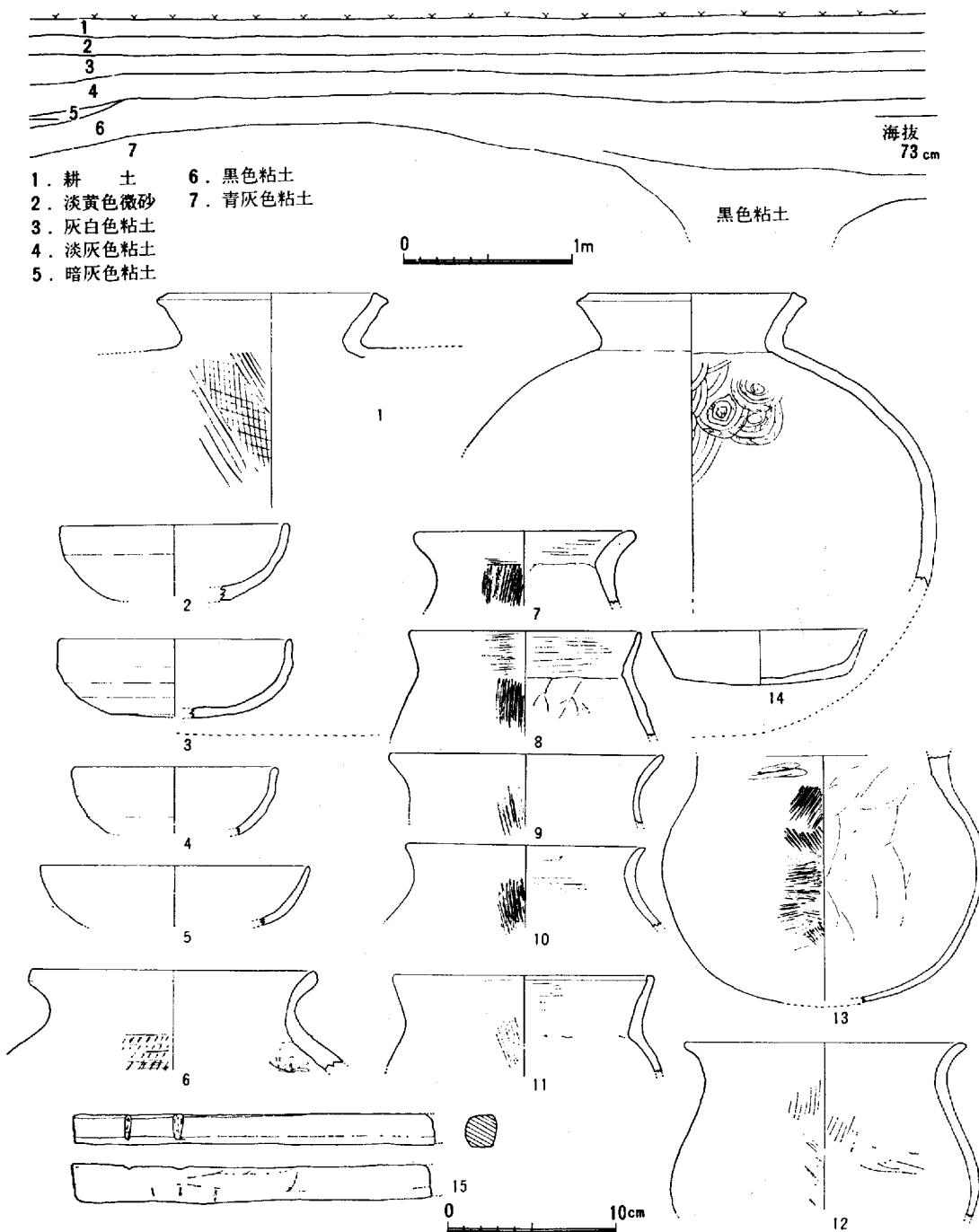
ほとんど溝内から出土したものである。器種は須恵器の横瓶、杯、土師器の甕などである。

須恵器の横瓶（1）は大形のもので口縁の径は13.5cmあり、胴部は推定で径22～23cmある。表面は小さめの格子のたたきに条線が施してある。内面は青海波のたたき目がはっきりしている。焼成は瓦質にちかいものである。

川入遺跡



川入遺跡



第3図 八幡西調査区土層断面図及び出土遺物実測図

川入遺跡

杯（2, 3, 4, 5）については口縁径が12~13cmのもので口縁端部はすべて丸く仕上げられている。

甕（6）は外面に浅いたたき目がある。内面にはヘラの整形がみられる。焼成は全体にややあまい感じがするものである。

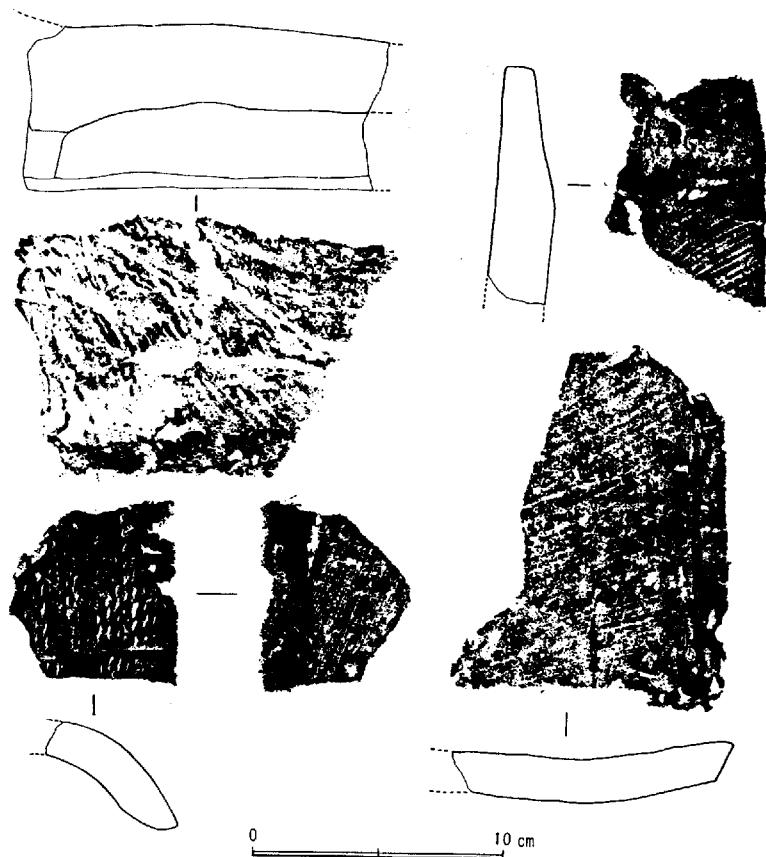
土師器の甕（7, 8, 9, 10, 11, 12, 13）は出土品中でも点数が多く、ほとんど口縁は外上方に外反しており、端部は丸くなっている。その内1点（11）は端部が平たく内側にすこしつき出る。表面はすべてあらく刷毛で調整している。胎土は砂粒を多く含み焼成は良い。（15）は木製品で表面はきれいに削られている。2ヶ所に浅い切りこみがある。

（枝川）

瓦

第1トレンチ～第2トレンチの上層より出土する。表面は1片が布目・格子目である外、すべて表面が無文、裏面に条線が付く（第4図）。焼成は瓦質に近い感を呈する。いずれも大道西I調査区の瓦類とは異なる。

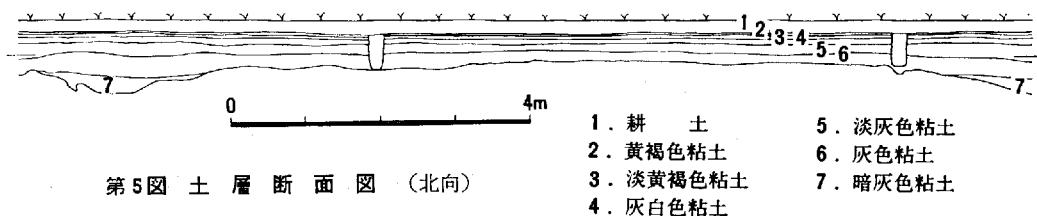
（大谷）



第4図 瓦 拓本及び実測図

第4章 入溝調査区

県道より東側240mを入溝と呼んでいる。現地表は一部宅地のほかは水田である。地表の海拔は1.8mで東にわずかに傾斜している。遺構はほとんどなく、粘土層の堆積がみられ下部にいたるほど柔らかい粘土である。地表下3mにおいても粘土層がつづいている。入溝調査区のほぼ中央部にながれる南北方向の溝の西において、溝状の凹地が南北に確認される。この埋土中から土器片を検出している。これに続く面は水平ではなく、凹凸が多くみられる。その他の出土遺物も上層で歴史時代の土師器などの小片が少量みられるだけである。

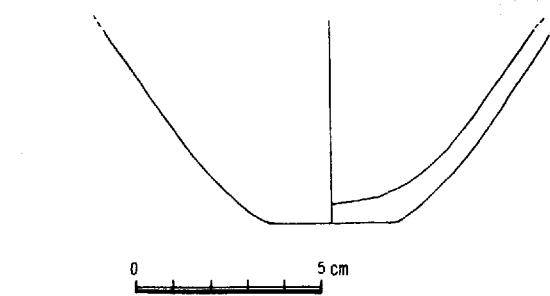


溝状遺構

表土下70cmの地層に2ヶ所の落ち込みがみられる。東の方は幅約4m、深さ50cmである。西の方は幅130cm、深さ30cmである。埋土は黒色粘土層である。埋土中に含まれている土器は壺の底部と高杯の脚部の破片である。壺の底部は小さな平底で器壁は厚く、黄褐色を呈し砂粒を含む。

高杯の脚部は小さな棒状部分で内面のヘラ削りがみられ、脚部はさし込みになる形態である。色は灰白色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。以上の所見は酒津式土器と呼ばれるものに類似している。

(正岡)



第6図 溝状遺構出土土器実測図 (壺)

第5章 大道西Ⅰ調査区

第1節 概要

大道西Ⅰ調査区は国道2号線から真金へ通じる県道の西に位置している。県道から約400mの部分が大道西と呼ばれている。大道西Ⅱ調査区まで含めて大道西と呼ばれているが、この部分には微高地が形成されて遺構が存在することから区分している。

現地表は宅地と水田である。古地形は旧河道とその東側の自然堤防となっている。自然堤防上には弥生時代前期以来の遺構があり、旧河道はやがて西に流路が固定すると水田としての利用がはじまっているらしい。県道のすぐ西側は宅地あとで、トレンチ調査によると東側に傾斜し、粘土の堆積がみられ後背湿地へ向う地形がみられる。南北にながれる現在の水路は古くからの溝で、下部に鎌倉時代の包含層が認められた。この溝に接して南北方向の築地状遺構が残り、寺域の東側を画するらしい。この一帯から西側の凹地部分にかけて多量の瓦と須恵器、土師器を出土している。微高地部分、約80mのほぼ中央部に南北方向の大型溝があり、弥生時代中期から古墳時代まで使用されている。その西側は表土を除去するとただちに遺構面があらわれる。南側の一部は水田面を下げるため約20cm地下げされたが、遺構は弥生時代・古墳時代・歴史時代にわたって検出された。堅穴住居址は5軒検出し、そのうち4軒の調査を行った。時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものである。歴史時代の建物1棟のほか方形の土塹、その他ピットなども検出している。土器片、瓦などは全域から出土している。旧河道に向う西側傾斜面には包含層が形成されている（第23図1）。包含層は西に傾斜し、下部には細砂層と粘土層が互層に堆積している。遺物の検出される層は淡灰色粘土層で弥生中期の土器と弥生時代後期の遺物を含んでいる。その上層には灰色粘土層が水平に続いていて水田面と推定される。上層まで水平な堆積層が重なり、中間には黒色有機質土層が2層はさまっている。この層より下には須恵器を含まない上層からは古墳時代後期の土器が検出されている。さらに上層に至ると奈良時代の古瓦、須恵器、土師器の破片を含んでいる。この層より上では数層の鉄マンガンの互層がみられることから水田面の上昇が指摘できる。傾斜面には多量の古式土師器が検出されている。

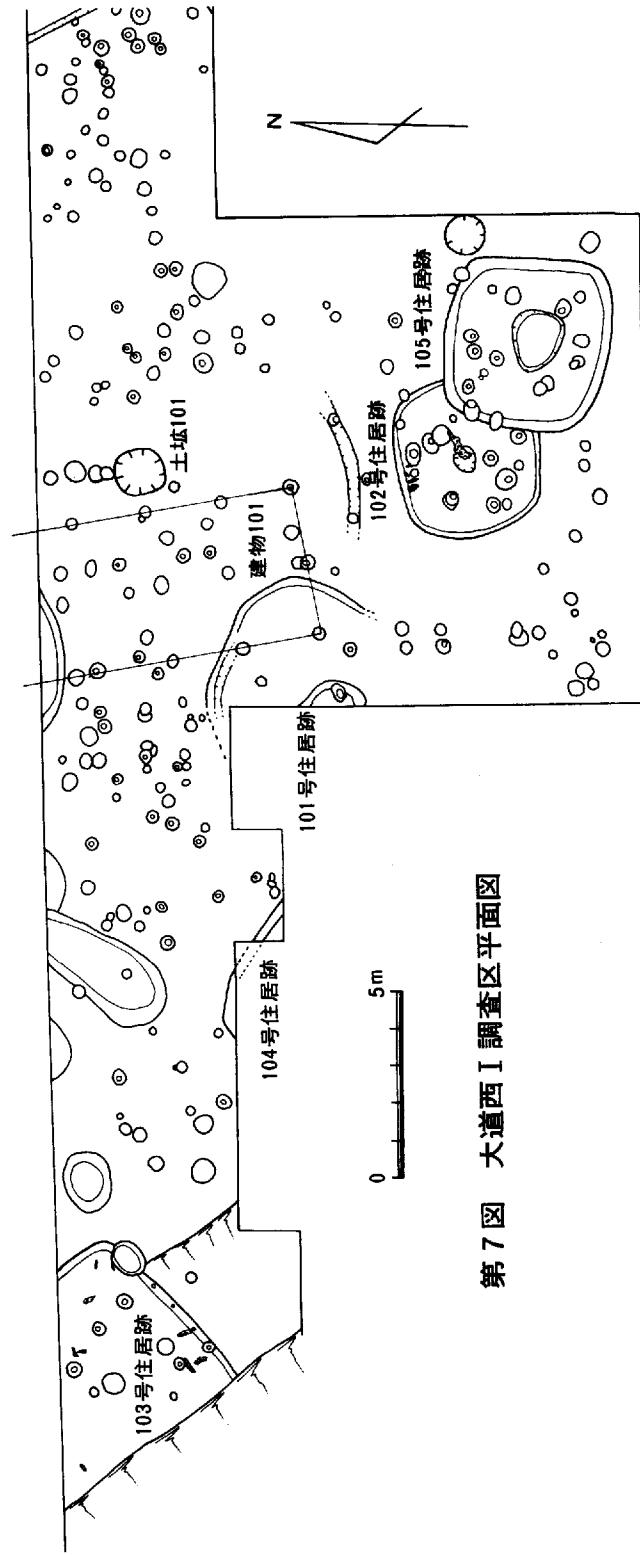
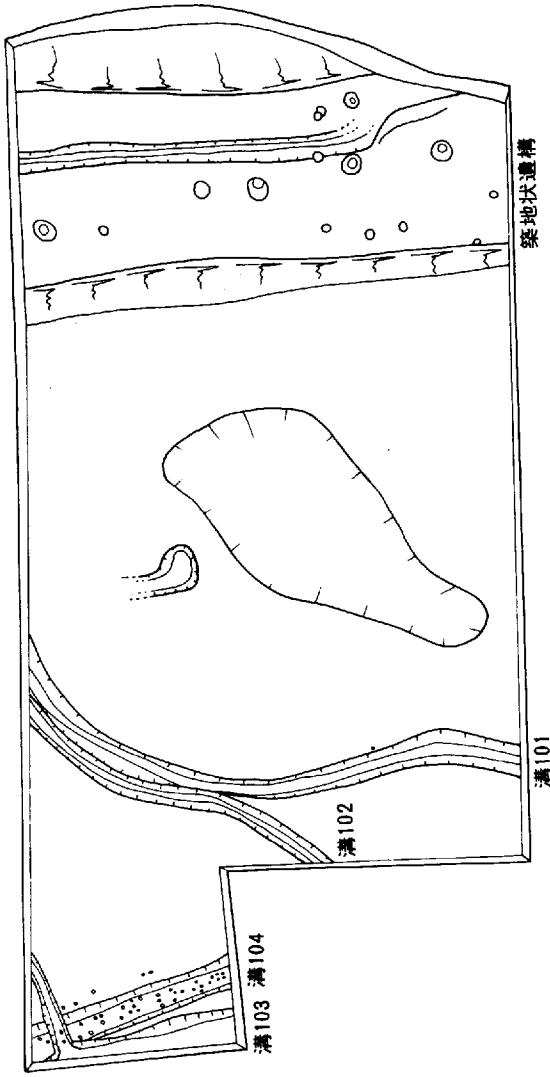
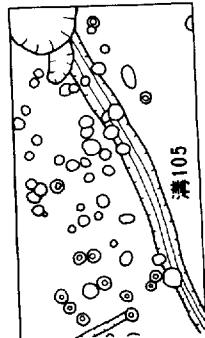
（正岡）

第2節 遺構

1) 堅穴式住居址

101号住居址（第8図2・第9図）

不整円形な堅穴住居址である。全容は明らかでなく、全体の約 $\frac{1}{2}$ の検出であり、残りは保存区域に入る。壁体の溝は北側でわずか確認したのみである。南側では床面まで削られている。柱穴は2個検出しただけである。中央よりやや南よりで炉あとがある。そして東よりで、花崗岩の上面は平たく、使用痕がみられる石が置いてあった。側面は赤く焼けている。作業の台石とも考えられる。



第7図 大道西Ⅰ調査区平面図

出土遺物（第9図） 出土の土器は剥離しているものが多い。壺、甕などがあり、底部ではヘラによる調整がみられる。高杯（7, 8, 9）の脚部は短かく広がり、胎土は細かく剥離されている部分があるが、刷毛で調整しているのがみられる。（10）は台付鉢で外面は手でおさえて仕上げられている。内面はヘラでこまかく仕上げられている。（11）は花崗岩製の作業用の台石と思われるもので、上面は平たく、よく使用されており、側面は赤く、火を受けている。

102号住居址（第10図1, 第11図, 図版4—2）

隅丸方形のプランをしている。東側では105号住居址と切合っている。ほとんどが削られており、わずかに壁体の溝を確認した。中央部分に炉と思われる焼土がある。そのそばには径60cm、深さ20cmのくぼみがある。住居址の全体に炭のかたまりが散乱していた。柱は四本柱で、柱間はほぼ1m60cmの間隔である。

出土遺物（第11図） 102号住居址の出土遺物は床面、そして周溝より出土した。土器については、高杯（1, 2）の短脚のもので円孔があり、外面はヘラできれいに調整がしてある。小壺（3）は器高10cmぐらいの小形のもので外面はヘラで仕上げられている。内面はヘラによるあらい仕上げである。すべて焼成は良い。鉄斧（4）は長さ7cm、刃先幅4.5cmの大きさで、袋部の中に木質がみとめられる。また、表面にひもの形がわずかに残っている。砥石（5）は砂岩製のもので、四面ともよく使用されている。

103号住居址（第8図1, 第10図2, 図版4—1）

大道西Ⅰ調査区の微高地の西端部分に位置している。全容は明らかでない。北側の一部は用地外で西側は傾斜面のため削られている。おそらく、方形の堅穴住居址と思われる。壁体の溝は南側部分でわずかに確認した。柱穴も溝と同一方向で2個ならんで検出した。炉あとは中央部分にあり、周辺には多数の土器片が出土した。又、全体に多数の焼けおちた炭化材がみられた。

出土遺物（第10図2） 大道西Ⅰ調査区の中では他の住居址にくらべ、床面に焼土、炭火材にまじって土器片が多く出土した。（1, 2）は小形の甕で胎土は荒い砂粒を含んでおり、内、外面とも剥離している。高杯（3, 4, 5, 6）は口縁径が11cm～12cmのもので外面はヘラで調整している。脚部（6）は台部に4個の円孔をもち、刷毛で細かく仕上げている。（7）は鉢で口径は14cmあり、外面は刷毛により調整がしてある。

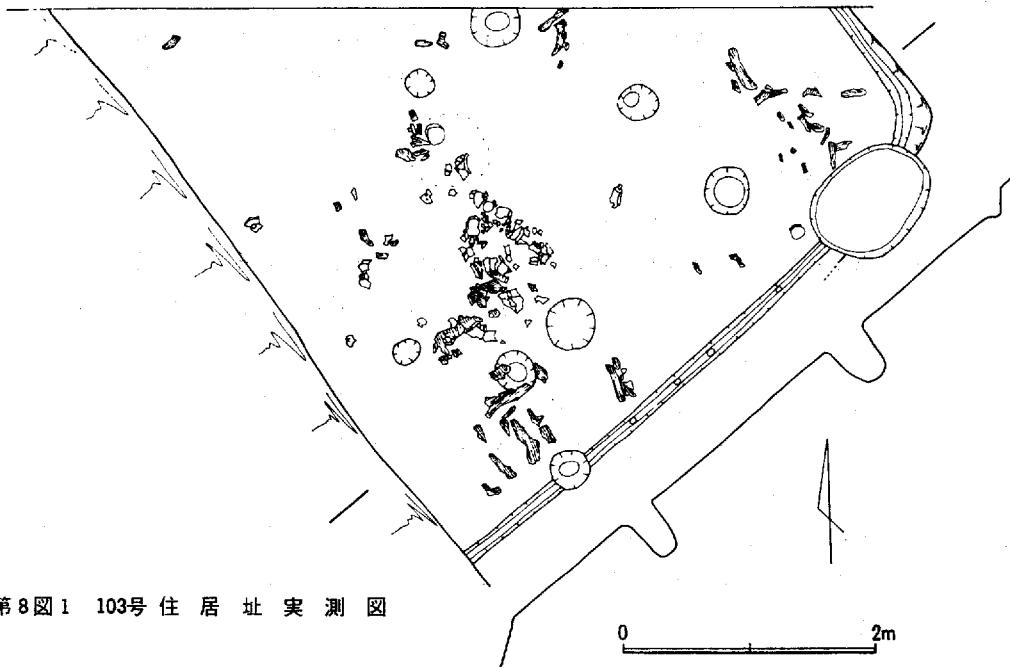
104号住居址

ほとんどが保存部分に入っている。わずかボーリング調査と側道敷にかけて、壁体の溝が走っているのを検出したのみである。出土遺物はわずか小量の土器片が埋土中に含まれていた。

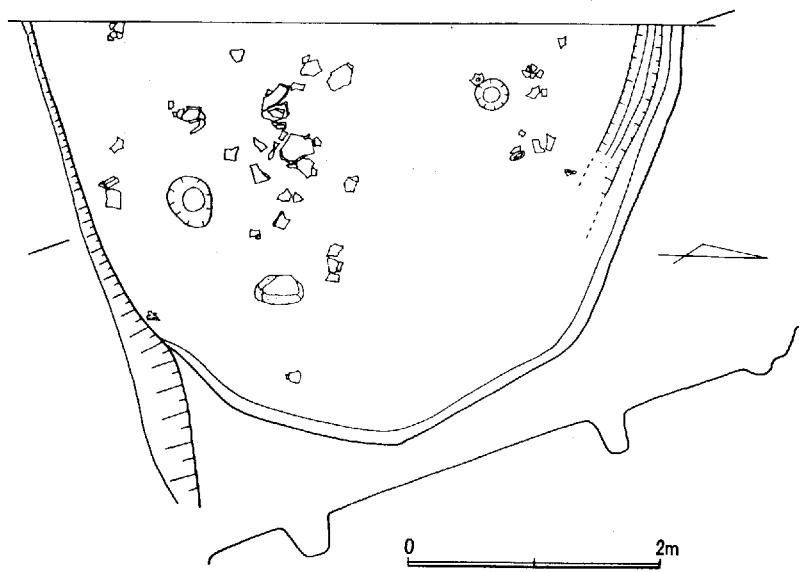
105号住居址（第11図, 図版4—2）

隅丸方形のプランをしている。西側部分は102号住居址を切込んでおり、ほとんど上部は削平されている。わずかに浅く壁体の溝、柱穴を検出した。柱は四本柱と思われる。中央部分に浅いくぼみがある。出土遺物は102号住居址と同時期の土器片が埋土中から小量出土した。おそらく102号住居址とあまり時期差はないものと思われる。
(枝川)

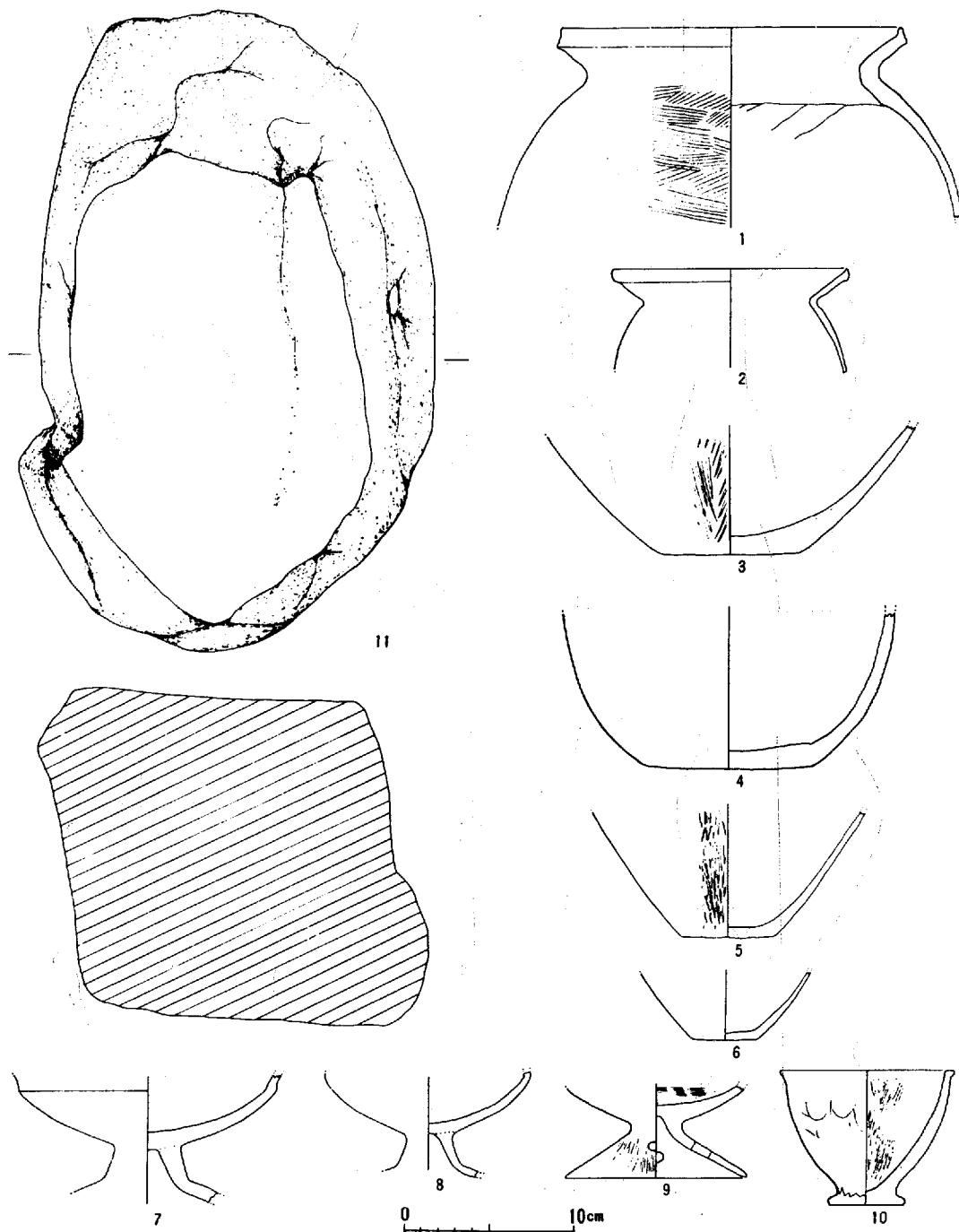
川 入 遺 跡



第8図1 103号住居址実測図

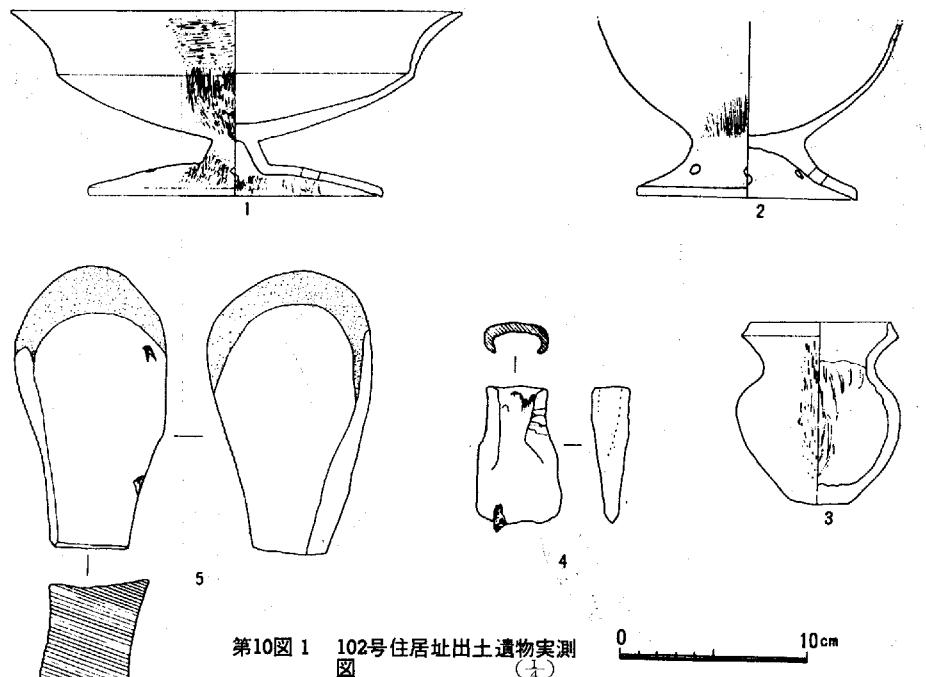


第8図2 101号住居址実測図

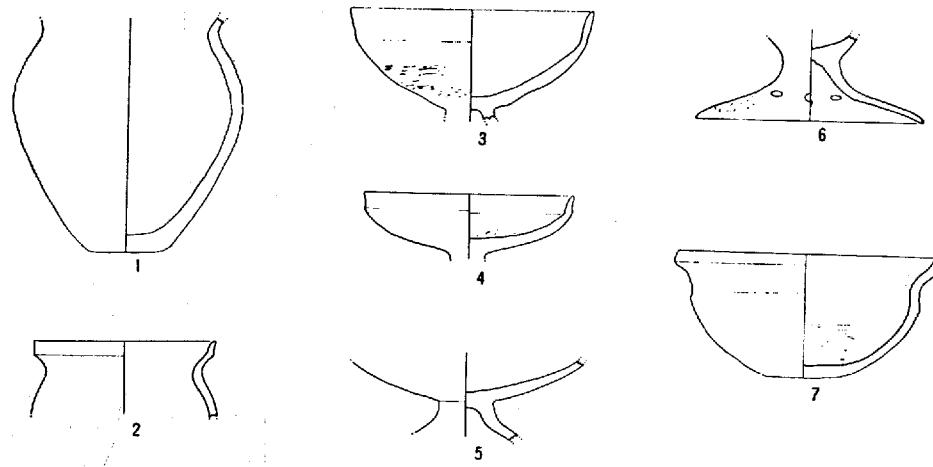


第9図 101号住居址出土遺物実測図(2) (1/4)

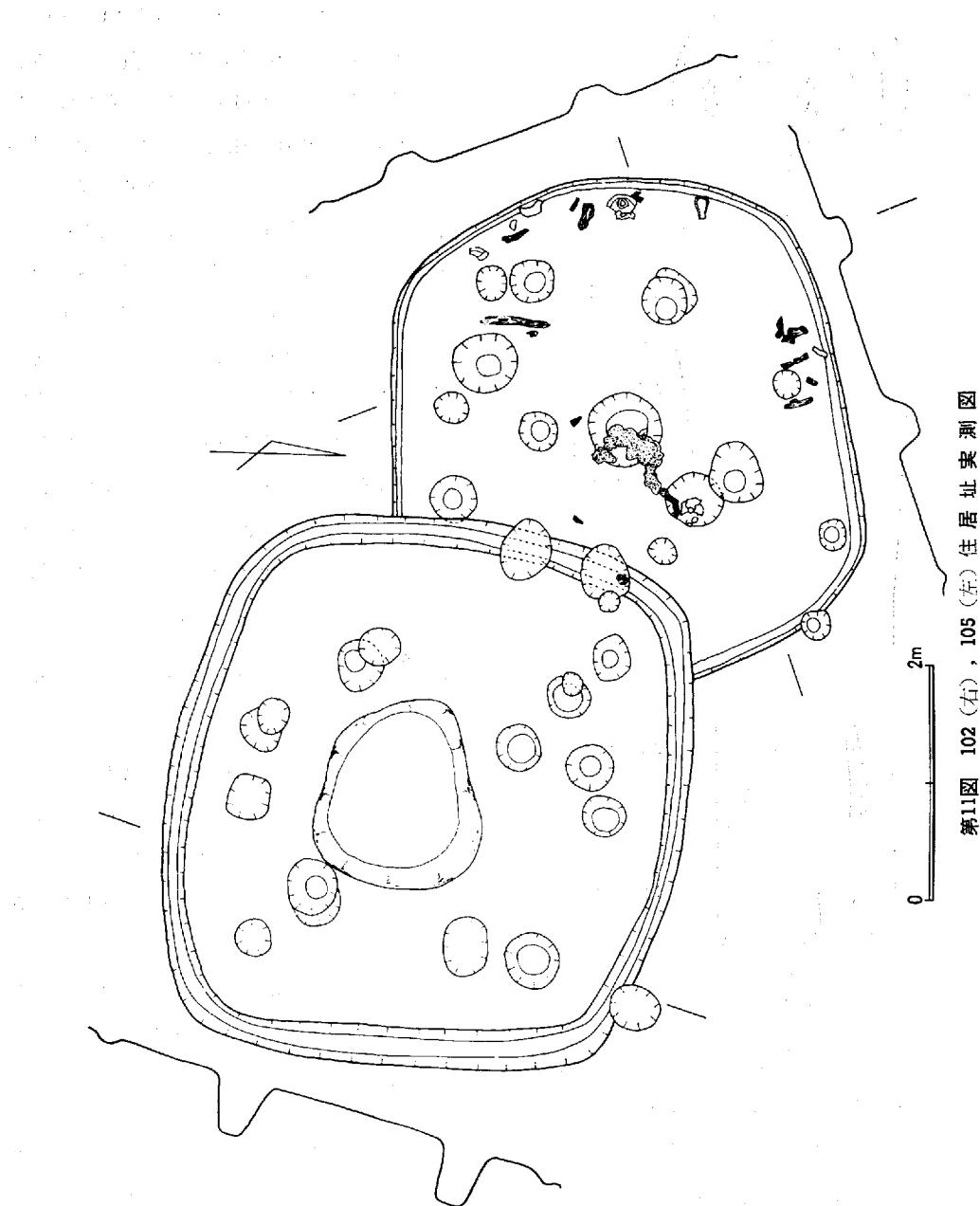
川入遺跡



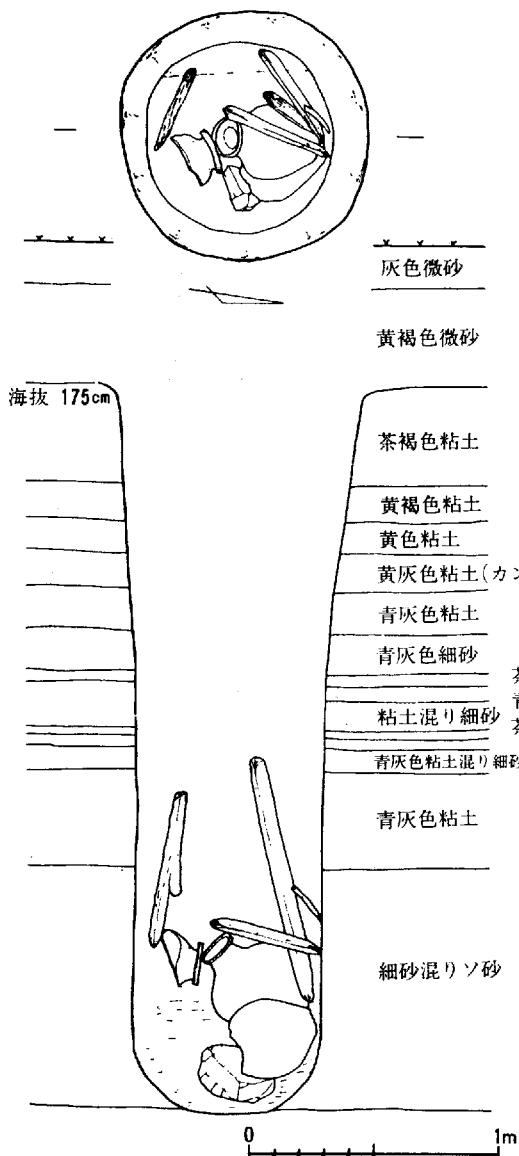
第10図1 102号住居址出土遺物実測図 (1)



第10図2 103号住居址出土遺物実測図 (1)



第111図 102(左), 105(右)住居址実測図



第12図 井戸101平面、断面実測図

壺（1, 3, 4, 5, 6, 8, 11, 12）は口縁部が上方に張り出しているのがほとんどである。頸部は丸く下方に広がっている。完形のもの（1）については頸部から胴部へのつなぎがはっきりみられる。外面は刷毛で調整がしてある。

甕（2, 7, 9）は「く」の字状口縁のもので完形のもの（2）は口縁部に不明瞭なうすい凹線がみられる。

高杯は杯部が外上方に広がるもの、脚部は短脚で脚部が広がるものである。

鉢は、口径が18cmあり、底部にかけては丸くなっている。表面は刷毛で撫で仕上げしてある。

長頸壺は、口縁から頸部にかけてだけである。

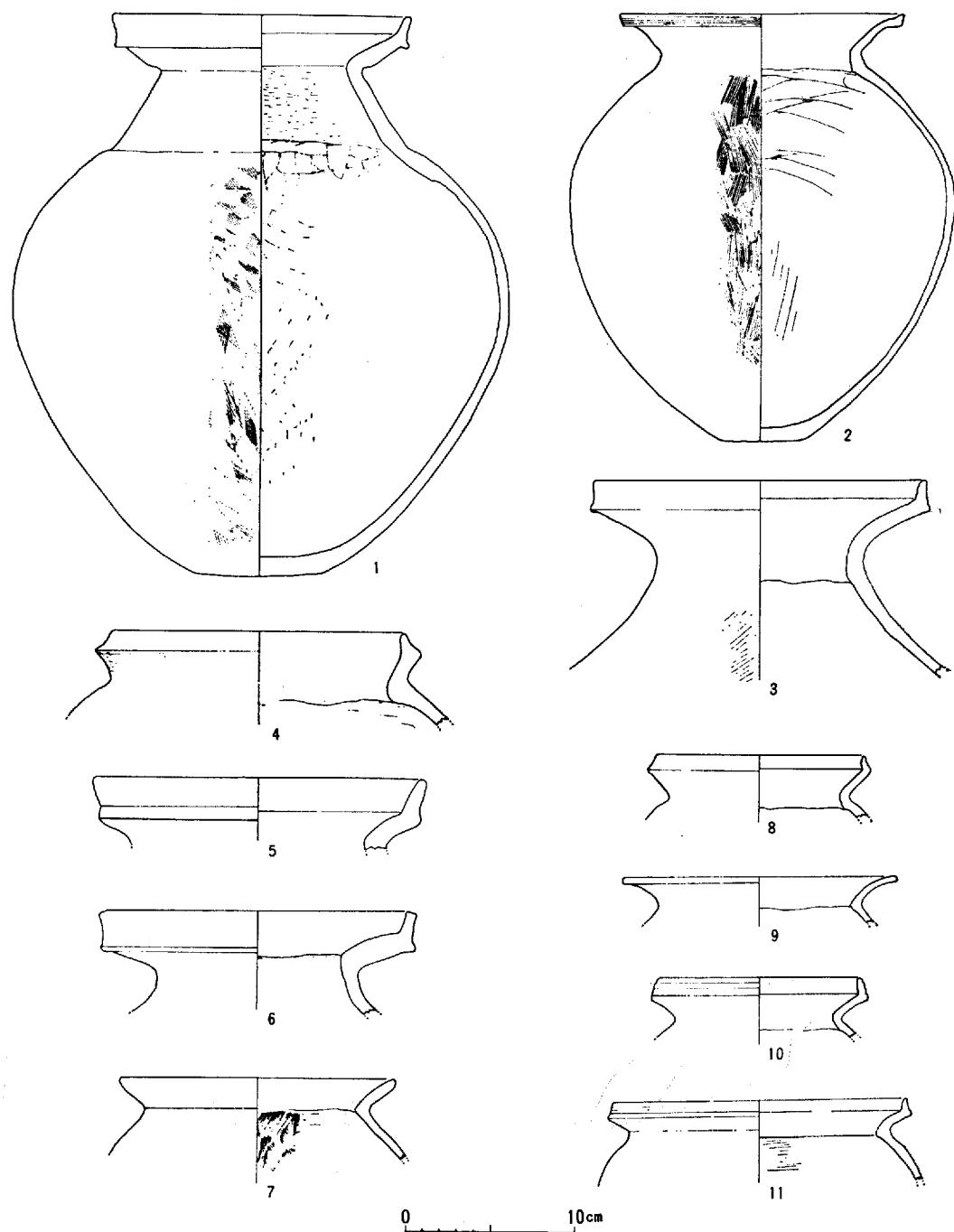
2) 井戸101 (第12, 13, 14図、図版13—2)

大道西Ⅰ調査区では中ほどに位置している。耕作土下の黄褐色包含層を掘り下げて検出した。2m西よりには、住居址102号、105号がある。しかし、井戸と住居址の時期は異なる。上面のプランは円形をしている。上面の径は、1m上面より80cm下った部分から径70cmにせまくなりそれより下部は六角形状に掘りこまれていた。深さは、上面から最下部まで約3mあり側壁は垂直になっている。底の西側には巨木が南北方向に横たわっていた。東側は、巨木を外してやや深めに掘りこまれている。底部では完形の壺と甕の2個と大形の砥石が出土した。

井戸出土遺物 (第13, 14図、図版13—2)

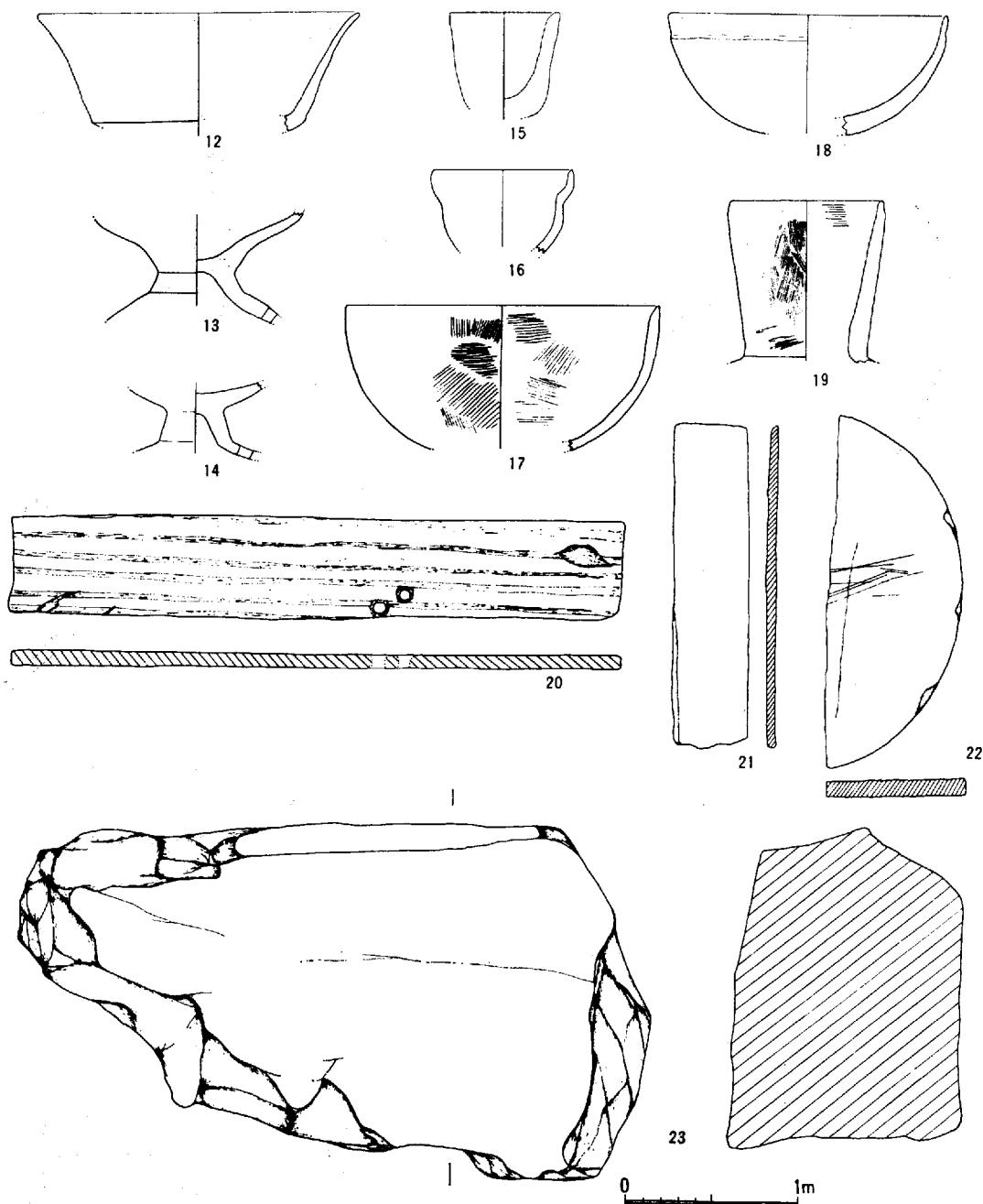
井戸内の出土遺物は弥生式土器を中心に、小数の木製品と砥石が出土した。土器は弥生後期後半の土器でほぼ完形の壺と甕の他は、高杯、鉢、コップ状土器、直口壺などである。

川 入 遺 跡



第13図 井戸101 出土遺物実測図 (1) (1)

川入遺跡



第14図 井戸101 出土遺物実測図 (2) (上)

川入遺跡

木製品は幅5.5cm、長さ36cm、厚さ8mmあり、中ほど端に6~7cmの孔が2ヶ所あけてあるもの(20)と幅4cm、長さ18cm、厚さ5mmの板状のもの(21)である。そして曲物の底で厚さ8mmぐらいある。なお(20)の板は黒松、(21)の板は杉、曲物の底と思われるものは檜の材質である(註一)。

砥石は大形のもので2面をよく使用している。

これら出土遺物の土器については、弥生時代の後期後半のものと思われ、雄町11類(註二)に属するものと思われる。おそらく井戸の時期もその頃と思われる。

註一(1) 岡山大学農学部、畔柳鏡教授の鑑定による。

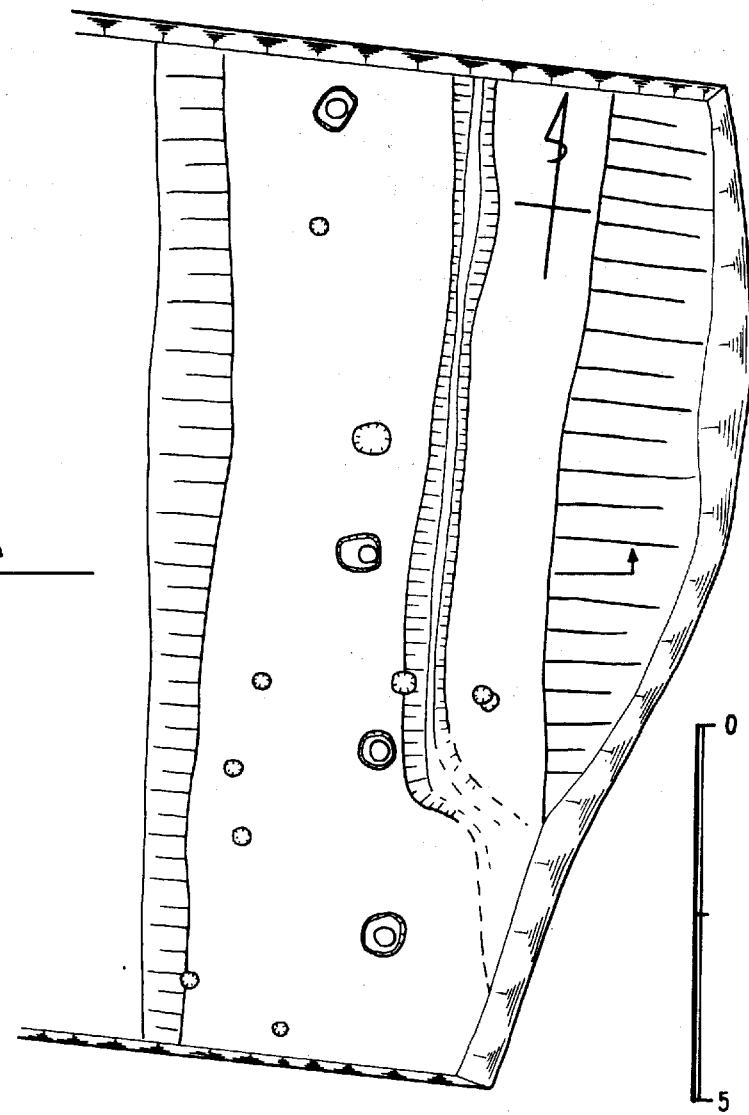
(2) 岡山県教育委員会、「埋蔵文化財発掘調査報告」1972。

3) 築地状遺構 (第15図、図版3-2)

安定した地盤である黄褐色微砂層を削り出して作られており、残存の基礎地形部分を検出したらしく上面の遺構は不明である。高さ約30cm、上面の幅約4.5mであり、方向はN 4°Wである。上面やや東よりに幅約3m、深さ15cmの溝及び、深さ20cmの柱穴列が認められる。東側は現在の水路と重なるため、詳細は不明であるが溝が存在すると考えられる。

a 瓦

大道西I調査区全体より出土するが特に築地状遺構周辺に集中して出土する。



第15図 築地状遺構実測図

<軒丸瓦> (第16図1)

平城宮6225型式(註一)と同タイプのもの一種類のみであり、21個体分出土する。図の一例を除き他は小片である。瓦当の径 16.3 cm・厚さ 3.7 cm、内区は中房径 7.2 cm・蓮子は 1 + 8・弁区幅 2.6 cm、周縁に鋸歯文をめぐらす。復葉8弁の軒丸瓦である。間弁と蓮弁の一部は乱れている。丸瓦部分裏面には布目痕が残る。色調は灰褐色ないし灰黒色を呈し、やや軟質の焼成である。胎土に微細の砂粒を含む精製された土を使用する。中に二次的な焼成を受けたものも認められる。当遺跡と同型式の軒丸瓦は岡山市一の宮神力寺址より出土している(註二)。

<軒平瓦> (第16図3)

軒丸瓦6225型式と対応する軒平瓦、平城宮6633型式と同タイプのもの一種類のみであり、12個体分の小片が出土している、瓦当厚4.3cm、曲線顎である。文様の均整唐草文は陰陽が逆転している。色調は灰色ないし灰黒色を呈し、焼成は須恵質の堅緻なものおよび軟質のものがある。胎土は軒丸瓦と同様である。同型式の軒平瓦は、軒丸瓦と同じく岡山市一の宮、神力寺址と岡山市津高富原「荒神廃寺」より出土している(註三)。

<鬼瓦片> (第16図2)

剝離した小片であるため、その詳細は不明であるが鬼瓦の周縁の一部分と考えられる。色調は灰色を呈し、胎土に良く精製された土をもち、焼成は須恵質のやや軟質のものである。

<平瓦>

すべて破片であり、総数240片出土する。その種類は以下の通りである。

- 表面に布目痕が残り、裏面に繩目痕が残るもの(第18図)。
- 須恵質で堅緻なもの………23片
- 赤褐色を呈するやや軟質のもの………30片
- 灰黒色を呈し焼成の悪い、やや軟質のもの………105片
- 表面に布目痕が残り、裏面に格子目が残るもの(第18図)。
- 須恵質で堅緻なもの………5片
- 赤褐色を呈しやや軟質のもの………5片
- 格子目が他と異なるもの(第18図)。
- 須恵質で堅緻なもの………1片
- その他
- 小片であるため、判別の不明のもの………62片

<丸瓦>

灰黒色を呈し、焼成の悪い軟質のもの24片が確認される。行基葺きのものは認められない。

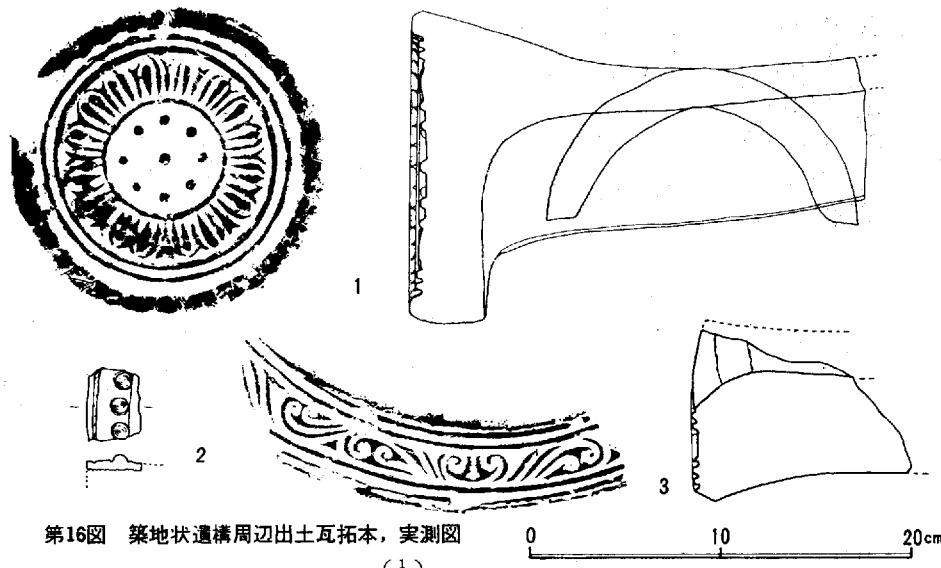
(大谷)

註一(1) 「平城宮発掘調査報告書」I . S . 38

(2) 黒住秀雄氏採集、同氏蔵

(3) ヲ

岡山市史古代編「奈良時代、嚴津政右衛門」S . 37



第16図 築地状遺構周辺出土瓦拓本、実測図
($\frac{1}{2}$)

b 下層出土遺物 (第19図 1~25)

築地状遺構と同時期と考えられる遺物類であり、須恵器、土師器、円面硯、紡錘車、金環等が出土する。

<須 恵 器> (1~20)

蓋、杯、盤、鉄鉢等が出土する。16・20を除き、いずれも暗灰色を呈し、胎土に微細な砂粒を含む。蓋には口縁端部内面に明瞭な屈曲をもつもの (3・5~7) ともたないもの (2・8・9) の二種類が認められる。1・3・9は杯蓋硯である。8点出土しており、良く使用されているものと、ほとんど使用されてないものが存する。10は底部に「ハ」の墨書きが認められる。壺あるいは盤の底部と考えられる。11~13は灯明皿として使用されている。13は器形のひずみがいちぢるしい。16は約20cmの範囲に散乱していた破片が接合、一個体となったものである。良く精製された土をもじいており、灰色を呈し、やや軟質に焼成されている。胎土、焼成とも他の須恵器とは異なる。14・18・19の高台の作りは良く、下部が若干凹む。20は二次的な焼成を受け乳褐色を呈する高台の作りの難な盤である。

<土 師 器> (21~24)

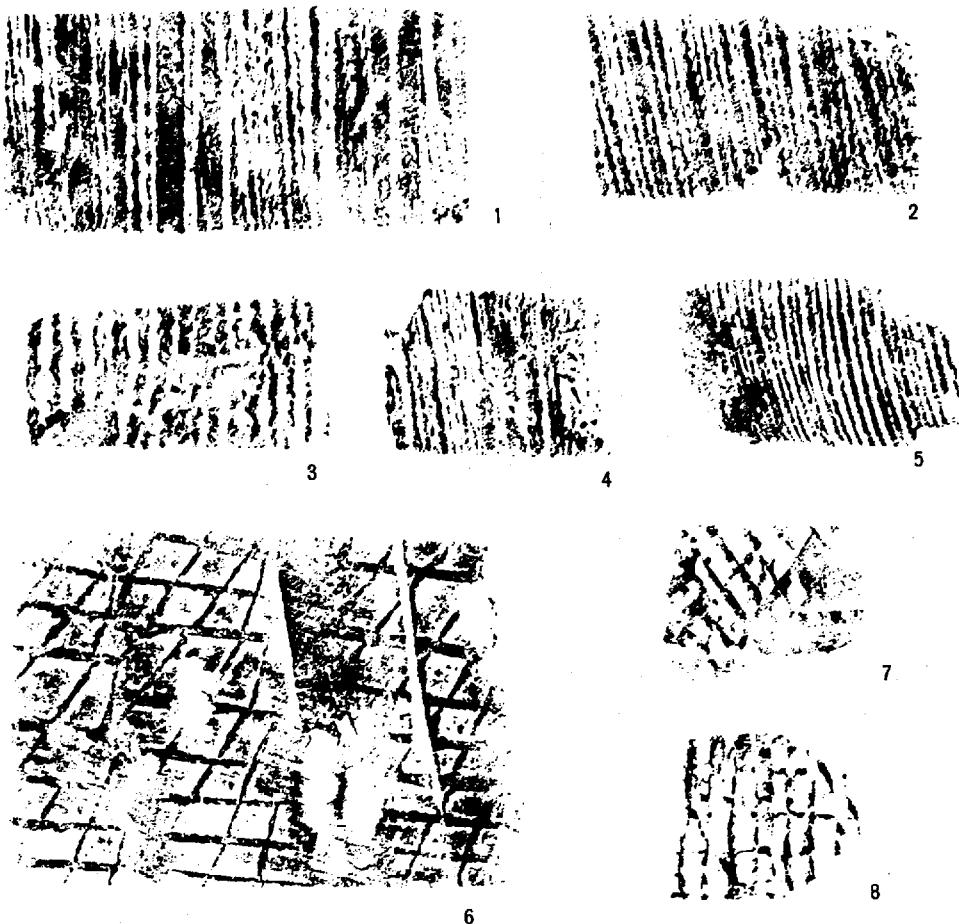
蓋、杯等が出土している。須恵器に比して、出土量は少い。21・22は赤褐色を呈し、軟質に焼成されたもの、23・24は褐色を呈し、硬質に焼成されたものである。21・23・24は内外面とも丹塗がなされている。又、23の内面には放斜状暗文が認められる。

<円 面 砯> (25)

3分の1ほど存在する。陸部の復原径12.5cm、海部の幅約1cm、脚に16又は17個の方形の透しが入



第17図 神力寺出土瓦拓本 ($\frac{1}{2}$)



第18図 平瓦叩き目拓本 (1/2)

る。暗灰色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒を含む堅緻な焼成であり、一部に自然釉が認められる。陸部中央よりは使用による摩減がいちぢるしい。

<紡錘車> (第20図1)

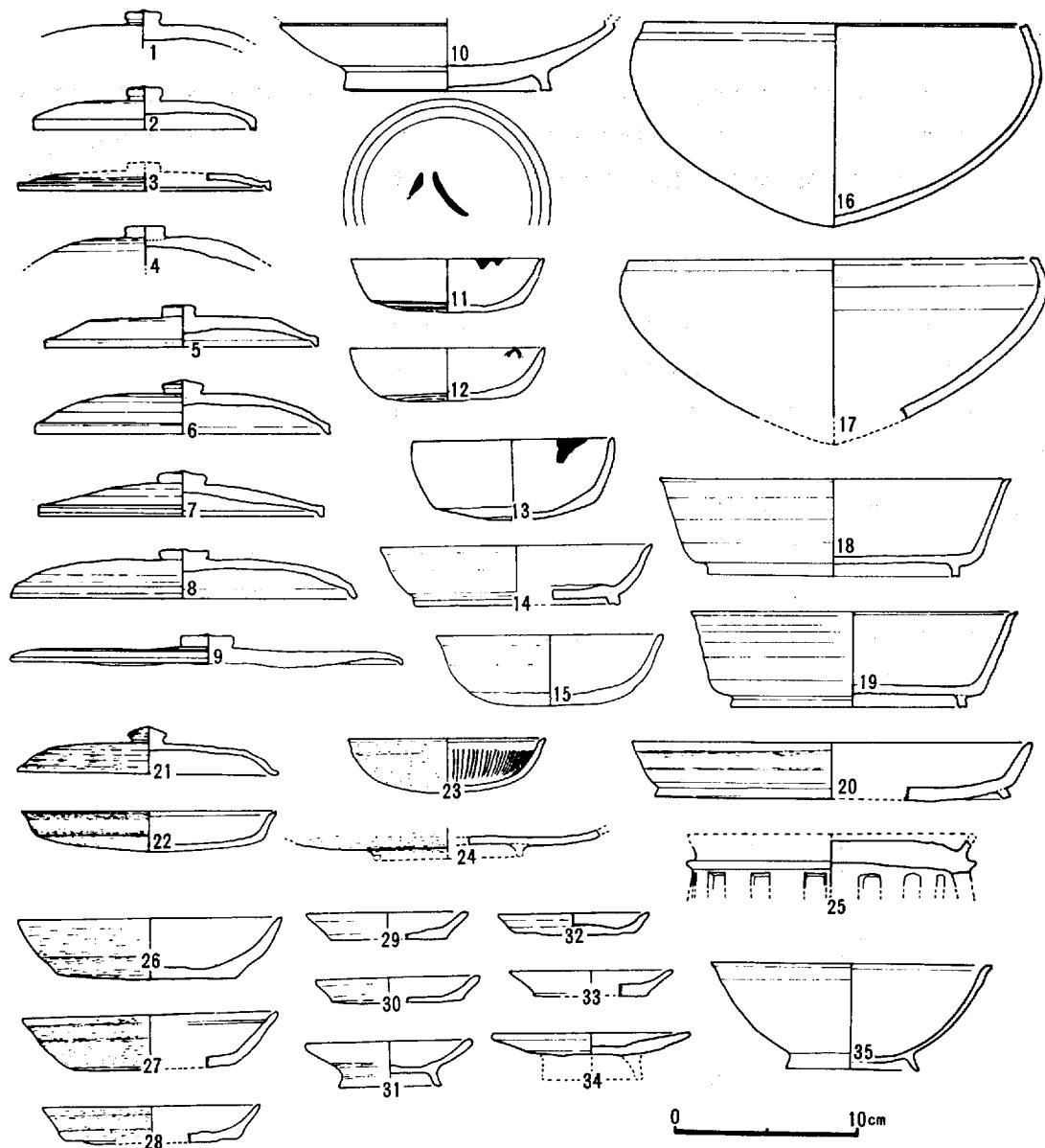
直径7cm、厚さ0.5cmの褐色を呈する土師質の紡錘車である。

c 上層出土遺物 (第19図26~35)

築地状遺構の上層より出土した土器類であり、築地状遺構との関連は認められない。塊ノ灯明皿、有脚小杯、鉄釘等が出土する。26~28は赤褐色を呈する土師器である。いずれも底部は粘土巻き上げ痕が残る。29~32は灯明皿と思われる。31は褐色を呈する土師器であり、底部に粘土巻き上げ痕が残る。他の3例は灰白色を呈する須恵質土器と呼ばれるものである。底部に糸切り痕が残る。33・34は小杯に高台を張り付けたものであり、底部には粘土巻き上げ痕が残る。33は須恵質土器であり、34は土師器である。35は灰褐色を呈する。比較的堅緻な須恵質土器である。口縁部の内外面に横ナデがなされており、胴部はヘラ磨きがなされる。

<鉄釘> (第20図2・3)

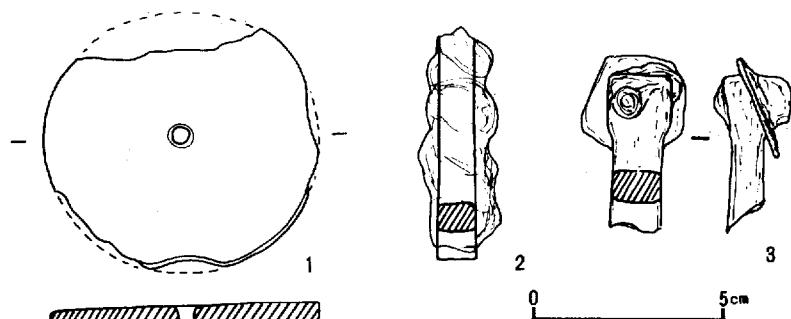
川入遺跡



第19図 築地状遺構周辺出土遺物実測図 (1) 1~25 (下層出土遺物) 26~35 (上層出土遺物)

2は一辺が0.8cmの
断面方形の鉄釘片である。3は銹のため判別
がしにくいが鎧になる
と考えられる。

(大谷)



第20図 築地状遺構周辺出土紡錘車、鉄器実測図 (2)

4) 建物 101

梁行、桁行とも約210cmの2間×4間ないしは2間×4間以上の掘立柱の建物である。柱穴は黄褐色微砂層を掘り込んで作られており、掘り方は円形、深さは約20cmである。柱穴内より第21図の様な小皿が出土している。褐色を呈し、微細の砂粒を含む土師器である。底部には粘土巻き上げ痕が残る。

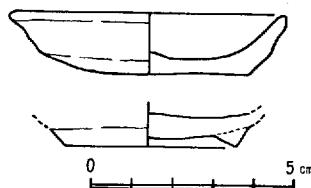
(大谷)

5) 土墳 101 (第22図)

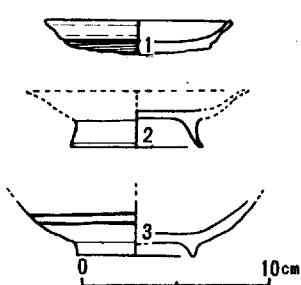
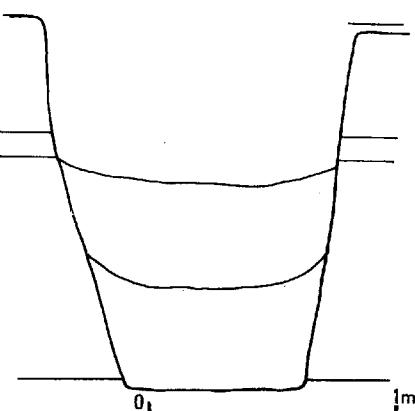
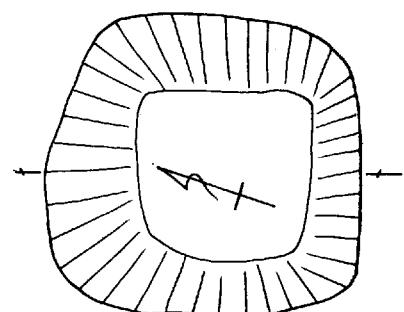
上面、下面とも方形に近い形を呈する一边が約1m20cm、深さ1m45cmのピットである。底部が灰褐色粘土層で止っており、砂層まで達していないので井戸とは考えられない。このピットの性格は不明である。

遺物 (第23図)

3は灰白色を呈する軟質の焼成の内面黒、ヘラ磨きが行われている高台付杯である。2は粘土巻き上げ痕が残る小皿である。褐色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒を含む。1は黄褐色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒を含む土師器の有脚小杯である。



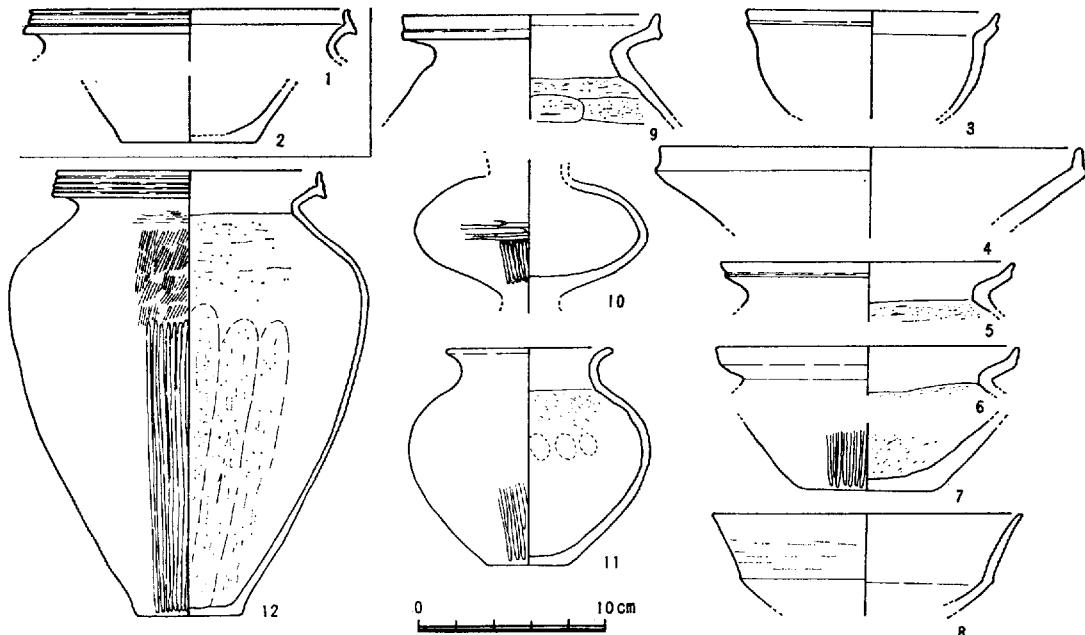
第21図 建物柱穴内出土土器実測図

第23図 土墳101出土土器実測図
($\frac{1}{4}$)

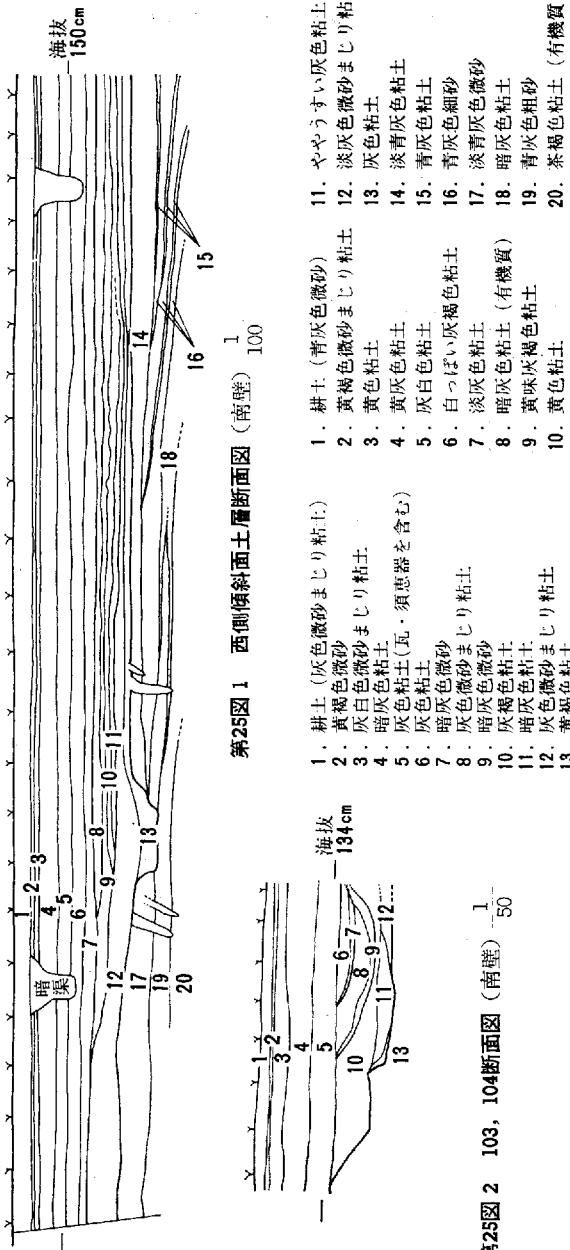
第22図 土墳101平面、断面実測図

6) 溝及び水田遺構

溝 101（第24図 1, 2） 微高地の上に位置し、方向は南北であるが、調査区域の中で西に曲折している。現状での大きさは幅75cm, 深さ20cmである。埋土は淡灰色粘土で埋土中には弥生時代後期の土器片を含んでいる。



第24図 溝101（1～2），溝103（3～12）出土遺物実測図（4）



溝102 溝101を切ってつくられている。方向はやや蛇行しながらも北北東から南南西である。大きさは幅110cm、深さ80cmである。埋土は淡灰色粘土で炭を含んでいる。埋土中には弥生時代後期後半の土器片が含まれている。口唇部にきざみ目を施した弥生時代前期の甕の破片も含まれている。

溝103 (第24図3~12) 微高地のほぼ中央部に位置し、方向は南北である。西側に道路があり西端を確認することができないが、幅80cm以上、深さ28cmである。埋土上層には王泊6層期の遺物を含む灰色粘土層がわずかにみられる。暗灰色微砂層によって明確に区分された下層は灰色微砂まじり粘土で埋没し、土器を多数含んでいる。調査区域は南が保存区域で調査したのは5m位の間である。その間の北端部に近い位置で東側へ直角に分れる溝がある。これは幅46cmであり、分水と考えられる。埋立中の遺物は多い。器種は壺、甕、台付壺、高杯、鉢がみられる。

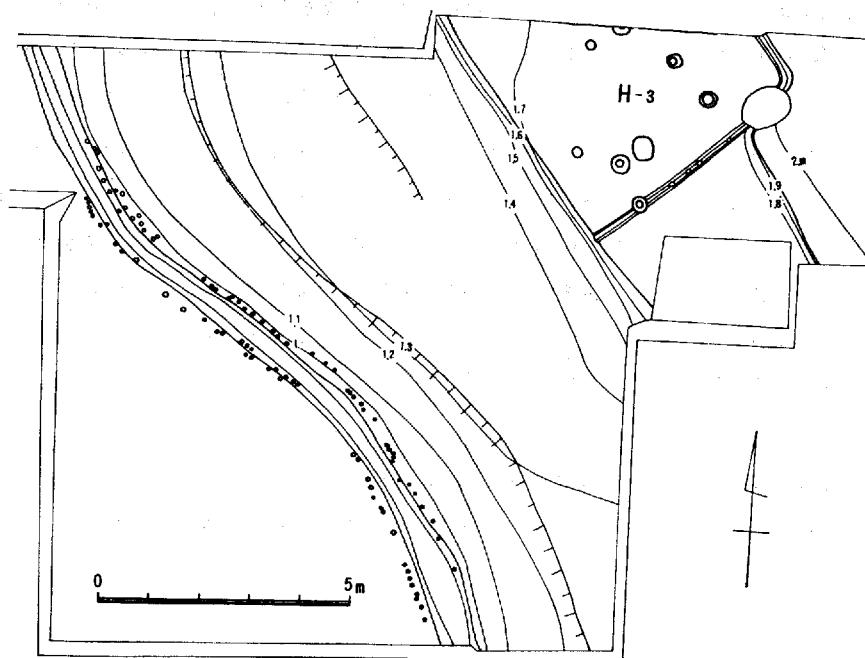
溝104 (第25図2) 溝3と重なり、その下に位置する。方向も同様で南北である。規模は大きく幅2m以上、深さ45cmである。溝の内側と周辺部には直角7~10cm位の杭の痕跡が多数みられ、しがらみ等の施設が推定される。下部の埋土は暗灰色粘土で、含まれている遺物は少ないが、いわゆる前山Ⅲ式よりも古い様相を呈している。

溝105 微高地の中央部から西に向かってのびる溝で北北東から西北西の方向である。西側は地下げのためわずかに底部の痕跡を残すにすぎないが、東側では幅70cm、深さ20cmである。埋土は灰色粘土である。埋土中には須恵器、土師器平瓦の破片が含まれている。埋土の上から平安時代の柱穴が掘られており、埋土の遺物からも奈良時代のものと考えられる。

溝106 と水田状遺構 (第25図-1, 26図, 図版5-1)

大道西の微高地西側に位置し、黄褐色微砂まじり粘土層に掘込んだ溝とその西に約80mにわたって水平に続く灰色粘土層が認められる。花粉分析の結果を得ていない現在断定をさけるとしても、遺構の形態から水田とそれに伴う用水路と推定される。溝は微高地の端部に沿って北北西から南南東の方向に流れ、幅は約60cmで現状の深さは20cmである。溝は黒色粘土によって埋没している。埋立中の土器片は少ないが、弥生時代中期と弥生時代後期のものを含んでいる。もっとも新しい土器は弥生時代後期後半のものであり、溝の埋土より上層には多量の王泊6層期のものが認められることからも溝の年代をきめることができる。西に向かってのびる灰色粘土層の間には高まりなどは認めることができず土手状の遺構を確認することはできていない。ただ溝の両側には多数の杭の跡が検出されている。

灰色粘土層は西に向ってほぼ同様の状況で続き約80m西の部分で溝状の凹みが認められる。この部分で土層が西に傾斜して灰色粘土層の水平な堆積は認められなくなる。この間、下の土層が傾斜としているにもかかわらずその上にあって水平にひろがっている。したがって溝6から西の溝状の凹みまでの間を弥生時代後期の水田面と推定し、それより西は同時期では沼状を呈し、いまだ水田化されていない部分と考えられる。その後、古墳時代後期以前の土層との間に黒色粘土層がほぼ水平に認められる。これは有機質土であり、凹凸が全域にわたって認められ水田であるかどうか判断するのは難しい。その上層に奈良時代の瓦片等を含む水平な上層が認められ、鉄分、マンガン分の沈着が数層にわたって見られる。そのことから歴史時代の水田面の上昇が現在の水田にいたるまで確認できる。下層の弥生時代後期の水田と推定される土層には鉄分、マンガン分の沈着がみとめられず湿田であること



第26図 溝106、西側傾斜面平面図

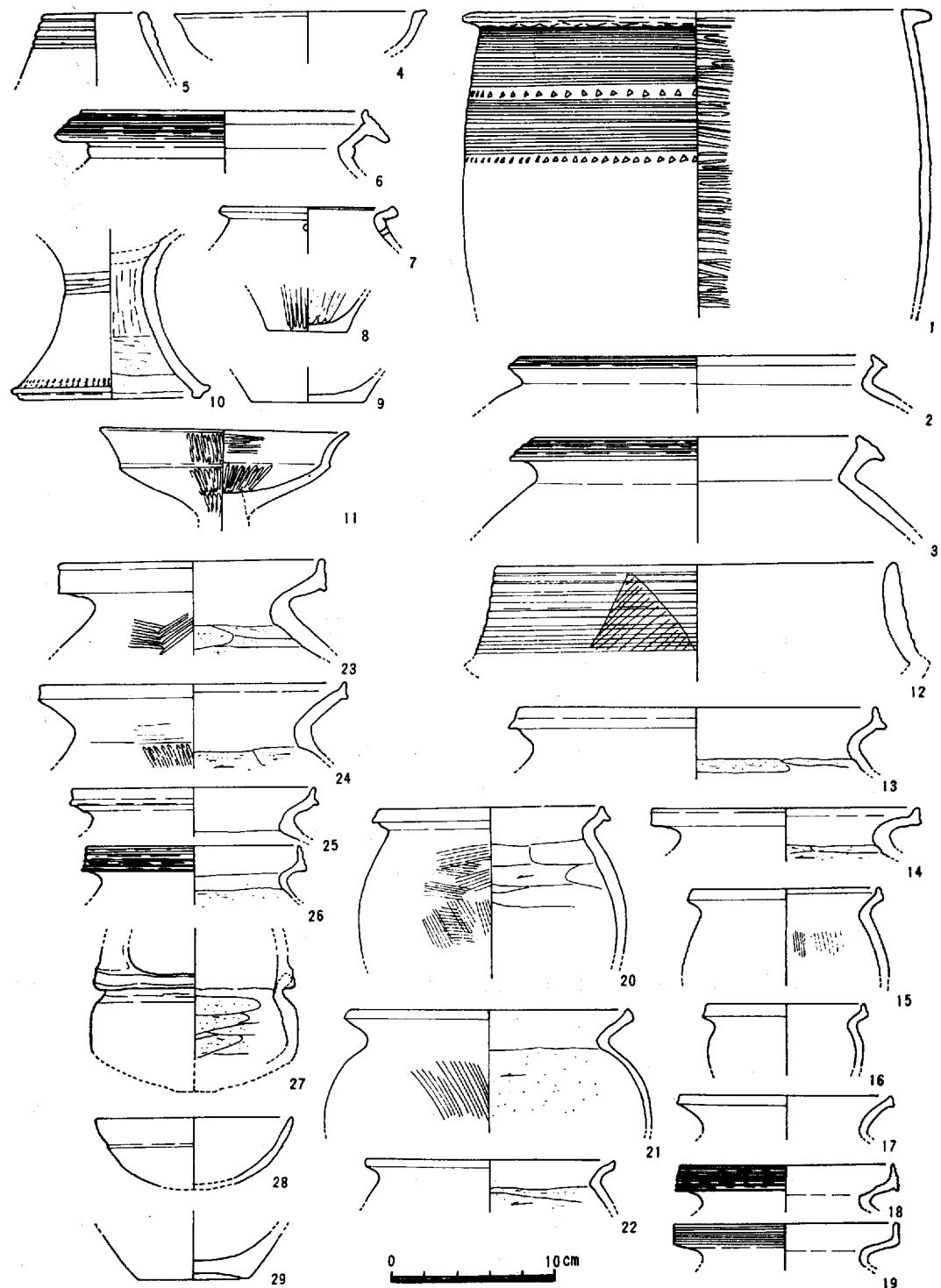
が推定される。しかし、この部分は旧河道の中に入り、いわゆる川田と呼ばれているものであって、
当時の水田の実態が全てこの状況にあったとは考えられない。

(正岡)

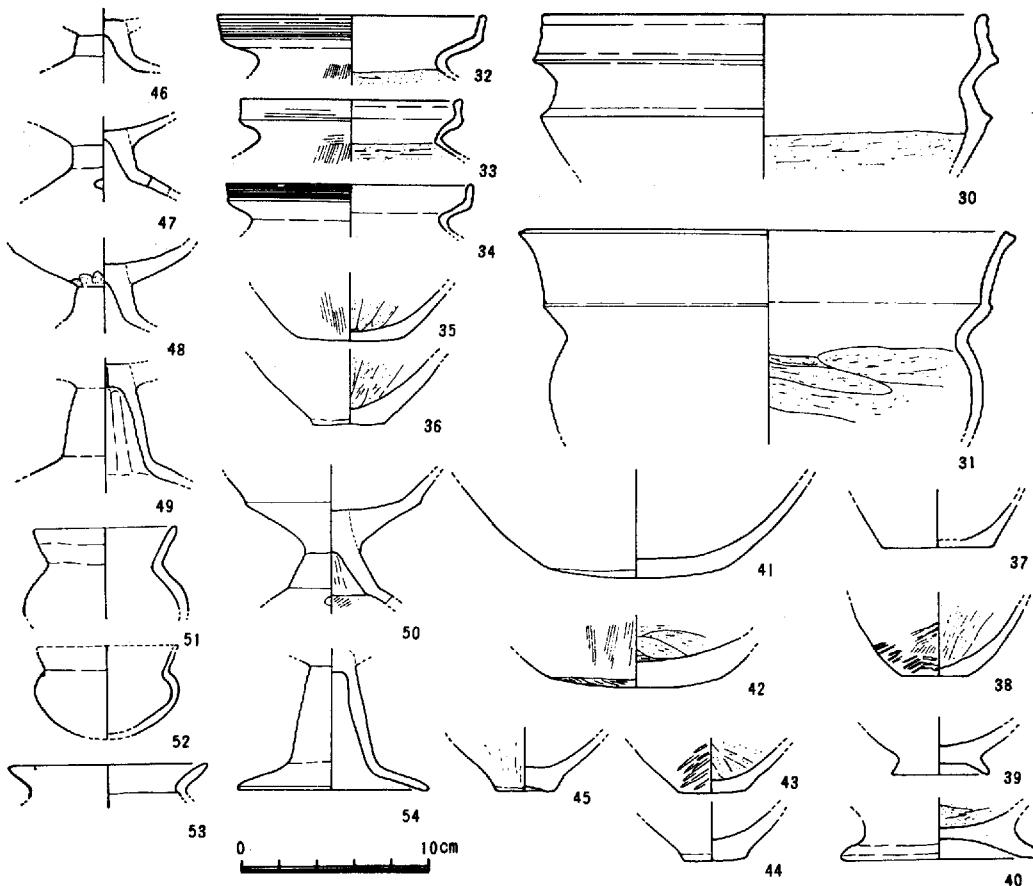
第3節 遺物

1) 弥生式土器・古式土師器(第27, 28図)

弥生時代前期の土器は少量検出されているにすぎない。いずれも包含層、溝の埋土中に含まれている。溝102の埋土中には口縁部を「く」字状に外反し、口唇部にきざみ目を施したものがある。弥生時代中期の土器は溝104の埋土と西側包含層に含まれている。量はいずれも少ないが、年代的には中期初頭に属する甕の大きな破片を出土している(27図1)。これは口縁部が逆「L」字形に外反し櫛描きとヘラによる「三角形」状の圧痕を施している。内面は横位のヘラ磨きが施されている。弥生時代中期中葉に属する無頸壺(5)と高杯(4)がある。弥生時代中期後半で前山II式に属する土器は比較的多い。溝104と西側包含層中に含まれているもの(2, 3, 7)と口縁端部の発達したもの(6)がある。いずれも前山II式でそれぞれ前半と後半の年代にあたる。弥生時代中期～弥生時代後期初頭の土器は検出されていない。いわゆる上東式の長頸壺の破片は検出されているが少量である。弥生時代後期後半の土器は堅穴住居跡、柱穴、井戸中に含まれている。高杯の杯部は比較的浅い(11)。酒津式土器は井戸と包含層中に含まれている。器種には壺、甕(17～26, 38, 40, 43～45)高杯、鉢(30), 手あぶり形土器(27)がある。手あぶり形土器は小破片である。粗雑なつくりで、内面にはヘラ削りが施されている。鉢(30)は口縁部が拡張し、粗い凹線文が施されている。甕の底部には叩



第27図 大道西I調査区出土土器実測図(1) (1/4)



第28図 大道西Ⅰ調査区出土土器実測図(2) (+

きめを施したもの（38, 43）もある。台付は鉢と甕にみられる。王泊6層期の遺物もあるが余り多くない。甕は口縁部が外反するものがみられる（32～34）。鉢は口縁部が著しく拡張して外反している。その後の土器片も含まれているがまとまったものはない。

(正岡)

2) 緑釉, 灰釉, 陶磁器

緑 釉, 灰 釉 大道西Ⅰ調査区では緑釉は1片小破片が出土した。胎土は須恵質のもので釉はやや黄みがかった緑色のものである。灰釉は小破片であるが高台を有するものが数片出土している。

陶 磁 器 (29図) 白磁は碗（1, 2）の口縁部で口縁部の外縁には厚さ1cmの断面三角形の粘土帯があるので胎土は灰白色である。（2）は青白色を呈している。（4, 5）の底部は器壁の厚い高台で極めて浅いもの（4）は畠付から2mmぐらいである。内底面には沈線を施している。（6）の高台は比較的に薄く高い削り出しで垂直状である。色調は乳白色をしている。

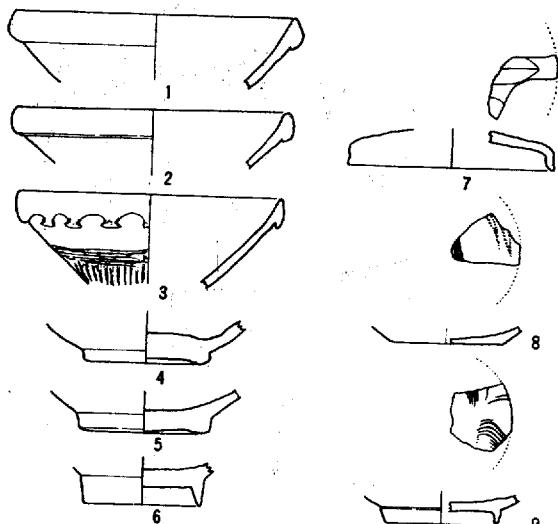
青磁は器内の厚い非常に浅い削り出し高台のもの（5）と蓋と思われる小破片（7）で蓮華文の一部がみられる。胎土は灰白色で釉の色調は淡青色している。（8）は皿と思われるもので、底径6cmの浅い無高台の器形で底部はヘラ削りがしてある。施文は細く、櫛描きの点線状の施文がみられる。（9）は薄い高台をもつもので、底部内面には櫛描文がみられる。他に（3）は碗と思われるもので

川入遺跡

口縁径は14cmあり、口縁部の外縁の粘土帶には釉がかたまりついている。外面胴部下半では釉はついてなく、ヘラでこまかく整形している。釉は灰色である。

これら輸入陶磁器の白磁類については太宰府などにおいての出土が知られる（註一1）。また、川入遺跡の大通西II調査区の井戸内より出土のものと類似するものである。（7）については竜泉窯系のものと思われる。（8）は珠光青磁と呼ばれているもので、同安窯青磁と考えられる（註一2）。（9）は施文などからみれば景德鎮窯系のものと思える。

（3）は中国よりも朝鮮系のものと思われる。



第29図 青磁、白磁実測図(1)

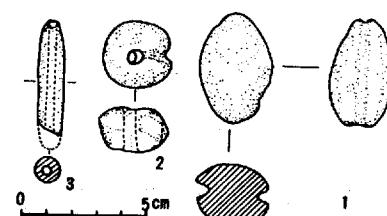
(枝川)

註一(1) 亀井明徳 「九州出土の宋・元代陶器の分析」 考古学雑誌 58巻4号

(2)「草戸千軒町遺跡発掘調査報告」1972年

4) 土錘 (30図)

土錘は3点ある。形態には周りに溝をめぐらすもの（1）、円形でやや扁平なもの（2）1、細長い紡錘形のもの（3）1がある。これらはすべて包含層中から検出されたもので、明確な年代をきめることはできない。1は長径4.4cm、短径2.9cm、厚さ2.5cm、重さ28.1gである。2は直径0.6cm



第30図 土錘実測図(1)

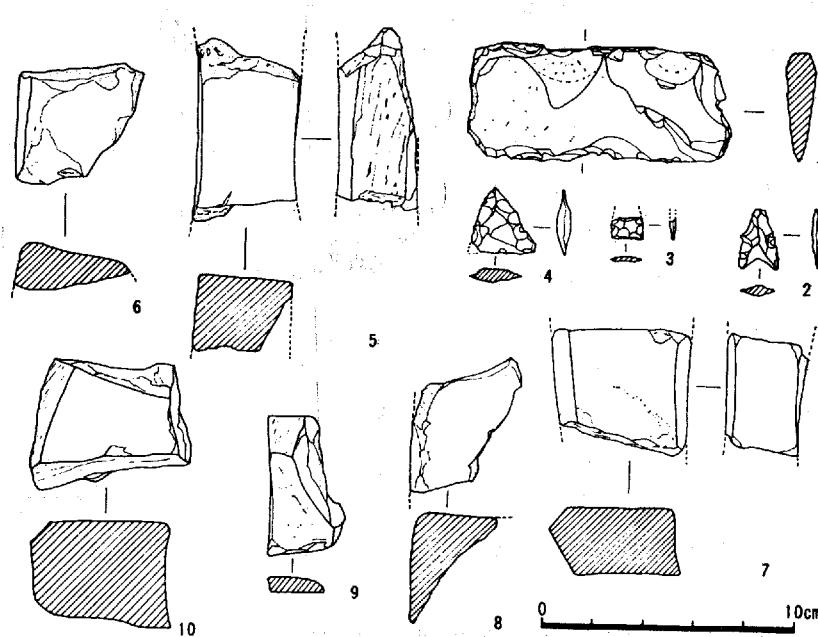
の穿孔があり、この部分から一方にめぐらす溝が施されている。大きさは直径2.7cm、厚さ1.7cm、重さ10.2gである。3は直径0.3cmの穴があり一方を一部欠失している。現長4.7cm、直径1.0cm、重さ4.8gである。

(正岡)

5) 石製品 (第31図)

包含層中より出土した石製品は打製石庖丁、打製石鎌と敲石がある。打製石庖丁（1）は、サヌカイト製で両端に紐かけのくりこみがある。大きさは長さ10.3cm、幅4.5cm、厚さ1.2cmである。打製石鎌は凹基式（2）と平基式（3、4）がある。大きさは2が長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.1g、3は現長0.9cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.4g、4は長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.9gである。砥石は6点ある。いずれも破片で、本来の大きさを知ることのできるものはない。

(正岡)



第31図 石器実測図(1)

第6章 大道西Ⅱ調査区

この調査区は川入Ⅰ調査区の西より法万寺調査区に接する部分に位置している。法万寺の微高地の東側を足守川の旧河道が南に蛇行して延びており、その東に小さな微高地が形成されている。現在この高まりは、畑、墓地になっており、この微高地の北端の一部分の調査であった。東側はゆるやかに傾斜しており、奈良時代、平安時代、及び鎌倉時代の遺物を含んだ包含層がある。遺構面は表土下約30cm～40cmで確認した。検出した遺構は鎌倉時代の井戸、土壙と小数の柱穴と、わずかに残っている近世期頃の溝を検出したのである。

第1節 遺構

1) 井戸 (第33図、図版5—2)

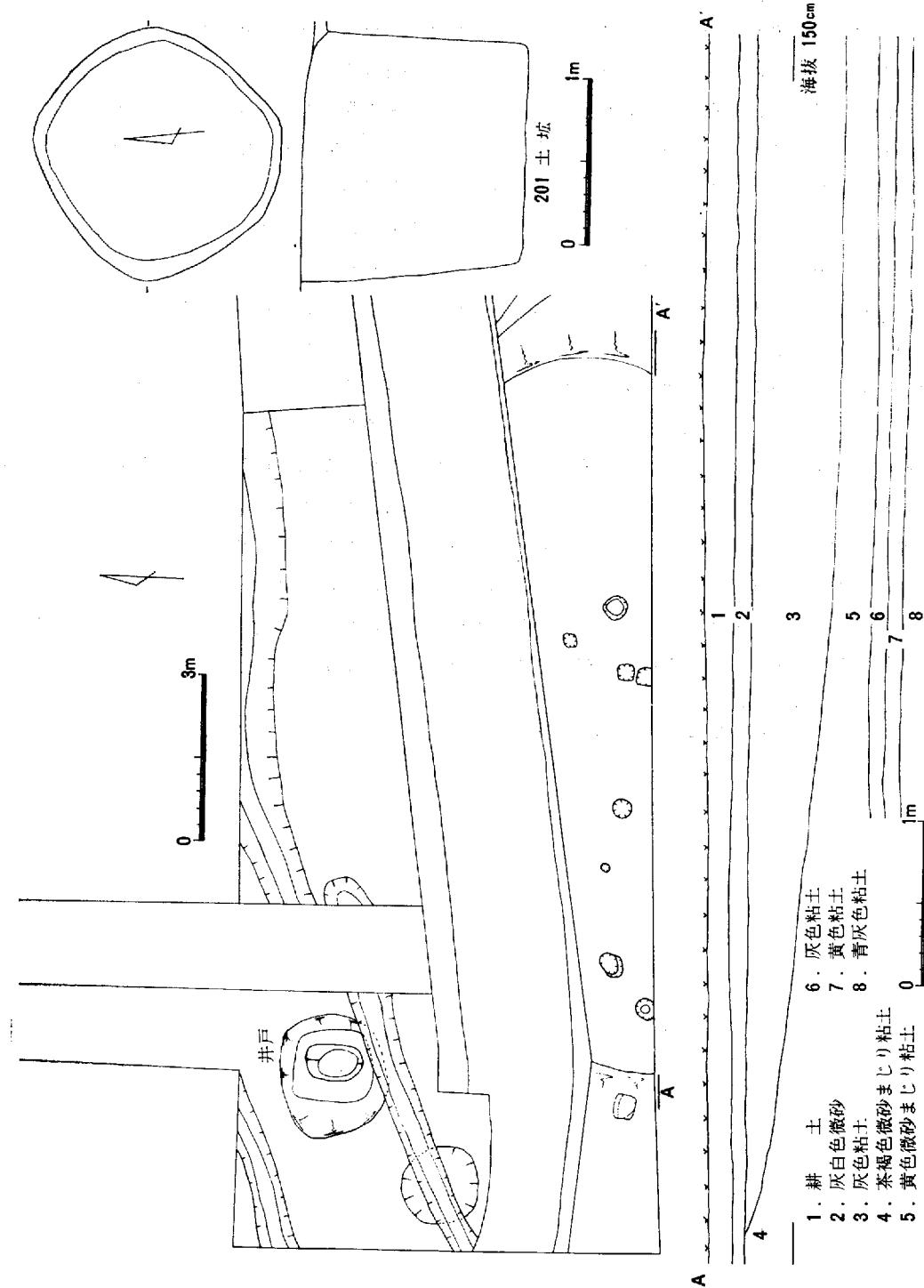
微高地が旧河道に落ち込む所に位置しており、現水田面より約60cm下層において検出した。上面での掘方は南北で1.8m東西は一部くずれており、約2mで、ほぼ円形のプランをしている。掘方の面から30cm、下部から南北1.4m、東西1.3mに狭くなり、垂直に掘り込まれている。最下部は湧水が多く確認出来なかったが推定で掘り方の面から約2.5mある。この掘こみの中に上、下、二段の構造で井戸材がはめこまれている。井戸の構造で単筒井筒、複筒井筒、累積井筒と分類されている(1)。これにあてはめればこの井戸は累積井筒に属すると思われる。つまり上段のものを井桁、下段が井筒にな

る。上段の井桁は腐蝕がひどく、残在状態はよくなく、残りのよいので高さ、40cmを計測できる。井筒よりやや広く取りかこむように剖抜材で合せかこまれていた。井桁と井筒の間には板状のものがはめこまれていた。下段の井筒の上端部は腐蝕しており、現在長が2.1mある。この井筒は長径約90cm大の巨木を半裁して、内をくりぬいたものを抱き合わせており西よりの剖抜材を東の剖抜材にはめこんでいる。半裁している剖抜材の上部は下部より広く、下部は、幅が狭くなかすぼみである。この合せている剖抜材を、北側の合せ目を下端から90cm、上端から40cmのところに上下、二段に孔をあけ5cm大の格材がはめこまれており動きを止めている。そして両井筒の下端部に孔があけられており、合せられた剖抜材をこの部分でも動かないように、しばりつけられたものと思われる。また、南側の中段では釘によって打ち合せられている。西側の剖抜材には、上段一部分に薄くひびわれしたところを、厚さ1.5cm、幅25cm、長さ90cmの板で12ヶ所に釘で打ちつけて補強をしている。そしてこの井筒の外側あわせ目部分に厚さ5cm、幅2.5cm、長さ約1.9mの板がはめこまれている。汚水の流入をふせいたものと思われる。この両外板は、上、下、に5cm大の孔があけられている。転用材と思われる。この補強材に接した両外側には動きどめに打ちこまれたと思われる杭がある。この井筒の東側の下端から上に1mの中ほどに6cmの円い孔があけられており、内側から孔に栓がしてあった。こうした井筒の外側の埋め土は上半分では直径が大きいので10cmぐらいの円礫や角礫を含む土砂で埋められている。下部は黒色の粘土質であった。最下部は砂利層であり井筒は砂利層の中に約30cmぐらいはいりこんでいた。なお井戸の材質は井桁、井筒、又補強板はクスであり、北側の合せ目の上、下二段の格材はモミと両側の合せ目の補強板はスギ材を使用している（註一2）。

註一(1) 山本博 「井戸の研究」

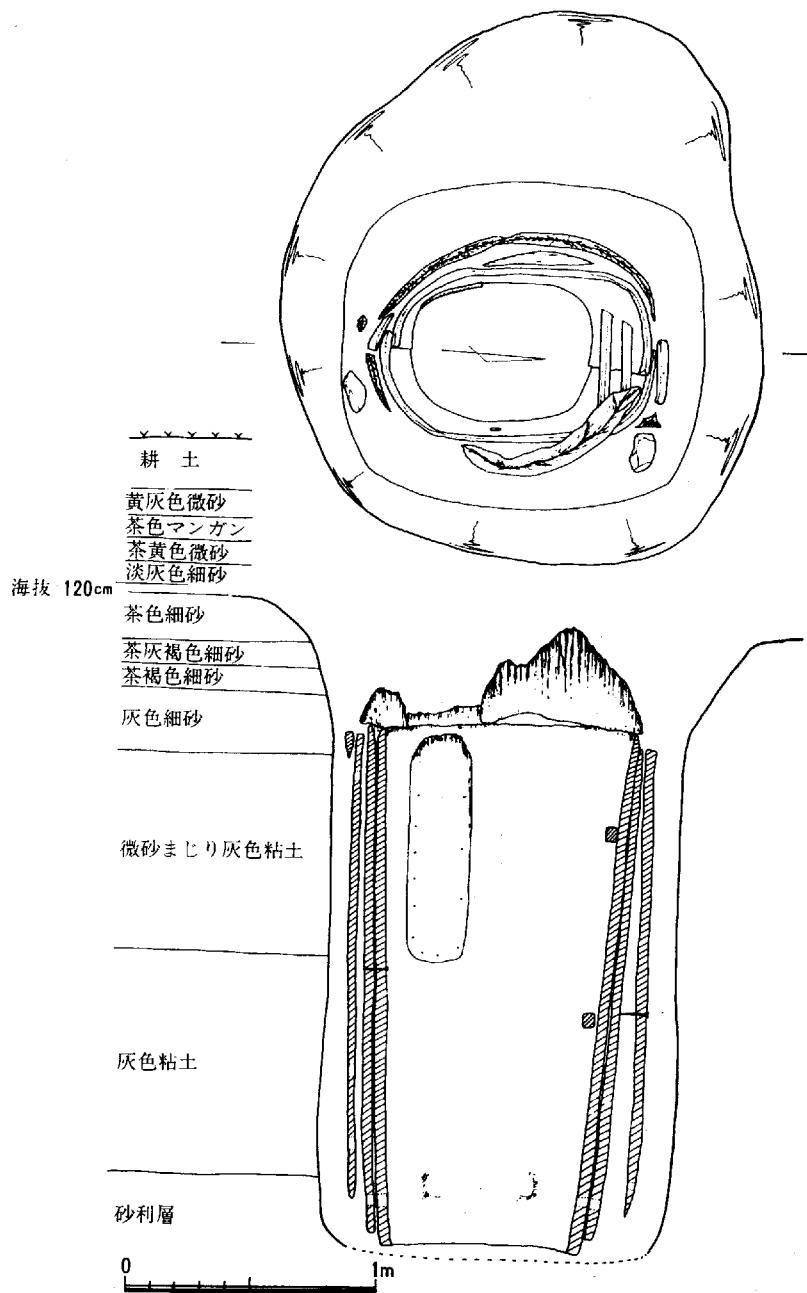
(2) 岡山大学農学部畔柳鎮 教授の鑑定

用入遺跡



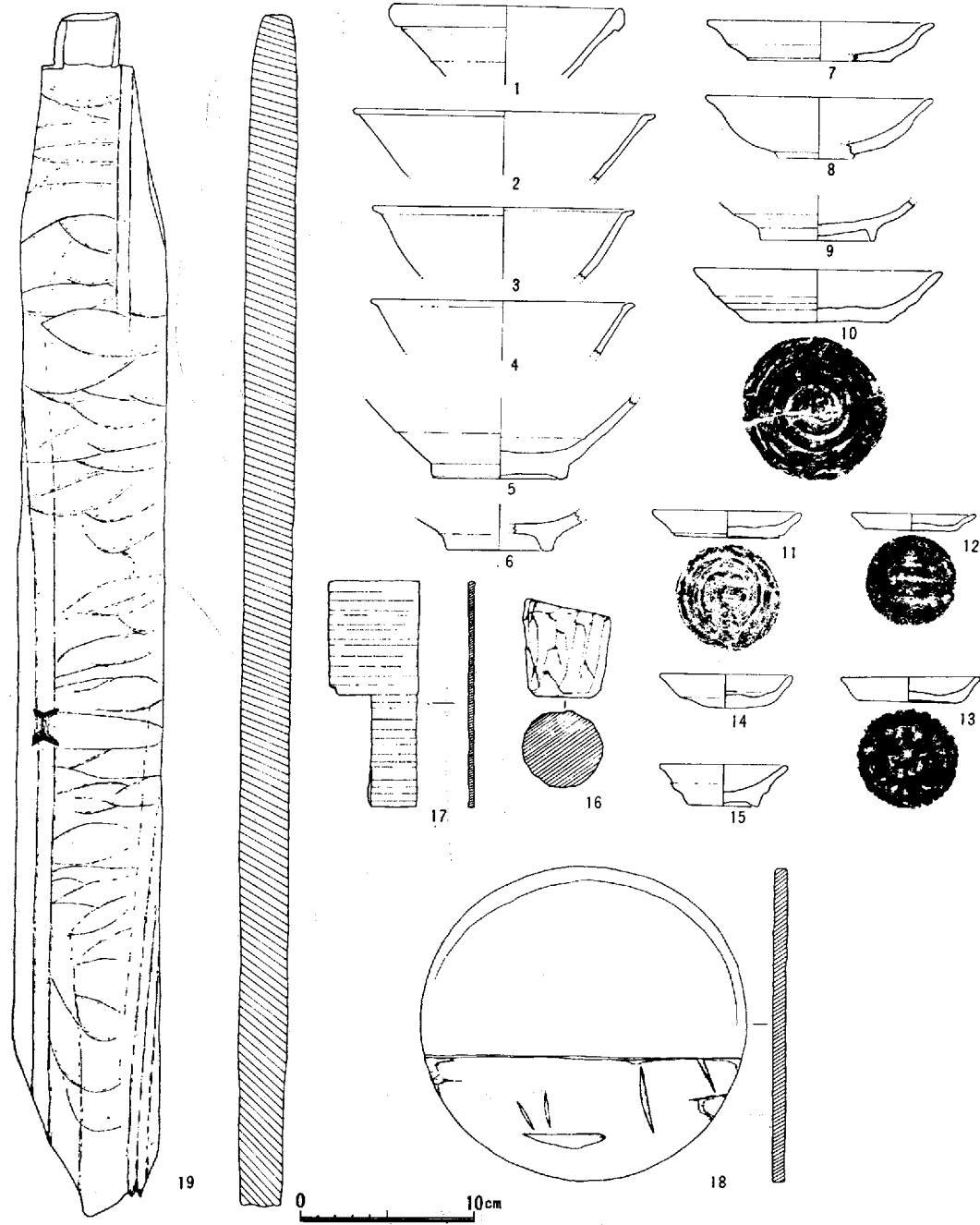
第32図 大道西II平面、断面図、201土壤実測図

川 入 遺 跡



第33図 井戸201平面、断面実測図

川入遺跡



第34図 井戸201出土遺物実測図(+)

出土遺物(第34図、図版9)

井戸内の遺物は土師器の小皿がほとんどで、他に小量の中国製の青白磁器と、木製品が出土した。土師器(7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15)は器形別でみると、椀(8, 9)と皿(7, 10, 11, 12, 13, 14, 15)である。椀の底部は、はり付の高台で、灰白色を呈するものである。皿は口径が7cmほどで高さは1cm～1.5cmの高台をはり付けたものがある。平底のものは底部下面に渦巻状にヘラ切痕があるものと板目がみられるものがある。

中国製の青白磁(1, 2, 3, 4, 5, 6)は碗の口縁部から胴部にかけてのものと、高台の部分のものである。口縁端部は外縁に断面三角形状になるものと、平になるものと、丸くおさめてあるものがある。高台のものは高台径が7.7cmと6cmのもので太く短い削り出の高台である。釉は1mm～1.6mmでうすく、内面については全て施されており、外面の胴部下半から高台部には施されていない。胎土は灰白色で緻密である。

木製品(16, 17, 18, 19)は4点出土した。(16)は栓で井筒の東側部分の中ほどに付けてあったものである。曲物類(17, 18)は曲物の側板(17)と思われるもので厚さ3mmのきめの細い板で、円く曲げるために約3mm～5mmの間隔で切り込みをいれている。(18)は、曲物の蓋あるいは底にあてられたと思われるものである。(19)は長さ70cm、幅8cm、厚さ2cmのもので両面、断面ともきれいに面取りしている。なお、この井戸の時期については、これらの出土遺物に負いたい。しかし土師器や青白磁器で時期を限定することはできない。土師器の皿類については、草戸千軒町遺跡などから出土しているものと同じものである(註一1)。また、青白磁器は、中国製で景德鎮窯のもので、いわゆる下手影青と呼ばれているもので南宋～元頃と考えられるものである(註一2)。したがって、これらのことを通して推定すると、井戸の時期は鎌倉時代と思われる。

註一(1) 草戸千軒町遺跡発掘調査概報(1972年度)

(2) 村上正名氏の御教示による。

2) 土 壤(第32図)

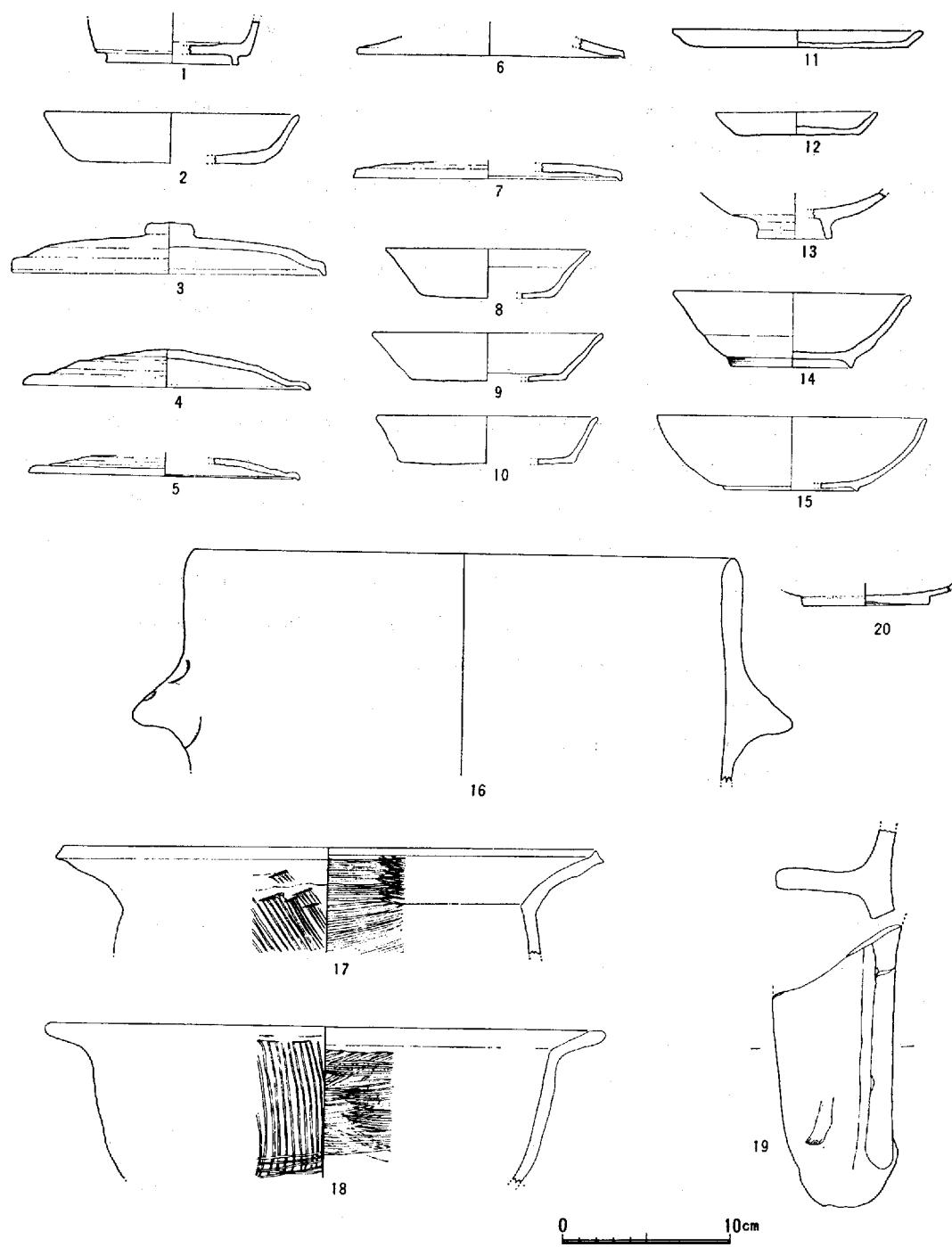
井戸より1.5m西よりに位置している。掘り方は、ほぼ円形をしており幅1.4m、深さは1.3mある。垂直に掘り込まれており、底面は平らである。埋土の状態は、上部30cm位は特に多くの灰が含まれていた。下部にもうすぐ互層になっており、下部では細砂がうすく堆積していた。内面には幅12cmぐらい先はU字形をした鋤先の痕跡らしいものが全面にみられる。出土遺物はわずかの土師器の小破片が含まれていたにすぎない。おそらく井戸と同時期と思われる。

3) 溝状遺構、柱穴群

溝状遺構は東西方向に井戸、土壙を切り込んで検出である。ほとんど上部は削られてなく、わずかの底部分で、幅約50cm、深さが約10cmで溝の中にはほとんど遺物はない。近世期のものと思われる。柱穴は微高地が東側にゆるやかに落ち込んでいく中で小数検出した。

第2節 遺 物

川 入 遺 跡



第35図 大道西II調査区包含層内出土遺物実測図 (4)

1) 包含層内出土遺物（第35図）

包含層の出土遺物は須恵器では杯の高台を有するもの（1）とそうでないもの（2）そして、杯の蓋（3，4，5，6，7）などがある。土師器では、杯（8，9，10）で底部は平たく薄手のものである。皿（11，12）は口径が15cm大のものと、9cmのものである。碗（17，18）ははり付け高台で黃白色を呈するものである。鍋と思われ、瓦質のもので外面には荒い刷毛目があり、内面は横に、粗く刷毛目が入れてある。（16）は甌で口径は32cmある。（19）は籠の一部と思われる。他に緑釉（20）うすい緑色釉がみられるものが、3片出土した。軟質のもので皿の底部である。

（枝川）

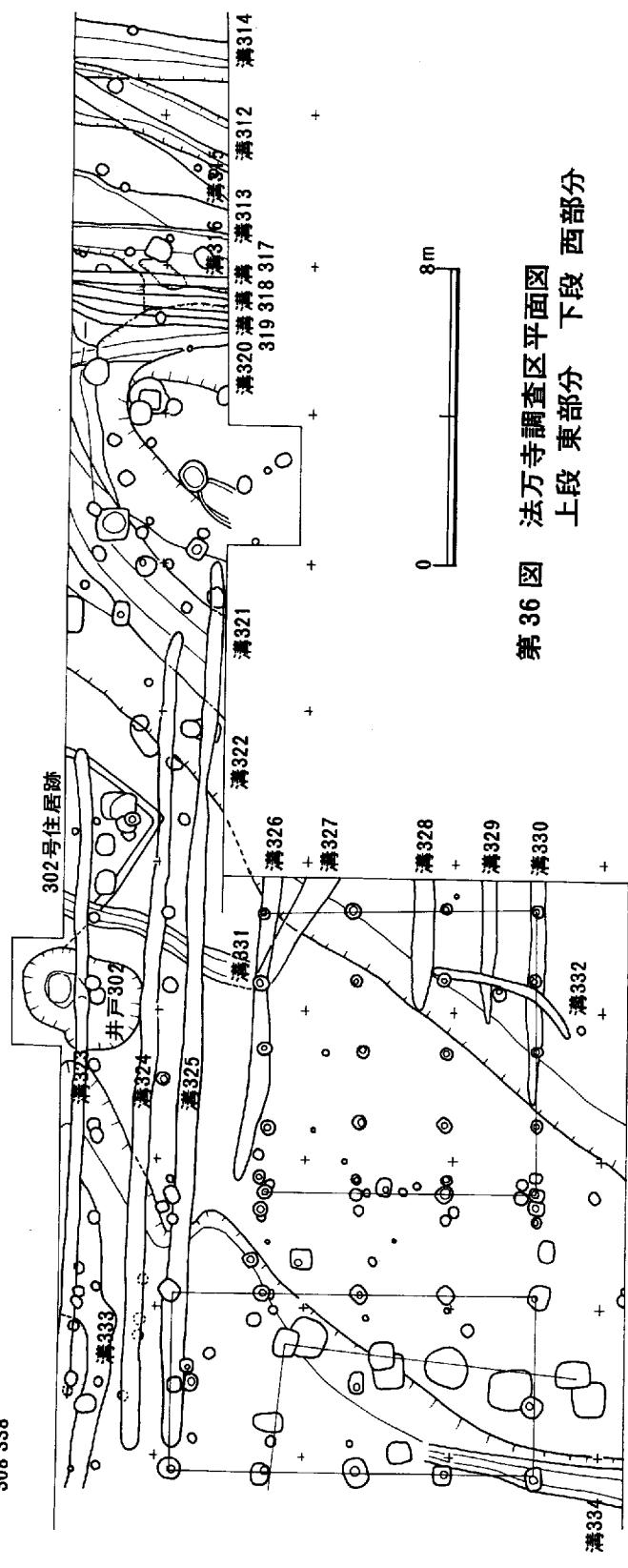
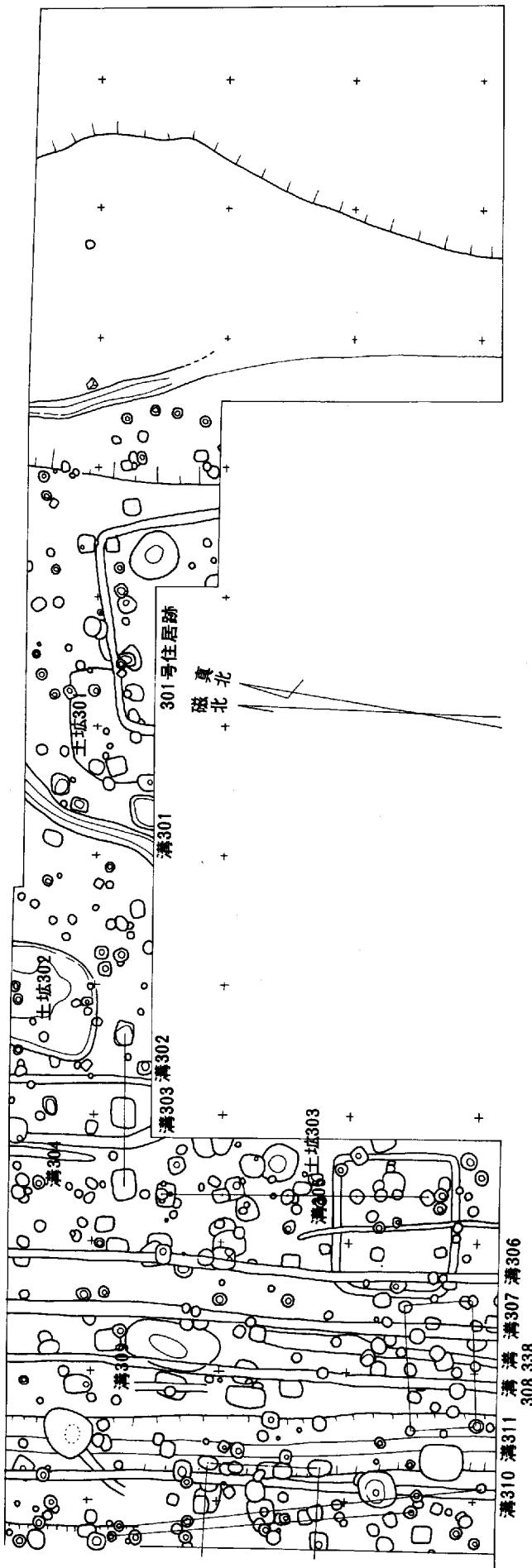
第7章 法万寺調査区

第1節 概要

法万寺調査区は旧河道の西側堤防とその西側の後背湿地にあたる。東側傾斜面は旧河道の川岸にあたり高さ約1mの傾斜面のうちやや平坦面があって再び傾斜となり川に至る。上層の埋土の状況は川の中央に向って傾斜していて奈良時代以降は中間の平坦部分がほとんど残っていないかしたものと推定される。基盤の土層は黄褐色微砂まじり粘土で、その下層はやや水平な粘土層と細砂層などの堆積によって形成されている。この土層の中には植物質のものを含んでいるが、人工遺物は検出していない。黄褐色粘土層の上に酸化されて上部が黄色を呈する灰色粘土層が存在する。この土層中には弥生時代前期の遺物のみが含まれている。調査区域の北側では包含層がなくなり南で厚く広がっている。西側は保存区域になるため高い部分については明らかでない。この土層は表面は酸化して黄褐色を呈することから一見基盤層とみられる。この上層には王泊6層期の遺物を含む包含層が堆積しており、細かく観察するといくつかの土層に分けられる。しかし含まれている土器は王泊6層と呼称されている時期のものに属している。中には弥生時代中期後半の土器片が含まれているが、単純な包含層を形成せず、王泊6層期の包含層中に含まれる。この土層には小型の甕が完形品で検出され、大きな石も1個ある。川の流れに面した傾斜面までの間にある平坦面は中央部がやや凹んでいる。上段の傾斜面の裾部に溝状の凹地があり、あるいは水田として利用された可能性もある。上部の土層は細砂を主体とする土層が重なり、須恵器、陶質土器を含んでいて歴史時代の包含層である。川の流れに面した傾斜面は急傾斜で上部は酸化し、黄褐色を呈している。堆積の土層は黒色粘土層を形成し、7世紀代の須恵器を含んでいて、調査地域内ではそれ以前の包含層は残っていない。

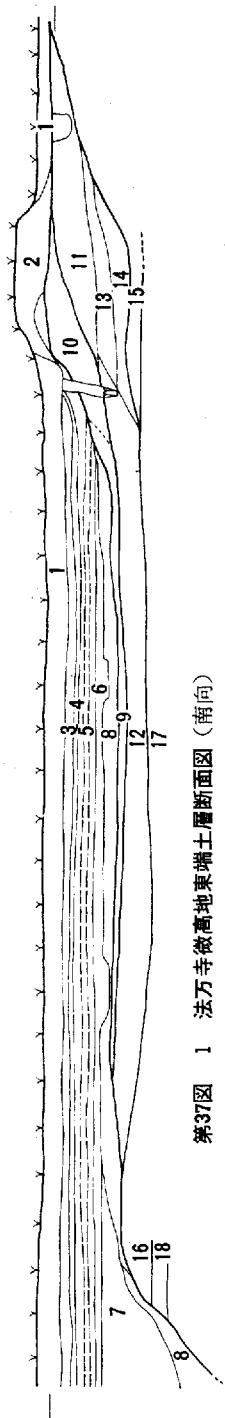
微高地の上面は聞き取り調査によると全域にわたって約30cm地下げされている。したがって、耕土を除去するだけで遺構が全面的に検出される。柱穴が多数検出され、それらの中には奈良、平安時代のものもみとめられる。この柱穴は東西又は南北方向に並んでいて建物にまとめられるものも多い。やや大型の柱穴は微高地の東寄りで東西方向に認められ、西端近くでは南北方向に認められるが、完全にまとめることができない。平安時代の建物は中央部の橋脚位置（第2橋脚）で東西方向に1間×2間の建物1棟、建てかえの認められる南北方向3間以上の建物2棟の一部、それに西端部において2間×4間の建物1棟、4間×5間の建物1棟を検出している。以上の外にまとめられない柱穴も多数ある。柱穴の埋土と上面の包含層中から綠釉、灰釉、須恵器、土師器の破片を多数検出している。また歴史時代の柱穴の1つから大型土錐を4個検出している。7世紀から8世紀の井戸も西端近くで検出されている。7世紀代前半の井戸が7世紀後半に北側へ掘りなおされたもので、井戸枠も残り埋土中の遺物も多い。

堅穴式住居址は東端近くで一軒検出されている。大部分が保存区域に入るので全貌は明らかでないが、古墳時代前期の方形堅穴住居址である。この住居の埋没後、上面から井戸も掘られている。これも埋土中の土器から古墳後代前期のものである。西端に近い位置にも古墳時代前期の方形堅穴式住居址の一部が側道敷部分で検出されている。その他に第2橋脚位置に方形堅穴住居址の壁体、溝のみを検

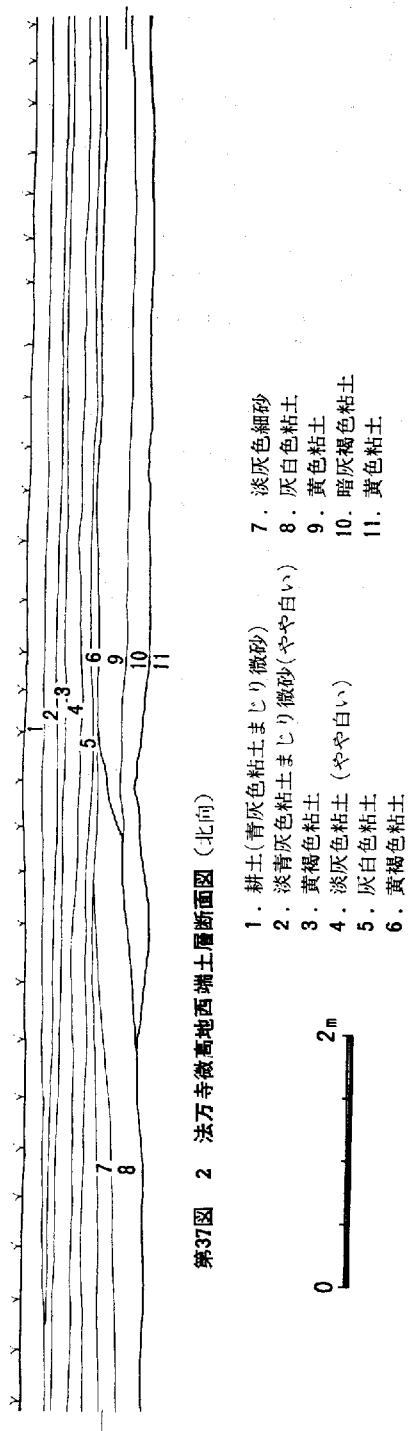


第36図 法万寺調査区平面図

用入遺跡



1. 耕 土.
2. 青灰色微砂
3. 灰白色微砂
4. 黄褐色微砂まじり粘土
5. 淡灰色微砂まじり粘土
6. やや白っぽい灰色微砂まじり粘土
7. 暗青灰色粘土まじり細砂
8. 黒色粘土まじり細砂
9. 灰色粘土
10. 暗灰色微砂
11. 黄灰色微砂
12. 灰色粘土
13. 暗褐色微砂まじり粘土
14. 暗灰色粘土
15. 淡黄褐微砂
16. 黄色微砂まじり粘土
17. 暗灰色粘土



1. 耕土(青灰色粘土まじり微砂)
2. 淡青灰色粘土まじり微砂(やや白い)
3. 黄褐色粘土
4. 淡灰色粘土(やや白い)
5. 灰白色粘土
6. 黄褐色粘土
7. 淡灰色細砂
8. 灰白色粘土
9. 黄色粘土
10. 暗灰褐色粘土
11. 黄色粘土

出しているものもある。弥生時代の土壙もみられる。ほぼ方形を呈するものは中央部より東の側道敷で2個検出されている。いずれも、弥生時代中期後半の土器を含んでいる。特に西の方形土壙には灰と土器を多量に含んでいる。楕円形の土壙も1個検出されたが、方形土壙と同時期のものである。

溝は全域にわたって認められる。中央部は掘りあげてしまうと、まったく溝しか残らない広い部分ができる。時期的には弥生時代中期後半以降、その後も掘りなおされて重なったものであるが大型の用水路と推測される。古墳時代前期のものでは幅6mにもなるものがあり、分水の溝もみられる。もっとも溝が集中している部分は南を保存区域としているのでわずかに側道敷部分を掘りあげたものであり、保存区域において将来検討が加えられることであろう。溝の中には大量の遺物が含まれている。特に土器を多量に含み年代を検討するうえに貴重である。古墳時代前期の溝の埋土中から東日本の弥生式土器片を検出している。また溝の埋土の上層において馬骨を1体分以上検出している。南北方向と東西方向に並ぶ細い溝が多数みられるが、平安時代の建物がその埋土の上から建てられており埋土中の遺物からも奈良時代のものらしい。

以上の外に第2橋脚位置において土壙中に埋葬された1体の人骨を検出している。埋土中の遺物は平安時代頃のものを含んでいる。しかし調査区域中、他には埋葬遺構は認められていない。

西側傾斜面は旧河道の反対側に位置し、後背湿地になる。トレンチ調査によると粘土の堆積層が深くまで続き、沼状になっていた時期の存在を示している。弥生時代の基盤層の続きは微高地上面幅で約80mの部分から傾斜している。この部分も東側と同様に約1m傾斜してから平坦面が存在する。この平坦部分は側道敷部分では約40m続いたのち深くなつて沼状の地形にいたる。遺物は傾斜面において特に多く検出される。この部分では弥生時代の遺物は少なく、王泊6層期のものが多い。下層は水平ではなくて、調査区域の北側には溝状の凹地が存在する。したがって王泊6層期における水田等に利用されていた可能性を推測することができる。まだ全部の結果を得ていないが、今後土壤分析等によってこれらのこととは検討されるであろう。上位の土層は細砂を主体とし、古墳時代の須恵器、土師器を含んでいる。

(正岡)

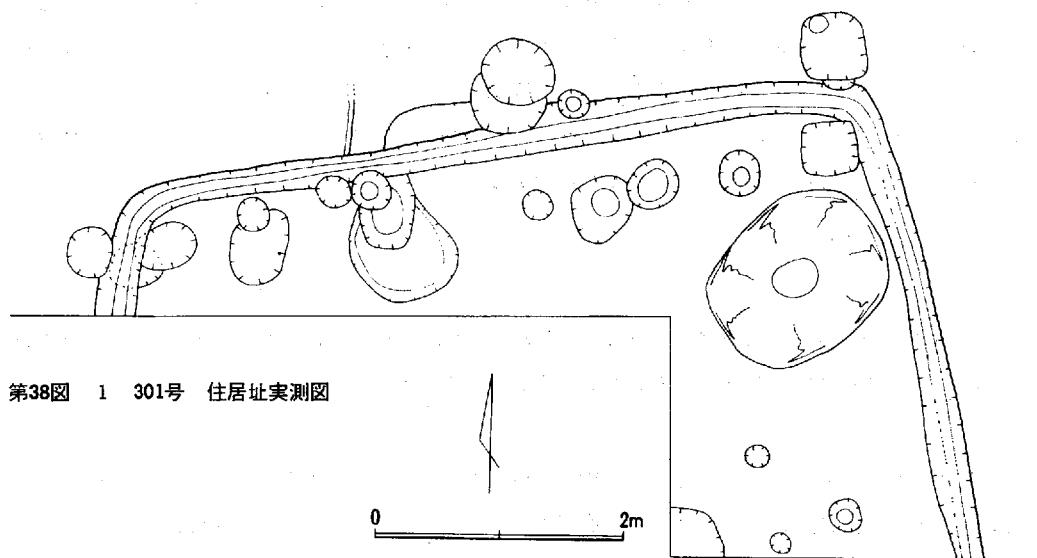
第2節 遺構

1) 積穴式住居址

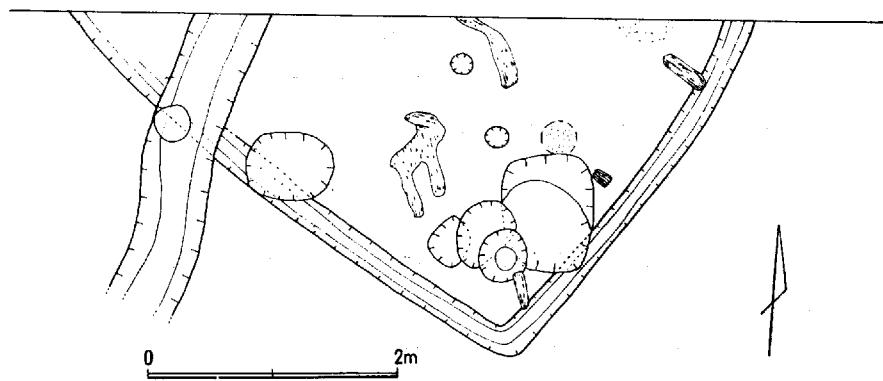
301号住居址(第38図1)

法万寺の微高地の東端に位置している。全体の約 $\frac{1}{3}$ を調査した。ほとんど削平されており、わずかに残る壁体の溝などから推察すれば方形の住居址と思われる。長径は6.4mあり溝の幅は25cm、深さ10cmである。住居址の中の東よりでは井戸がこの住居址を切込んでいる。出土遺物はわずか床面の埋土中に小量出土した。

川 入 遺 跡



第38図 1 301号 住居址実測図



第38図 2 302号 住居址実測図

302号住居址（第38図2）

法万寺の微高地の西端よりで約 $\frac{1}{2}$ の検出である。他は用地外になる溝での推察では方形の住居址と思われる。炉あとと思われる焼土が南よりにある。また、床面には炭と灰が広がっている。出土遺物はほとんどなかった。他に台地のほぼ中央の南よりで確認したのであるが溝だけの検出で、溝の状態からみると方形の住居址と思われるもの、そしてほとんど削平されて検出できないが、焼土だけ確認しており、おそらく住居址の炉あとと思われるものである。

(枝川)

2) 建物

建物 I

$1 \times 0.7m$ の掘り方をもつ、2間の柱穴列が一列検出される。柱間は約 $2.4m$ 、方向はN $83^{\circ}E$ である。柱痕は不明。柱穴は南にのびると思われる。奈良時代の建物と考えられる。

建物 II

一辺約 $1m$ の方形の掘り方をもつ柱間が、約 $2.5m$ の建物である。柱痕の直径は約 $30cm$ であり、下部に柱痕が存在する。柱穴列の方向はN $4^{\circ}E$ 度である。東端の一列を確認する。西側は削平されていると考えられる。柱穴は重複しており、少なくとも一回の建て直しが行われていると考えられる。柱穴内の土器から奈良時代の建物と考えられる。

第2・3橋脚平安時代建物（第39図）

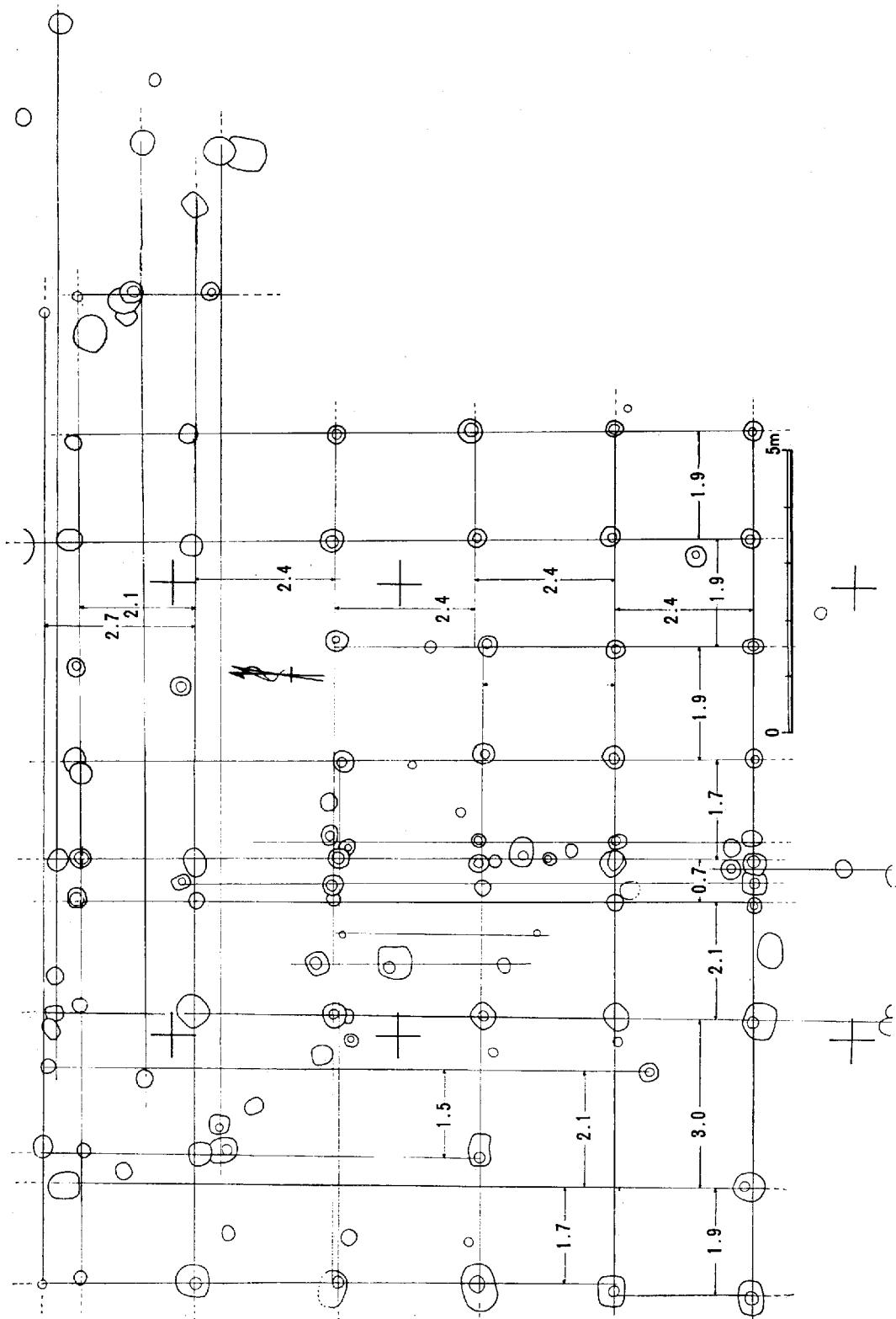
<第3橋脚建物>

梁行に $190cm$ の柱間が五つ（A～B列・D～H列）、約 $280cm$ の柱間が三つ（B～D列）、 $250cm$ の柱間が一つ（H～I列）確認される。8×6間ないし8間以上×6間以上の遺物になると考えなれる方向N $3^{\circ}W$ の柱穴列である。柱穴列はA・E・III・IV列に若干の不一致が認められ、D列の柱穴が重複することから、二棟の建物の重複とも考えられる。柱穴は褐色微砂層を掘り込んで作られている。掘り方は径が $40cm$ 前後（一部に $60cm$ 前後のものも認められる。）の円形であり、柱痕は直径が $13\sim 15cm$ 前後、深さはいずれも $20\sim 30cm$ である。

<第2橋脚建物>

何棟かの建物が重複していると考えられるが、建物としてのまとまりは確認し得ない。しかし、第3橋脚における建物と同方向で柱穴が一定のまとまりを示すことから、第3橋脚建物と同様な構造をもつ建物が数棟、重複して存在すると考えられる。柱穴は第3橋脚柱穴と同じく、黄褐色微砂層を掘り込んで作られており、その形状も同様である。柱穴内には根石と思われる石が入るものがあり、また、縁釉陶器が出土する柱穴も存在する。

(大谷)



第39図 第3 橋脚建物実測図

3) 井戸

井戸301(第40, 41図・図版9—1)

長径 150cm, 短径 115cm の橢円形を呈する深さ 170cm の素掘りの井戸であり、住居址 301 の埋土を切り込んで作られる。上面より、30cm 程の所で井戸枠痕跡が検出される。圧力により変形した様子を示す。遺物は上面より 30cm の所に落ち込む形で甕 3 個体分、底部において甕破片、高杯破片、桃の実が

出土する(第41図)。

井戸302—A

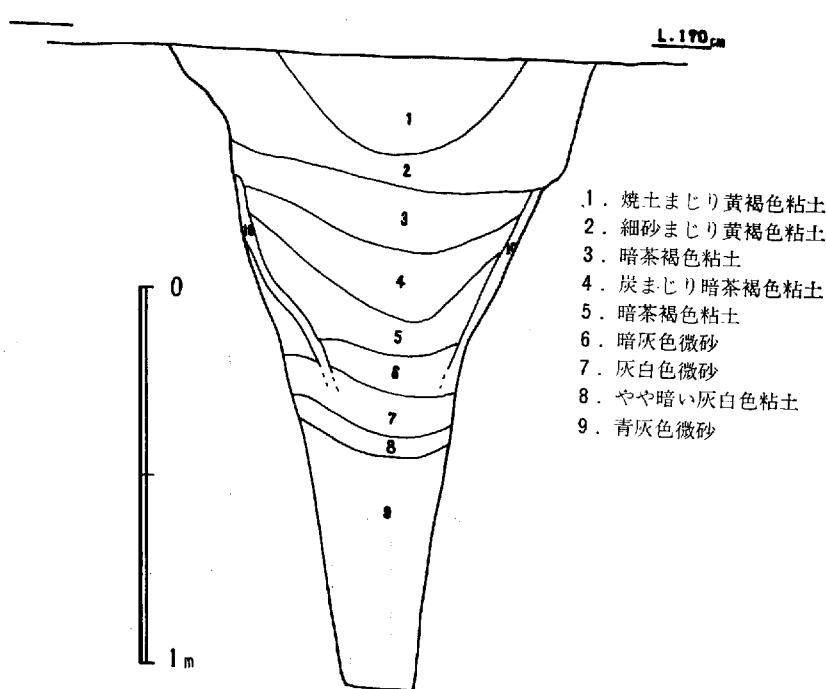
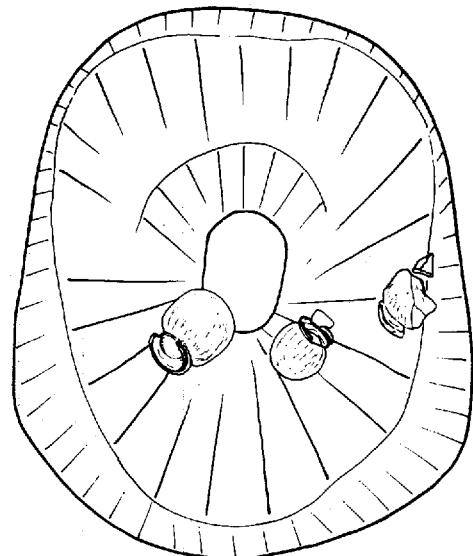
(第42, 43図)

上面の径、2.4m, 底部の径、0.4m の深さ、1.8m の素掘り井戸である。井戸枠などの痕跡は確認できない。底近くより、甕・平瓶が出土する。出土土器より 7 世紀前半～中葉の頃と考える。

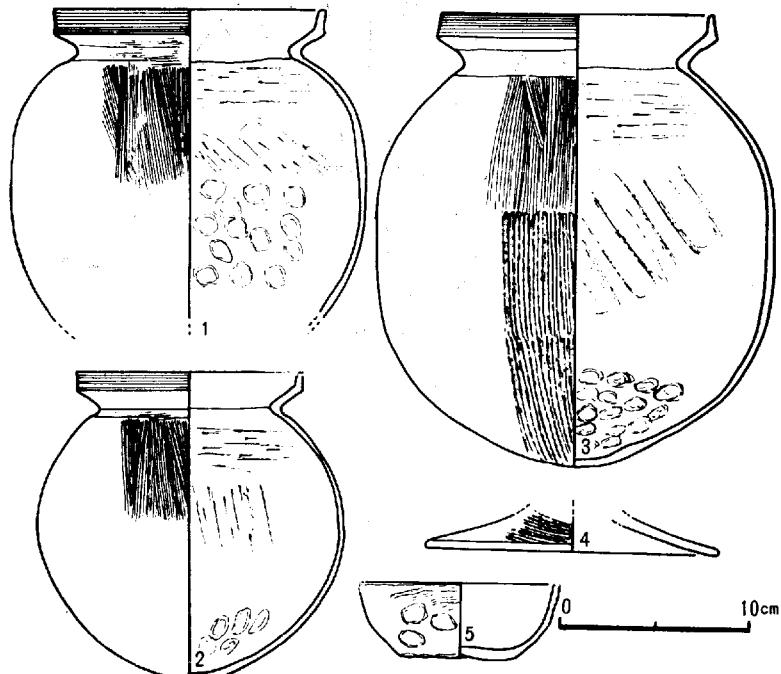
井戸302—B

(第43図)

上面の径、2.2m, 底部、の径 0.6m, 深さ、2.3m の掘り方は井戸枠の下方約 60cm まで達しており、底中央部分には直徑約 10cm の黒色粘土層の落ち込みが認められる。砂層に竹筒等を差し込んだ痕跡と考えられる。井戸枠はスギを半裁し、くり抜いたものを使用し、また、上部には四本柱が残る。南側の井戸枠に

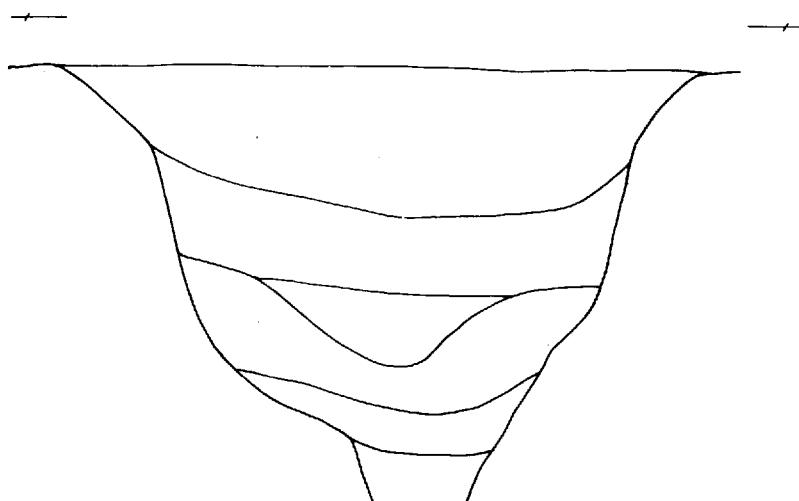


第40図 井戸301平面、断面図



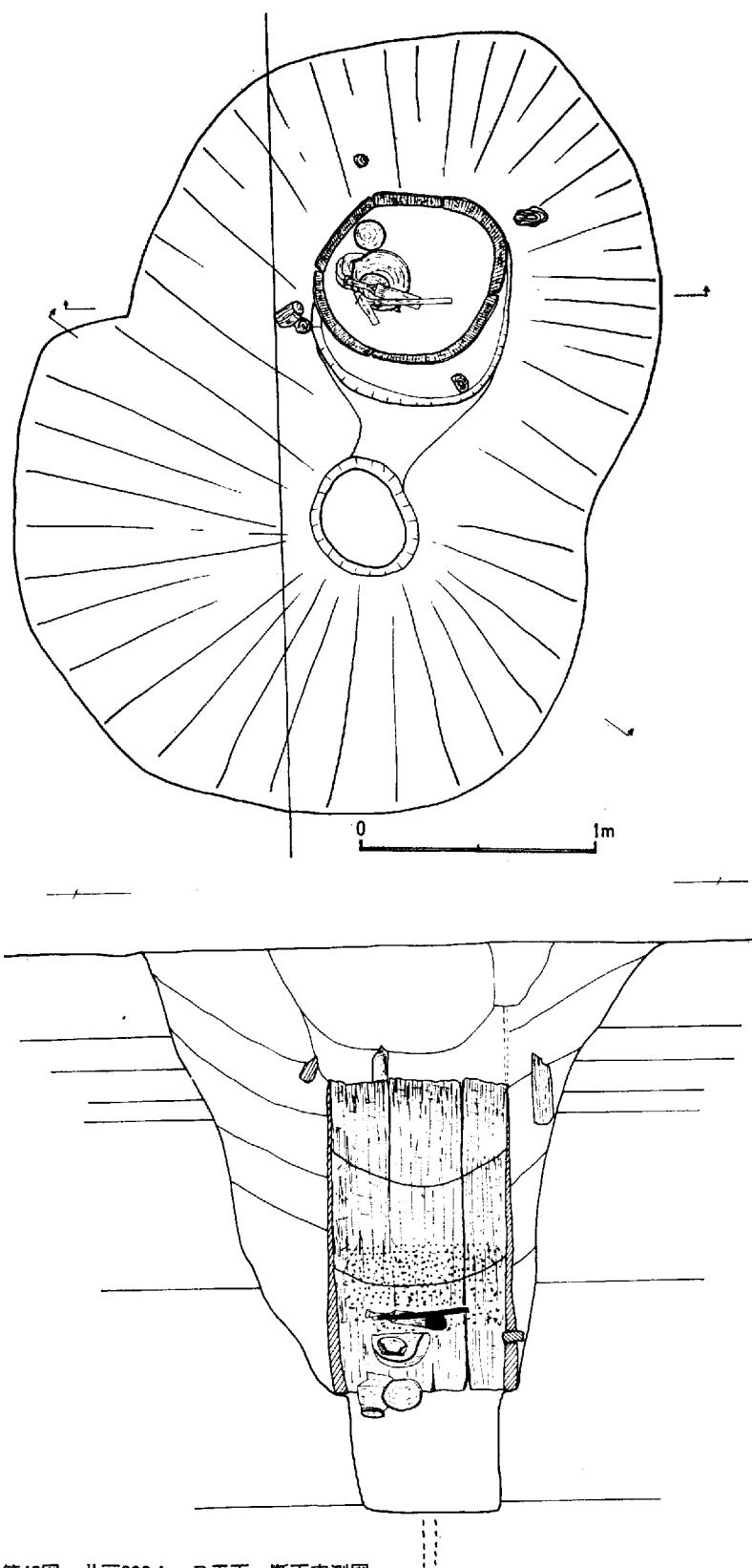
第41図 井戸301出土土器実測図

は底より約20cmの所に約7×7cmの孔が両側にあげられる。この孔は横木がはめ込まれている。井戸枠が沈むのを防ぐためであろうか？しかし、北側の井戸枠には孔が存在しない。井戸枠内下層よりは斧の把、きぬた、片口鉢、壺、杯、甕等が出土する。また、3層、4層の境の点線部分よりは木の葉、千成ビヨウタン、ハイ貝、カキ等が出土する。出土土器から7世紀末と考えられる。



第42図 井戸302A断面図

川入遺跡



第43図 井戸302A・B平面、断面実測図

川入遺跡

<井戸302—A出土土器> (第44図1, 2)

1は淡い灰色を呈し、やや軟質に焼成された平瓶である。胴部はヘラ削りがなされる。2は灰色を呈する。堅微な焼きの跡である。内部に孔を穿った時の土塊が残る。

<井戸302上層出土土器> (第44図3~11)

上層より出土したものであり、302—Aと302—Bとの両時期のものが混在する。3~7・10が須恵器、8・9・11が土師器である。7は灯明皿として使用されており、灯芯痕が残る。8・9は内外面とも丹塗がなされる。11は淡褐色を呈する堅緻な焼成のものであり、脚は8面削りである。

<井戸302—B, 井戸枠内上層出土土器> (第44図12~28)

12・13・15・20が須恵器、14・21・28が土師器である。12は蓋と考えられる。暗灰色を呈する堅緻な焼成のものである。高杯は長脚のもの(17・18)と短脚のもの(19・20)とが認められる。共に脚部末端に屈曲をもつ。14は褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を含む、やや軟質に焼成されたものである。器形は不明。21は内外面に丹塗がなされる。22・23は淡褐色を呈し、軟質に焼成された高杯脚である。脚部に面取りが認められる。24~28は堅緻な焼成の甕である。共に口縁部がわずかに屈曲する特徴をもつ。

<井戸302—B 井戸枠内最下層出土土器> (第45図1~7)

1~4が須恵器であり、5~7は土師器である。1~3は共に暗茶褐色を呈し、硬質に焼成されているがその作りは雑である。3には高台がつく。4は暗灰色を呈し堅緻な焼成の壺である。高台はその用を足していない。6は茶褐色を呈し、やや軟質に焼成されている。胴部下にはヘラ削りがなされ、内外面とも丹塗りがなされる。5は6に伴う蓋と考えられる。胎土・焼成とも6と同様である。内外面ともヘラ磨きがなされ、内面には二段の螺旋状暗文が認められる。7は堅緻な焼成の甕である。胴部に刷毛整形がなされ、頸部は刷毛整形の後ナデ整形がなされる。

<井戸302—B 最下層出土木器> (第46図1, 2)

1は斧の柄と考えられる。アベマキの枝の部分を使用したものであり、柄の部分は木の皮が残存しており、加工はなされていない。

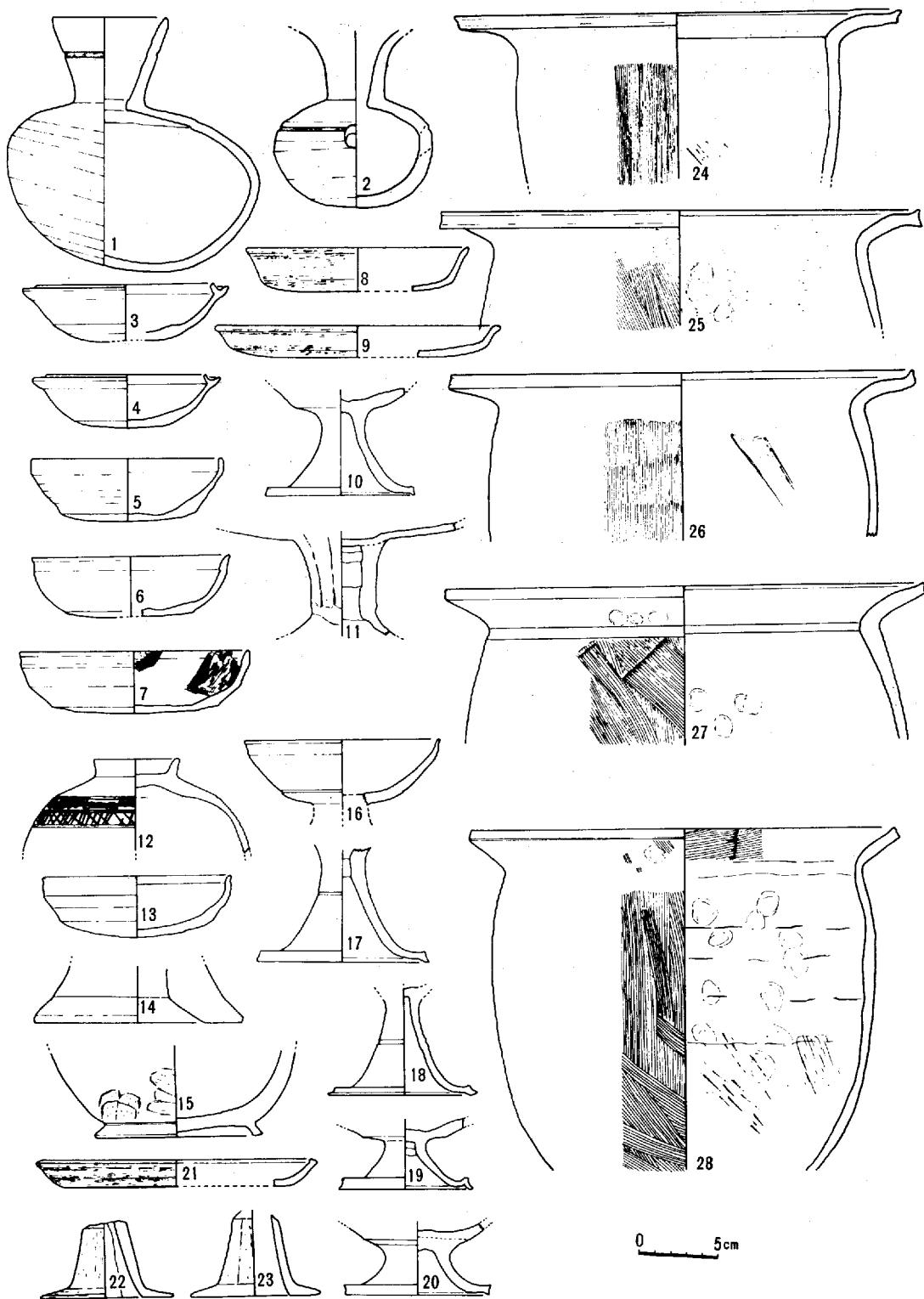
刃の付く部分には摩滅等ではなく、加工した跡が明瞭に残り、刃を付けた痕跡は認められない。2はアラカシを用いたきぬたである。斧の柄と同様に加工の跡が明瞭に残り、使用痕は認められない。

(大谷)

4) 土 壤

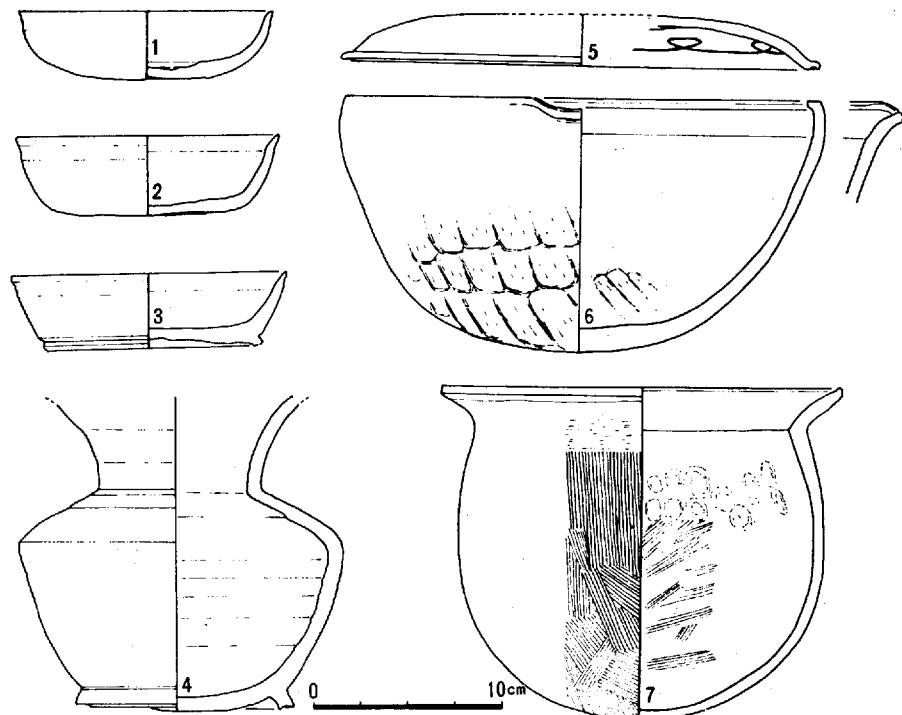
土 壤 301 301号住居址によって南側を切られている。形は方形で南北2.7m以上、東西3.6mである。地下げが行われているため、ほとんど残っていないが、何ヶ所かに燒土がみられる。埋土に含まれている土器は少量であるが、弥生時代中期後半の様相を呈する。これらは土壙302のものとほぼ同じである。小型の堅穴住居址の可能性も考えられるが決め手がない。

川入遺跡

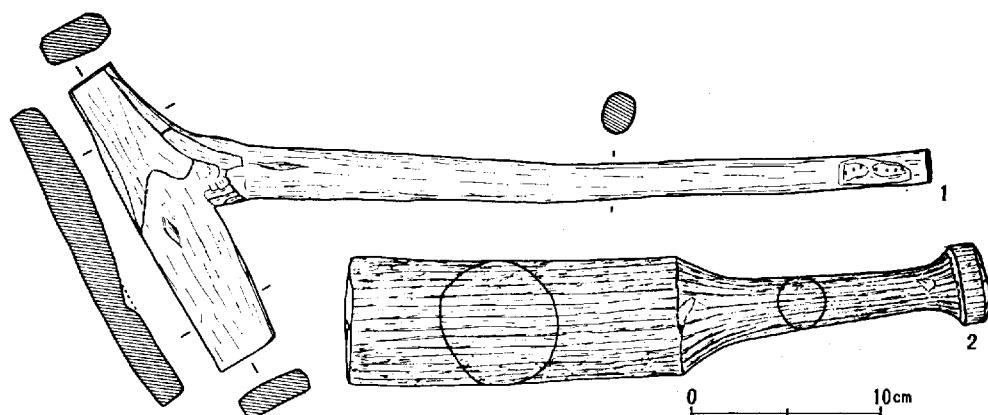


第44図 井戸302出土遺物実測図(上)

川入遺跡



第45図 井戸302B、下層出土土器実測図(+)



第46図 井戸302B出土木器実測図

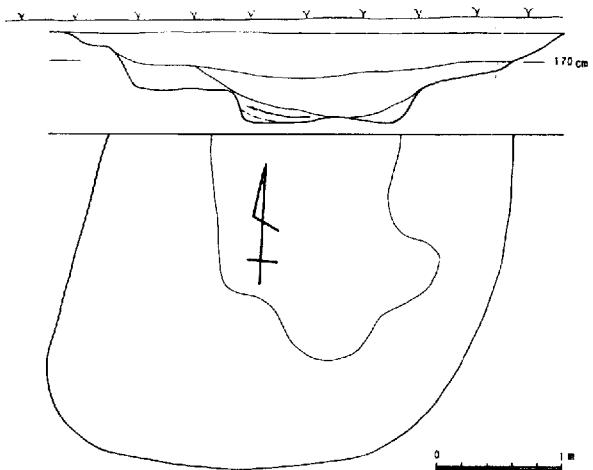
土 壤 302 微高地の中央よりやや東に寄った側道敷の北寄りに位置する。形はほぼ方形を呈し、西南部が張り出している。北側は用地外になっている。規模は東西3.25m, 南北2.6m以上, 深さ70cmである。中央部は一段低くなっている。暗褐色粘土で埋没し、焼土、灰、土器片を多量に含んでいる。最下層の端部には黄色粘土のブロックがあり炭も含まれている。したがって灰と土器片は破棄されたものであろう。

埋土中の遺物には弥生時代前期の土器片も少量含まれているが、ほとんど弥生時代中期の土器片である。サスカイトの破片も多いが、石器は含まれていない。土器の器種には、壺、甕、高杯、鉢がある。壺と甕の口縁端部がやや肥厚し、凹線文を施したものもある。底部は平底になるものとあげ底になるものとがみられる。外面の整形は胴部上半に縦の刷毛目を施し、胴部下半は縦のヘラ磨きが施されている。内面は胴部下半にヘラ削りが施されている。高杯は杯部が漏斗状を呈するものと端部が折れ曲って浅い鉢形のものがある。口縁端部が肥厚し、上面に凹線のみられるものもある。器壁がうすく、折れ曲った外面に凹線文の施されたものがみられる。杯部が橢形になるものの破片も1点ある。脚部は裾がゆるやかにひろがり端部は肥厚して立ちあがりのみられるものもある。三角形の透を施したものもある。以上の様相はいわゆる前山Ⅱ式に先行する要素で雄町4類(註-①)に類するが高杯や甕の口縁部などが変化していることから区別される。

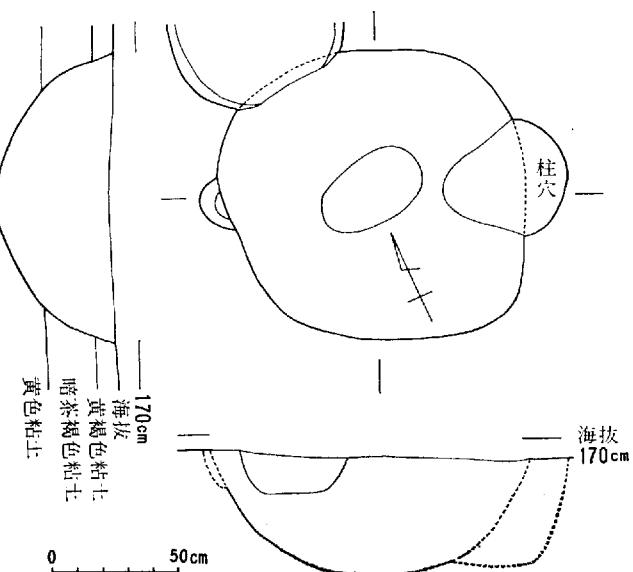
土 壈 303 第2橋脚位置の東端近くに位置している。形はほぼ円形で南北115cm, 東西120cm, 深さ50cmである。埋土は灰褐色粘土で若干の土器片を含んでいる。器種は甕、高杯がある。器形の特徴は土壤2に含まれている土器と同様である、同時期のものである。

(正岡)

註 (1) 岡山県教育委員会「雄町遺跡」
『埋蔵文化財調査報告書』1972. 3

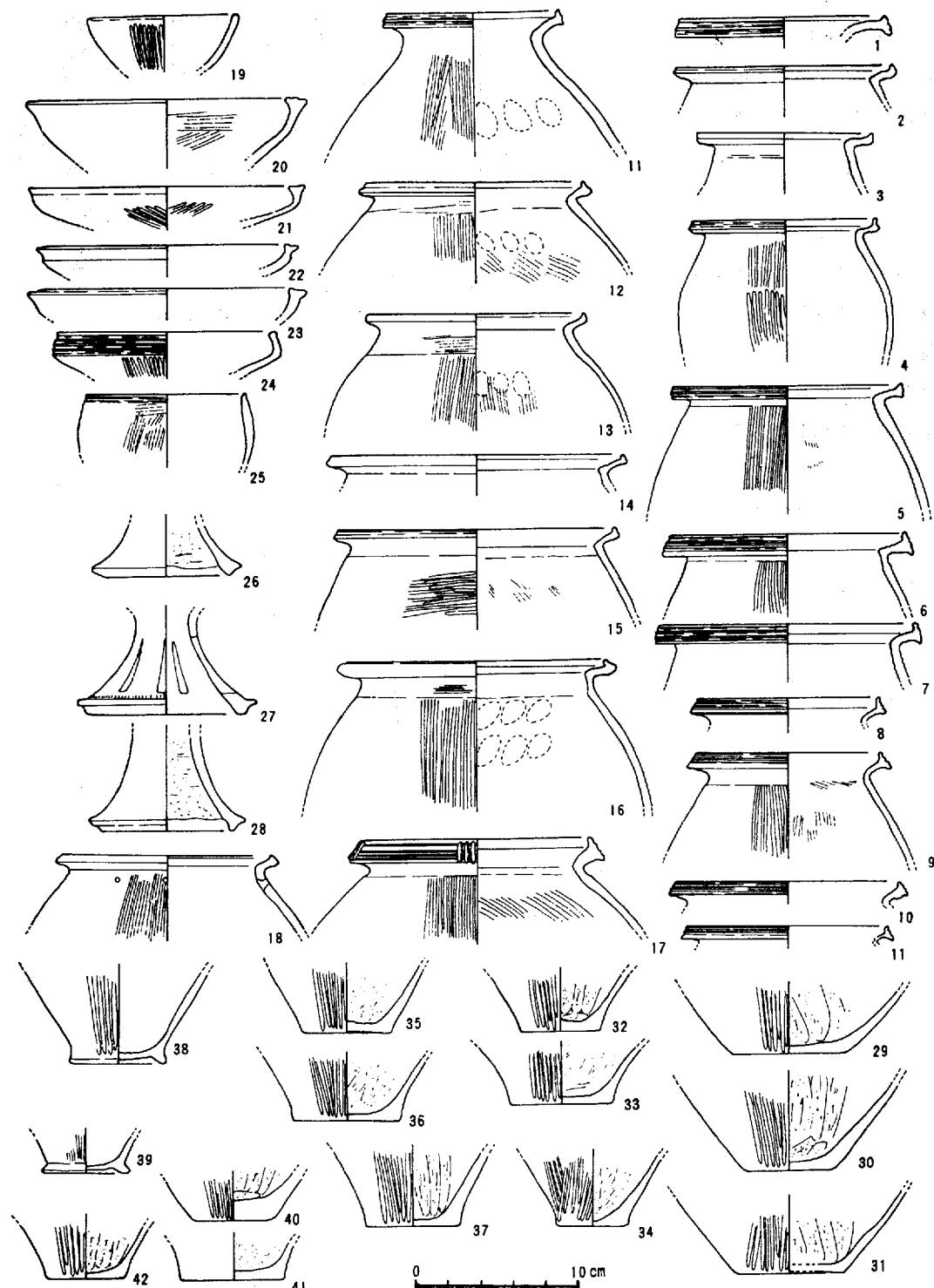


第47図 土 壈 302 実測図



第49図 土 壈 303 実測図

川入遺跡



第48図 土壙302出土土器実測図

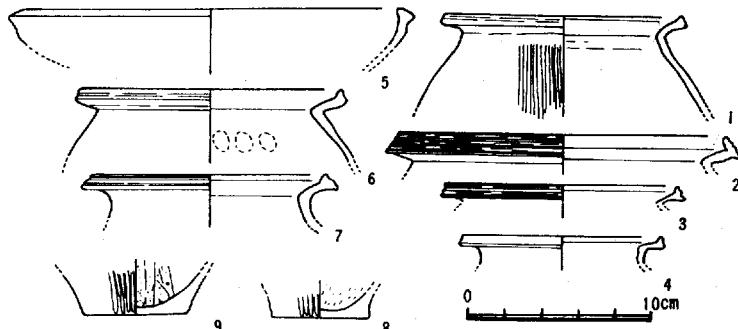
5) 墓 塚 (第51図)

人骨が検出された墓塚は、第2橋脚位置の西北寄りに位置している。地下げによって上面を削平されており、頭部は3分の1ぐら
いがすでに削られていた。
墓塚は古墳時代前期の包含層を切って掘られている。

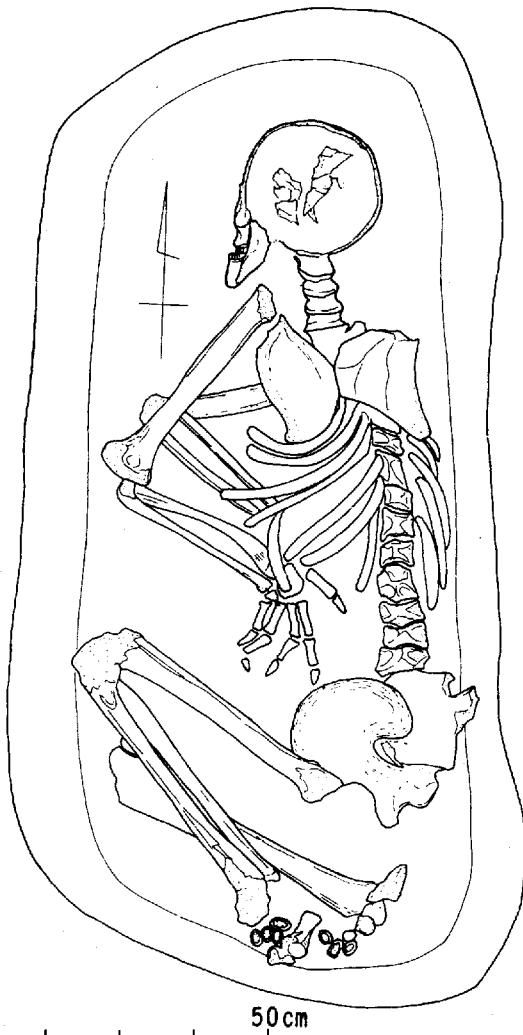
掘り方の区分は困難であるが、内
部の土の方が若干灰色が強いこと
から区分される。墓塚の大きさは
長さ130cm、幅62cmである。木棺
を使用した痕跡はみられず、直葬
されたものらしい。

埋葬は横臥屈葬で頭を北に向
けている。顔は西向き、両手を腹部
においている。足は膝を折り曲
げ、踵が腰の下にくるようになっ
ている。人骨の鑑定を受けていな
いので性別等は不明である。埋土
中には古墳時代の土器片のほかに、
平安時代頃の土師器片も含ま
れている。したがって人骨の年代
を平安時代以降とすることはでき
るが、副葬品はなく明確にすること
はできない。埋土が周囲の包含
層と変わらないくらい固くしまって
いることからあまり新しい年代の
ものでないと推定される。調査区
域中においては他の埋葬遺構は検
出されていない。

(正岡)



第50図 土 塚 303 出 土 土 器 実 測 図 (+)



第51図 人 骨 出 土 状 況 実 測 図

6) 溝

法万寺調査区では、37本の溝が検出されている。微高地の中央部にある大型の溝は用水路であるらしい。南北と東西に細長く続く溝は奈良時代に属し、建物に伴うものらしい。西端部に位置するものは自然の流路の痕跡の可能性もある。

溝 301 西にやや蛇行している。埋土は灰褐色粘土で上層には黄色粘土塊を含む。

溝 302 南北方向で少量の土器片しか含まないが奈良時代のものらしい。

溝 303 南北方向である。

溝 304 南北方向である。南側では消滅している。

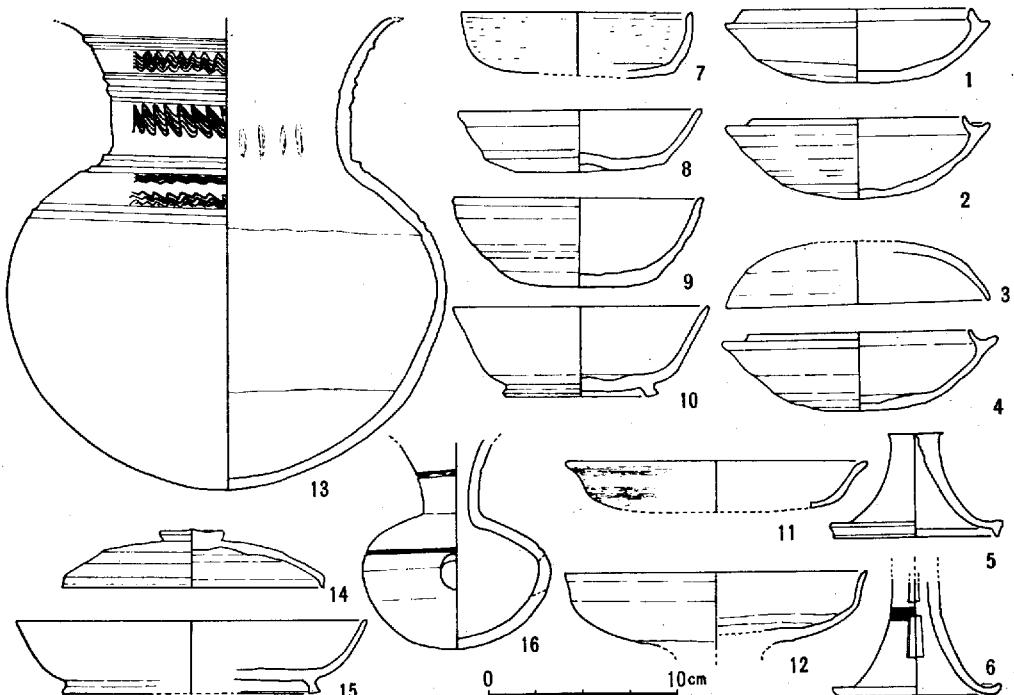
溝 305 第2橋脚位置にあり、軌道敷センターよりやや北から残っている。王泊6層期の遺物を少量含んでいる。

溝 306 南北方向に細長くつづき、南でわずかに西にふっている。埋土には須恵器、土師器の破片を含んでいる。その中に完形の杯が1個ある（第52図7）。時代は奈良時代に属するらしい。

溝 307 南北方向に細長くつづく。埋土中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。奈良時代の溝であるが、他に古式土師器、7世紀の須恵器も含まれている。

溝 308 南北に長く続く。幅は約24cmで南の方では34cmの規模である。埋土中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。そのうち、須恵質の杯の完形品が1点ある（第52図8）。土師器には浅い皿形で口端部を外反している。奈良時代に属するらしい。

溝 309 南北に細長くのびる。幅は22cmと狭く埋土は茶褐色粘土で遺物はほとんど含まれていない。



第52図 溝出土須恵器実測図 (4)

溝 310 南北方向に細長くつづく。埋土中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。そのうち杯の完形品もある（第52図9）。溝302, 303, 304, 306, 307, 308, 310は建物に伴うらしい。

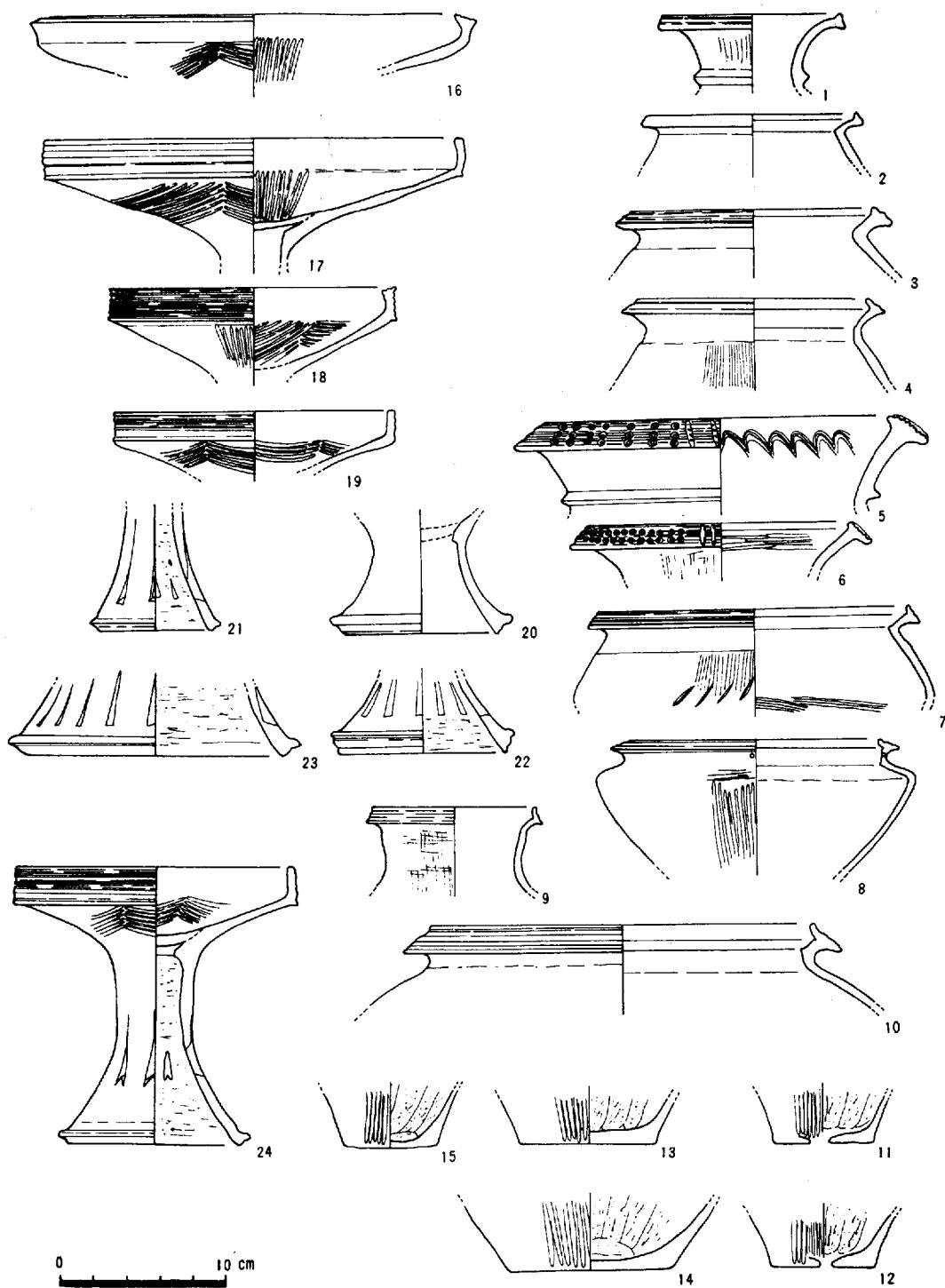
溝 311 上層の包含層を掘り下げ、地山面で確認される。規模は比較的大きく、幅190cm、深さ60cmで、南北方向である。埋土はやや濃い茶褐色粘土である。下層のみは暗灰褐色粘土である。埋土中には弥生式土器を多量に含んでいる（第53図）。器種には壺、甕、高杯、鉢などがある。壺は口縁部が朝顔形に開き、端部が肥厚して凹線文が施されているもの（1）と著しく肥厚し折り返しがみられ、外面に凹線文を施し、竹管文、波状文、棒状浮文を施したもの（5, 6）がある。頸部の長いものもある（9）。甕には口縁部が肥厚して、凹線文を施すもの（3）と端部を折り曲げるだけのものがある（4）。かなり大型のものもある（10）。鉢は肩部の張りが著しい（8）。口縁部は折り曲げられ外面には凹線文を施している（7, 8）。頸部には2個の穿孔がみられるもの（8）がみられる。外面には「ノ」字状文を施したもの（7）があり、調査はヘラ磨きが施されている。甕の底部には焼成後穿孔のあるものもある（11, 12）。高杯は杯部の端部が肥厚するもの（16）と上方を折り曲げ外面に凹線文を施したものがみられる。脚部はゆるやかに外反し、端部が肥厚している。三角形の透を施したものが多い。24の高杯は三角形の透しが「矢の羽」形となり岡山県にみられないものである。他の地域から持込まれた可能性が強い。以上の様相から2時期のものが含まれていることがわかる。土溝302に含まれているものといわゆる「前山Ⅱ式」との両者を含んでいる。溝の年代は後者に属する。

溝 312 ほぼ南北方向であるが、やや西にふれている。幅160cmと比較的大きな規模である。黒色粘土で埋没し、須恵器の破片を多量に含んでいる（第45図10, 11, 14, 15）。奈良時代の用水路と推定される。

溝 313 幅610cmと大型の用水路である。ほぼ南北方向でわずかに北にふれている。埋土は灰色細砂である。埋立中には須恵器、土師器の破片を多量に含んでいる（第52図1～6, 12）。杯身の口縁の直径12cm（1）、11.2cm（2）、11.6cm（4）等とやや小型のものもある。口縁部の高さは小さく内傾している。高杯は短脚で透しのないものと長脚で2段段透しを施したものがある。

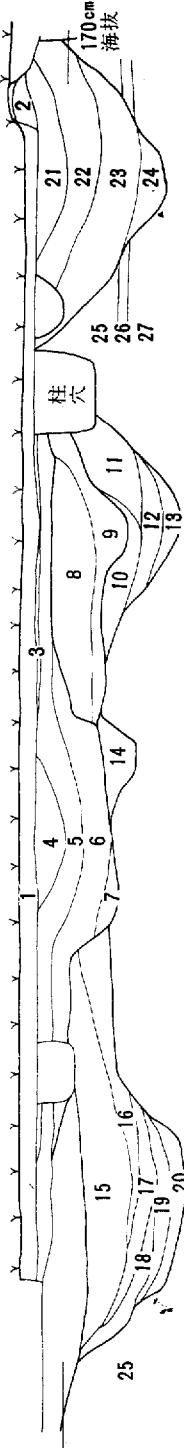
溝 314 南北方面である。埋土は黒色～灰色粘土である。埋土は上層と下層にわけられる。上層のわずかの土層には甕の破片が含まれている。口縁端部は外反し櫛描きを施したものがあり王泊6層期に属する。下層の埋立中には多量の土器片が含まれている。土器破片は比較的大きなものが多く、器種には壺、甕、高杯、鉢がある。壺の口縁部を出土していないが、底部では器壁が厚く平底である（第55図13）。甕は口縁部が「く」字状に外反し、端部をわずかに肥厚されたもの（7～9）とそのままのもの（1, 2），端部を内傾し、櫛描きを施したもの（3～5, 11）と凹線を施したもの（6），端部を下方に張り出したもの（10）がある。いずれも肩部が張っていて底部は平底である。外面には刷毛目が施され、内部はヘラ削りが施されている。肩部に「一」字様の圧痕を3個施したもの（11）もみられる。高杯は短脚のもの（15, 19）とやや長脚のもの（18）がある。杯部は口縁部が外反するもの（15, 16）と椀状を呈するもの（17）がある。鉢は平底である。外面に沈線を配し、内面には斜めのヘラ描き沈線が施されている。弥生時代中期の土器片も混入している（21～24）。以上の様相は酒津式土器に類似している。上層の埋土には、痕の口縁部を外反し櫛描きを施したものがあ

川入遺跡



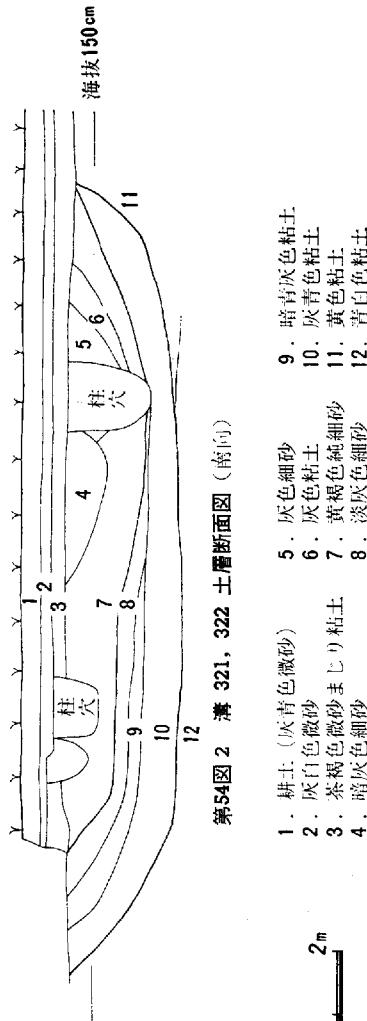
第53図 川入遺跡出土土器実測図 (1)

川入溝



第54図1 湾312~320 土層断面図(南端)

- 1. 耕土(灰青色微砂)
- 2. 茶褐色粘土
- 3. 黄褐色微砂
- 4. 暗灰色粘土
- 5. 灰色細砂まじり粘土(やや粘質)
- 6. 灰色粘土(細砂を含む)
- 7. 灰色粘土(細砂を含む)
- 8. 灰色細砂
- 9. 黄色細砂
- 10. 淡灰色粘土
- 11. 黄色粘土
- 12. 暗灰色粘土
- 13. 暗青灰色粘土
- 14. 灰色粘土
- 15. 黄色粘土
- 16. 茶褐色粘土
- 17. 暗灰色粘土
- 18. 灰色粘土
- 19. 暗灰色粘土(炭を含む)
- 20. 灰色粘土(炭を含む)
- 21. 灰色粘土
- 22. 暗茶褐色粘土
- 23. 暗褐色粘土
- 24. 暗灰色粘土
- 25. 黄色粘土
- 26. 暗茶褐色粘土
- 27. 青白色粘土

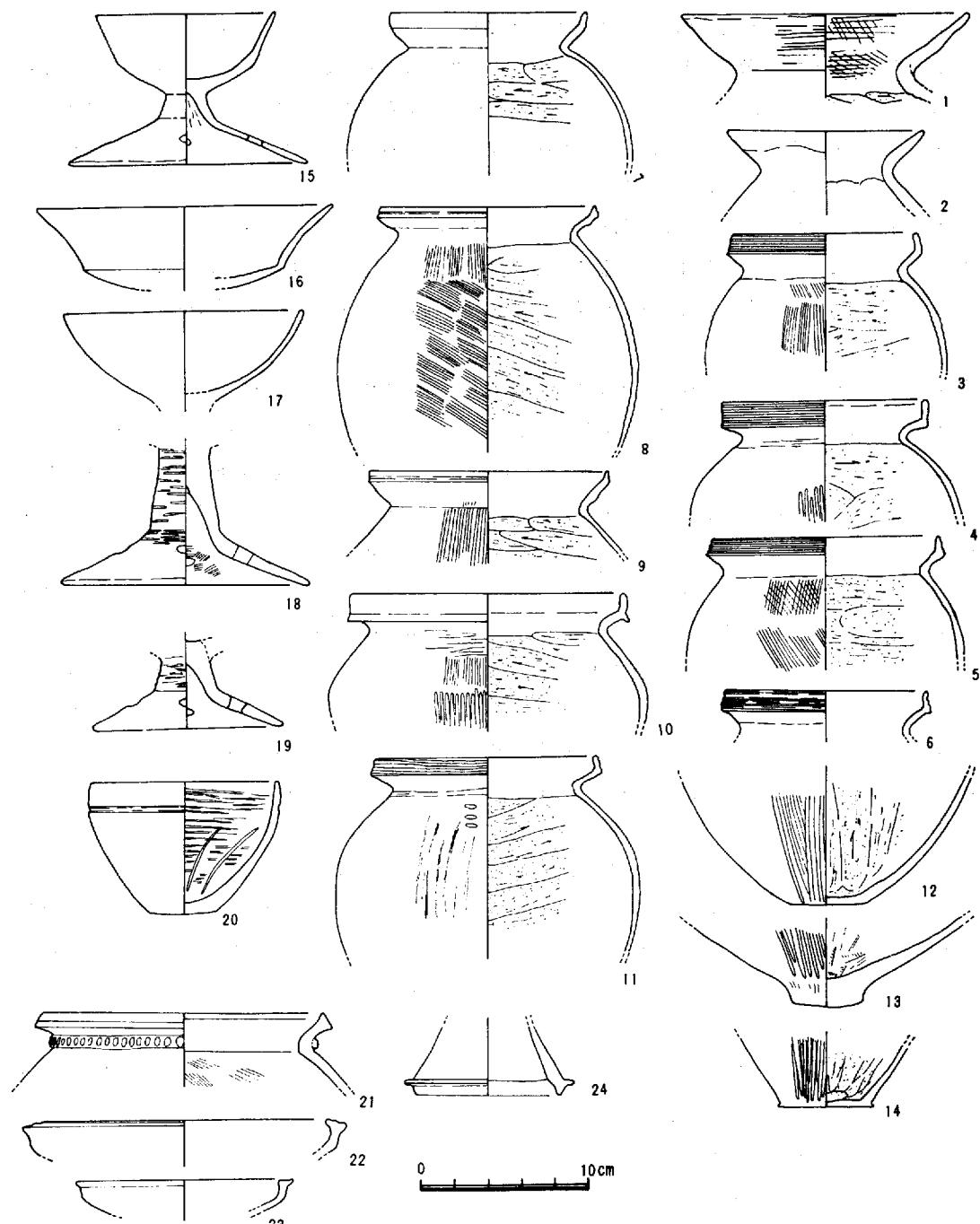


第54図2 湾321, 322 土層断面図(横向)

- 1. 耕土(灰青色微砂)
- 2. 灰白色微砂
- 3. 茶褐色微砂まじり粘土
- 4. 暗灰色細砂
- 5. 灰色細砂
- 6. 灰色粘土
- 7. 黄褐色純細砂
- 8. 淡灰色細砂
- 9. 暗青灰色粘土
- 10. 暗青色粘土
- 11. 黄色粘土
- 12. 青白色粘土

0 2m

川入遺跡



第55図 溝314出土土器実測図 (1/4)

り、下層の埋土には外反するものはみられないことから年代的に前後することが確認される。上層の土器がいわゆる「王泊6層」期のものであり、下層の土器はそれに先行するものとすることは妥当である。甕では口縁部に櫛描きを施したものが多く、内傾しながらも新しい様相がみられる。壺、甕の底部は平底で高杯の脚部は短脚である。以上の様相は酒津式の範疇に含めて考えることができる。

溝 315 溝313の下にあり北北東から西南西の溝である。埋土の土器片は少量で時期の決定はしがたいが、酒津式～王泊6層期のものらしい。

溝 316 南北方向である。北側は溝322によって削られている。埋土中には少量の遺物を含んでいる。壺の底部は大きく、器壁は厚い。甕の口縁部は上方に立ちあがり凹線文を施している。

溝 317 南北方向である。埋立中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。奈良時代に属するらしい。

溝 318、溝319 溝317と同様で3本は接して並んでいる。下層には古墳時代の溝がある。

溝 320 溝322と分流関係にある。南壁では幅210cmである。埋立中の遺物は王泊6層に属する。

溝 321 溝322の上位に位置し、北北東から南南西である。埋立は黄褐色純細砂で土器片を多量に含んでいる。器種には壺、甕、鉢、高杯、小型手捏ね土器がある。壺と甕は口縁部が外反し、口唇部がうすくなる形で単純なものである。外面は刷毛目が施され、内面にはヘラ削りを施すものが多い。鉢にはやや深いもの（第56図6、7）と浅いもの（10、12）がある。高杯の量が多い。杯部では外面に稜線があるもの（14、15）とないもの（16、17）がある。脚部は裾部が曲折して外反し、内面はヘラ削りを施している（18～20）。小型手捏ね土器は壺形のものもあるが（21～24）、ほとんど鉢形を呈している。第3橋脚位置においてまとまって検出される。胎土はすべて砂粒を含んでいる。この層からは須恵器は検出されていない。以上の土器は北川走出（註一）出土のものに類似している。溝321がほとんど埋没した最終の暗灰色細砂中には古式の須恵器を含んでいる（第52図13）。広口壺で頸部から肩部まで波状文が施されている。

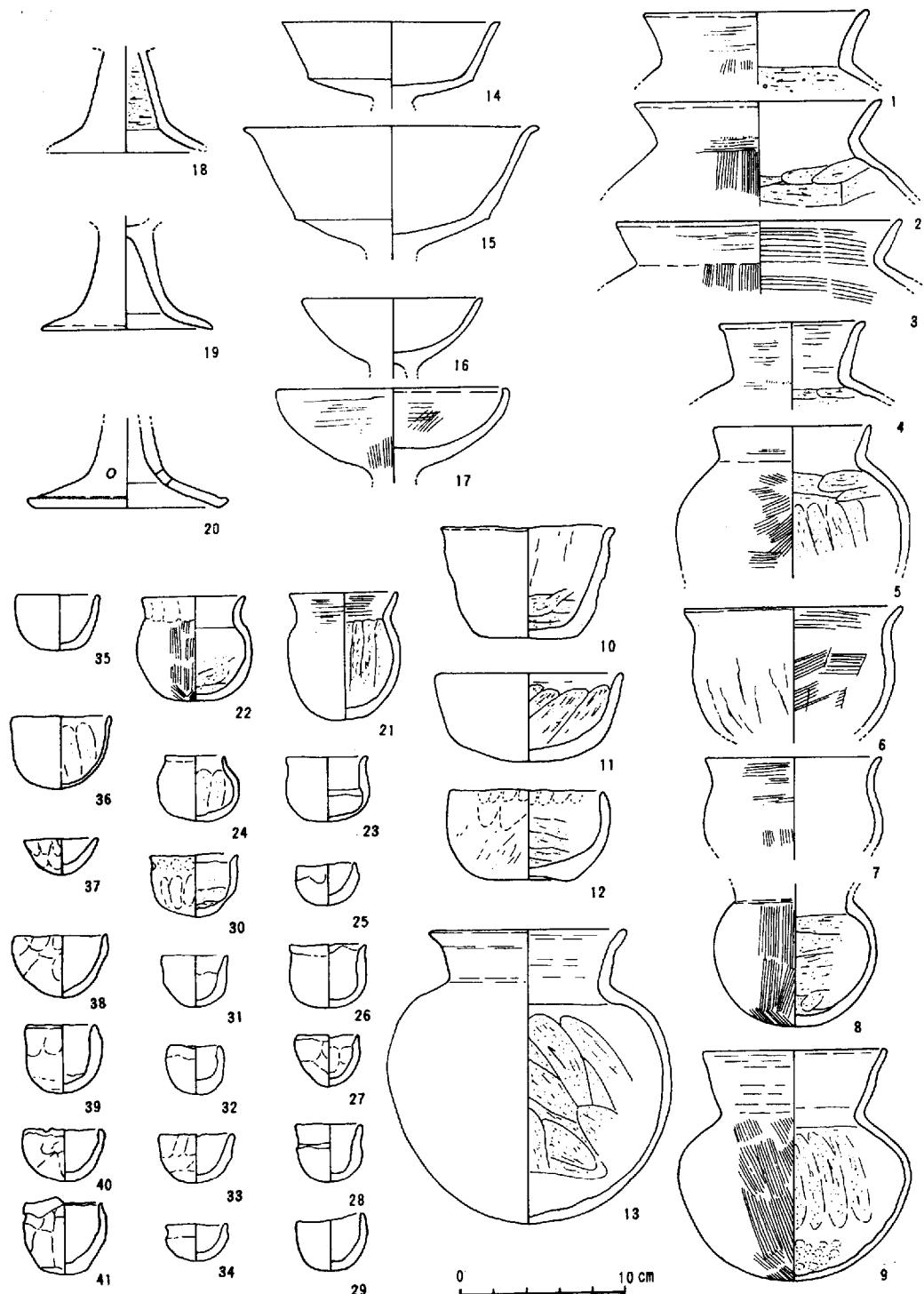
溝 322 溝321の下位に位置しほぼ同方向である。埋土は灰青色粘土で溝321の埋土とはあきらかに区分される。埋土中には多くの土器片を含んでいる。器種には壺、甕、高杯、碗、塙、皿、台付鉢形土器等がある。壺では口縁部が内彎するものもみられる（第57図1）。甕の口縁部は「く」字形に外反するものと口縁端部を肥厚して立ちあがりがみられるるもの、薄いつくりで外面に櫛描きを施したものがある（5～7）。壺や甕の底部には小さな平底もみられる。碗は胎土が精製粘土で口縁部が開いている（13）。塙（14）は口縁部と胴部の胎土が違うというめずらしいものがある。口縁部には砂粒を含むが胴部には精製粘土が使用されている。皿は深さが浅く、外面にはヘラ削りが施されている（21）。小型手捏ね土器（12）の胎土は精製粘土である。

溝 323～325 3本の溝はいずれも東西方向である。埋土中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。奈良時代のものである。建物に伴うものらしい。

溝 326 東西方向である。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど含まれず年代は不明である。

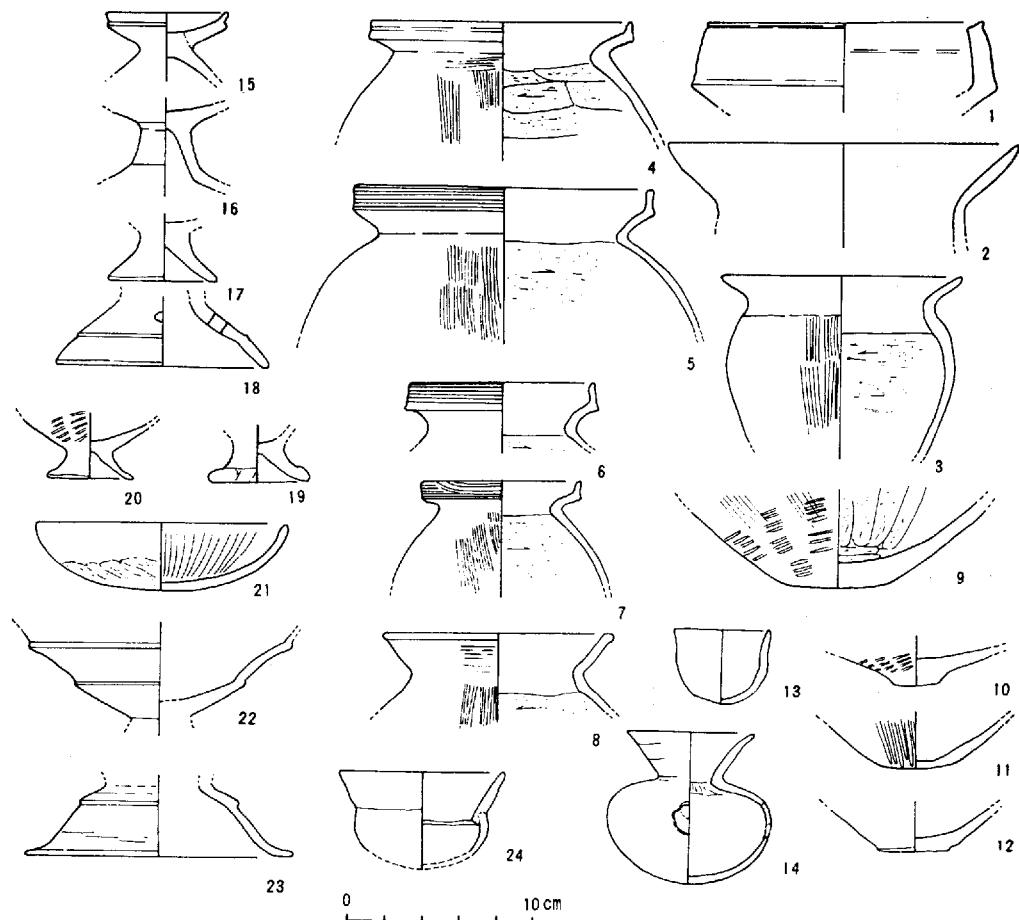
溝327～330 溝322の上位に位置し、4本とも東西方向である。深さは浅く、埋土は暗灰色細砂である。遺物はほとんど含まれず年代は決定できないが、平安時代の柱穴で切られていることから、奈良時代らしい。

川入遺跡



第56図 滋321出土土器実測図(+)

川入遺跡



第57図 溝322出土器土実測図(+)

溝331 302号住居址を切って、北北東から南南西である。埋土は灰色粘土でほとんど遺物を含んでいない。

溝332 ほぼ南北方向であるが蛇行している。溝の痕跡をわずかに残すのみで年代は不明である。

溝333 微高地西端の低位面に位置する。ほぼ東西方向である。埋土は灰色粘土で王泊6層期の土器片を含んでいる。

溝334 南端近くで検出された溝で南北である。埋土中には須恵器、土師器の破片を含んでいる。このなかには須恵器の軛(第52図16)があり、7世紀頃である。

溝335 粘土層の上位にあり、ほぼ東西であるが南にふっている。埋土は細砂で少量の土器片を含んでいる。

溝336 溝335とほぼ同様である。

溝337 蛇行し、自然のものである可能性もある。

溝338 溝307の西に位置し、南北方向である。北は残っていないが南にのびている。幅は約30cmであるが、深さはところによって異なる。

(正岡)

註 (1) 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号 1966年

川入遺跡

第1表 法万寺溝一覧表

番号	走向方位	水路幅 (cm)	深さ (cm)	伴出遺物 (時代)
301	a	50	35	王泊6層?
302	a	20		奈良時代
303	a	30	7	夕
304	a	26	4	夕
305	a	20		王泊6層?
306	a	26	4	須恵器(杯) 奈良時代
307	a	42	7	{須恵器(甕・杯) 土師器(夕・夕)}
308	a	24	6	{須恵器(杯) 土師器(皿形)}
309	a	22	9	不 明
310	a	25	3	{須恵器(杯) 土師器} 奈良時代
311	a	190	60	{弥生式土器(壺, 甕, 高杯, 台付鉢) 前山II-b}
312	a	160	55	{須恵器(甕, 甕, 高杯, 杯) 土師器(甕)} 奈良時代
313	a	610	70	須恵器(杯, 高杯) 7C
314	a	230	100	土器(壺, 甕, 高杯, 杯)酒津式
315	a	52	30	土器 酒津式~王泊6層
316	a	150	60	弥生式土器(壺, 甕) 上東III
317	a	30	9	須恵器(杯, 高杯, 甕) 奈良時代
318	a	30	6	夕
319	a	30	11	夕
320	a	210	105	{土器(広口壺, 台付土器, 甕, 高杯) 王泊6層}
321	a	530	60	土師器(壺, 甕, 鉢, 小型手捏ね土器) 5C
322	a	630	90	{土器(壺, 甕, 高杯, 盆, 坩, 壺, 領, 台付鉢形土器) 王泊6層} 奈良時代
323	c	36	約10	
324	c	50	夕	
325	c	60	夕	
326	c	50	約15	不 明
327	c	100	18	夕
328	c	56	浅い	夕
329	c	40	浅い	夕
330	c	40	浅い	夕
331	a	60	約20	王泊6層
332	a	24	浅い	不 明
333	c	70	約10	王泊6層
334	a	80	約20	須恵器, 土師器 7C
335	a	75	15	不 明
336	a	50	15	夕
337	a	35	10	夕
338	a	30	20	須恵器(貝殻) 7世紀

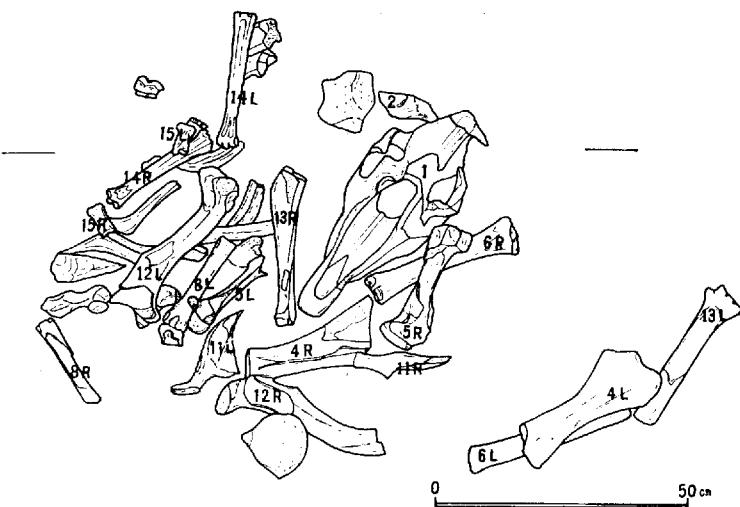
溝の方位 a (O-E45°) b (E45°~E90°) c (O-W45°) d (W45°-90°)

7) 馬骨出土状況

(第58図)

溝16の最上層である暗黄褐色細砂層より出土する。ほぼ一頭分まとった状態で出土しているが墓壙等の痕跡は確認できない。馬骨周辺より出土の土器片は小片のため時代は決定できないが、この下層の土器が5世紀頃の土器であることから、この馬骨の時代は6～7世紀頃と思われる。

(大谷)



第58図 馬骨出土状態実測図

第3節 遺物

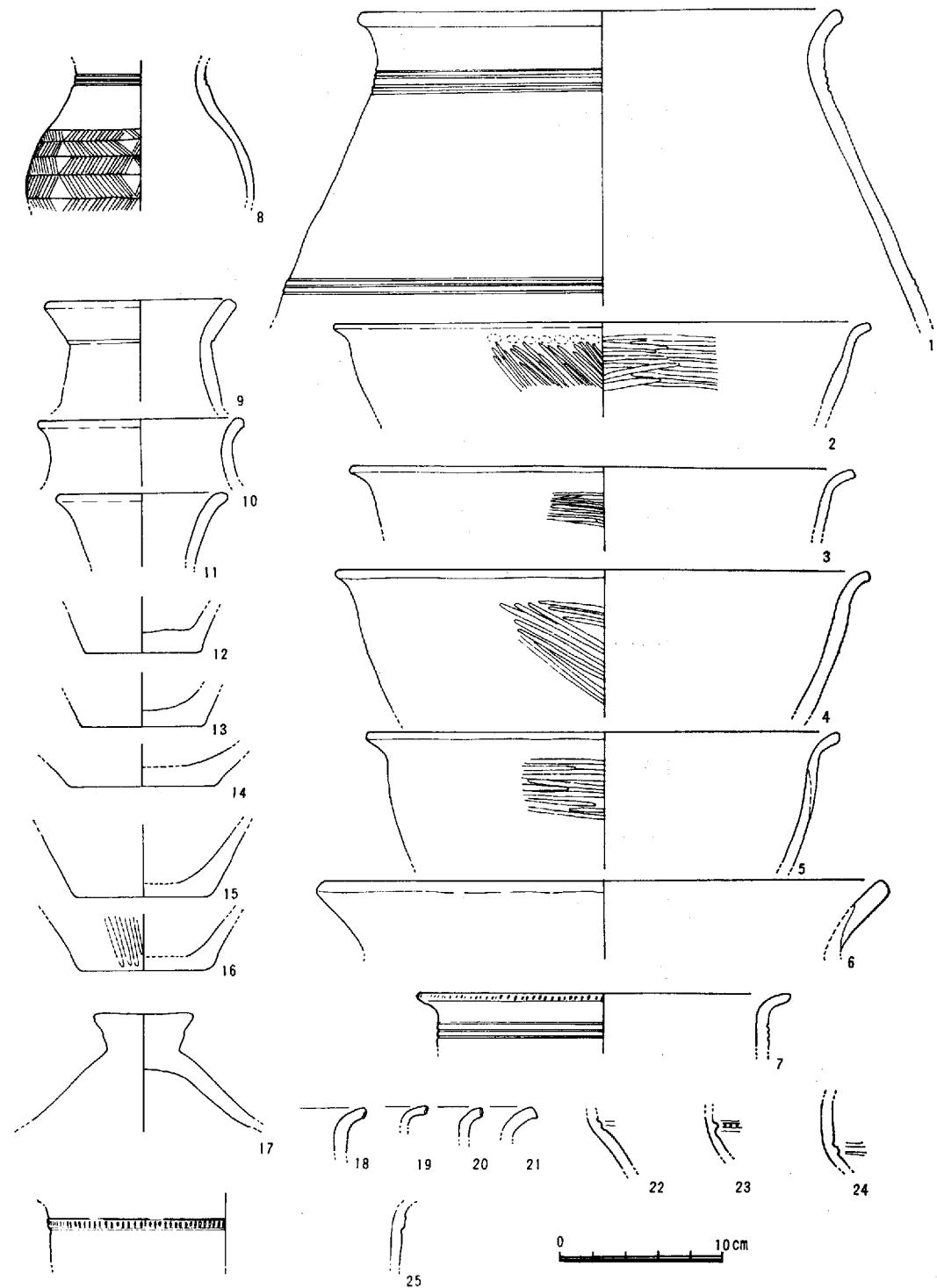
1) 弥生式土器・古式土師器

弥生式土器には弥生前期のもの、中期後半から後期のものがあり、古墳時代以降はほぼ年代ごとに遺物が検出されている。

弥生時代前期の土器は微高地上面の東半部と東側傾斜面に存在する。弥生時代中期以降の包含層中にも含まれているが少量である。土器片の数は200片程度で、壺、甕、鉢、蓋などの器種がある。壺には木葉文の施されたものではなく、綾杉文、削り出し凸帯、沈線等が施され、津島遺跡の前期前半の遺物群に比して後出のものである。壺は大型と小型のものがある。口縁部はゆるく外反し、口唇部に丸みをもっている。頸部は削り出し凸帯を配し(第59図22～24)，肩部では胴の部分へ移るに段がある(1)。削り出し凸帯が大きくなり、きざみめを施したもの(23)もみられる。底部のつくりは厚い。胎土は大きな砂粒を含み粗い。外面と内面はほぼ全体にわたってヘラ磨きを施している。色調は明るく黄褐色を呈する。甕は口縁部が「く」字状に外及し、口唇部にきざみめを施したものがある(7, 18, 20)。胎土は大きな砂粒を含み粗い。色調は灰色ないで灰褐色を呈するものが多い。鉢形土器では外面に横位ないし斜めにヘラ磨きを施し、内面には横位のヘラ磨きを施している(2～5)。蓋形土器は1点ある。つまみの部分は大きく厚い。以上の土器群は前期前半には含まれず、門田式よりも古くて、いわゆる「削り出し凸帯」の時期にあたり、一つの組成と考えることができる。

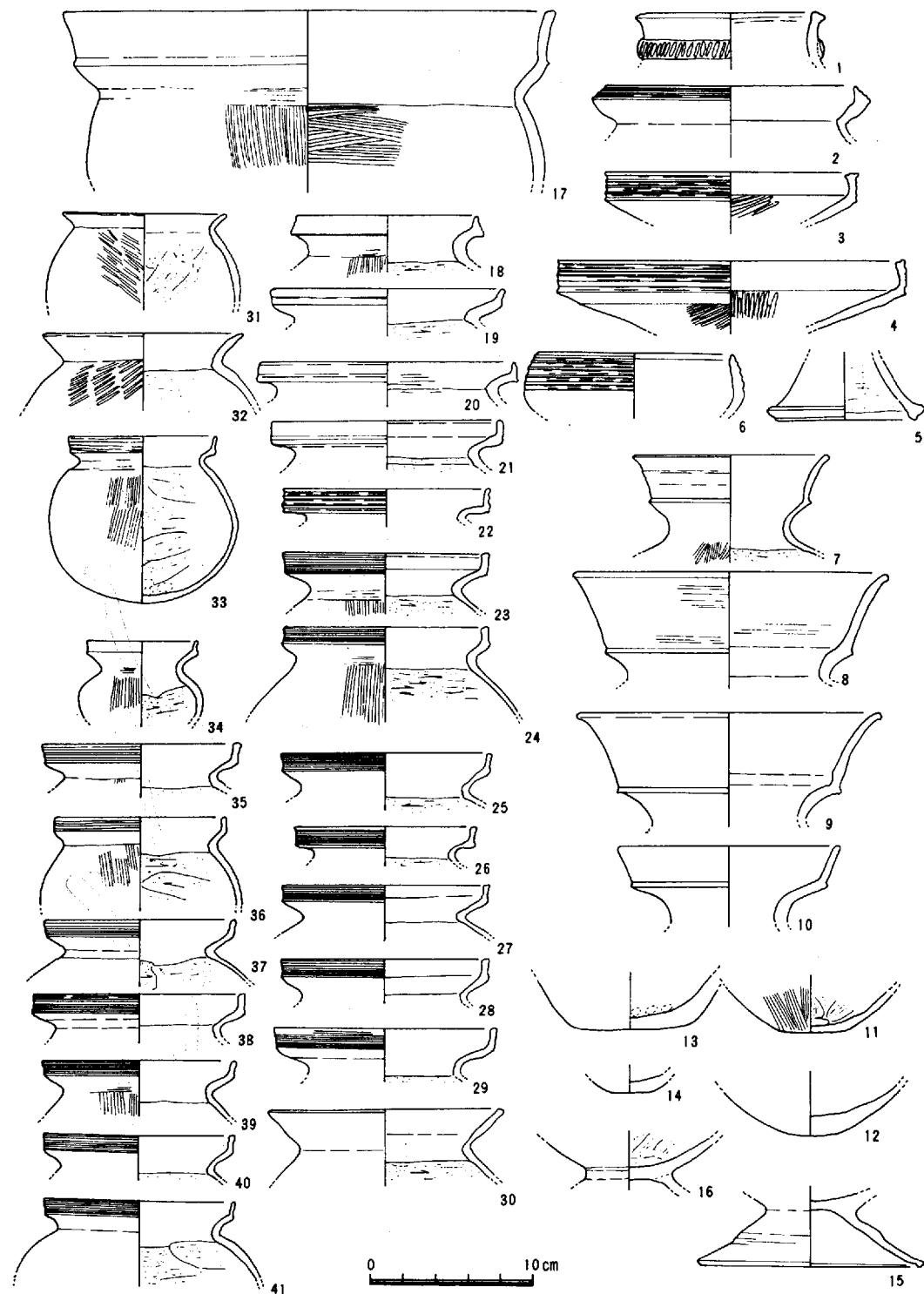
弥生時代中期前半に属する遺物は少量しか検出されていない。外面に彫描の波状文と平行線文が交互に施された壺の破片が数片みられるだけである。弥生時代中期中頃の遺物も少量しかない。弥生時代中期後半と考える時期の遺物は方形土壙と楕円形土壙、溝311、東側傾斜面など多数検出される。

川入遺跡



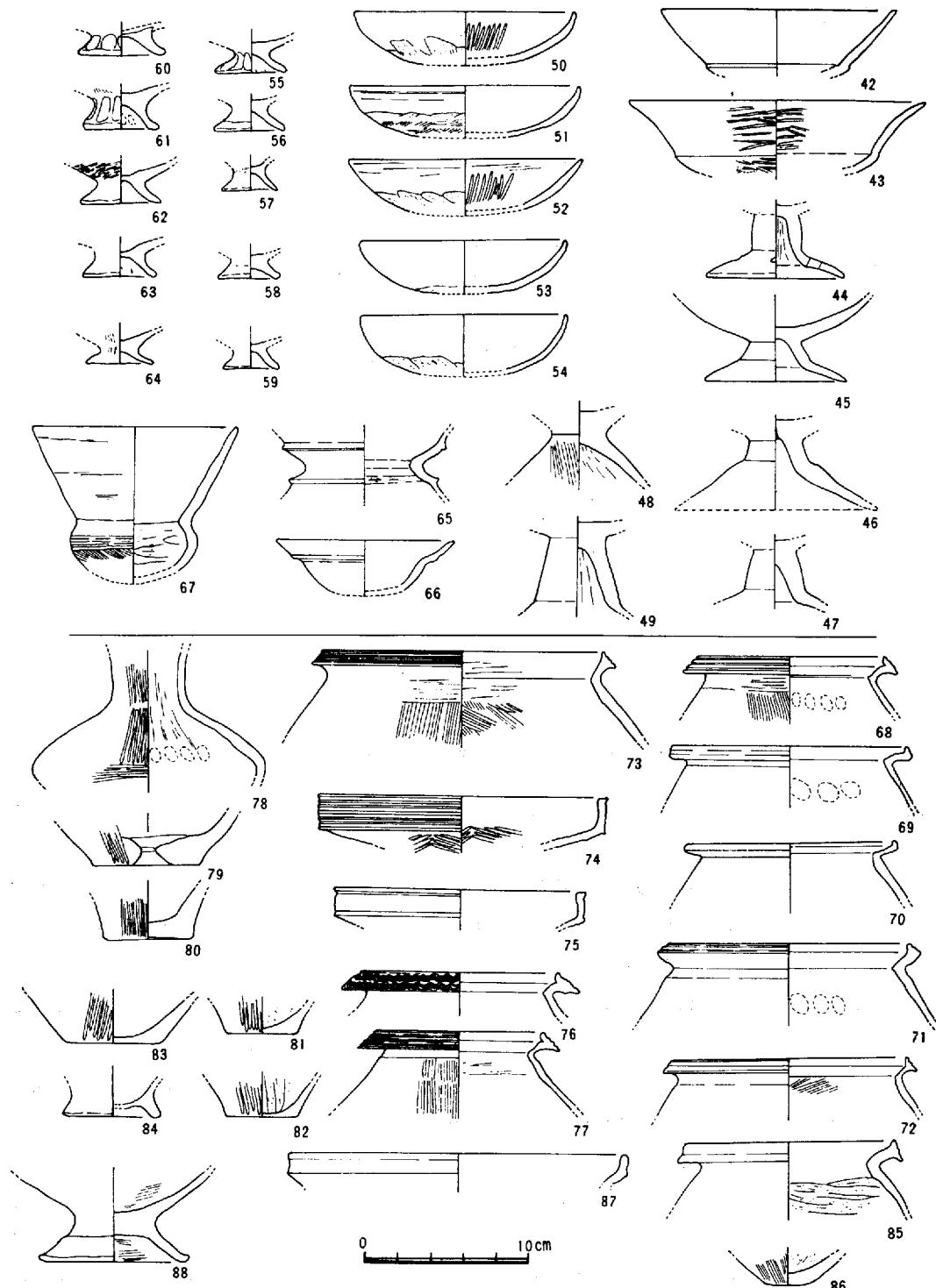
第59図 法万寺東側傾斜面出土土器実測図 (1)

川入遺跡

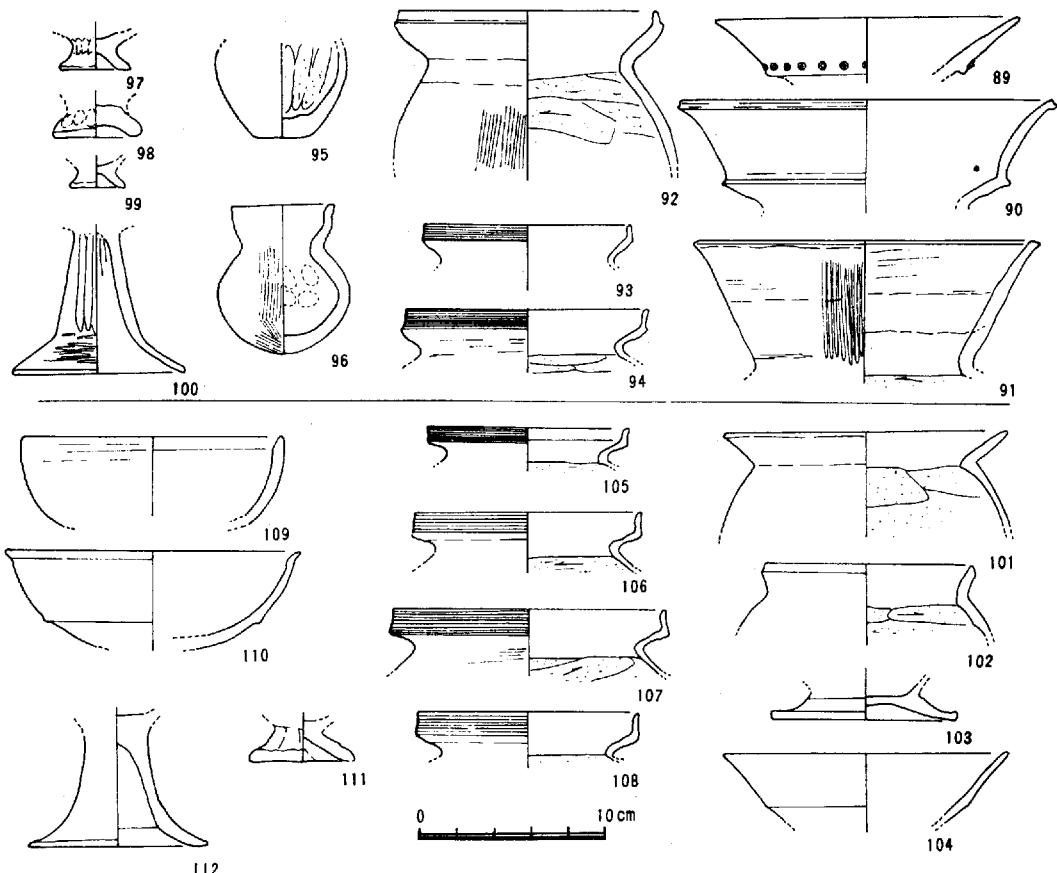


第60図 東側傾斜面出土土器実測図 (4)

川入遺跡



第61図 東側傾斜(上), 微高地上面(下)出土土器実測図(±)



第62図 微高地上面(上), 西側傾斜面(下)出土土器実測図(4)

土壤302の埋土中から検出される土器は中期後半のなかでも古い様相がみられる。溝311の埋土中に含まれていないものも多くかなり限定された時期の土器と考えられる。この中には、壺、甕、高杯、それに台付鉢などがある。壺は口縁部が朝顔形に開き口唇部は肥厚して凹線文を施している(第48図1)。甕はいずれも口縁部が肥厚し凹線文を施すものが多い。高杯は口縁端部が肥厚し内彎するものもあるが薄くなつて内傾し、外面に凹線文を施したもののが出現する(24)。脚の端部は肥厚し立あがりのみられるものもある。鉢形の土器では頸部に2個の穴がある。以上の土器は前山Ⅱ式と呼ばれるものの範疇であるが雄町5類よりは古い。溝311の埋土中に含まれていないやや新しい遺物も含まれている。土壤に含まれていなかつたものについて述べる。壺と甕はいずれも口縁部が拡張し凹線文が施されている。甕の内面は胴部下半にはヘラ削りを施している。高杯は口縁が上方に曲折し凸線文を施していない。下部は角ばるのがこの時期の特色らしい、脚部は三角形の透しがみられる。台付鉢は肩の張りが著しい。以上の様相は雄町5類に相当する。その後の遺物も若干包含層中に含まれているがまとまって検出されたものはない。

弥生時代後期の土器はいわゆる上東式と呼ばれる時期のものは少なく、長頸壺の破片なども若干検出されているにすぎない。この時期の後半に位置する土器は少量ある。主として、東側の傾斜面において出土している。

いわゆる酒津式土器と呼ばれる土器に類似する土器も全域にわたって存在する。まとまって検出されたものには溝314の埋土中に含まれるものがある。器種には甕、高杯、杯等がある。甕の口縁部は「く」字状に折り曲げただけでおわるものと端部を上方へわずかに曲折するものがある。口縁部を内傾し、外面に櫛描きを施したものがある。底部は平底を残している。内面ヘラ削りは頸部下端までみられる。高杯は口縁部は外反し、短脚で裾部は著しく開く。

古墳時代前半の土器でいわゆる王泊6層期と呼ばれる時期の上器が多い。特に東と西の傾斜面と井戸、溝322の埋土中に多い。器種には壺、甕、高杯、鉢、罐、埴、皿形土器、台付鉢形土器、鼓形器台等がある。壺は広口で口縁部が外反している。甕は口縁部を「く」字状に外反するだけのものと上方に折り曲げ櫛描きを施したものがある。高杯は脚部が短脚のものがある。鉢は口縁部が著しく拡大している。底部は丸底のものが多く、一部にやや底部が厚くなるものがある。罐は溝322の埋土中で1点出土している胎土は精製粘土である。埴は口縁部が開き胴部は小さい(第60図67)。皿形土器はこの時期に多い。外面にはヘラ削りがあり、内面にはヘラ磨きを施している、台付鉢形土器は「製塩、土器」と呼ばれるもので、いずれも火をうけて赤褐色を呈する。胴部外面にはタタキ目が多くみられる。脚部はヲッパ状に開く。鼓形器台は第2橋脚位置で1ヶ破片で検出されている。中央のくびれ部は狭くつまっている。

王泊6層期以降の土器では溝321の埋土中に含まれている。器種には壺、甕、高杯、鉢、小型手捏ね土器等がある。壺は口縁部がやや外反し、胴部は丸い(第56図)。甕は口縁部は「く」字状に外反している。壺と甕は内面ヘラ削りが施されている。高杯は杯部の内面がやや平坦で口縁部が外反するものと浅い椀を呈するものがある。鉢は粗雑なつくりで底部はやや平坦である。小型手捏ね土器が多い(第56図25~41)。いずれも粗製で一部に内面ヘラ削りを施したものもある。

(正岡)

註 (1) 前掲「雄町遺跡」

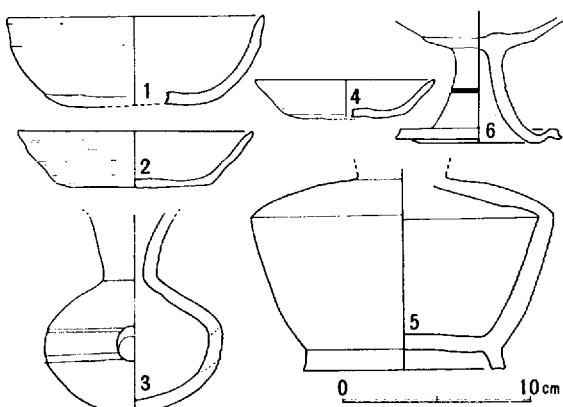
2) 須恵器・土師器(第63図1~6)

1・4~6が須恵器、2が土師器、3が須恵質土器である。2は赤褐色を呈し外面に丹塗りがなされている。3は底部に粘土巻き上げ痕が残る。6には自然釉が認められる。

(大谷)

3) 緑釉陶器(第64図3~8)

川入遺跡の緑釉は大道西Ⅰ調査区で灰釉陶器1片、大道西Ⅱ調査区で3片、そして法万寺調査区では40片とほとんどが法万寺調査区での出土である。これらの緑釉(3,

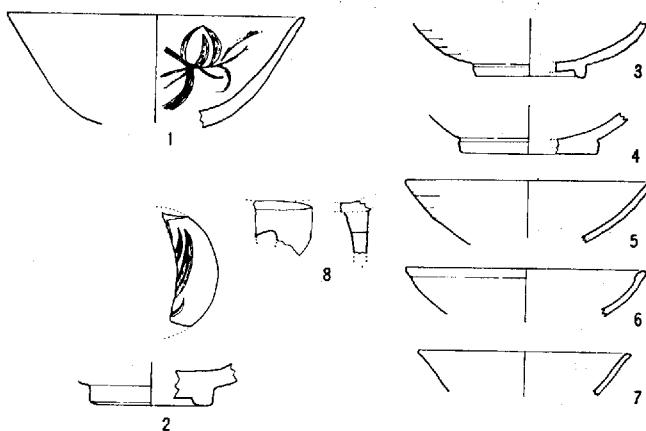


第63図 包含層出土土器実測図(土)

4, 5, 6, 7, 8)はすべてが小破片である。須恵質で高台を有するもの(3)や軟質で平たいはりつけた高台のもの(4)などで、ほとんどが皿と思われるものである。わずか碗と思われるものが数片含まれている。それらの中に1片、硯(8)の一部分と思われるものが出土している。胎土は須

川入遺跡

恵質で硬質のものと、白灰色、黄白色をしている軟質のものである。色調はほとんどの破片において剝離しているが、それぞれちがった色調をしている。うすい緑色のものや、黄みがかった緑色、また暗緑色を呈するものなど色々である。これらの緑釉で胎土の軟質のものは平安時代前半期のものと思われ、須恵質で硬質のものは、平安時代後半期のものと思われる。



第64図 緑釉、青磁実測図(1)

灰釉については小破片であるが数片の出土がみられた。なお、これら緑釉、灰釉については、名古屋大学助教授檜崎彰一先生のご教示をいただいた。

4) 陶磁器

青磁(第64図)、(1)は、塊と思われるもので復元口径は16cmある。釉はやや厚めにかかっている。体部内面には草花文がみられる。胎土は灰色で釉色は暗緑色を呈している。おそらく竜泉窯系のものと思われる。青磁(2)は、短い高台で底部は非常に厚く、高台部まで釉がみられる。内面底部には文様がみられる。釉の色調は暗緑色を呈している。これも竜泉窯系のものと思われる。(枝川)

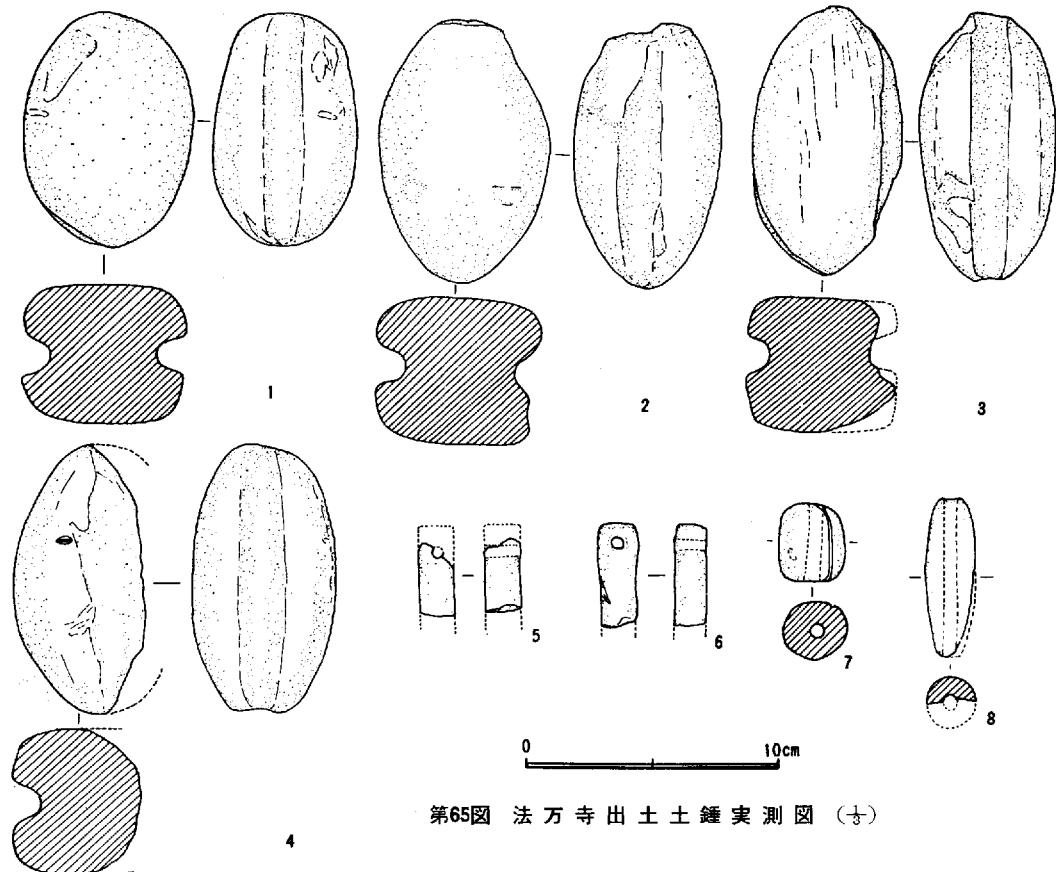
5) 土錘 (第65図 第2表)

土錘は8点あり、形態から4種類に分けられる。大型の土錘が柱穴の埋土中から4個一括して出土したのをはじめ、包含層中から出土したものである。大型の土錘(1~4)は4点あり、埋土中の土器片に高台付の須恵質楕円形土器片が含まれていて、平安時代~鎌倉時代のものと推定される。5と6は一部しかないが、棒状で端部に穿孔がみられる。7は楕円形にゆがんでいるが縦に穴があり一方に溝をめぐらしている。8は紡錘形で歴史時代にみられるものである。

(正岡)

第2表 法万寺土錘一覧表

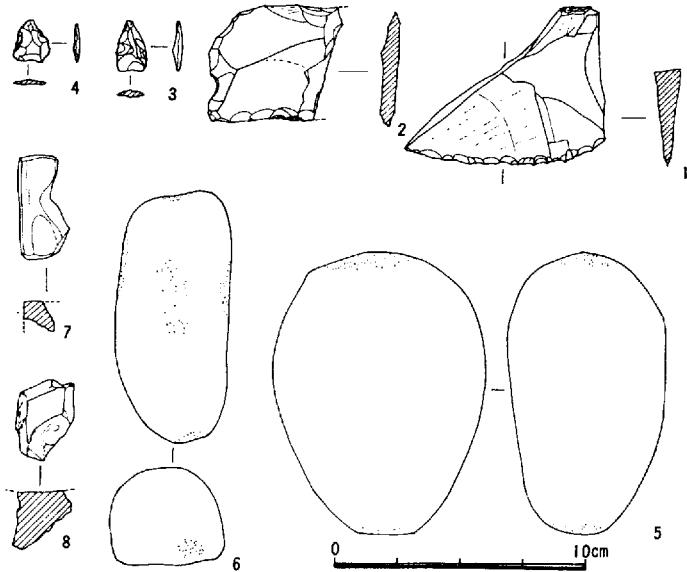
	出土地點	形	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	東部側道敷柱穴	有溝	9.5	6.8	5.6	367.2g	完形
2	〃	〃	10.5	6.8	5.8	399.5g	〃
3	〃	〃	10.8	5.9	5.4	328.7g+	一部欠
4	〃	〃	10.2	5.2	5.8	293.0g+	〃
5	第2橋脚	穿孔のある棒状	2.9	—	1.4	6.9g+	半分
6	西部側道敷	〃	4.1	—	1.4	10.3g+	〃
7	第3橋脚	変形管状	3.1	2.6	2.3	19.0g	完形
8	東部側道敷	紡錘形	6.3	—	2.0	11.5g+	半分



第65図 法万寺出土土錘実測図 (1)

6) 石器 (第66図)

石製品の総数は8点ある。サスカイト製の石器には石匙様のもの1, 打製石庖丁1, そのほかに平基式石鎌2, 砥石2, 叩石2がある。石匙様のもの(1)の大きさは縦6.2cm, 横8.0cm, 厚さ1.0cmである。打製石庖丁は半分しかないが現長5.2cm, 幅4.7cm, 厚さ0.7cmで紐かけのくりこみがある。打製石鎌は平基式である。3は長さ2.0cm, 幅1.2cm, 厚さ0.4cm, 重さ0.7g, 4は長さ1.7cm, 幅1.4cm, 厚さ0.2cm, 重さ0.7gである。



第66図 石器実測図 (1)

川入遺跡

叩石は川原の自然石を使用している。5は長径11.3cm, 短径8.4cm, 厚さ6.3cm, である。6は長径10.0cm, 短径4.5cm, 厚さ3.9cmである。砥石は2点あるがいずれも破片である。7は溝11の埋土中に含まれており弥生中期後半のものである。大きさは長さ4.2cm, 幅2.0cmと小さなものである。8は小破片である。

(正岡)

7) 瓦類

法万寺調査区のほぼ中央付近より平瓦片が数片出土している。黒灰色を呈する既成の悪いやや軟質の瓦であり、表面に布目痕、裏面に縄目痕が認められる。

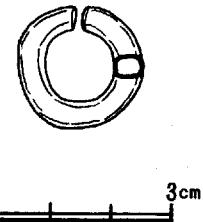
(大谷)

8) 金属製品

金環(第67図)

平安時代柱穴の抜取穴の埋土中より出土する。直径2cm, 銅地金張の作りの良い金環であり、保存状態も非常に良い。

(大谷)



第67図 金環実測図

第8章 高縄手調査区

足守川の東につらなる水田地帯である。東側では用水路をはさんで法万寺の調査区になる。古地形からみると、旧足守川は法万寺の東側を流れており、その西に微高地が形成されている。この調査区はその法万寺の微高地の後背湿地にあたる部分で、そのためトレンチの土層観察では、淡い黄灰色の粘質土で堆積層からなっている。遺構は表土下約60cmで条里制の溝と思われるのを確認したのである。出土する遺物は奈良時代、平安時代の須恵器、土師器が中心に出土する。他に備前焼片、また弥生式土器片も小量含まれている。おそらく、遺構・遺物などからみて、この地域は平安時代以降に形成されたものと思われる。

(枝川)

第1節 遺構

1) 溝 (第68図、図版13—1)

この調査区でただ一つの遺構である。表土下約60cmで暗灰色粘土を切り込んでおり、溝内は灰白色の粘土になっている。真北にはほぼ直交して東西約100m検出した。両端は水路によって切られており、確認することができなかった。溝の幅は約70cm、深さは深いところで30cmあり、一部やや両側に広まる部分があり、やや蛇行した状態で東西に延びている。

出土遺物はわずかで、そのうち土師器の杯（第70図1、2）が出土している。色調は灰白色を呈し、高台ははりつけ高台である。焼成は比較的良好なものである。これらの遺物は平安時代のものと思われる。おそらく溝も、その頃に埋没したものと思われる。なお、方位および年代などからみてこの溝は条里制遺構と思われる。

(枝川)

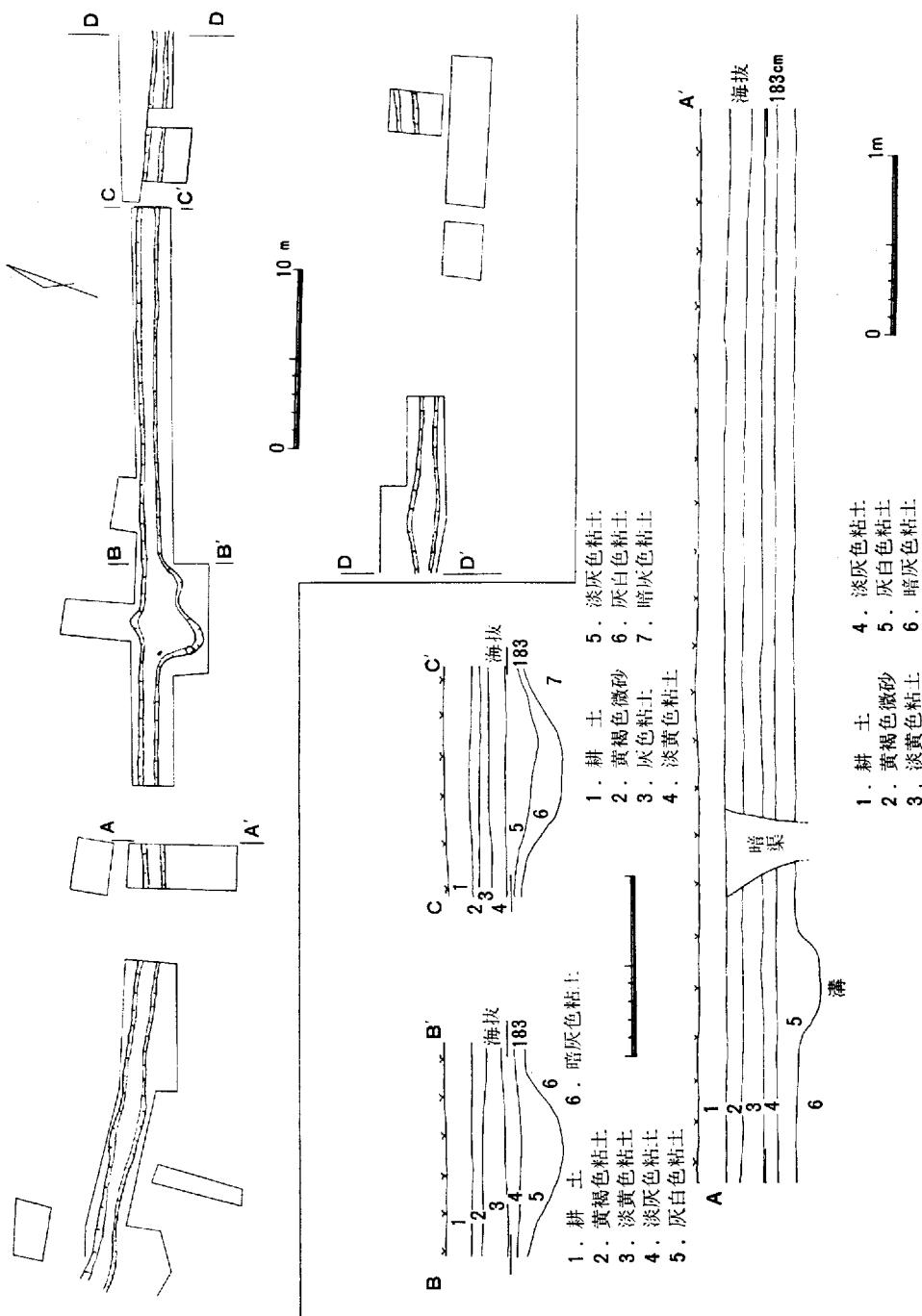
第2節 遺物

1) 土器

須恵器では高台の付く杯（第69図3、4、5、）と壺か瓶の底部と思われるもの（6）である。杯は口径16.5cmあり、高台は低い。どれも焼成はよく、青灰色をしている。土師器は杯か壺（10、11、12、13、14、15）と思われるものと杯（7、8）・皿（9）などが出土している。杯か壺と思われる高台のつくものは、低いものとやや高く外方に張り出すものなどがある。いづれもはりつけ高台である。焼は比較的よく色調は灰白ないし乳白色を呈する。杯の口径は11cmあり、底は平たい。皿は糸切底で（9）は口径7.5cmで器高は8mmと低い。他に赤褐色の備前焼（16）等も含まれている。

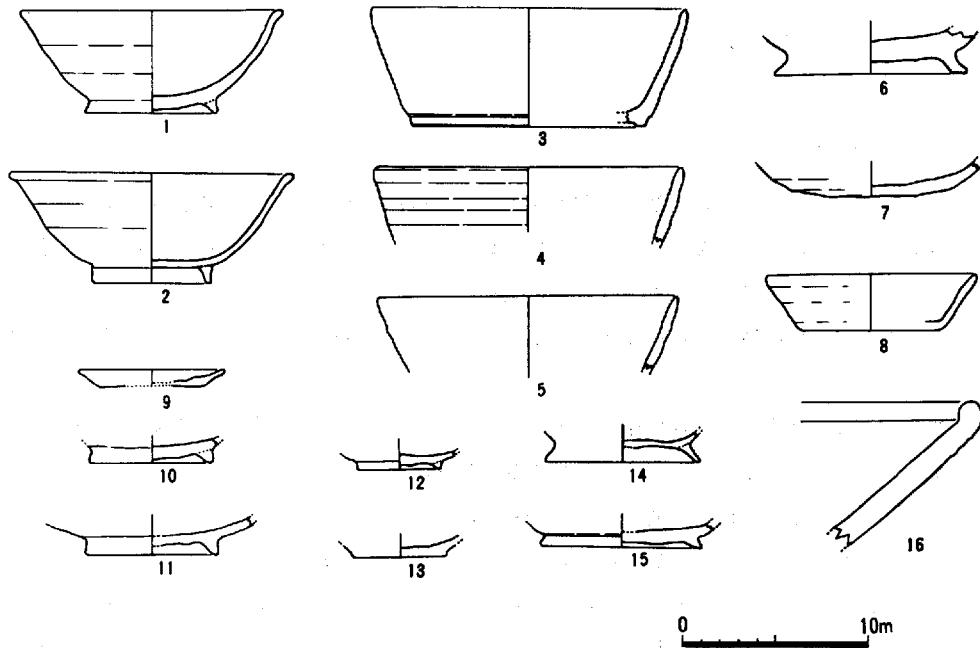
(枝川)

川 入 遇 跡



第68図 高橋手調査区溝平面及び土層断面図

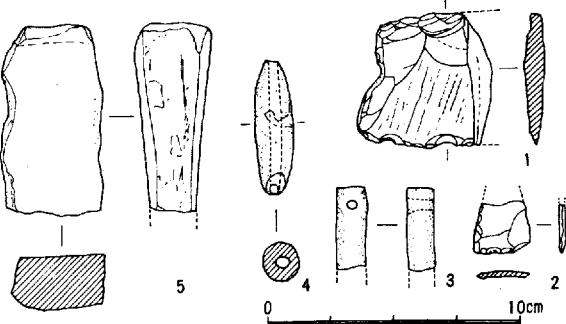
川入遺跡



第69図 高縄手調査区出土遺物実測図(上)

2) 石器 (第70図 1, 2)

高縄手調査区には弥生時代の遺構は存在しないが、上手の微高地が川の氾濫によって削られ、石器が土砂とともに運ばれたものである。石器は石庖丁 1, 石鎌 1, 砥石 1 がある。石庖丁（1）は半分しかないが、サヌカイト製で紐かけのくりこみがある。大きさは現存長 5.3cm, 幅 5.3cm, 厚さ 0.9cm である。石鎌は平基式で先端部を欠



第70図 石器、土錐実測図(上)

失している。現存長 2.0cm, 基部の幅 2.3cm, 厚さ 0.2cm, 重さ 2.8g である。砥石（5）は砂岩製で長さ 7.6cm, 幅 3.9cm, 厚さ 1.9~3.0cm で半分しか残っていない

(正岡)

3) 土錐 (第70図 3, 4)

土錐は 2 点ある。3 は折れているが棒状を呈し、端部に直径 0.4cm の穴があけられている。現存長 3.3cm, 直径 1.2cm, 重さ 5.5g である。4 は紡錘形で直径 0.4cm の穴が通り、長さ 5.4cm, 直径 1.4cm, 重さ 12.3g である。

(正岡)

第9章 まとめ

1 住居址について

川入遺跡では川入調査区で5軒、法万寺調査区で2軒と他に不明確なもの2の住居址を検出した。しかし全容を確認したのは川入調査区の102号住居址と105号住居址の2軒だけで他はどれも保存区域、または用地外にかかる部分があり又はその調査である。

川入調査区での住居址は微高地の中ほどに位置している。その内、103号住居址は、西端よりで確認した。

法万寺調査区では、微高地の東西両端で1軒ずつと中央部分で住居址と思われるものを検出したのである。検出した住居址はほとんどが水田整地の為、削平されており、わずかな残存状態であった。

住居址の平面プランは大道西Ⅰ調査区の101号住居址は不整円形状であるが102号住居址、103号住居址は隅丸方形をしている。他の住居址についてはすべて方形と思われる。

出土遺物は、101号、102号、103号では他の住居址にくらべて床面において土器片が散乱して出土した。特に102号についてはほぼ完形の高杯、小壺と砥石、そして中央部分のくぼみ内では鉄斧が1点出土した。

これら住居址の時期については大道西Ⅰ調査区での101号、102号、104号、105号は出土遺物などからみて、弥生時代後期後半頃で、雄町10類（註一1）に属する。この内102号と105号は切合い状態からみると105号の方が102号より新しいが時期差はあまりない。103号は酒津式に類似するがやや新しく思われ雄町12類（註一2）に属すると思われる。

法万寺調査区の301号、302号と他の不明確なものは、古墳時代のもので雄町14類（註一3）に属すると思われる。

（枝川）

註一(1)～(3) 岡山県教育委員会「埋蔵文化財発掘調査報告」1972

2 溝と水田址について

溝は各調査区で検出されるもっとも一般的な遺構である。溝には水田に水を引く用水路、又排水路などの他にもいくつかの用途があるが、今回検出された溝の多くは水田に関する用排水の溝である。溝は立地場所から微高地の上面に所在するものとそれ以外とに分けられる。溝の大部分はほぼ南北方向である。ただ、一部に東西方向の溝もみられる。大道西Ⅰ調査区ではほぼ中央部に南北方向の幅約3m、深さ1mの溝があり何回も改修がおこなわれている。埋土中には弥生時代中期後半から弥生時代後期、古墳時代前期の土器片が含まれている。弥生時代後期の水路は直角に東側に枝分れし、取水口であることがわかる。東側にはさらに2本の溝があり蛇行するがほぼ南北方向である。法万寺においても、微高地の中央部に各時期の溝が多数切り合った状態で検出される。現在残っている溝では弥生時代中期後半の溝がもっとも古く、方位は南北方向である。大きさは幅1.9m、深さ0.6mと大きい。その後、酒津式土器を含む溝も同じ位の大きさであるが、王泊6層期になると幅6m、深さ1mの大型水路が出現する。この大型水路も幅2.1m深さ1mの枝分れの水路がみられる。下部の埋土は

川入遺跡

すべて灰色粘土である。埋土上層は古墳時代中頃の土器を含む細砂によって埋没している。この水路は大型水路の上に位置し方向ともまったく一致している。古墳時代後期以降の水路はやや東側によった位置に認められる。水路の方向は南北方向で奈良時代まで利用されている。これらの他に、幅約30cmの溝が南北方向と東西方向に並んでいる。これらは奈良時代のもので建築遺構に伴うものと考えられる。八幡西調査区では南北方向に位置する7～8世紀の水路が検出されている。高繩手調査区では東西方向の水路が認められ、条理の方向と一致することから条理制施行期の水路と推定される。以上が川入遺跡における溝の概要である。

微高地の形は各調査区の古地形に述べられているごとく、高い部分とやや低い部分とから成っている。高い部分には住居址などの遺構が認められ、生活の領域であることがわかる。やや低い部分は水路や平坦な灰色粘土の堆積状況から水田として利用された区域と考えられる。弥生時代中期には雄町遺跡(註一1)においても微高地上に溝が認められ、井堰も確認されていることから微高地の低位部分に水田域を考えることは無理がない。この時期における古地形では、川は深く。後背湿地も深い沼状を呈していることから、川と後背湿地の部分を水田と考えることは困難であろう。その後、入溝調査区において南北方向の溝状遺構があり、埋土中に酒津式に類似する土器片を含んでいることから、この時期にはこの部分まで後背湿地の水田化が進行したと考えることもできる。また、八幡西のもっとも低い部分に南北方向の溝が検出された。年代は埋土中の遺物から7～8世紀である。大道西から八幡西にいたる後背湿地は北に蛇行する自然堤防に囲まれている。この東西0.6km、南北1.3kmが排水されて水田化が行われたことがわかる。法万寺西側の後背湿地においては、古墳時代前期の水田域の推定地以外でも奈良時代の遺物が広く高繩手まで認められる。奈良時代の土器を検出する土層の下にマンガンの結核がみられることから奈良時代までには水田化されていることが確認される。大道西I調査区の西側、河道に面した平坦面はいわゆる「川田」と呼ばれ、現在も同様な水田がみられる。

溝が微高地の中央部にあるため、この部分に水を引くには数mの上流において河道から取水がなされているはずである。すると用水計画はかなり広い地域にわたって実施されたものであることがわかる。また、古墳時代前半までは多くの遺跡で微高地の上面に多数の溝が認められる。船山遺跡(註一2)においても古墳時代前期には幅2m、深さ1.5mの水路が微高地の中央部にあり、同様な傾向が指摘される。古墳時代前期以前の期間が主として微高地の低位面をもっとも中心的に利用された時期であろう。その後、後背湿地の排水を行うより大規模な土木工事の実施によって開田が行われていたことが推測される。この事業は後世までひきつづき実施されるが奈良時代頃には川入周辺はほとんど完成していることが高繩手の水路などからも推定される。

(正岡)

註 (1), (2)前掲「雄町遺跡」

3 奈良平安時代の建物について

<大道西I調査区>

大道西I調査区は備中賀夜郡庭瀬郷に属する。当調査区において明瞭な遺構は検出し得なかったが、出土遺物等から寺址あるいはそれに代わる瓦葺きの建物をもつ施設の存在を推定することができる(注一1)。瓦が一種類のみであり、差し変え瓦が認められないことから短いうちに廃絶したも

川入遺跡

のと思われる。この施設の区域は当調査区の南に存する三十番神社付近を中心とすると考えられる。又、三十番神社前面の道の方向は築地状遺構の方向とほぼ一致する。

<法万寺調査区>

法万寺調査区は備中都宇郡撫川郷に属する。大道西Ⅰ調査区との間に存在する旧河道が郡境である。当調査区は北に広がる遺跡の南端にあたる。今回の調査で7世紀代の井戸、奈良・平安時代の建物が検出されている。柱穴内で綠釉陶器等が出土している平安時代の建物はその間取を明瞭にすることはできなかった。しかし、倉庫等の施設とは考えられず住居等の施設と考えられる（注—2）。

（大谷）

- 註—(1) 惣瓜廃寺等には認められる塔心礎が付近にも存在しないことなどから寺院と積極的に言いがたい。寺院以外の可能性として、水駅、郡津に伴う施設が考えられるのではないか（？）。
- (2) 大道西Ⅰ調査区と同じく、津の施設の可能性が考えられよう。綠釉陶器・青磁等の大量の存在等から法万寺調査付近に足守川下流域の中心的な津があったと考えられるのではないか（？）。



川入遺跡付近 航空写真 比例尺1/4000

図版 2



2-1 川入遺跡遠景（足守川堤防より東方を望む）



2-2 八幡西調査区土手状遺構（東から）



3-1 大道西Ⅰ調査区遺構全景（西から）

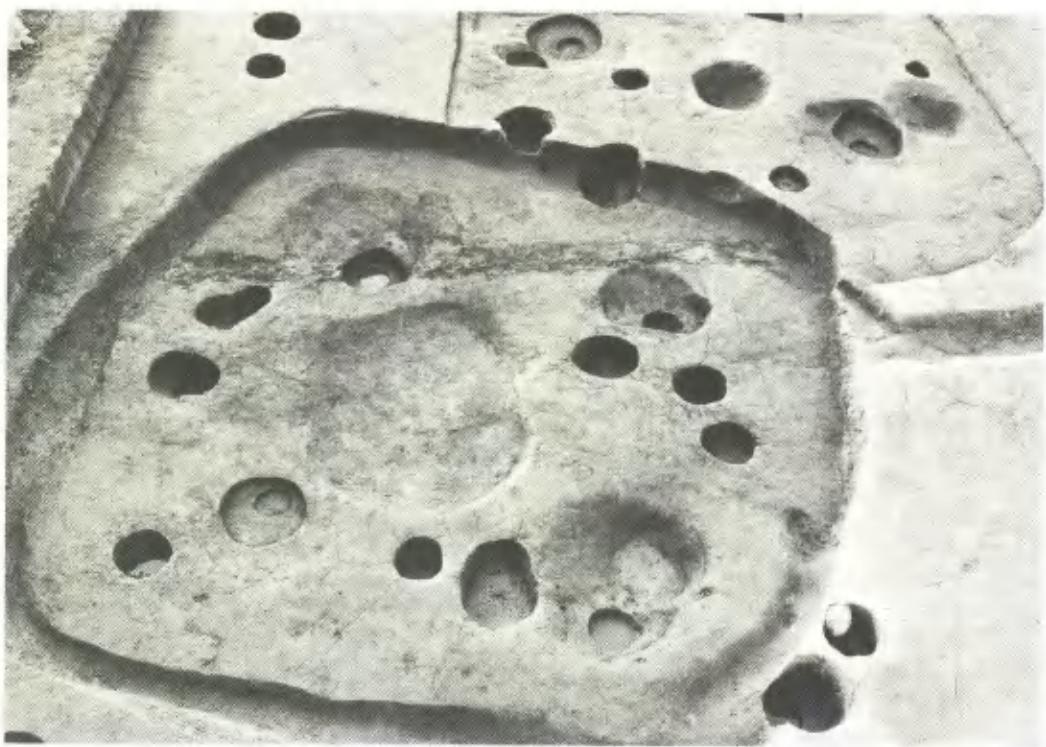


3-2 同上 築地状遺構（西から）

図版 4



4-1 大道西Ⅰ調査区、103号住居址遺物出土状況（南から）



4-2 同上 102, 105号住居址（東から）



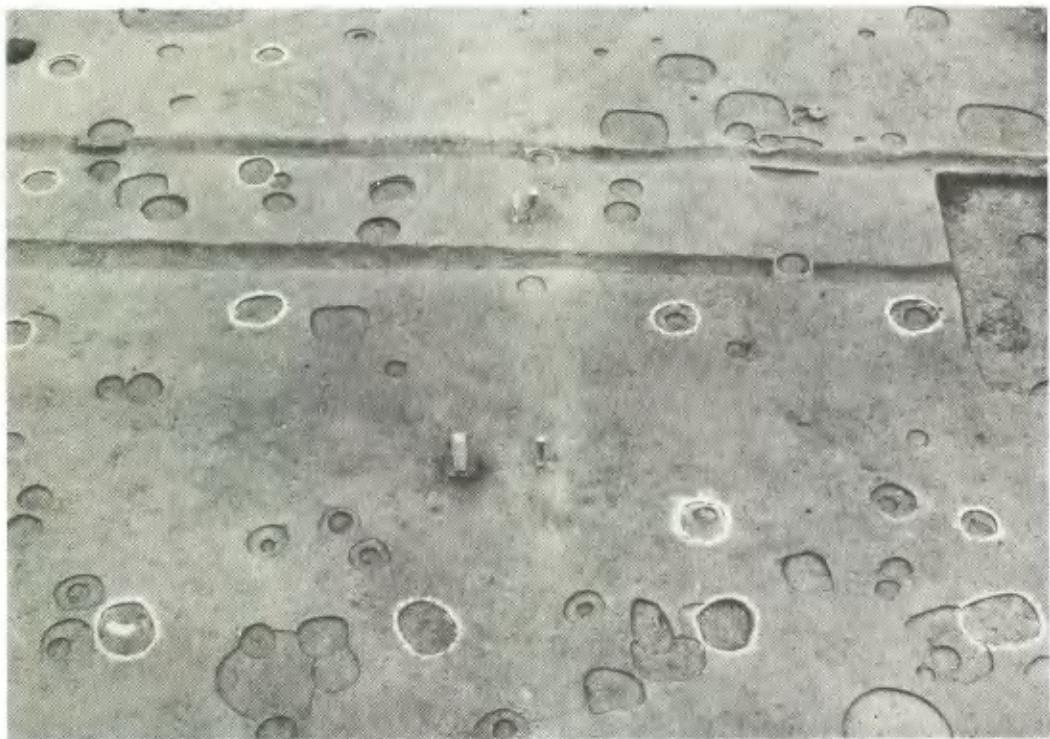
5-1 大道西 I 調査区 溝106と水田跡（東から）



5-2 大道西 II 調査区 井戸201（南から）



6-1 法万寺調査区 側道敷遺構全景（東から）



6-2 同上 第2 橋脚位置全景（東から）



7-1 法万寺調査区 第3 橋脚位置全景（東から）



7-2 同上 溝（東から）

図版 8



8-1 法万寺調査区 井戸302（南から）



8-2 同上 井戸302（南から）



9-1 法万寺調査区 井戸301遺物出土状況（南から）



9-2 同上 馬骨出土状況（南から）



10-1 大道西 I 調査区 築地状遺構周辺出土の 瓦



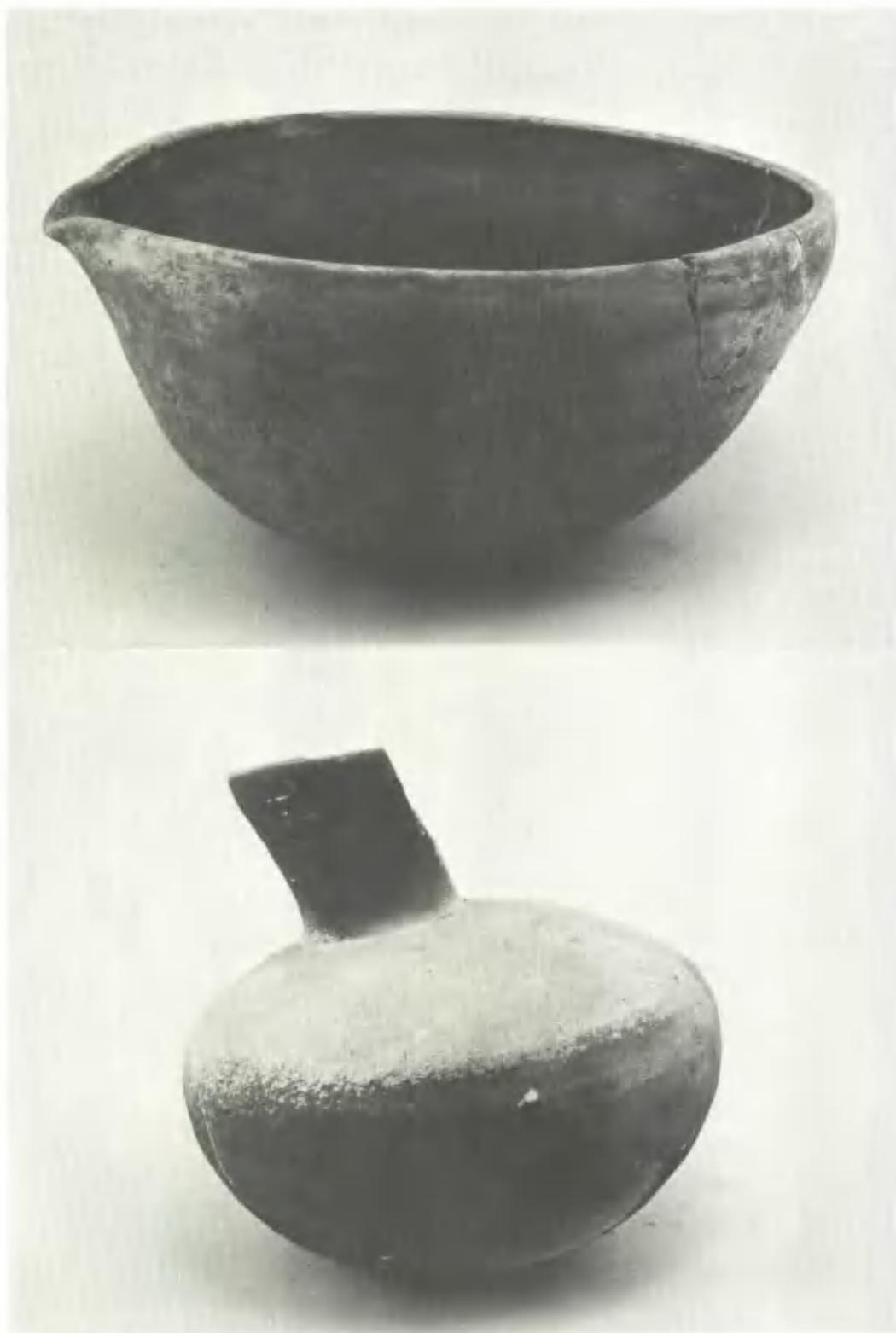
10-2 大道西 I 調査区 築地状遺構周辺出土の 須恵器



II-1 大道西II調査区 井戸201出土状況



II-2 大道西II調査区 井戸201中の遺物



法万寺調査区 井戸302 出土遺物



13-1 高縄手調査区 溝全景



13-2 大道西Ⅰ調査区 井戸101出土遺物

第Ⅲ部 上東遺跡の調査

上 東 遺 跡

目 次

は ジ め に	106
第1章 第一次トレンチ調査の概略	107
第2章 第一次調査後の経過	109
第3章 上東遺跡各調査区の遺構、遺物の概略	112
第1節 立溝調査区	112
第2節 才の町調査区	112
1) D — Z	112
2) D — Y	116
3) D — D	116
4) D — B	116
5) D — C	116
6) D — A	116
7) D — W	119
8) P — チ	120
9) P — イ	120
10) P — ハ	125
11) P — ロ	129
12) P — ニ	130
13) P — ホ	132
14) P — ヘ	133
15) P — ト	137
16) P — ホ'	148
第3節 鬼川市地区の微高地上の遺構遺物の概略	148
1) P — イ (鬼川調査区)	149
2) 鬼川斜面の出土遺物	154
3) P—151 (J—10)	161
4) P—203 (J—10)	163
5) H—4 (J—10)	163
6) H—1 (J—10)	163
7) P—162 (J—10)	165
8) P—158 (J—10)	165
9) P—191 (J—10)	165
10) P—205 (J—10)	165
11) P—154 (J—10)	165
12) P—166 (J—10)	165

上 東 遺 跡

13)	P— 23 (J—10)	165
14)	H— 3 (J—10)	169
15)	H— 2 (J—10)	169
16)	P— 43 (J—15)	172
17)	P— 3 (J—15)	172
18)	井戸—I (J—15)	172
19)	H— 8 (J—20)	172
20)	P— 19 (J—20)	177
21)	P— 44 (J—20)	178
22)	P— 28 (J—20)	179
23)	P— 53 (J—20)	182
24)	P— 69 (J—20)	182
25)	P— 106 (J—20)	185
26)	製 塩 炉 (J—20)	186
27)	H— 7 (J—20)	188
28)	P— 123 (J—20)	190
29)	H— 9 (J—25)	194
30)	P— 2 (J—25)	195
31)	P— 3 (J—25)	198
32)	P— 4 (J—25)	199
33)	D— 3 (J—25)	202
34)	D— 2 (J—25) 及び付け変え用水トレンチ土器だより	204
35)	P— 9 (J—30)	207
36)	P— 11 (J—30)	207
37)	P— 10 (J—30)	208
38)	井戸—I (J—30)	212
39)	D— 一 (J—45)	215
40)	D— 二 (J—45)	215
41)	D— 三 (J—45)	217
42)	D— 四 (J—45)	217
43)	D— 五 (J—45)	217
44)	D— 六 (J—45)	217
第4節 田所調査区及び下田所微高地上の遺構、遺物の概略		222
1)	D— 1 (J—70)	222
2)	D— 4 (J—70)	222
3)	D— 2 (J—70)	222

上 東 遺 跡

4)	D— 3 (J—70)	223	
第5節 才の元調査区.....		223	
1)	井戸一Ⅲ.....	223	
2)	P — 1	228	
3)	P — 2	227	
4)	P — 4	228	
5)	P — 5	228	
6)	D — G	228	
7)	火葬墓1・2	228	
第6節 才の元調査区の西端から五反田地区及び以西（九ツ田、上坂田地区）			
		の調査.....	229
第4章 まとめにかえて.....		231	
1)	土器編年について.....	231	
2)	製塩土器について.....	234	

図 目 次

第1図 川入・上東・御堂奥遺跡・二子窯址周辺地形図.....	105
第2図 上東遺跡周辺地形図 (1/2,500)	折りこみ
第3図 立溝地区出土遺物.....	112
第4図 才の町地区平面図及び断面 (縮尺1/100)	折りこみ
第5図 才の町調査区 溝—Z出土遺物 (1)	113
第6図 才の町調査区 溝—Z出土遺物 (2)	114
第7図 才の町調査区 溝—Z出土遺物 (3)	115
第8図 才の町調査区 溝—Y出土遺物.....	117
第9図 才の町調査区 溝—B出土遺物.....	118
第10図 才の町調査区 溝—A出土遺物.....	119
第11図 才の町調査区 P—チ遺構及び出土遺物.....	120
第12図 才の町調査区 P—イ平面及び断面図 (縮尺 1/20)	121
第13図 才の町調査区 P—イ出土遺物 (1)	122
第14図 才の町調査区 P—イ出土遺物 (2)	123
第15図 才の町調査区 P—イ出土遺物 (3)	124
第16図 才の町調査区 P—ハ平面及び断面図 (縮尺 1/20)	126
第17図 才の町調査区 P—ハ出土遺物 (1)	127
第18図 才の町調査区 P—ハ出土遺物 (2)	128
第19図 才の町調査区 P—ハ出土遺物 (3)	129
第20図 才の町調査区 P—ロ平面及び断面図 (縮尺 1/20) 及び写真.....	130

上 東 遺 跡

第21図 才の町調査区 P—口出土遺物	130
第22図 才の町調査区 P—ニ出土遺物	131
第23図 才の町調査区 P—ホ遺構及び出土遺物	132
第24図 才の町調査区 P—ヘ遺構及び出土遺物（1）	133
第25図 才の町調査区 P—ヘ出土遺物（2）	135
第26図 才の町調査区 P—ヘ出土遺物（3）	136
第27図 才の町調査区 P—ト平面及び断面図（縮尺 1/20）	138
第28図 才の町調査区 P—ト出土遺物（1）	139
第29図 才の町調査区 P—ト出土遺物（2）	140
第30図 才の町調査区 P—ト出土遺物（3）	141
第31図 才の町調査区 P—ト出土遺物（4）	142
第32図 才の町調査区 P—ト出土遺物（5）	143
第33図 才の町調査区 P—ト出土遺物（6）	144
第34図 才の町調査区 P—ト出土遺物（7）	145
第35図 才の町調査区 P—ト出土遺物（8）	146
第36図 才の町調査区 P—ト出土遺物（9）及びP—ホ'出土遺物	147
第37図 亀川調査区 平面及び断面図（縮尺 1/100）	折りこみ
第38図 亀川調査区 P—イ平面及び断面図（縮尺 1/20）	151
第39図 亀川調査区 P—イ出土遺物	152
第40図 亀川調査区 包含層下層出土遺物（1）	153
第41図 亀川調査区 包含層下層出土遺物（2）	155
第42図 亀川調査区 包含層下層出土遺物（3）	156
第43図 亀川調査区 斜面～川底出土木器	157
第44図 亀川調査区 出土石器	159
第45図 亀川調査区 包含層上層出土遺物	160
第46図 東鬼川市第一橋脚（J—10）及び第一側道（J—15）平面図（縮尺 1/100）	折りこみ
第47図 P—151（J—10）平面及び断面図（縮尺 1/20）	161
第48図 P—151（J—10）出土遺物	162
第49図 P—203（J—10）出土遺物	162
第50図 H—4（J—10）出土遺物	163
第51図 H—1（J—10）平面・断面及び出土遺物	163
第52図 P—205・206・191（J—10）平面及び断面図	164
第53図 P—154・P—166・P—23（J—10）平面及び断面図	165
第45図 J—10調査区各土壤出土遺物	166
第55図 P—23（J—10）出土遺物	167
第56図 H—3（J—10）平面及び断面図（縮尺 1/60）	167

上 東 遺 跡

第57図	H—3 (J—10) 出土遺物	168
第58図	H—2 (J—10) 平面及び断面図 (縮尺 1/60)	169
第59図	H—2 (J—10) 出土遺物	170
第60図	東鬼川市地区包含層出土遺物	171
第61図	P—43 (J—15) 出土遺物	172
第62図	P—3 (J—15) 出土遺物	172
第63図	井戸—I 及び P—3 (J—15) 平面及び断面図	173
第64図	井戸—I (J—15) 出土遺物 (1)	174
第65図	井戸—I (J—15) 出土遺物 (2)	175
第66図	井戸—I (J—15) 出土遺物 (3)	176
第67図	東鬼川市第2橋脚 (J—20) 第2側道 (J—25) 及び第3橋脚 (J—30) 平面図 (縮尺 1/100) …折りこみ	
第68図	H—8 (J—20) 平面及び断面図 (縮尺 1/60)	177
第69図	H—8 出土遺物	178
第70図	P—19遺構及び出土遺物	179
第71図	P—44遺構及び出土遺物	179
第72図	P—28 (J—20) 平面・断面 (縮尺 1/20) 及び出土遺物	180
第73図	P—53 (右) P—55 (左) (J—20) 平面及び断面図と P—53出土遺物	181
第74図	P—69 (J—20) 平面・断面図	182
第75図	P—69 (J—20) 出土遺物及び出土木器 (縮尺 1/4)	183
第76図	P—106 (J—20) 平面及び断面図 (縮尺 1/20)	184
第77図	P—106 (J—20) 出土遺物	185
第78図	製塩炉 (J—20) 平面, 断面 (縮尺 1/20) 及び出土遺物	187
第79図	H—7 (J—20) 平面, 断面図 (縮尺 1/60)	188
第80図	H—7 内落ち込み	189
第81図	H—7 (J—20) 出土遺物	189
第82図	P—123 (J—20) 平面, 断面図 (縮尺 1/20) 及び出土遺物 (1)	191
第83図	P—123 (J—20) 出土遺物 (2)	192
第84図	P—123 (J—20) 曲物及び出土状態	193
第85図	H—9 (J—25) 平面図 (縮尺 1/60)	193
第86図	H—9 (J—25) 出土遺物	194
第87図	P—2 (J—25) 平面及び断面図 (縮尺 1/20)	195
第88図	P—25 (J—25) 出土遺物	196
第89図	P—3 (J—25) 上層平面及び断面図 (縮尺 1/20)	197
第90図	P—3 (J—25) 下層平面図 (縮尺 1/20)	198
第91図	P—4 (J—25) 平面及び断面図 (縮尺 1/20)	199
第92図	P—3 (J—25) 出土遺物	200

上 東 遺 跡

第 93図	P—4 (J—25) 出土遺物	201
第 94図	D—2・3 (J—25) 平面及び断面図	202
第 95図	D—2 (付け変え用水) 土器だまり (1)	203
第 96図	D—3 (J—25) 出土遺物平面及び北壁断面図 (縮尺/160)	203
第 97図	付け変え用水, 土器だまり出土遺物 (1)	205
第 98図	付け変え用水, 土器だまり出土遺物 (2)	206
第 99図	P—9 (J—30) 出土遺物	207
第100図	P—11 (J—30) 出土遺物	208
第101図	P—10 (J—30) 平面及び断面図 (縮尺 1/20)	208
第102図	P—10 (J—30) 出土遺物 (1)	209
第103図	P—10 (J—30) 出土遺物 (2)	210
第104図	井戸一Ⅱ (J—30) 平面, 断面図	211
第105図	井戸一Ⅱ (J—30) 出土遺物	213
第106図	西鬼川市第1橋脚及び第2側道平面図 (縮尺 1/100)	折りこみ
第107図	D一一 (J—45) 出土遺物	215
第108図	D一二 (J—45) 出土遺物	215
第109図	D三四 (J—45) 出土遺物	216
第110図	D一五 (1009~1017), D一六 (1011~1018) (J—45) 出土遺物	217
第111図	鬼川市微高地各地点出土石器類他	218
第112図	鬼川市微高地各地点出土砥石他	219
第113図	鬼川市微高地各地点出土石錘他	220
第114図	下田所第1橋脚位置 (縮尺 1/100)	折りこみ
第115図	下田所第2橋脚位置 (縮尺 1/100)	折りこみ
第116図	才の元 調査区平面図 (縮尺 1/100)	折りこみ
第117図	下田所各遺構出土遺物	222
第118図	才の元調査区 井一Ⅲ平面及び断面図 (縮尺 1/20)	224
第119図	才の元調査区 出土遺物 (1)	224
第120図	才の元調査区 出土遺物 (2)	225
第121図	才の元調査区 P—1 出土遺物	226
第122図	才の元調査区 P—2 平面, 断面図 (縮尺 1/20) 及び出土遺物	227
第123図	才の元調査区 P—5 出土遺物	228
第124図	才の元調査区 火葬墓 1	228
第125図	才の元調査区 溝C 出土遺物	229
第126図	才の元調査区 西端から五反田調査区東端位置及び平面図 (縮尺 1/100) 折りこみ	

上東遺跡 写 真 図 版 目 次

- 図版1 上東遺跡 (才の町地区), 岩倉遺跡, 航空写真(1), 日本国有鉄道提供
 (縮尺 1/4,000) 1

上 東 遺 跡

図版 2	上東遺跡（鬼川市調査区他）航空写真(2), 日本国有鉄道提供（縮尺 1 / 4,000）	2
図版 3	(1) 上東遺跡遠望（北側王墓山より望む）	3
	(2) 上東遺跡近景（足守川西堤より望む）	3
図版 4	(1) 上東遺跡近景（発掘着手前一亀川調査区より鬼川市の微高地以西を望む—）	4
	(2) 上東遺跡近景（発掘着手前一才の元調査区より以東を望む—）	4
図版 5	才の町調査区大型土壙群	5
図版 6	(1) 才の町調査区 溝一 Y	6
	(2) 才の町調査区 溝一 Y断面	6
図版 7	(1) 才の町調査区 P一ハ鋤出土状況	7
	(2) 才の町調査区 P一ハ木製容器出土状況	7
図版 8	才の町調査区 P一へ遺物出土状況	8
図版 9	(1) 才の町調査区 P一へ断面及び遺物出土状況	9
	(2) 才の町調査区 P一へ壁面を鋤で掘りこんだあと	9
図版10	(1) 才の町調査区 P一ト上部断面	10
	(2) 才の町調査区 P一ト上面遺物出土状況	10
図版11	才の町調査区 P一ト遺物出土状況各様	11
図版12	才の町調査区 P一ト遺物出土状況	12
図版13	(1) 亀川調査区近景（近世池状遺構他—西の農道から—）	13
	(2) 東鬼川市第1橋脚位置遺構出土状況	13
図版14	亀川調査区 斜面製塩土器（台脚部）出土状況	14
図版15	(1) 亀川調査区 P一イ	15
	(2) 亀川調査区 堆積斜面	15
図版16	東鬼川市第1橋脚位置第2号住居址	16
図版17	(1) 東鬼川市第1橋脚位置第3号住居址周辺	17
	(2) 東鬼川市第1橋脚位置第3号住居址	17
図版18	(1) 東鬼川市第1側道遺構出土状況	18
	(2) 東鬼川市第1側道, 井戸—I 遺物出土状況	18
図版19	(1) 東鬼川市第1側道, 井戸—I 遺物出土状況	19
	(2) 東鬼川市第一側道, 井戸—I 木杵出土状況	19
図版20	(1) 東鬼川市第2橋脚位置遺構出土状況（東から）	20
	(2) 東鬼川市第2橋脚位置遺構出土状況（西から）	20
図版21	(1) 東鬼川市第2橋脚位置第8号住居址	21
	(2) 東鬼川市第2橋脚位置第7号住居址	21
図版22	東鬼川市第2橋脚位置製塩炉	22
図版23	(1) 東鬼川市第2橋脚位置第7号住居址内土壤	23
	(2) 東鬼川市第3橋脚位置P—10遺物出土状況	23

上 東 遺 跡

図版24	東鬼川市第2側道、P—2, 3, 4遺構及び遺物出土状況	24
図版25	(1) 東鬼川市第2側道P—2	25
	(2) 東鬼川市第2側道P—3, 製塩土器出土状況	25
図版26	東鬼川市第2側道P—4	26
図版27	(1) 東鬼川市第2側道P—2, 溝2	27
	(2) 東鬼川市第2側道溝—2, 3	27
図版28	(1) 東鬼川市第2側道第9号住居址(鎌倉時代)	28
	(2) 東鬼川市第2橋脚位置P—123(鎌倉時代井戸)	28
図版29	(1) 東鬼川市付け替え用水位置溝—2上面土器溜り	29
	(2) 東鬼川市付け替え用水位置溝—2内遺物出土状況	29
図版30	(1) 東鬼川市第3橋脚位置井戸—I	30
	(2) 東鬼川市第3橋脚位置井戸—I土止め杭及び板	30
図版31	(1) 西鬼川市第2側道溝群	31
	(2) 西鬼川市第2側道溝—I四	31
図版32	(1) 下田所第1橋脚位置から西を望む	32
	(2) 下田所第1橋脚位置遺構出土状況	32
図版33	(1) 才の元調査区井戸—I	33
	(2) 才の元調査区溝—C内遺物出土状況	33
図版34	才の町調査区P—ト出土遺物(1)	34
図版35	才の町調査区P—ト出土遺物(2)	35
図版36	才の町調査区P—ト出土遺物(3)	36
図版37	才の町調査区P—ト出土遺物(4)	37
図版38	東鬼川市第1側道井戸—I出土遺物(1)	38
図版39	東鬼川市第1側道井戸—I出土遺物(2)	39
図版40	東鬼川市第1側道井戸—I出土遺物(3)	40
図版41	東鬼川市第2側道P—2(781, 784)及び第3橋脚位置P—10 (888, 891, 893, 900)出土遺物	41
図版42	東鬼川市第2橋脚位置P—123(鎌倉時代井戸)出土遺物	42
図版43	(1) 東鬼川市微高地各出土遺物	43
	(2) 各地点出土土製品	43
図版44	(1) 才の町調査区P—イ出土えぶり	44
	(2) 才の町調査区P—イ出土フォーク状鋤	44
図版45	才の町調査区P—ハ, 出土鋤(上一表, 下一裏)	45
図版46	(1) 才の町調査区P—ト出土木製容器	46
	(2) 東鬼川市第2橋脚位置P—69出土木製品	46
図版47	上東遺跡各地点出土石器	47

上 東 遺 蹤



第1図 川入・上東・御堂奥遺跡・二子御堂奥古窯址周辺図

は じ め に

倉敷市上東遺跡（旧都窪郡庄村上東—1971（昭46）年3月倉敷市に編入合併）は、岡山市と倉敷市の市街地のほぼ中間にあたる。旧山陽道が北2km程の所を、また山陽本線、国道2号線が南1km～2kmの所を東西に走っている。東を足守川が流れ、西には造山・作山・国分寺・尼寺、こうもり塚を北から北面に見おろす。150～200mの日差山、竜王山等の山塊がつらなっている。南はかつて瀬戸内の島であった早島の低丘陵が見られ、北には王墓山古墳群が存する40～50mの低丘陵地帯がみられる。1932（昭7）年以降、田畠の地下げ、暗渠、水路、温室、農道建設作業、農道付け替え工事などに伴い多量の土器片等が出土することで知られ、大規模な集落跡等が想定されていた。

1952（昭27）年発行の「全国遺跡地名表（岡山県）」においては、中島、鬼川市、鍛治東、畑ヶ間、財の東、樋田、平松、才の町等の土器が出土した小字名を中心に遺跡群としてつかまってきた。

その後、1954（昭29）年これらの多量の出土遺物をもとに、坪井清足、鎌木義昌らによって編年が試みられ（註一1），上東式土器と仮称されて中部瀬戸内地方の弥生時代後期を代表する標式遺跡として位置付けられた。また小規格な工事などによって出土した壺棺の報告等が前後して報告され（註一2），その遺跡の重要性が指摘されてきた。

しかし、弥生式土器等が多量に出土するにもかかわらずその遺構等についてはほとんど不明に近い状態であった。小規模な工事等によって遺構も部分的に壊されてきたけれども、現在まで水田として遺跡の大部分は保存してきた。

しかし、山陽新幹線はこの上東遺跡の中心地である才の町から東鬼川市、西鬼川市にかけて東西に横切ることになったため上東遺跡に巨大な東西トレーニングを入れたような結果になった。

岡山駅舎を起点に倉敷トンネル東入口が決定した段階で、川入・上東遺跡とも路線布設がさけられない状況となっていた。このため県教委は、第一次調査を実施し、その結果にもとづいて、国鉄に対して橋脚間保存を要望し、その橋脚位置及び側道敷（工事用取付道路）等の調査を行ってきたのである。

（伊藤）

以下、上東遺跡の第一次調査を含めた報告をする。

註一(1) 坪井清足、鎌木義昌、『岡山県都窪郡庄村、上東遺跡の土器』

『弥生式土器聚成図録解説第六輯』日本考古学会弥生式土器文化研究特別委員会編（東京考古学会編），1955

鎌木義昌、『中国地方の弥生式土器』、『日本考古学講座・4』—弥生文化—1955

(2) 近藤義郎、『備中都窪郡庄村上東出土の弥生式壺棺』『古代学研究』第1卷第2号、1951

問塙茂子、『岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の壺棺』、『瀬戸内考古学』第2号、1958

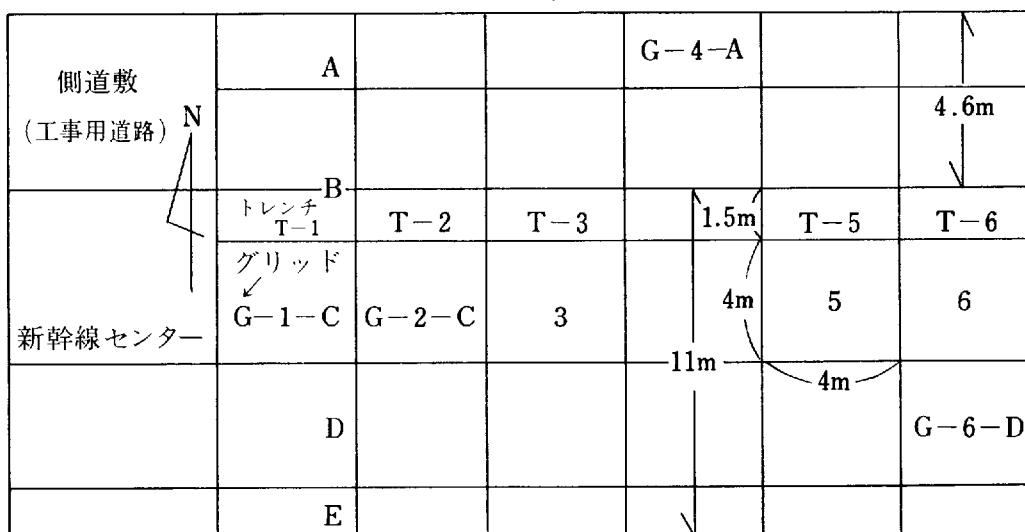
第1章 第一次トレンチ調査の概略

第1次調査は1970（昭45）年以降山陽新幹線（岡山以西）埋蔵文化財分布調査時、あるいは調査着手前において、土器の多少にかかわらず散布していた場所を調査対象とした。これは、遺跡の範囲、遺構の過密を確認し、文化庁、国鉄に対して保存（設計変更）を要望するためのものであった。調査範囲の東は、倉敷市日畠立溝(168K040m)足守川西堤下から西は、倉敷市上東上坂田(170K114m)県道高松～下庄線より西に約100mの所で、総延長1.2km以上にわたる。このため小字名をもとに用水、農道を区切りに調査地区を設定した。東の足守川西堤下から順次記すと下表のようになる。

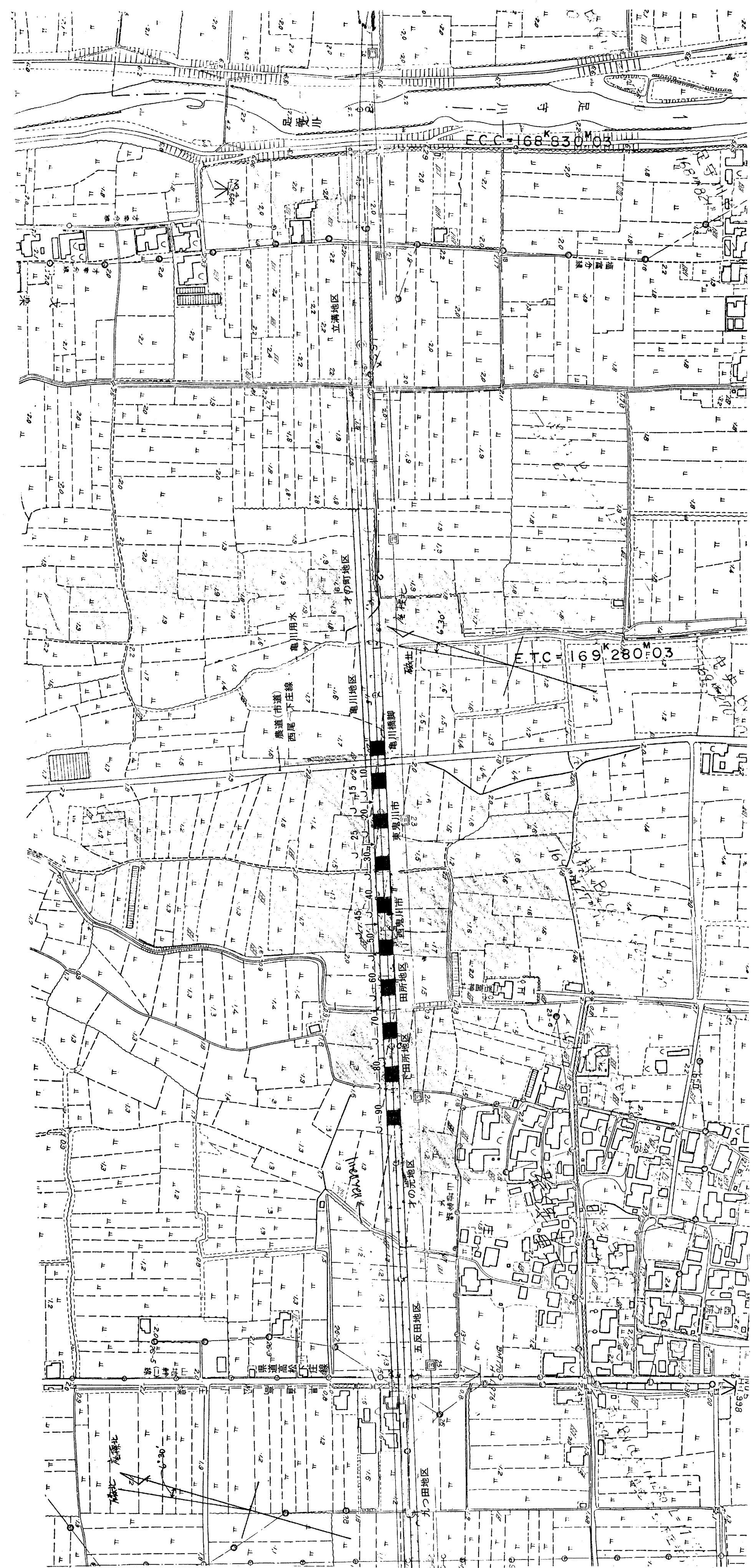
地 区 名	東	西	区間
立 溝	足守川の西堤下 (268K840m)	下庄用水 (169K35m)	約200m
才 の 町	下庄用水 (169K35m)	亀川 (199K253m)	約200m
亀 川	亀川用水 (169K253m)	農面道一市道一 (169K355m)	約100m
東 鬼 川 市	〔農免道 (169K355m) 一市道一〕	〔西鬼川市との境の用水 (169K448m) 田所地区との境の農道 (169K522m)	約 90m
西 鬼 川 市	東鬼川市との用水 (169K448m)	〔下田所地区との境の用水 (169K570m)	約 70m
田 所	〔西鬼川市との境の農道 (169K522m)	〔才の元との境の農道 (169K638m) 五反田との境の農道 (159K770m)	約 50m
下 田 所	田所との境の用水 (169K570m)	才の元との境の農道 (169K638m)	約 70m
才 の 元	〔田所地区との境の農道 (169K638m)	五反田との境の農道 (159K770m)	約130m
五 反 田	才の元との境の農道	県道高松～下庄線 (169K880m)	約110m
九 つ 田	県道高松～下庄線 (169K890m)	上坂田との境の農道 (170K)	約110m
上 坂 田 地 区	九つ田との境の農道 (170K)	〔山地部落より南に流れる農業用水路 (170K112m)	約110m

トレンチ及びグリッド設定模式図

地 区 境 (小 字 境)



第2図 上東遺跡各調査地点（縮尺1/500）



上 東 遺 跡

各調査地区の範囲

山陽新幹線岡山以西の幅員は、岡山以東より狭く、 $11m$ でセンターから $5.5m$ ずつ、また側道敷（工事用取り付け道路）は北側に $4.6m$ である。トレントは、新幹線用地内北側に $4m$ おきに西側から巾 $1.5m$ 、長さ $4m$ のトレントを、またトレントの状況により随所に新幹線センターを基準に $4m \times 4m$ のグリッドを設定した。グリッドは各地区とも北側からA, B, C, Dと呼称することにした。（従って、トレントはすべてBグリッド南側部分の $1.5m$ にあたる。）

第一次調査の結果、上東遺跡の東西鬼川市地区を中心に個々の微高地を確認した。

立溝地区では、古墳時代から平安末～鎌倉期の微高地を、才の町地区では $60m$ 程の範囲で弥生時代中期以降の微高地を、亀川地区では、東鬼川市の微高地に続く東端部分をそれぞれ確認した。そして亀川地区的微高地が西鬼川市までつづき、西鬼川市から田所にかけていったん途切れ、下田所地区では、弥生時代～奈良時代以降の微高地を、才の元地区では、弥生時代後期以降の微高地を確認した。また五反田地区から上坂田地区にかけては後背湿地的な様相を呈しており、遺物も近、現代のもの以外はまったく見られなかった。

（伊藤）

第2章 第一次調査後の経過

第一次調査で、ある程度の概略をつかんだ5月6日（土）の段階において、現場で対策委員会を持ち、3月以降の調査状況視察の後、意見聴取および今後の調査方針等を審議願った。その結果、上東遺跡の保存、調査等に関して次のような点の確認事項を行った。

- (1) 遺跡のある程度の範囲はつかまれたと考えるが、まだ精査すべき所が残っている。
- (2) 遺跡の両端は、確実につかまれているとはいがたいので、今後もっと適確につかむ必要がある。
- (3) 側道敷部分の所で、遺構の密集度を確認するような調査を行い、軌道敷はもちろん、側道敷部分を含めた形で、文化庁、国鉄に保存を強力に呼びかける。

以上のような確認事項をもとに、その後の国鉄折衝において、次の点の確認を行った。

- (A) 側道敷=工事用道路部分の保存は、工法上、また工事用道路として使用した後は、新幹線工事が終了次第、市道（倉敷）として管理が変わるため、現状では非常に困難である。
- (B) 側道敷部分に鉄板をひき、軌道敷部分の調査が完了してから調査を行うという件は、現段階で反古にし、軌道敷と一体にした形で調査を進める。
- (C) 保存を要望している橋脚間は、具体的な数値ができるまで調査に着手しない。
- (D) 県道、高松～下庄線、および西尾～下撫川間の農免道に取り付ける橋脚位置は、全く変更される余地がない。そしてこの区間（岡山～福山）が試運転区間であることなどの理由で、早期着工、調査期間の短縮を要望してきている。

7月末までそのような状況のもとで、側道敷（工事用道路）を中心に調査を進めていた。しかし7月13日における国鉄折衝の結果、県教委、国鉄共了解点に達しなかったが、それまで県教委が保存を要望していた遺跡の中心地（下田所～東鬼川市間）橋脚幅の具体的な数値が提示された。これは、岡山以東、雄町遺跡等のように重要な遺構が検出され、その部分を橋脚で飛ぶというものでなく、第一次調査において、ある程度遺跡の範囲密集度をつかんだ段階のものであり、その後に新しく重要な遺構が発見されても変更は不可能であるというものであった。

それに伴い、調査を進めていた側道敷部分の調査は、10月末明け渡しを橋脚位置明け渡し時期の2～3月まで延長してもよい。そのかわり、農道以東～足守川西堤下までの調査を10月中で完了してほしいという要望が出された。

県教委はこの国鉄案が、今まで保存を要望していた区間の保存処置が不満足ながらもとられていると考え、この提示に従い調査を進行させることになった。

不満足と考えたのは、第1点に、国鉄が提示している数値以上の橋脚幅は不可能なのか。第2点に、農道以東の亀川、才の町両地区の橋脚保存は不可能なのか。第3点に、農道以東の調査が10月いっぱいで可能なのかどうかという点であった。

しかし、10日後の7月23日に国鉄は7月13日に提示された具体的な数値(35mスペイン)の橋脚位置の測量を実施し、杭打ちを行っていった。そのため調査も急拠、それまで調査を進めていた側道敷部分の

上 東 遺 跡

調査を7月いっぱいこれ以上掘り進めず、検出した遺構平面図のみを終了した段階で一時中断し、8月から農道以東の橋脚保存処置の取られなかつた地区、すなわち、第一次調査において遺構の存在が考えられた亀川地区、才の町地区の側道敷、軌道敷を合せた全面調査を開始した。亀川地区は11月末に部分的に未調査区を残してほぼ終了した。また、才の町地区は10月末で一応調査を終了した。その後順次国鉄の提示した橋脚位置と側道敷の調査を進めたである。12月末には全面に渡って工事発注され、工事用道路等の工事も始められ、10ヶ所の橋脚位置のうち、1月末に4ヶ所を終了し、2月からは橋脚位置2ヶ所、側道敷、橋脚保存処置のとられなかつた才の元地区などの調査を種々の工程変更（調査変更）をくり返しながら昭和48年6月10日まで行った。

以下その調査経過の概略である。

調査経過概略

山陽新幹線埋蔵文化財保護

72.3.13(昭.46) 対策委員会

3.15 第一次トレンチ調査開始

5.6 対策委員会

6.13 対策委員会

6.30 第一次トレンチ調査終了

7.1 第二次調査開始

◦農道をまたぐ橋脚位置（亀川—11月30日まで—、東鬼川市第1橋脚位置—73年6月10日まで—）の調査

◦立溝地区の調査—7月末まで—

7.23 橋脚位置ほぼ決定（35mスパン）

国鉄橋脚位置測量、杭打ち

8.1 才の町地区の調査開始—10月31日まで—

9.19 対策委員会

11.1 東鬼川市第2—73年6月まで—第3—72年12月まで—工事用道路（第1側道—12月末まで—、第2側道—73年4月まで—）の調査開始

12.4 西鬼川市第1・2橋脚位置、工事用路の調査開始—12月末まで—

12.16 対策委員会

73.1.10 東鬼川市地区付け変え用水位置の調査—2月中頃まで—

1.14 五反田地区の調査—2月中頃まで—

1.18 対策委員会

2.15 才の元地区の調査開始—3月30日まで—

2.28 五反田地区までを明け渡す。（西尾～才楽農道問題）

亀川以東を明け渡す。

才の町農道下の調査—3月4日まで—

3.1 田所、下田所地区の調査—4月27日まで—

上 東 遺 跡

- 3.8 対策委員会
3.31 才の元地区明渡す。
4.30 工事用道路全面明け渡し。（農免道ガス管配置問題）
5.1 東鬼川市第一橋脚、第二橋脚の調査
5.20 （プレハブたちのき問題）—西古松収蔵庫に移動—
6.10 調査完了
対策委員会
6.30 対策委員会
7.1 西古松収蔵庫にて担当者1～3名が整理作業
73.12.19 対策委員会（整理段段）
74.3.18 対策委員会（報告書作成）

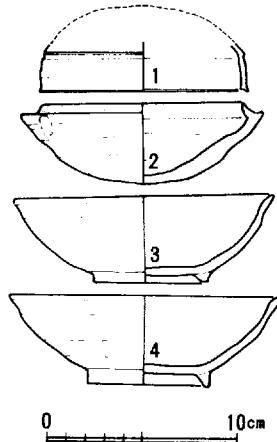
(伊藤)

第3章 上東遺跡各調査区の遺構 遺物の概要

第1節 立 溝 調 査 区

足守川堤防下西50mの所で、古墳時代、平安時代末～鎌倉時代初め頃の黒褐色有機土層の拡がりが見られ、その拡がりを追求したが、軌道敷南端で途切れ、工事用道路敷の所約20m程拡がっている。遺構は、杭を打ちこんだような小さなピット列がみられた他は、何も検出できなかつた。遺物も須恵器（1, 2）及び須恵質杯（3, 4）が数個体分みられたのみである。

(伊藤)



第2節 才 の 町 調 査 区

亀川用水より東約60m前後の範囲に微高地を確認した。この地点は、橋脚保存処置が取られなかったため、軌道敷及び工事用道路の全面調査を行った。溝Y以東については、トレンチ断面観察により、微高地のゆるやかな下りを確認したにとどまった。また、以西については、第1次調査により亀川用水を境に急に砂質土層となり、西約90mの亀川調査区までの間が、旧河道又は河口であったことが確認された。

この才の町地区の微高地は、北方の岩倉遺跡から伸びる微高地と考えられる（註—3）。

この調査では、弥生時代中期末から古墳時代の遺物を包含する溝数本、弥生時代後期を中心とする大型土壙群（P一イ～チ）及び柱穴状小土壙多数が検出された。

以下主な遺構・遺物の概略を記す。

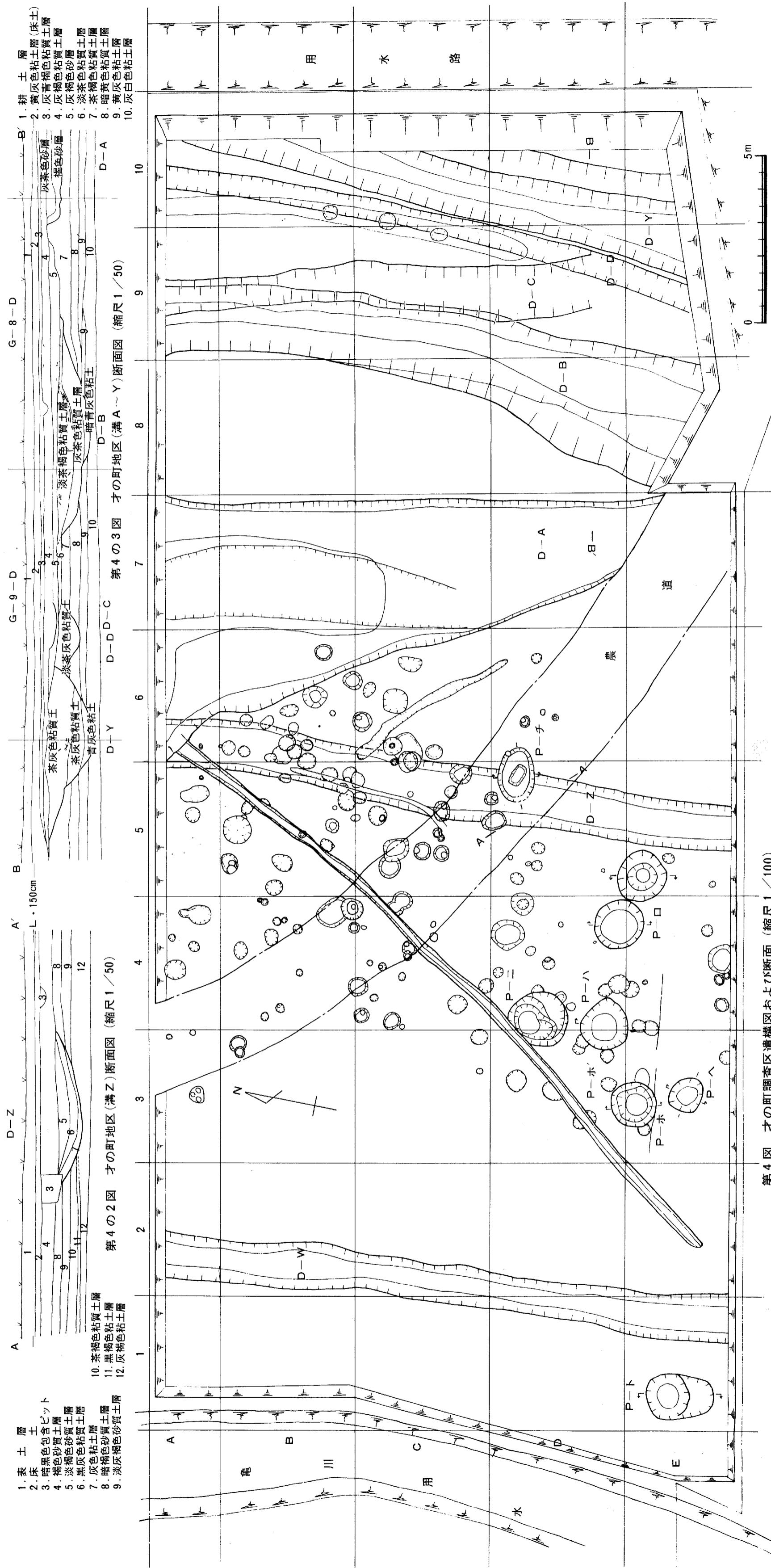
1) 溝一Z

＜遺構＞調査区のはば中央に南北方向に存在する。幅約200cm、深さ約30cmをはかる。土壙群（P一イ～チ）及び小土壙群が検出されたその下層面に切り込まれて検出された。断面は、比較的ゆるやかな「U」字状を示し、土器類は上層近部で2～3個所の土器溜りを形成して出土した。

＜遺物＞壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器等多数出土している。

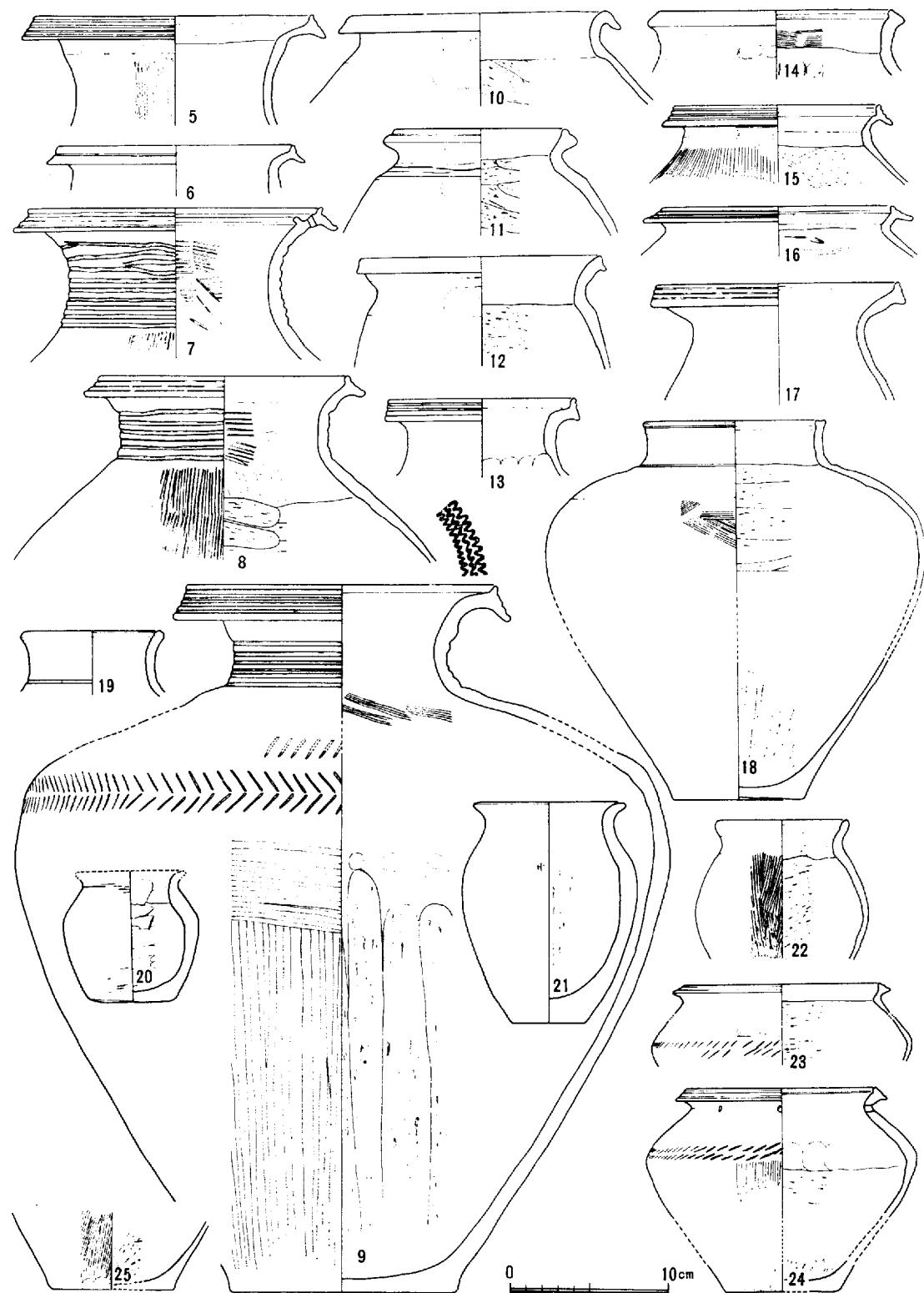
壺 形 土 器

5～9の壺形土器は、いわゆる長頸壺の形態を示している。頸部は口縁部近くでラッパ状に開き、口縁端部は内傾し、上下に拡張する口縁端面には、数条の凹線をもつ。頸に凹線を持つもの（7, 8, 9）と持たないもの（5, 6）がある。8は上部に凹線、下部に沈線の手法がみられる。7は口縁部内側に一条の凸帶、及び口縁端部との間に、1.5cm間隔に小円孔を持つ。9は肩部に笠による列点文が見られ、腹部には横方向の、また、それから底部にかけては縦方向の笠磨きが施されている。

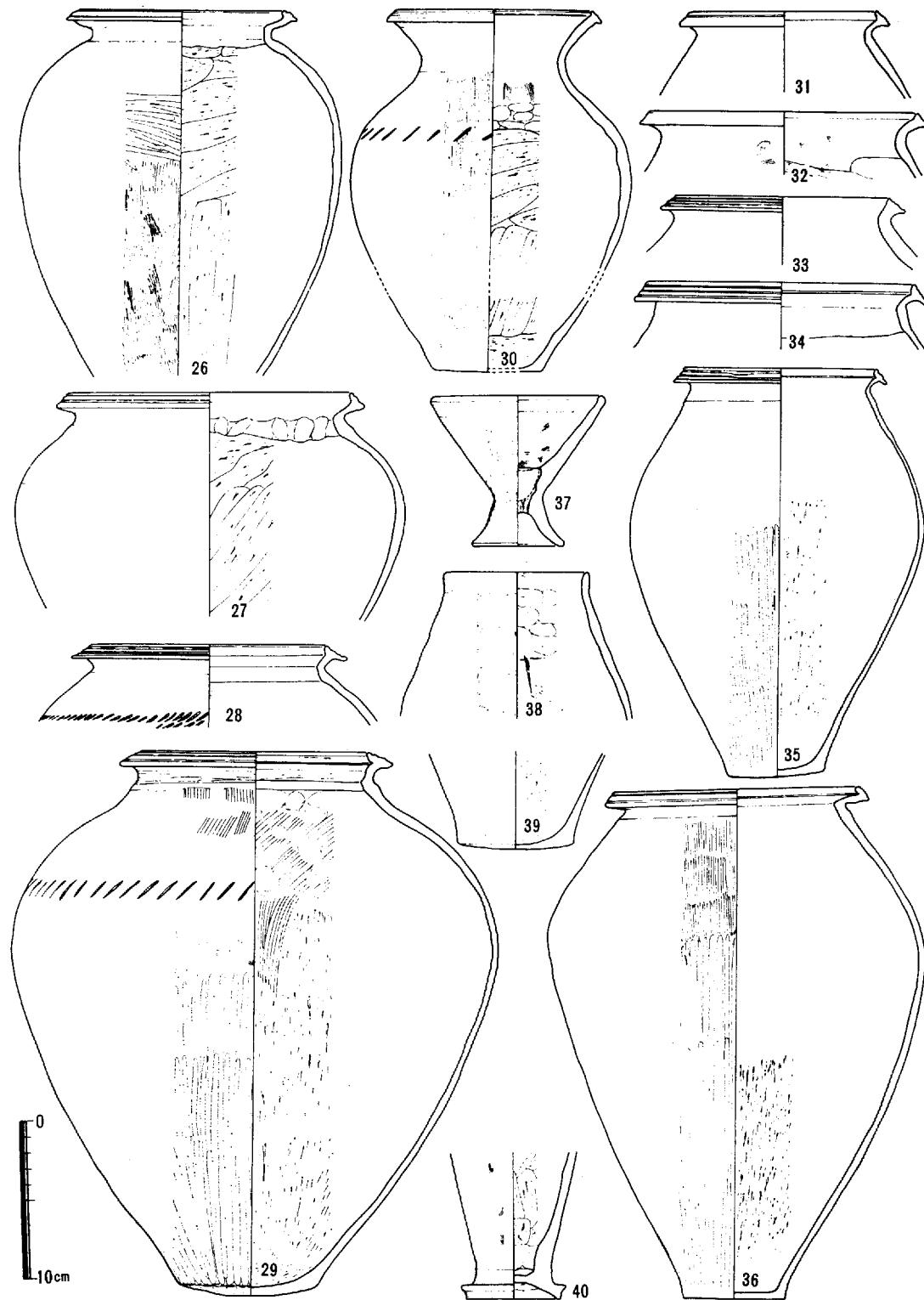


第4図 才の町調査区遺構図および断面図(縮尺1/100)

上 東 遺 跡



第5図 才の町調査区 D-Z 出土遺物 (1)



第6図 才の町調査区 D-Z 出土遺物 (2)

内面下半は下から上へ範削りされ、上部は指頭による押圧痕、頸部近くには、刷毛目が残る。口縁部内面には3～4本単位の3組の櫛描波状文をめぐらせている。

14, 18は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は多少肥厚する。

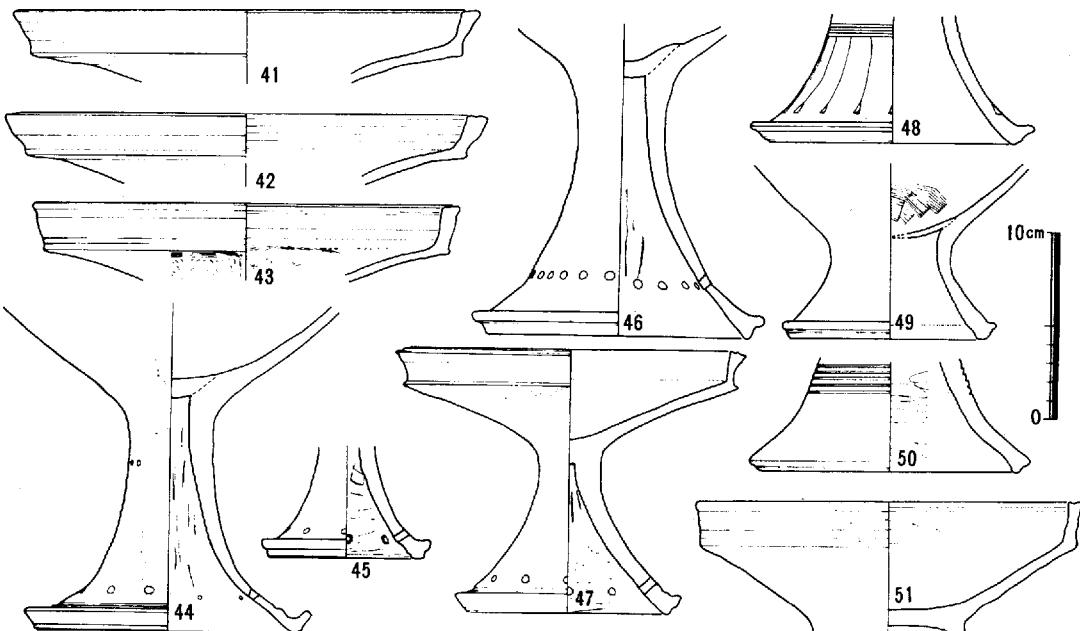
23, 24は短頸の小型壺で、口縁端部には2～3条の凹線、肩部には範状工具による二列の列点文が見られる。24は頸部屈曲部に小円孔を持ち、胴体部内面下半は範削り、上部は指頭押圧痕、口縁内面は横ナデされている。

26～29は甕形土器との区別がむずかしいが壺形土器とした。29は多少張りぎみの肩を持ち、口縁端部はかなり内傾して上下に肥厚拡張し、端面には2～3条の凹線を施す。肩部下には範状工具による列点文がめぐり、それより上部には刷毛目、下部は範磨きで調整されている。胴部内面下半は、下から上方方向の範磨き、上部は刷毛調整の後、押圧調整が行われている。

30は口縁部がゆるやかに外反し、端部は内傾して上下に少し拡張する。内面範削りは、胴部中央では横方向である。

甕 形 土 器 (15, 16, 31～36) 一口縁端部が内傾し上下に強く拡張するもの (15, 34, 35) と拡張の少いもの (31～33), 上部に拡張するもの (14) がある。15, 16, 33～35は口縁端面に3～4条の凹線文を施す。35, 36の表面調整は、頸部は横ナデ、胴上半は刷毛目 (35), 下半は範磨きされている。内面は共に胴下半にのみ範削りが見られる。

高杯形土器 (41～50) 一杯部はやや外反しながら開き、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁部を成す。口縁端部は多少肥厚する。口縁部上端面に2～3条の凹線を持つもの (47) もある。台脚部はゆるやかなすそ広がりを見せ、端部は肥厚し凹部を持つ。台脚部の短いもの (49) は、台付鉢形土器の可能性もある。



第7図 才の町調査区 D-Z 出土遺物 (3)

上 東 遺 跡

鉢 形 土 器 (51) —高杯形土器の杯部と特徴を同じくする。底部は端面を張り出させ、浅い脚台部を作っている。

この遺構出土の土器類は、形態的には中期末の様相を呈しているが、部分的にではあるが沈線の出現や内面箇削り手法に後出的な要素が見られるものもある。

2) 溝 — Y

<遺構>幅約200cm深さ50~70cmをはかる。溝Dの東肩を切り込み、溝Dとほぼ併行して検出された。農業用水路にかかる北の一部は調査不能であった。

<遺物>第1層から完形を含んで壺形土器・甕形土器・台付壺形土器等が出土している。これらの土器類は、遺存状態がきわめて悪く、出土点数の割には、図示できるものが少い。出土土器は、全体的に弥生後期の古い様相を呈している。

3) 溝 — D

溝Yと併行してほぼ南北方向に存在する。幅約50cm、深さ約30cmをはかる。土層は、单一（茶褐色土層）であり、遺物を含まない。断面は「U」字形を示す。

4) 溝 — B

<遺構>幅約200cm、深さ約50cmをはかる。G—9—A~Eにほぼ南北方向に、溝Aと路線敷南端で交叉して検出された。土層は、3層に大別できる。溝Bの中央から南にかけては溝Aによって上層を浸蝕されている。

<遺物>第1・2層に土器類の出土が多く、壺形土器(69, 70)・甕形土器(71, 72)、高杯形土器(73, 74)・鉢形土器(57, 76)・筒形土器(77)・製塩土器等が出土している。筒形土器は、いわゆる土管に底をつけ、腹面を一ヵ所縦に面取りしたような形をしている。出土土器は、全体的に後期の古い様相を呈し、後述するP—イ（才の町）あるいはP—イ（亀川）に先行する形態を呈する。

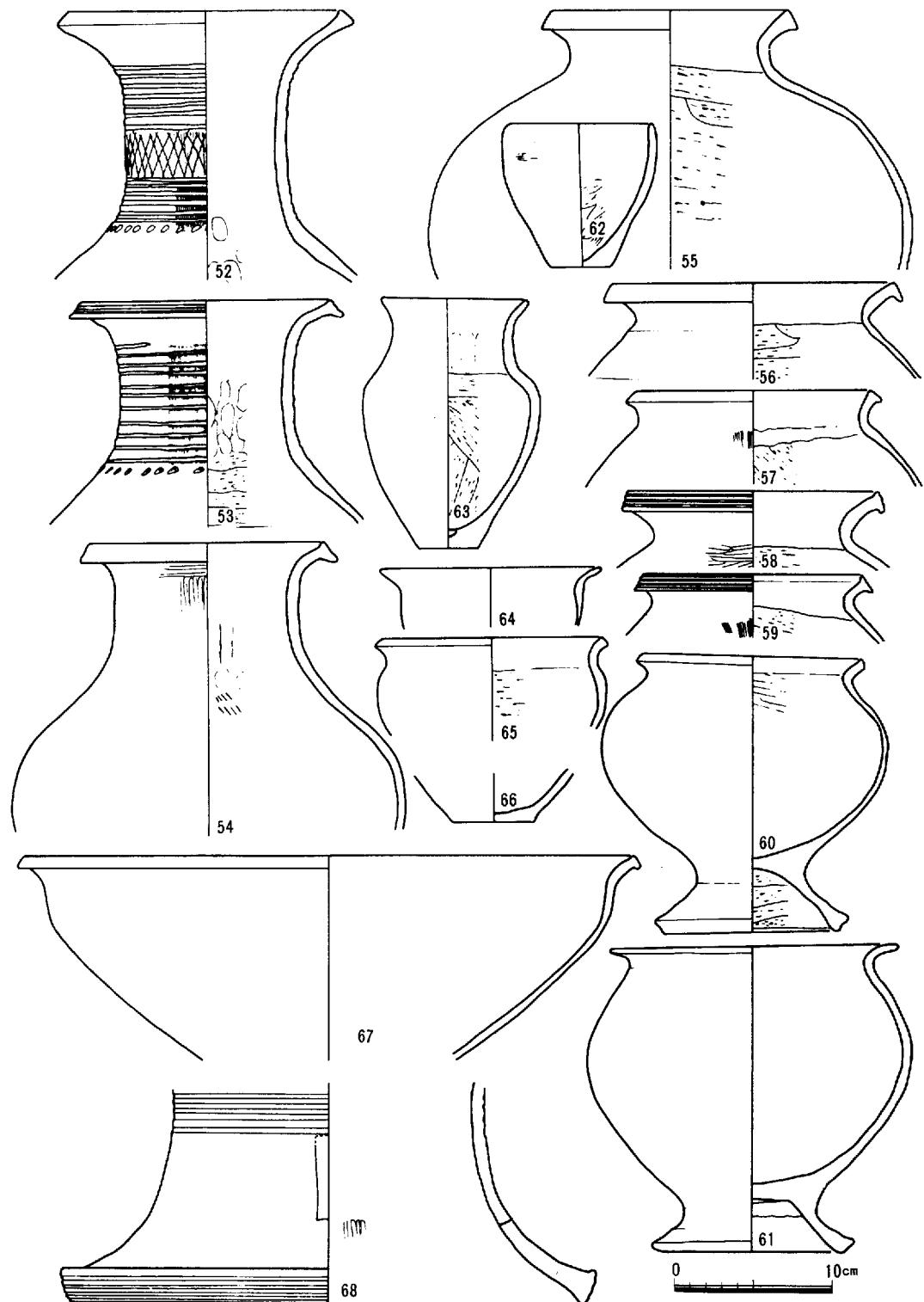
5) 溝 — C

溝Bの東に隣接して、一部北側で溝Bの上に交叉して存在する。溝Aの上層から続く砂層堆積の影響を受けており、溝Aの広がりの一部とも考えられる。遺物は弥生後期から古墳期の須恵器まで出土している。

6) 溝 — A

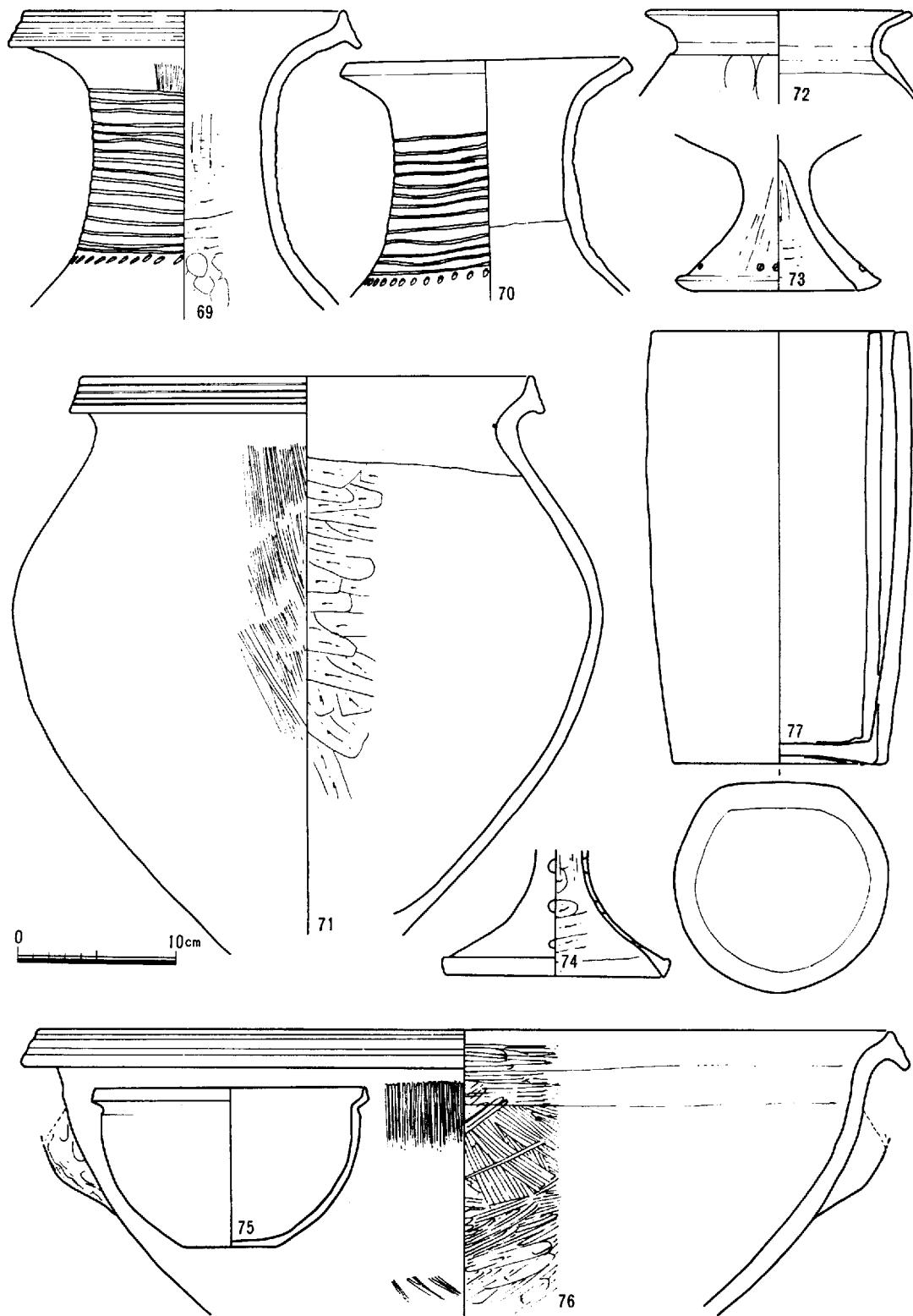
<遺構>G—7—A~Dにほぼ南北に存在する幅約300cm、深さ25cm前後の溝である。溝全体が鉄分を含んだ砂層に覆われており、出土土器片のほとんどが磨滅している。底のレベルは、北から南に行くに従って多少下がりぎみである。川の氾濫時における水路の時期の存在が考えられ、溝Cにも影響をあたえていると思われる。

上 東 遺 跡

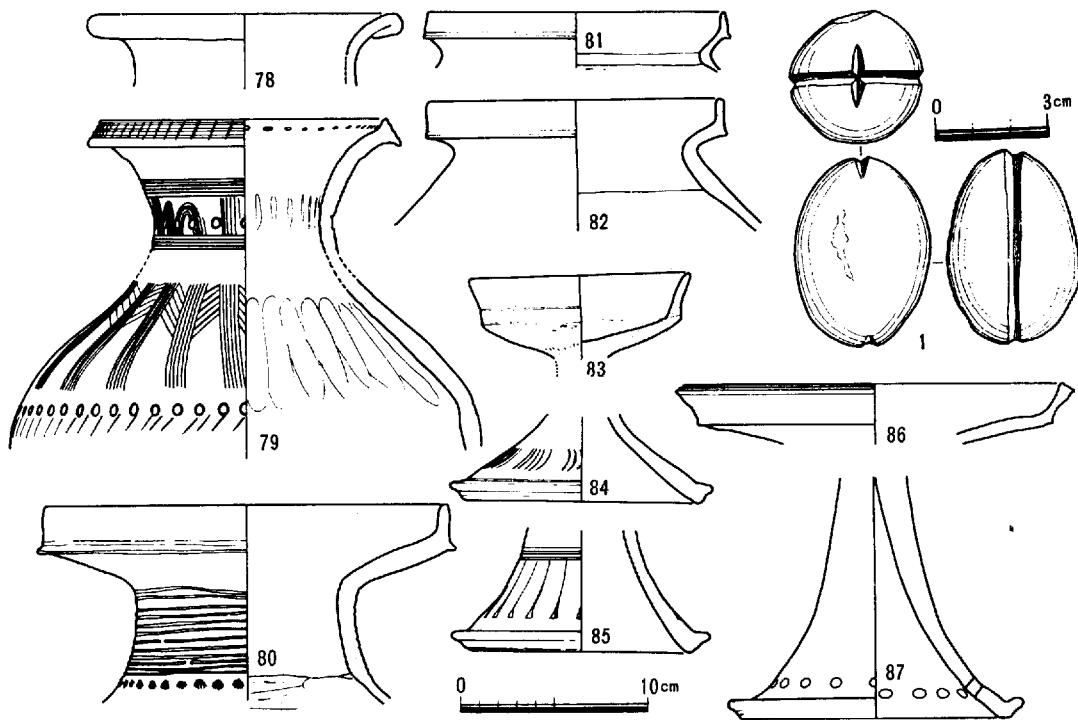


第8図 才の町調査区 D-Y 出土遺物

上 東 遺 跡



第9図 才の町調査区 D-B 出土遺物



第10図 才の町調査区 D—A 出土遺物

<遺物>出土遺物は、弥生中期末の土器片から古墳期の須恵器まで検出されている。78は、東鬼川市地区で出土している曲縁の壺よりも、造り、胎土共に雑である。時期は弥生前期～中期の可能性がある。80は、形態からいえばP一へ（才の町）の出土土器の時期と考えられる。

7) 溝 — W

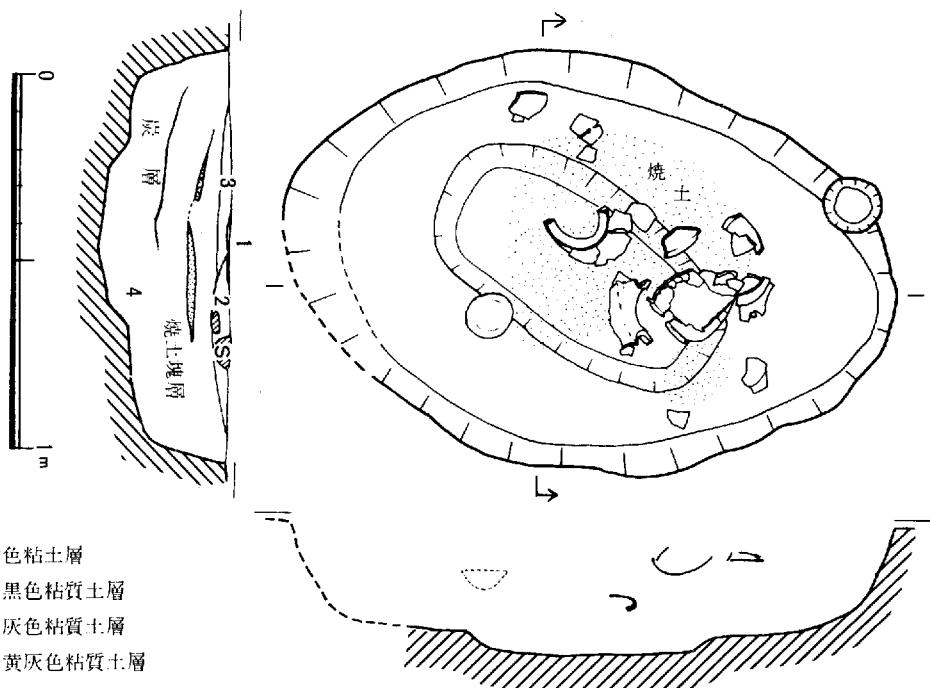
調査区の西端近くに南北に存在する。幅100～140cm, 深さ30～40cmをはかる。遺物は含まない。時期不明。

各溝内の出土遺物及び断面（第4図）により、その新旧関係は次のようにある。

前述のごとく、溝Zは中期末の土器類を出土しており、土層関係においても、他の溝状遺構に先行する。溝Aには数点の須恵器片、磨滅した弥生式土器片が出土しており、また溝A及び4、5層は砂層であり、溝Y、D、Bの上面を削平した形で堆積している。このことから、溝A及びCが他の3木より新しいことがわかる。また切り合った状態から溝Yが溝Dより新しいことがわかる。

断面及び包含遺物から、溝Z→溝D→溝Y→溝B→溝A・Cの新旧関係が考えられる。

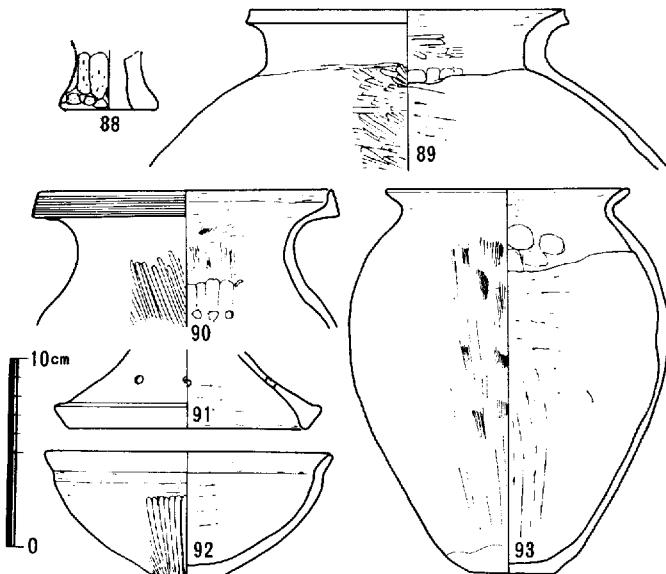
(柳瀬)



8) P - チ

<遺構>長軸約160cm, 短軸110cmの楕円形を成し, 深さ35cmを測る。ほぼ中央部50cm西方に約4cmの厚さで焼土が見られ, その下に約1cmの厚さで炭の層が見られる。

<遺物>壺形土器, 菱形土器, 鉢形土器, 高杯形土器, 製塩に使用されたと思われる深鉢形土器の脚部が出土している。これら出土土器は, 弥生後期の古い様相を呈している。



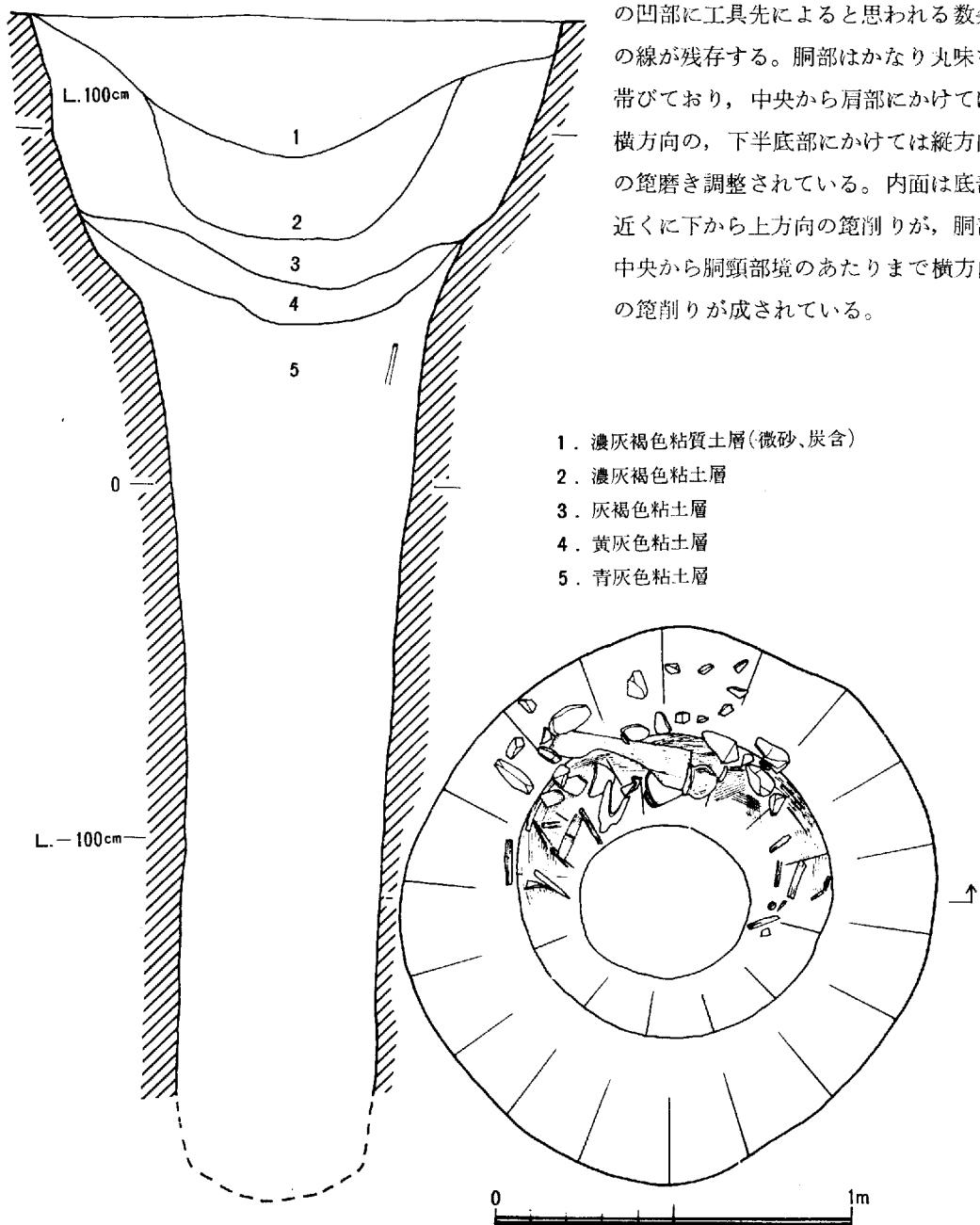
第11図 才の町調査区 P-チ 遺構および出土遺物

<遺構>径約150cm, 深さ約330cmを測る。約70cmの深さまで摺鉢状に落ちこみ, それから下は径約80cmでほぼ垂直に落ちこんでいる。摺鉢状になっている部分（第3層下部面）には礫, 草木がはりついた状態でみられ, 土器および木器もその部分に集中して出土した。底部近くにもほぼ完形の菱形土器が検出されたが, 上部の土器との時期差はほとんど見られない。この土壤は井戸として使用されていたものと思われる。

<遺 物>

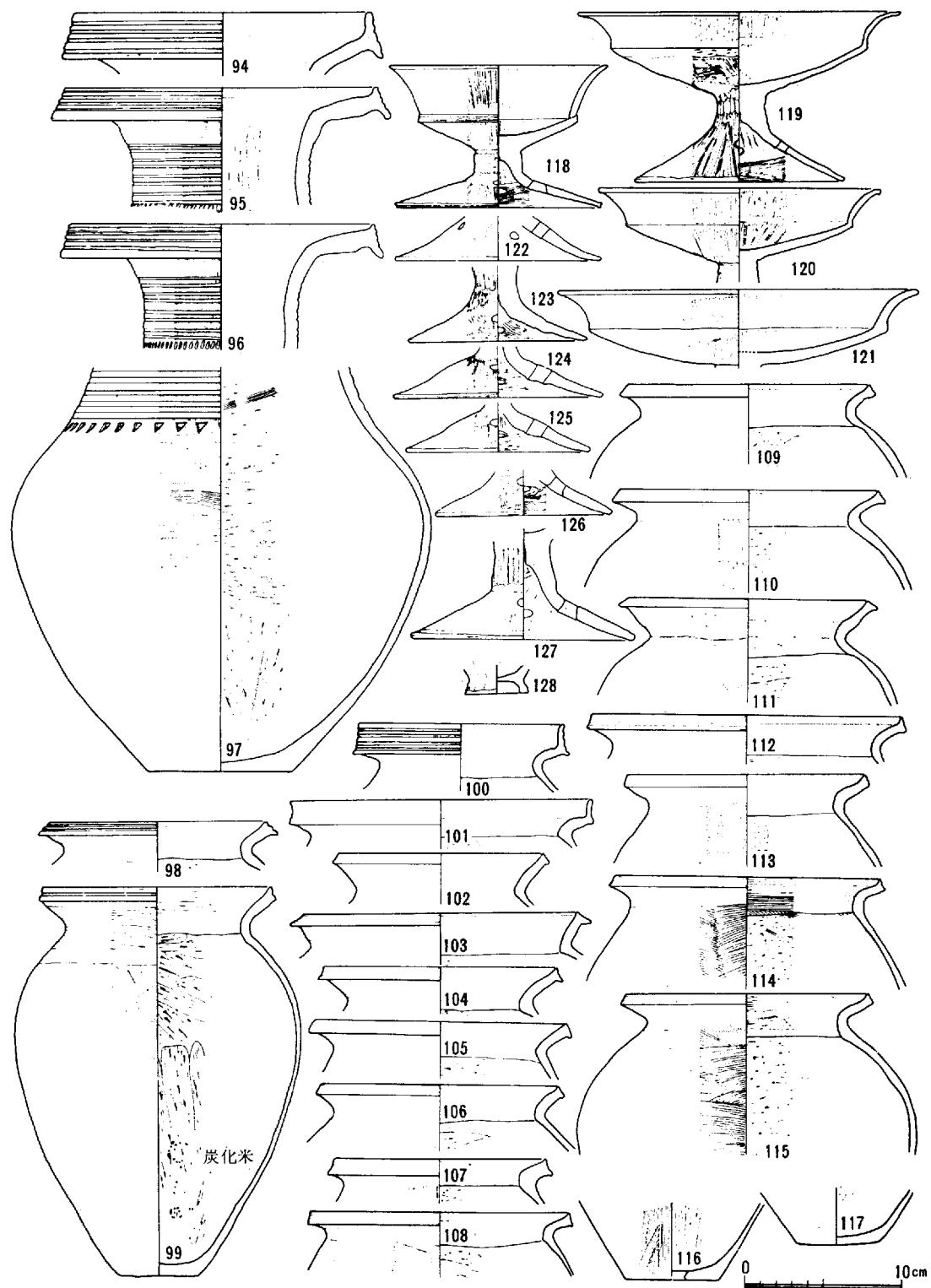
壺 形 土 器94~97はいわゆる長頸壺である。ほぼ垂直に立ち上がる頸部は、口縁部近くで急に外反する。口縁端部は内傾し、上下に強く拡張する。口縁端面には、3~4条の退化した凹線(註-4)が残る。頸部は、横ナデ調整後、縦方向に細い刷毛調整が行われ、その上を8条前後の沈線があぐる。肩部にかかる沈線施文部直下には、卵型あるいは三角形の刺突が施されている。多くの場合、そ

の凹部に工具先によると思われる数条の線が残存する。胴部はかなり丸味を帯びており、中央から肩部にかけては横方向の、下半底部にかけては縦方向の箇磨き調整されている。内面は底部近くに下から上方向の箇削りが、胴部中央から胴頸部境のあたりまで横方向の箇削りが成されている。

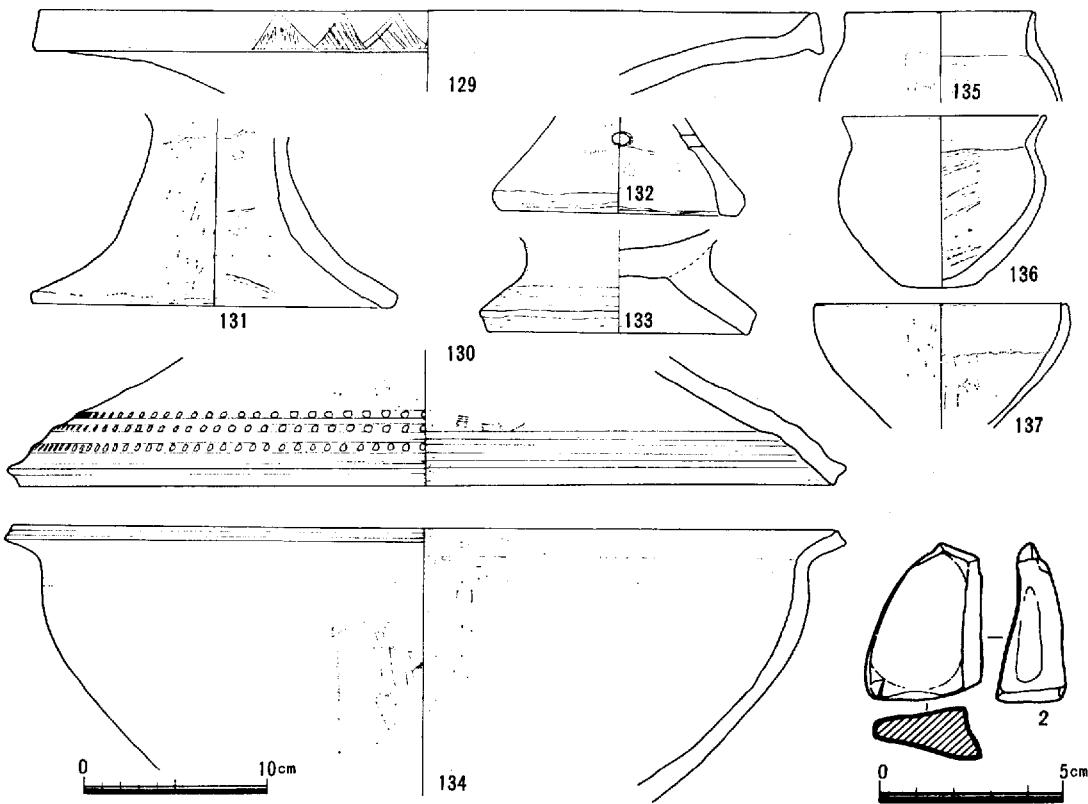


第12図 才の町調査区 P-1 平面および断面図 (縮尺 1/20)

上 東 遺 跡



第13図 才の町調査区 P-1イ 出土遺物 (1)



第14図 才の町調査区 P-1イ 出土遺物(2)

甕形土器 (98~117) 全体的に口縁部はゆるやかな「く」の字状に開き、端部はやや内傾し、上下に少し拡張する。口縁端面には退化凹線のあるもの (98.69) と横ナデによる凹部を成すもの (102~115) がある。

100, 101は口縁端部が上方に強く拡張し、100は端面に4条の退化凹線が残る。100, 101は弥生後期の新しい様相を呈している。

116は底部穿孔の甕で飯として使用されたものであろう。

高杯形土器 (118~127) 119~121は口縁部が斜上方に外反して立ち上がる脚部内面をのぞき全体的に内外面とも範磨き調整が行われている。3点共に焼成は非常に良好で、整形も丁寧である。119の脚部には範磨き痕の間に、刷毛目痕が残る。脚部内面には、範削りおよび刷毛目が残る。

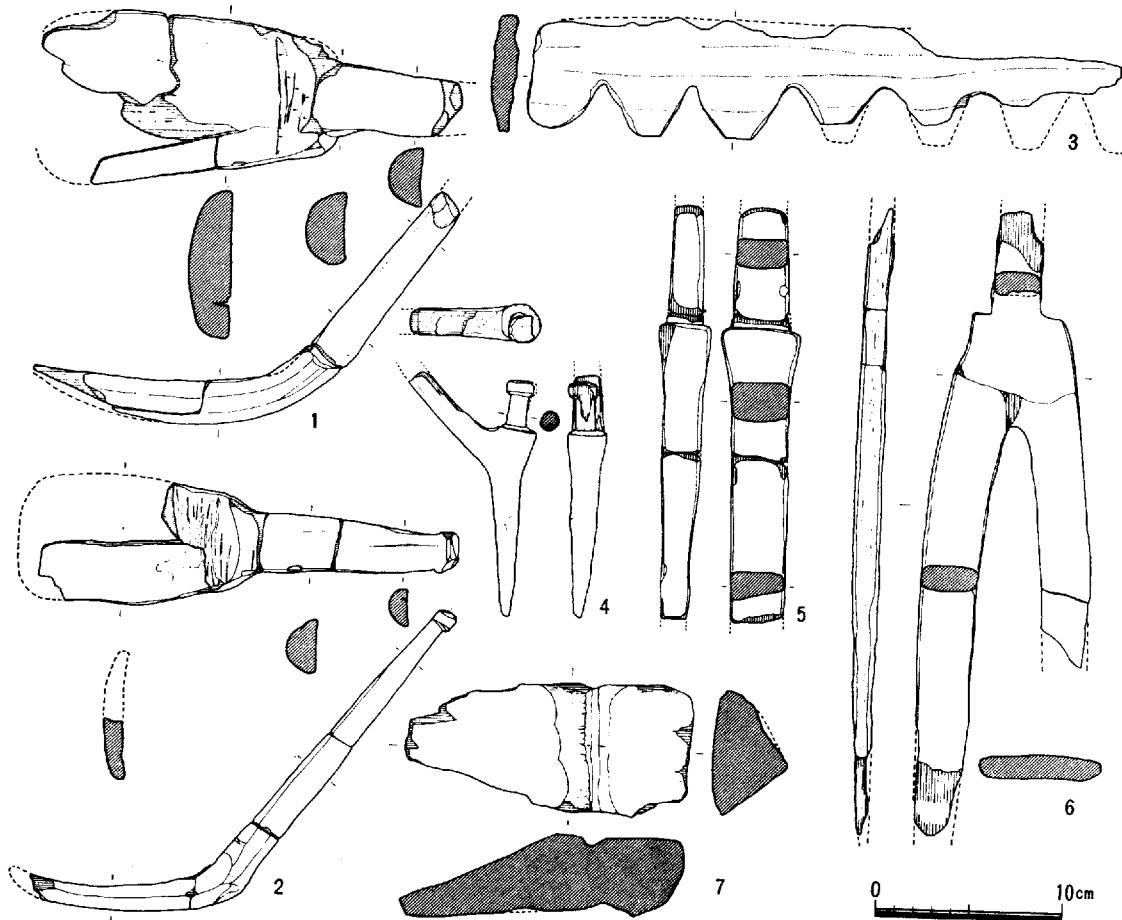
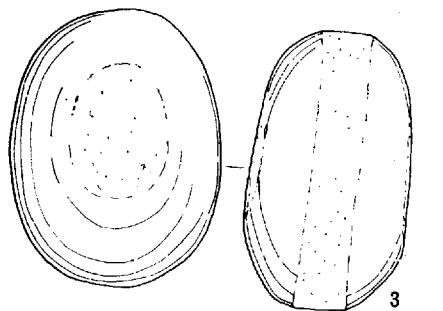
118は小ぶりな体部からゆるやかに外反する長めの口縁部が、かなりの角度で立ち上がる。そのため杯部は深くなっている。脚部内面、範および刷毛の荒っぽい調整が行われている以外は、内外面とも縦方向の細い範磨き調整が行われている。脚部外面には、ところどころに刷毛目が残る。

器台形土器 (129, 130) 129, 130は同一個体と思われる。129の口縁端面は横ナデ調整され、範描きの鋸歯文を連続して施す。130の脚部表面には、凹線間の凸状部分上に3連の刺突文が施されている。内面端部近くは、強い横ナデにより3条の凹部が残っている。

131, 132は他の器形の台脚になる可能性もある。

鉢 形 土 器 (134~137) 134は大型の鉢形土器で、口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反し、端部はあまり拡張を持たない。端面には、2条の細めの退化凹線が見られる。内外面とも口縁部をのぞき、刷毛目がところどころに残る。

135~137は小形の鉢形土器で、135は小形壺形土器に入れた方がよい。



第15図 才の町調査区 P-イ 出土遺物 (3)

石 錘 (3) 偏平な長円形の自然石を用い周辺には、約1.3cm幅で浅く敲打痕が認められる。また、表裏面にもほぼ中央部に敲打痕が認められる。石錘にも使用されたかもしれないが、たたき石に使用された可能性もある。質は硬く、石材は閃緑岩である。

砥 石 (1) 三面に使用痕が認められる。三面ともかなり使い込まれている。また、いずれも中央が凹んでいる。石材は砂岩で、表面はかなりザラついている。

木 器 スプーン状木器 (1, 2) これらは枝のついたかなり太い木を利用して作られている。どちらも受け部はほとんど板状で、液状のものをすくう機能はない。柄の端部および屈曲部内

側には、加工痕が顕著に残る。樹種は1がキリ、2がトチノキである。

えぶり(3)—現存長さ31.8cm、幅6.5cmをはかり、歯先部は三本のみ完存している。表面はかなり腐蝕している。樹種はアラカシである。

二又鋸(6)—端部をやや欠損している。現存長さ34cm。表面が少し荒れているため加工痕は認めるることはできない。樹種はコナヲである。

不明木器(4, 5, 7)—4は、枝のついた木を利用している。一方の先をとがらせ、枝の出ている幹の上部を突起状に加工している。長さ13cmをはかる。樹種はクロガネモチである。5は棒状を呈し、かなり丁寧に削り出されている。岡の方向で、上に行くに従い次第に厚さを増し、急にはぼ下の太さの形状で上に伸びる。「ほぞ」の形態をしている。樹種はトチノキである。7は横断面三角形、縦断面はクサビ形を呈し、長さ約15cmをはかる。加工痕は中央部に線状に見られ、また端部にはかなり鋭利な工具によるものが見られる。樹種はアラカシである。
(村上・柳瀬)

10) P — H

<遺構>径約1.40cm、深さ155cmのほぼ円形の土括である。断面は、逆台形を呈する。第3層にはかなりの炭が混入しており、粘質土層となっている。第9層は黒みがかかった青灰色粘土層で上部の土器よりも胎土焼成の良好な土器が出土している。また底近くからは木器(8~11)、木材も出土している。各層出土土器の時期差はほとんど見られない。

<遺物>壺形土器は166のみである。口縁端面には、鋸歯文と7~8本単位の2組の櫛描波状文が施されている。甕形土器は、口縁端部が上部に拡張するもの(138~143)とそうでないもの(144~151, 160)に大きくわかる。鉢形土器156~158、甕形土器の後者と同様の特徴もち、167, 168は大型の鉢形土器である。167は、口縁部に特殊な張り出しを持つ。また169, 170は、口縁端面に2~3条の退化凹線を持つ。高杯形土器は、その特徴がP—へのそれと区別がつかないほど類似している。他に器台形土器(185)や直口壺形土器(184)、製塩土器脚部(186)、また土器片利用の紡錘車(1)も出土している。

P—H出土の土器類は、全体的にP—への土器類に類似する。

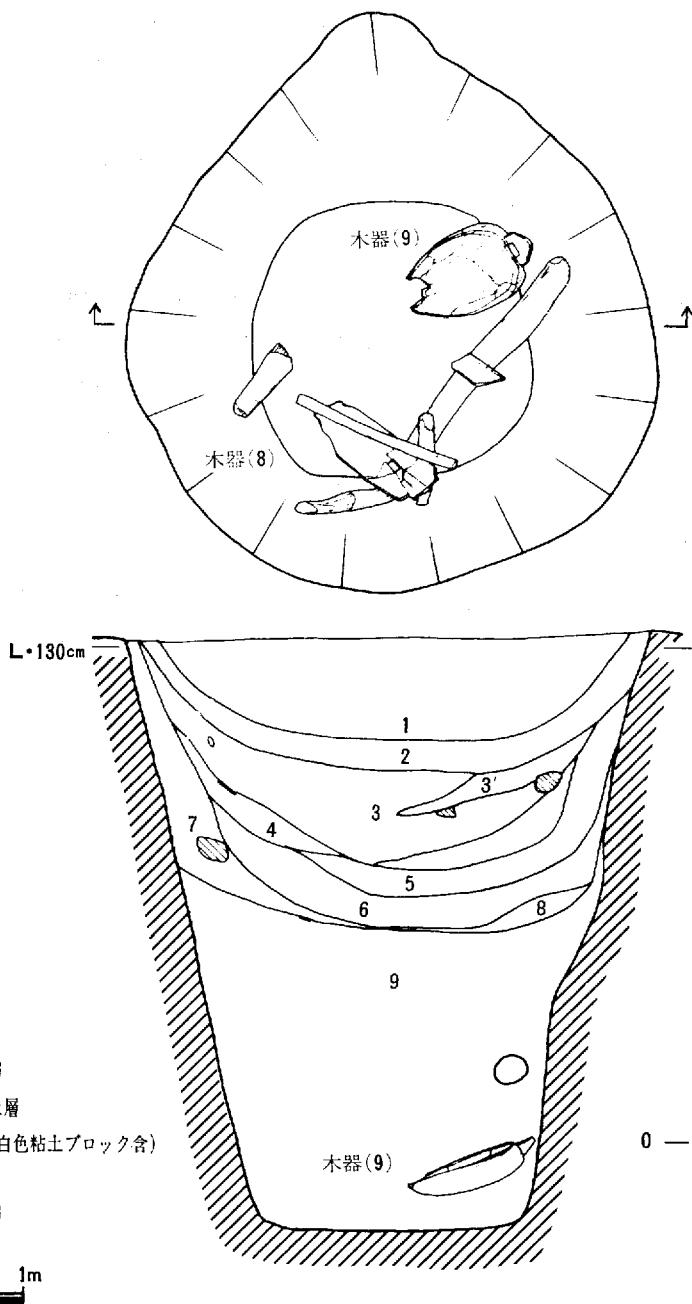
鋤状木器(8)—肩部左上方から先端部右下にかけては、圧力により多少変形している。中央よりもやや上部には3×3.8cmの方形の穴が穿たれ、そこから柄取り付け部痕跡の存する上部に向い幅3cm、深さ1~2mmの溝がつけられている。先端部に向ってゆるい反りを持ち、先端は約3×10cmで鉄製刃先着装部を形成している。樹種はアラカシである。

片口容器(9)—一片口部を一部欠損しているが、一本造りのほぼ完形である。片口部の反対側の基部側面には把手部が造り出され、基部と把手部の境には1.7×3.8cmのほぞ穴が穿たれている。(註-5)穴の中には折れた柄の一部が残存している。基部平面は、馬蹄形を呈し、くり抜かれた皿部内面には最大幅約3cmの加工痕が見られ、特に側面およびコーナー部分に顕著に残る。また皿部二カ所には修繕の跡が見られる。

柄は基部に対して直角上方向に伸び、柄を長くすれば、井戸水を汲み出す道具である「つるべ」の役を充分に満たすと思われる。樹種はクスノキである。

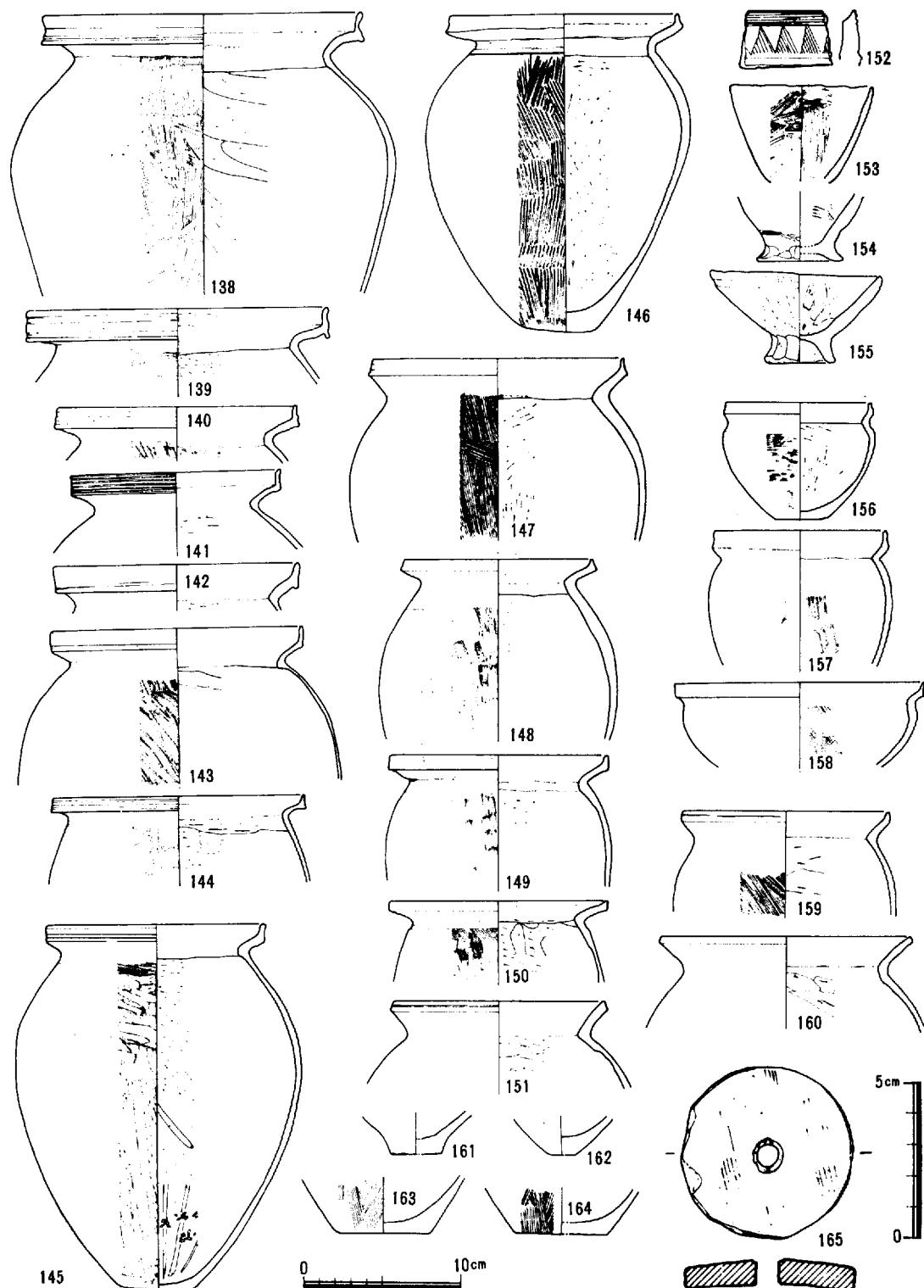
不明木器—10は台状を呈し、中央部に約0.8cm四方の穴が穿たれている。樹種はサワグルミである。11は厚さ0.6cmの板状の木器片で、縦方向に約0.5cmの間隔に17個の小さな孔があけられ、横方向にも0.5cm間隔に4個ずつ三列に見られる。片面には朱が、もう片面には黒漆が塗られている。黒漆が塗られている面は穴部にそって漆がもり上がっている。また中央の二つの穴は漆のためにふさがり、糸の痕跡が見られるところから、穴に糸を通した後に黒漆が塗られたようである。樹種はヒノキである。

(伊藤・柳瀬)



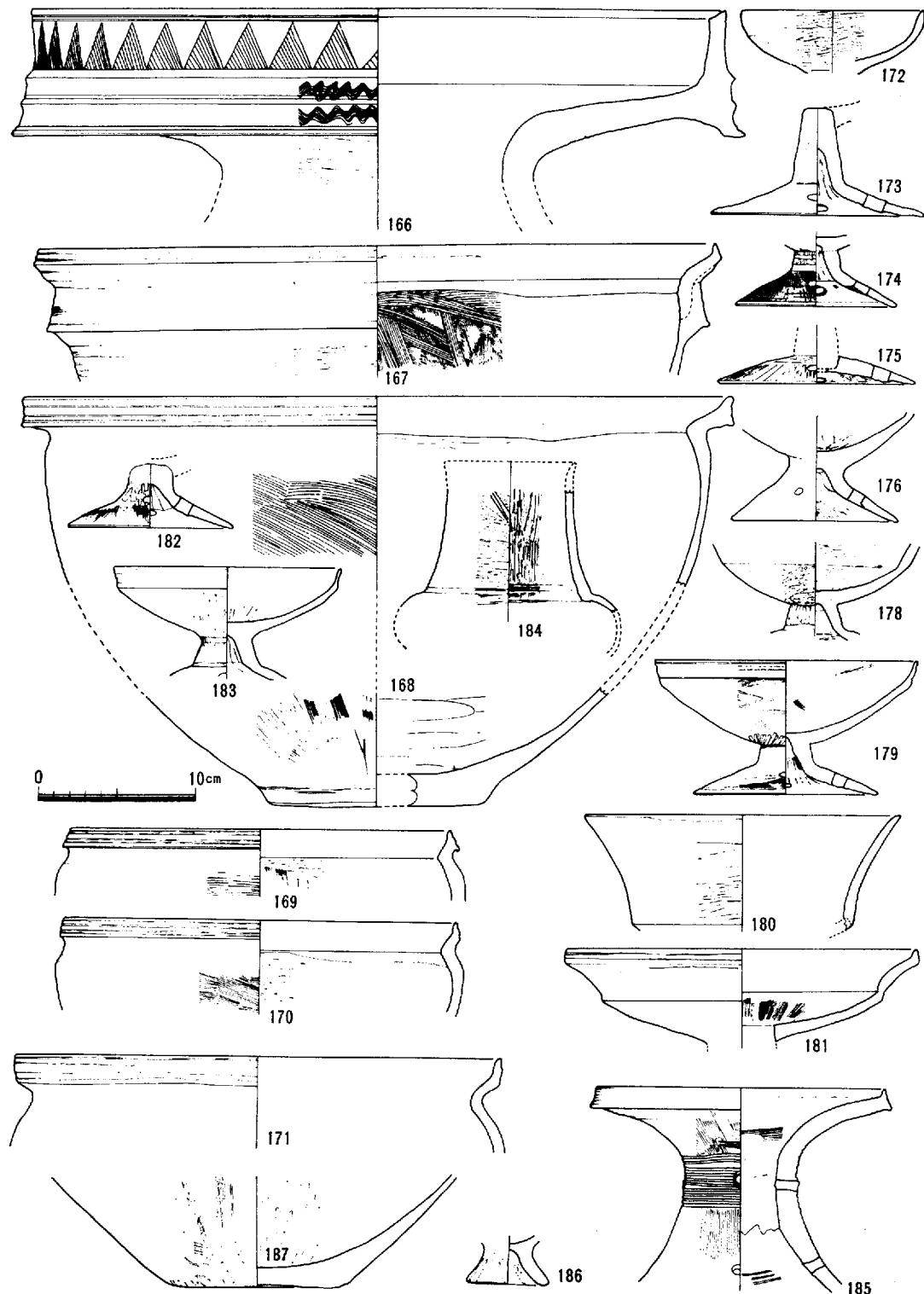
第16図 才の町調査区 P-1-H 平面および断面図（縮尺1/20）

上 東 遺 跡

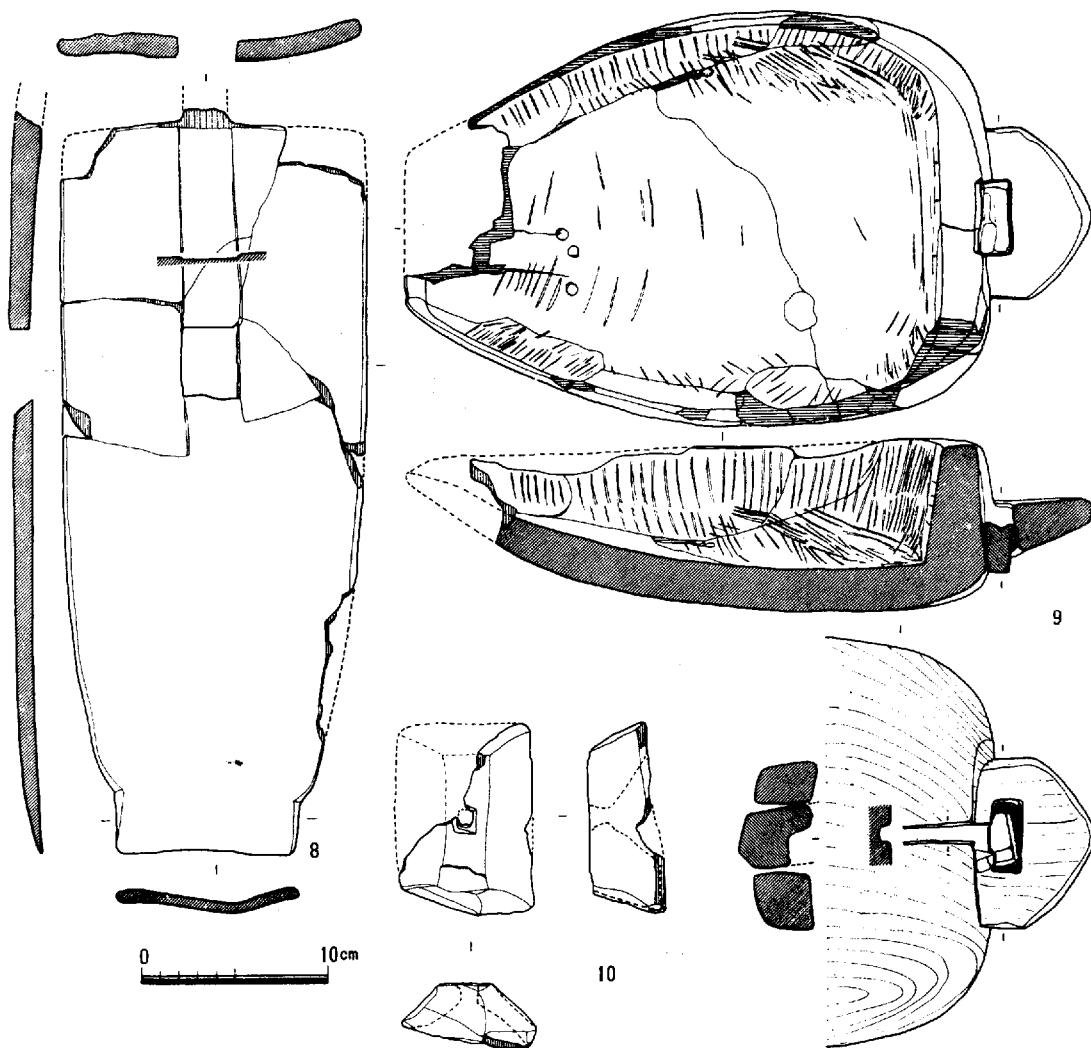


第17図 才の町調査区 P-1-H 出土遺物 (1)

上 東 遺 跡



第18図 才の町調査区 P—ハ 出土遺物 (2)

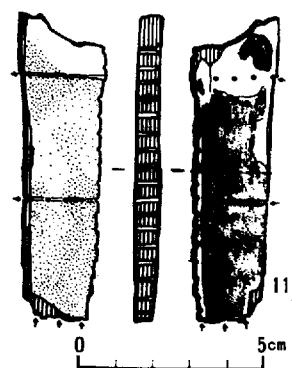


第19図 才の町調査区 P-1-H 出土遺物 (3)

11) P-1-口

<遺構>径160cm、深さ60cmの円形土壙である。深さ約40cmのあたりで、焼土塊（径3～10cm）が面を成して検出された。土器類はほとんど破片で焼土塊の間などにまばらに出土した。土壙壁面および焼土塊面下は、火を受けた痕跡もなく、炭灰等も検出されず、この土壙そのものが炉に使用されたとは思われない。

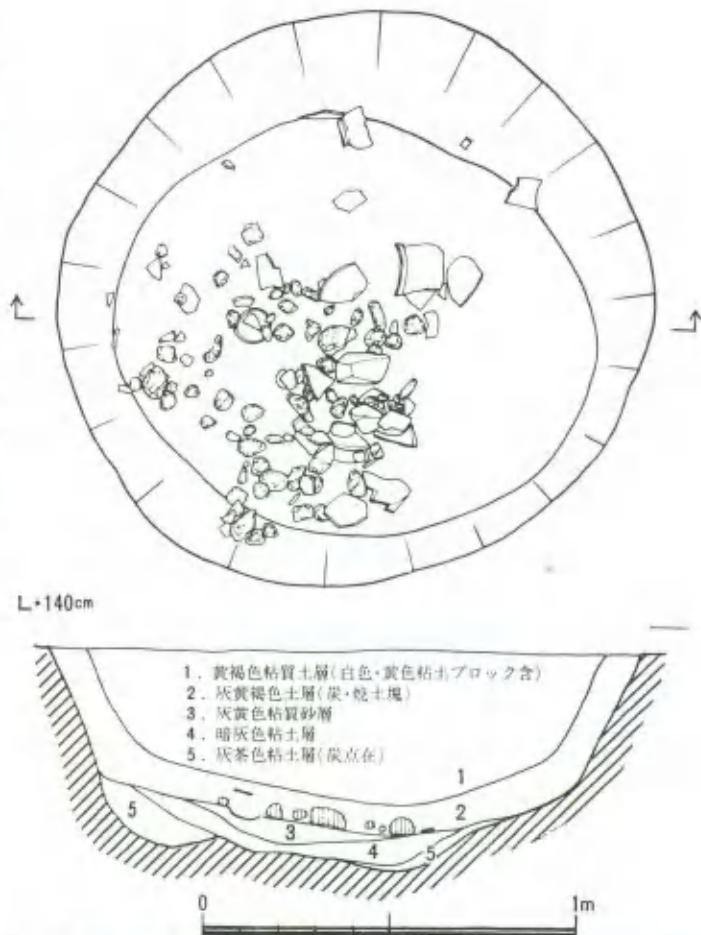
<遺物>壺形土器（188～191）甕形土器（192～196）、高杯形土器（199、200）鉢形土器（201）が出土している。190は短い頸部からラッパ状に開く口縁部途中から、上方に反りを持ちながら立ち上がり二重縁を呈する。194、198等弥生後期の古い様相を示すものも見られるが、全体的には後期末のP-1-H（才の町）土器に類似する。



12) P-ニ

<遺構>径約160cm、深さ200cmをはかり、かなり不整形の土壙である。土層は3層に大別できる。出土遺物はあまり多くない。井戸と思われる。

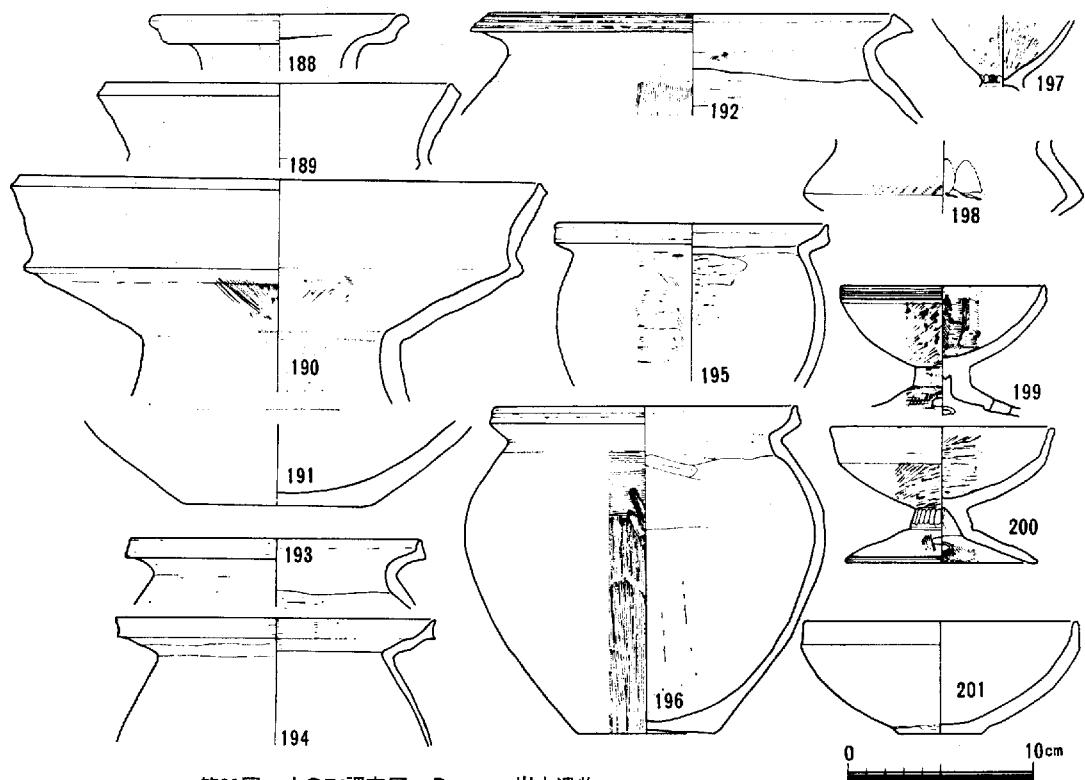
<遺物>壺形土器(202~205)、高杯形土器208~211、鉢形土器(212, 214)、製塩土器台脚部(213)が出土している。壺形土器は、その口縁端部の特徴により、202~204と205にわかれれる。全体的にはP一ヘ(才の町)に類似する。



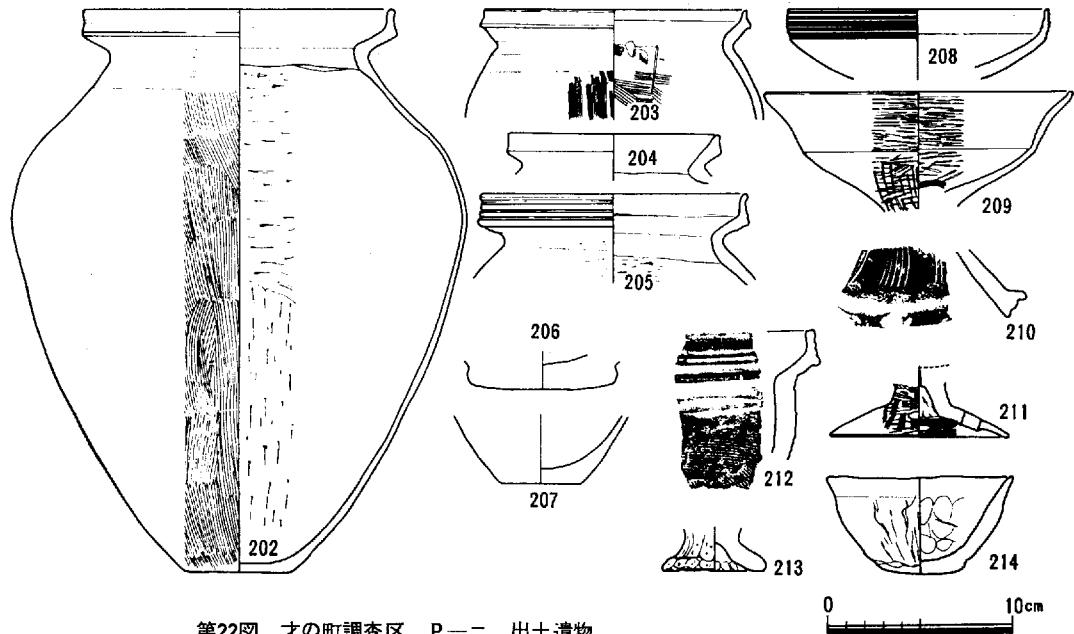
第20図 才の町調査区 P-ニ 平面・断面図(縮尺 1/20)および写真



上 東 遺 跡



第21図 才の町調査区 P一〇 出土遺物



第22図 才の町調査区 P一二 出土遺物

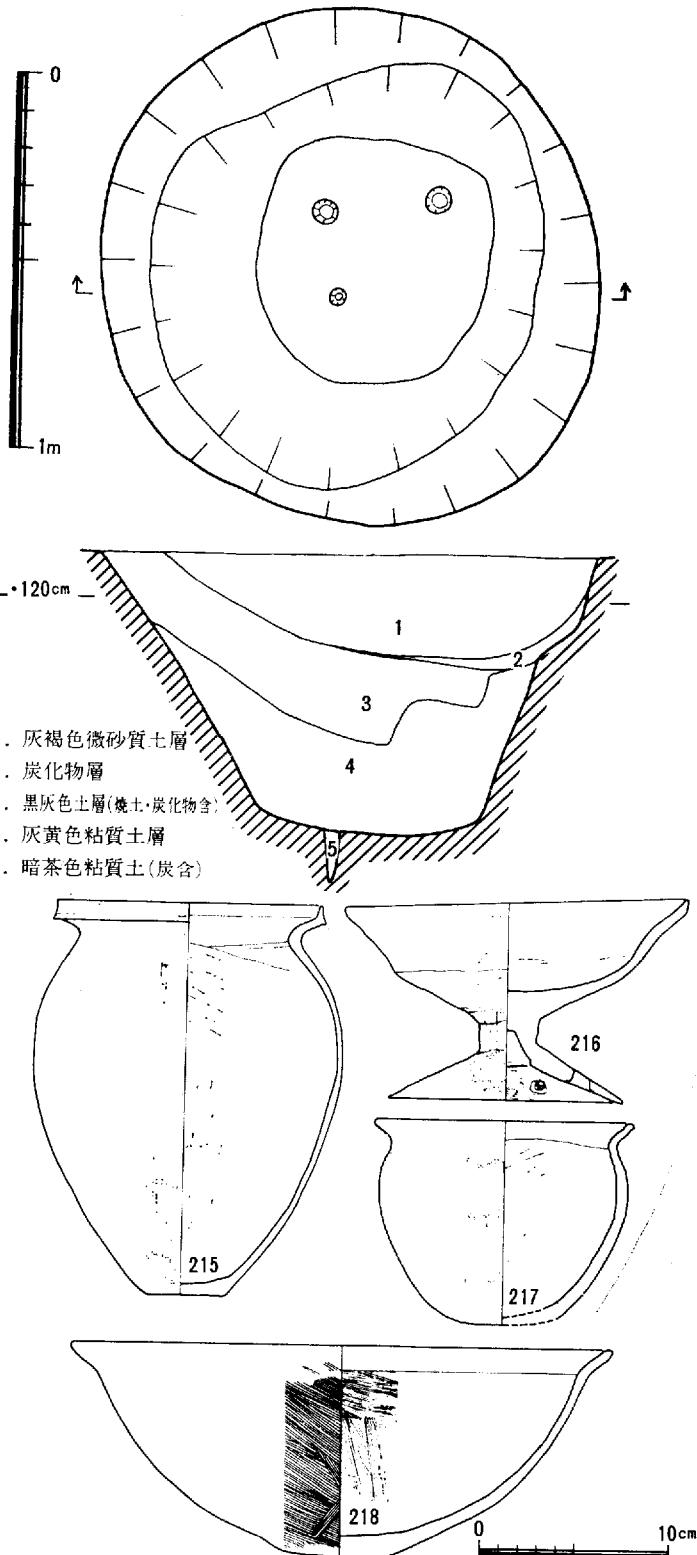
上 東 遺 跡

13) P—木

<遺構>径約140cm、深さ75cmをはかる。第2層はかなり純粹な炭化物層である。第3層にも多くの炭化物および焼土が見られ、4層に掘り込まれたと思われる2個のピットの中に、3層の土が落ち込んでいた。このことは、4層上面がある時期に何かの遺構の底になっていた可能性を考えさせられる。底には、杭痕のような小ピットが検出された。

<遺物>甕形土器(215)、高杯形土器(216)、鉢形土器(217、218)が出土している。出土点数は非常に少ない。P—へ(才の町)同時期である。

(池畠・伊藤)



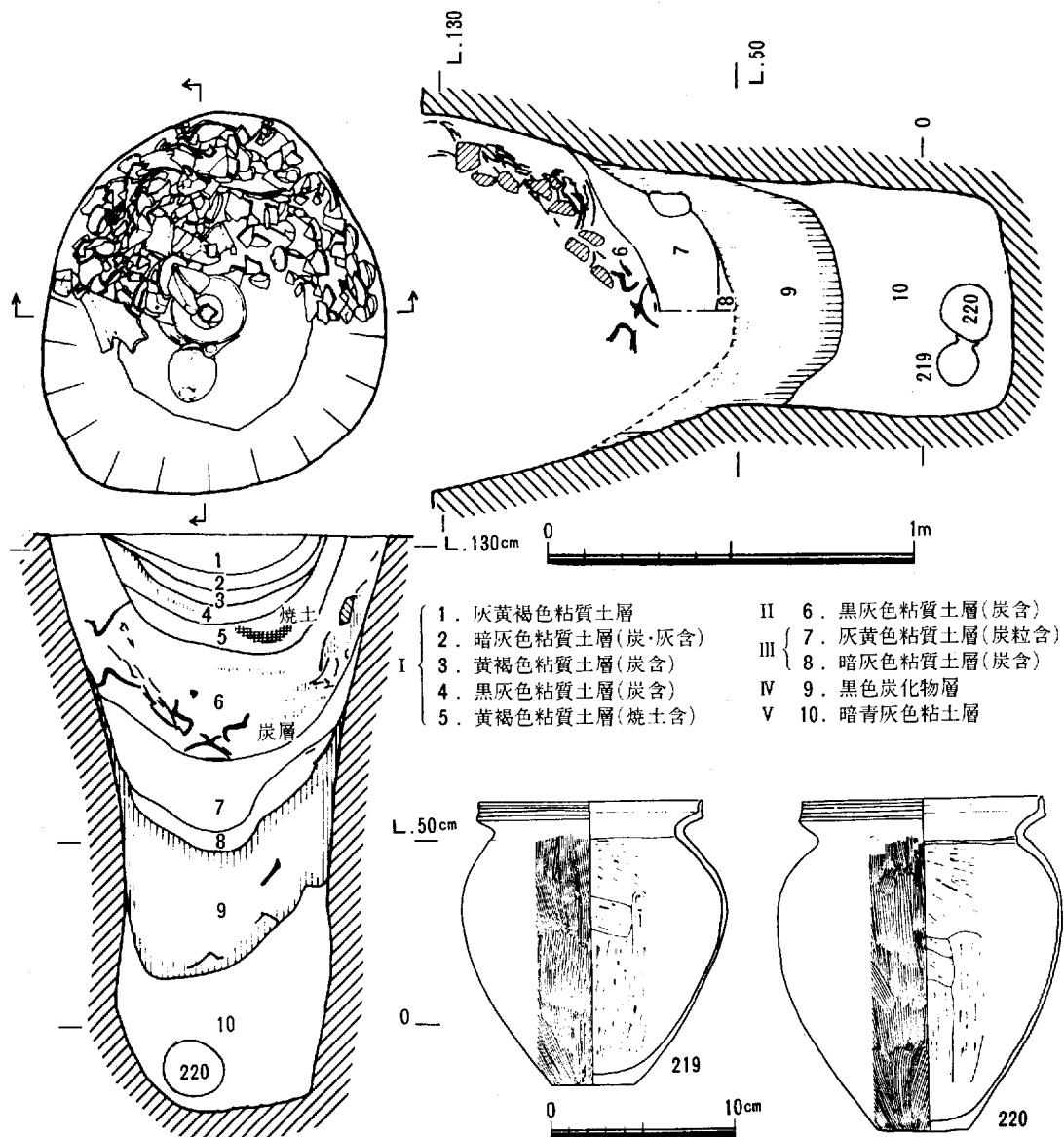
第23図 才の町調査区 P—木 遺構および出土遺物

14) P — ヘ

<遺構>径約100cm、深さ160cmをはかる。第Ⅰ層には焼土、炭化物が多量にまざり、第Ⅱ層には角礫、炭化物とともに多量の土器片が落ち込んだ状態で検出された。第Ⅲ層には、土器片がほとんど検出されなかった。第Ⅳ層には、深さ30~40cmのところから壁面にはり付いた状態で、凹状に純炭化物が堆積（最大厚約30cm）し、最下層の第Ⅴ層は暗青灰色粘土層である。底に近い青灰色粘土自然層の部分には、鋤状工具による掘り込み痕跡（幅約15cm）が見られた。

また底からは、表面にスヌの付着した宍形甕形土器2個体（219, 220）が出土している。

この土壙は、P—イ、ニの井戸状遺構に比べて規模がかなり小さいが、単に水をためるという機能



第24図 才の町調査区 P—ヘ 遺構および出土遺物 (1)

は満たすことができ、井戸とも考えられる。しかし、第Ⅱ層の土器の堆積のあり方は土壙の壁に貼り付いたように埋っていて、単なる廃棄時の堆積とは考えられない。さらに、第Ⅳ層の厚さ30cmに及ぶ炭化層の堆積も通常の堆積であり得ないものであろう。底から出土した2個の無傷の甕形土器(219, 220)も例外的な存在で丁寧に埋められたことが考えられる。これらのことから、この土壙が、祭祀または、土壙墓のようなものと考えることもできる。

＜遺物＞壺 形 土 器 (221, 222) は内傾する頸部から急に外反して、さらに上方に張り出す二重口縁を有する。口縁の立ち上がりは、横ナデによって強い反りがみられる。(221) は口縁部外面に5本の細い範描きの沈線がみられる。沈線は、部分的に途切れており、範磨きのような痕跡も観察される。(221, 222) の頸部は長頸の退化した形態をしており、縦方向の刷毛目が認められ、沈線は認められない。

(223, 225, 232) は、頸の短い壺形土器で胴は球形によく張っている。(225) は内面の範削りが、口縁くびれの少し下方までしか及んでおらず、頸の痕跡をとどめているので、(221, 222) と同系であろう。

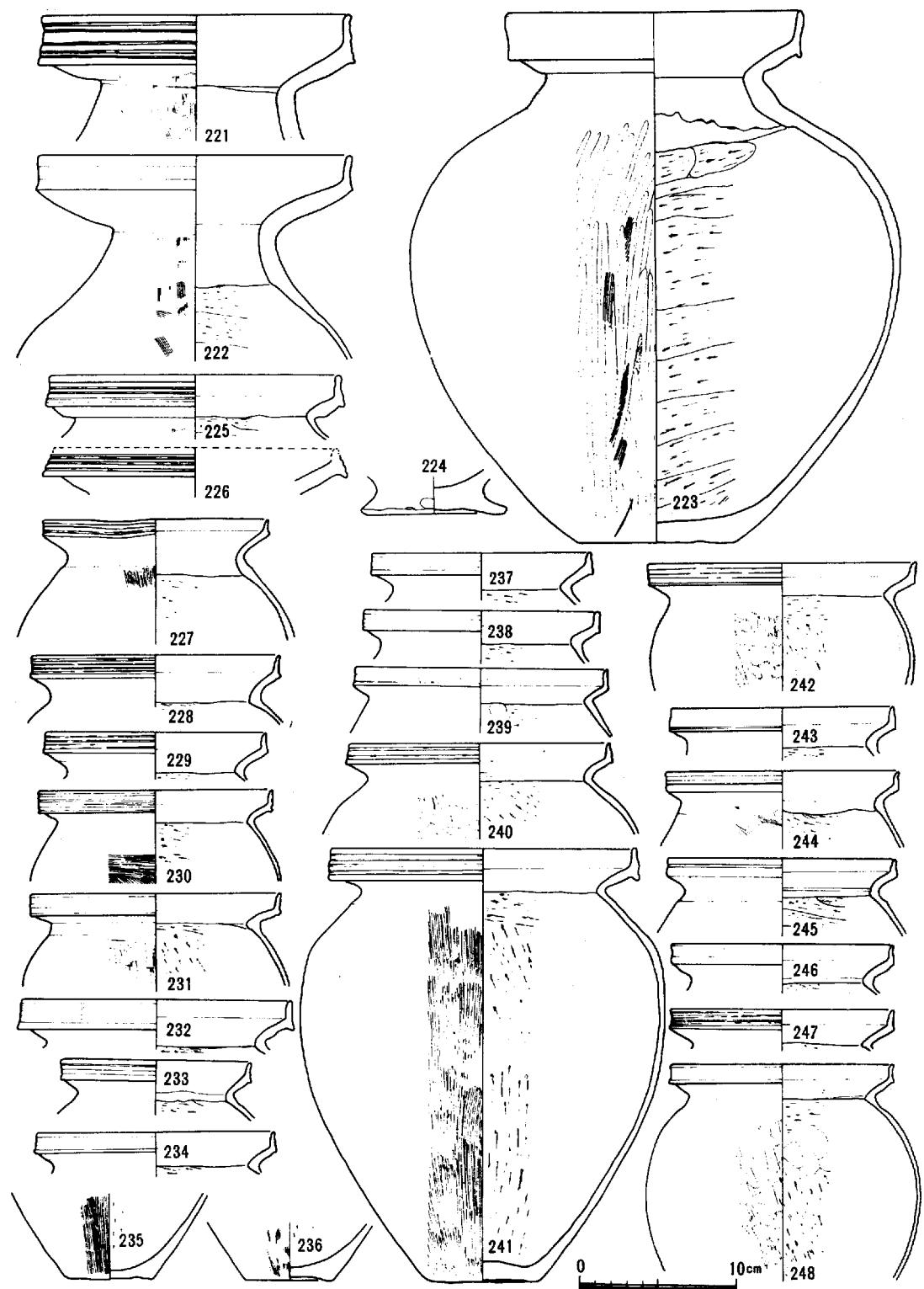
甕 形 土 器 甕形土器は鋭く外反する口縁がさらに上方に立ち上がるもの(A類)と外反する口縁端がわずかに肥厚されているもの(B類)がある。いずれも胴上半に最大径をもつ細長い器形をし、胴下部は、ゆるく外湾しながら底部に至る。東鬼川市井戸Iの甕形土器に比べて、はっきりとした特徴のようである。底は反りあがるもの(235, 236, 260) 底にも胴部と同様の刷毛調整が及んでいるもの(219, 220) がある。A類(227~231, 233~234, 237~253) は外反する口縁に、さらに上方に立ち上がる拡張部を貼りたしているもので、ほぼ垂直に立ちあがる口縁は丁寧に横ナデされている。外面には数条の退化凹線がつけられている例が多いが、ただ横ナデされているだけで状線を描きたしていないもの(248~253) もある。胴部には刷毛調整が加えられ、内面は頸のくびれ部まで粗い範削りがなされている。B類(254~263) は頸部から急に外反する口縁端部が少しつまみあげて、口端を肥厚させたり(263) 小さな拡張部を作ったりしているものである。口端拡張部も横ナデされ、凹面を形成しており、凹面を形成しており、凹線のようになっているものも認められる。(261, 263, 265,) 264は底部穿孔の土器で甕であろう。

(219, 220) はこの土括の底から2点のみ、完形のままで出土した。よく使用されていて、外面にはススが付着しており、内面には焦げついだ炭化物も見られる。胴部は全面に縦方向の刷毛調整は底面にまでおよんでいる。垂直に立さ上がる口縁端面には退化凹線が観察される。この二点は出土層位が違うけれども第2層の甕形土器と相通じる形態、特徴をもっており、第Ⅱ層と一括して取り扱ってよろしいであろう。

鉢 形 土 器 (266~269) 269は、砂粒を含まない胎土で、直立する口縁と胴部との境に細い範描きの沈線が一条認められる。内外ともに範研磨されている。むしろ椀形土器であろう。(266) は内面にも刷毛調整が施されている。(267, 268) は頸部まで横ナデがおよび、そのために頸のくびれ直下にかすかな屈折をもつ。外面には刷毛調整が横方向に施されている。

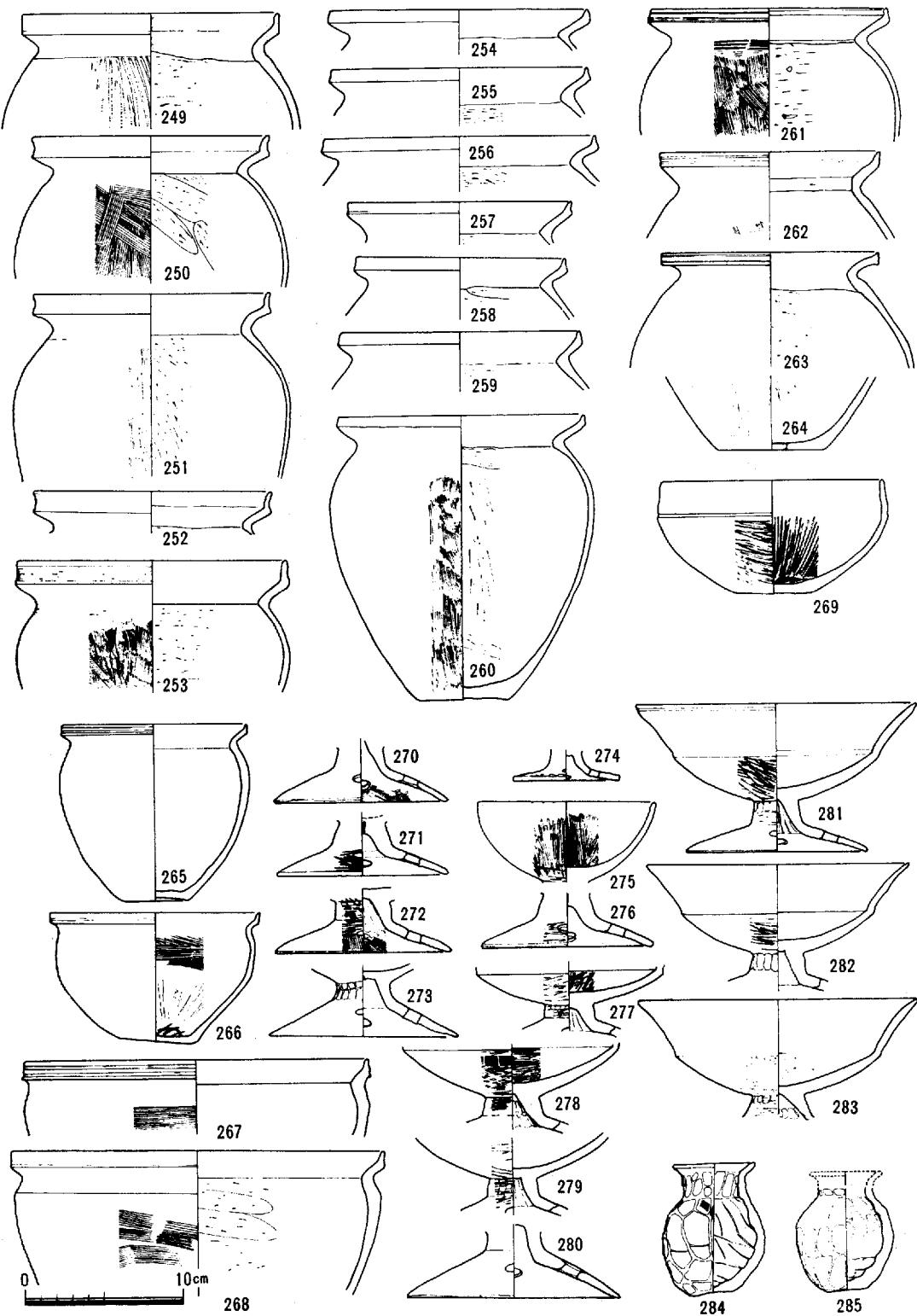
高 杯 形 土 器 (270~282) 杯部に二様あって、椀型となるもの(275)と浅い杯から外反して立ち上がるものの(277~279, 281~283)がある。(291) はその上端に細い範描線を一本めぐらしてい

上 東 遺 跡



第25図 才の町調査区 P—へ 出土遺物 (2)

上 東 遺 跡



第26図 才の町調査区 P—へ 出土遺物 (3)

る。いずれも高さ1～2cmの短い脚柱部から、屈折して急に広がり心持ち外湾して丸い脚端に移る。脚端の穿孔は共通して、4孔である。杯外面と脚柱は範磨きされているが、杯部と脚部との接合部は範で粘土をそぎとっているため、一様に面を取ったような痕跡となっている。脚柱内面は、しづらひずみが観察されるが、その頂点に杯上面までは届かない細い針であけたような孔が観察されるものが、いくつか認められる。技術的な意味を有する孔かどうかは今後の検討を持ちたい。胎土は(274)を除いて、いずれも砂粒を含まない水こし粘土を使用している。

小形土器(284, 285)は小型の手づくりね土器で、長頸の壺形土器を模したものようである。どちらも外面を範で削りとり、凹凸が顕著である。

形態的には、この一群の土器は井戸I(J-15)とP一ト(才の町)との中間的なタイプと見なし得る。

(藤田・柳瀬)

15) P一ト

<遺構>平面プランは、長軸約210cm、短軸約140cmの楕円形を呈す。深さ2.6cmを測る。底に行くに従い、円形プラウンを呈す。北側に寄りぎみになり、土層は3層に大別できる。第2層約70cmの深さからは板材および肩から上がほぼ完全な壺形土器(286)、木器(こも編み機具?)2個体(13, 14)、杭材2本等が出土している。その下層からは第27図のごとく完形土器及び完形に近い土器が積み重なるように出土している。深さ180cmまでは、ほとんどすきまなく重なって出土するが、そこから約40cmの間は、完形に近い土器は見られず土器片数片にとどまる。その下、底まで約50cmの間は、木器(把手付片口容器12)及び5～6個体の完形を含む壺形土器を検出している。第3層中の土器類は上部の土器と下部の土器の時期差は認められず、一括として取り上げることができる。

出土土器の個体数は、完形が30数個体、復原完形及び図示できるものを入れると、65個体を越える。そのうち壺形土器がいちばん多く個体数の6割弱、壺が2割強、その他つづみ形器台1個体、高杯片数点等となっている。

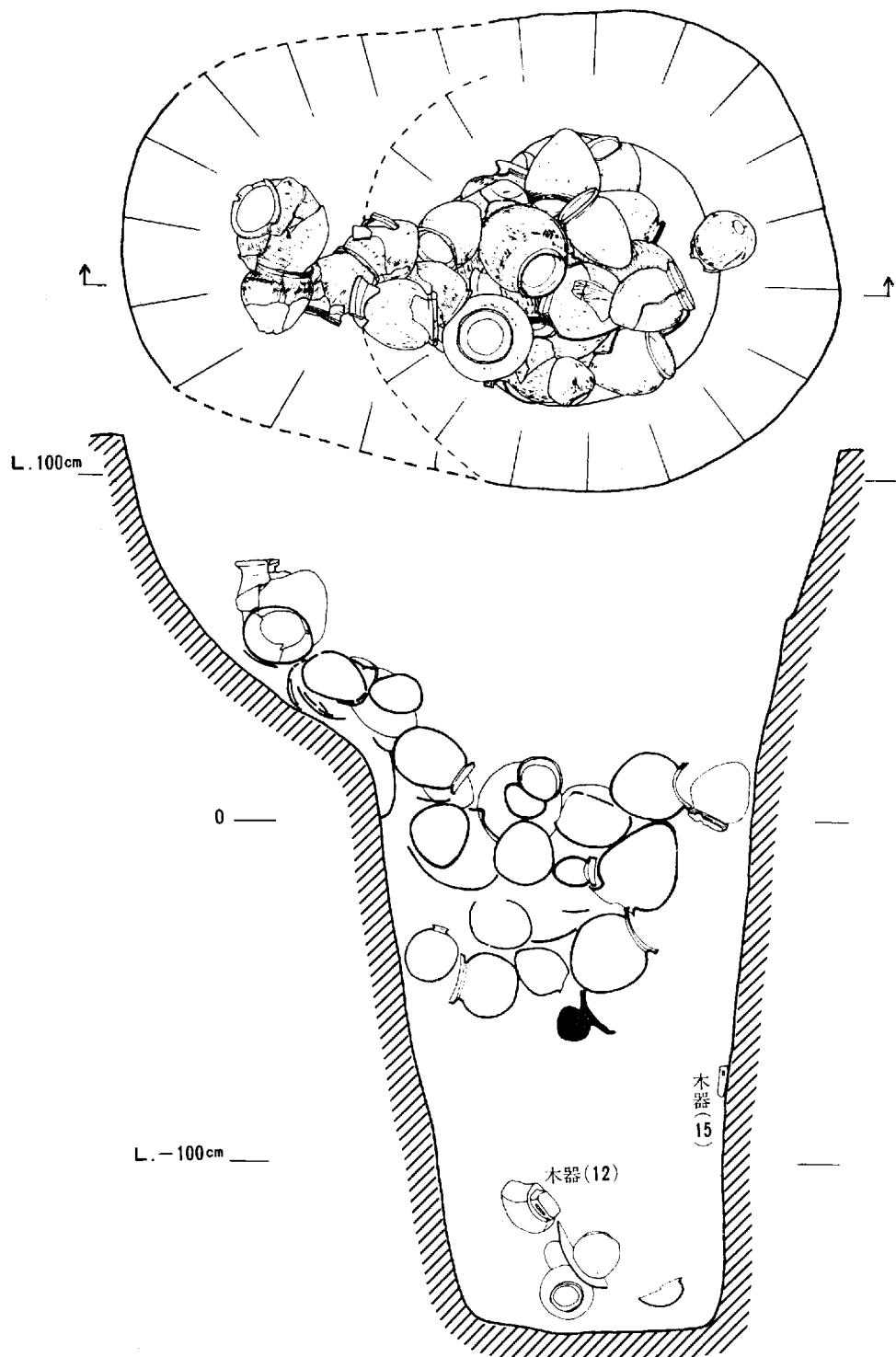
壺形土器は、約16個体出土しており、その約半分は底部外面にススの痕跡が認められる。しかし、壺型土器ほど厚くススの付着は見られない。また、内部にも炭化物の付着は認められない。壺形土器は、そのほとんどが表面にススの付着が認められて(中には表面に層を成しているものもある。)半数は内部に米及びアワの炭化物が付着している(註-6)。

以上、遺構の規模・形状・土器・木器の出土状態、出土土器の特徴等から、この遺構は破損した使用済みの土器類を単に廃棄した場所とは考えられない(註-7)。遺構の規模形状から考えると井戸と思われ、また底近くから出土した片口容器が、P一ハとの形状において良く似ており、「つるべ」の機能を持つことの関連性においても推察できる。

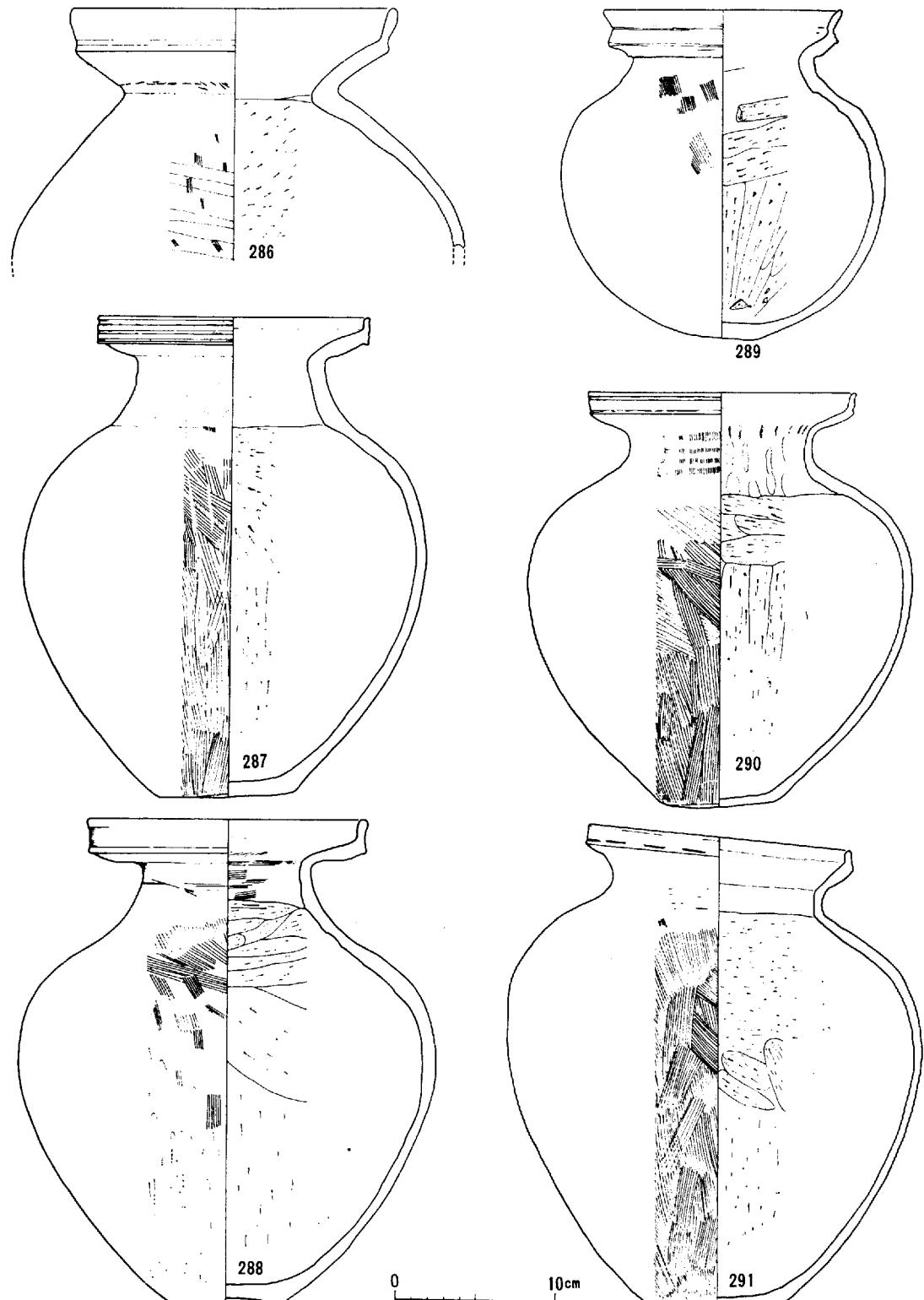
<遺物>土器・木器の他は、桃の種(2個)、トチの実(1個)、センナリビヨウタン(15個)、マクワウリ(3個)等の種子類が出土している。

壺形土器(286～301, 309, 287, 288, 290, 291)、胴部にかなり丸味を帯び、短かめの頸部を有する。特に287, 288にはいわゆる長頸壺のなごりの特徴が少し残っている。外反する口縁部は、端部でほぼ垂直に拡張する。口縁端面には特に文様は見られないが、横ナデによる2～3本の凹線状

上 東 遺 跡

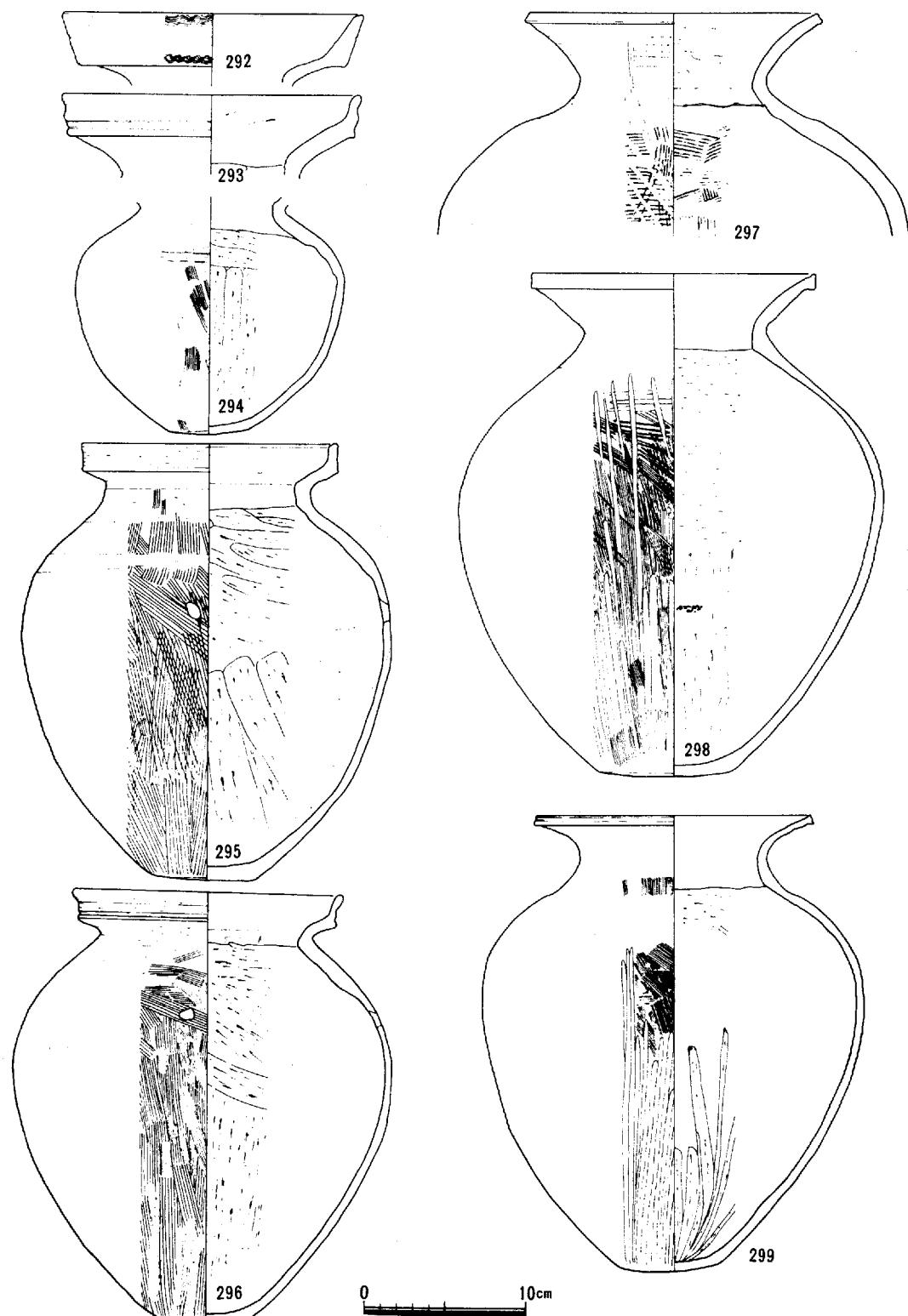


第27図 才の町調査区 P-ト 平面および断面図（縮尺 1/20）



第28図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (1)

上 東 遺 跡



第29図 才の町調査区 P-ト 出土遺物 (2)

の文様が残っているもの（287, 290）も見られる。外面の調整は、粗い刷毛目のもの（287, 290, 291）と刷毛目の上を範磨きしたもの（288）がある。内面は、底から頸洞部界まで範削りが成され、胴部のほぼ中央までが下から上方向に、ほぼ中央から上が横方向に行われている。口縁部内面は横ナデ、頸部内面は押圧整形及び刷毛調整が行われている。

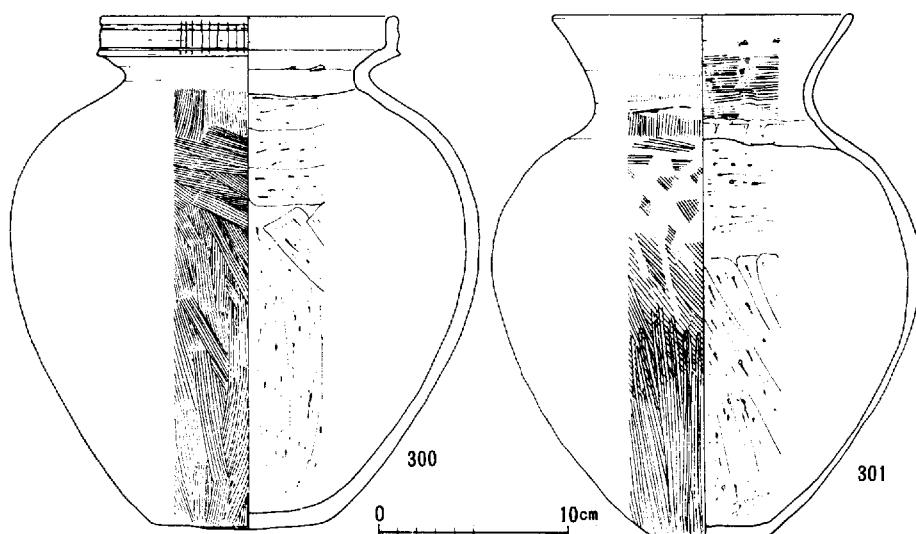
295, 296, 300は、頸部をほとんど持たない。口縁端部は287, 291とほぼ同じ特徴をもつ。胴部外面は刷毛調整、内面は、口縁部には横ナデ、それより下は範削りである。300の口縁端面には、縦方向に9本の範描沈線文が見られる。295, 296の胴部には径約1cmの孔が開いており、これは外側から的人為的な打撃によるものであろう。

297～299, 301の口縁部は、胴頸部境から「く」の字状に外及し、口縁端部の拡張はほとんど見られない。胴部外面は粗い刷毛調整の上に範磨きが行われており、肩部及び口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。

289, 294は器高と最大幅がほぼ同じで、全体的に丸味を帶びている。289の口縁端部の拡張はゆるく、「く」の字状に外及しながら立ち上がり、二重口縁を呈する。造りは稚拙である。内外面の整形は他の壺類とほぼ同じである。

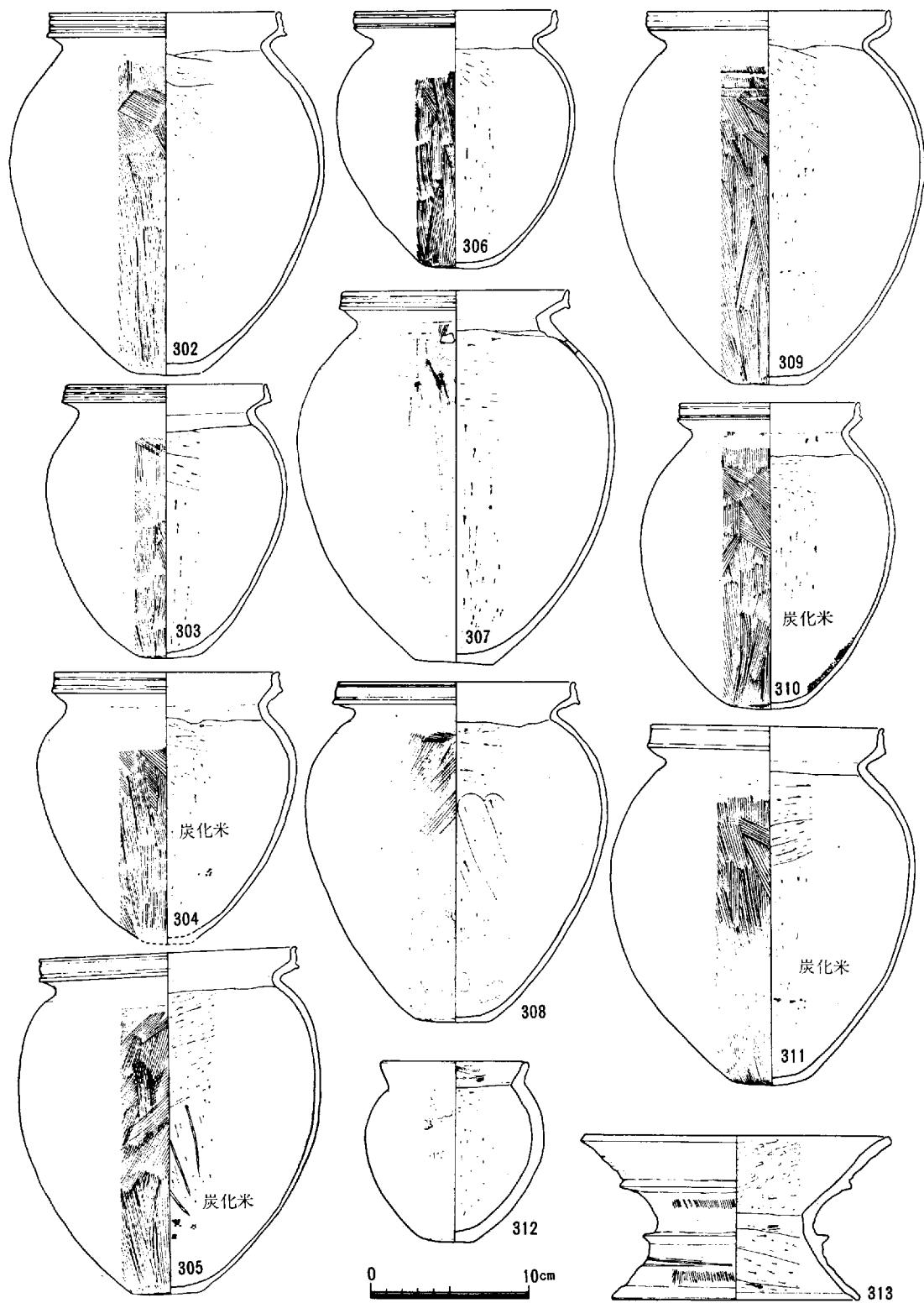
甕 形 土 器 (302～311, 314～335, 339～343) 304, 311は、胴部から「く」の字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部がほぼ垂直に立ち上がっている。そして口縁端面には横ナデによる2～3条の凹線状の文様が見られる。胴部外面にはかなり粗い刷毛目が見られ、刷毛目調整の後、肩部から口縁部にかけては、横ナデ調整が成されている。内部は、口縁部は横ナデ、口縁胴部境から下は範毛削りである。胴部中央から少し上までは、下から上方向の、それから上は横方向の範削りが成されている。304, 305, 310, 311等の内部底近くには、穀類の炭化物が付着している。

302, 303, 314～326の土器は、口縁端部がやや内傾して上部に拡張し、端面に4～5条のかなり顕著な沈線の上をナデ線が廻っている。この類の土器は、胴部外面の調整手法によって3つに分かれ。①302, 303は、刷毛目調整、②314～317, 305は、範磨き、③318～320, 322～324, 326は、肩部



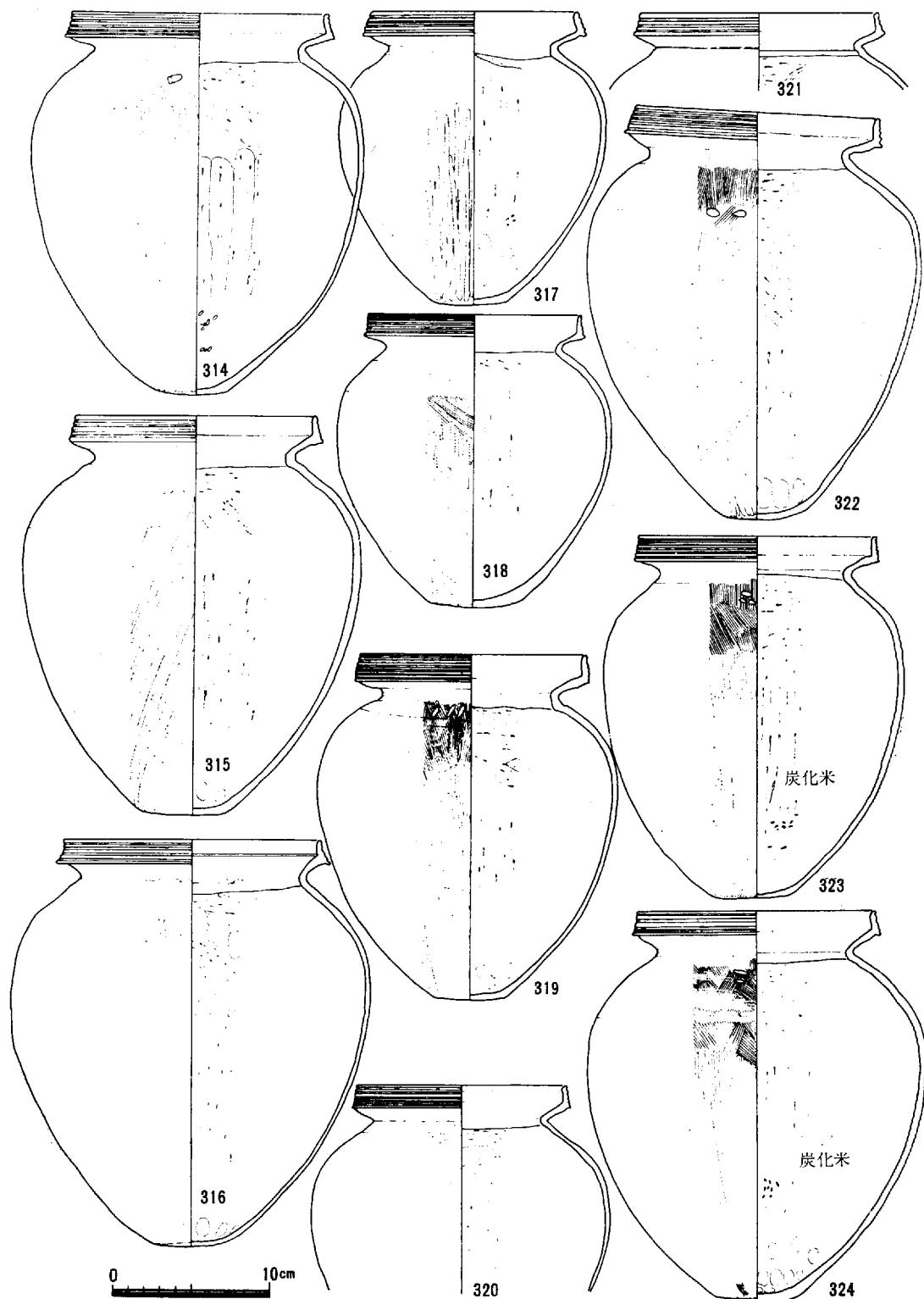
第30図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (3)

上 東 遺 跡



第31図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (4)

上 東 遺 跡



第32図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (5)

に刷毛目、肩部から下が範磨きされている。また、314、319、322～324、326の肩部には1～3個の刺突文が見られ、(3)のほとんどにそれが見られる。内部の整形は前掲の甕類と同じである。また、土器類の半数以上に炭化物の付着が見られる。

327～331は、口縁端部がゆるい反りを持ち少し立ち上がるもので、端面は横ナデされているだけであり、304～311の土器類はほぼ同じ特徴を持つ。

332～335、339・340の土器は、口縁端部にほとんど拡張を持たない。幅の狭い端面は、横ナデが成されている。

341～343は、口縁部が単に「く」の字状に外反しただけのもので、端部には拡張を持たない。341、343は、外面口縁部が横ナデ、胴部は刷毛目が残る。342の内面口縁部は刷毛目が残り、胴部の範削りも丁寧であり、ところどころに押圧痕も残る。343の胴部外面には、上部で叩き目の上から刷毛目が、下部で叩き目の上から範磨き（削りの感じ）が成されている。丸底に近い底部にも範磨き痕が見られる。内部は、口縁部横ナデ、頸部は刷毛目調整の上から、比較的柔らかい工具による削り（あるいは指によるナデ上げ痕）が見られる。底部には、米の炭化物の付着が多く認められる。

^{ヨシキ} 337は底部穿孔の土器であり、甕であろう。344には343よりも細かな叩き目が見られるが、P一ト出土の土器の中で叩き目を持つものはこれらの二点だけである。

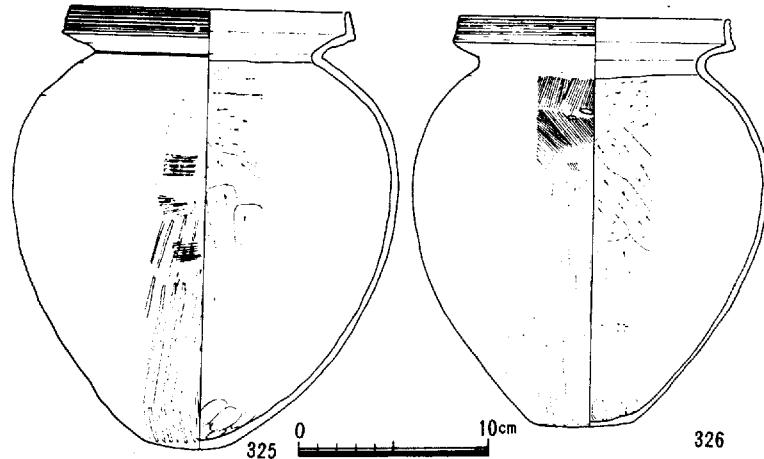
高杯形土器

高杯片は10数片出土したが、図示できるのは348～350の3点のみであった。いずれも精選された胎土で、焼成も非常に良好である。外面は細かく範磨きされている。脚部内面には、刷毛目が残る。

器台形土器

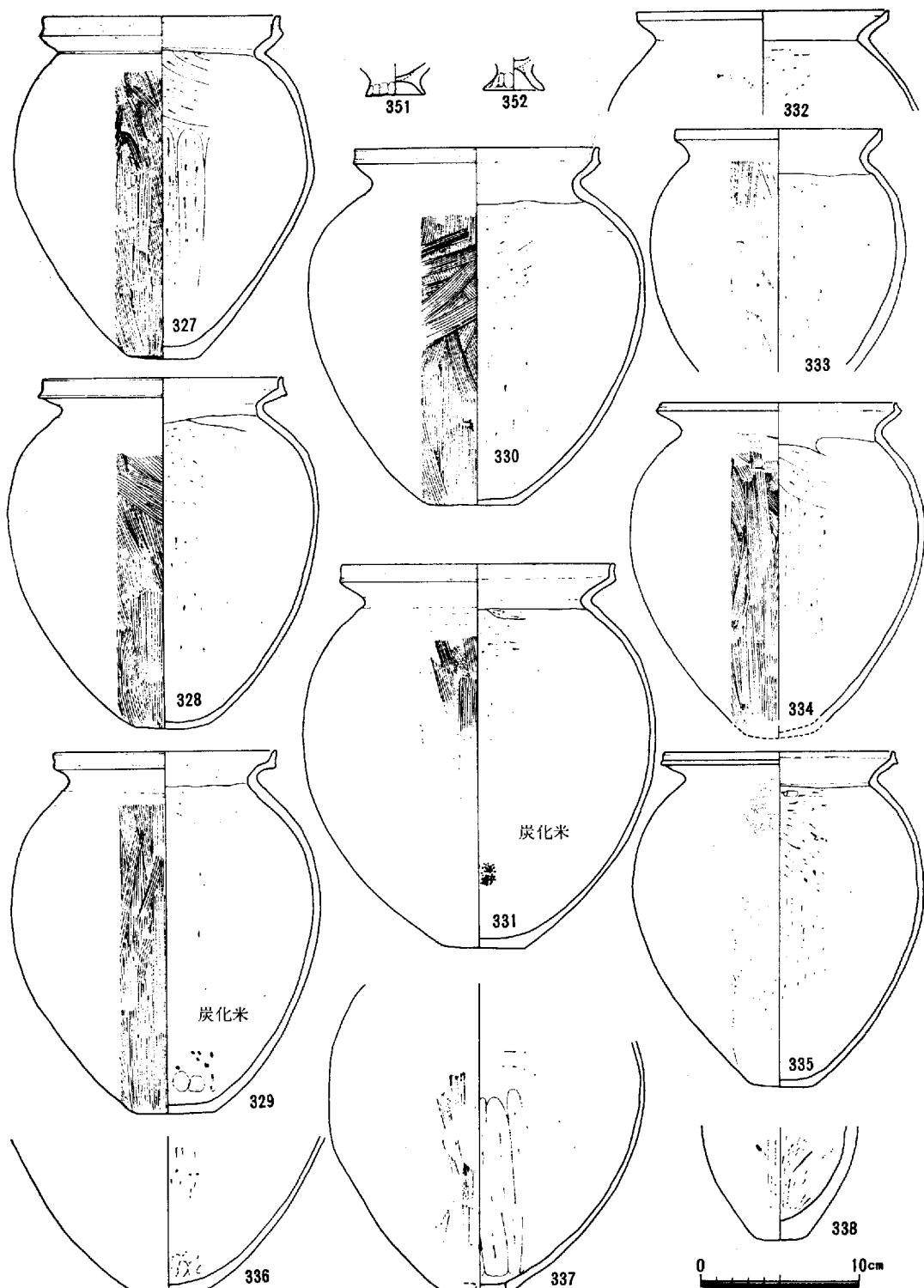
313はいわゆる鼓形器台で、上東遺跡では唯一の出土例である。約 $\frac{1}{2}$ を欠損するが、脚台端部から上台端部まで図示可能であった。器高10.6cm、上縁径19cm、下縁径15.4cm、くびれ部径9.8cmを測る。断面は、「く」の字状を呈し、上臺部と脚台部にそれぞれ凸帯がつくことにより、特に上臺部においては二重口縁の様を呈する。また上臺部の口縁端部は多少肥厚ぎみである。外面調整は粗な縦方向の刷毛目の上から横ナ

デが、内面上臺部は丁寧な範削り（範磨きと呼んだ方が良いかも知れない）、及び端部近くでは横ナデがそれぞれ行われている。全体的に整形手法は粗雑である。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石、石英の細粒を含み甕・甕類の胎土と大差はないが、胎土焼成とも良好である。

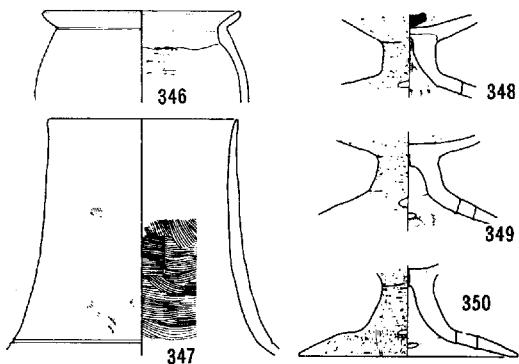
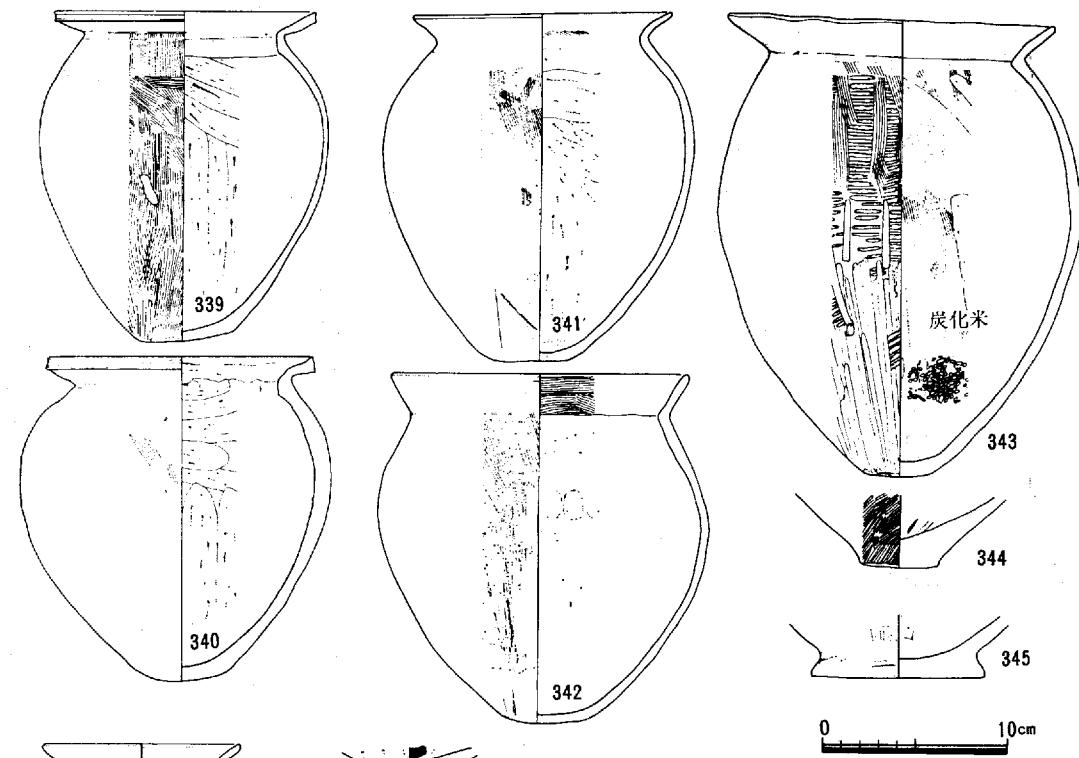


第33図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (6)

上 東 遺 跡



第34図 才の町調査区 P-1 出土遺物 (7)



第35図 才の町調査区 P一ト 出土遺物 (8)
東鬼川市地区で多量に出土しているこの種土器と比べて、小ぶりで造りも多少丁寧である。脚部内面は、横ナデ調整が成されている。

その他の土器

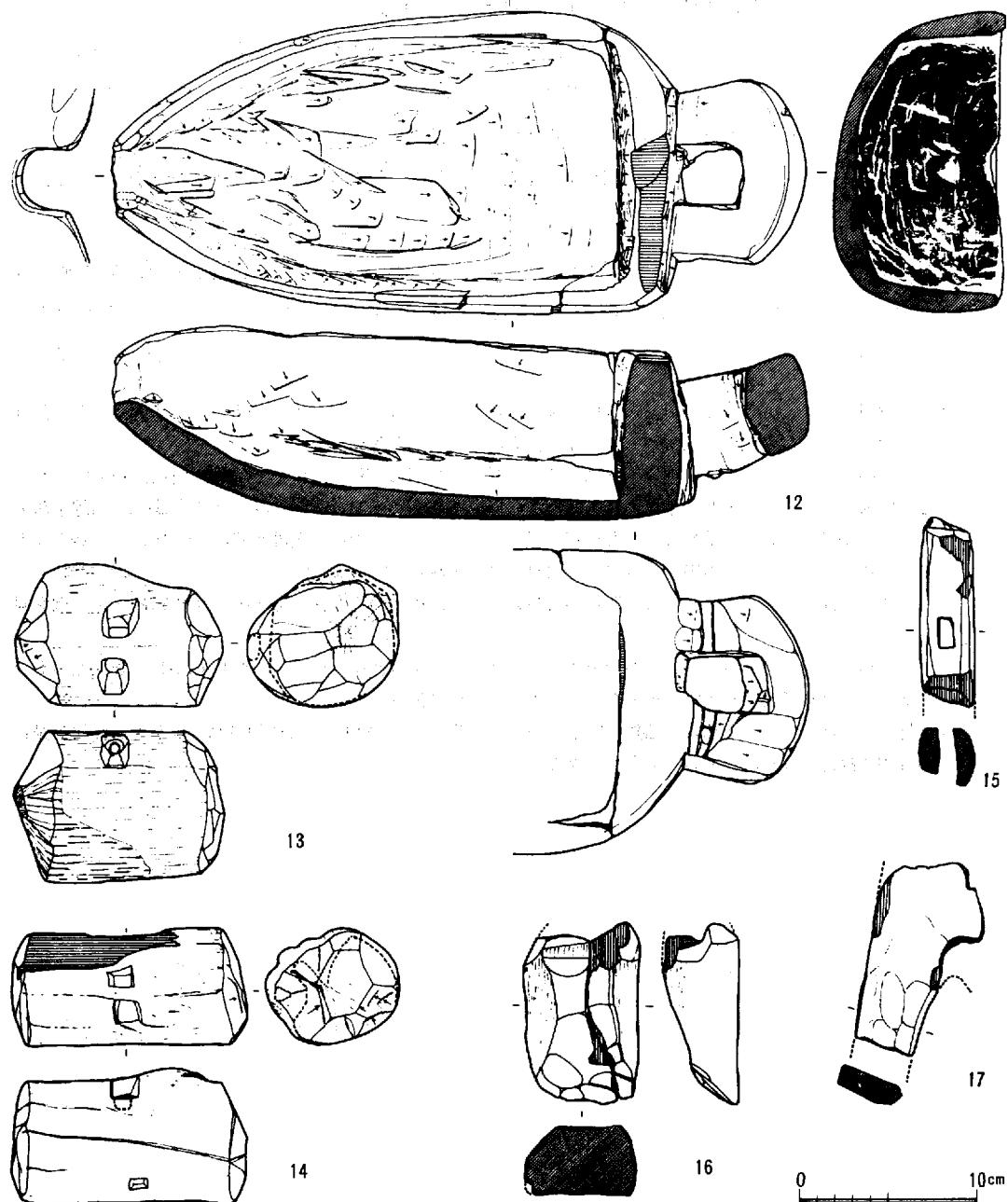
347は台付直口壺の類であると思われ、井戸I (J-15)、及びP一ハ(才の町)出土のこの種土器 (964, 184) と比べて直口部の発達が著しい。胎土はかなり精選されたもので、外面は丁寧に磨かれている。内面には刷毛目がくっきりと残る。

351, 352の製塩土器台脚部は、亀川地区及び

木 器

片口容器 (12) —全長40cm、幅17.1cm、高さ11cmを測る。P一ハ出土の片口容器 (9) とその造り、形状とも類似する。9と同様一木造りで、片口部は幅5cmの「U」字型を呈し、基部端には把手部 (長さ約9cm、幅10.5cm、厚さ5cm) が斜め上方に造り出されている。把手中央には、基部に接して、3.8cm×4cmのほぞ穴があけられている。ほぞ穴の内面は><状に加工されており、そのため柄は垂直上方、あるいは基部方向斜上方 (内傾) にしかつかない。皿部内の器形湾曲部、及びコーナー等の加工のしにくいと思われるところには、かなり深く1~3cm幅の加工痕が顕著に残る。

この木器は、一般の容器としての用途以外に、9と同様「つるべ」の可能性が強い。樹種はキリで

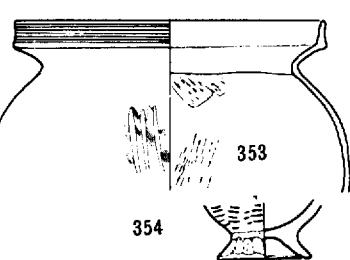


第36図 才の町調査区 P-1ト 出土遺物 (9)

ある。

おもり状木製品（13・14）—13は長さ12cm、径8.5cm、14は長さ13.5cm、径7.5cmを測る。両方とも自然木の両端を鋭い刃で加工し、中央腹部端に穴（13が径0.6cm、14が0.8cm四方）を穿っただけのものである。

用途として「浮き」「鳴子」など考えられるが、樹種がアラ



才の町調査区 P-1ホ' 出土遺物

上 東 遺 跡

カシであることから、こも編み機具（おもり）の可能性が強い。

その他の木器（15～17）—15は現存長さ10.7cm、幅3.1×3.2cmの角材で、端部には加工痕が顕著に残る。建築材片と思われ、0.8×1.7cmのほどぞ穴があけられている。樹種はイチイガシである。

16は現存長さ1.07cmでくさび状を呈する。樹種は15と同じ。

17は現存11cmを測り、二又鋤片と思われる。表面の一部は炭化している。構種はコナラである。

16) P—木'

径40cm、深さ10cmの小土壙である。遺物は少ない。353の甕形土器は、口縁端面に櫛描沈線を施し、亀川上層の甕形土器に類似する。また354の製塩土器は、胴部表面に叩き目が見られるもので、これも亀川上層の470に類似する。
(伊藤・柳瀬)

註—(3) 岩倉遺跡では、弥生前期～中期の遺物も採集されており、本遺跡と岩倉遺跡とのほぼ中間にあたる部分の、道路拡幅に伴う側溝の工事にも、中期～後期にかけての土器が出土している。

(4) 弥生中期の凹線文については、『紫雲山』「詫間町文化財保護委員会」1964の中で佐原真が述べている。中部瀬戸内を中心とした地域では、後期の壺形土器、甕形土器、鉢形土器の口縁端部に、凹線手法ではあるが中期の凹線の範疇にはいらない線が見られてくる。ここでは、土器形態の変化の中で、後期前半の土器に見られるこの種の線を、退化した凹線（退化凹線）という表現で呼ぶ。

(5) 単に把手部が造り出された片口容器は例も多いが、それに穴が穿たれ、柄が付くものはほとんど例を見ない。

(6) アワらしきものが付着している甕形土器は2、3点しか見られないが、アワだとすれば、畑地性のものであり、それが栽培されていたかどうかは別にしても興味深い。

(7) 特に根拠はないが、上部の土器類に完形が多いこと等から、井戸として使用されていたものに何か保存の目的で故意に置かれたという見方もできる。

第3節 鬼川市地区の微高地上の遺構、 遺物の概略

第一次調査において、亀川調査区から西鬼川市調査区までが一つの微高地になっていることを確認した。この区間は包含層が良く残存しており過去においても多量の土器片が採集され、敷石住居址が存在しているといわれていた場所である。

第一次調査の結果、遺構等がこの地区全面に密集していると予想された。このため国鉄に対して設計変更を要望し、その結果は8mスパンの所が35mスパンとなり、その橋脚位置6ヶ所（亀川1、東鬼川市3、西鬼川市2）、工事用道路と付け変え用水位置等の調査を行うことになった。

この微高地の東端部（農道一市道一をまたぐ亀川調査区の橋脚位置周辺）では、現在の水田面においても約1mの段差がある。このため高い場所では田に水が入らずに過去数十年間たびたび地下げ作業が行われ、弥生時代を中心多くの遺物が出土していた。この弥生時代～古墳時代にかけての微高地斜面では、江戸時代前後の池状遺構、土壙群、溝、古墳時代包含層（亀川上層）、弥生時代の後期包含層（亀川下層）が一定の層序をなしてみられた。

この中には製塩（註一8）に使用されたと思われる台付深鉢形土器の脚部数百個体分をはじめ、炭化物が集中してみられた。

この数百個体の製塩土器は60個前後を1まとめて投棄されたような状態で、4～5ヶ所にまとまって検出された。この地区での製塩土器の総数は千個体近くになった。

また、この斜面の低くなる場所では、青灰色細砂、粘土などの互層となり、流木片等も含みながら、東に行く程その厚さを増している（第37図参照）。この堆積層の下にも弥生式土器を中心とする包含層、南北に走る大小の杭列がみられた。

製塩土器多数が集中してみられた下部にも上部を削られた状態で2m程の深さの井戸状遺構が存在した。

以上のように、この地点が東鬼川市からつづく微高地東端部にあたり、この地点から才の町の微高地までの間約90mが川あるいは河口の状況を示している。

この東・西鬼川市約150m間の微高地からは弥生時代中期～鎌倉時代までの遺構が重複してみられた。主なものは住居址7（弥生時代後期5、古墳時代前半期1、鎌倉時代1）、弥生時代の製塩炉と考えられるもの1、溝9（弥生時代中期5、後期2、古墳時代1、鎌倉時代1）、土壙墓（ほとんどが弥生時代後期）井戸状遺構8（弥生時代後期7、鎌倉1）、及び多数の土壙群であった。これらの中には柱痕跡を持ち柱穴と思われるもの、袋状土壙になるもの、土壙内に多数の土器片（弥生式土器～須恵器、鎌倉時代まで含めて）を含むものなどがあり、数100ヶ所に達する。

またこの微高地上の弥生後期の遺構が存在する下層からは、縄文時代晚期の甕形土器（593）、弥生時代前期の壺形、甕形土器類も数点出土している。（594～600）

以下時期は前後するが調査地点ごとに主な遺構及びその出土遺物を略述する。

（伊藤）

註一(8) 高橋 譲 「台付深鉢形土器の系譜について」『遺跡25』

1) P — I (亀川調査区)

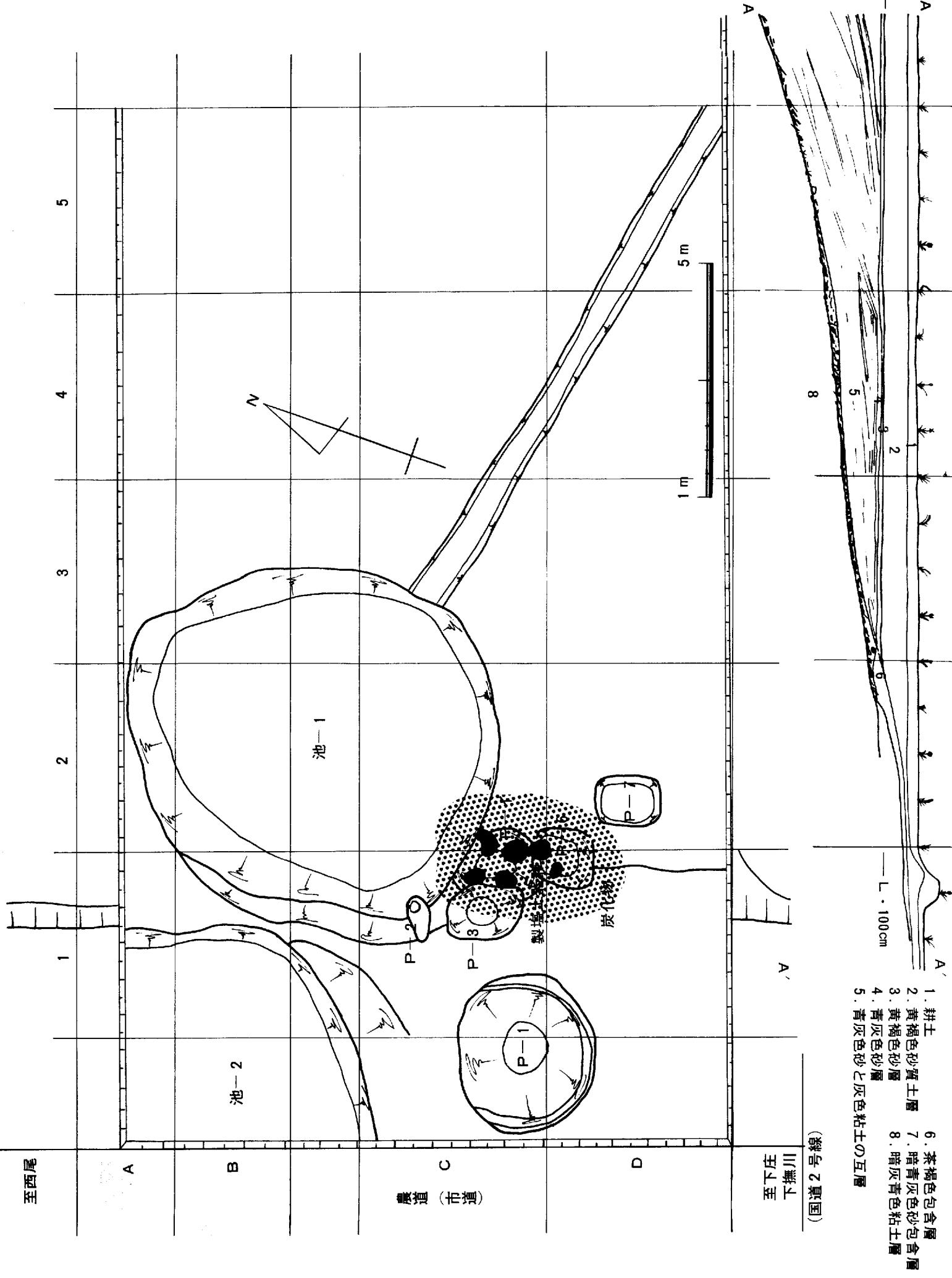
長軸200cm、短軸160cmの不正円形を成し、深さ約170cmを計る。内部には土器・木器・礫・木片等がみられた。製塩土器等の出土した下層にあたるが、上部は斜面のためかなり削平されている。出土遺物は壺形土器(360~367)甕形土器(368~374)高杯形土器(382~390)ときぬた状の木器が一点(18)出土している。

出土した土器はP—I(才の町)と同時で弥生時代後期前半と思われる。

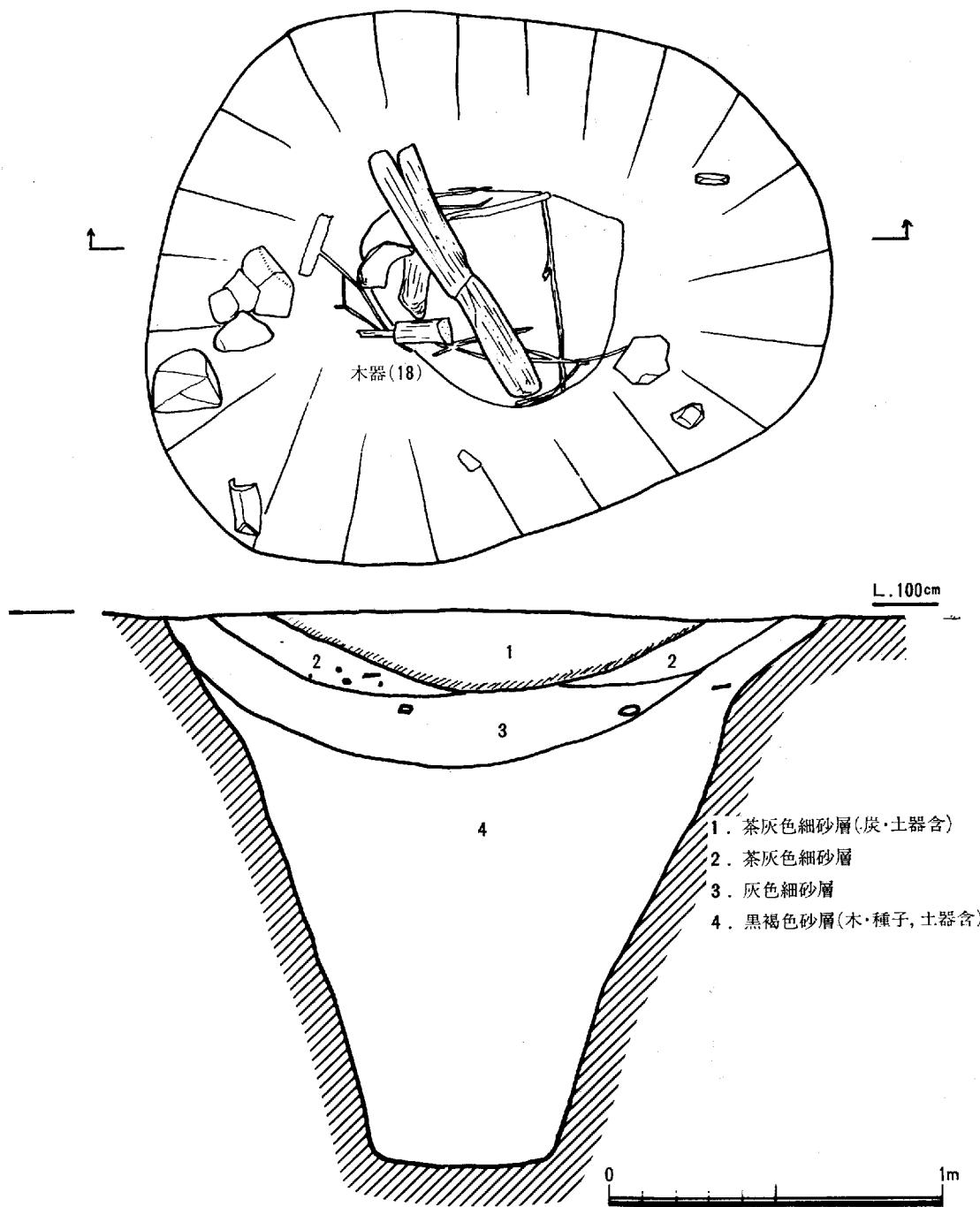
木器(18)はきぬたと思われるもので、全長27.8cm、楋部長さ16cm、径6~8cm柄部長さ11.8cm、径2.8cmを測る。柄部はほとんど腐蝕して表面がくずれかけている。樹種はウバメガシである。

(伊藤・池畠)

第37図 龜川調査区平面図および南壁東西断面図（縮尺1/100）

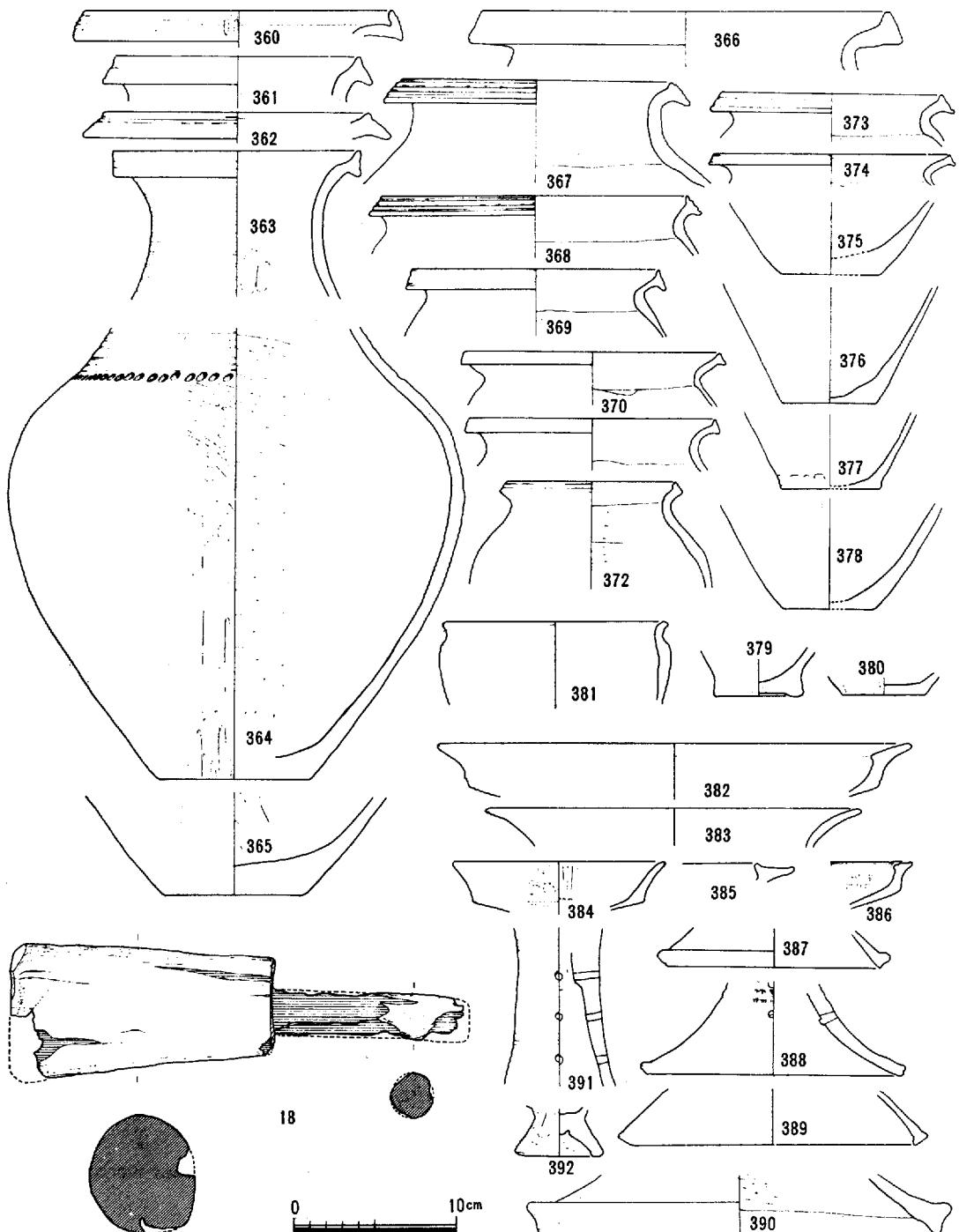


上 東 遺 跡



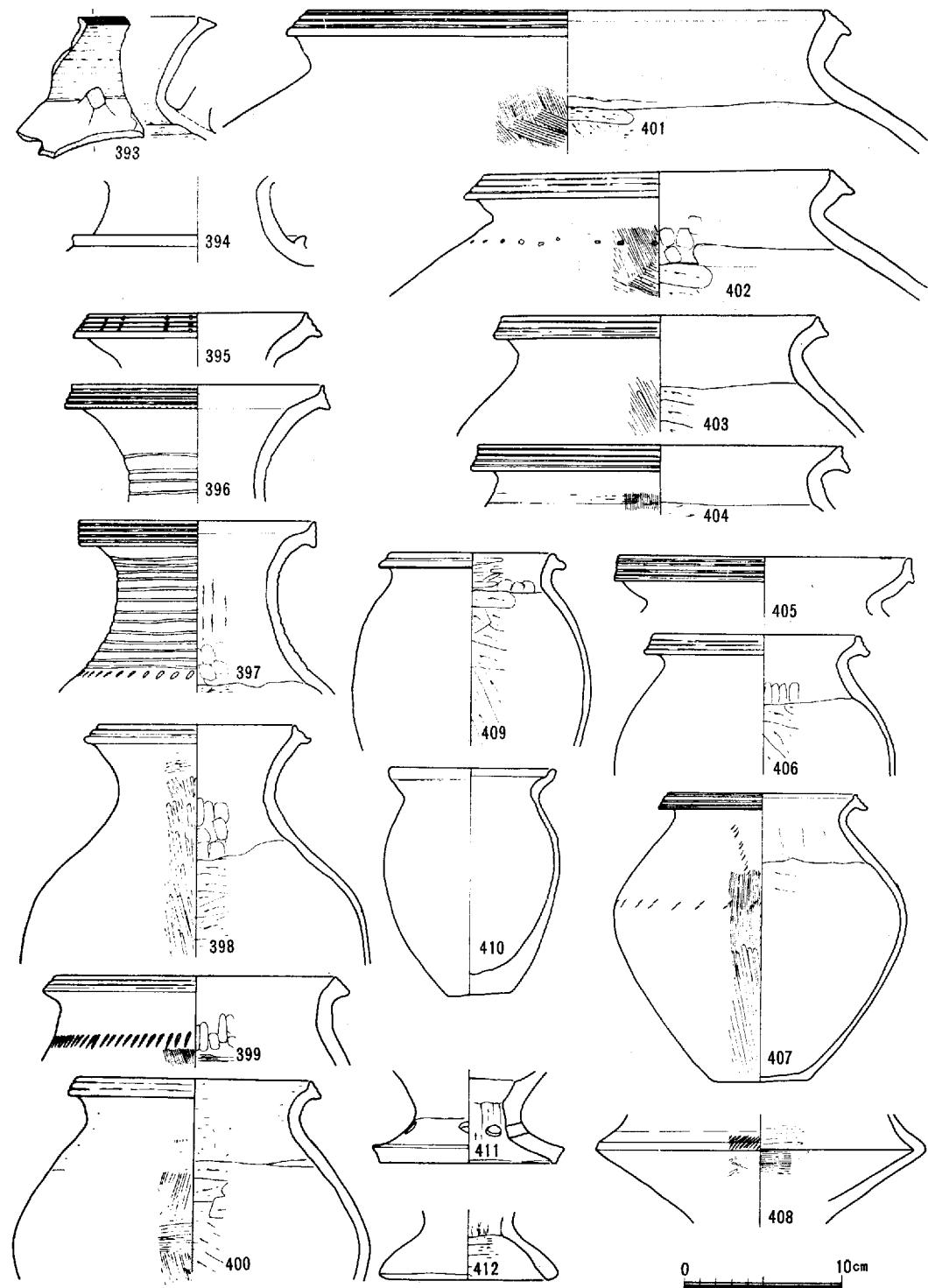
第38図 才の町調査区 P-1 平面及び断面図 (縮尺 1/20)

上 東 遺 跡



第39図 龜川調査区 P-1 出土遺物

上 東 遺 跡



第40図 龜川調査区 包含層下層出土遺物 (1)

2) 亀川斜面の出土遺物

＜下層の出土遺物＞壺形土器（393～402, 404, 407, 428～430）392～397は長頸壺で393, 394については、胎土も良好で整形も丁寧であり弥生中期の様相を呈する。395～397は才の町溝Y・Bに見られる長頸壺の形態であり、後期の古い様相を呈する。398は長頸壺の類に属するが、頸部から胴部にかけてはゆるやかなカーブを示し、ナデ肩を示す。外部は笠磨きが施されている。

399, 402, 407の頸部下あるいは腹部には刺突文が見られる。429は台付壺形土器と思われる。

甕形土器（413～424, 425～436）一口縁部は「く」の字状に外反し、端部は内傾し上下に拡張又は、肥厚するもので、端面には凹線文、又は退化した凹線が残る。内外部の調整はP—10（J—30）P—1（才の町）等出土の弥生後期の古い要素をもつ甕形土器類と類似する、413, 414, 420, 422については内面笠削りが、口頸部まで至らず、手法的には中期末の形態を残すものもある。

高杯形土器（438～442, 444～450）—杯部口縁端部が内外に（特に外側に）拡張するもの438, 439, 444としないものの440、上部につまみ上げ肥厚させたもの441が見られる。445～449は台脚部及び脚柱部に円孔、竹管による刺突文、櫛描笠描の沈線文が施されている。全体に中期的な形態を残している。

鉢形土器（443, 451）—443は高杯形土器にも類似している。451は深い大型のもので、口縁部外面はナデによる凹部がみられる。内外面とも笠磨き調整されている。

蓋形土器（452）—外面には全体に指頭による押圧痕が見られる。内面には笠削り、端部近くに横ナデが見られる。全体に雑な造りである。突出した珠部を持ち、特異な土器である。蓋と考える。

製塙土器（453～457）—上部でグループを成して検出されたこの種の土器と形態を同じくする。

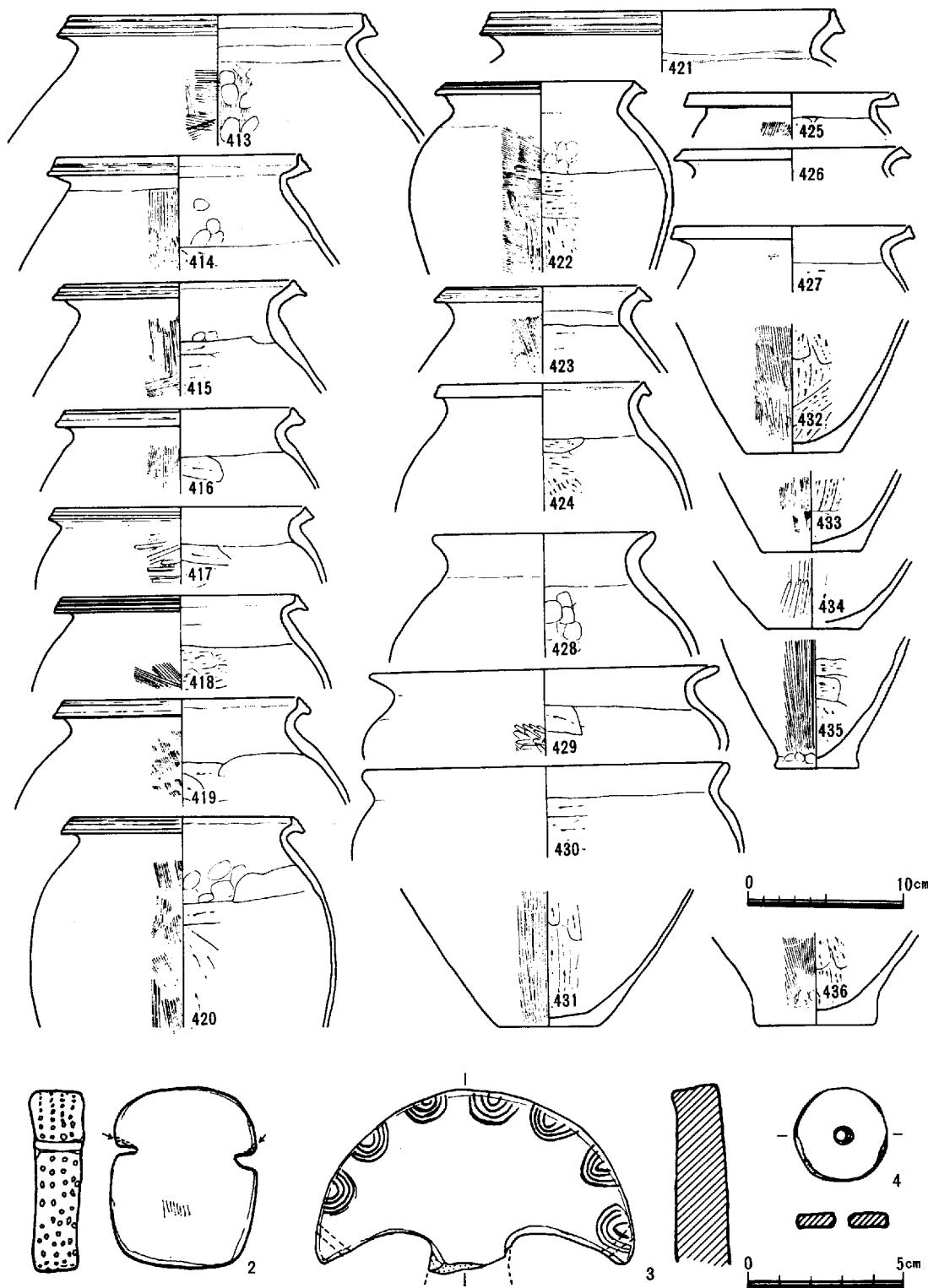
亀川下層出土の土器類は、微高地の斜面に土器溜りの様相を呈して検出されたもので、中には、形態的に中期的な要素を持つものや後期では新しい要素をもつもの405, 437が混ざるが、全体的には後期の古い様相を持つものとして取り上げができる。形態的、時期的には、P—10（J—30）と併行関係にあると思われる。

分銅形土製品（2・3）—2は、亀川の微高地の肩部、土層的には製塙土器群の存在する面あるいはその下層にあたるレベルで出土した。3は上層、下層の土器が混って微高地斜面から底に向って堆積した土器片層（第37図参照）からの出土である。2は長さ5.9cm×幅4.7cm、厚さ1.8cmを測る。両面ともところどころに刷毛目が擦痕のように残る。文様としては側面の周囲に先の尖った工具による刺突文（径1～1.5mm、深さ2mm、約180個）が不規則に点在する。刺突文のうち2個は、張り出した上端部の上面からくびれ部内側に穴として通っている。胎土は精選され良く焼きしまっている。3は半分を欠損しているが、上半分であろう。幅10.2cm、厚さ1.7cmを測る。表面上縁にそって櫛描重弧文が7ヶ所に施され、はり出し端部には両端に内側に向って穴があいている。裏面は上縁にそって孤状に肥厚している。胎土、焼成とも良好であり、褐色を呈す。

2, 3とも出土状態からは時期は決定できないが、亀川斜面出土の土器類の時期幅及び他地城出土の例から考えて、弥生中期末から後期にかけてのものと思われる。

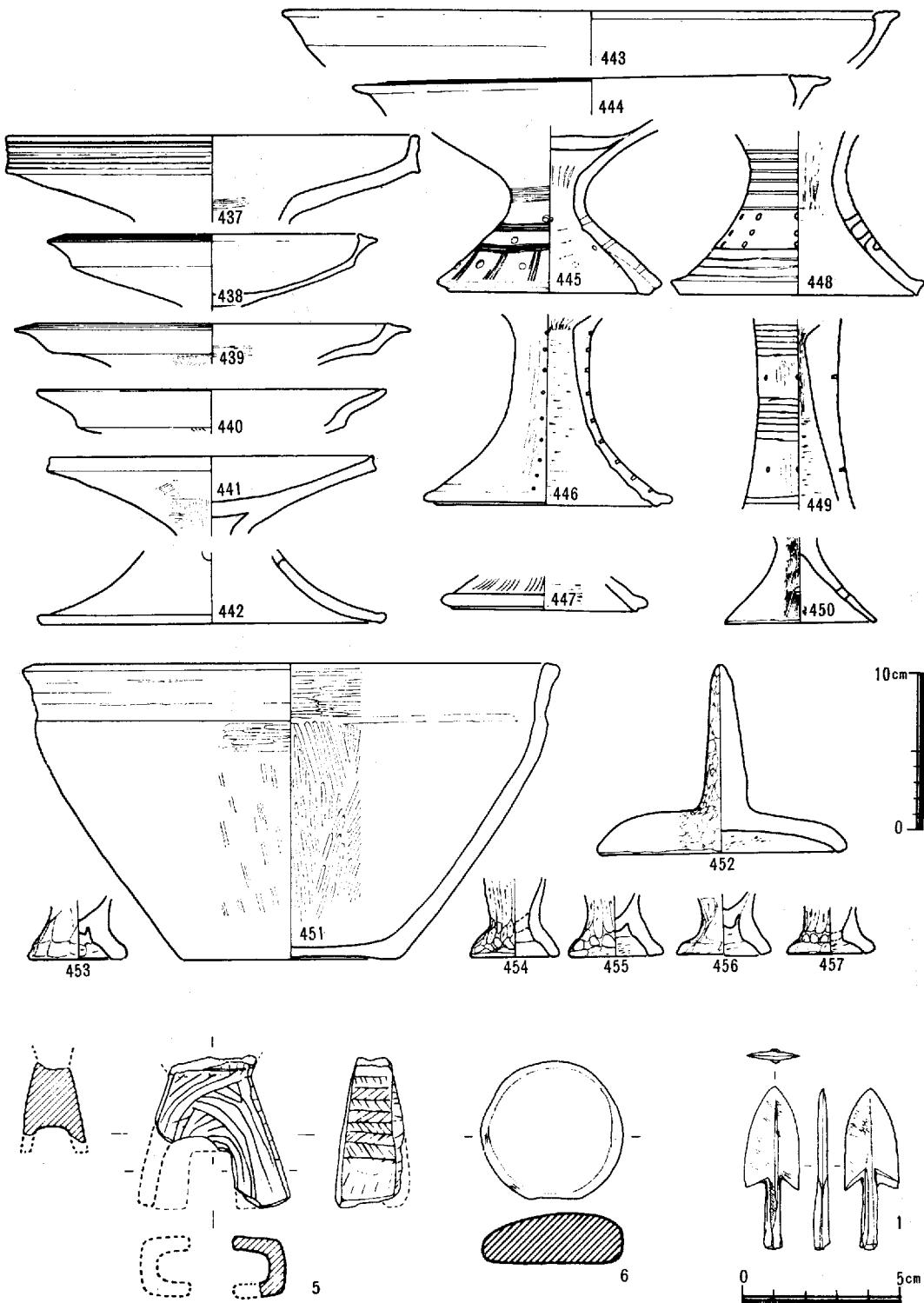
紡錘車（4）—土器片利用の小型品である。径3cmを測る。両面に笠磨きが残っている。

上 東 遺 跡



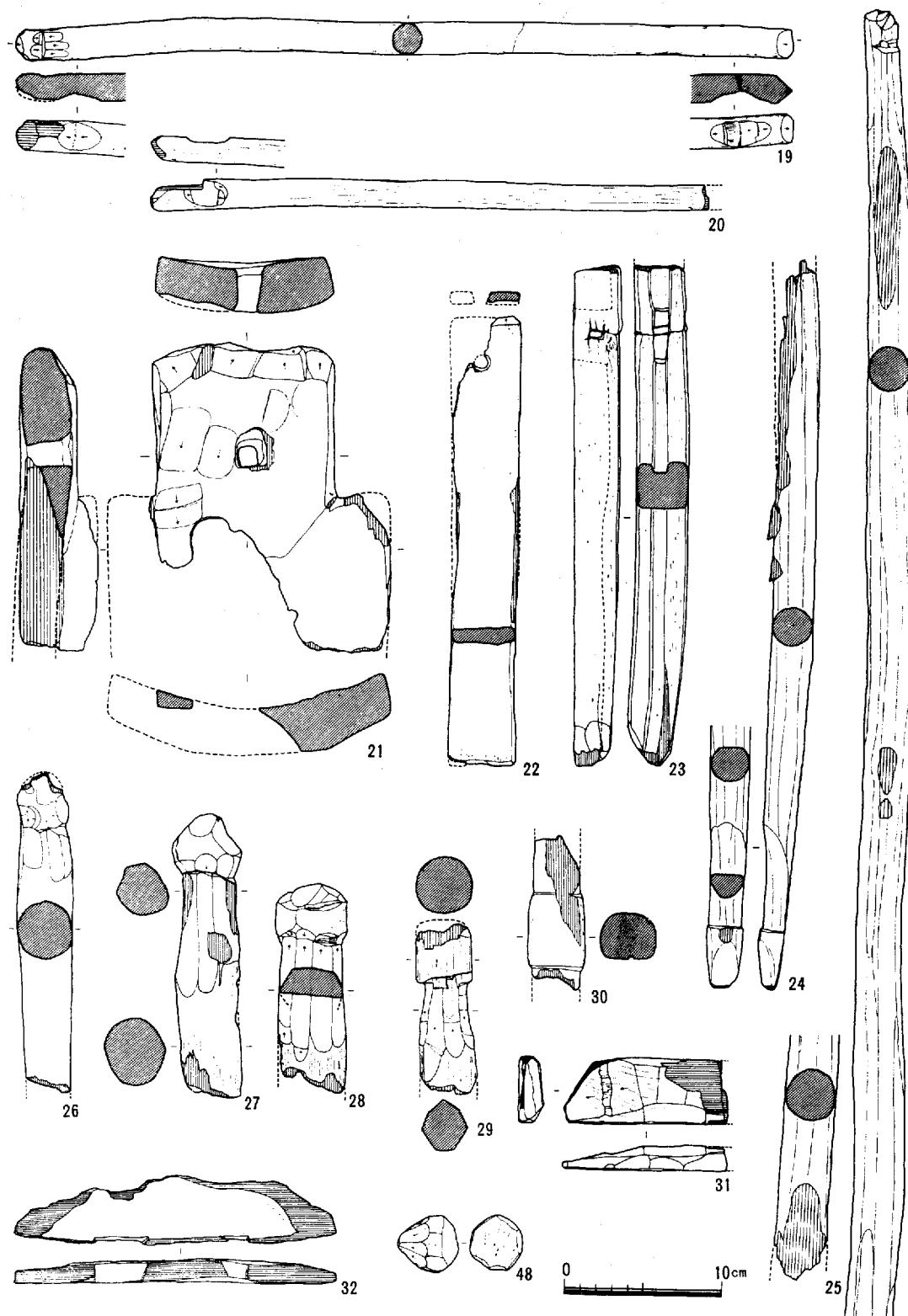
第41図 龍川調査区 包含層下層出土遺物 (2)

上 東 遺 跡



第42図 龜川調査区 包含層下層出土遺物 下層出土遺物 (3)

上 東 遺 跡



第43図 龜川調査区 斜面～川底出土木器

上 東 遺 跡

不明土製品（5） 一土製品3と出土状態を同じくする。しいていえば琴支形を呈する。現存するものと同じ形のものが対称に付くのか、土器の装飾の一部又は把手か不明である。両面、両側面には幼稚な籠書き文が施されている。

6は、径4.5cmのほぼ円形を呈し厚さ1.5cmを測る。片面は面取りされ、用途不明の土製品である。投弾かも知れない。

銅鏡（1） 一亀川微高地斜面の堆積層からの出土である。長さ5.2cm（刃長3.3cm）、幅1.7cmを測る。形態的には、身部が三角形を呈すなど古い要素を持ち、亀川斜面の伴出遺物からみて、新しくても亀川上層の時期まで遡ると思われる。

木製品（19～32、48） 一東鬼川市、西鬼川市各地区の微高地の末端である亀川地区の斜面から川底近くにかけて出土したものである。他にも加工痕の残る杭の類は約20数点出土している。第43図に図示した23、24、52等は杭に転用されていたものである。

19は全長49cm、20は現存長35cm、径2cmをそれぞれ測り、自然木の両端を加工しただけのものである。形状から「ちきり」と思われ、19の一方の端部近くには小孔があけられている。樹種は19がコバノミツバツツジ、20がヤマツツジである。

21は、把手部と基部の一部が残存して検出された。把手部ほぼ中央には 2.5×1.4 cmの穴が穿たれている。形状はスコップに似ている。樹種はクロマツである。

22はモミ材で、細かな征目板である。長さ28.5cm、幅4.2cm、厚さ1cmを測る。両面とも丁寧に加工され、端部近くには径0.8cmの円形の穴が穿たれている。端部の一方は中央が少し凹みぎみに加工され、もう一方は斜めに面取りが成されている。用途は不明である。

23～25はそれぞれ建築材、弓状木製品が杭に転用されたものである。23は、ほぞ穴（0.9×3.3cm）が加工され、ほぞ穴には 0.4×0.7 cmの「くさび」が残る。端部には杭にするための二次的な加工痕が見られる。樹種はキリである。24、25はザイフリボクで、同一個体の可能性もあるが、端部の加工の状態からみて別のものであろう。どちらも木の中心部を使用しており、かなり削り込まれている。25は弓と思われるが、24は不明である。

26～28は男性性器形を呈し、自然木を簡単に加工しただけの29もその類であるが、加工が雑である。樹種はそれぞれ異り、ネムノキ、コナラ、ウバメガシ、ホオノキである。

30は中央にふくらみを持ち、裏側は面取りされている。面取りされた面中央部を縦方向に幅0.3cm、深さ0.3cmの「U」字の溝が走る。樹種はリョウブである。用途は不明。

31は切り出力ナイフ状を呈し、表側面ともに加工痕が良く残る。裏面には加工痕は見られない。先端は炭化している。樹種はアカマツである。形状は籠状を呈し、刷毛目の原体はこの種の板（籠）状の木製品に当たるのではないだろうか。

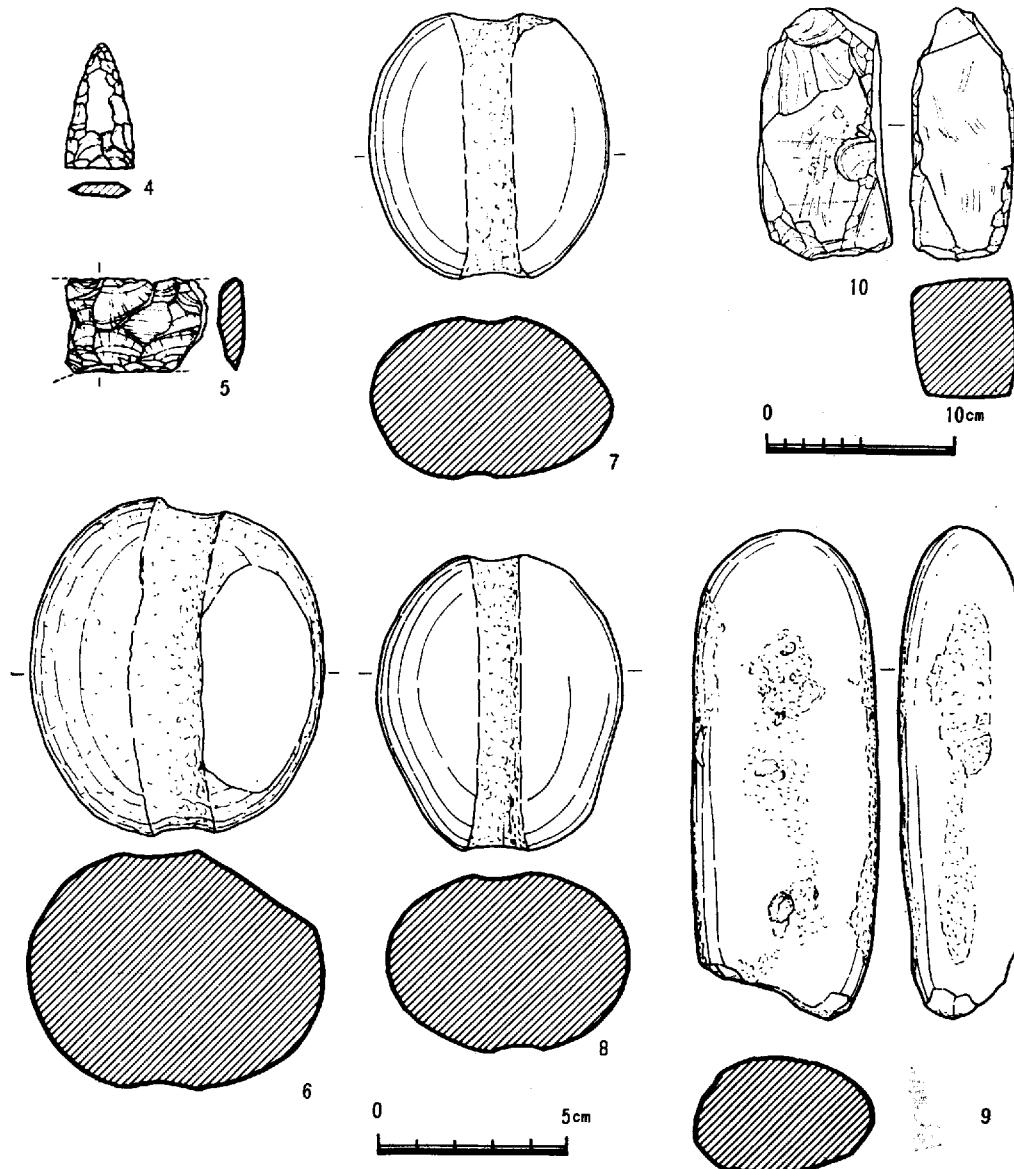
32は板状木製品に二ヵ所の穴が穿たれた痕跡が見られるもので、破損がひどく、形状は不明である。樹種はアカマツで、木取りは板目である。

48は径6cmを測る。こも編み具のおもりの可能性もある（註—9）。

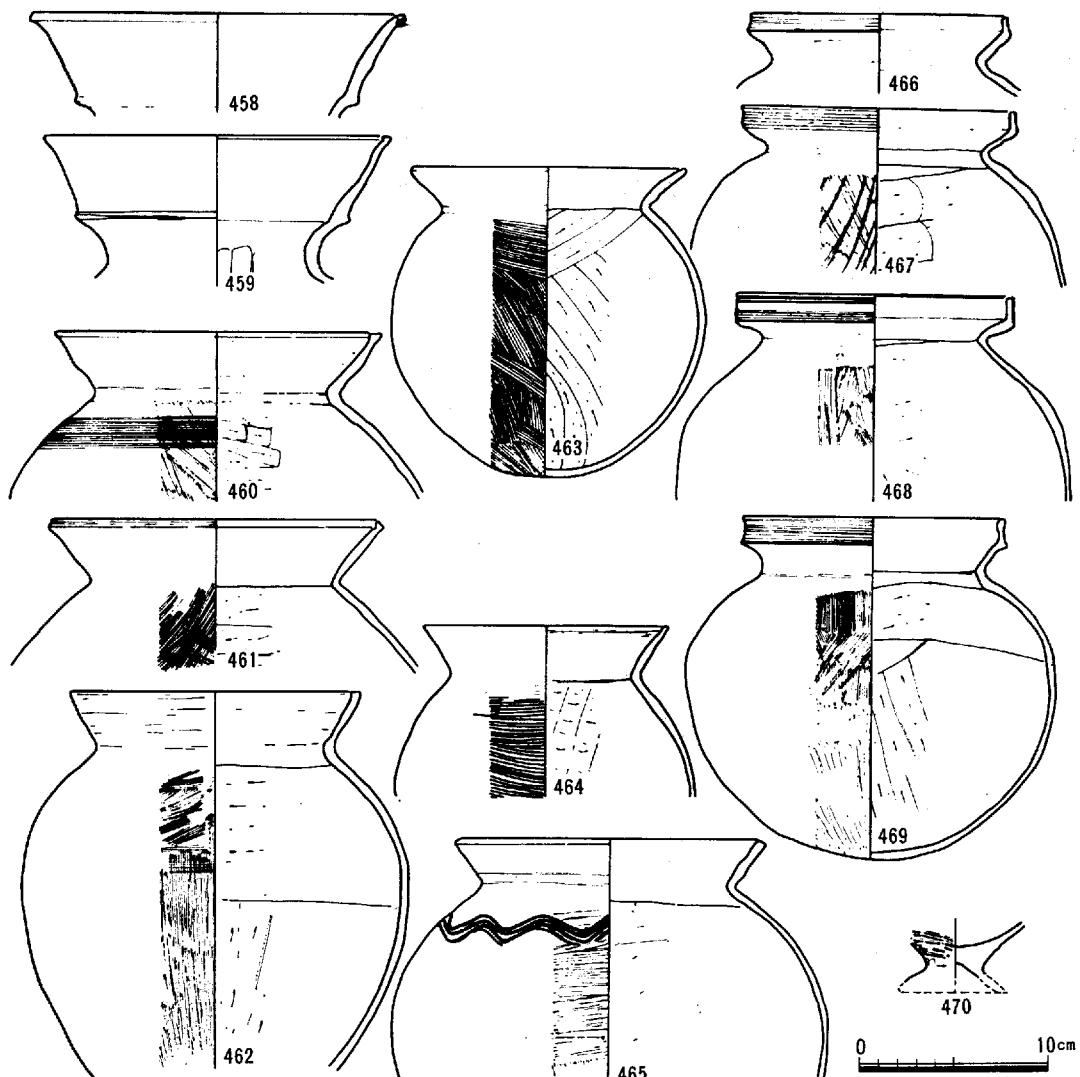
上 東 遺 跡

石器 4, 5 はサスカイト製打製石器である。4 は平基無茎式石鏃で、長さ 3.4 mm 厚さ 4 mm をはかる。5 は不定形石器で、図の下辺は小剝離を加えて、鋭い刃部を作っている。上辺は刃潰し状に打撃を加えて、厚く鈍い背面を作っている。6 ~ 9 は石錐で小円礫を一周する様に幅 1 ~ 2 cm の浅い溝をつくる。溝はいづれも敲打して作っている。6 は一部に平坦面を残し、全体に敲打を加えて丸く整形している。6, 8 は花崗岩製、7 は輝緑岩製である。9 は叩き石であろうか。欠損部にさらに打撃痕がみられる。10 は灰白色泥岩質の砥石で図左側では上下のみならず、左右方向にも研磨痕が見られる。軟質の石で表面を削った様な痕跡も残っている。

<亀川上層出土遺物>壺形土器（458, 459）は上方に外反する、いわゆる二重口縁で口縁端部は丸くおさめるものと、わずかに内側におさえ出しているものがある。口径は 19 ~ 20 cm をはかる。



第44図 亀川調査区出土石器

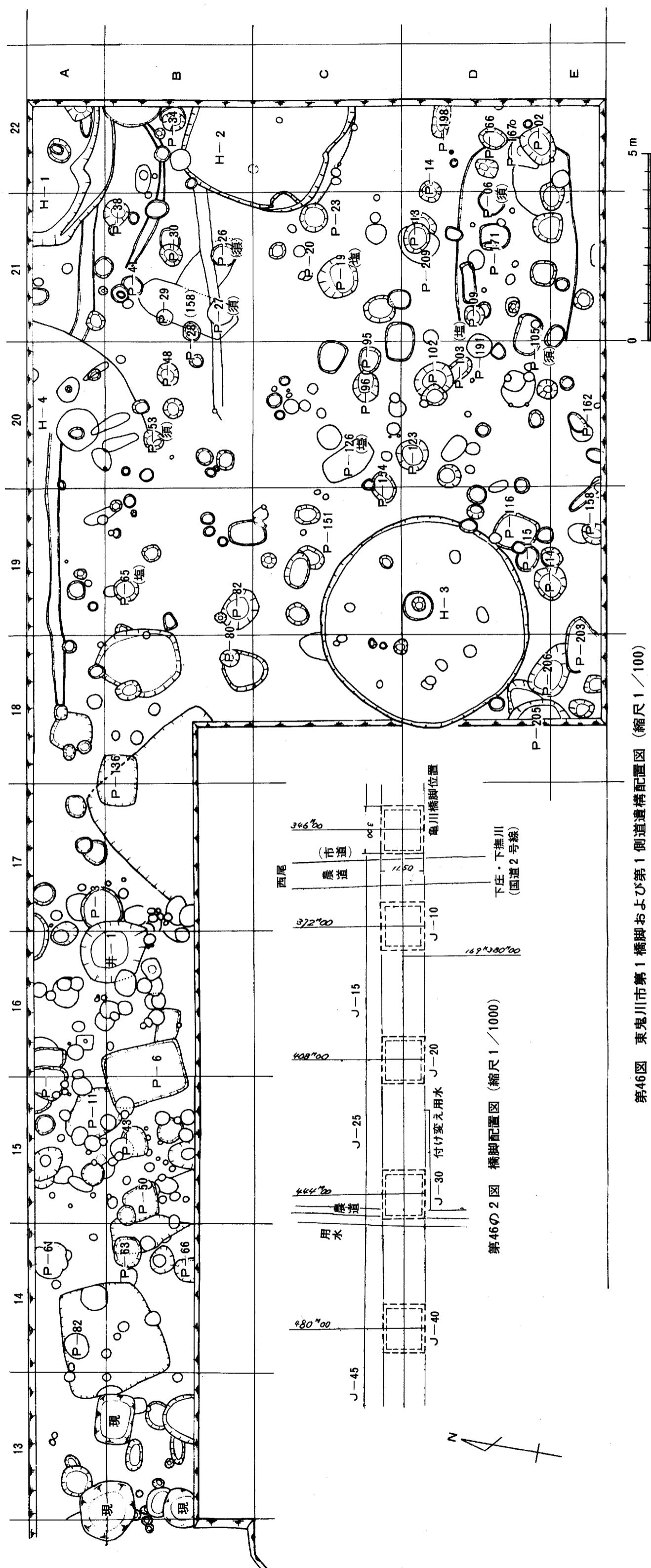


第45図 龜川調査区 包含層上層出土遺物

甕形土器は口縁部が外反し「く」の字状になるもの（460～465）と、さらに上方に拡張し、口縁端部に櫛描沈線を施すもの（466～469）がある。体部表面には強い刷毛、内面下半は上方にむけて、上半は横あるいは斜め方向の範削りを行っている。460、461、465は少し大型で、462は体部が少し長めになる。465は肩部に4条の波状沈線を施している。両方とも底部は丸底になり非常に薄手のつくりである。

製塩土器（470）は台脚部の破片であるが、表面に叩きを残している。

この一群はH-2 (J-10), H-7 (J-20)と同形態を呈している。従来、中部瀬戸内地域の布留式土器とされてきた王泊五層（註-10）に比べて、先行する諸要素がみられ、山田原遺跡出土のものと併行すると考えてよいであろう（註-11）。（伊藤・柳瀬）



第46図 東鬼川市第1橋脚および第1側道構造配置図(縮尺1/100)

上 東 遺 跡

3) P-151 (J-10)

<遺構>全体に暗茶色砂層に掘り込まれた土壙で、土壙内の堆積土もほとんど同質で、遺物が出土し始めて、確認出来た土壙である。確認面での径は55cm×60cmの不整円形で、底は海拔高117cmをはかる。深さ15cm以上の土壙になる。遺物は海拔高140cmあたりに集中し、底面から20cm程浮いている。遺物は数個体の土器のつぶれた状態で検出され、土器の積重中に完形のサヌカイト製打製石庖丁(11)が入っていた。ちょうど壺形土器の中に入れられた状態であった。周辺でこの土壙と同時期と見なし得る遺構は十分に確認出来なかったが、遺物はまとまった状態で出土しており、同時期の関係する遺構が、わずかでも存在することが認められよう。

<遺物>土器は少なくとも8点あり、高杯形土器の一点を

除いて、全て薄手の壺形土器である。471, 472, 474は下すぼみのながめの頸部をもつ。頸は外ぶくらみになるもの(471)がある。急に外反する口縁は、内傾して上下に拡張され、広い口端部を有する。口端面には数条の細い凹線がある。最大径は胴位にある。胴部外面は刷毛調整され下半は笠磨きが施されている。現存部分では内面押圧痕がみられる。472, 476は上すぼみのみじかめの頸部は上下端が横ナデされ、結果頸部にふくらみをもつ。急に屈曲して外反する口縁は内傾して上下に著しく拡張され、幾本かの凹線をもつ。外面刷毛調整、内面押圧がみられる。474, 477は肩部から急に外反する口縁を内傾させ、短頸壺形土器である。口端凹面には数条の凹線をもつ。最大径は胴中位にあり、胴下部は内反りになって、底にいたる。474は胴部上半に(刷毛調整を施し、その上から)平行叩きを加える。内面は胴上半に細い刷毛目と押圧痕を残す。下半は外面に笠磨き内面笠削りである。

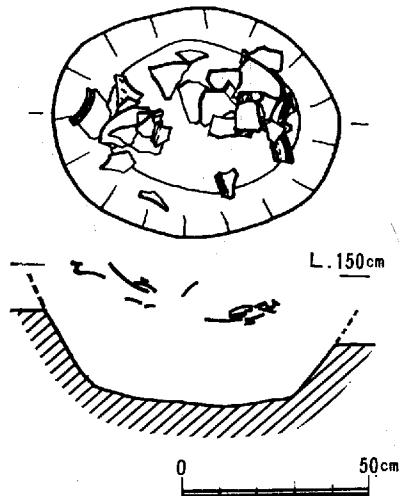
477は口端部に2本一組の棒状浮文を4ヶ所に貼り付けている。胴上半には外面刷毛調整、内面押圧痕がみられる。壺形土器はいづれも薄づくりの胴が続き、480~482の底がつくと思われる。480~482は底近くで内反りになり、外面刷毛調整、内面笠削りを加えている。笠削りは胴下半にのみ見られる。

478, 479は高杯形土器の杯部と脚部である。479は浅い杯部から屈折して、上方に立ち上がる口縁をもつ。屈折部から上は横ナデされている。口端も横ナデされただけの凹面を形成している。杯部外面は笠磨きされる。478は小さな径の脚で479と同一個体になるかどうかわからない。脚端が拡張されて、凹面をもつ。内面は笠削り痕を残している。

石器は、サヌカイト製の打製石庖丁(11)が一点出土した。長さ12.8cm幅4.9cm厚み1.3cmを測る。細長い石庖丁で両短辺にえぐりを入れる。図に向って左の刃部中程は使用痕が顕著に残っていて、ツルツルになっている。

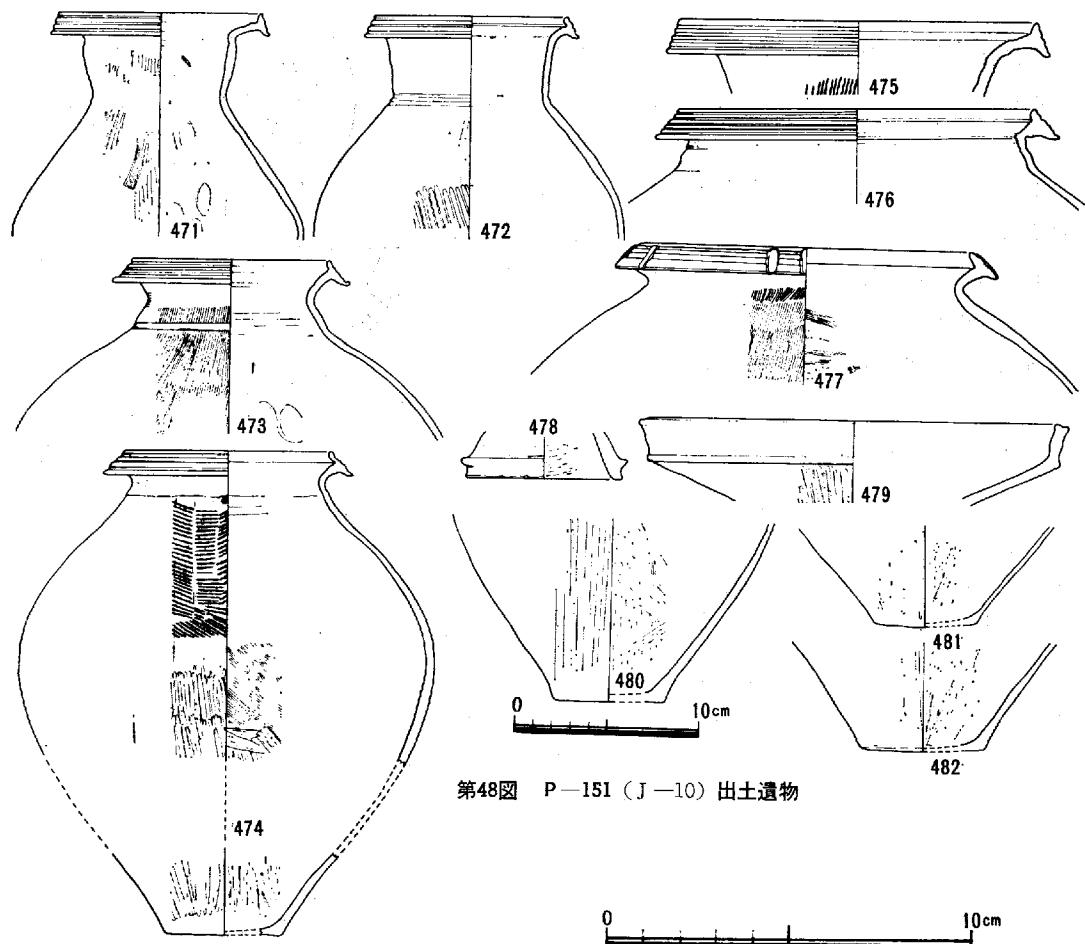
以上この土壙は出土遺物からみて、弥生中期後半のものである。上東遺跡の今次調査の遺構の中では最も古い時期に属する。

(柳瀬・藤田)

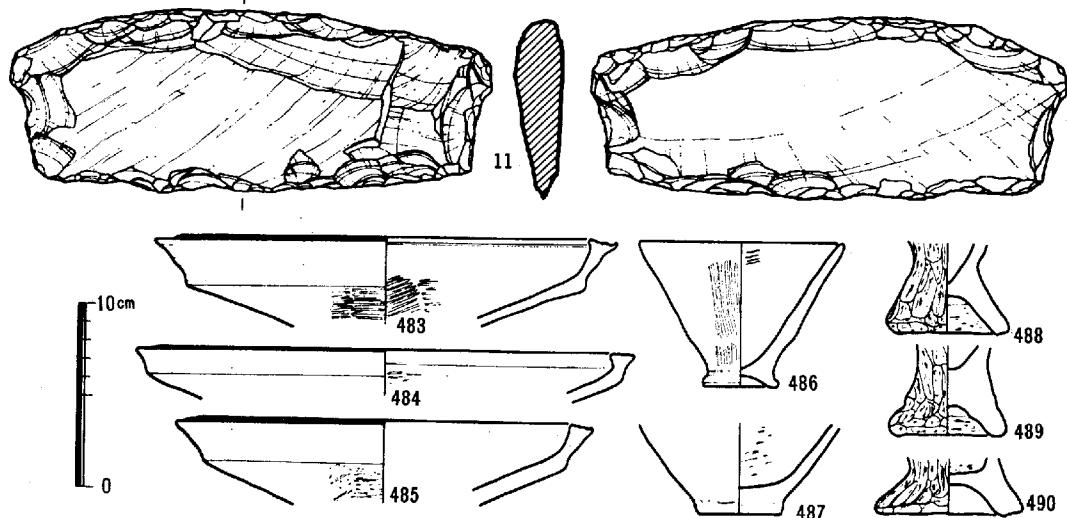


第47図 P-151 (J-10)
平面及び断面図 (縮尺20/1)

上 東 遺 跡



第48図 P—151 (J—10) 出土遺物



第49図 P—203 (J—10) 出土遺物

上 東 遺 跡

4) P—203 (J—10)

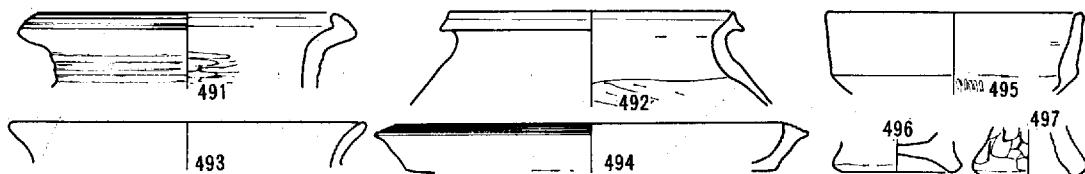
長径150cmを計るが短径は不明で不正円形の土壙である。壙内より、中期後半の高杯形土器、製塩土器、鉢形土器が出土している。

5) H—4 (J—10)

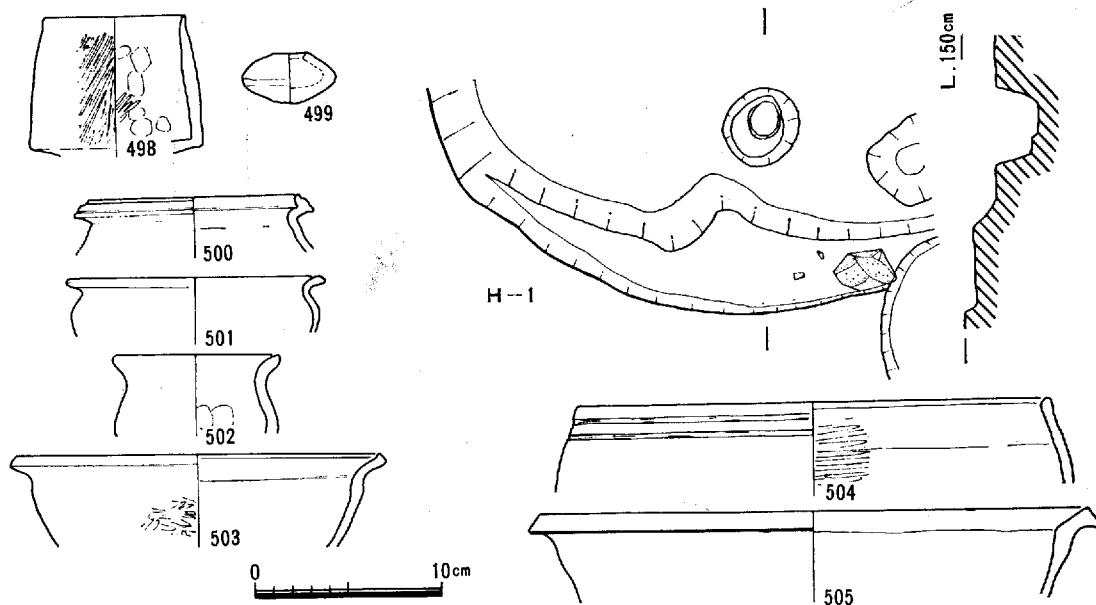
H—1の西に存在し、南側半分を検出した。砂層内に造られているため保存状態が悪い。西側は部分的に床面も削平されている。円形で推定約8m程になる。

床面上には炭化物が放射状に出土している。

遺物は数は少いが中期後半のものが出土している。



第50図 H—4 (J—10) 出土遺物

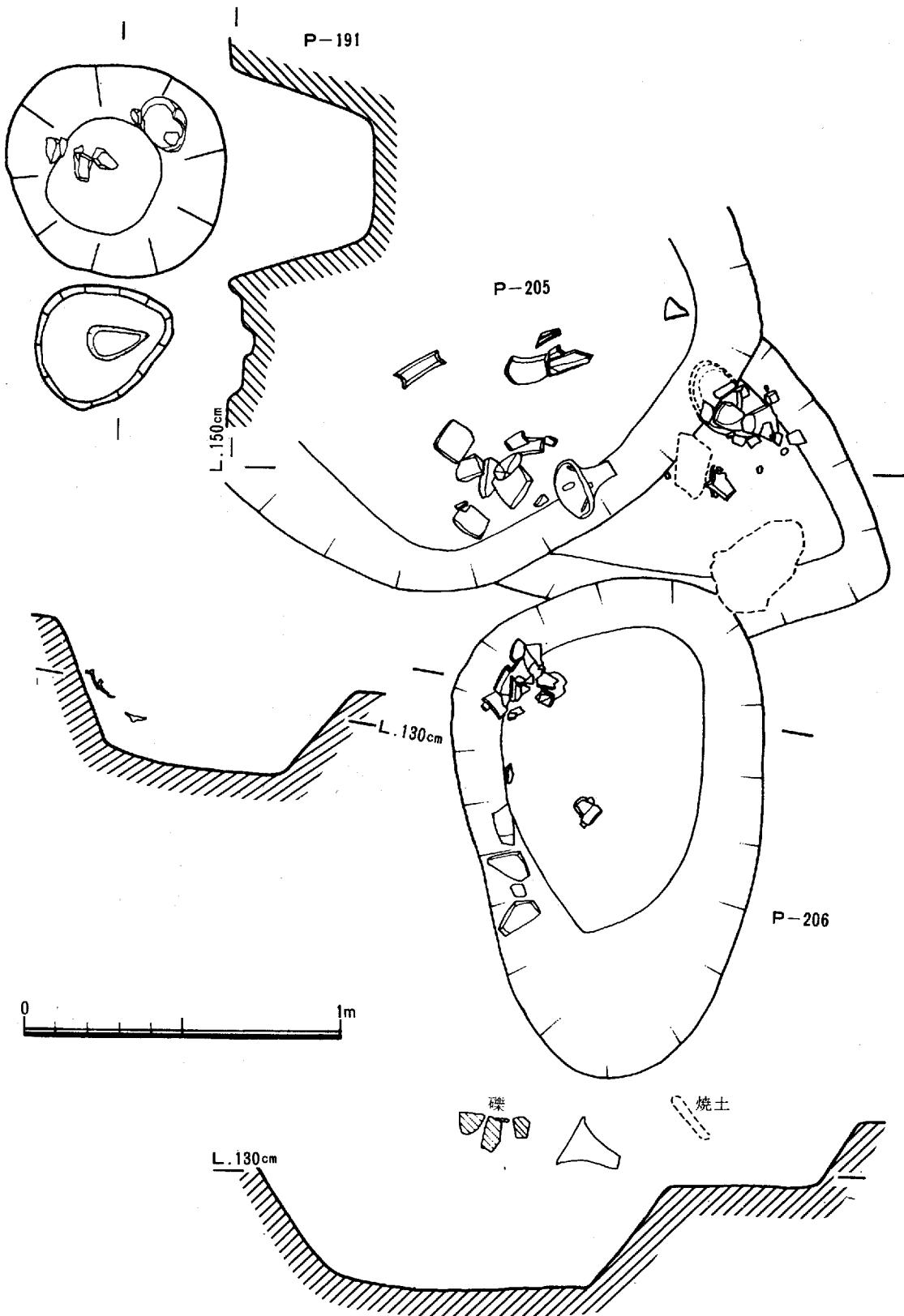


第51図 H—1 (J—10) 平面・断面及び出土遺物

6) H—1 (J—10)

主体は用地外であるが側道敷北端に約1程度検出した。また東側は農道（市道）によって切られている。柱穴状の土壙を3本確認したが、住居に伴うものか建てかえなのかどうかは定かでない。住居址の基盤となる層が褐色砂層であり、肩部等も非常にくずれやすく、また現在において柱穴状土壙内がすでに湧水層にあたっているため建てかえ床面もはっきりしたものではない。

上 東 遺 跡



第52図 P-205, 206及びP-191 (J-10) 平面及び断面図

上 東 遺 跡

7) P—162 (J—10) (508~514)

P—161と競合し切られているが $60\text{cm} \times 50\text{cm}$ の楕円形をしており、深さ 15cm を残す。製塩土器5個体が出土している。

8) P—158 (J—10) (526~529)

$110\text{cm} \times 140\text{cm}$ の楕円形をしており深さ 24cm を残す。周囲に完形の壺形土器4個体を配す。

9) P—191 (J—10) (519~521)

径 65cm の円形で深さ 46cm を残す。小礫が含まれ壺形土器1個体(591)が出土している。

10) P—205 (J—10) (515~518)

径 180cm の円形をしているが東半を掘ったのみであった。深さは 80cm ある。上面には礫が多く朱塗りの土器(515)も土壌の上面にある。この土壌との関連はないが土壌上面には二ヶ所に焼土がみられ、うち西側にある焼土は $30\text{cm} \times 20\text{cm}$ ほどの面をもち約45度の角度で傾いている。

11) P—154 (J—10) (522~524)

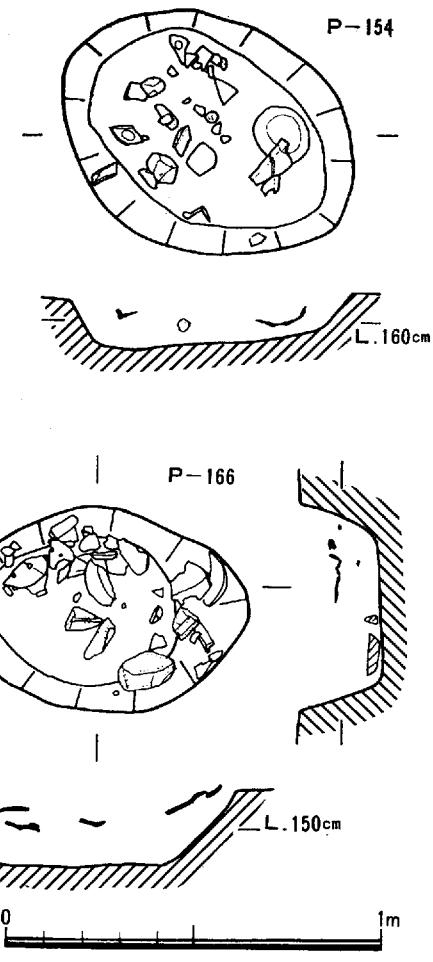
$65\text{cm} \times 85\text{cm}$ の楕円形をしており深さ 15cm を残す。礫が多くみられる。

12) P—166 (J—10)

$75\text{cm} \times 60\text{cm}$ の楕円形をしており深さ 20cm を残す。礫があり高杯形土器2ヶ(525・526)が出土している。

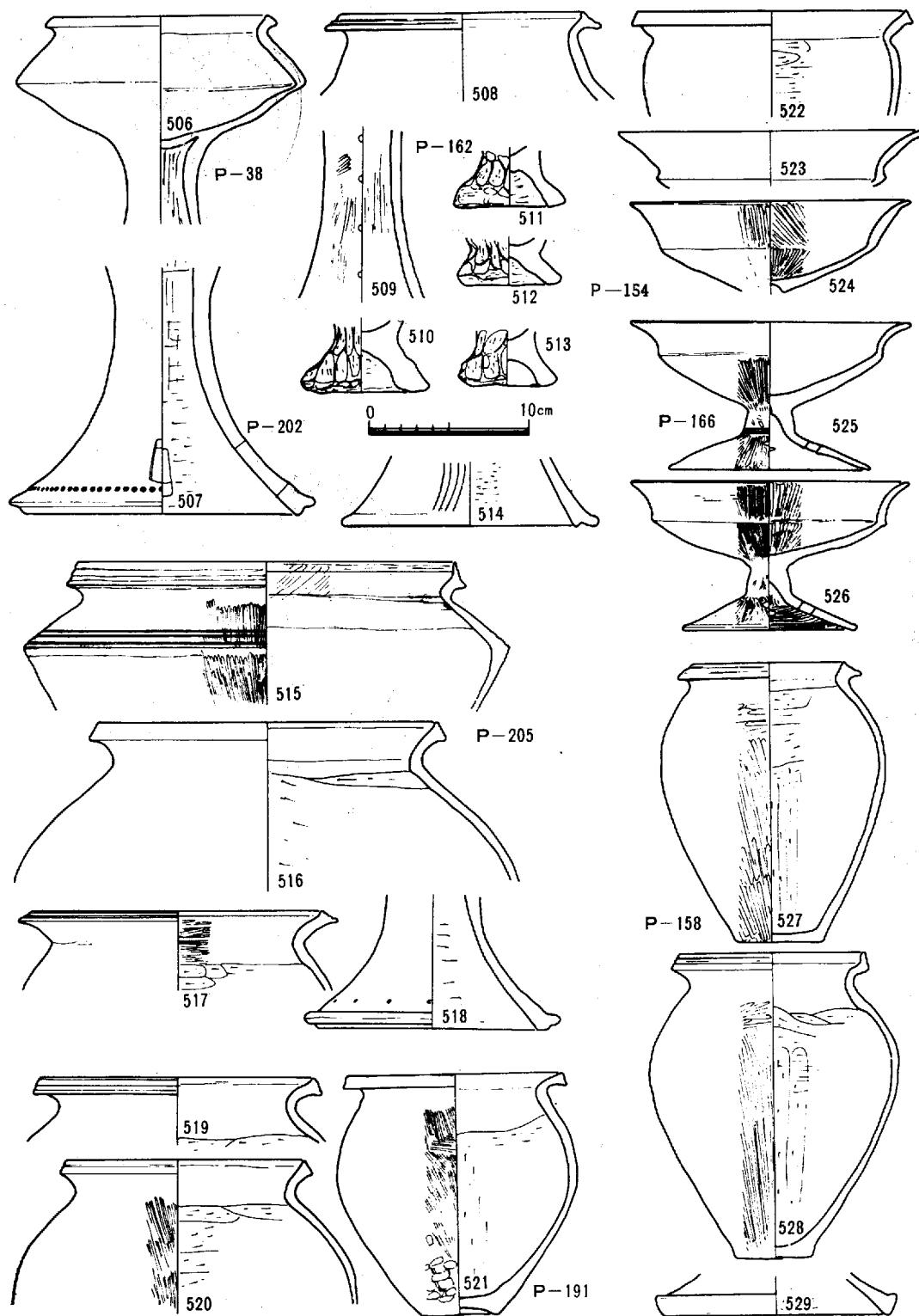
13) P—23 (J—10)

$60\text{cm} \times 80\text{cm}$ の楕円形をしており深さ 20cm を残す。礫もみられ、土器はほとんど底面の近くにある。管玉は西端にある。



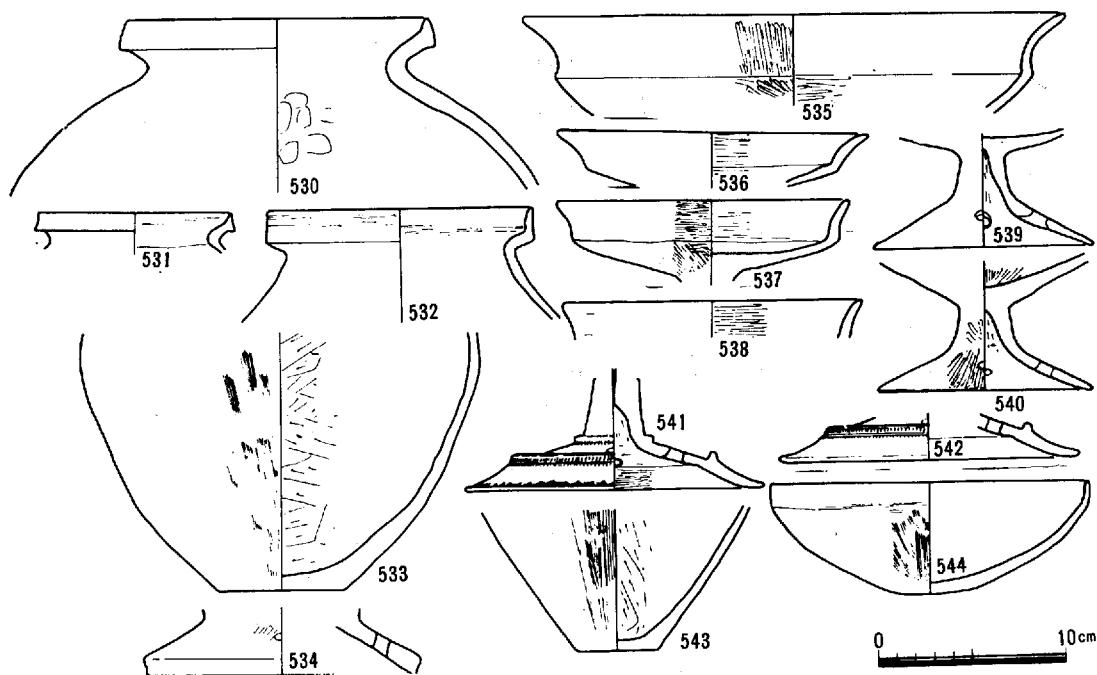
第53図 P—154, 166, 23 (J—10)
平面及び断面図

上 東 遺 跡

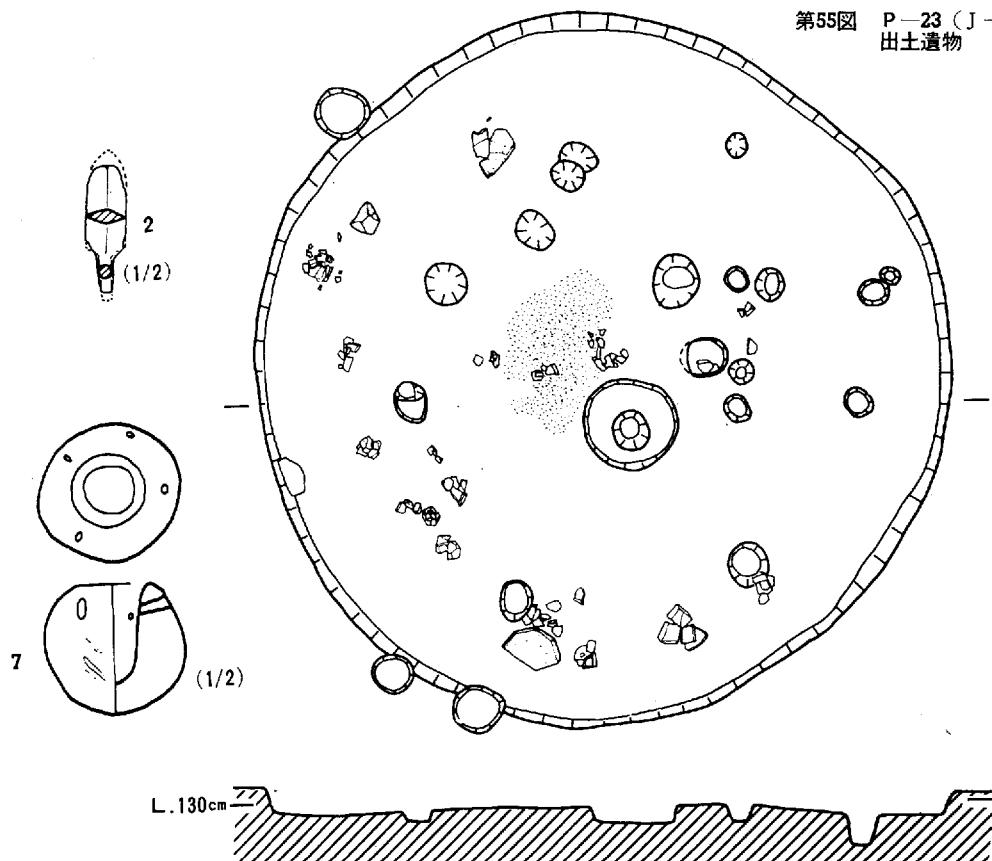


第54図 (J-10) 調査区各土壇出土遺物

上 東 遺 跡

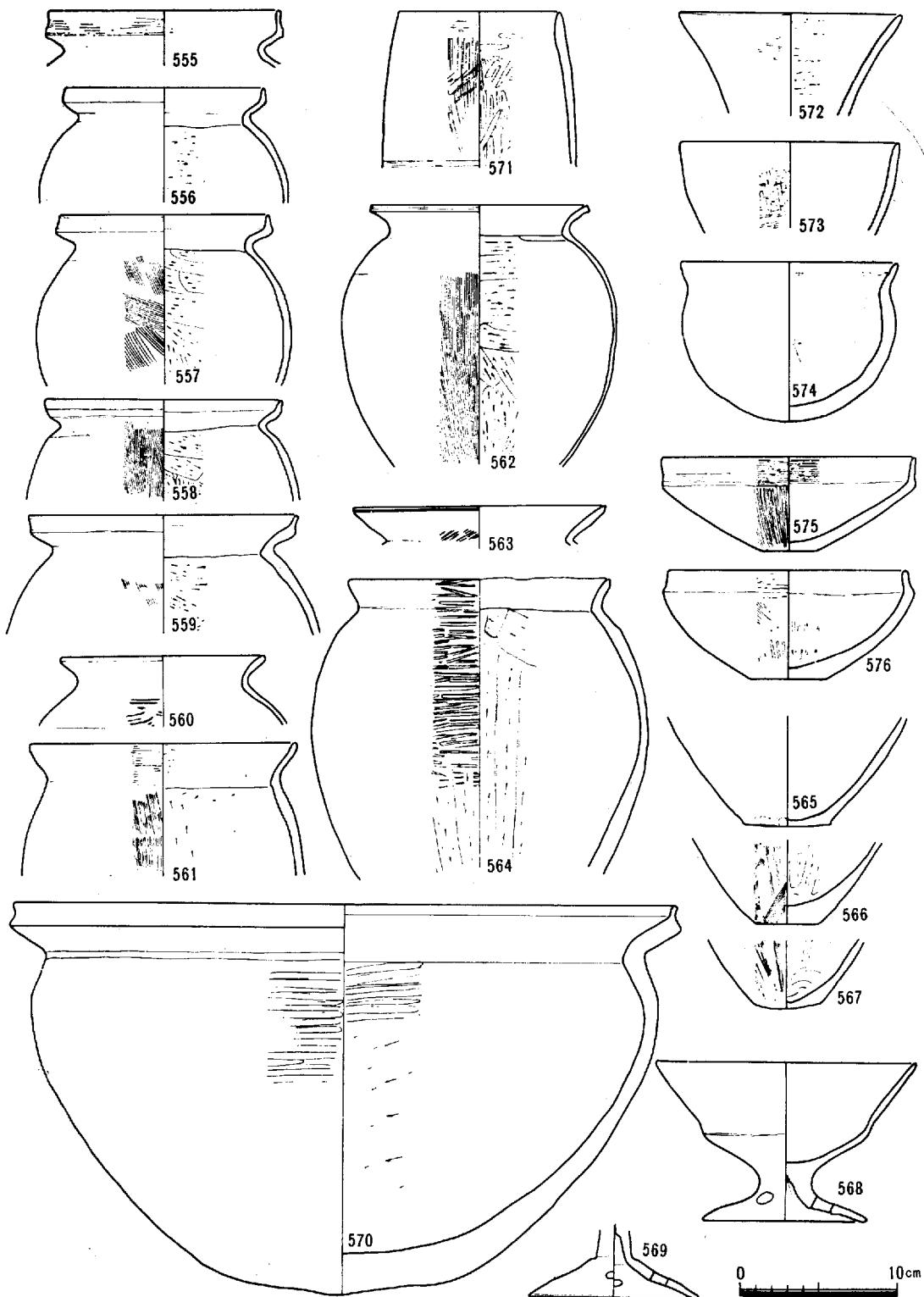


第55図 P-23 (J-10) 出土遺物



第56図 H-3 (J-10) 平面及び断面図 (縮尺 1/60)

上 東 遺 跡



第57図 H—3 (J—10) 出土遺物

14) H-3 (J-10)

＜遺構＞直径550～560cmを計る円形の住居址である。内部には柱穴状土壙が多くあるが、砂層内で底が確認できず何本柱になるのか定かでない。中央部100cmの範囲に炭化物の拡がり焼土がみられる。住居址内からは銅鏃2本(2), 鉄鏃と思われるもの2本の他に甕形土器, 高杯形土器, 鉢形土器などが出土している。

＜遺物＞甕形土器(555～567)は口縁部が外反し口縁端部が上方に拡張するものとしないものがある。前者には口縁端面に櫛描沈線をもつものが一点ある(555)他はナデ仕上げを行っているのみである。(560, 563, 564)は外面上半部に左下り～平行叩き目をもつ。(564)の外面下半部及び内面は上部は横ないし斜め方向に下部は下から上への箆削りを行っている。叩き目の後に口縁部を屈曲させている。底部は平底のものとわずかに平底が残っているものが見られる。

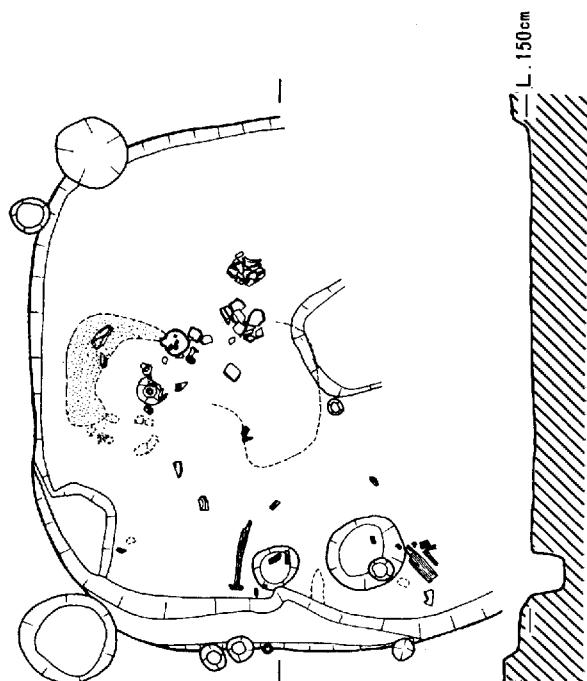
高杯形土器(518)は杯部が上方に長く外反し、短い脚柱部からすぐ脚にいたる。脚端部は丸くおさめる孔をうがっている。

鉢形土器(570, 573～576)570は大型で口径42.5cmをはかる。口縁部は外反し、端部を上方に短く引きあげている。外面及び内面は屈曲部4cm前後まで箆磨き、あとは箆削りを行っている。

15) H-2 (J-10)

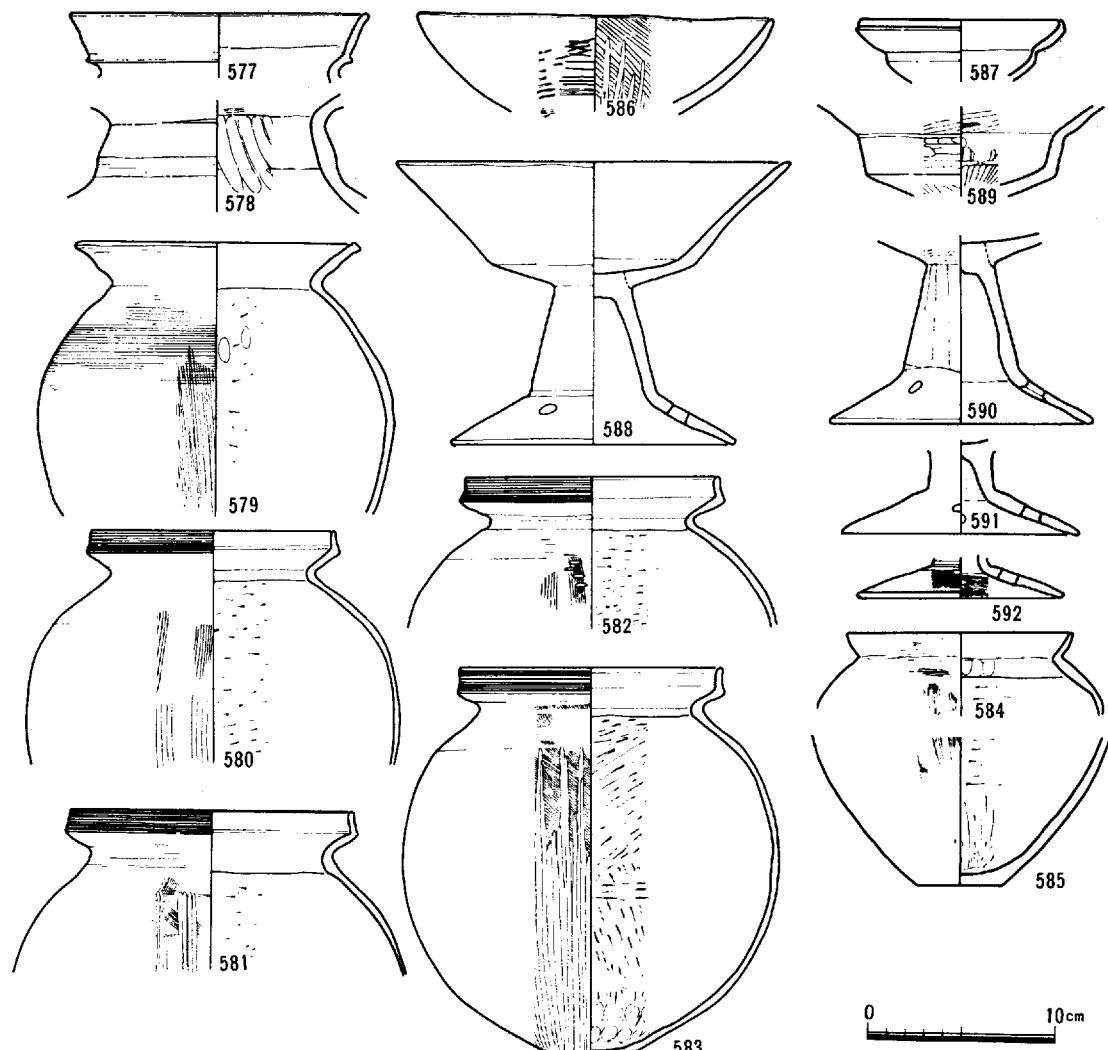
＜遺構＞東側半分が農道下になり、西側半分の調査をおこなった。直径430cmの円形の住居址であるが隅丸方形になるのかも知れない。西壁から20～30cm前後に焼土塊が馬蹄形に拡がり、中央部付近には炭化物の拡がりがみられる。内部にそなえつけの炉址なのかも知れない。又柱状の木材が炭化した状態で散乱しており土器等も二次的に火を受けたようであり、火災にあっていのかも知れない。柱穴は1本を確認した他は不明である。遺物は炉と思われる所に集中しており、高杯形土器、甕形土器、砾石などがある。

＜遺物＞出土遺物は多くないが、図化し得たものは单一のまとまった内容をもつ。577, 578は壺形土器で外に張り出す拡張口縁をもつ。578は頸部を痕跡的に残している。579は口端をナデただけの甕形土器で、胴部に刷毛目を有する。580～583は上方に拡張する口縁外面に刷毛目沈線を加える。582は肩部に刺突をえたものである。586～592は高杯形土器で変化の多い杯部を作るが、浅く小さい杯部から深い口縁部に続く。脚部は長い筒



第58図 H-2 (J-10) 平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

上 東 遺 跡



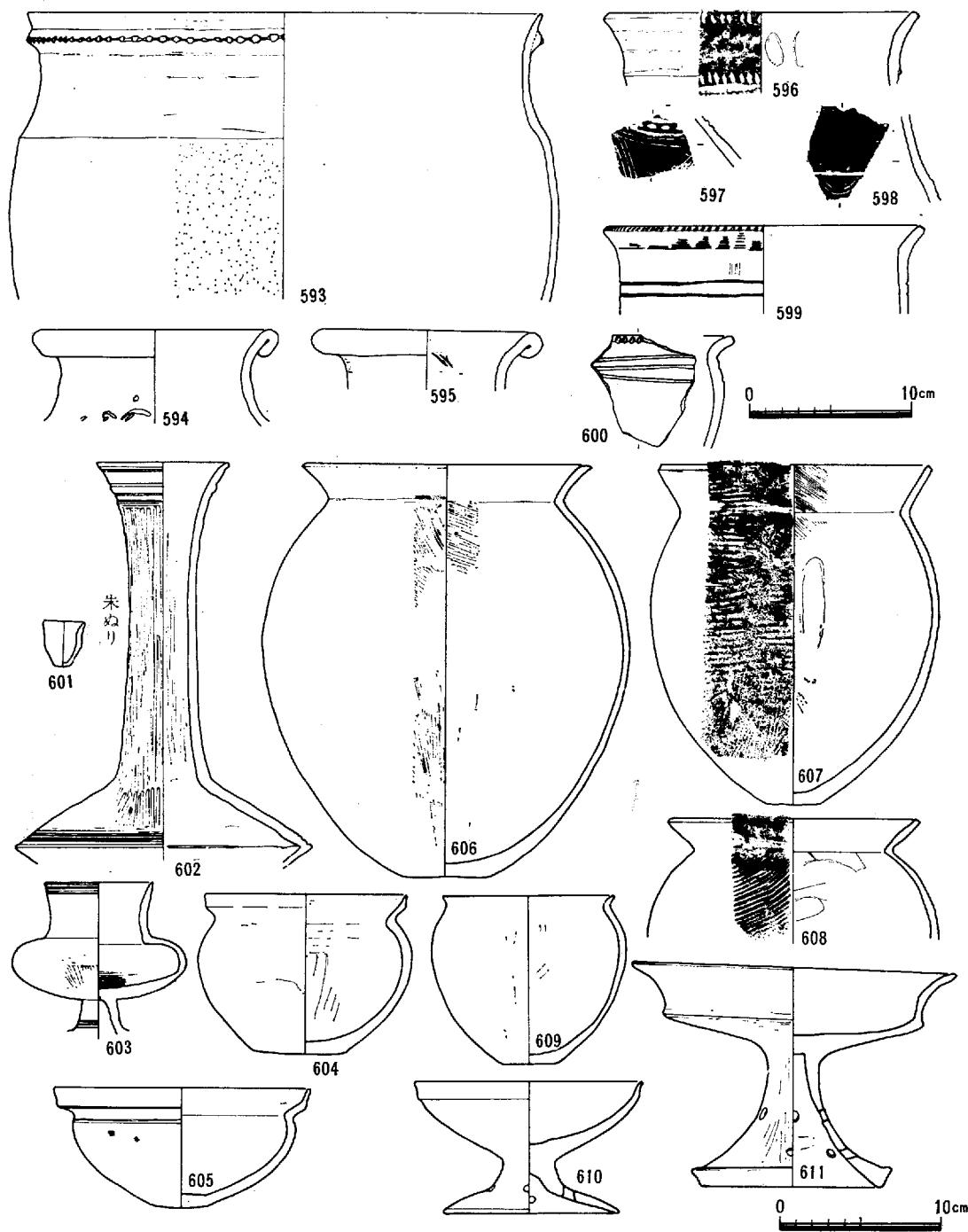
第59図 H—2 (J—10) 出土遺物

状をもち、屈折して脚端をつくる。

J—10包含層出土の土器

594 を除いて、J—10 区から出土した。遺構から遊離して出土した遺物である。593 は縄文晩期黒土B II式（註—12）に既当する。594, 595 は口縁折返しの土器で類例の少ない土器である。時期の所属が不明であるが、597～600 に近接して出土しており、前期のものであろう。596 は削り出し突帯部に刺突をもつ。602 は表面朱塗りで雲母を含む特異な胎土をしている。606～608 はH—4 近くで相接して出土した。2 様の叩き目をもち607, 608は酒津式に属するものであろう。（池畠・伊藤）

上 東 遺 跡



第60図 東鬼川市地区包含層出土遺物

上 東 遺 跡

16) P—43 (J—15)

直径60cmの円形の土壙である。他の土壙その切りあいが見られる。このタイプの土壙で遺物が残存しているのは少いが、甕形土器(612~14)、高杯形土器(615, 616)、製塩土器(617, 618)などが出土している。

17) P—3 (J—15)

井戸Iによって西側の一部を切られているが直径110cm前後、深さ約30cmになる円形の土壙である。内部からは、礫等とともに壺形土器(620), 甕形土器(621)等が出土している。

18) 井戸—I (J—15)

〈遺構〉東側の古い土壙(P—3)

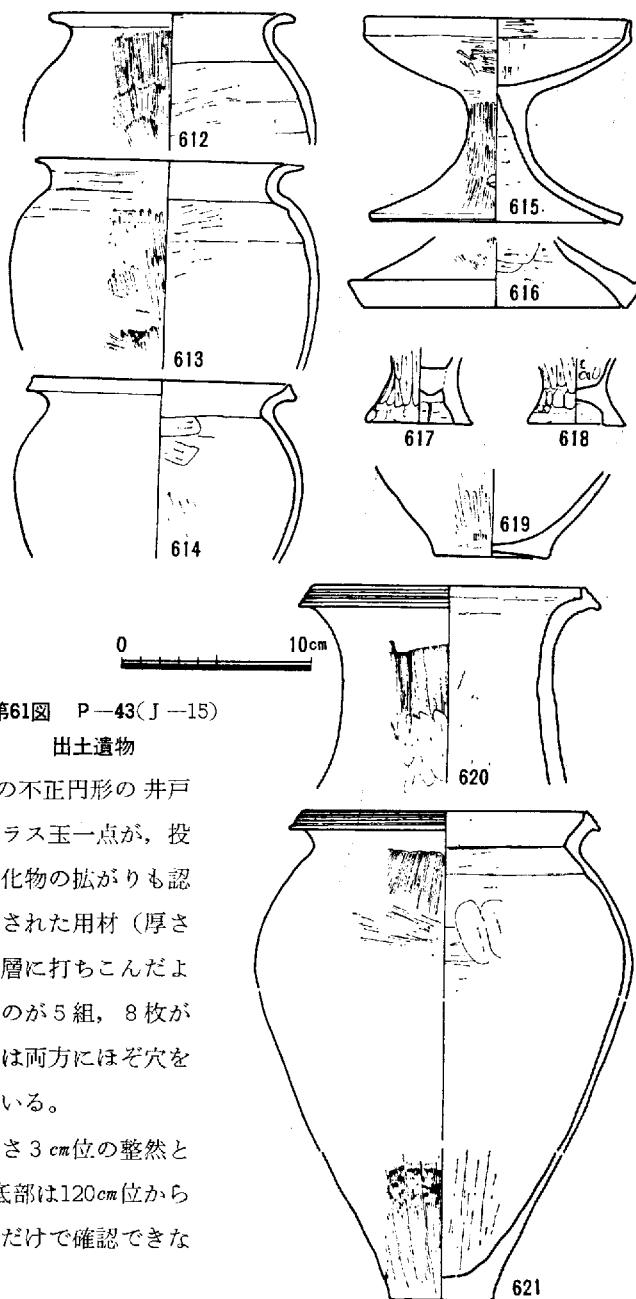
出土遺物

を切りこんでつくられている直径180cmの不正円形の井戸である。上面には30数個体の土器類とガラス玉一点が、投棄されたような状態で出土している。炭化物の拡がりも認められた。またその下部には何かに使用された用材(厚さ1.5~2cm, 長さ100cm前後)を転用し砂層に打ちこんだような状態で井戸枠として使用しているものが5組、8枚が残っていた。先端を削ったり、2枚のものは両方にほぞ穴をあけ、ノブドウのつるでつなぎあわせている。

これらの用材には、すべて幅6cm、長さ3cm位の整然としたチョウナの削り痕が観察できる。底部は120cm位から砂層で湧水が激しく井戸枠を取りあげただけで確認できなかつた。

この遺構が井戸の役目を果していたことは確かで、上部の一括の土器群及び1点ではあるがガラス玉の出土は、この井戸が利用されなくなった後に土壙墓として掘られたと考えるよりむしろ、井戸の廃棄される時点における祭祀的な行事を考えさせられる。

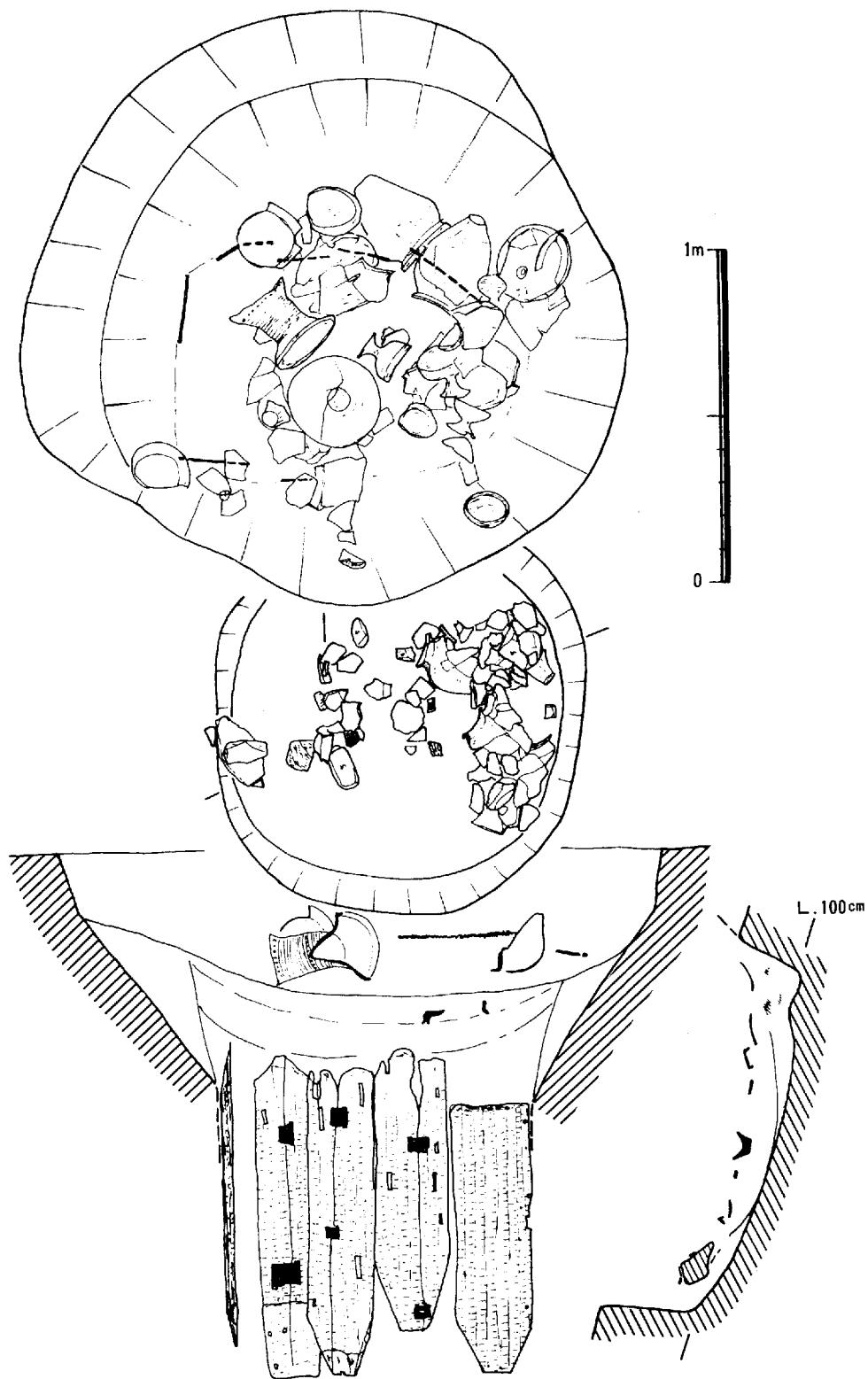
出土遺物の一括は上東・鬼川市Ⅲ式として取りあげたものである。



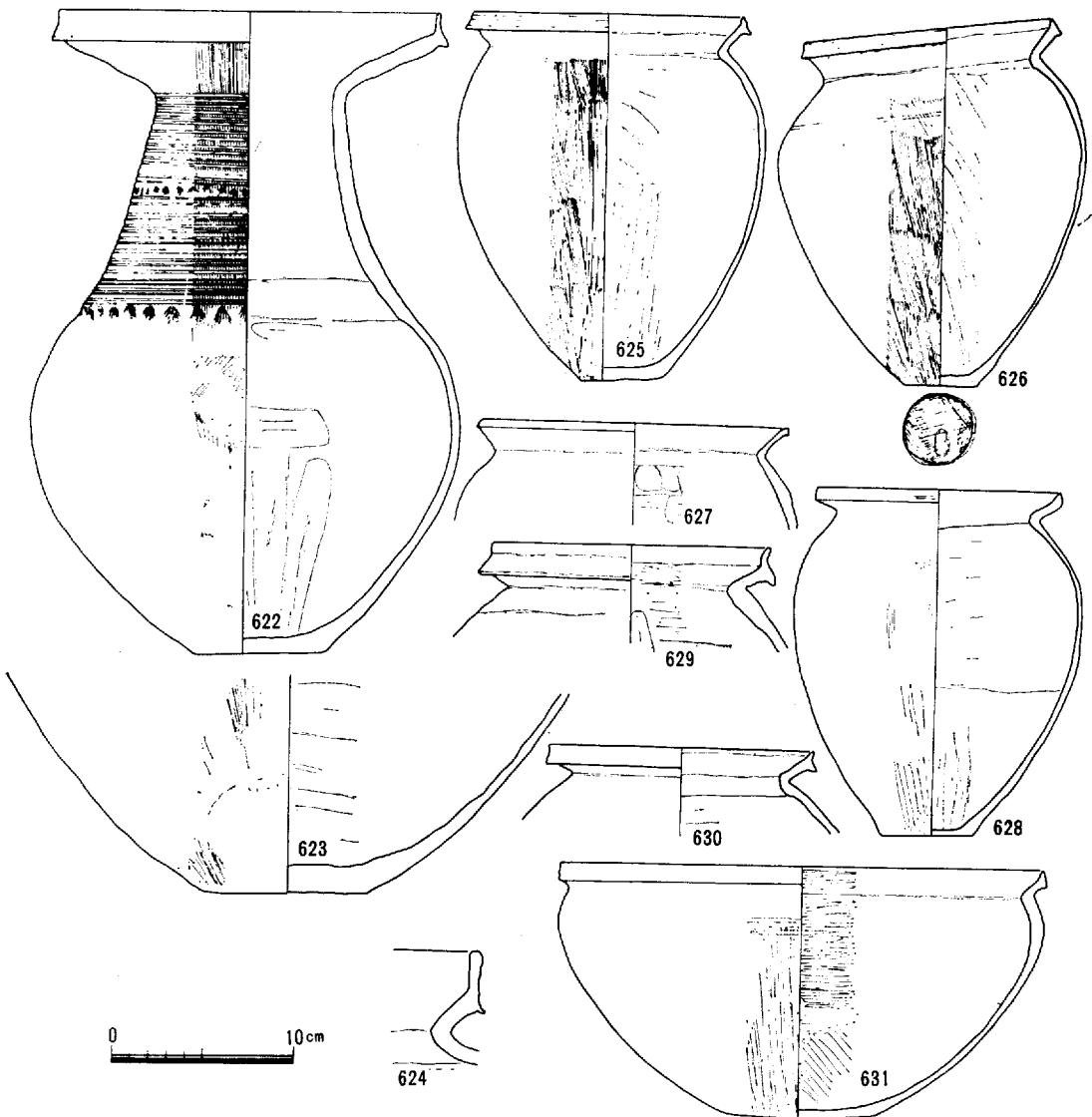
第61図 P—43 (J—15)

第62図 P—3 (J—15) 出土遺物

上 東 遺 跡



第63図 井戸 1 及び 井戸 P-3 (J-15) 平面及び断面 (縮尺20/1)



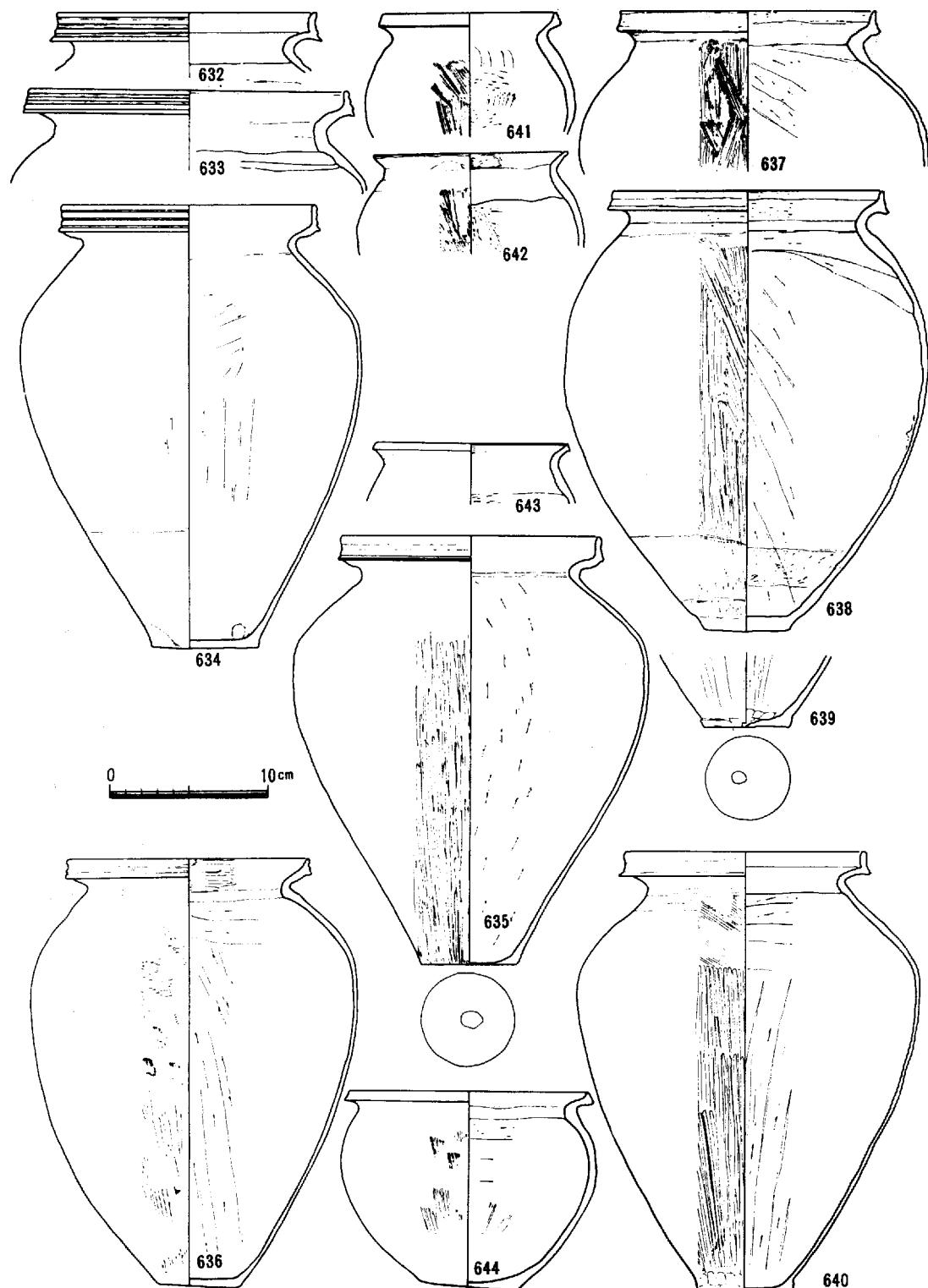
第64図 井戸一 (J-15) 出土遺物 (1)

<遺物>壺形土器 (622・623-622) は長頸の壺形土器である。球状をした胴部をもち、やや内傾する頸部から強く外反する口縁部を持つ。端部は垂直に上方に拡張する。頸部には細い刷毛状工具にて調整を行いその上を範描沈線を30数条施し中程と肩部に二枚貝による圧痕文を巡ぐらしている。体部外面は、範磨きあるいは部分的に刷毛で調整し、内面は中央まで範で削りあげ、それより上は横方向に削っている。

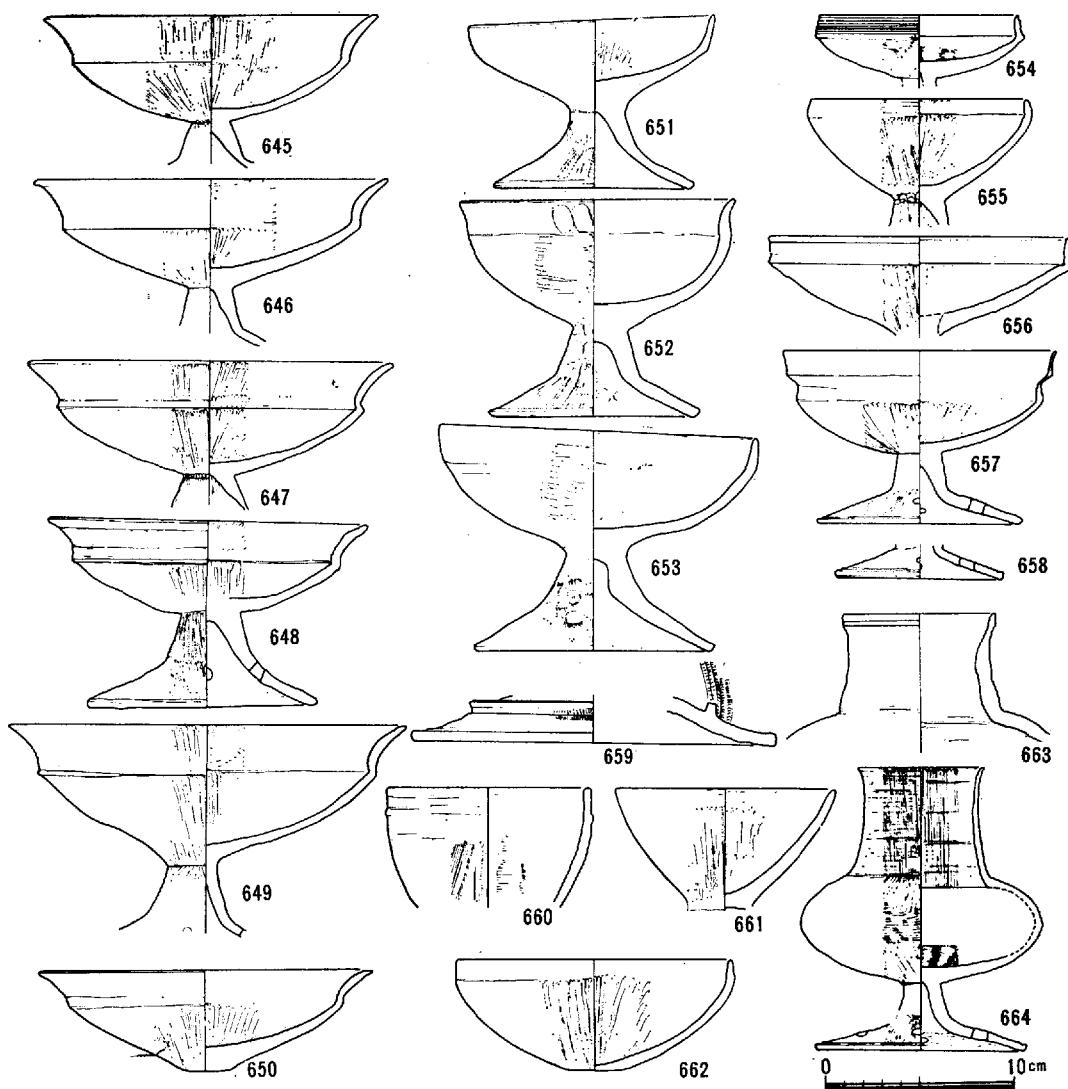
(663・664) は台付丸形直口の壺形土器 (664) は特にていねいに範で磨き上げている。脚部のみでは高杯形土器との区別はつかない。

壺形土器 (624~628・632~643, 625~628) は少し小型の壺形土器で「く」の字の口縁部を持ち、端部はそのまままるくおさめているもの。上下にわずかに拡張するものがある。外面は細い刷毛、内

上 東 遺 跡



第65図 井戸—I (J-15) 出土遺物 (2)

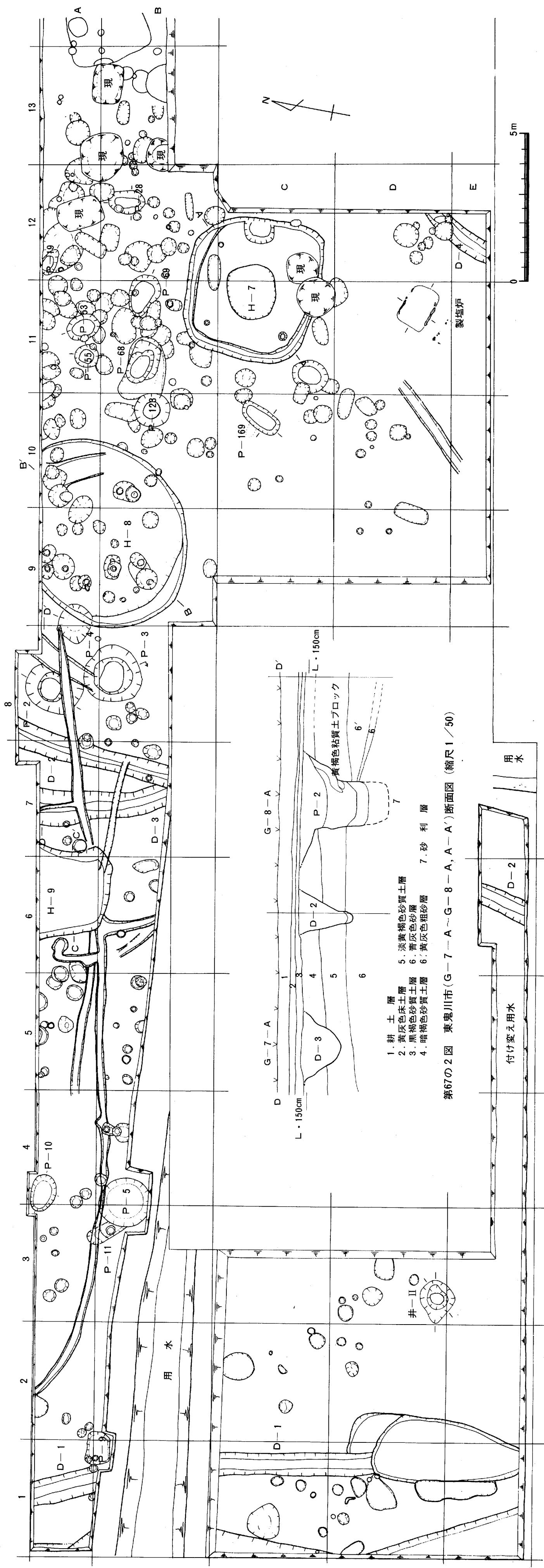


第66図 井戸I (J-15) 出土遺物 (3)

面は口縁屈曲部まで、縦～横方向の範削りをおこなっている。629, 632～635, 638の甕は垂直に立ち上がる端部を持つものと、上下に少し拡張するものがあり、垂直に上るものの中には数条の退化した凹線を持つものと持たないものがある。体部下半からやや内ぞりになって底部にいたっている。体部外面は刷毛あるいは範で磨いている。内面は頸部まで範で削っている。635, 636は甕として使用されているが、底部の穴は焼成後穿孔したものである。

高杯形土器 (645～659) 口縁部の形態、脚部によって7種類にわけることができる。645～649は口縁がややひらきぎみに上方に拡張するもので、脚には4孔を穿がっている。杯部の内外面とも、また脚部表面にはていねいな範磨きをおこなっている。650は同じように作られているが脚部を削り取って皿～椀のようにして使用している。

651～653はずんぐりとして、椀のような杯部を持ちてずくねというような感じである。杯部内外面



第67図 東鬼川市 第2橋脚 (J-20), 第2側道 (J-25) および第3橋脚 (J-30) 遺構配置図 (縮尺 1/100)

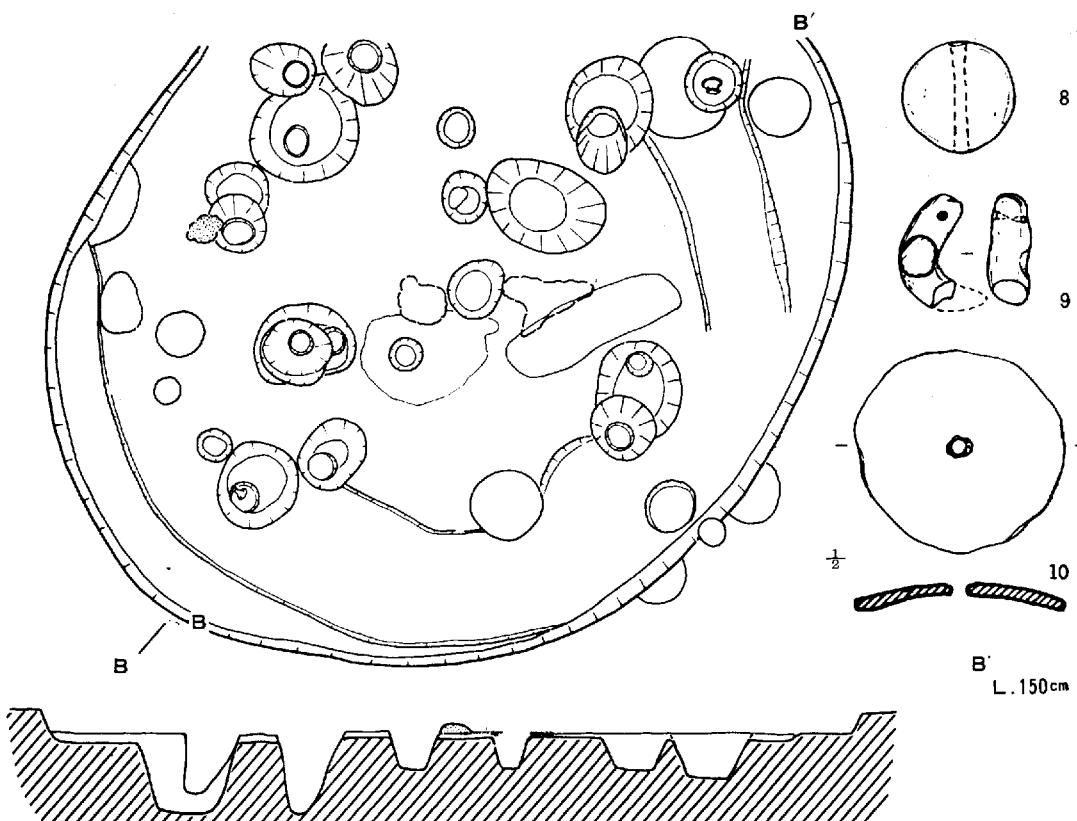
脚部表面は刷毛で調整している。脚部に孔はない。654は少し小型で口縁端部に数条の沈線を持っている。655は杯部が楕形になり、656は垂直にあがる端部をもつ。657は二重口縁的な立ち上がりを見せ、薄くつくられている。

鉢形土器（631, 641～643, 660～662）631は大型の鉢形土器で外反した口縁部にわずかにたちあがる端部をもつ。内外面ともいねいな範研磨で調整している。

660～662は小型の鉢形土器になる。661のように台付になるものもある。 （伊藤・柳瀬）

19) H—8 (J—20)

＜遺構＞調査区の北端に検出された堅穴住居址で、その北側一部分は調査区外に延びている。堅穴の西ではP—4が埋まつた後にこれを削って、住居址作っていることが確認された。全形は推定復元で $680\text{cm} \times 560\text{cm}$ の楕円形を呈する。現存壁高は 20cm をはかる。床と思われる面は2層観察され、柱穴が隣接して抜き取り穴と重複していた部分もあり、建て替えがなされた様である。とくに南側では最初に検出された壁の内側 50cm の所に建て替え前の壁及び底が高さ 5cm 程の低い段差になって認められた。二面の床に対応する柱穴は全面的には確認し得なかった。柱穴は上面径で $50\sim 70\text{cm}$ をはかり、抜き取り穴の様な土壙もみられた。柱穴底近くには径20前後の柱根跡が検出されたものもある。柱根跡のある柱穴は10個認められたが、構造的にまとめることは出来なかつた。傾斜する断面をなしていた。



第68図 H—8 (J—20) 平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

上 東 遺 跡

堅穴の中程には面土鬼と炭の散らばった面が見られ、炭面は上下二面で観察された。これら焼土、炭はそれぞれ中央土壙に対応した状態で認められた。

＜遺物＞出土遺物には土器、土製品、石器、鉄器がある。土器は小片が大半で、形態的な特徴をとらえうる土器片は柱穴出土のものばかりである。

665は壺形土器口縁で西寄の土壙出土である。外反する口縁端部を横ナデして肥厚させている。

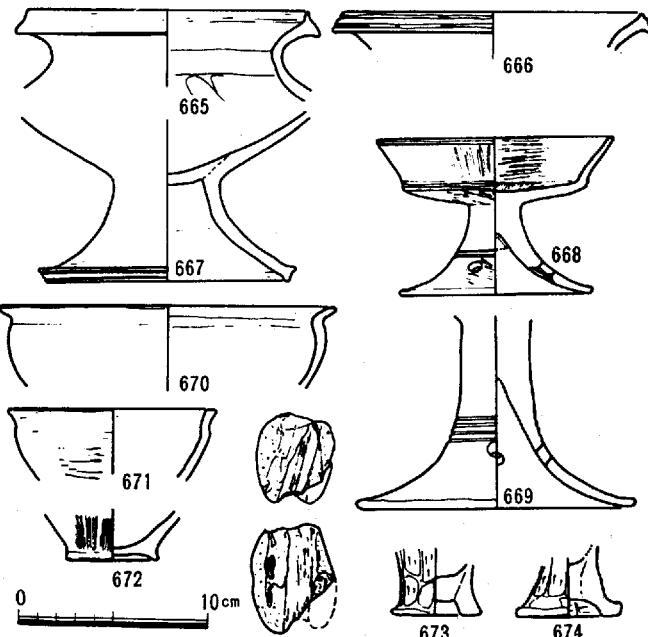
667～669は高杯である。667は杯部底を円板を埋めて作っている。脚端には肥厚させて凹線を有する。668・669の脚端は軽く横ナデするだけで丸く終る。脚柱下間に範描沈線を施している。668は口縁外側に細い沈線をもっている。

670・671は鉢形土器で671は横ナデされて内湾する口縁は直下で反転して外湾しながら下方につぶまる。673・674は製塩土器で、P 2～4 (J-30) と同形同巧のものである。二次的な火を受けており、土器製塩に使用されたものであろう。

石器は5点出土している。石鎌3点、砥石1点(注)、軽石の「浮き」1点である。石鎌は凸基有茎式に、凹基無茎式(1点)である。

前者のうち1点は床面から出土し、長さ3.4cm厚さ0.4cmをはかる。他は床面から遊離して出土した。いずれもサスカイト製である。砥石も遊離採集である。7×4×2.1cmの四面体の小さい砥石で頁岩質のものである。四面全体が使用され、使用痕を残す。軽石製の「浮き」は4～5cm大の球形をなし、中央に溝をつくりっている。

鉄器は酸化が極限に達し、2～3cm大のサビが痕跡的に認められた。芯部がわずかに残っている程度で形態は全く判らない。



第69図 H-8 (J-20) 出土遺物

20) P-19 (J-20)

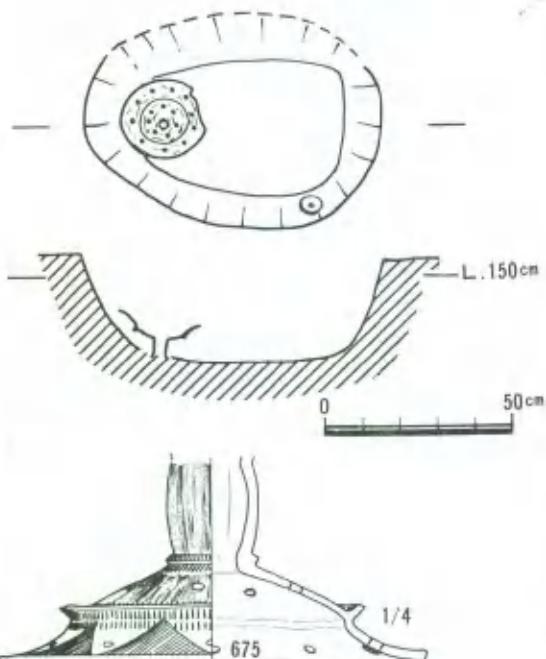
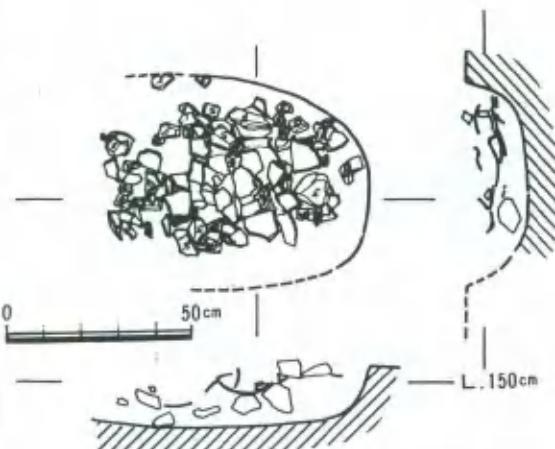
第2橋脚位置の北端に検出された小土壙で、80×60(推定)cm、深さ30cmをはかる。装飾の高杯形土器片(675)が出土している。土器は脚部のみで径23cmある。長い中ぶくらみの脚柱下部には断面三角形の突端を区切りにして、外湾しながら広がり、中程で反転して、内反りの脚端にいたる。反転する屈折部には断面長方形の1cmたらずの突帯がつく。脚柱部と外湾する脚上半には刷毛調整がみられ、突帯の上面とその直下に刷毛状工具による刺突がみられる。刺突は下段の突帯上下にもみられる。脚下半には計11個の鋸歯文が範描され、鋸文内には18本の線が描かれている。脚端上面には一条の凹線をもつ。透円孔は径7mmで脚上半に7個下半に10個穿たれている。透し孔は焼成前のもので

ある。脚内面は丁寧な鉢みがきがみられる。他に時期的な手挂りになる遺物がないが、弥生後期のものであろう。土壇の性格については不明である。

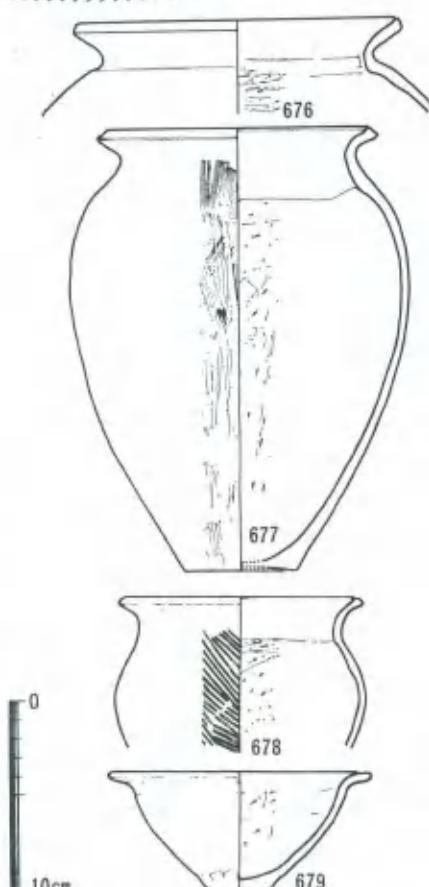
21) P-44 (J-20)

調査区の北端に半分かかって検出されている土壇である。土壇の西側は別の土壇で切り取られているので全長を知り得ないが、推定復元すれば、

100×60cm 程度の楕円形のプランになる。深さは確認面から15cmをはかる。土壇内にはこぶし大の角礫が多数存し、その上面に数個体の土器片がつぶされた状態で認められた。角礫は土壇の中心に集中し、中心に厚くほど平坦に置かれた状態にある。やはり土壇墓の頸と考えてよい



第70図 P-19 (J-20) 遺構及び出土遺物



第71図 P-44 (J-20) 遺構及び出土遺物

であろう。

土壙からの出土遺物は数個体分の土器だけである。

甕形土器は4点ある。676は胴回りの約半分を欠く。677はゆるく外反する口縁は端部を横ナデして、凹面を作る。最大径は胴の中位にあって、底部附近で内湾する。内面箇削りは頸のくびれ部まで及んでいる。978は外面に平行叩きをもつ。平行叩きは一部では頸のくびれの上にまで及んでいる。叩きは頸部の屈曲を作る前に施されたものであろう。口縁は横ナデされて丸く終る。他に口端部を肥厚拡張させ、端面に凹線を施すものがある。679は浅い鉢形土器で、口縁はゆるく外反するだけのものである。

高杯形土器は脚端部のみ出土している。端部は肥厚させ、凹線を有する。

以上これらの土器は全体として、P-106, P-1イ（才の町）と併行する時期のものであろう。

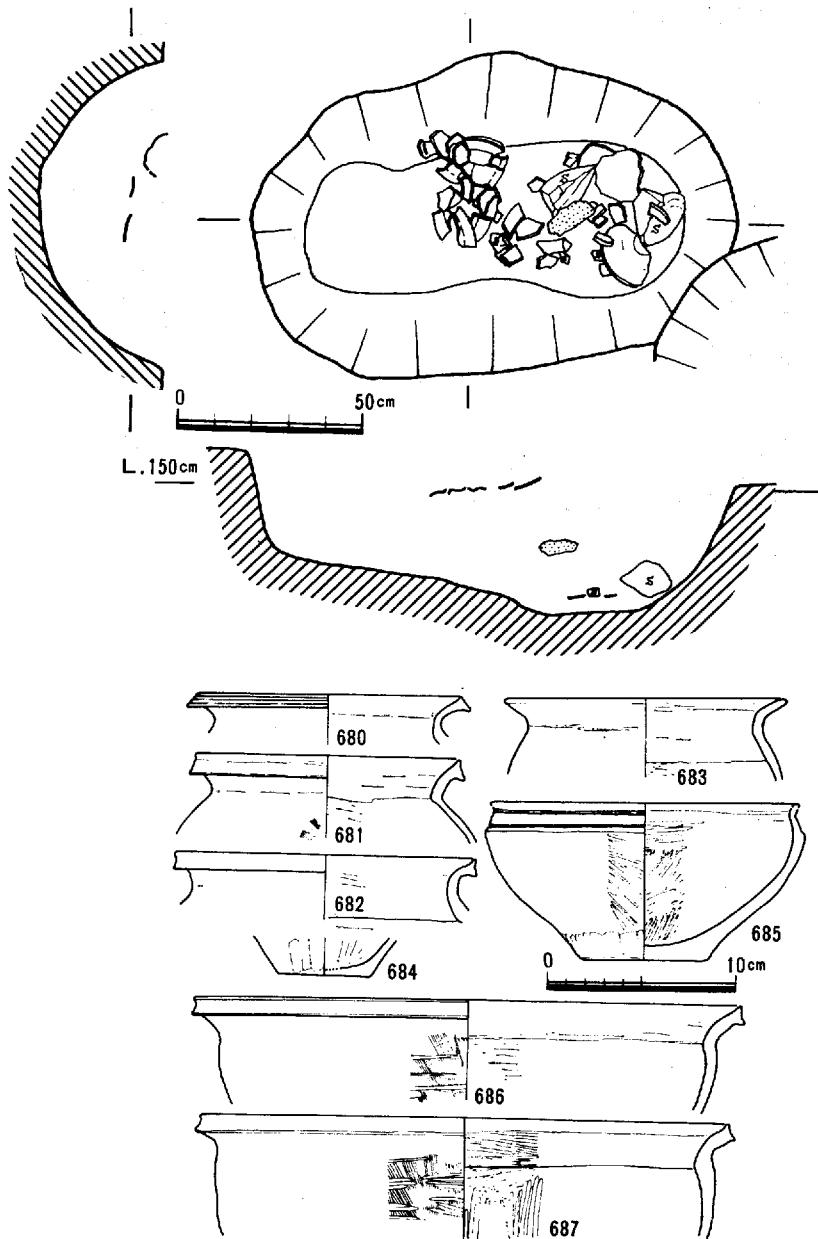
22) P-28 (J-20)

120×80cmの不整形の土壙で、現存面からの深さは約40cmある。土壙内には焼土も混入していた。遺物は土器片が礫と混じって少量出土している。

甕形土器は5点出土している。外反する口端を肥厚させ凹線をもつものもある。680 内面は頸部まで箇削りがでいる。

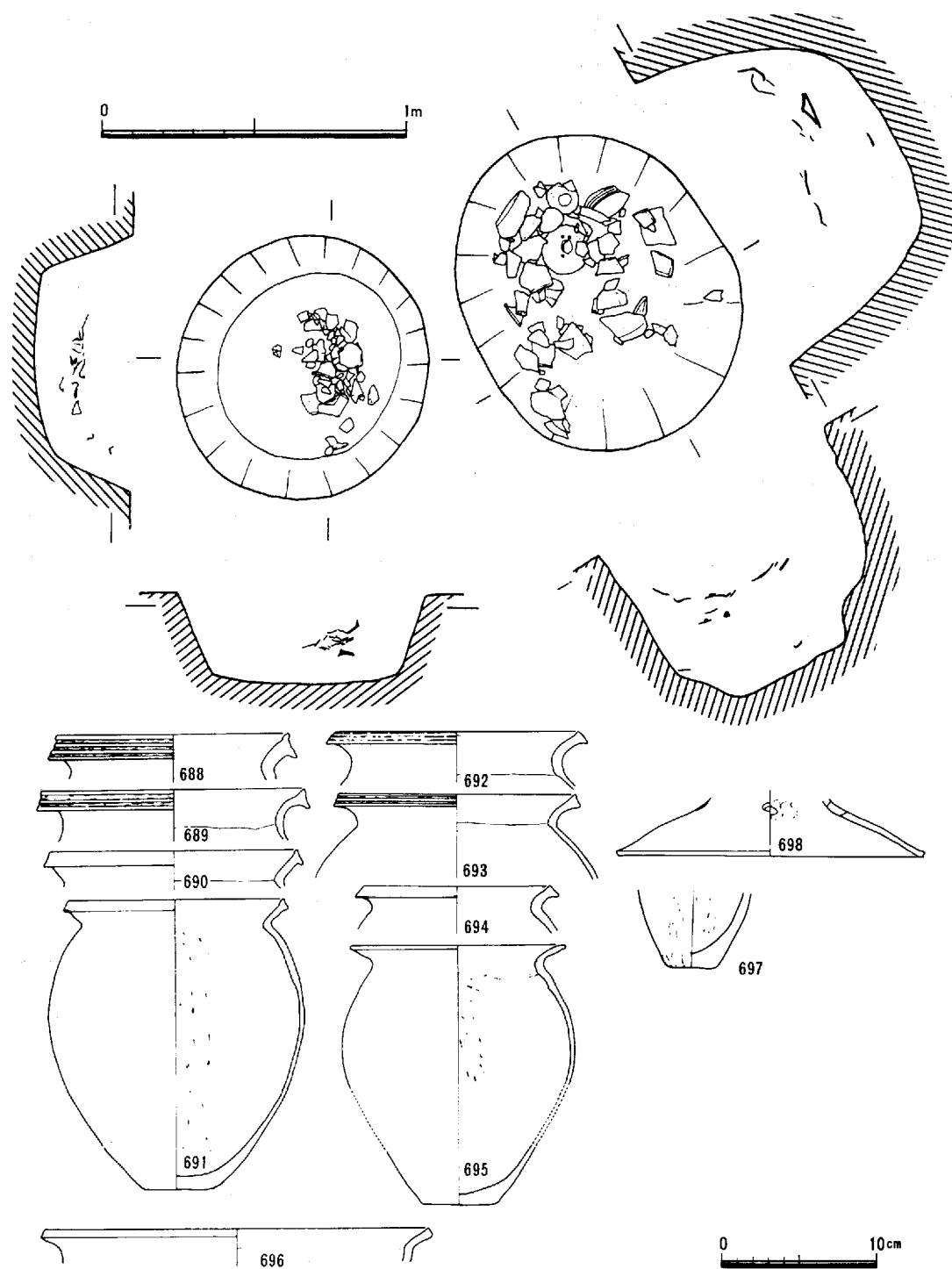
683は「く」の字形に屈折する口縁は端部を丸くナデで終る。

685～687は鉢形土器で685は外湾する胴部から内傾して立ちあがる口縁を有する。口縁外面には、上下端に細い凹線が施さ



第72図 P-28 (J-20) 平面図・断面図及び出土遺物 (縮尺1/20)

上 東 遺 跡



第73図 P-53(右) P-55(左) (J-20) 平面及び断面図とP-53 出土遺物

上 東 遺 跡

れている。内外面ともに範磨きされている。

686, 687はくの字形にゆるく外反する口端は、横ナデによって、わずかに肥厚している。686は外側ハケ調整の上を範磨きしている。内面には範削りがある。687は外側ハケ調整の上から、横方向の範磨きを加え、内面は口縁部には横方向にハケ調整脣部には範磨きがなされている。

全体としてP—イ（才の町）、P—106（J—20）と同期の土器であろう。P—106（J—20）と同様な土壙墓であろう。

23) P—53 (J—20)

＜遺構＞105cm×85cmの不整円形をした土壙で、確認面からの深さは65cmをはかる。プランに比べて、深い土壙で、底近くには黒灰色の粘質土が認められ、炭などの混入があった。

この土の中には、ほんのわずかであるが骨粉が認められた。骨粉が人骨なのか他の動物のものかについては不明である。遺物は土壙中位にあって、周囲から落ち込んだ様な、中央が低い堆積をしている。

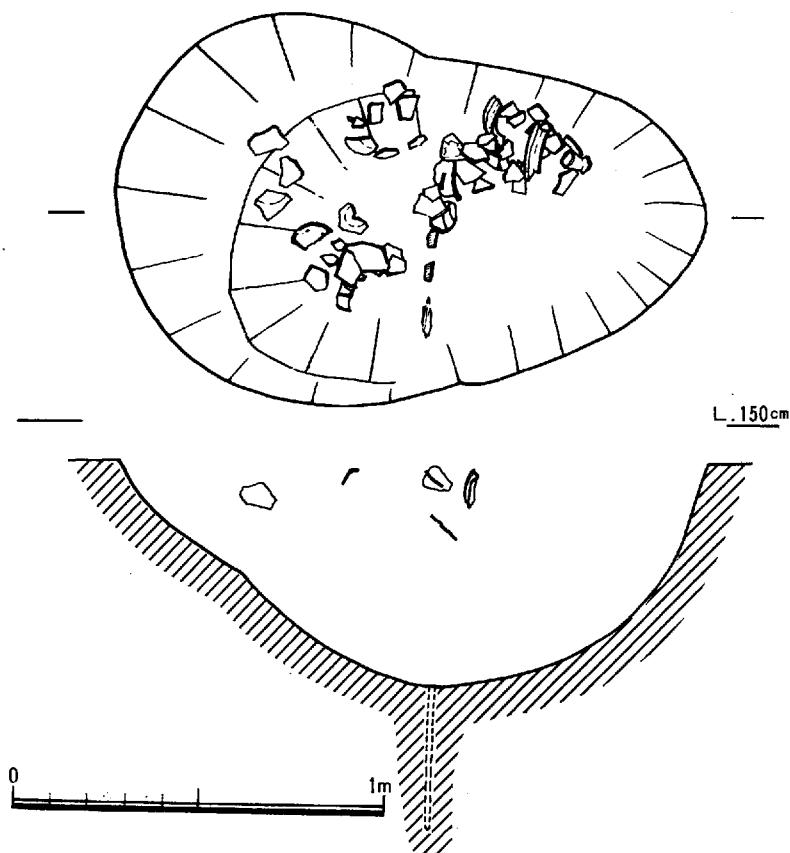
この遺構、骨粉の正体が不明であるが、土壙墓の類いと思われる。

＜遺物＞甕形土器（688～692, 694, 695）が大半で、口縁を上下に拡張させ数条の凹線をもつもの（688, 689, 692）と口端を横ナデして肥厚させ凹面をつくるもの（690, 690, 694）が主である。他外反する口縁を横ナデするだけ

けで口縁が丸く終るものがある。いずれも内面範削りが頸のくびれ部まで及んでいる。696, 697は鉢形土器で、696は口の広いものでゆるく外反する口端をナデで、凹面を作っている。967は口の狭いもので、内面範削りしている。698は高杯脚部で孔は四孔ある。いずれも、従来上東式と呼ばれて来たものの範疇に属するもので、P—イ（才の町）などと同時期的なものであろう。

24) P—69 (J—20)

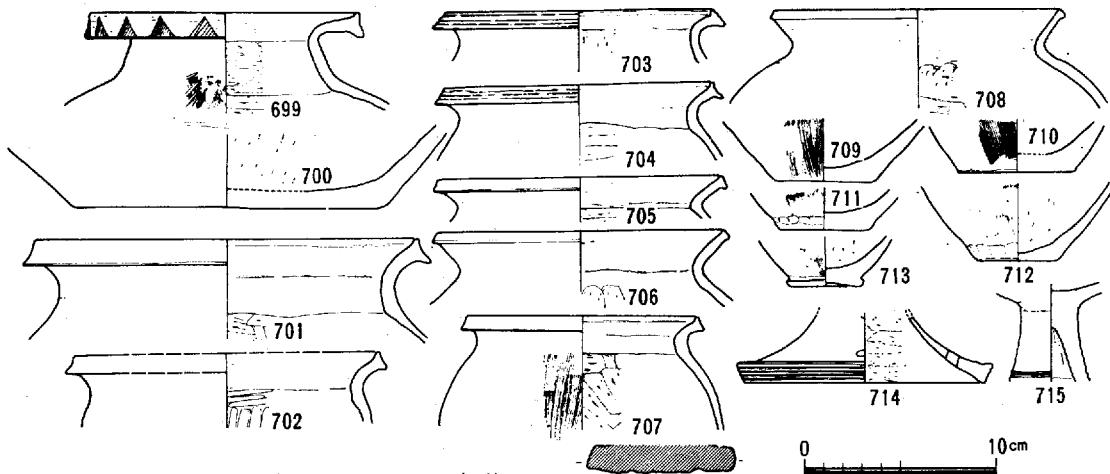
＜遺構＞長径 160cm,
短径 100cm をはかる不整



第74図 P—69 (J—20) 平面図及び断面図

円形の土壙である。土壙の上層には黒褐色の粘質砂層がおる。下層に行くに従って漸次砂質が強くなる。砂層は海拔高80cmにまで達し、そこから、青灰色砂層になる。青灰色砂層には長さ39cmの木製品が3本並んでほどく直立していた。青灰色砂層は湧水がはげしく、土壙壁がくずれてその断面形を確認し得なかった。従ってこの土壙の掘られた深さが木製品の最底部まで達っていたか、その途中かは或いは、木製品の残っていた青灰色砂層の上面になるのかは不明である。

<遺物>遺物他に少量の土器小片が出土しているが、いずれも土壙上寄り海拔高130cm前後にみら

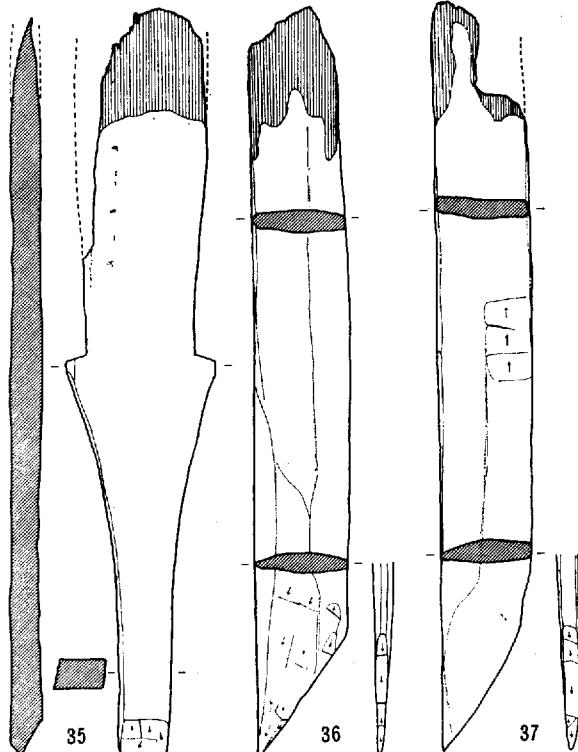


れた。土器小片ばかりが出土していて、完形になるものはない。時期的には前後するものがあるかも知れない。

壺形土器(699, 706, 708)は二様ある。699は内傾する短目の頸部から急に外反して肥厚した口縁を有する。口端には籠描き鋸歯をもつ、鋸歯文は23~4個描かれている様である。706, 708は口端を横ナデして、小さな端面をもつだけの頸の短い壺形土器である。

甕形土器は口縁端を横ナデして肥厚させたもの(702, 705, 707)と、わずかに拡張させて、そこに2~3条の退化した凹線をもつもの(703, 704)がある。

高杯形土器(714, 715)脚柱下方に2本の沈線をもつ。脚端は横ナデをして、肥厚させ、数条の凹線をもつ。円形小孔を上段にもっている。以上の土器には699と714, 715の様に若干の形式的なバラツキを認められないこともないが、全体として、従来上東式と称され



第75図 P-69 (J-20) 出土遺物及び出土木器 (1)

上 東 遺 跡

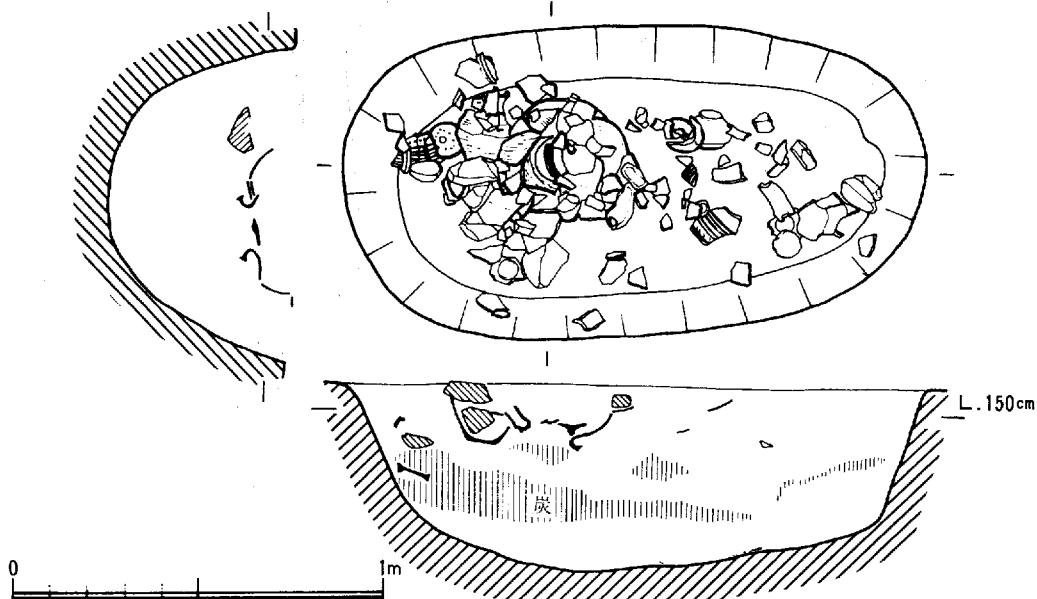
てきたものに加えうるものであろう。出土状態からも必ずしも一括資料として同時期に扱う必要はない。

木製品（35～37）土壌最下層から3本出土した。ほぼ南北に一列に並んで垂直に立って、検出された。

36, 37は一列に並んだ北側の2本で、いずれも削り出された突端部を下にして立っていた。上側は茶褐色砂層に達しており腐蝕している。一見刀の形をしているが、「刀部」は4～7mmの幅をもつ。逆に「背部」は、36では2～3mm, 37では、1～3mmで、とくに37では薄くなっている。厚みは中程で、10～13mmをはかり、先は、三面とも、突端に向って削られている。糸のあった擦痕はないけれども、一既にオサの可能性も否定出来ない。

35は、ホコあるいは剣の様な形をしている。厚さ17mm幅25mmの断面長方形に削り出された細い基部を下にして立っていた。端部は両面から削り出されている。現存中程は、「ツバ」の様に飛び出し、最大幅7.9cmをはかる。ツバより先は、最大の厚み1.7cm両端で1.2cmあり、断面形は中程が厚くなる板状を呈する。先は幅広になり、先端は茶褐色砂層に達し、腐蝕している。器面には逆目に削った痕跡がみられる。材質は三点ともアラカシが使われている。表面は加工痕以外の擦痕使用痕は全くみられない。

いずれも刀及び剣の形状をしているが、他遺跡の木製品は写実的で刃部の加工もみられるのに対し、この三点は刃部への加工がない。埋められた状態が、意識的に立てたとすれば37, 37と35の立ち方は逆になっており、木製品とその埋められ方の不整合がみられる。用途のはっきりしない木製品としか言えない。

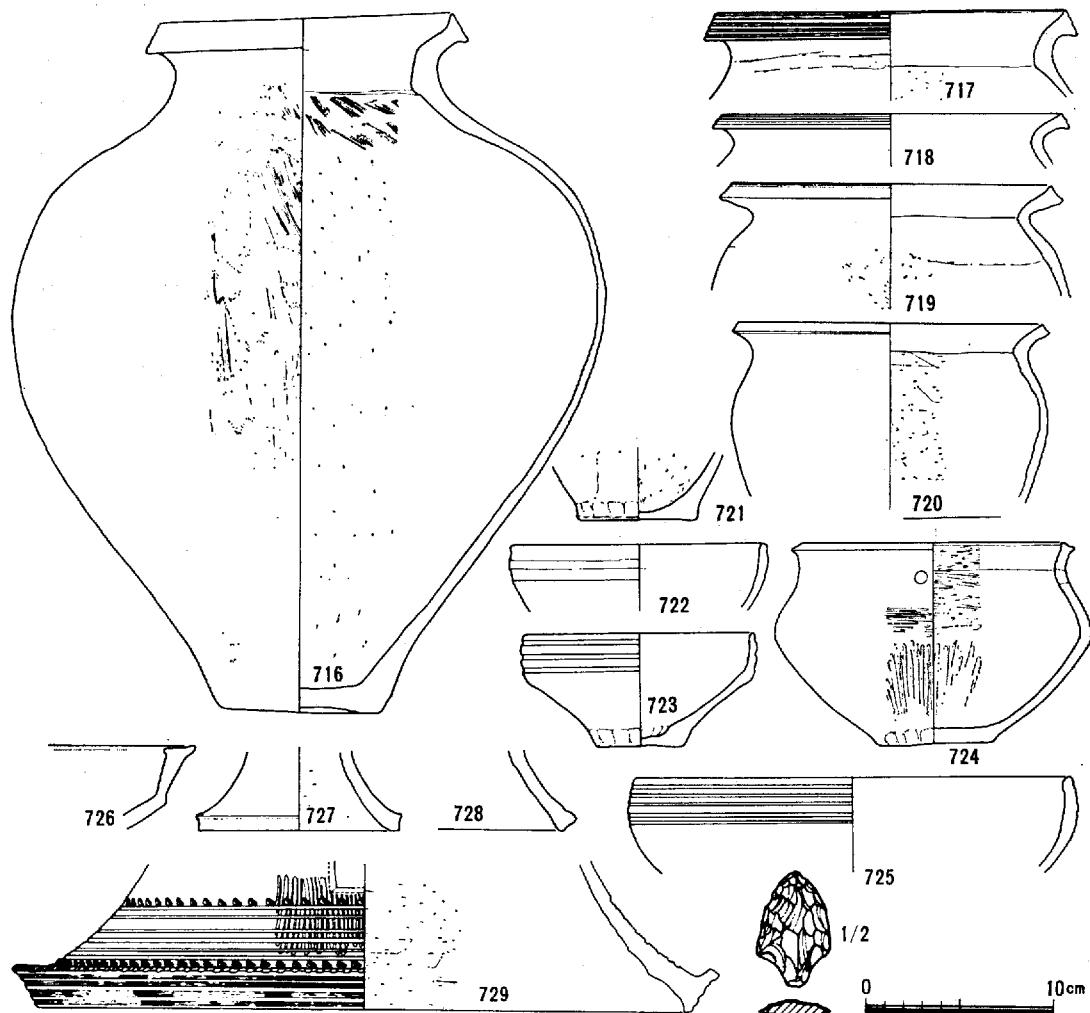


第76図 P-106 (J-20) 平面及び断面図 (縮尺1/20)

25) P—106 (J—20)

<遺構>第二橋脚のほど中央に位置し、長径155cm、短径83cm、深さ50cmを測る長円形の土壙である。長軸をほど南北に向けた土壙内には、炭及び灰が、黒褐色土に混入して堆積していた。炭、灰は南側により多く認められた。土壙南寄りには、短頸の壺形土器が、口縁部を下にしてづぶれた状態で出土した。底部は上向きになって、口縁及び胴部の脇にあった。壺の近くからは、径2mm前後の2個のブルーのガラス小玉が出土した。うち一個は南寄り、一個は東寄りにあって、それぞれ土壙の壁に接して認められた。又、サスカイト製の石鏃が壺の下側下層から出土した。石鏃は凸基有径式の石鏃で、先端を南に向けて、長軸に平行する形で検出された。土壙の南寄りは短径が南に比してやゝ小さい。こゝからは、楕形土器2個体分が出土している。

<遺物>壺形土器 (716) 一短頸の壺形土器で、急に外反する口端は肥厚し、横ナデされて、凹部を形成する。胴下部は内反りになって底部にいたりツボんだ小さな底部がつく。胴外面には細い刷毛



第77図 P—106 (J—20) 出土遺物 13

目がみられ、頸部内面と肩内面にも刷毛目がみられる。

壺形土器 (717~720) 急に外反する口縁は、わずかに肥厚するだけで横ナデされている。端面には退化四線が加えられているもの717, 718とただ四面をなしているもの719, 720がある。

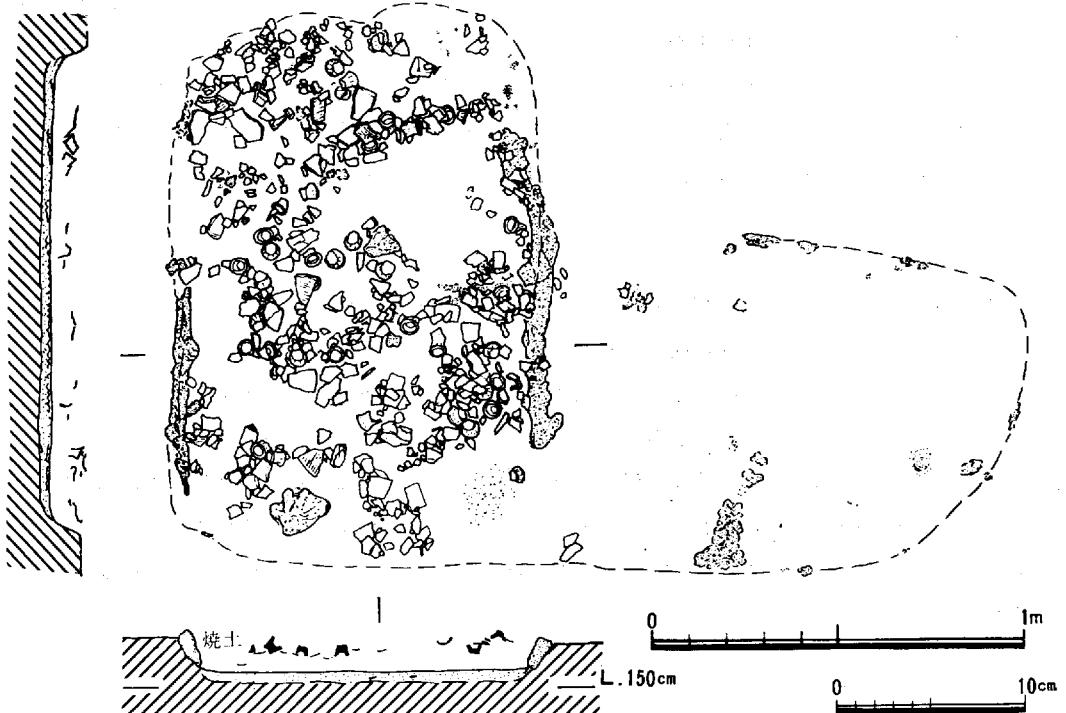
722~727は土壤の北寄りから出土している。724は頸部に径7mmの小孔をもつ。孔は焼成前のものでその数は不明である。外面範磨きされ内面も胴の屈曲部上下で方向の異なる範磨きがなされている。722, 723, 725はは楕形土器で、口縁外面に数条の凹線をもつ、以上は從来上東式と呼ばれてきた時期のもので、P一イ(才の町)と併行するタイプのものであろう。

26) 製 塩 爐 (J-20)

<遺構>第2橋脚位置の南東寄りに検出された。耕土の直下には破碎土器片と小礫が無数に集積して認められ、遺構はこれら土器・小礫集積部の下に遺存していた。ほど東西に主軸を置く長方形のプランをもち、東西150cm南北95cmを計る。西北両長辺にはそれぞれ、黄褐色の粘土焼土塊が高さ5~10cm厚さ4cmの壁をつくって併立していた。焼土壁は、北側で長さ60cm、南側で85cm続いている、壁の延長線上には点々と焼土塊が検出され、現存壁の両端は崩れていた。従って、この粘土の壁が、少なくとも南北両辺に全体にわたってめぐらされていたことはほど確かである。東西両辺には焼土塊が散見されても、この壁が遺存していないので、壁の有無と東西長の確定的な数値は断言できない。遺物の出土状況と、焼けた土の広がり、炭等の出土状況と、焼けた土の広がり、炭等の出土状態からみて、東西長の数値は大きくずれることはないであろう。併立する焼土壁はそれぞれ内側に平面をもち、上方が外側に開き気味になっていた。遺構床面は壁の下端に接して観察された。壁の下端は南北で1cmしかレベルが違わず、水平な面をもっていると言えるであろう。この面には少量の製塩土器口縁部細片があり、焼けて茶褐色になった砂質土が遺構内のほど全域にみられる。この焼けた面は北側壁寄りでとくに顕著に観察された。床面下は2~3cmの厚みで、茶褐色に変色した焼けた砂質土が続きその中に若干の製塩土器胴部小片とそれがボロボロに剥離したくず片、炭などが混入していた。

この土層は次第に灰褐色砂質土になる。この土層は、周辺の自然堆積土と変わらない。遺構内には大量の製塩土器片がみられたがすべて床面より少し浮いて出土した。遺構内にあった土器片は4~5点を除いてすべて製塩土器片で、台脚の数から換算すると約70個体分あった。亀川地区の砂州斜面の製塩土器出土状況に比して特徴的なのは、この遺構内の土器片はむしろ口縁部片と胴部の細片が非常に多かったことである。これらはすべて破碎片で4~5cm以下の小片が圧倒的に多い。とくに北西寄りの焼土塊近くでは、剥離片がボロボロで1cm以下の粒状になって、取り上げ難い程になっていた。遺構内には焼土塊が数プロック点在していたが、規則性はない。焼土の点在は遺構の南西部にもみられ、主軸に対して90°ふった方向で、南焼土壁から南北120cm東西90cmの範囲に点在していた。遺構が重複して2基あった可能性もあった。

この遺構が、広い焼けた土面と焼土塊を伴いそれをとり巻く壁を有することから、火を焚く炉の類の施設であったことは間違いない。さらにこの施設内から出土する遺物のうち製塩土器片が圧倒的な比率を示す。しかも胴部片、口縁部片の出土の仕方は他の製塩土器出土状況と全く異なった状況を示している。このことは、土器製塩工程のうちの煮沸作業の際におこる現象と類似している(註-12)。

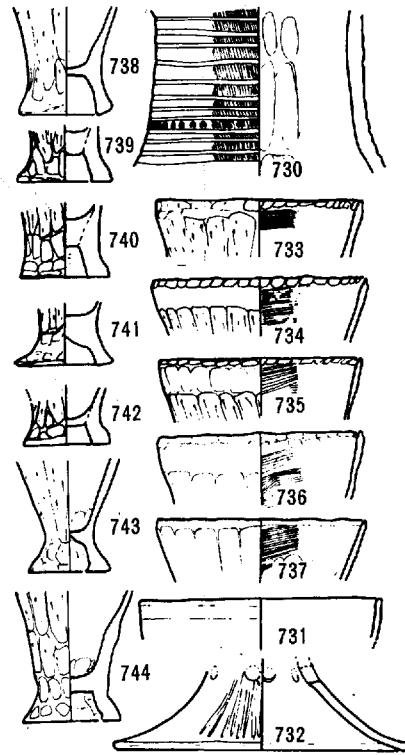


弥生後期の製塩炉の検出例は多くないが、いずれも周囲に土手状の「壁」をつくっていると言われ、当施設と基本的に似通っている。本例では「たゞき面」や「飴色状物質」等の類は全く検出されなかった。そのことは当施設の使用回数とも関連することで、数回の使用に耐える程度の簡単な構造の製塩炉と理解して問題はないであろう。遺構内にあった遺物の在り方は、下規則的で、廃棄された状態と考えられる。

〈出土遺物〉先述のごとく、製塩土器片が圧倒的で、他では4~5点の上東式併行の土器片がみられる。

730は、長頸壺の頸部で、しっかりした沈線をもつ。頸部の立ち具合で、下方がもう少し開くかも知れない。内面は押圧痕を残す。731は椀形の杯部をもつ高杯で、胎土に砂粒を含まない。732は高杯脚端で端部をナデて、面を作っている。外側は縦方向に範磨きしている。いずれも2次的な火を受けてすくけている。

743~744は製塩土器である。P-2~4 (J-25), 亀川地区から出土したものと似いいる。口端は内外とも押圧痕を

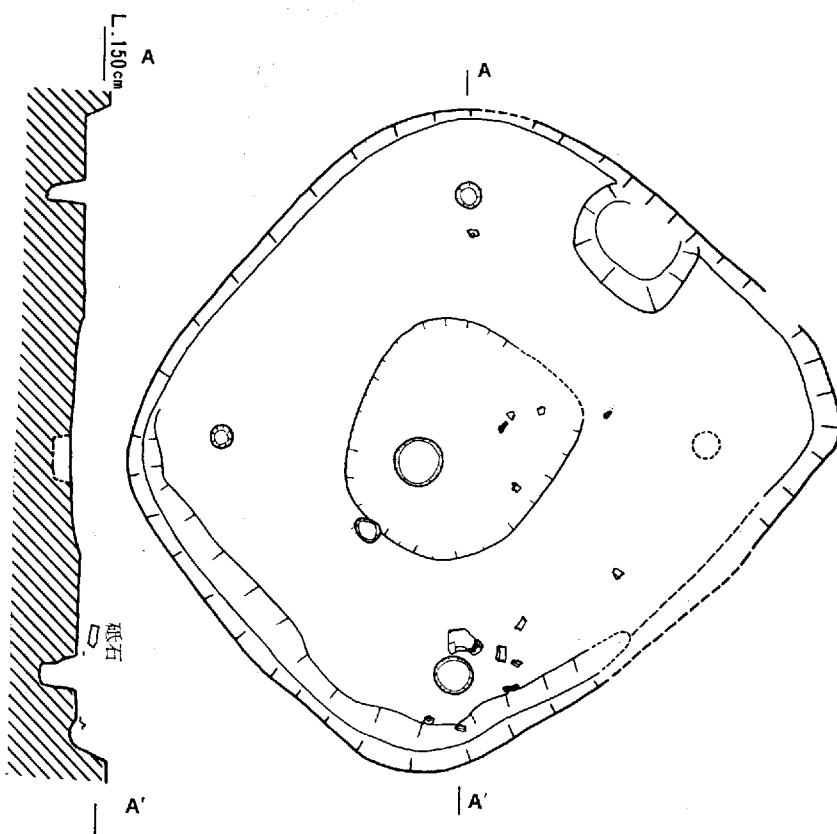


第78図 製塩炉 (J-20) 平面・断面
(縮尺 1/20) 及び出土遺物

残す。外は縦方向に範削りしたまゝで内面は口縁近くは刷毛調整、下方は押圧とナデによって、器表を滑らかに作っている。脚部は738、740の様に「ざん胴」形になるものが多く、器表は押圧と削痕を残す。内側は範削りの後ナデを押圧を施しており、ヘリ部を脚部よく密着させている。この点はP—2～4や龜川出土の製塙土器のヘリを残したものに比べて、技術的な改良の跡を認めることが出来る。すなわち後者の遺構のものはヘリの取れたものがかなり存するのに対して、当遺構のものは、一点もない。脚径の平均値も後者に比して、5～10mm小さく、後出的な様相をもっている。

27) H—7 (J—20)

2橋脚位置東端に検出された、 $450\text{cm} \times 491\text{cm}$ の隅丸方形の竪穴式住居址である。観察面での深さは25cmをはかる。径20cm、深さ30cmの柱穴を有する。4本柱の竪穴で、東南の柱穴は近年の盗掘によつて、とばされている。竪穴の西壁に接して、幅20cm前後、深さ7cmの壁体の溝をもつ。溝は北と南のコーナーを回った所で、それぞれ底が高くなつて、途切れている。竪穴中央には、 $180 \times 160 \times 10\text{cm}$ の浅い凹部があり、その西寄りに径40cm、深さ15cmの焼土の詰った土壙が検出された。さらに東壁に接して、 $100 \times 80\text{cm}$ 、深さ26cmの土器の入った土壙も認められた。確実にH—7に伴う遺物は、この土壙に存した土器(751, 755, 756, 757, 758)の他は西南柱穴内とその近くに、わずかに認められたにすぎない。



第79図 H—7 (J—20) 平面及び断面図 (縮尺 1/60)

上 東 遺 跡

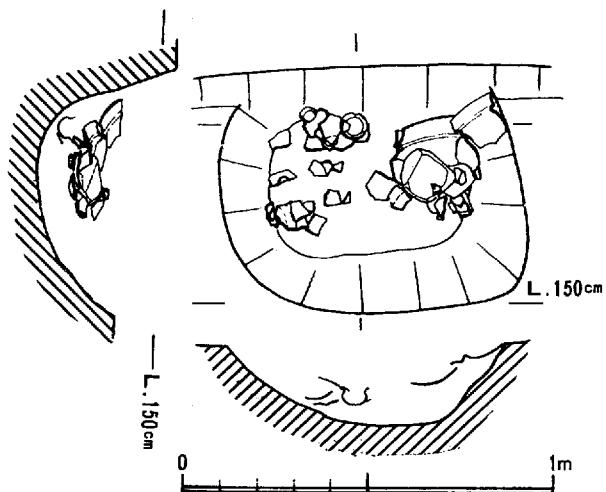
<遺物>壺形土器は少なく、口縁部片が2個体分認められた。745は上方によく外反する二重口縁をもち、口経は19cmをはかる。端部は横ナデされていて、頸部以下は内面籠削りが認められる。746はまっすぐ立ち上がる直口壺の類いであろうか。

甕形土器(747~753)は2様ある。

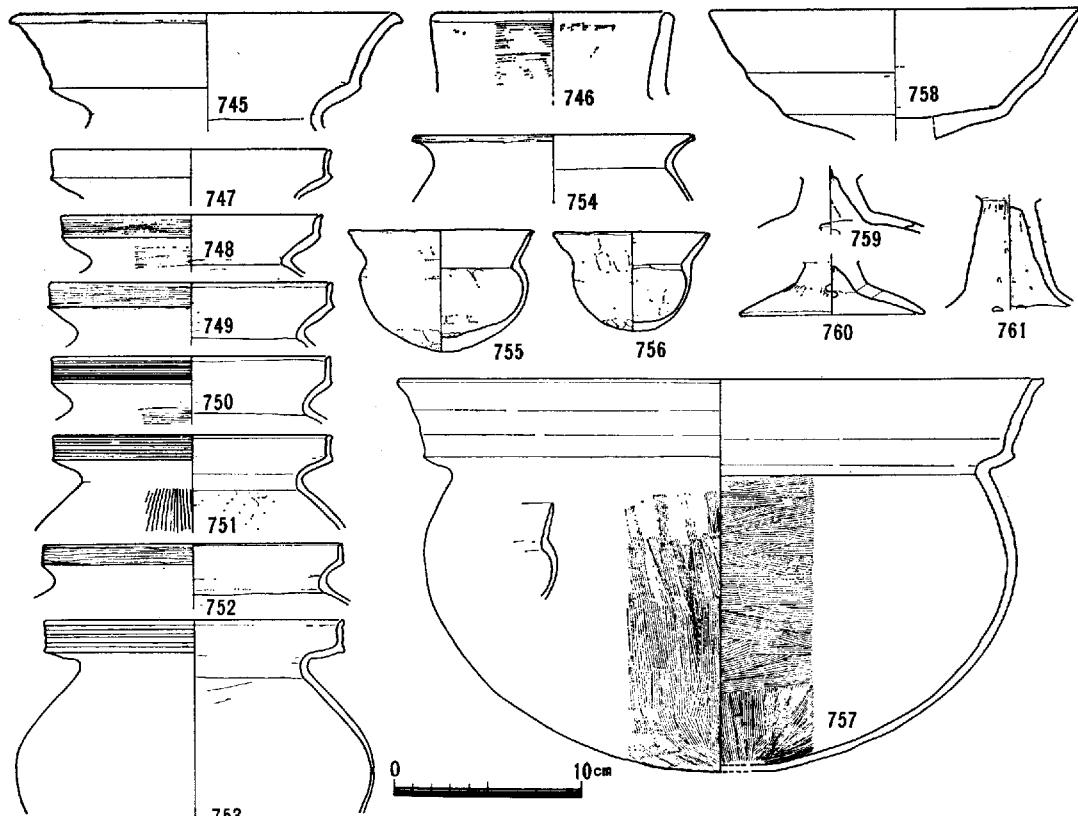
750, 752は南西柱穴から出土している。

頸部からくびれ外反する口縁はさら屈折して、ほぼ直立する拡張部をもち、二重口縁をなす。直立する二重口縁部は横ナデなどによって、外反りになっているものが通例で、口縁外面には細い櫛描き沈線が施されているものが多い。754は口縁に拡張部をもたず、丸く終る土器である。

高杯形土器は東壁に接する土壙の中から出土している。758は外方に2段



第80図 H—7 内落ち込み



第81図 H—7 (J—20) 出土遺物

上 東 遺 跡

にわたって拡張された口縁を有する高壺の杯部で下には、脚柱の長い761がつくと思われる。761外面は篦磨きが施され、内面にはしづらひずみがみられる。脚の透し孔はその配置からみて4孔になる755、756は埴形土器である。755は床面からやや浮いて出土した。砂粒を含む壺型土器などと同質の胎土で、黄褐色を呈する。外面に指押圧痕をよくとどめている。756は砂粒を含まない水こし粘土で作られており、外面には押圧痕をとどめる。

757は、頸部から急にくびれた口縁は明瞭な屈折をもって、外方によく張り出す口縁をもつ口端は横ナデされて、凹面をもつ。胴部は内外面ともに、丁寧に刷毛調整されている。外面は主に縦方向、内面は上半が横方向、下半には縦方向の刷毛目が主にみられる。底は胴部と全く変わらない調整されているが、かすかに平面が観察される。砥石は2点出土している。57は南西柱穴脇から出土した。灰白色の流紋岩で、磨滅の顯著な凹面の側が上になって検出された。58は石英斑岩製の砥石でH-7の堆土中から出土した。堅穴と同時期か否かは不明である。

H-7東壁に接して、馬骨が検出された。馬骨は北向きに頭部のみが遺存していたが、特別に埋められたような遺構は検出し得なかった。骨は堅穴東壁に接しており、堅穴に切られた状態で埋まっていたことが考えられる。したがって、この馬骨はH-7以前の骨と考えてよいものであろう。

(藤田・柳瀬)

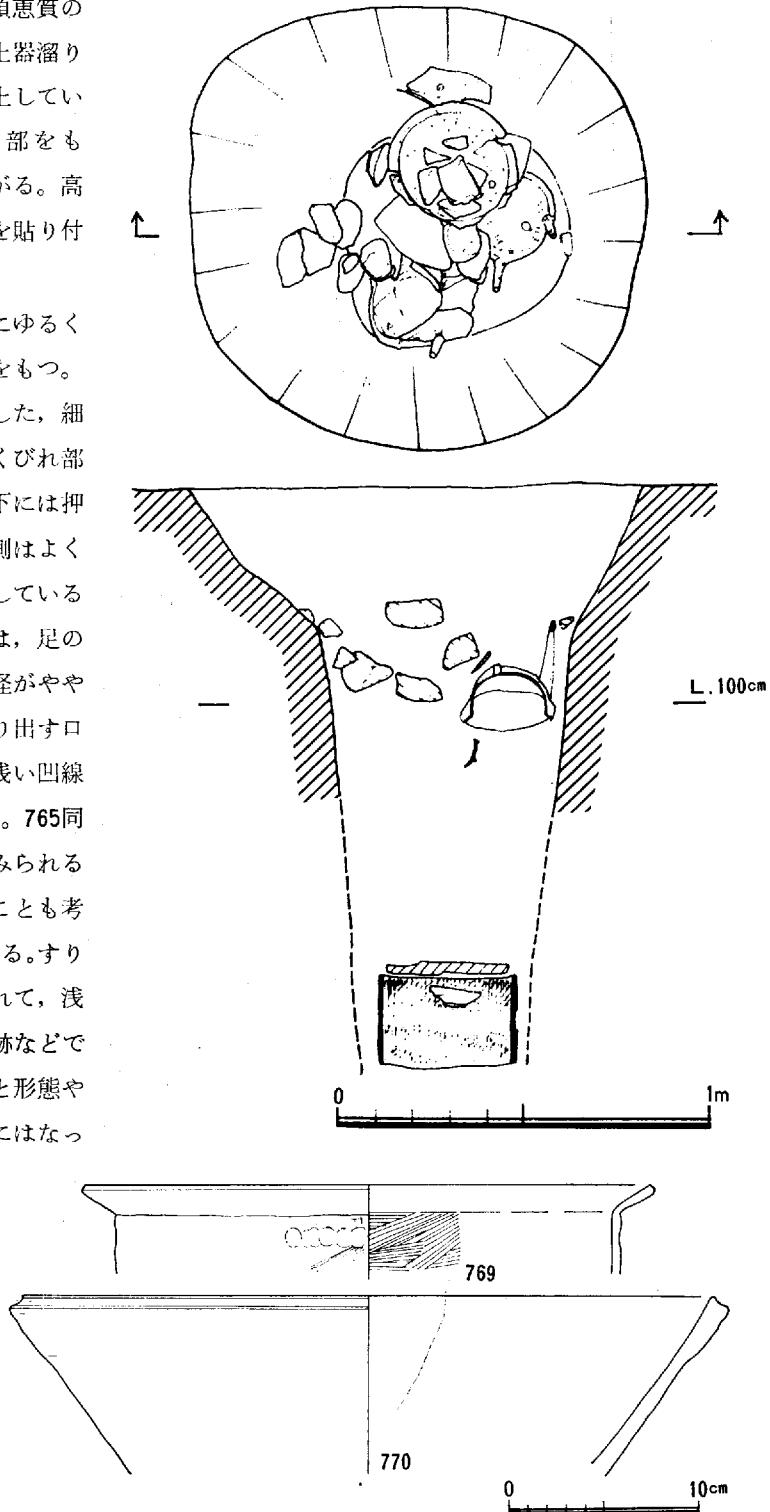
28) P-123 (J-20)

<遺構>径240cm、深さは少なくとも300cmに達する。土壌の上部はすり鉢をなす。下半はほぼ220cm程垂直に掘り込まれていて、青灰色砂質の湧水層に達する。土壌内の堆積土は、暗褐色有機土の一様な埋積状態を呈しており、土壌の中位海拔高120cmのあたりに土鍋等が15cm大の礫とともに出土した。このレベルの出土遺物は、当土壌を放棄する際に廃棄させたものであろう。土壌の底は激しい湧水のために正確には確認出来なかつたが、海拔高-45cmの所で、径70cm、高さ50cmの曲げ物が検出された。曲げ物は、土圧のためか橢円形になった状態で埋っていた。曲げ物の上には花崗岩の薄い板石が、重石にした状態で鋸えられていた。板石の下、曲げ物の内側には、口径27cm大の完形の土師器椀が一個存していた。曲げ物の下端は海拔高-95cmを測り、暗青灰色の砂利層に達していた。曲げ物の埋り方からして、当土壌の底は、この砂利層上面と考えられる。曲げ物とその中の椀は、単純な廃棄物とは思えず、50cm大の板石を重石にしている状態から判断しても、特異な遺物をもつものであろう。

上 東 遺 跡

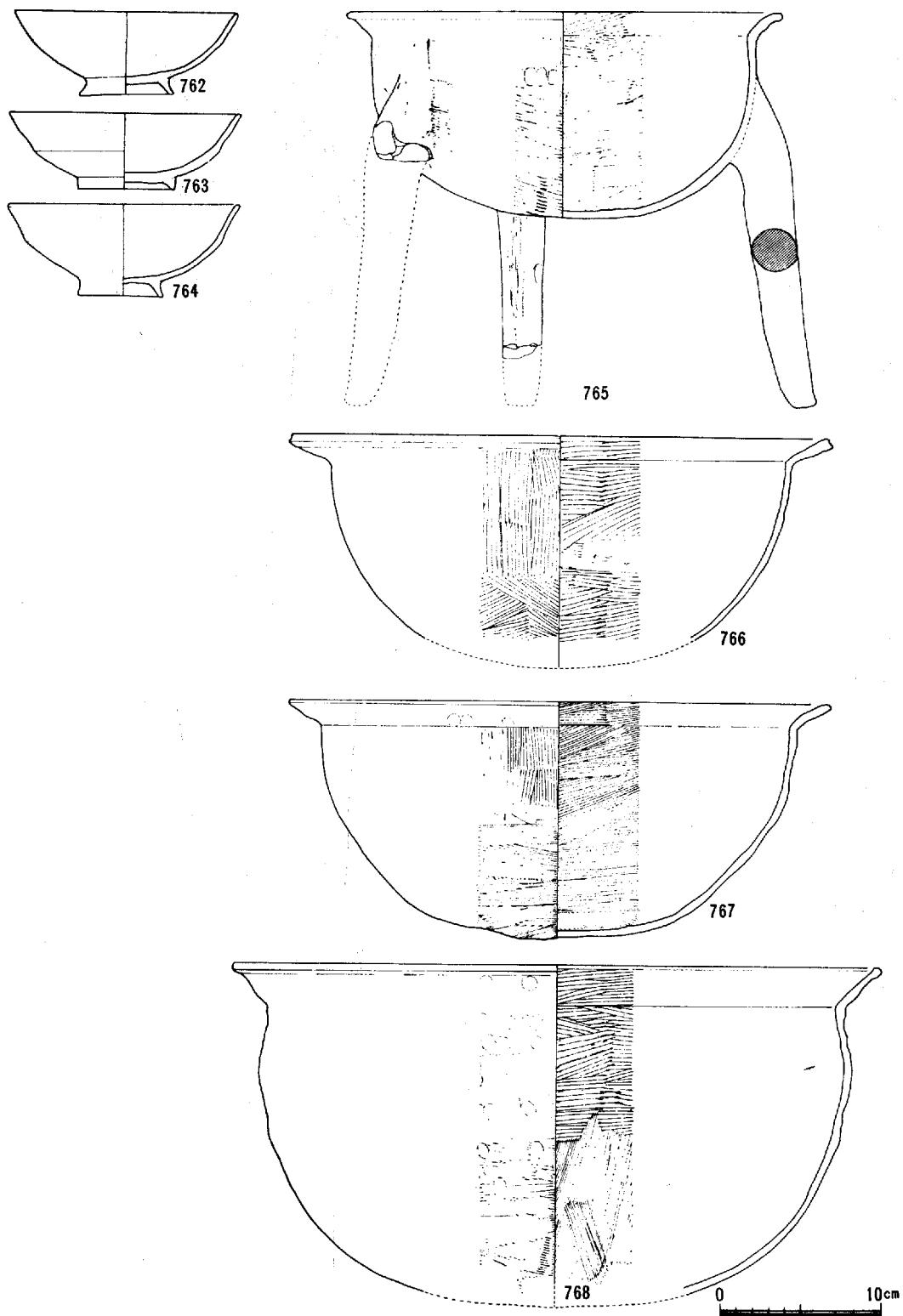
<遺物>土器762～764は須恵質の椀で、762, 763は上よりの土器溜りから764は曲げ物内から出土している。浅い杯部は中程に屈曲部をもち、そこから上方に反りあがる。高台は高さ1cm足らずのものを貼り付けている。

765は三足の土鍋で外方にゆるく張り出して、丸く終る口縁をもつ。内外面ともに横方向を主とした、細刷毛調整を施し、外面頸のくびれ部までは横ナデ、くびれ部以下には押圧痕が顕著に見られる。外側はよくすすぐて、厚くススの付着している部分も見られる。766～769は、足のつかない土鍋で、765より口径がやや大型になる。強く外方に張り出す口縁部はその端面をナデて、浅い凹線をつくる場合(766)がある。765同様内外共に細い刷毛調整がみられる。769は765のように脚がよくことも考えられる770は瓦質の鉢である。すり鉢状に開いた口端はナデられて、浅い凹面を形成する。酒津遺跡などで報告された。「すり鉢鍋」と形態や胎土が似ているが、すり鉢にはなっていない。

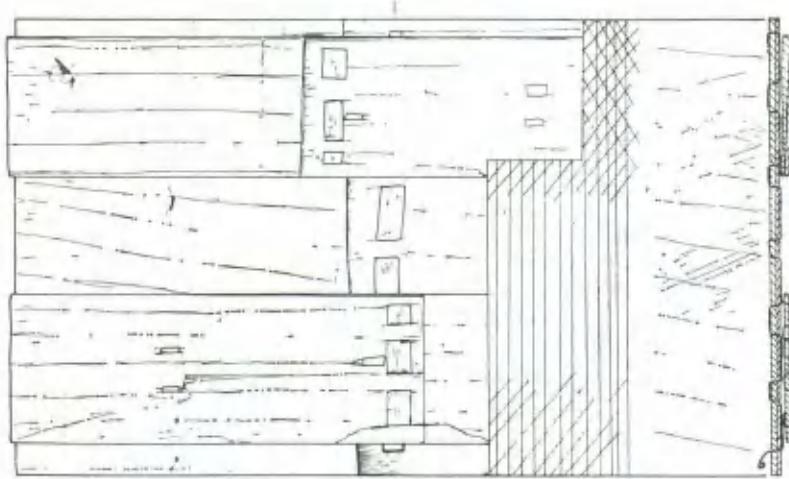


第82図 P-123 (J-20) 平面・断面図 (縮尺1/20) 及び出土遺物 (1)

上 東 遺 跡



第83図 P-123 (J-20) 出土遺物 (2)



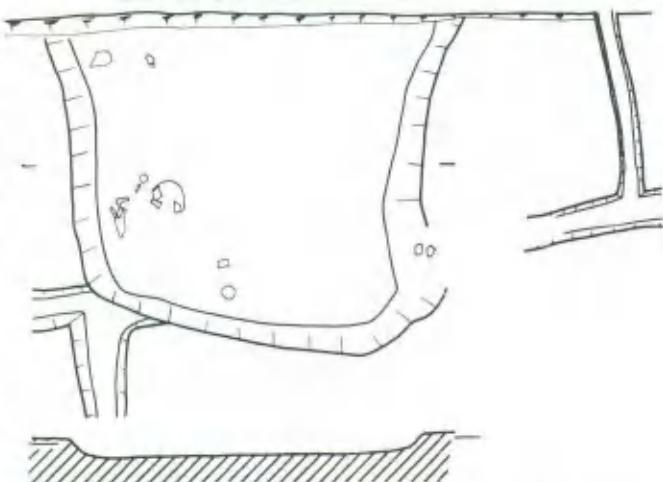
第84図 P-123 (J-20) 曲物及び出土状態

曲げ物 (38) 幅24.6cm厚さ3.5mmと1.5mmの二枚の正目薄板を二重にして作ったヒノキの曲げ物で、径40cmをはかる。薄板は内側に厚さの3.5mmのものを使用し、内面に7mm前後の間隔で縦方向と斜方に切り目を入れている。板の合わせ部は桜の皮を使ってとじ、さらに補強として幅7.5cmと8cmのものを上端と下端にかけている。この補強板はそれぞれ桜皮で、下の薄にとじついている。（藤田・柳瀬）



29) H-9 (J-25)

<遺構>辺約280cmの不整形形を成す住居址である。北端の半程は用地外で不明である。深さは現存で20cm程しか残っていない。住居址外に東西に伸びる溝を切ってつくられているが、溝と同一時期と思われる須恵質杯片等が出土している。柱穴等は確認できなかった。住居址内は焼けたような面がみられ、三足の土鍋(771), なべ(772, 773), 須恵質杯片(774~778)が出土している。

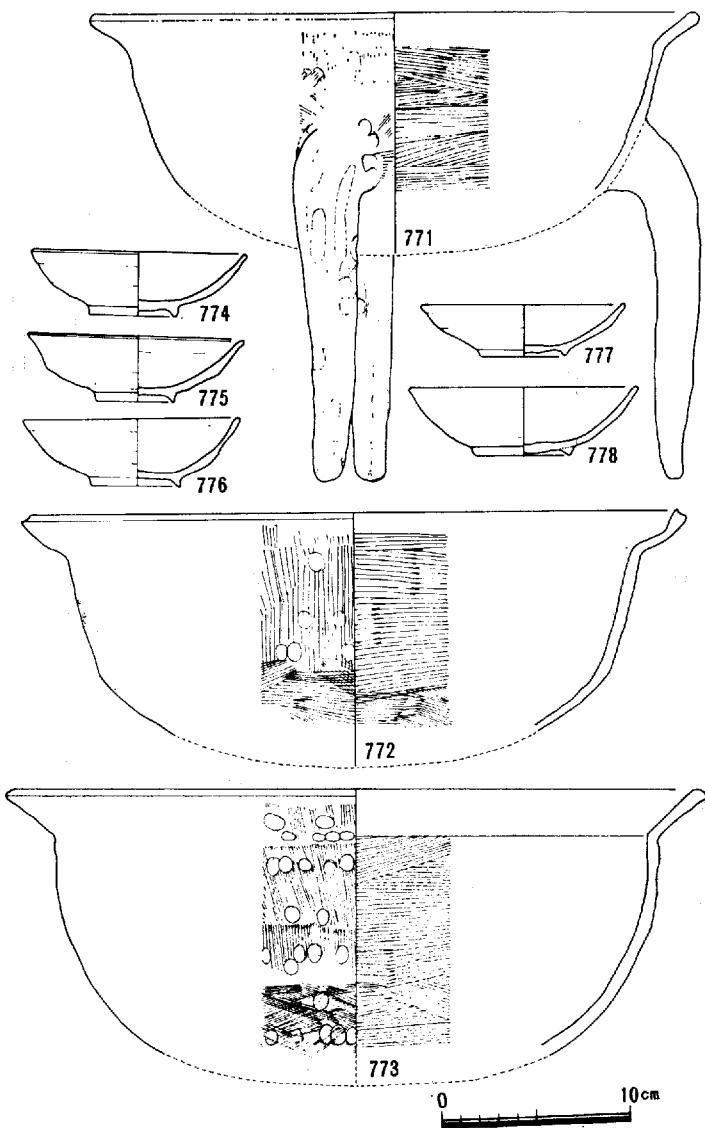


第85図 H-9 (J-25) 平面図 (縮尺1/60)

上 東 遺 跡

これらの遺物は、約15m東の第二橋脚位置にはば同時期の井戸状遺構（P-123）が確認され、ほとんど手法、形態とも同じ様相を呈しており、時代も同時期の存在と考えられ、鎌倉時代初頭に位置づけられる。

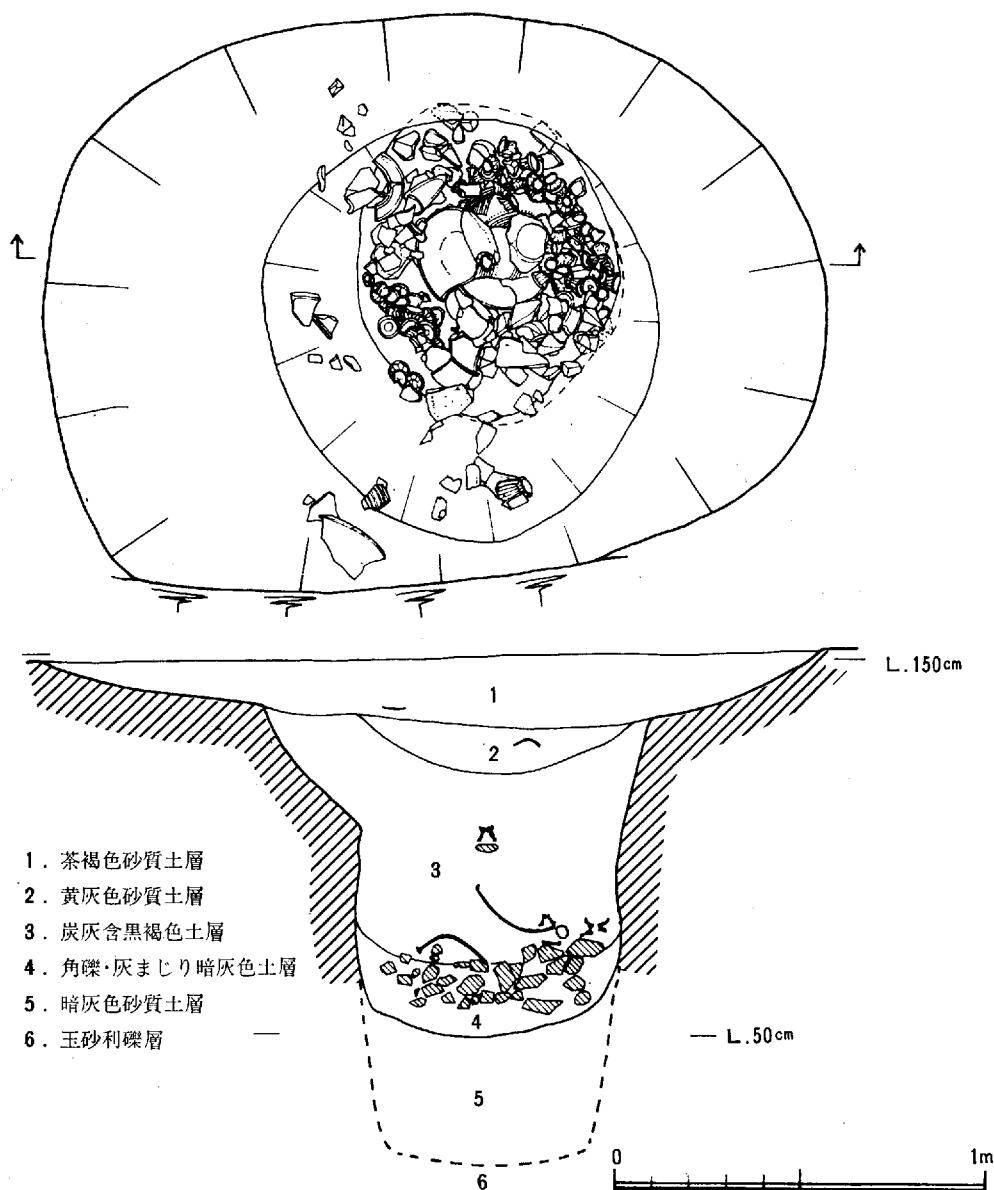
（伊藤・池畠）



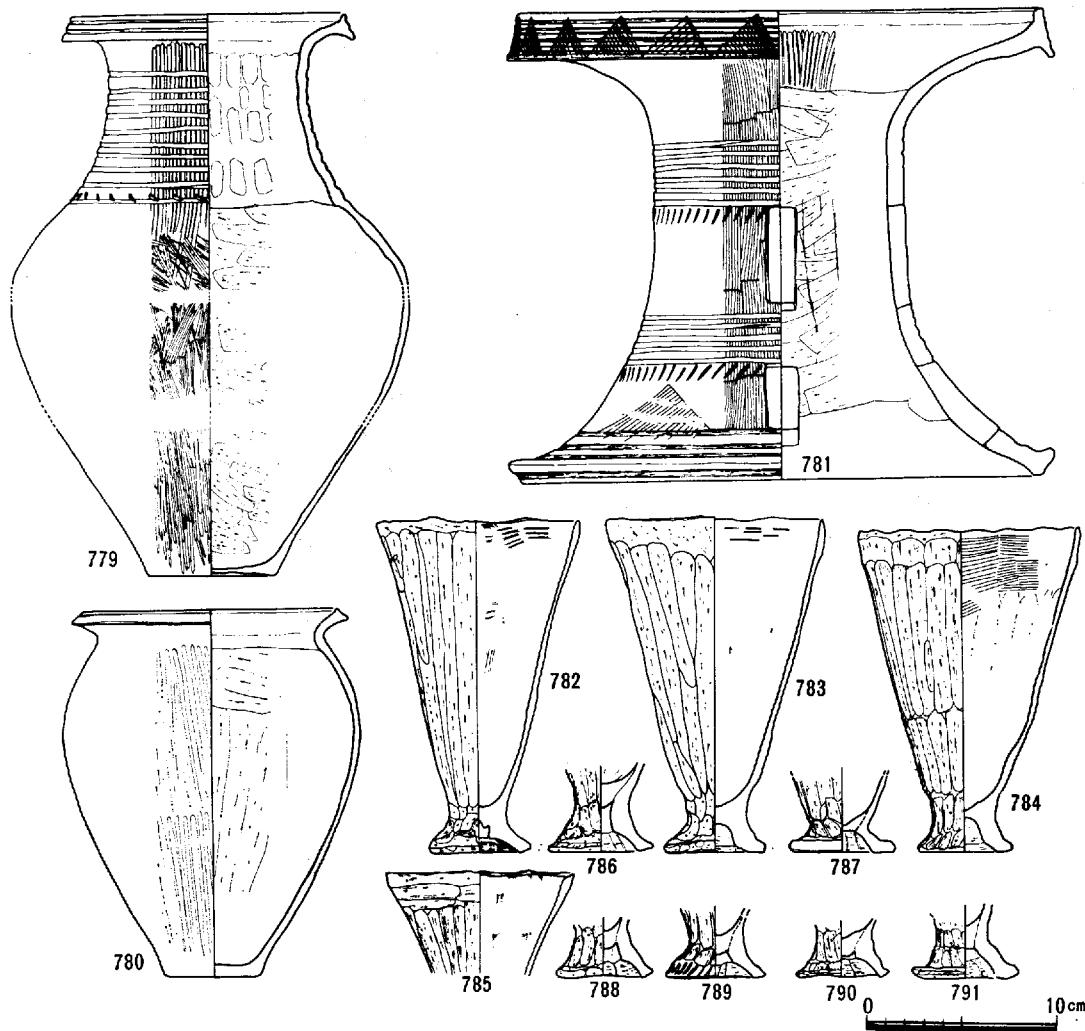
第86図 H-9 (J-25) 出土遺物

30) P-2 (J-25)

<遺構> H-8 の西側、調査区の北端に位置する。一部は調査区外に延びていたので、部分的に拡げて調査した。径410cm、深さ270cmをはかる。土壤の上端はすり鉢状になつていて急に広がっていたが、これは土壤の肩が崩れたものであろう。1層には周辺から土器片が流れこんでいる状態がうかがえた。2層は砂質の有機土で、遺物はあまり含まれていない。3層は炭と灰の厚い堆積層で水を含んで、粘質の強いヘドロのような状態であった。灰が主に含まれていたためであろう。この土壤の出土遺物の大半はこの第3層から出土している。3層の上よりからは、口縁から台脚部まで継ぎうる製塩土器3個体分と数個の台脚部が出土した。第3層下端には製塩土器の台脚部片が、集中して堆積して



第87図 P-2 (J-25) 平面図及び断面図 (縮尺1/20)



第88図 P-2 (J-25) 出土遺物

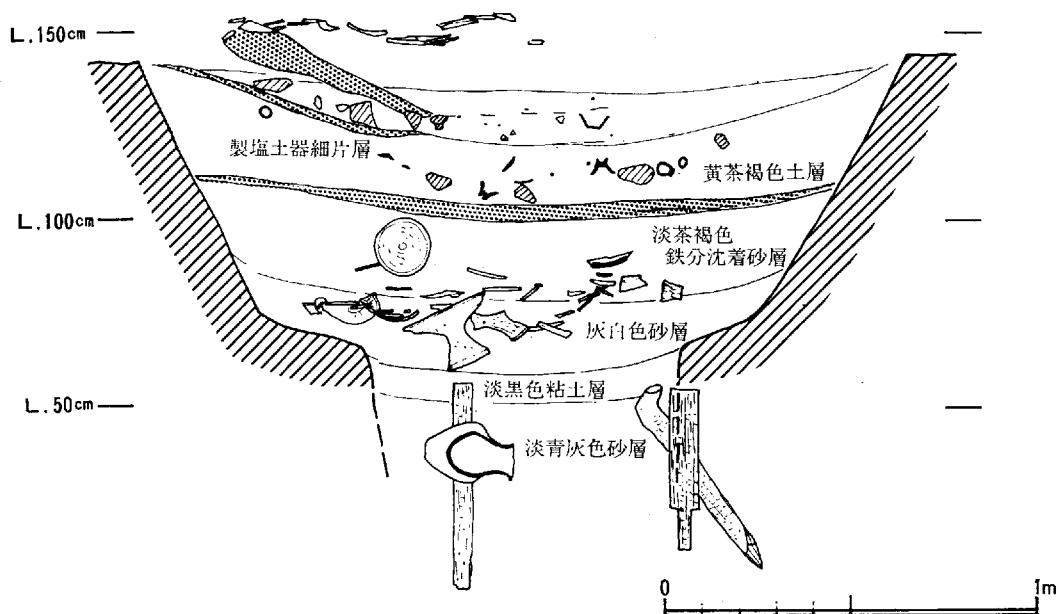
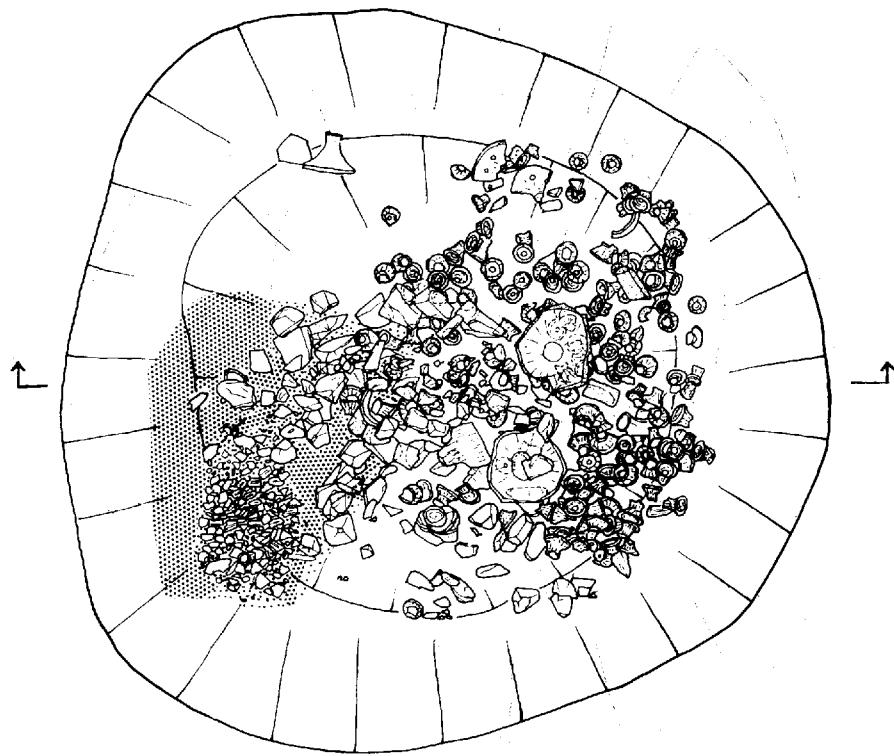
おり、製塩土器に混じって、10~15cm大の角礫が数多く認められた。4層以下は湧水と壁のくずれがはげしいため、詳しくは調査できなかったが、青灰色の礫は第4層にもおよんでいた。壺形土器(780) 器台形土器(781) も一点ずつ、製塩土器の間にまじって出土した。

＜遺物＞壺形土器(779) 一点のみで5層下端砂利層の上から出土した。内湾する頸部から急に外反して、口縁端部に至る。口端部は横ナデによって肥厚させ上方と下方にそれぞれ拡張している。端面には2本の退化した凹線をもつ。頸部には笠描きの沈線が10本あり、最下段の沈線に重ねて、刷毛状工具による刺突をめぐらせ細砂土の堆積があり、海拔高15cmの深さで礫層に達する。手さぐりで確認し得た限りでは土壠の底はこの砂利層上面と考えられ、この部分で壺形土器(779)が出土した。

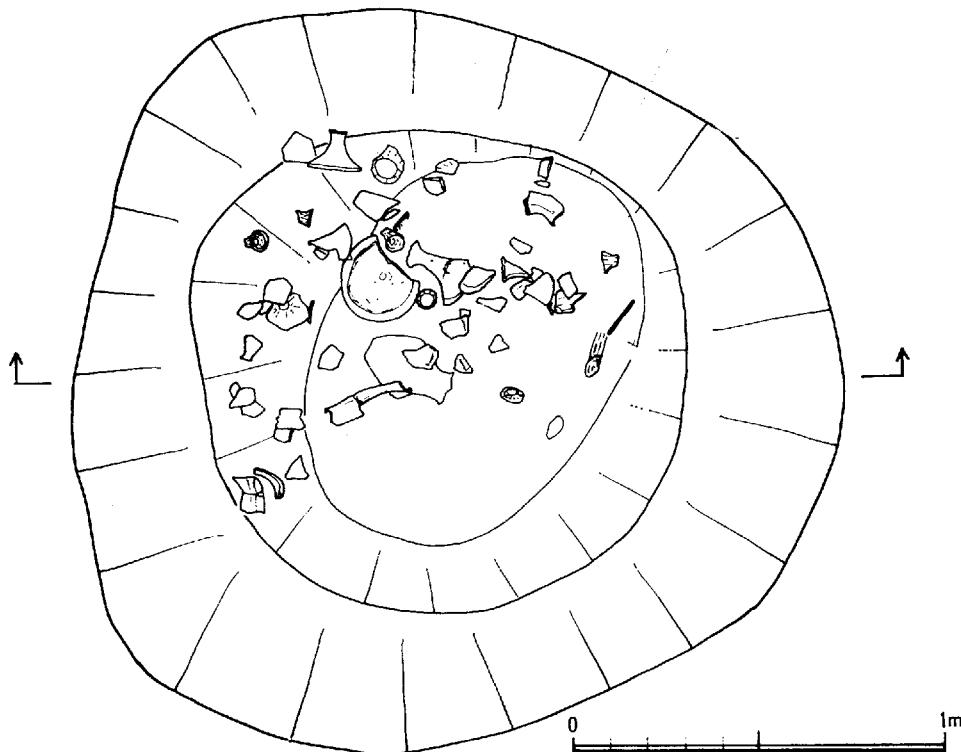
壺形土器(780) 第3層から一点出土している。口端を横ナデで少し肥厚させたもので、胴部には笠磨きをもつ。

器台形土器一円筒状の胴部の上下で等しく外反する口縁と脚端をもち、口縁は上下に拡張する。口縁端面には退化した凹線と鋸歯文をもつ。鋸歯文は脚端凹線の上にも一個描かれている。胴部は沈線

上 東 遺 跡



第89図 P-3 (J-25) 上層平面及び断面図 (縮尺 1/20)



第90図 P-3 (J-25) 下層平面図 (縮尺 1/20)

と刷毛状工具の刺突、長方形の透しをそれぞれ二段に入れている。

製塩土器 (782~791) 全体を復原実測出来るものは今調査全体を通してこの土壙から出土した三点のみである。箒削りと押圧によってくびれた脚からラッパ状に開く鉢形をなす。外面は粗い縦方向の箒削りを加えて器壁を薄くしている。内面は口縁端近くで刷毛目が観察され下方は、なでられている。口端は指もしくは箒で押えしめられて、しばしば破状を呈する。外面は粗雑に内面は丁寧に造られた土器である。

P-10 (J-30) やP-1イ (才の町) とほぼ併行する時期のものであろう。 (藤田、柳瀬)

31) P-3 (J-25)

<遺構>直径約200cm前後の不整円形である。上面には、この遺構に伴う遺物と包含層の遺物が混在しているが、標高約150cmの所から焼土、炭化物・製塩土器体部細片が50cm×80cm、厚さ10cm前後で堆積し、焼土、炭化物、小角礫が後期前半の土器とともに約200個体を越える製塩土器の脚部片がみられた。その下部は、また土器片等を多く包含する青灰色砂層からなっている。約60cm下がった所で径約80cm程に狭くなるが、上部とほとんど同じ青灰色砂層で、この面から、板材、杭等を打ちこんで井戸枠としている。底部は湧水が激しく確認できなかった。

この土壙は、はじめ井戸として作られ、使用されなくなった後、低くなった所に製塩土器等が投棄されたものと考えられる。

<遺物>壺形土器 792は、口縁部を欠損する。ずんぐりして肩部があまりはない。793は、強く張った体部から外反する口縁部を持つ。口縁端部はわずかに上下に拡張し数条の退化凹線を持つ。

壺形土器 (794~804) は口縁端部に拡張をもつものと持たないもの、退化凹線のあるものとないものがある。

高杯形土器 (805~810) 805が全体を見れるもので他は脚部のみである。805は口縁はわずかに外反し口縁端面は水平になり2条の退化凹線を持つ。

脚部には3段に分けそれぞれ4孔ずつうがっている。807, 810は2段に、808は4段に、また809は、脚端部に円孔を巡らせている。

811は鉢形土器になるものであろう。

(伊藤、村上)

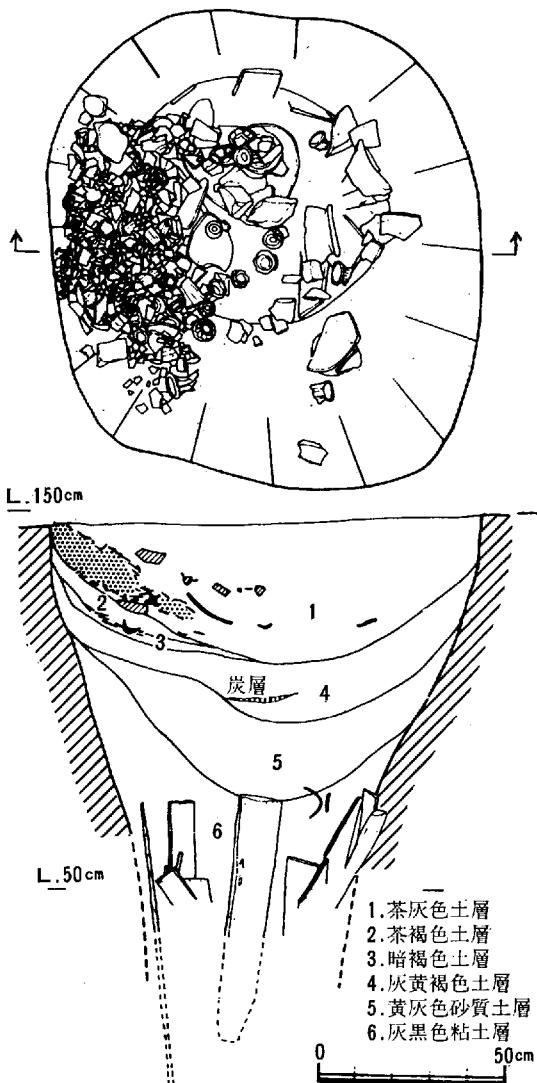
32) P—4 (J—25)

<遺構>東側の一部をH—8に切られている。
115×125cmの隅丸方形を呈す。第1層中には北側に集中して、多数の小角礫、その下から製塩土器台脚部20数個体と無数の口縁部および胴部細片が中央に向って落ちこんだ状態で検出された。第4層中には厚さ1~2cmの炭化物層が見られる。第6層は暗青灰色粘土層で、下部になるほど砂質になる。検出面から約70cmの深さのところで土壤の周囲に打ち込まれた矢板10枚と杭1本が検出された。817, 818の壺形土器は60~70cm(絶対高)のところで検出したほぼ完形の土器であり、また821の鉢形土器は右下の位置にはほぼ矢板の上部のレベルで出土している。出水のために底の確認はできなかった。

遺物の出土状態および土壤の施設からみて、井戸として使用された後、製塩土器の廃棄場所にされたと思われる。

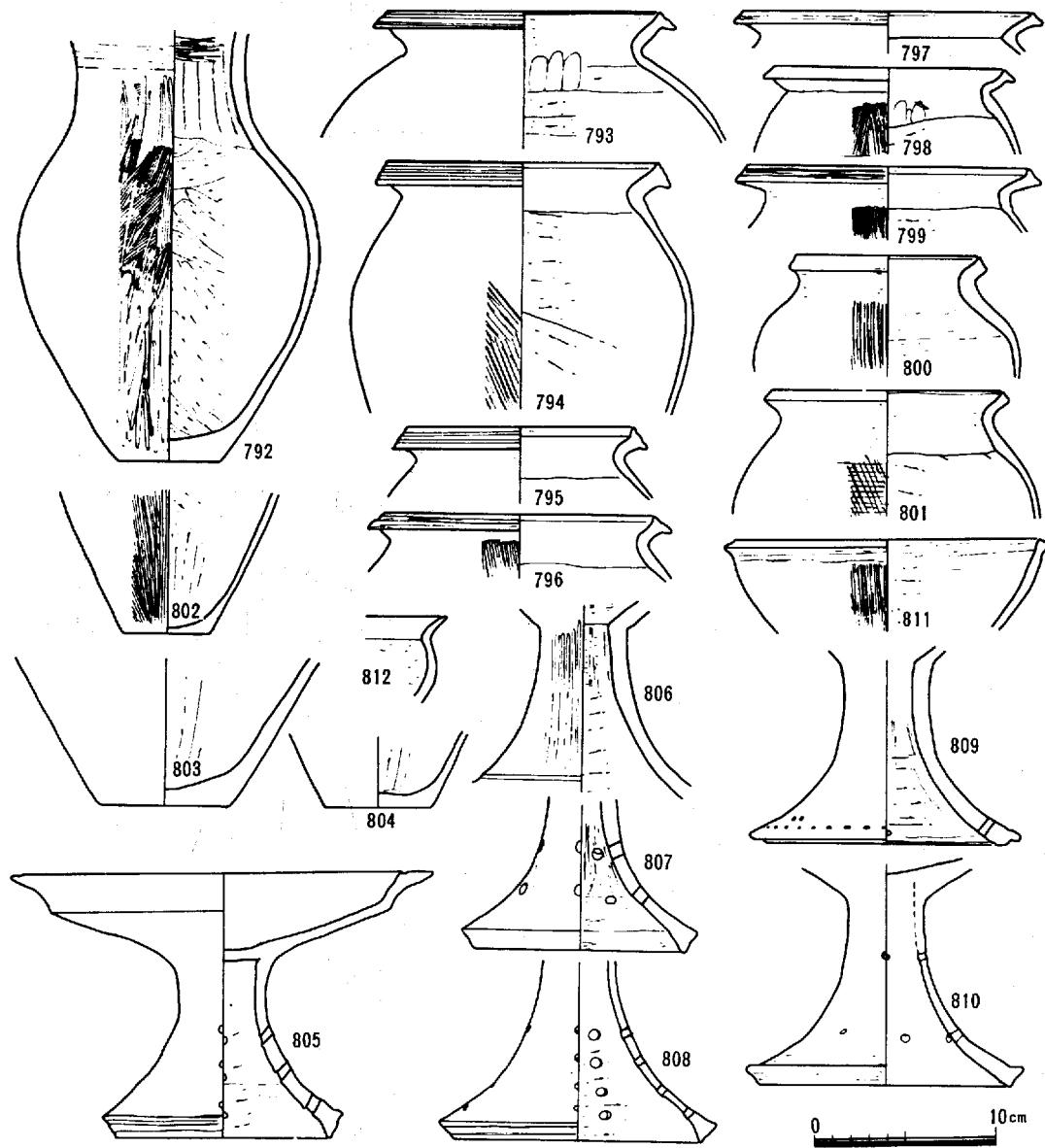
<遺物>壺形土器 (813) ほぼ垂直に立ち上がる口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は内傾し上部に少し拡張する。口縁端面には退化凹線を持つ。

壺形土器 (814~818) 口縁部「く」の字形にゆるく外反し、口縁端部はやや内傾し上下に少し拡張する。口縁端面には退化凹線を施すものが多い。817, 818の外面は、粗い刷毛調整が行われている。



第91図 P—4 (J—25) 平面図及び断面図
(縮尺 1/20)

上 東 遺 跡



第92図 P-3 (J-25) 出土遺物

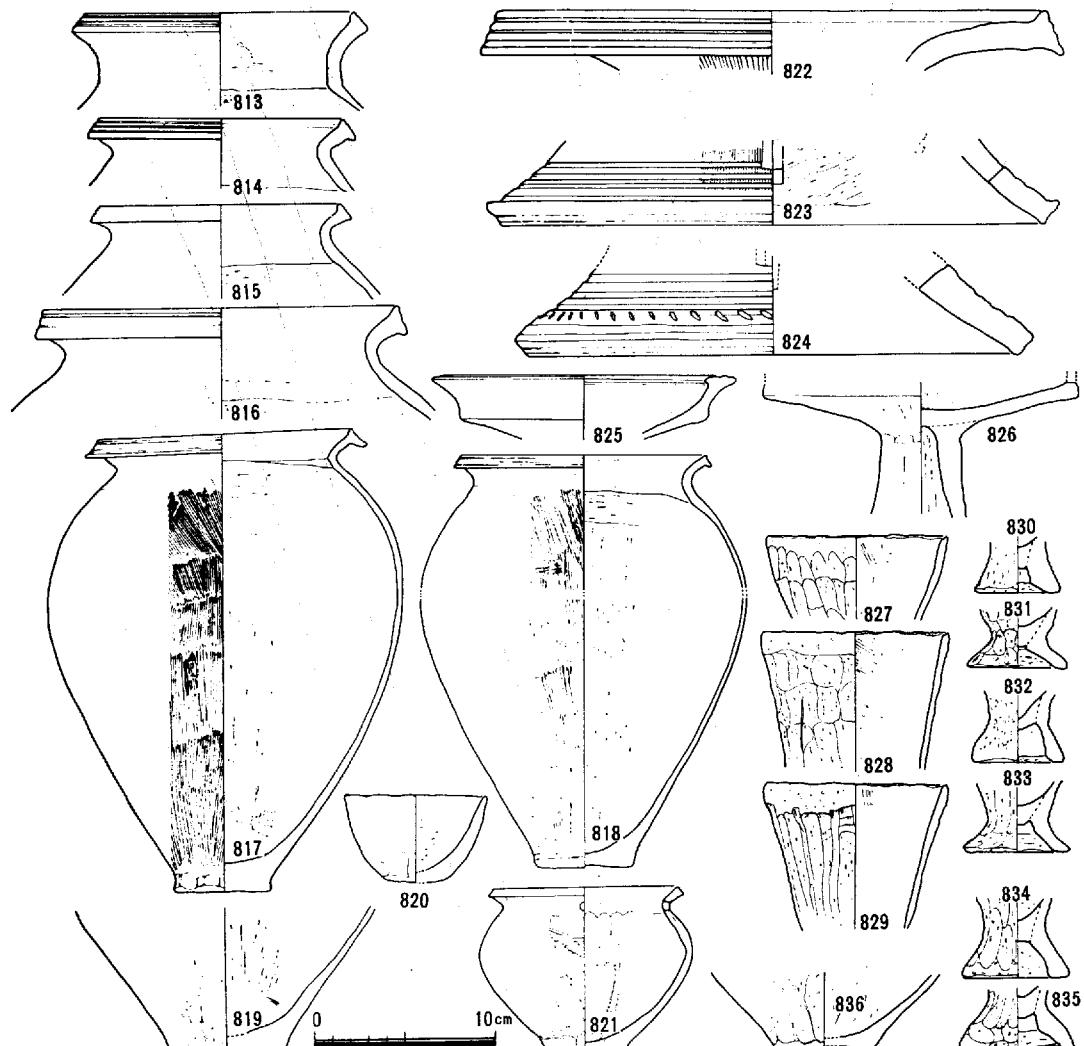
上 東 遺 跡

高杯形土器 (825, 826) —825の口縁端部は肥厚し内外に拡張し端面には2条の雑な凹線を持つ。

器台形土器 (822~824) —822と823が同一個体のようで、口縁端面には凹線、筒胴部は刷毛目を施している。脚部には3~4条の凹線が見られ、また凹線上に列点文が施されている。

821の鉢形土器は頸部に1つまたは一対の小円孔を穿つ。

製塙土器 (827~835) —827~833は第1層中のもので、834, 835は第6層出土のものである。台脚部は26点出土しており、口径平均値5.43cmである。そのうち形状の変化のある830~833を上層出土の中から選び出して図示した。下層出土は834, 835のみであった。827~829の口縁部外面は口縁端から約2cmのところまで下から上方向の箝削りが見られ、内面は丁寧な指頭による押圧調整が行なわれ、ところどころに刷毛目が残る。



第93図 P—4 (J—25) 出 土 遺 物

上 東 遺 跡

836は平底を呈するが、胎土調整は、製塙土器のそれと同じである。

形態的にはP—3, 4, (J—25)の出土土器に類似し、弥生後期の古い様相を呈する。

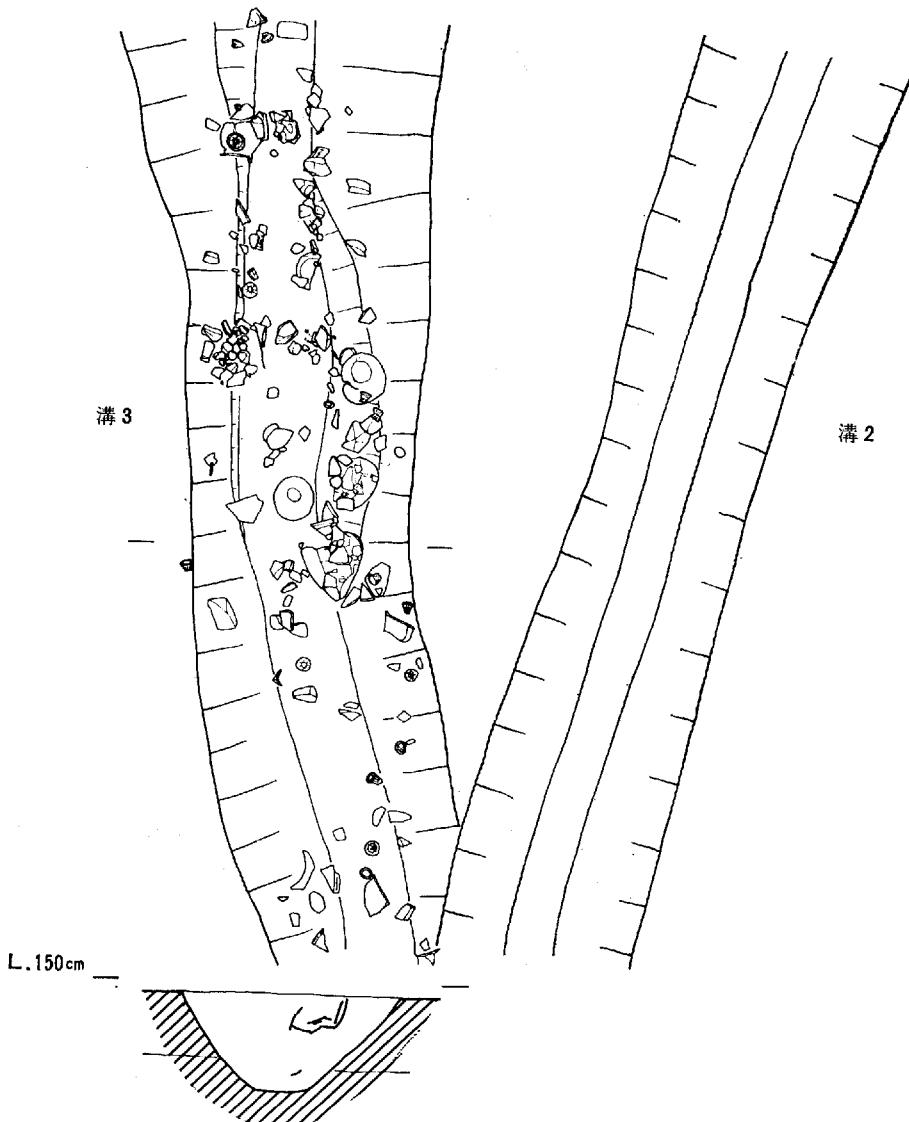
(柳瀬)

33) D—3 (J—25)

溝2の西に検出された。南で、溝2に切られた、幅約60cm深さ30~50cmの断面「U」字形の溝である。溝底は北側で海拔高90cm、南側で同80cmをはかり南側が10cm低くなっている。構内には底から少し浮いて、多くの遺物が検出された。

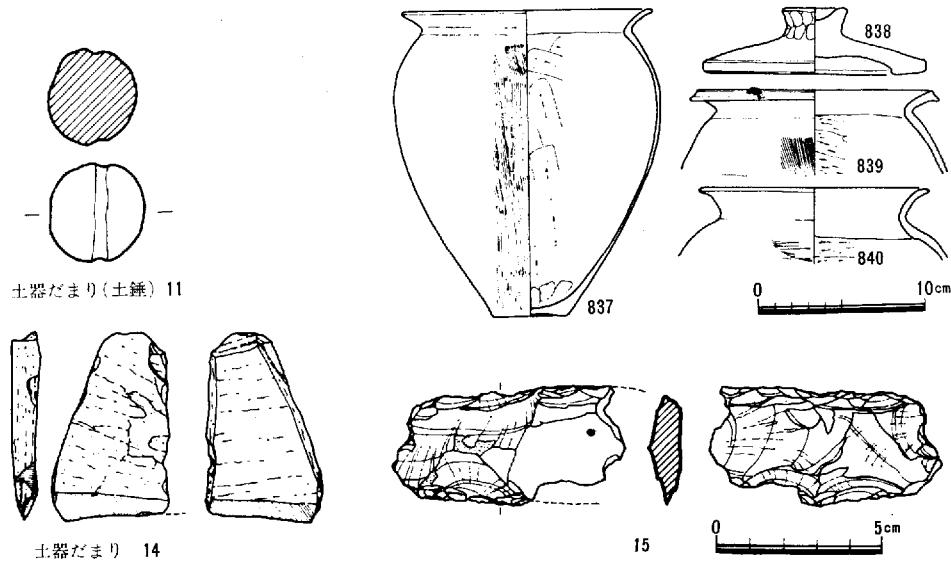
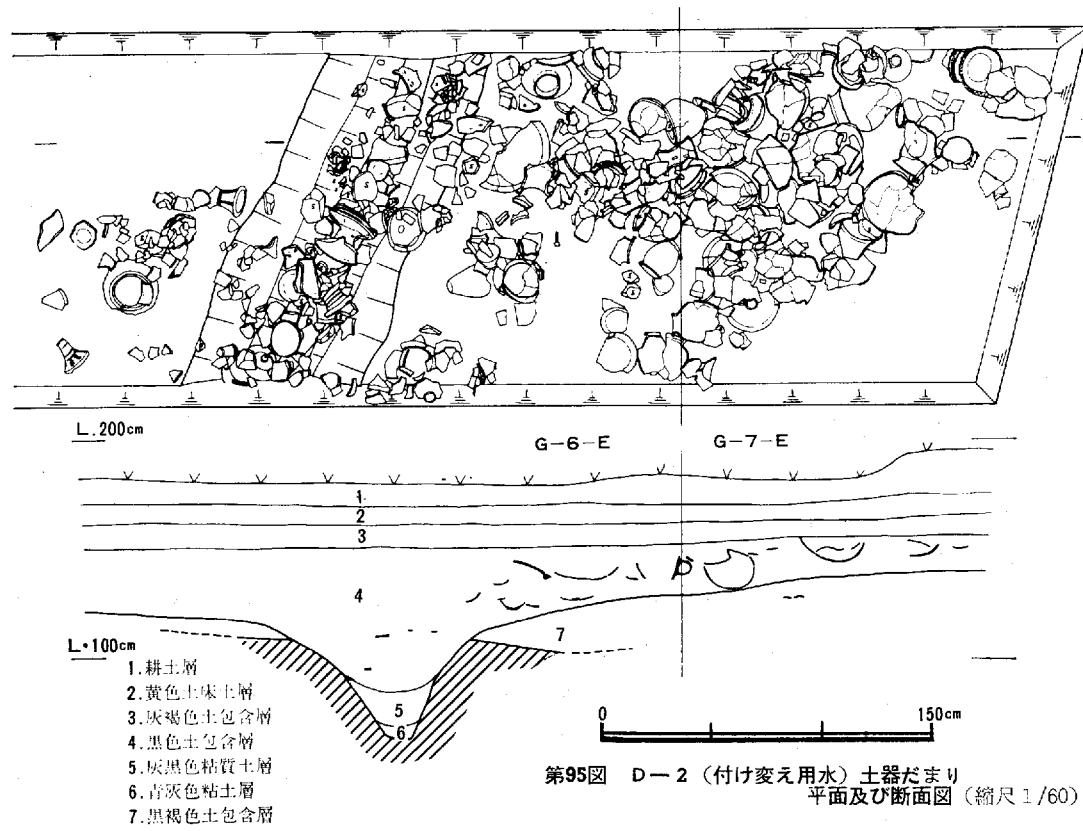
遺物はサヌカイト製石庖丁1点の他、蓋形土器、甕形土器、高杯形土器などがある。いずれも後期前半の特徴をもった土器である。

(村上、柳瀬)



第94図 D—2, 3 (J—25) 平面及び断面図 (縮尺 1/60)

上 東 遺 跡



34) D—2 (J—25) および付変え用水トレンチ土器だまり

＜遺構＞東鬼川市G—6～7—Eに土器だまり、および溝を検出した。この土器だまりと溝は、保存区域と用水を越えた北側の側道敷（J—25）に検出されたD—2からの延長である。D—2は幅約70cm、深さ60～80cmをはかる。溝底の海拔高は、北側で72cm、南側で65cmであり、少し南が下がっている。土器だまりは第95図の断面でわかるように、第4層中に見られる。そして、この土器包含層はD—2の深さのはば中程まで落ち込んだ状態で堆積している。第4層出土の土器は、約7m²の発掘面積中だけで200個体を越え、完形近くに復原できるものだけでも100個体近くになると思われる。また、出土土器類は、いわゆる土器だまりという性格ではあるが、同一層内一時期の一括資料として取り扱うことができる。

＜遺物＞多数の土器類とほかに極部磨製石器(14)などが出土している。土器は長頸壺・無頸壺などの壺形土器や、甕形土器・台付甕形土器、鉢形土器高杯形土器、器台形土器など、それぞれの土器の中でもタイプの違った器種が出土している。200個体をこえる出土土器の中からいろんなタイプのものをえらんで図示した。

長頸壺形土器の中で842は、口縁部がゆるやかに外反し、端部には、肥厚・拡張をもたない。頸部には沈線がみられず、部分的に刷毛目が残る。

843は表面がかなり剥離しているが、口縁端部は退化凹線、頸部は沈線が施されるタイプであろう。844は口縁内部に凸帯をめぐらした中期的な要素をもつ土器である。

848・853はともに完形で出土したもので、どちらも内外面とも鏡磨き調整されている。853は器腹に焼成後の穿孔がみられる。

855は肥厚した口縁部に退化した凹線をもち器表は平行タタキ目が残る。タタキ目のみられる唯一の土器である。この時期のものでは器表には線刻もみられる。

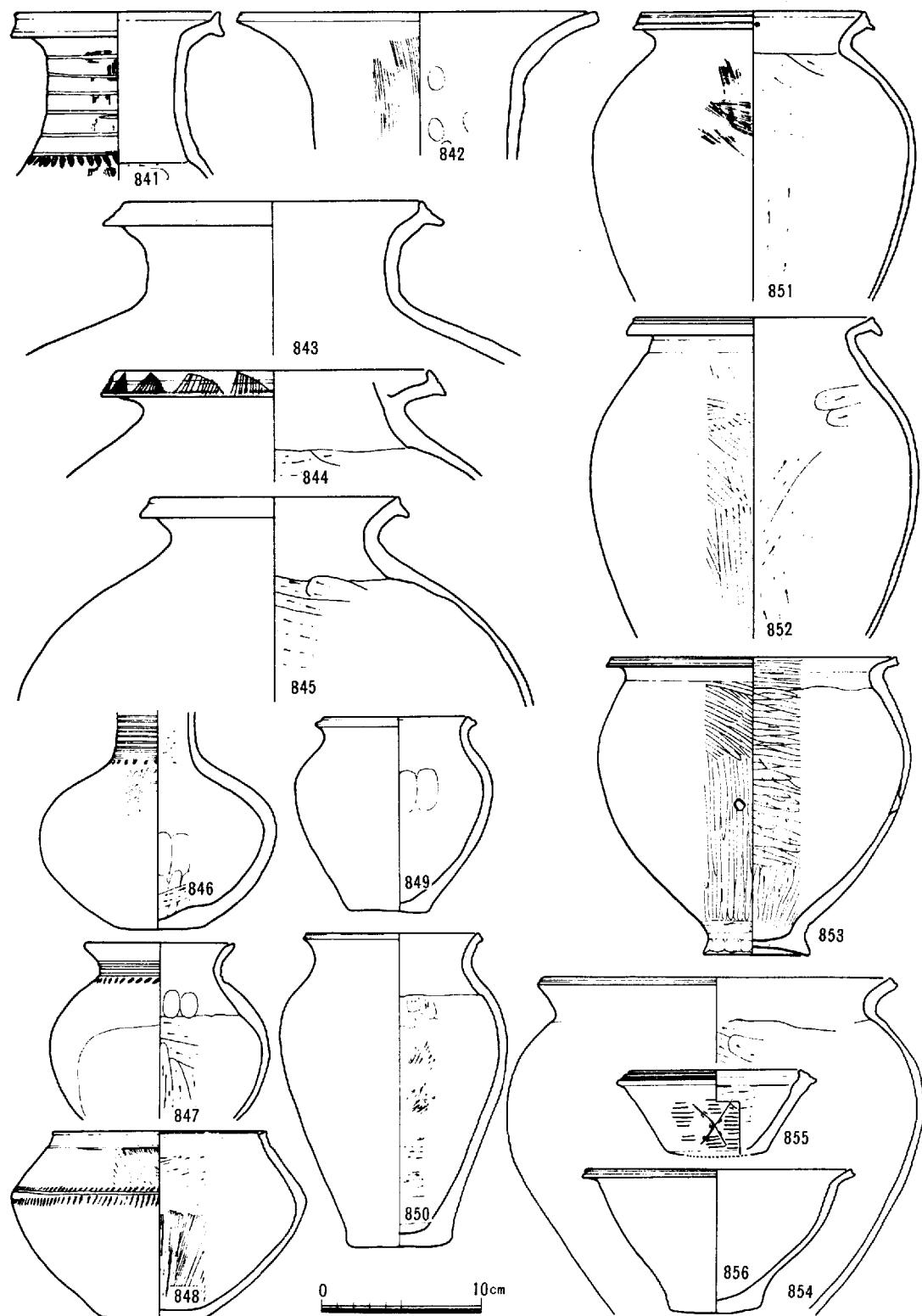
高杯形土器はその整形において、円盤充填法によるもの（856～862、864、868）とそうでないもの（868）が見られ、共伴している。前者の中でも359、860は口縁端部が水平または斜め上方に拡張をもち中期末の様相を呈する。脚部・器表面に描寫平行沈線文・透しの簡略化した鏡磨き沈線文がみられるもの（866、867）もある。

器台形土器は高杯形土器のごとく、細めの脚柱部からラッパ状にひらく口縁部が上下に拡張するもの（869），壺形土器のごとく頸部からゆるやかに外反する口縁部が内傾し、上下に肥厚または拡張するもの（870、871）がある。

井戸Ⅱ（才の元）とほぼ併行する時期のもので、弥生中期の特徴、要素を部分的に残したいわゆる後期の最も古い時期の一群としてとらえることができる。

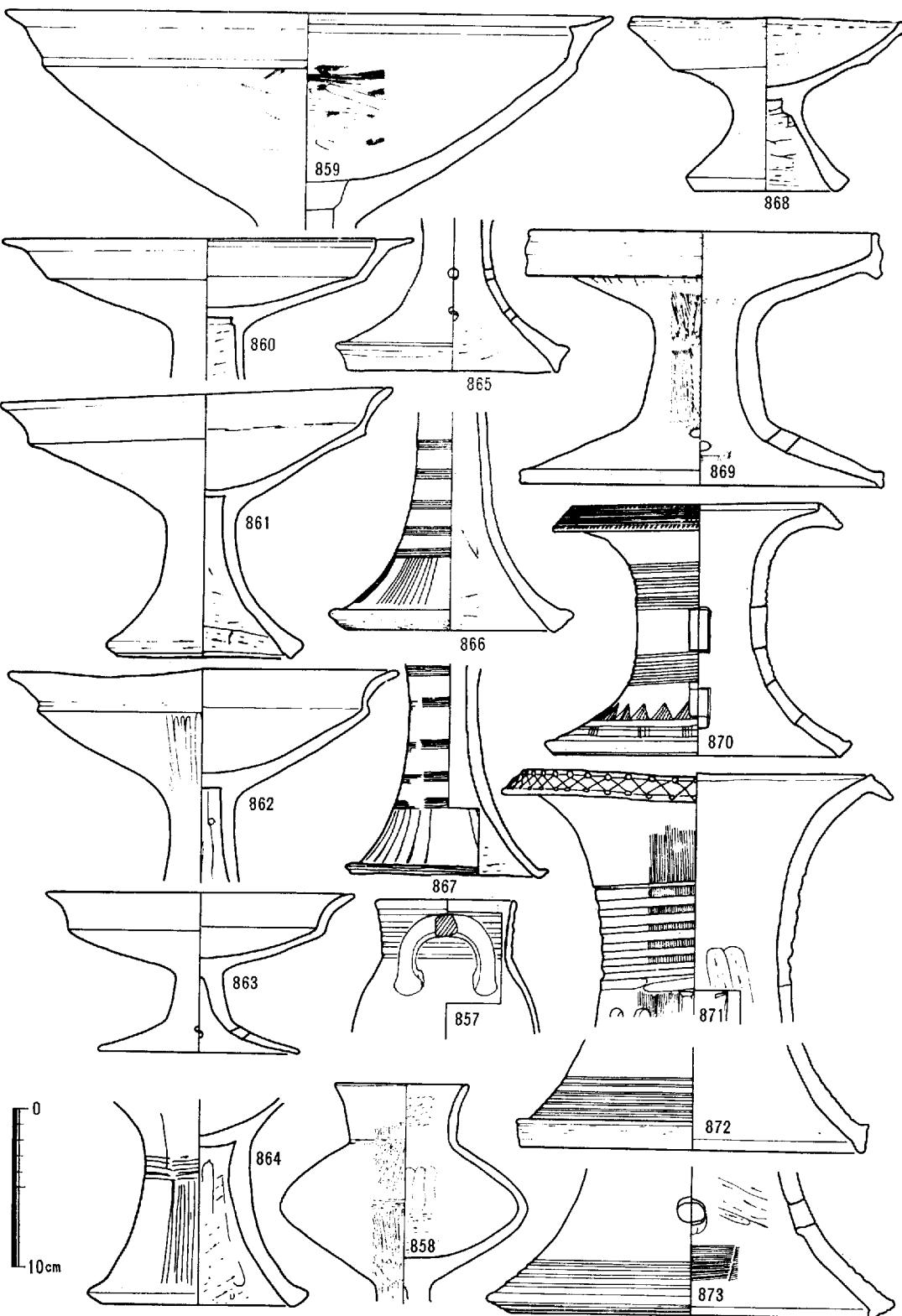
（柳瀬）

上 東 遺 跡



第97図 付け替え用水土器だまり出土遺物 (1)

上 東 遺 跡



第98図 付け変え用水土器だまり出土遺物 (2)

上 東 遺 跡

35) P—9 (J—30)

<遺構>120×80cmの隅丸方形のプランを呈し、深さ30cmを測る。土壌内は暗灰灰色土が堆積しており、出土土器は10数個体を数える。そのうち完形は床面出土の鉢(882)のみで、878は復原完形である。土壙墓と思われる。

<遺物>壺形土器(874, 875), 瓶形土器(876, 878), 鉢形土器(882), 高杯形土器(879~881), 製塩土器(877)が出土している。882の鉢形土器は底部穿孔である。882は小型の鉢という性質上から飯とは考えられず、土壙墓出土の土器類によく見られる底部穿孔の類に属すると思われる。

全体的に後期の古い様相を示し、P—イ(才の町), 併行もしくは少し先行する形態を持つ。

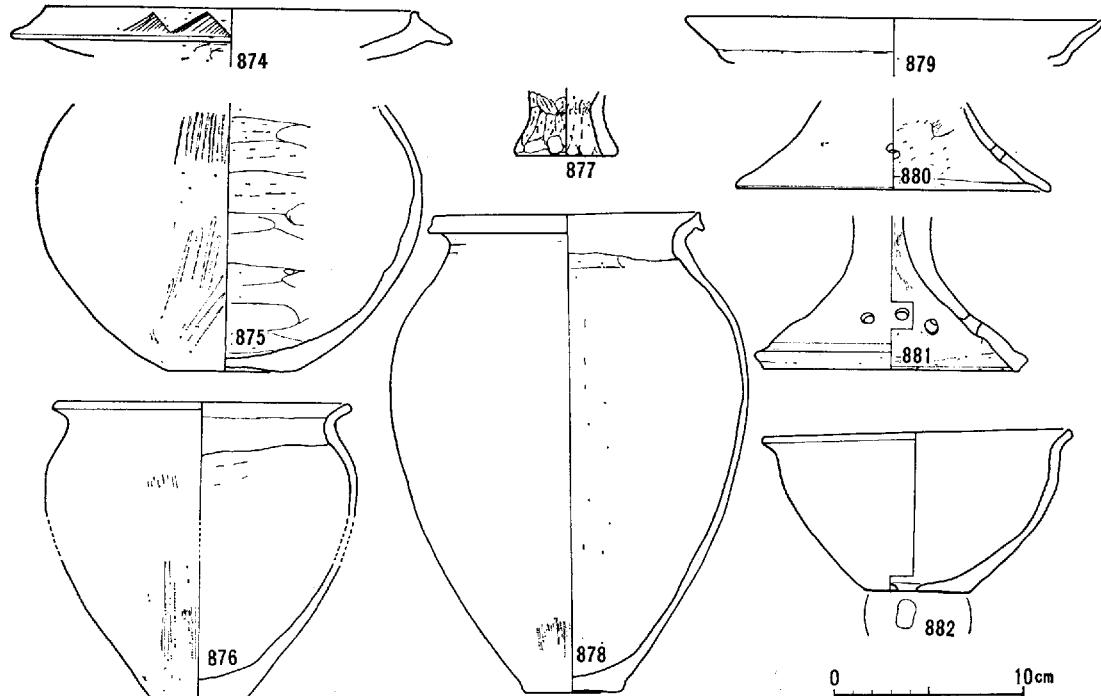
(柳瀬)

36) P—11 (J—30)

<遺構>P—12(比較的新しい時期と思われる)に土壙の一部を削られて存在する。現存長さ140cm, 幅55cm, 深さ約40cmを測る。ほぼ中央部底面に径30cm, 深さ約3cmの凹みが見られる。中央やや北寄り、底面に接してガラス玉(23)が出土している。

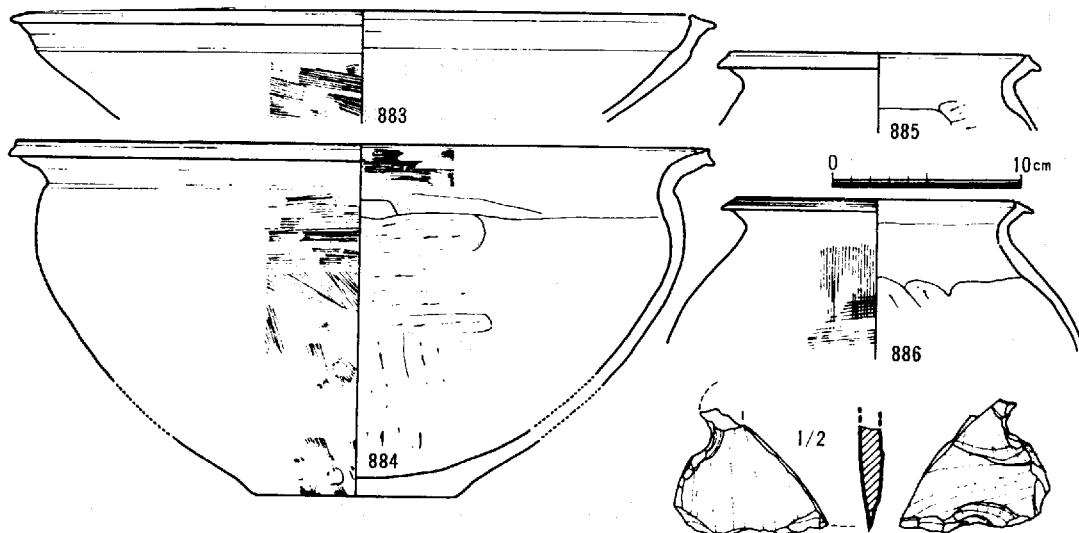
土層は5層にわかれ、第4層および第5層(灰色粘土層)中には採取不能ながら、ところどころに骨粉が見られた。土壙墓と思われる。

<遺物>甕形土器(885, 886)鉢形土器(883, 884)が出土している。すべて破片である。883については大型高杯形土器の可能性もある。いずれの土器も口縁端部は強く内傾し上下に拡張を持ち、



第99図 P—9 (J—30) 出 土 遺 物

上 東 遺 跡



第100図 P-11 (J-30) 出土遺物

16

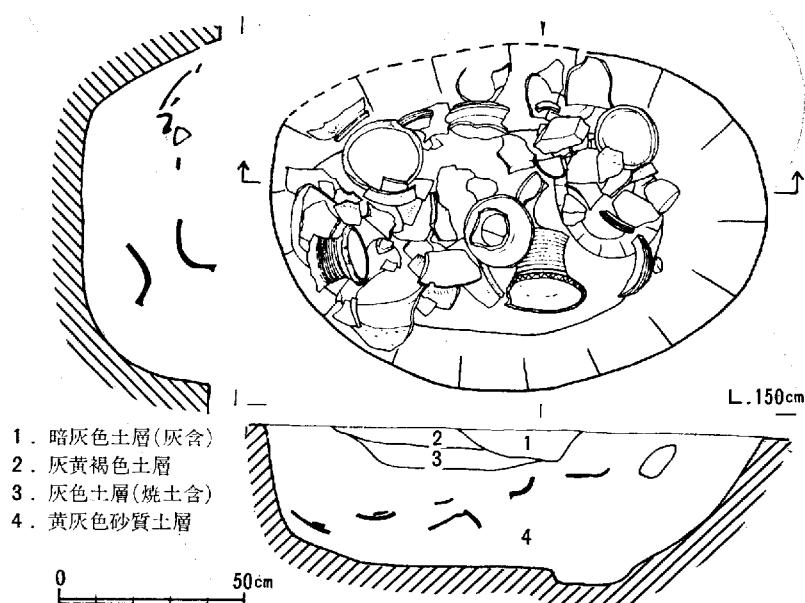
後期の古い様相を示す。形態的にはP-1イ(才の町)に先行しD-2土器溜りJ-30, P-10出土の土器類と併行すると思われる。
(柳瀬)

37) P-10 (J-30)

<遺構>長軸130cm, 短軸100cmの楕円形を呈し, 深さ約20cmを測る。土層は4層にわかれ, 土器は第4層に集中してみられる。土器は角礫10数個とともにぎっしりとつまつた状態で約50個体出土している。その中で完形近くに復原できるものは, 3個体のみであった。また底面の一部には径約20cm, 深さ5cmの落ち込みが見られる。

<遺物>壺形土器,
甕形土器, 高杯形土器,
鉢形土器が出土しており,
これらの出土状態
から一括資料として取
り扱うことができる。

壺形土器 (887~893,
903, 904) 887~893は
いわゆる長頸壺であ
る。いずれも口縁端部
は鋭く内傾し, 上下に
拡張する。しかし頸部
の反度はそれぞれ違,
889が胴部に向ってゆ
るやかに「ハ」字状に



第101図 P-10 (J-30) 平面及び断面図 (縮尺1/20)

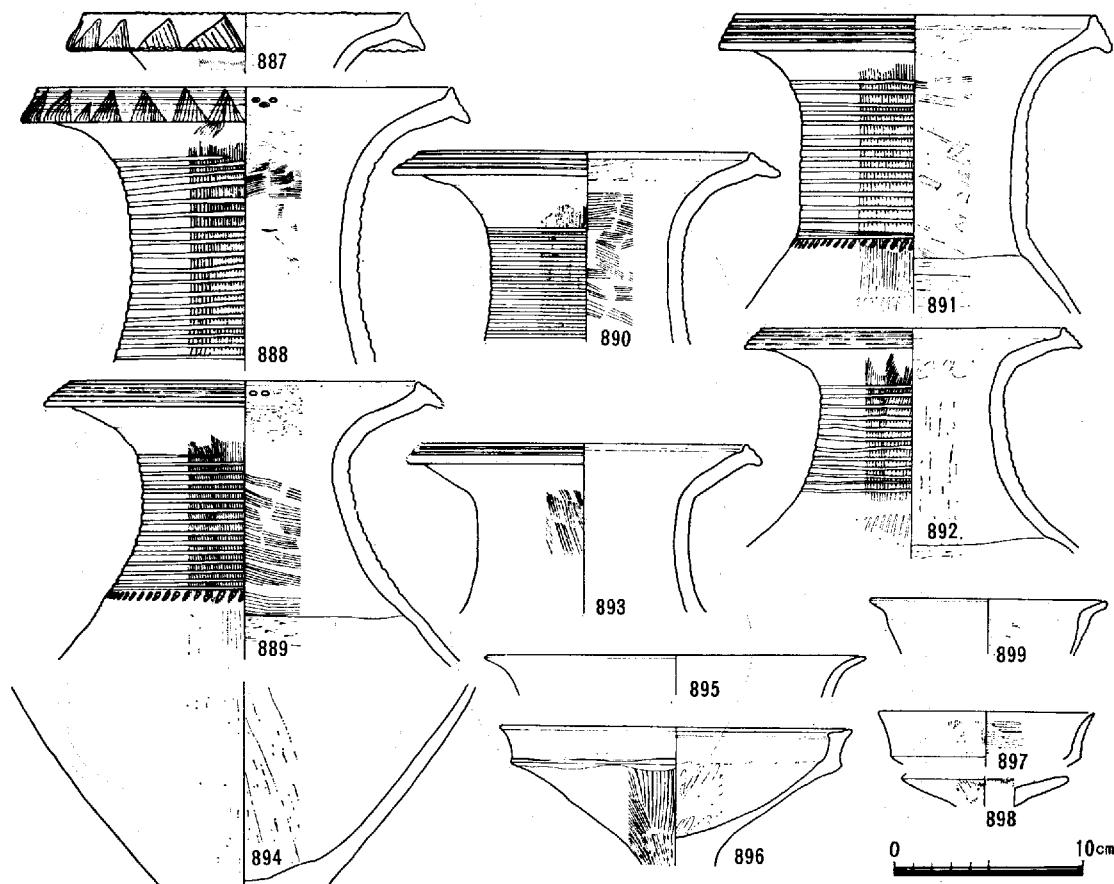
上 東 遺 跡

裾広がり状を呈すのに対し、891はほぼ垂直に立ち上がっている。888, 890, 893, 892はその中間的な立ち上がりを示す。887をのぞき、口縁端面には2~3条の凹線文が施され、また887, 888には、篦描きの鋸歯文が888については凹線文の上から施されている。888~892の頸部は刷毛調整の後、12~17条の沈線をめぐらす。888, 889については、レコード線状にまき上がる。沈線の下部（肩部）には多くの場合、刷毛状工具による刺突文をめぐらす。893は頸部に沈線を持たないタイプで、部分的に粗く刷毛目が残る。内面は外反部から口唇部にかけて横ナデ、頸部には粗い刷毛調整。頸胴部界から下は、篦削りがそれぞれ行われている。888, 889の口唇部近く内面には径2cmの竹管文を2~3個施す。

903, 904はかなり張りぎみの肩部から弧を描いて外反する口縁部を持ち、口縁端部は内傾し上下に拡張する。端面にはそれぞれ4条の凹線を施す。903の頸部には篦状工具による圧痕が残り、頸部下は、篦磨き調整されている。内面篦削りは、頸部直下までおよぶ。

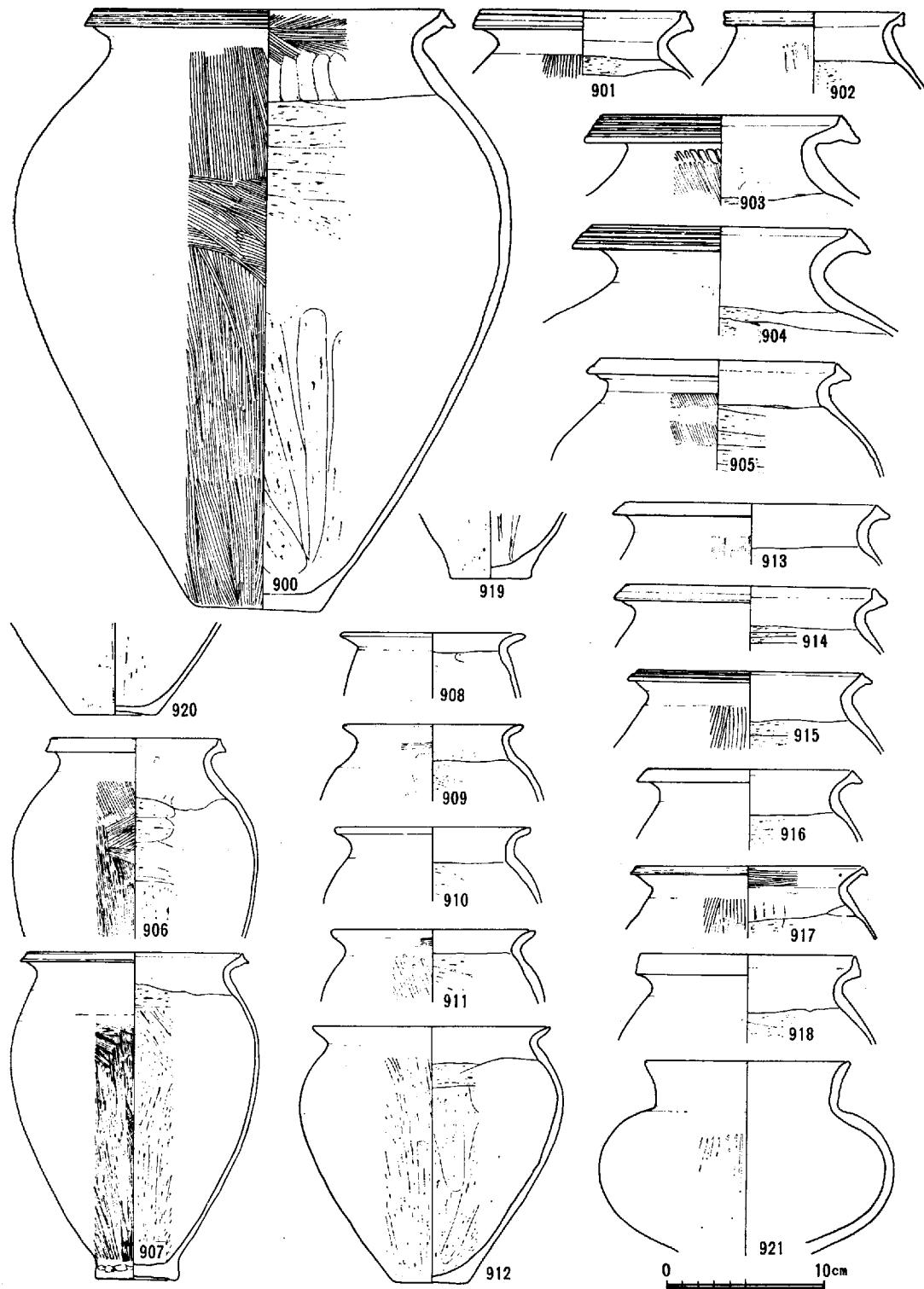
壺形土器 (900~902, 905~920) 「く」の字状にゆるやかに外反する口縁部を持ち、端部が内傾し上下に少し拡張を持つもの (900, 901, 905~907, 913~917) と拡張を持たないもの (908~912) にわかれれる。

持つものの口縁端面には、2~3条の退化凹線が残るものが多い。外面胴部は刷毛調整、内面は底



第102図 P-10 (J-30) 出土遺物 (1)

上 東 遺 跡



第103図 D-10 (J-30) 出土遺物 (2)

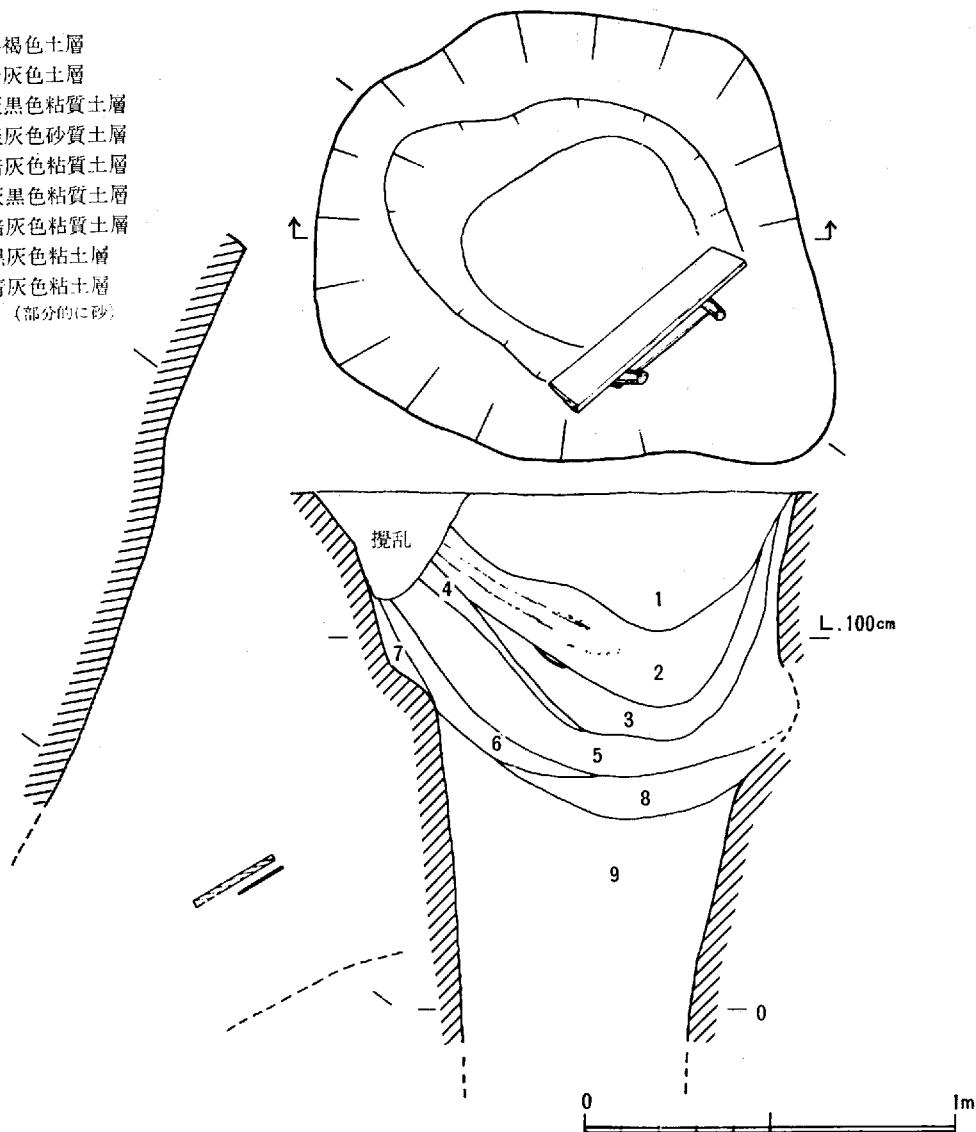
上 東 遺 跡

部から頸部直下まで、範削りが成される。胴部中央やや上部あたりまでは下から上方向の、また頸部近くでは横方向の範削りである。907は肥厚した台状の底部を有する。

持たないものの中には、外面に範磨きの見られるものもあるが、内外面ともその整形手法においては拡張を持つものと同じである。

高杯形土器 (895~898) 口縁端部が肥厚するもの (896) と、外反し端部が肥厚しないもの (895, 897, 898) が共存する。897と898は同一器体と思われる。脚部と杯部と同時に造り上げ、中央の穴に円盤をうめ込んだと思われる896とその手法よりは後出的な脚部と杯部を別に造り、脚部に杯部をうめ込む方法のもの (898) がある。胎土は特に精選されたものは見られず、壺形土器、甕形土器と大差はない。焼成は非常に良い。

- 1. 茶褐色土層
- 2. 暗灰色土層
- 3. 灰黒色粘質土層
- 4. 淡灰色砂質土層
- 5. 暗灰色粘質土層
- 6. 灰黒色粘質土層
- 7. 暗灰色粘質土層
- 8. 黑灰色粘土層
- 9. 青灰色粘土層
(部分的に砂)



第104図 井戸一II (J-30) 平面・断面図 (縮尺1/20)

鉢形土器（899）899が1点のみである。多少表面が荒れている。胎土は高杯形土器と同様である。

台付壺形土器（921）横に長い球形の胴部からゆるやかに外反して、立ち上がる口縁部を持つ。台脚部は欠損している。外面口縁部は横ナデ、胴部は箒磨きされている。内面は、口縁部が横ナデ、胴部から底部にかけては押圧整形および丁寧な箒削りが行われている。

(柳瀬)

38) 井戸一Ⅱ (J-30)

<遺構>径約130cmの円形に近い不整形を呈し、下部では径約60cmの円形を呈す。底は出水のため深さ約150cmまでしか確認できなかった。第2層には1~2cmの厚さの炭・灰層および焼土小塊が見られる。全体的に西寄りに落ち込む形で堆積している。第3層中には土器片と刀子状の鉄器（3）が出土している。第2~8層にはほとんど粘質土で炭・灰の多く見られる灰は黒ぼく少ないとと思われる層は灰色に近く見え、それらの互層堆積を示す。9層下部には西隅に長さ65cm、幅25cm、厚さ3cmの板材および杭2本で組まれた施設を検出した。約30cm幅に打ち込んだ2本の杭を両脇からはさむように板材を取り付けている。また土層堆積が西寄りに落ち込んだ状態を示すのは、西隅の絶対高100cm前後のあたりが袋状になっているためで、袋状部分には灰色粘土がつまっていた。このことから、下部の施設は、この土壌が完成する途中またはすぐ後に西隅が崩壊し、その補修のためのものと思われる。この土壌は井戸と思われる。

<遺物>上器類は第1~8層の中に多く見られその約半数を鉢形土器がしめる。第9層中からは、甕形土器片、桃の種36個（うち半片5個）不明種1個、井戸板材（2枚）、杭材（2本）等が出土している。

壺形土器（922、923）は2片のみで、922は直口壺、923は口縁端部がやや内傾し、上下に強く拡張するものである。

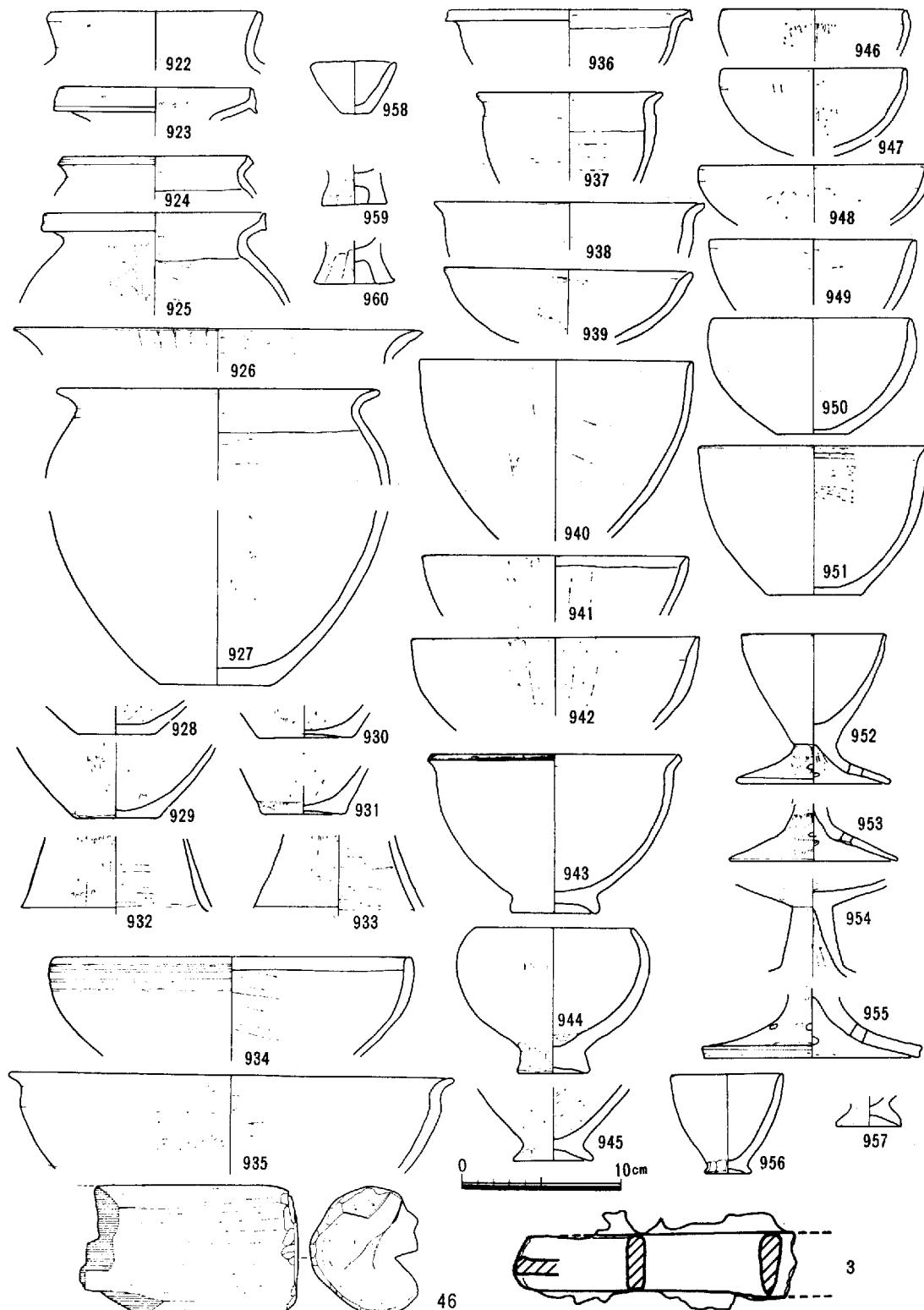
甕形土器（924、925、927~931）口縁端部を上方に少し張り出させたもの（924、925）と胴部からゆるやかに外反し、端部に肥厚も拡張も持たないもの（927）がある。

高杯形土器—953、955もその脚部と思われるが、952の例もあり、不明である。926は口縁部のみで、外反している。954は比較的長い脚柱を持つ。胎土に長石・石英粒を含むが、かなり精選されており焼成もよい。

直口壺形土器（932、933）どちらも破片である。外面は細かく縦方向の箒磨き調整、内面は比較的丁寧な箒削りが行なわれている。井戸I出土のこの種土器に類似すると思われる。

鉢形土器（934~952、956）は、明らかに台脚のつくもの943~945、952、956とつかないもの950、951に別れるが、多くはつかないものの中に入ると思われる。935、937~939、943は口縁部がわずかに外反し、936、943は端部上下に拡張を、または端面を持つ。943の端面には、不明瞭ではあるが、2条の退化凹線が残る。944はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部を成す。ぼってりとした雑な造りである。952は、いわゆる高杯形土器に見られる台脚部を有し、台脚部だけでは区別できない。全体的に丁寧な造りであり、胎土、焼成とも高杯形土器と同様である。全般にわたって調整は口縁部近くは内外面とも横ナデ、外面腹部は簡単な箒磨き、内面は箒削りのものが多い。

上 東 遺 跡



第105図 井戸一Ⅱ (J-30) 出土遺物 (鉄器は実物大)

上 東 遺 跡

その他の土器—958は手捏である。959, 960は製塙土器台脚部で小ぶりでJ—20の製塙炉出土のこの種土器に類似する。

木器（46）きぬたと思われ、基部中央から柄にかけて欠損する。端部は加工痕が顕著に残る。

鉄器（3）—現存長、4.5cm、幅0.9cmを測る。

この井戸出土の土器の中で、その半数近くを鉢形土器がしめるが、何か意図的なことも感じさせる。また土層の堆積状態および遺物の包含状態から比較的短期間に埋まったと考えられ、鉄器、木器をも含めて、一括資料として上げることができると思われる。

出土土器の形態からいえば、特に甕形土器の口縁部の特徴から井戸I（J—15）に先行し、P—イ（才の町）に類似する。
（柳瀬、伊藤）

註—(9) 『下山門遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書」、第23集、1973年、71頁にみられる28の木器に類似している。

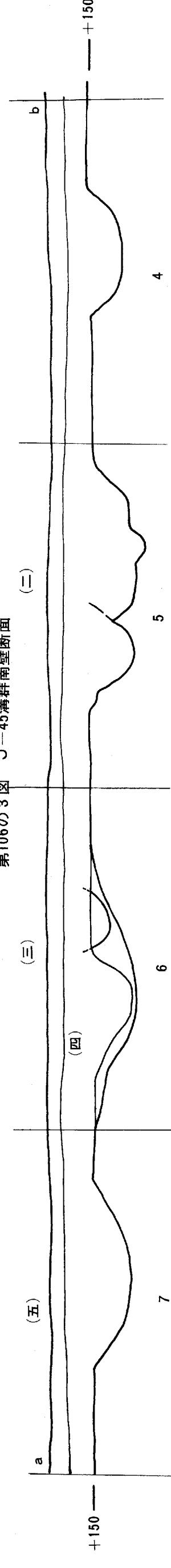
⑩ 坪井 清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 1956

⑪ 間壁 忠彦『岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡』「倉敷考古館研究集報」 第2集 1966年

⑫ 近藤 義郎『師巣式遺跡における塙生産の立証』「歴史学研究」133号 1958年

また、現地においても諸々の御教示を得た。

第106の3図 J-45溝群南壁断面

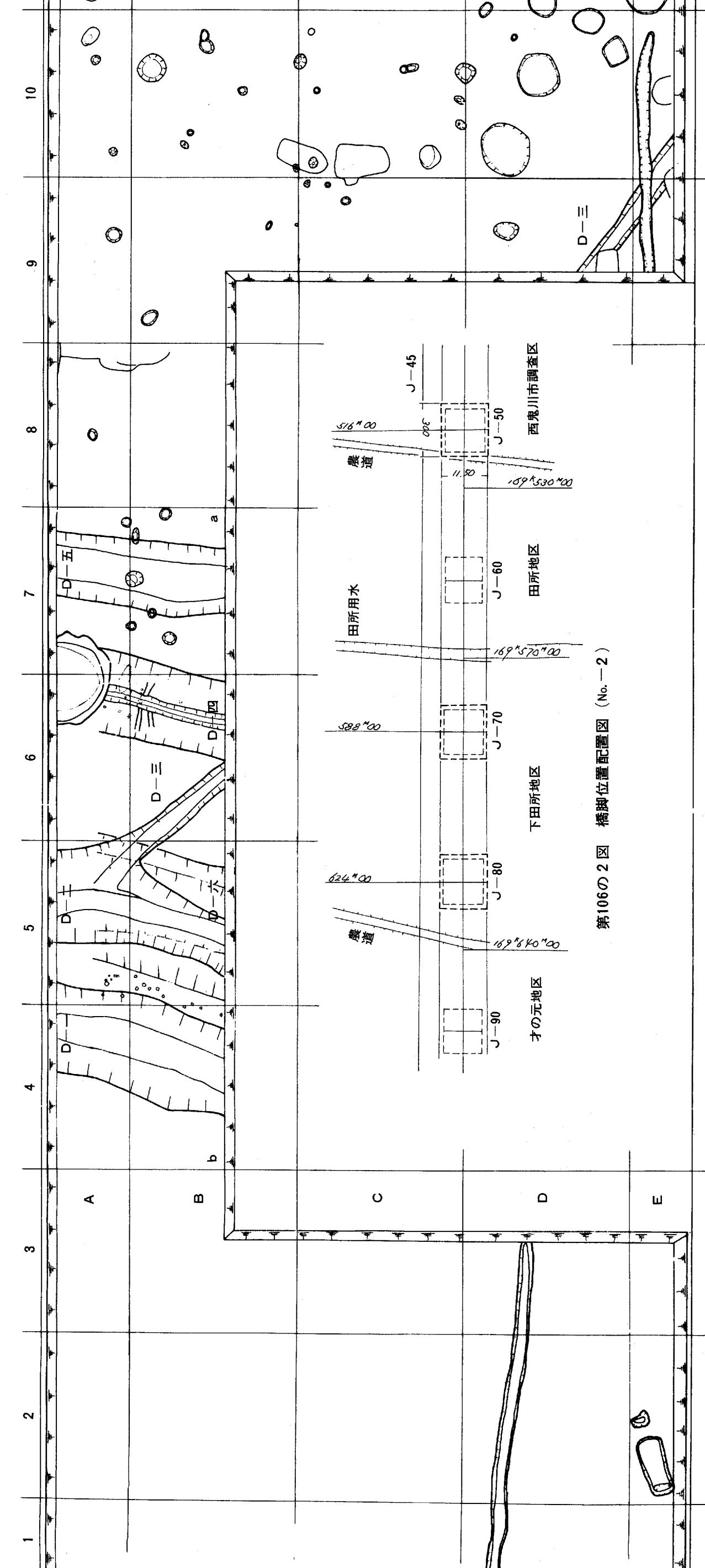
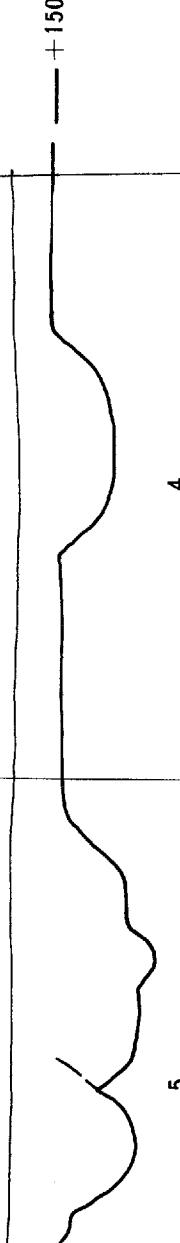


(三)

(四)

(五)

(二)



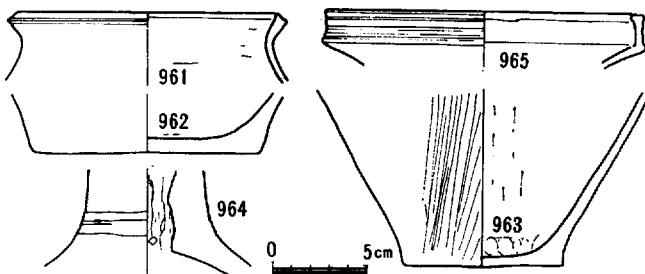
第106の2図 橋脚位置配置図 (No. 2)

第106図 西鬼川市調査区遺構配置図 (縮尺 1/100)

上 東 遺 跡

39) D— (J—45)

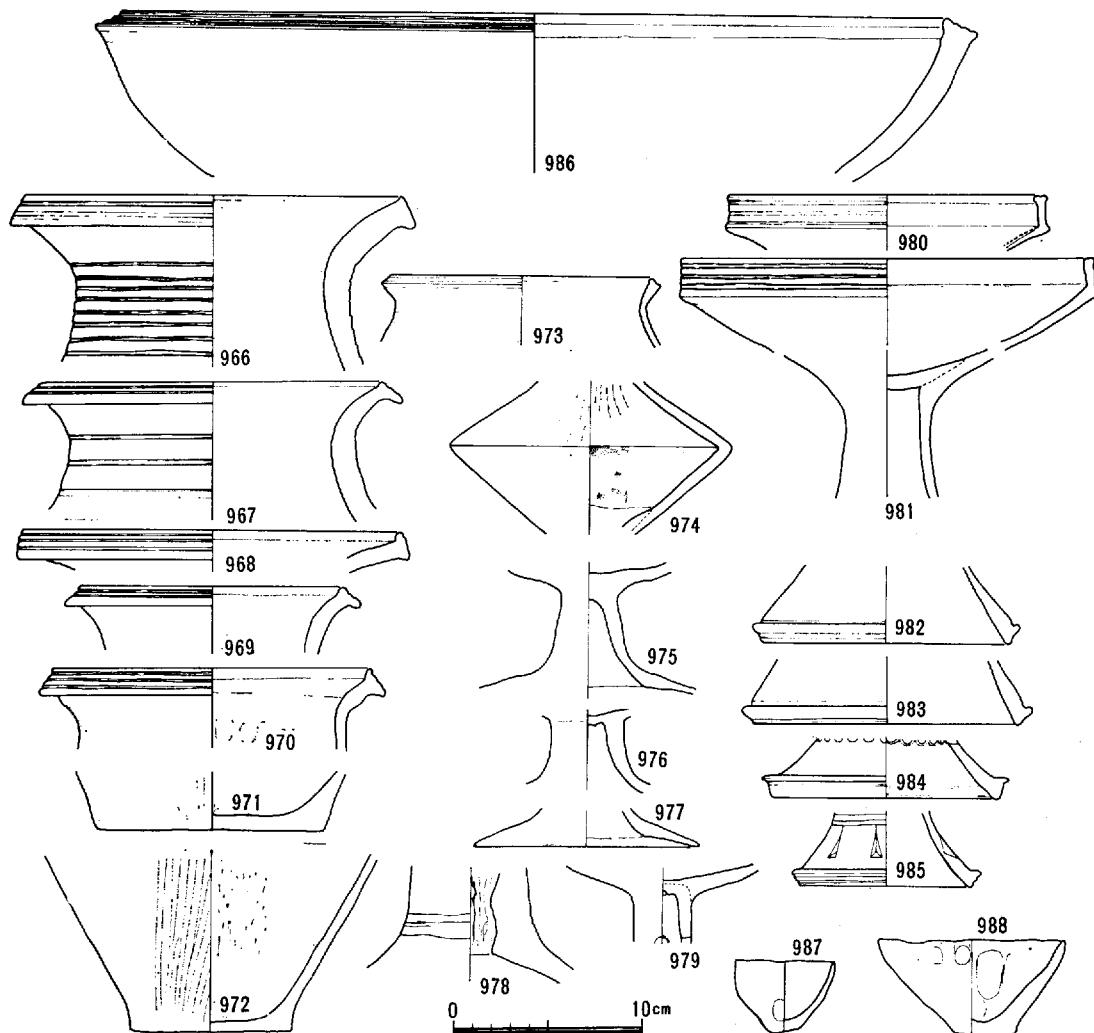
G—4—AからG—4—Bに、北東から南西に伸びる溝である。現存の幅は、200~250cm、現存の深さは、40~45cmである。東が+159cm、西が+152mの所から切り込んでいる。弥生時代中期末の土器片が出土している。



第107図 D— (J—45) 出土遺物

40) D— (J—45)

G—5—AからG—5—Bに、北東から南西に伸びる溝である。現存の幅200~250cm、現存の深さ30~40cmである。東が+164cm、西が+170cmの所から切り込んでいる。溝内の層位は、上から褐色粘

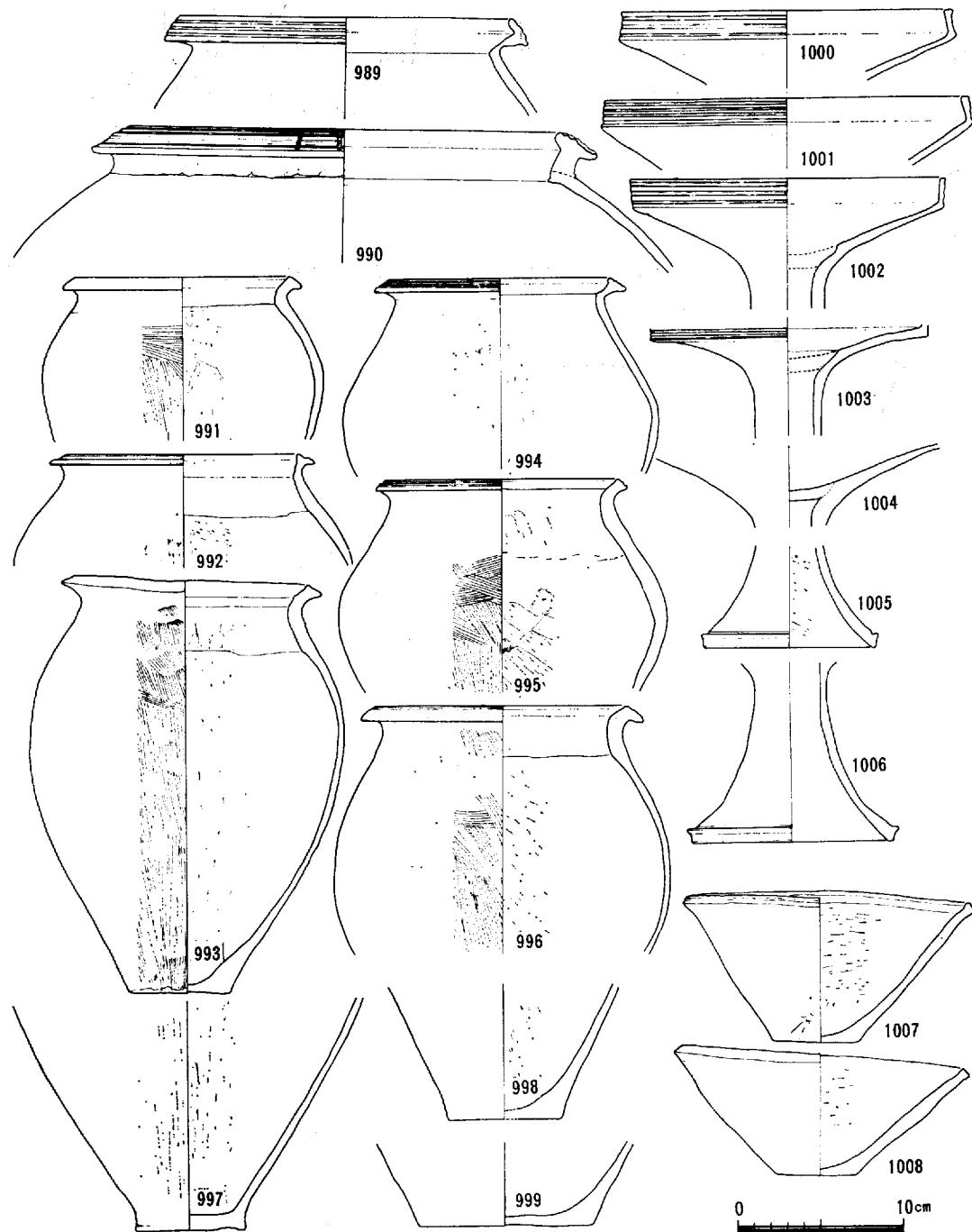


第108図 D— (J—45) 出土遺物

上 東 遺 跡

質層（1層），黑色粘質層（2層）に分けられる。2層中には，弥生時代中期末の高杯形土器，その他の土器が出土した。

壺形土器，甕形土器



第109図 D一四 (J-45) 出 土 遺 物

上 東 遺 跡

41) D—三 (J—45)

G—5—AからG—6—Bに、北から南東に伸びる溝である。現在の幅50～60cm、現存の深さ約15cmである。G—5—Aで溝二と合流する。この延長部分と思われるものが、第1橋脚の南西端につづいている。遺物は、溝二と同時期の土器片が出土している。また、分岐点に石灰岩製の砥石も出土している。

42) D—四 (J—45)

G—6—AからG—6—Bに、北東から南西に伸びる溝である。溝三により一部削られている。現存の幅約200cm、現存の深さ約35cmである。黒色粘質土がはいっており、弥生時代中期末の壺形土器、甕形土器、高杯形土器、その他の土器片、および砥石が出土している。

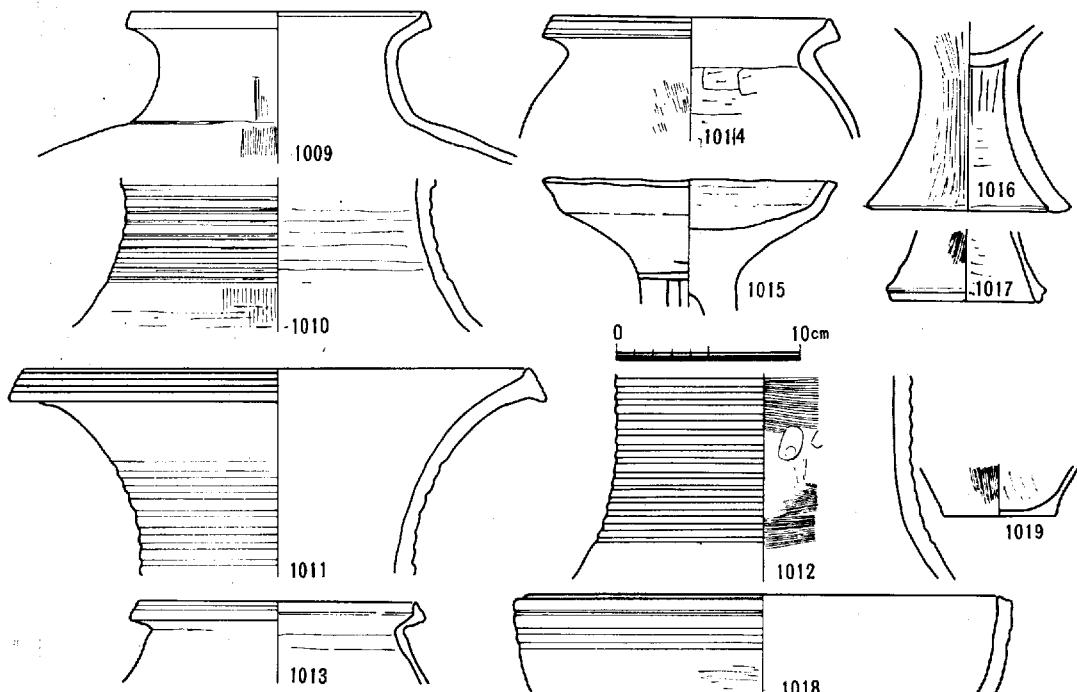
また、溝肩部に杭痕数本が検出された。

43) D—五 (J—45)

G—7—AからG—7—Bに、ほぼ南北方向に伸びる溝である。現存の幅は、約160cmである。現存の深さは、約30cmでこのうち中央部の落ち込みが10cmである。黒色粘質土がはいっており、弥生時代中期末の高杯形土器、その他の土器片、および砥石が出土している。溝は2段になっており、さらに幅90cmがおちこんでいる。

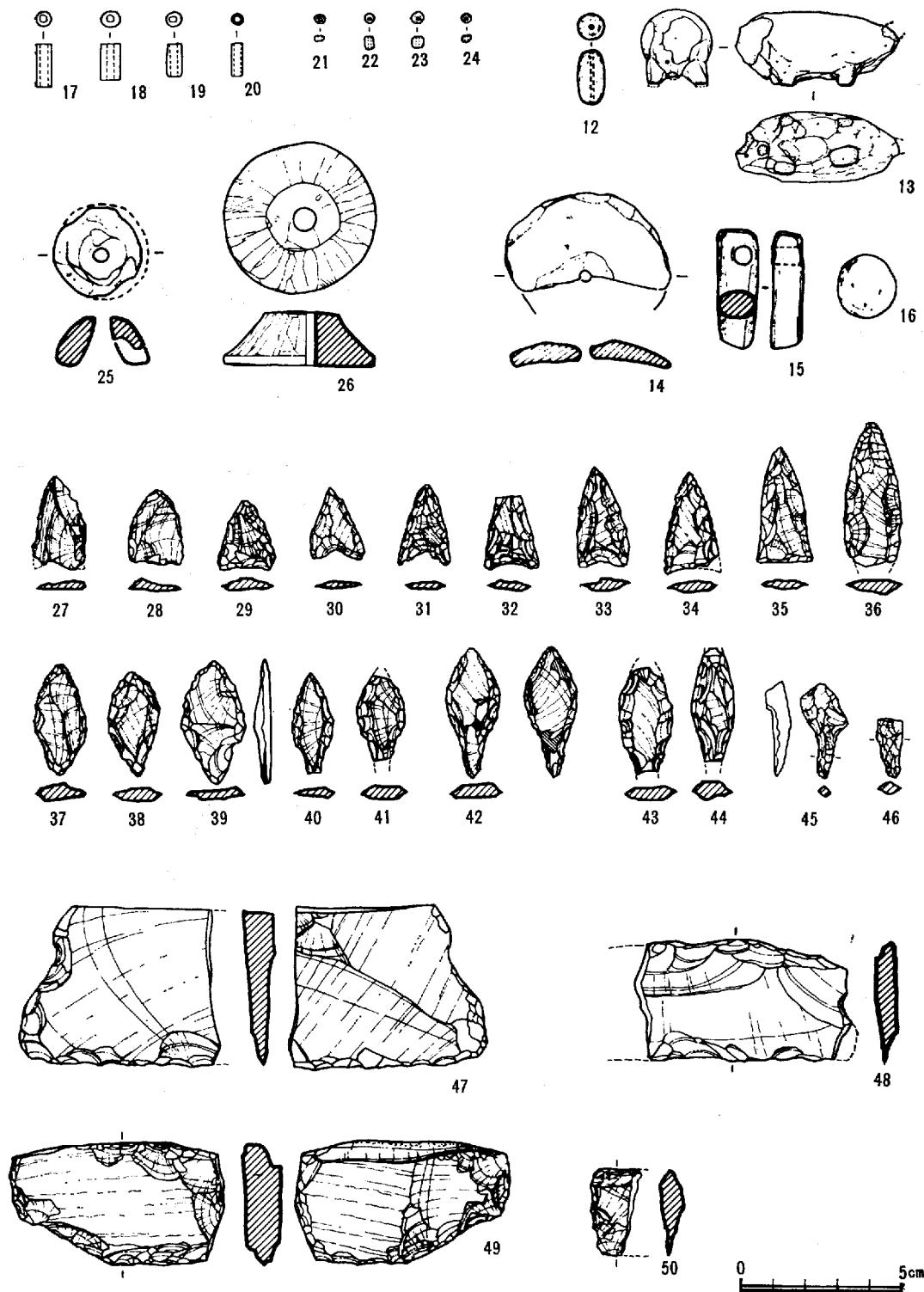
44) D—六 (J—45)

溝2および溝3の下層に位置し、現存幅約300cm、現存深さ約70cmで、弥生中期末に属する。
(池畠、伊藤)



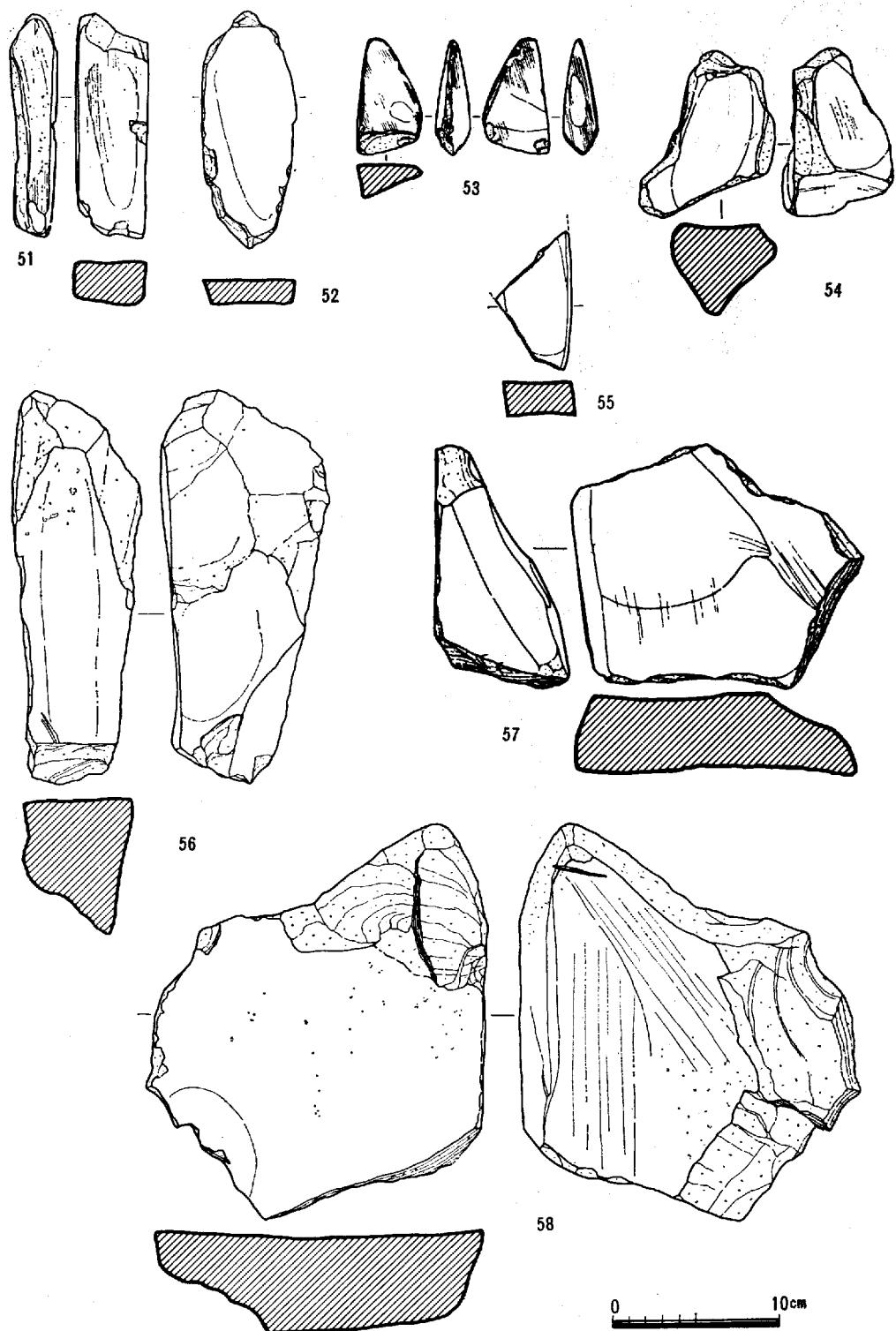
第110図 D—五 (1009~1014), D—六 (1015~1018) (J—45) 出土遺物

上 東 遺 跡



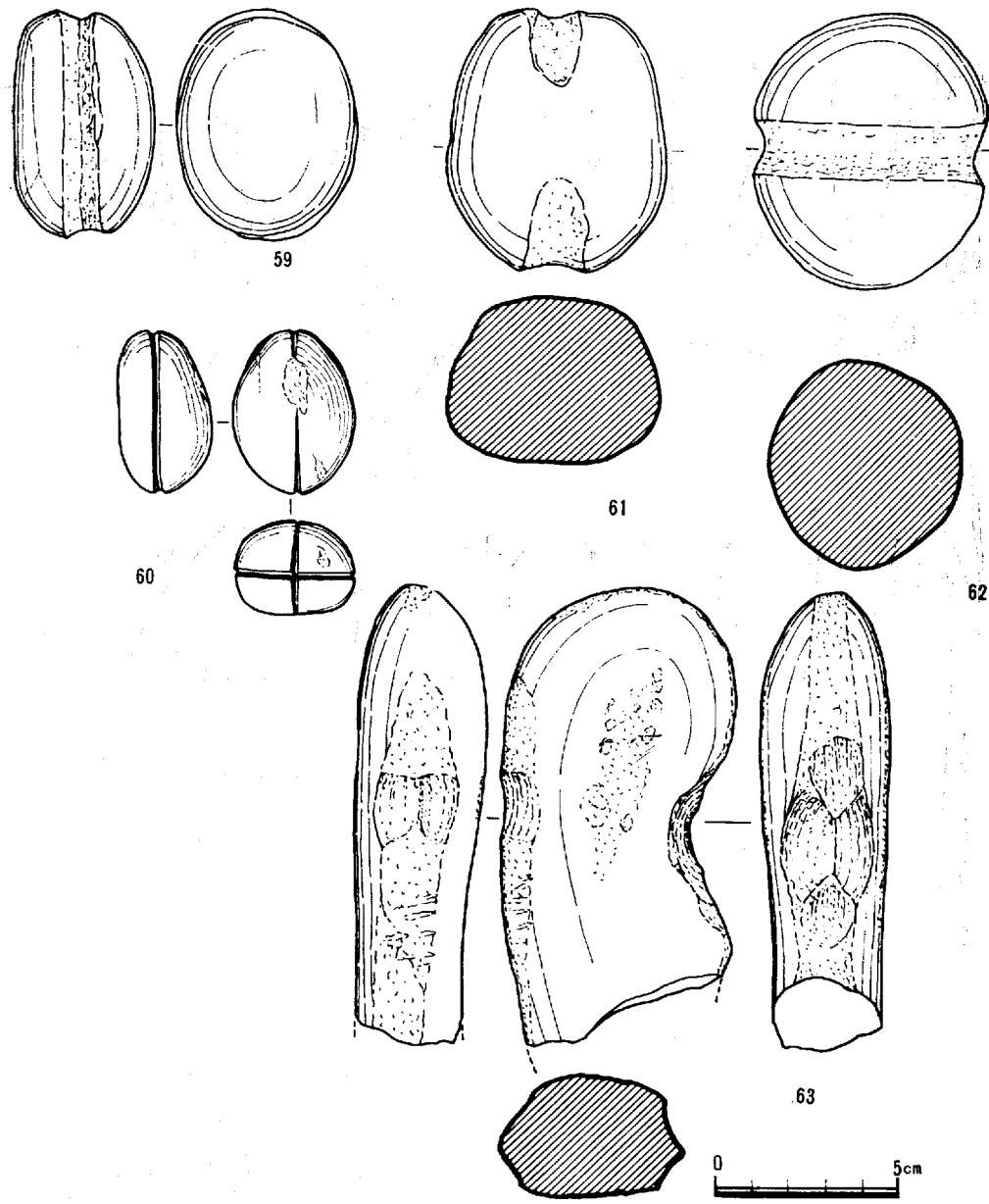
第111図 鬼川市微高地各地点出土石器類他

上 東 遺 跡



第112図 鬼川市微高地各地点出土砥石他

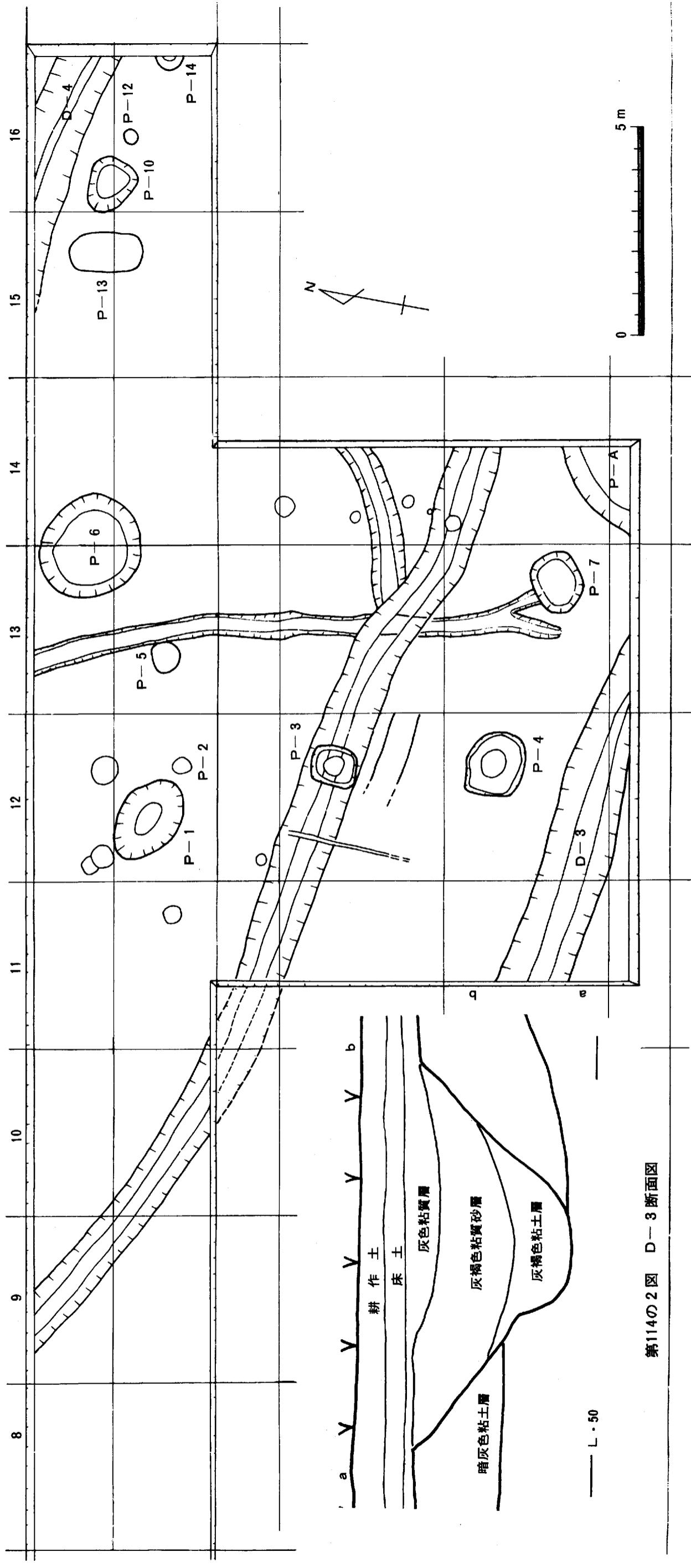
上 東 遺 跡



第113図 鬼川市微高地各地点出土石錐他

土製品一覧表

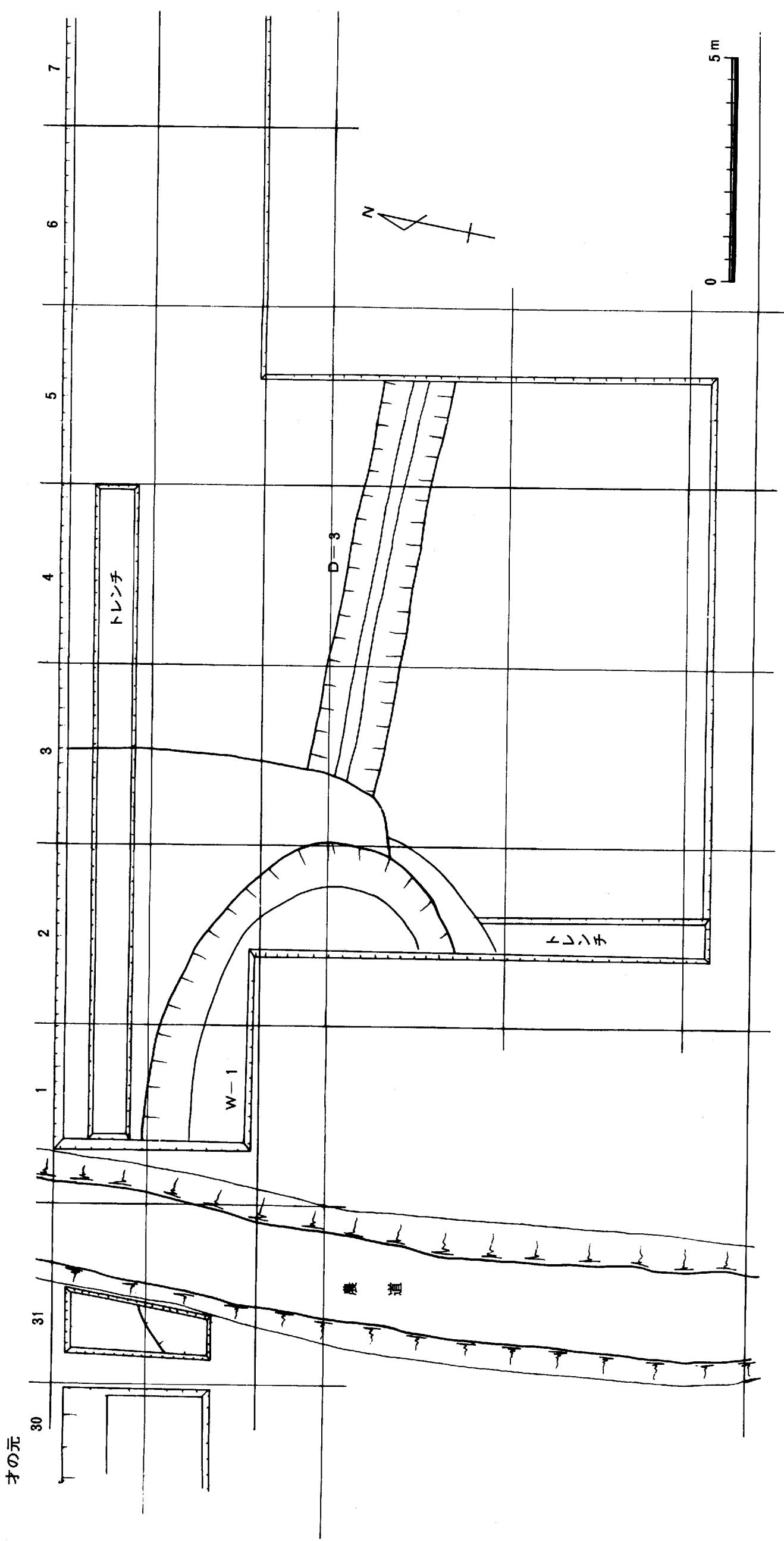
番号	遺物名	出土地點	質・特徴	番号	遺物名	出土地點	質・特徴
1	紡錘車	P-ハ (才の町)	土器片利用	9	勾玉	H-8 (J-20)	
2	{分銅形土製品	(亀川)	[側面周囲に刺突文]	10	紡錘車	ク	土器片利用
3	ク	(ク)	ク	11	土錐	G-7-B (J-25)	
4	紡錘車	(ク)	土器片利用	12	土玉	(J-20)	穴有
5	不明土製品	(ク)	表面に竜描文	13	{イノシシ型土製品	P-111 (J-10)	一部欠損
6	投弾?	(ク)		14	紡錘車	P-53 (J-20)	土器片利用
7	手握壺	H-3 (J-10)	四方に穿穴	15	土錐	(ク)	棒形
8	土玉	H-8 (J-20)		16	玉	P-58? (ク)	穴なし



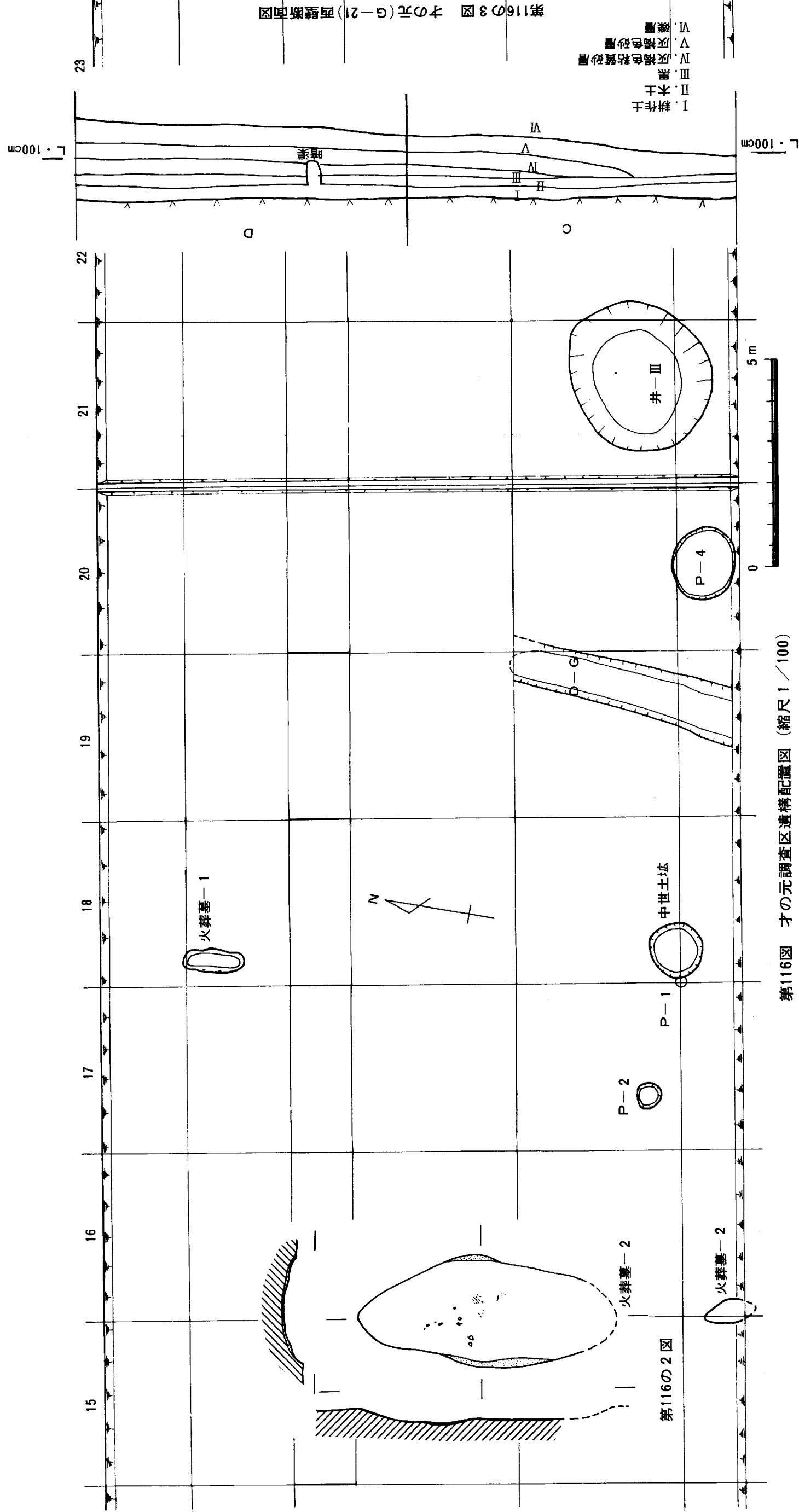
第114図 下田所第1橋脚(J-70)位置遺構配置図 (縮尺1/100)

第114の2図 D-3断面図

第115図 下田所第2橋脚(J-80) 造構配量図 (縮尺1/100)



第116の3図 才の元(G-21)西壁断面図



第116の2図

第116図 才の元調査区遺構配置図 (縮尺1/100)

第4節 田所調査区及び下田所微高地上の 遺構、遺物概略

田所地区は西鬼川市からつづく微高地西端にあたり、微砂層が西に下っていっている。田所橋脚位置（J—60）は安定した粘土層がつづき近世以降の掘りこみ状の遺構しか見られなかった。

下田所地になると田所用水を境にして田所地区とは全く異った様子を呈している。耕土直下に弥生時代、鎌倉、室町時代及び江戸時代までの各遺構が存在している。第1橋脚位置（J—70）からは、弥生時代の土壤、古墳時代と思われる溝1、室町時代と思われる溝3本と第2橋脚位置（J—80）からは、第1橋脚につづく溝の他に江戸時代と思われる池状遺構2を確認した。この地区と才の元地区の微高地は新幹線敷内ではつながらず、別の微高地と考えられるのが、南方（上東部落内）では一致する可能性もある。

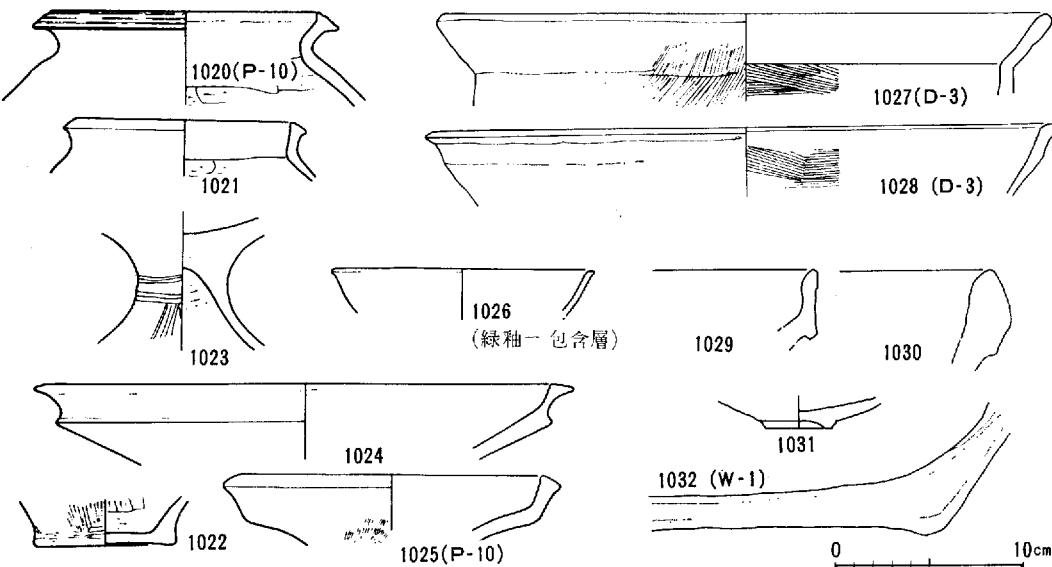
土壤は弥生時代中期の土器（1022～1025）を出土するもの（P—10）から須恵器を出土するもの、鎌倉～室町時代の遺物を含むものまで含まれている。包囲層から綠釉片（1026）も一点出土している。

溝は南北に走る古墳時代の遺物を出すもの（P—1）北西から南東方向に併行して走る溝（D—2, 3, 4）を検出した。

- 1) D—1, 幅50cm, ほぼ南北に走るが軌道敷南端で二又に分かれ消水する。
- 2) D—4, 側道敷部分でわずかにかかっている。幅140cmで北西から南東方向に走っている。
- 3) D—2, 幅130cm, 深さ80cmをはかる。D—4とほぼ5m離れて併行している。
- 4) D—3, 幅150cm, 深さ90cmをはかり, D—2, 4と同方向に併行している。この溝は第2橋脚位置につづいていっている。

これらの溝内からは、鎌倉～室町時代前後の遺物が出土している。

これらの他に第2橋脚位置からは、江戸時代と思われる備前焼の破片（1029～1032）を含む池状遺構（W—1）を部分的に検出した。これは亀川調査区で検出したものと同じようなものである。（伊藤）



第117図 下田所各遺構出土遺物

上 東 遺 跡

上東遺跡各微高地出土

石器・石製品一覧表

番号	遺物名	出 土 地 点	質・特 微	番号	遺物名	出 土 地 点	質・特 微
1	石 錘	溝 A (才の町)	花 岗 岩	35	石 錘	(J-15)	サヌカイト
2	砥 石	P-1イ(タ)	砂 岩	36	々	?	々
3	石 錘	タ	閃 縁 岩	37	々	?	々
4	石 錘	(亀 川)	サヌカイト	38	々	H-8 (J-20)	々
5	々	タ	々	39	々	(J-20)	々
6	石 錘	タ	花 岩 岩	40	々	H-3 覆 土	々
7	々	G-4-B タ	々	41	々	H-2 タ	々
8	々	タ タ	輝 縁 岩	42	々	H-4 (J-10)	々
9	たたき石?	G-4-D タ	砂 岩	43	々	P-1 (J-10)	々
10	砥 石	G-4-B タ	泥 岩	44	々	H-8 (J-20)	々
11	石 廬 丁	P-151 (J-10)	サヌカイト	45	石 錐	P-197 (J-10)	々
12	石 浮?	H-8 (J-20)	か る 石 ?	46	々	H-3 覆 土	々
13	石 錘	P-106 (J-20)	サヌカイト, 有茎	47	石 廬 丁	(J-40)	々
14	石 斧?	G-6-E (J-25)	貞 岩	48	々	G-19-C (J-10)	々
15	石 廬 丁	D-3 (タ)	サヌカイト	49	不定形石器	G-19-B (J-10)	々
16	々	P-11 (J-30)	々	50	々	G-6-A (J-25)	々
17	管 玉	P-15 (J-10)	か る 石 ?	51	砥 石	P-93 (J-20)	珪 岩
18	々	G-13-A (J-20)	タ ?	52	々	G-21-A (J-10)	貞 岩
19	々	G-19-B (J-15)	碧 玉 ?	53	々	H-8 (J-20)	?
20	々	P-68 (J-20)	々	54	々	G-O (才の元)	石 英 斑 岩
21	ガラス玉	井-1 (J-15)	ガラス 青	55	々	G-19-D (J-10)	砂 岩
22	々	P-106 (J-20)	々	56	々	H-2 (J-10)	流 紋 岩 焼け て い る
23	々	P-11 (J-30)	々	57	々	H-7 (J-20)	石 英 斑 岩
24	々	P-106 (J-20)	々	58	々	々	流 紋 岩
25	紡錘車	(J-10)	?	59	石 錘	P-144 (J-10)	花 岩 岩 質
26	々	(才の元)	蛇 織 岩	60	々	P-58 (J-20)	花 岩 岩
27	石 錘	H-8 覆 土	サヌカイト	61	々	(J-25)	々
28	々	G-9-B (J-20)	々	62	々	P-13 (J-10)	々
29	々	G-9-D (タ)	々	63	たたき石	(J-45)	花 岩 岩
30	々	(J-25)	々	64	石 廬 丁	井戸-III (才の元)	サヌカイト
31	々	(J-20)	々	65	石 白	P-5 (タ)	(中世~)
32	々	?	々				
33	々	(J-40)	々				
34	々	G-18-B (J-10)	々				

第5節 才 の 元 調 査 区

東鬼川市地区からこの才の元地区までが橋脚保存処置がとられ、才の元東端の橋脚位置以西は全面調査の方針で進めた。この地区での主な遺構は、弥生時代後期前半の井戸状遺構（井戸一Ⅲ），土壙2，弥生時代～古墳時代の溝4，鎌倉時代～室町時代の溝1，近世の火葬墓2，その他の土壙群を確認した。この微高地の中心地は、現在の上東部落がのっており、調査を行った地点はその北端にあたっている。新幹線センター付近で遺構の基盤層である砂利層が北に下っていく。西へも急ではないが下っていっている。溝Cはその西端部あたり南北に走っている。流れは北に向くのかも知れない。

1) 井戸一Ⅲ（才の元）

直径170～180cmの円形をなし、深さ約60cmを測る。深さ20～30cmの所からすり鉢状に上にひらき、下へ30cm程垂直に下る。底面は砂利～礫である。出土遺物は壺形土器（1034～1038, 1040）甕形土器（1033, 1039, 1048），高杯形土器（1041～1047）などの他に石器（64），木器（47）が出土している。時期は後期前半に含まれるもののがほとんどであるが、形態的にはP-10（J-30）と同時期かあるいはわずかに古い様相を呈しており、中に数点中期的な様相をもっているものが見られる。今までの井戸と比べ非常に浅いが、井戸と考えられる。

2) P-1（才の元）

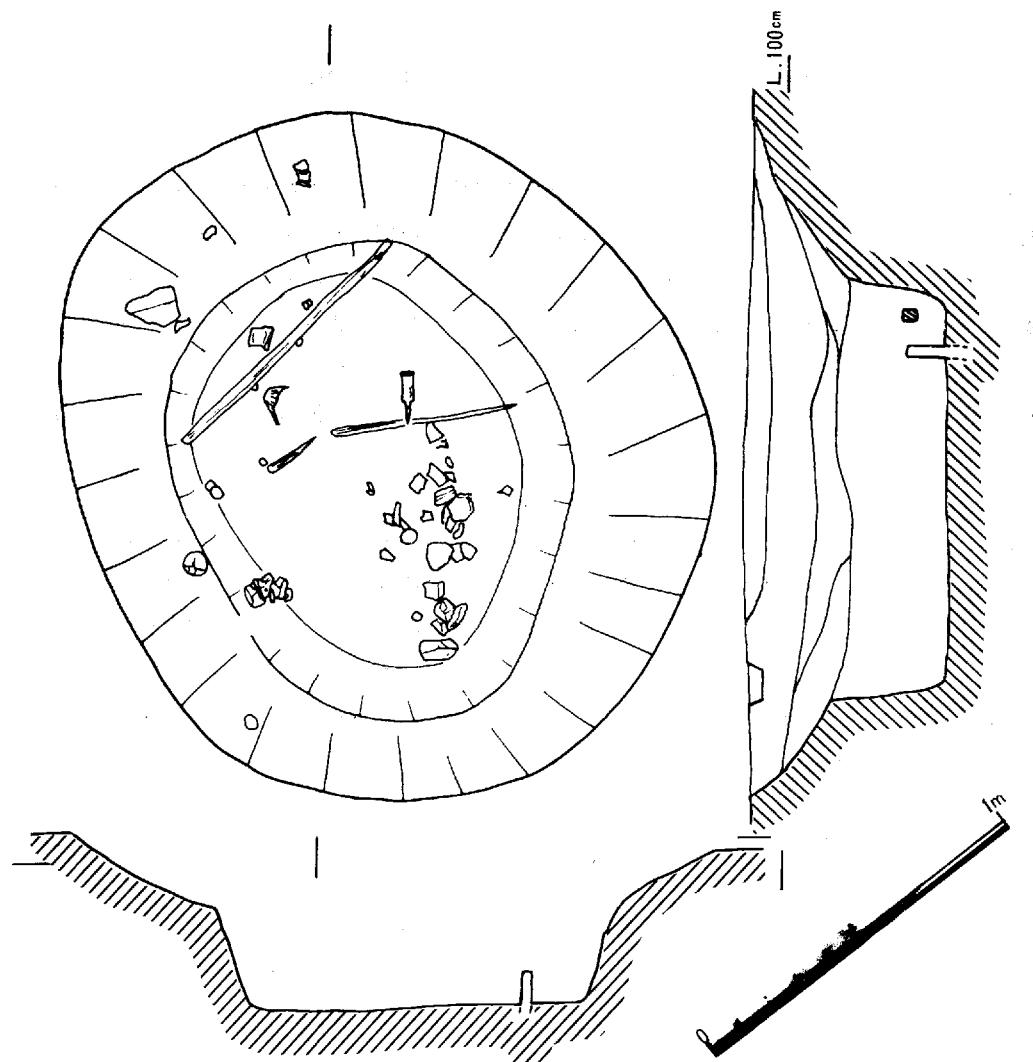
<遺構>径30cmの小さなものであるが、中世のP-5により一部が削られている。内部から土器がかなり出土している。底は湧水、壁面のくずれなどで確認できていない。

<遺物>壺形土器は、1055のみで頸部をわずかに残し、「く」の字に開き肥厚した口縁を持ち端部を丸くおさめている。表面剥離がはなはだしく観察できない。

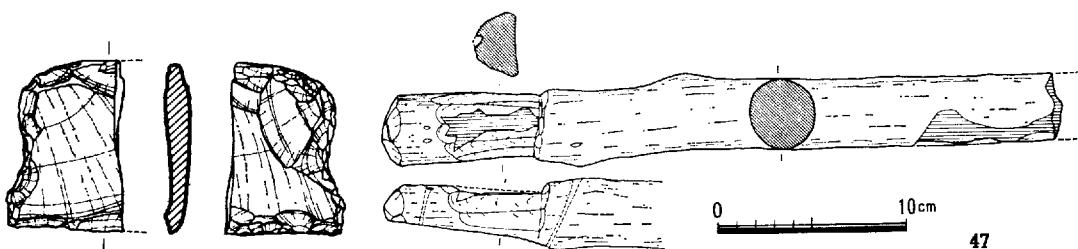
甕形土器（1056, 1057），1056は頸部から「く」の字状にのびた口縁部に上方に拡張する端部を持つ。端部には刷毛状工具による沈線を持つ。体部表面はススが付着し、上部は刷毛状工具による（口縁端部に施している沈線と同じ原体）調整を行い、下半部あるいはわずかに残る平底風の底部には範磨きを行っている。内面は継ぎ目を中心に指頭圧痕が顕著に見られ、その後に上半部頸部屈曲まで横方向に、下半部は縦方向に範削りを行っている。

1057は口縁部を丸くおさめ、端部はなで調整のみで刷毛や沈線はみられない。体部表面は刷毛、内面は横方向の範削りを行っている。

高杯形土器（1058～1062），1058は上方に拡張する口縁部を持つ。1059は椀状の杯部に短い脚柱部から急に広がる脚部を持ち、4孔をうがっている。全体に丁寧に範で磨いている。6は杯部が外側に強く張り出す口縁部を持つ。



第118図 才の元調査区 井一Ⅲ 平面および断面図（縮尺1/20）



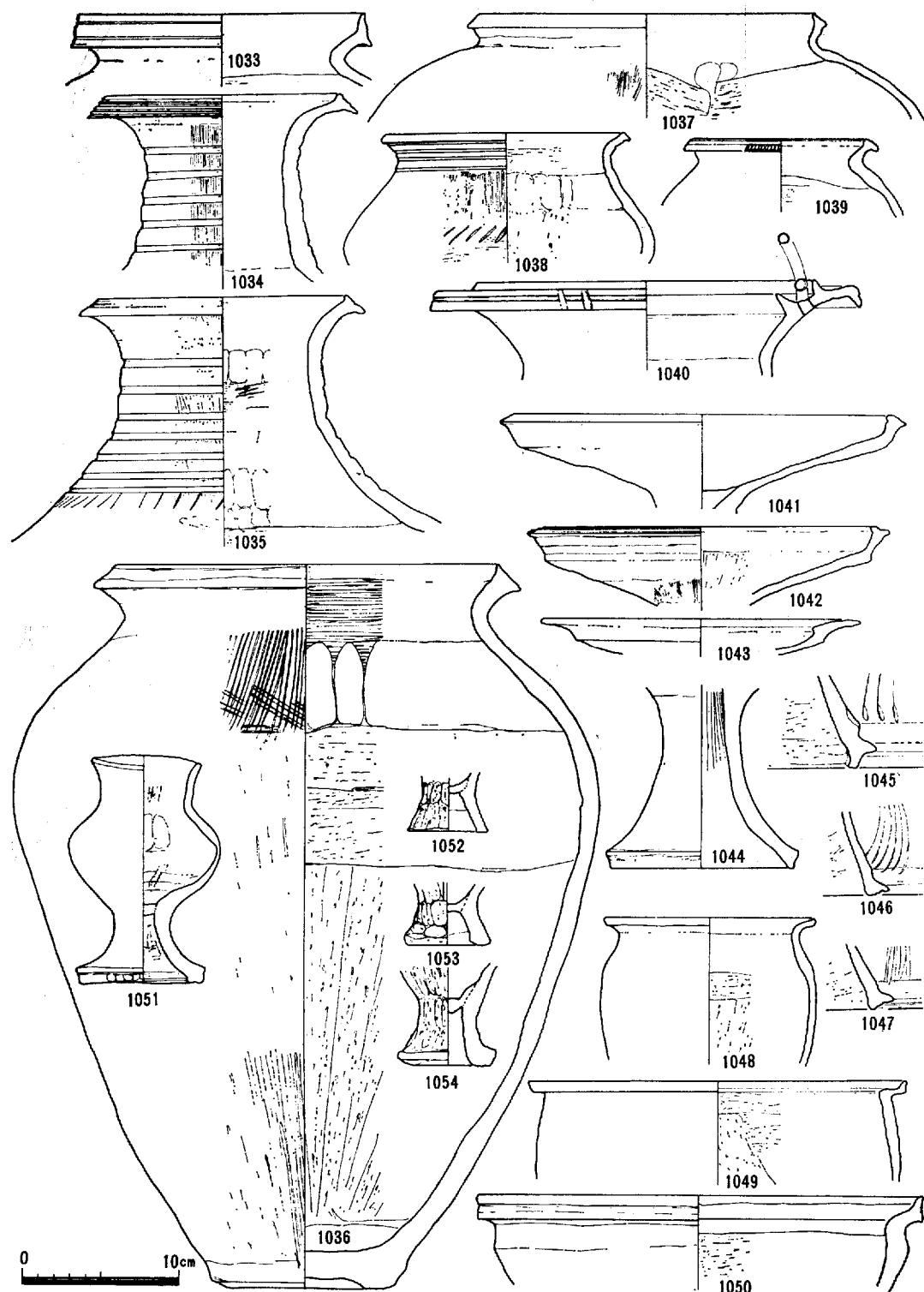
64

第119図 才の元調査区 井一Ⅲ 出土遺物 (1) (1)

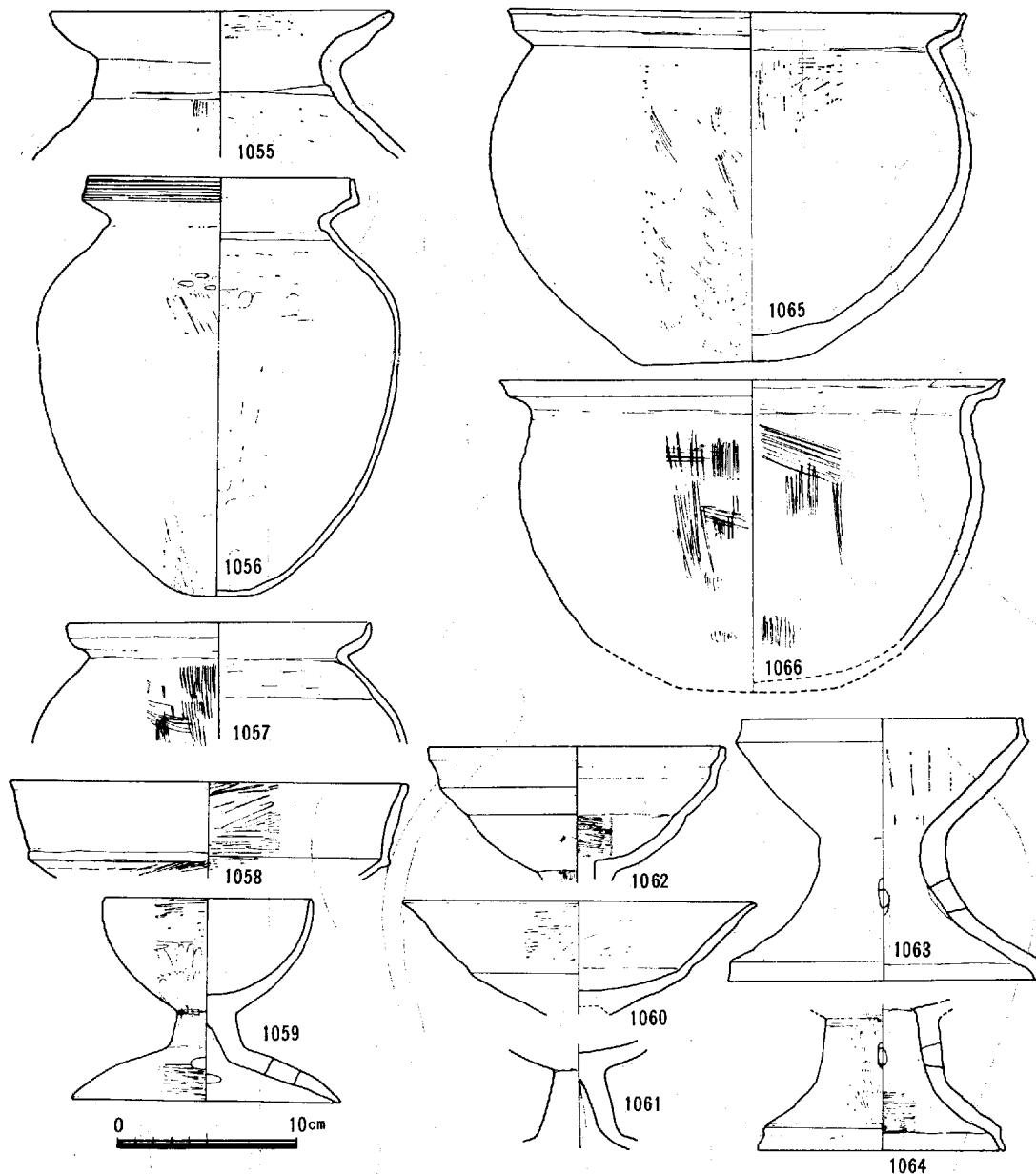
器台形土器（1062～1064），1062は杯部が2段に屈曲して上方に開く口縁部を持つ。杯部内面底部1段目～屈曲部まで刷毛調整を、それより上は笠磨きを行っている。外面は刷毛調整した後、笠磨きを、口縁端部は横ナデによる調整をそれぞれ行っている。杯部には径1cmの穴があけられ高杯形土器かも知れない。

1063は「く」の字状に上下に開いた口縁部と脚部を持ち、端部はそれわざかに上下に拡張して

上 東 遺 跡



第120図 才の元調査区 井一Ⅲ 出土遺物 (2)

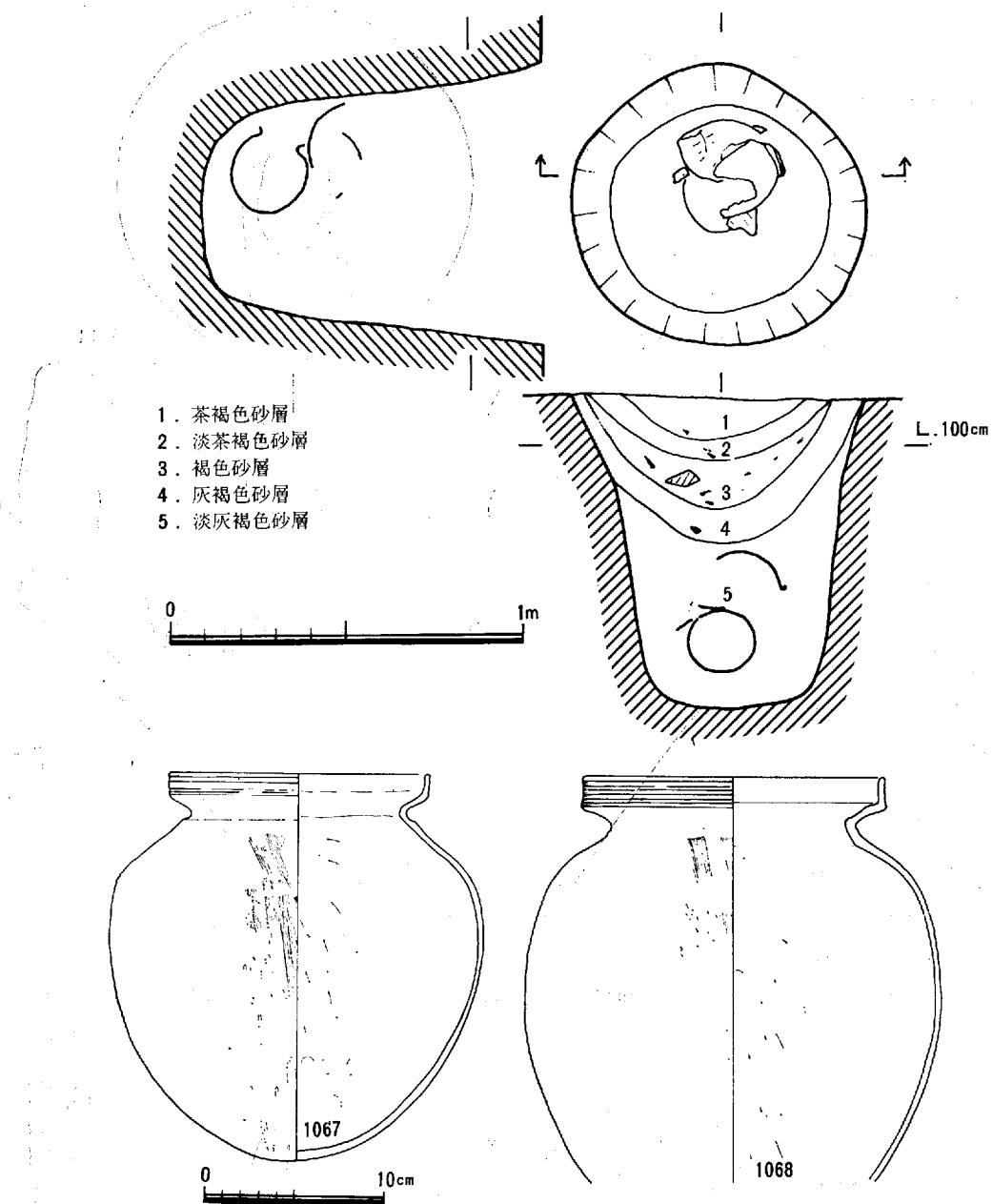


第121図 才の元調査区 P-1 出土遺物

いる。脚部には籠状工具で表面から内側に向けてつき刺した穴を4孔あけ、内面には肥厚が見られる。

1064は脚部のみで1063より脚柱部をわずかに残し、脚柱部から一残もって口縁部につづくものと思われる。内外面とも刷毛調整を行い、1063と同じように4孔をうがっている。

鉢形土器（1065, 1066）口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はやや外開きになって上方に拡張する。どちらも外面には刷毛調整が行われ、1065の内面は刷毛調整を行った後、籠で調整している。1066は刷毛調整後、籠磨きを行っている。



第122図 才の元調査区P-2平面・断面図及び出土遺物（縮尺1/20）

3) P-2 (才の元)

径80cmの円形を呈し、深さは86cmを測る。土壤内には炭化物、焼土ともに2個体部の甕形土器が存在した。

これらはP-1・2の甕形土器とほとんど同じ形態、手法を持つものである。

上 東 遺 跡

4) P—4 (才の元)

径 $150 \times 170\text{cm}$ の円形で深さは 15cm で凹状を呈す土壌である。鎌倉～室町期の土器片が出土している。

5) P—5 (才の元)

径 130cm の円形を呈す。P—1を切って作られる。深さは湧水のため確認できていない。内部から鎌倉時代頃のすり鉢(1068)の破片と石臼(65)が出土している。

6) D—G (才の元)

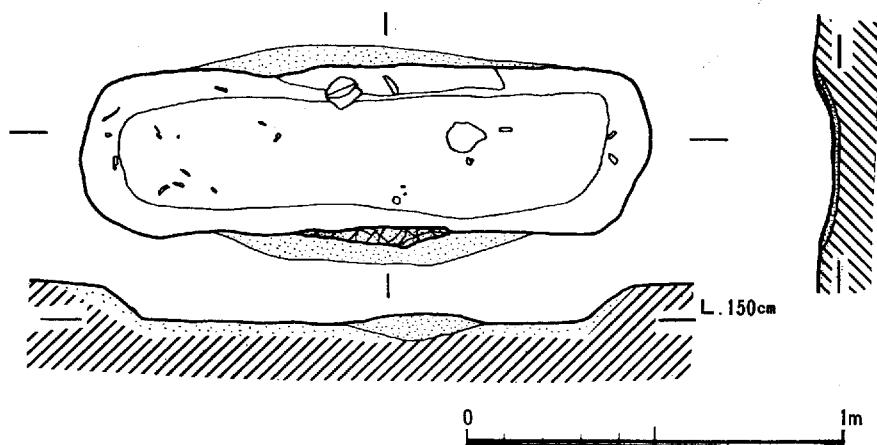
幅 $100 \sim 140\text{cm}$ 、深さ $10 \sim 20\text{cm}$ で軌道敷南端から中央付近にまで南北に 6m 程走っている。P—4と同じような土器片が出土している。

7) 火葬墓 1, 2

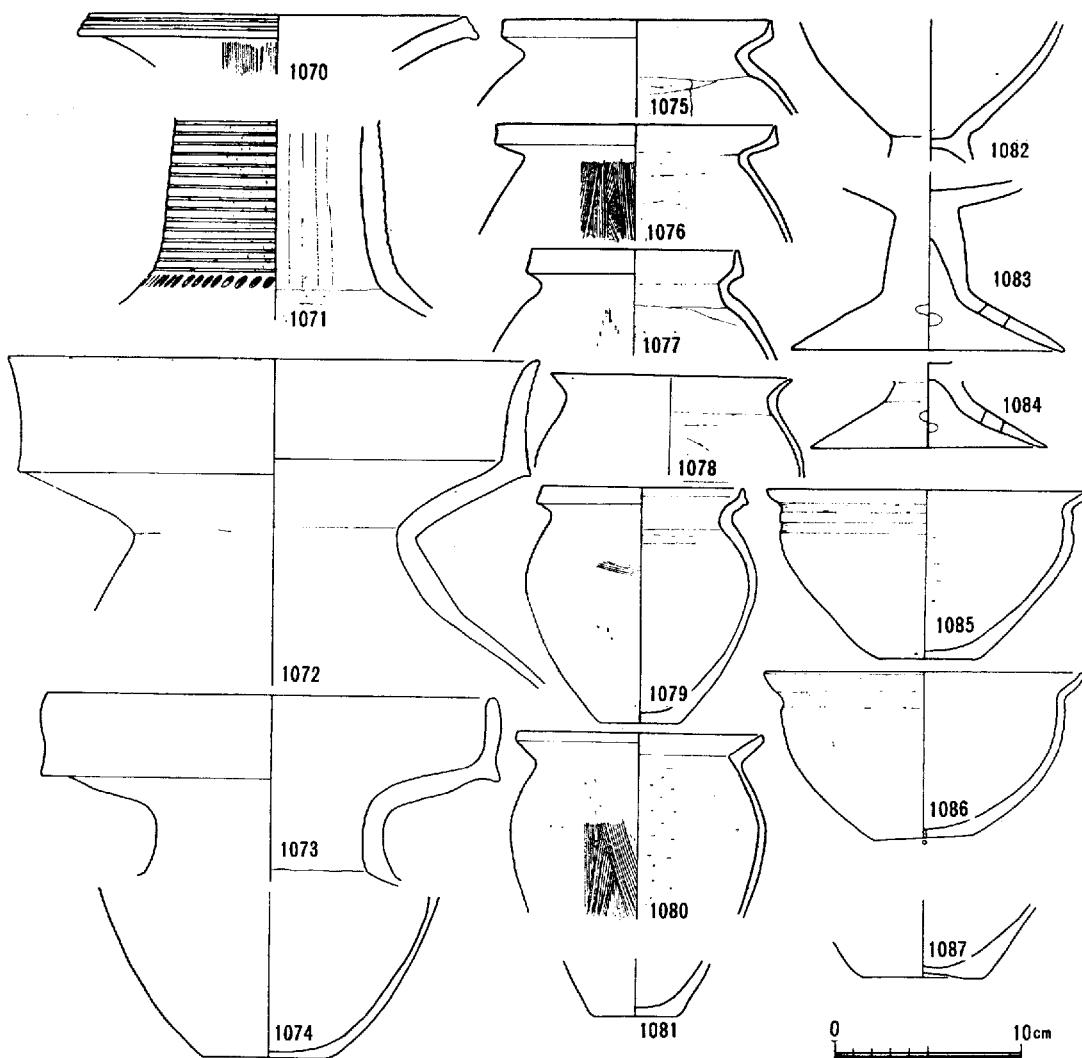
1は長軸 150cm 、幅 58cm で軌道敷内にはほぼ南北に存する。全面が硬く焼け内部には人骨の細片とともに、赤く二次的に火を受けた燈明皿風の土器細片が出土している。2も同形態のものである。

第123図 才の元調査区 P—5 出土遺物

(伊藤)



第124図 才の元調査区 火葬墓 1



第125図 才の元調査区 溝C 出土遺物

第6節 才の元調査区の西端から五反田地区及び以西（九ツ田・上坂田地区）の調査

才の元調査区の最西端区、五反田地区との境をなす農道、ねんね川用水の東側と西側にそって南北に走る。溝が5本検出された。出土遺物は土器のみで溝—C（才の元）以外は磨滅した弥生土器片、平安期の細片が出土しているのみである。溝—Cも1070、1071の土器のように上東式の範疇に入るものから、1072以下の新しい要素（Pへ（才の町）前後）を持つものまで含まれている。

ねんね川と呼ばれている用水以西、県道高松～下庄線までトレンチを主とした調査を行った。

ねんね川のすぐ西側約20cm程を拡げ、南北に走る溝（D—E・F……溝かどうか疑わしいが）と思

上 東 遺 跡

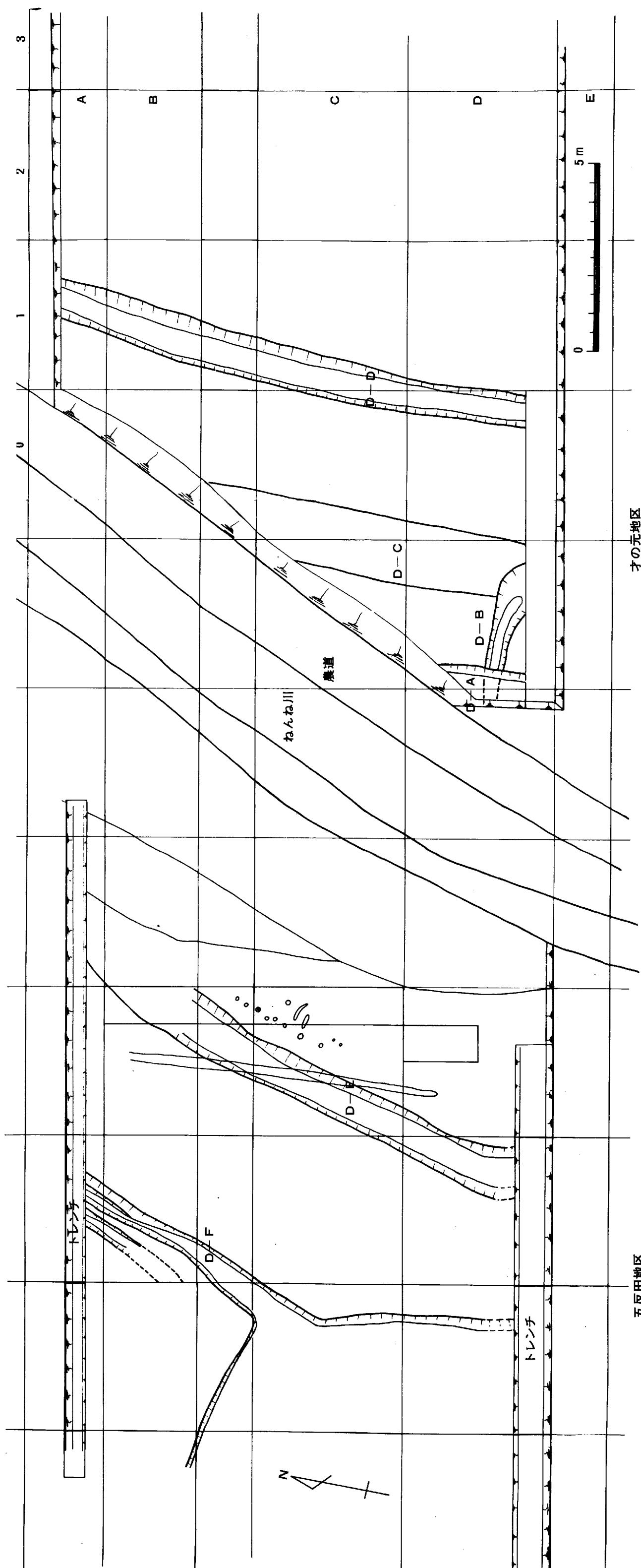
われるもの2ヶ所、杭列状の小ピット群を確認したが、土器等も少なく磨滅しており時期などは不明である。

それより以西（県道高松～下庄線以西も含めて）は、第二次トレンチ調査において、耕作土下は粘土層、その下部は青灰色～灰黒色粘土と青灰色微砂とがベルト状の互層となり、後背湿地的な様相を呈していると思われた。遺物も近現代のものを除いて全く出土していない。（伊藤、池畠）

オの元地区

五反田地区

第126図 オの元地区～五反田地区にかけて



第4章 まとめてかえて

以上のごとく上東遺跡の遺構、遺物の概略を記してきたがこれは、山陽新幹線が通過することによって、破壊を前提として行なった行政的記録保存処置の結果である。あくまで忠実に事実を報告するよう努めた。しかし、調査期間はもとより、整理期間も制限された中での記録処置であり、また遺物に関しては期日に間に合わせず全く手を付けていない遺構もあることをことわっておきたい。

各時代の各遺構に関して再度ふりかえって見る。縄文時代晚期から弥生時代前期においては遺物のみで遺構は検出できなかった。今回の調査区域内においては弥生時代の中期後半から土壙は、後期を中心に多数検出され、また溝はほとんど南北に走るものであった。水田耕作とともに微高地上に導水するものと考えられる。後期になると、住居址、井戸、土壙、製塩炉等々この狭い範囲の中でも各種の遺構が存在した。特に目についたのは、各遺構に伴なって製塩土器が多数見られたことである。このことはこの遺跡が海岸線に近いであろうことは先にも述べたところである。

古墳時代の前半期の住居址等も確認したが、後半期の遺構はほとんど存在しなかった。

奈良・平安時代の遺物も点々出土しているが、遺構は存在しなかった。古墳時代から奈良・平安時代にはもっと南方に進出しているのかも知れない。

平安時代末から鎌倉・室町時代には、住居址、井戸址、土壙、溝等が確認された。

また江戸時代と考えられる性格不明の池状遺構、火葬墓を確認した。

これらの各時代の各遺構は、この地区でそれぞれ関連を持ち多くの問題点を含んでいるが、我々が追求できたことは非常に限られている。

今回の調査は上東遺跡に巨大なトレーニングを入れ、各微高地の東西端を確認したこと、弥生時代だけでなく前後する長い期間生活が営まれていたことを明らかにしたことであろう。

ここでは特に問題にしたのは先来から吉備地方において追求されている古墳発生の問題とも関連があるため、弥生時代後期を中心とする土器編年の問題、それに関連して製塩土器の問題を我々なりにとりあげてみた。

1) 土器編年について

前章では、上東遺跡の各微高地あるいは各調査区ごとに時期の古いと思われるものから遺構遺物を提示し、その概略を述べてきた。その中で、遺構の状態から、その遺構の遺物が一括として取り上げることができると思われるもの（指標遺構）については、出土遺物の特徴について少し詳しく説明を加えた。今回の調査の結果、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて、出土土器の形態的変化を「流れ」としてある程度とらえることができた。

以下各指標遺構の前後関係を述べ、「流れ」を追ってみたい。

弥生時代中期後半～末に比定されるもの（註-13）として、P-151（J-10）やJ-45の各溝、溝Z（才の町）を認めた。

弥生後期から古墳時代初頭については、従来中部瀬戸内地域では「上東式」が弥生後期前半に位置

しそれに続く後期後半に位置するものとして「白江Ⅱ式」(註-14)あるいは、その後「津島グランド上層式」と仮称されるものから・酒津式」という変化があるとされてきた(註-15)。また、「上東式」に先行する弥生後期の一群が存在することは、小田郡白江遺跡の資料(白江Ⅰ式)で指摘され(註-16)、岡山市上土田遺跡の資料で地域的な補足がなされている。

今回の調査では溝2・土器だまりおよび井戸Ⅲ(才の元)の一部の資料が後期の最も古い形態を有すると思われる。胴部に刺突文を有する無頸壺形土器や、凹線を胴部にとどめた器台が見られ、長頸部に間のびした沈線をもつもの(1034, 1035)などもあり、「上東式」の前出的な内容を持つ。小田郡白江遺跡、高松市大空遺跡(註-18)岡山市上土田遺跡の長頸壺には頸部に沈線をもたず、刺突だけをもっているものがあり、溝2(J-25)等のものとは完全に一致しないが、後述のP-イ(才の町)等よりは先行的な様相をもっている。

P-2~4(J-25), P-イ(才の町)の資料は、弥生式土器集成図の「上東式」がほぼ合致し、形態を同じくする。今回の調査で最も豊富に認められた一群である。発達した長頸部に沈線をめぐらし、口線部には退化した凹線をもつ。高杯形土器は、口縁端部を肥厚させるものと鋭く外反させるものがある。P-2~4(J-25)とP-イ(才の町)との間には形態的にズレが見られるが、同一形式にまとめられ得るものであろう。またP-10(J-30)の資料には、特に長頸壺形土器の口縁端部が鋭く内傾して拡張する等の要素が残り、前出的な傾向がみられる。

井戸I(J-15)の資料は、前述のタイプと後述のP-ヘ(才の町)のタイプの中間的なタイプとして理解される。壺形土器の長頸部は間のびして沈線は細く乱れており、途切れる部分もある。そして、貝殻圧痕が頸部中位を下端に加えられる。P-2~4(J-25), P-イ(才の町)の一群に比べて胴部の張りも弱く、径も小さい。甕形土器は口縁拡張部の立ち上がりはほぼ垂直を呈し、肩は良く張って器壁の薄い底部近くで反りが反転する。高杯は、口縁が外反するもの、楕形のもの、口縁が二段に外反するものなどがあり、脚端は横ナデを加えて終る。そして特に壺形土器、甕形土器の口縁端部の退化凹線はほとんどみられなくなる。この一群は、個々にはP-イ(才の町)等の一群とは区別し難いものもあるが、全体としては区別でき、より後出的なタイプとして抽出可能な一群である。「上東式」と「酒津式」の間には一形式が存在することは、長く指摘されてきているが、前後幅をもたせた様な表現がさなれており(註-19)，この一群がその前出的な内容をもつものと理解している。

P-ヘ(才の町)の一群は「酒津式」に先行するもので、井戸I(J-15)に後続する。壺形土器の長頸は退して下方に広がりをもち、頸部に細く、見えるか見えないほどの沈線をめぐらせる例(80)もある。甕形土器の上方に立ち上がる口縁の端面には退化凹線がみられ、胴下半は井戸I(J-15)の甕形土器に比べて丸く外湾する。高杯形土器は杯部が深くなり、短い脚部を有する。壺形土器、甕形土器、高杯形土器のいずれも「酒津式」より先出的な要素をもっており、井戸I(J-15)に続くものである。仮称「グランド上層式」と呼ばれてきたものの主体がこの一群と理解している。

P-ト(才の町)に続く一群として、P-1, 2(才の元)の一群を想定し、「酒津式」に比定した。P-ト(才の町)の壺形土器の諸特徴に何らの差異は認められない。甕形土器の一群は、上方に拡張する口縁端部に数条の籠描沈線をもち、その上から横ナデ手法で仕上げているもの(314~326)を含んでいる。

上 東 遺 跡

酒津及新屋敷遺跡（註-20）では、同じく口縁端部に櫛描沈線を持つもの（甕形土器A）が知られているが、P一ト（才の町）では櫛描沈線を持つものは見られない。むしろ、後続すると思われるH一2（J-10）、H-7（J-20）亀川上層の甕形土器は口縁端部に櫛描沈線を持ち、底部は丸底を呈する。そして、これらに伴う壺形土器は完成された二重口縁を呈する。つまり、才の元P-1、2はちょうどこの中間的な様相を呈していると思われ、甕形土器（1066、1067）は口縁端部に櫛描沈線を持ち、P一ト（才の町）ほど明らかな平底はもたないが完全な丸底でもない。また体部表面には刷毛で消されてはいるが、わずかに叩き目痕を残す。高杯形土器についていえば、その形態は、「酒津式」のその種の土器（高杯形土器B）ほど顕著ではないが、三段に外反する杯部を持つもの（1060）もあり良く類似する。また椭形の杯部をもつ高杯形土器（1059）は、畿内等において「庄内式」（註-21）と呼称されているものに良く類似している。もし、「酒津式」が古・新に分け得ることが可能であるとすれば、P一ト（才の町）の一群は古であり、P-1、2（才の元）の一群は新としてとらえることができよう。

以下、指標とした遺構を整理してみると、溝2（J-25）土器だまり、井戸Ⅲ（才の元）→P-10（J-30）、P-2、3、4（J-25）、P-イ（才の町）→井戸I（J-15）→P-ヘ（才の町）→P一ト（才の町）→P-1、2（才の元）→H-7（J-20），亀川上層という土器形態の変化をとらえ得る。われわれは今後、溝2土器だまりの形態・特徴を持つものを上東・鬼川市I式・P-10（J-30）、P-2、3、4（J-25）、P-イ（才の町）の形態・特徴をもつものを上東・鬼川市II式、井戸I（J-15）の形態・特徴を持つものを上東・鬼川市III式、P-ヘ（才の町）の形態・特徴をもつものを上東・才の町I式、P一ト（才の町）の形態・特徴をもつものを上東・才の町II式と呼称したい。

以上のような事から各微高地の遺構を時代順に並べて見ると下表のようになる。

（柳瀬・伊藤）

各微高地時期別遺構一覧表

調査地区 時 期	才 の 町	鬼 川 市	下 田 所	才 の 元
中 期	溝 - Z	P - 151 (J-10) 亀川下層	溝 四, (J-45) 六	P - 10
後 期	P - チ	P-10 { H-1 (J-30) }	D-2,3,(J-25)	
	P - イ	H-4 (J-25)	P-2, 3, 4 (J-25)	
	P - ハ	P-イ(亀川)	H-8 (J-20)	
上東・鬼川市	P - ホ	井 戸 - II (J-30)		
	P - ヘ	井 戸 - I (J-15)		
	P - ハ			
	P - ボ'	H - 3 (J-10) { H-2, H-7 } (J-10)(J-20) 亀川上層	H- 9 (鎌倉) P-123 (鎌倉)	D- 2 (室町)
上東・才の町	P - ボ'			P-1, 2
				土塚墓(江戸?)

上 東 遺 跡

	鎌 木 (註-22)	間 壁 (註-23)	特殊器台の編年 (註-24)	雄町 遺跡 (註-25)
上 東 鬼 川 市 I	上 東 I	白 江 I (七 東 古)		雄町 7 類 雄町 8 類
	II		(普通器台)	雄町 9 類 雄町 10 類
	III	上 東 II (上 東 新)		+
才 の 町 I		白 江 II (グランド上層) (芋 岡 山)	立 坂 型	雄町 11 類 雄町 12 類
	II 酒 津 式 (亀 川 上 層)	酒 津 式 (五万原)(註-20)	向 木 見 型	雄町 13 類 (王泊六層)(註-28)
		備 前 原(註-27)	宮 山 型	雄町 14 類 〔王 泊 五 層〕
			都 月 型	

() ほぼ併行 [] 不確定

2) 製塙土器について

上東遺跡を特徴づけるもの一つに製塙土器の一群があげられる。製塙土器は才の町、鬼川市、才の元の各砂洲に普遍的に出土しており、とくに鬼川市の調査区東半では、一千個体に近い製塙土器が何ヶ所かに集積して認められた。この種の粗製の台付鉢形土器が、師楽式土器に先行する製塙土器として、瀬戸内地域では、弥生中期頃までさかのぼり得ることは、すでに指摘されている。(註-29)

今回の調査では弥生中期から亀川上層期まで、継続的にその器形の変化をたどることが出来た。

Aタイプ 中期末に相当するもので、P-162, 203 (J-10) の資料がこれにあたる。7点しか出土していないが、個体差が激しく脚端径は6~8cmある。

以下に挙げるものに比して、一まわり大きく、中期末の製塙土器は児島周辺に点々と知られており、遺跡差、個体差の著しいことが認められている。

Bタイプ P-2~4 (J-25) 亀川下層上面の一群がこれに該当する。量的には最も多く出土しており亀川の斜面では、約60個前後を一単位とする。グループを認めることが出来た。これは土壌出土についても、同様の傾向が見られる。口縁径11~12cm、器高12~12.5cmをはかり、脚端径は5~6cmある。脚内面は一様に箇削りされており、杯部底の埋め込み部分が筒状に作られている。底は上から埋め込まれたままのヘソ形を残しており、ヘソのとれている脚が多く見られ。口縁も端部を箇切りしたままのものが、P-4で多く見られる。

Cタイプ 製塙炉出土のものがこれに当たる。A・Bに比して脚のくびれがなくなる。口縁径、11cm前後、脚端径は5cmで小型化し、内側を箇削りの後ナデており、杯底を下からも押えて、脚により強く密着させている。Bタイプに比べて改良された痕が伺え、事実底が剥落しているものは皆無である。口縁端は内外とも一様に押圧しており、外側の箇削り手法はA,Bと変化ない。井戸II (J-30)

出土もこれに該当する。

Dタイプ P一ト（才の町）出土のもので、酒津式併行のものである。脚は小型化して薄作りになる。資料は少ないが、土器の状態からみて、土器製塩に使われたことは間違いない。

Eタイプ 図示した資料は少ないが、P一ホ'（才の町）及び亀川上層に少なからずみられた。脚部は小さく外方に張り出す。杯部外面には単行叩きをもつ。玉野市山田原遺跡（註—30）などで出土したもののが、これに相応する。

以上A～Eタイプの製塩土器は、古→新への五時期に類別され、A＝中期末、B＝上東・鬼川市I・II、C＝上東・鬼川市IIあるいはIII、D＝上東・才の町II、E＝亀川上層に既当させることが出来るであろう。

上東遺跡の土器製塩は、今知る限りでは、Bタイプにピークがあり、CとD、E間には量的な意味でのギャップがある。このことは調査区の他律的な設定に依る資料の片寄り等に起因することが考えられ、弥生時代から古墳時代への社会的な変動に起因するのかどうかは即断し得ない問題であろう。川入遺跡では古墳時代前半期の製塩土器が出土しており、出土状況は古墳時代後期の製塩遺跡等と対比してみれば、むしろ、弥生後期から継続的に土器製塩が行なわれてきたといえるであろう。

上東遺跡は今でこそ沖積平野中央の遺跡であるが、少なくとも古墳時代は海岸の遺跡であった。亀川の砂洲東斜面には古墳時代前半期のハンラン堆積層があって水面下にまで続いているが、その堆積層と、以後の水中堆積層にはハイガイもしくはモ貝の痕跡が少なからず検出され、潮の入っていた足跡を残している。この地点が完全に陸化するのは鎌倉時代以後のことである。このような地理的な環境のもとで、集落の中の土器製塩は、行なってきたのであって、弥生中期以降の生産体制は変わっていないかのようである。

（藤田、柳瀬）

註—13 鎌木義昌によって前山II式と呼称されているものである。

『中国』「日本考古学講座」弥生時代 河出書房・「弥生式土器集成本編I」「山陽地方II」 1964

(14) 間壁忠彦、『岡山県矢掛町白江遺跡』「倉敷考古館研究集報、第1号」 1966

(15) 間壁忠彦『倉敷市酒津・新屋敷遺跡出土の土器』「瀬戸内考古学、第2号」 1958

(16) 註—14に同じ

(17) 間壁忠彦、『岡山市上土田採集の弥生式土器』「倉敷考古館研究集報、第8号」 1973

(18) 鎌木義昌、六車恵一『香川県高松市高松町大空遺跡の土器』「弥生式土器集成、資料編」 1968(再)

(19) 註—14に同じ

(20) 註—15に同じ

(21) 田中琢『布留式以前』「考古学研究、第12卷第2号」 1965

(22) 註—1, 13など

(23) 註—14, 15, 17など

(24) 近藤義郎、春成秀爾、『埴輪の起源』「考古学研究、第13卷第3号(51)」 1967

特殊器台の編年については、春成秀爾氏の教示を得、「下記の文献で近藤、春成が述べている上東式は後期全般をさすものとして判断した。

(25) 岡山県教育委員会、『雄町遺跡』「埋蔵文化財発掘調査報告」山陽新幹線建設に伴う調査—1972

(26) 間壁忠彦、『岡山県美星町五万原遺跡』「倉敷考古館研究集報、第5号」 1968

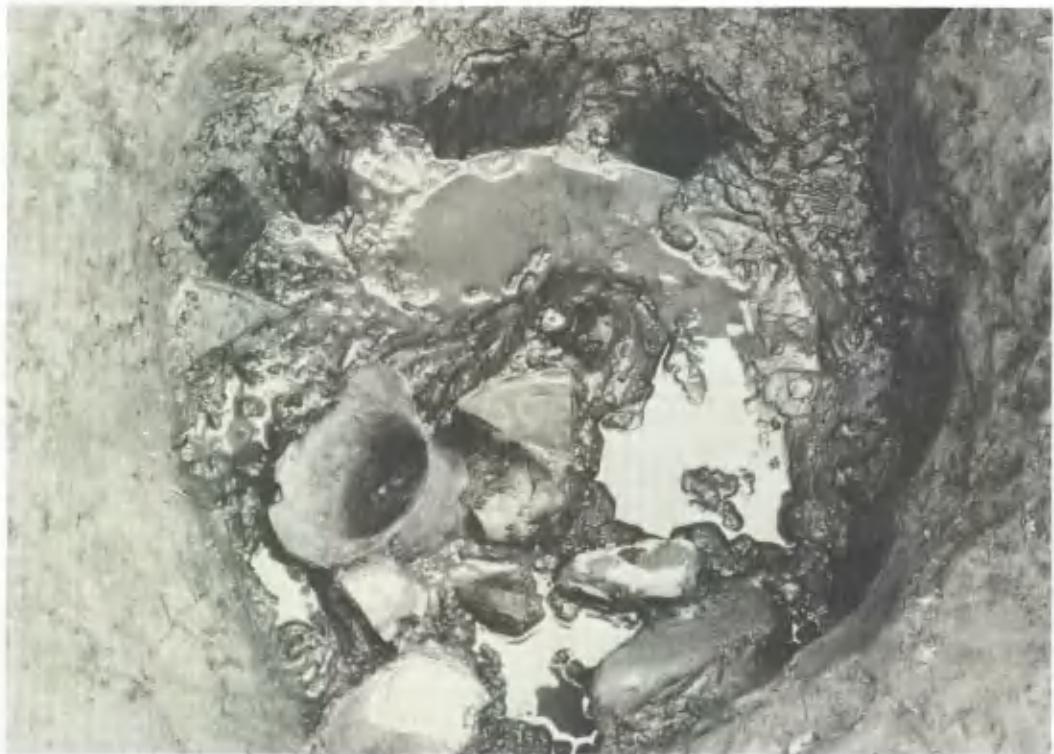
(27) 間壁忠彦、三杉兼行、『備前原遺跡の土器』「遺跡26号」 1957

(28) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 1956

(29) 間壁葭子『児島上之町保育園内遺跡』「倉敷考古館研究集報」第6号 1969

山本慶一『倉敷市仁伍遺跡』「倉敷考古館研究集報」第8号 1973

(30) 註—11に同じ



東鬼川市第2側道 P-4



27-1 東鬼川市第2側道 P-2 溝-2



27-2 東鬼川市第2側道 溝-2,3



28-1 東鬼川市第2側道 第9号住居址（鎌倉時代）



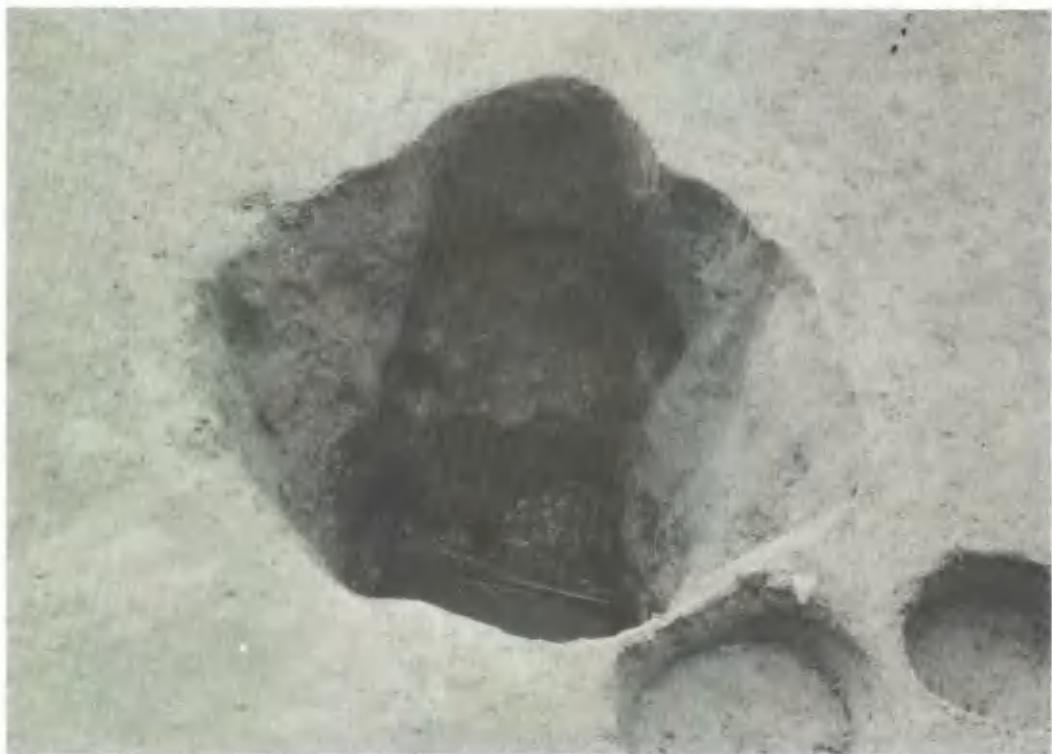
28-2 東鬼川市第2橋脚位置 P-123 (鎌倉時代井戸)



29-1 東鬼川市付け変え用水位置 溝-2 上面土器溜り



29-2 東鬼川市付け変え用水位置 溝-2 内遺物出土状況



30-1 東鬼川市第3橋脚位置 井戸-II



30-2 東鬼川市第3橋脚位置 井戸-II 土止め杭および板



31-1 西鬼川市第2側道 溝



31-2 西鬼川市第2側道 溝一四



32-1 下田所第1橋脚位置から西を望む



32-2 下田所第1橋脚位置 遺構出土状況



33-1 才の元調査区 井戸-III



33-2 才の元調査区 溝-C 内遺物出土状況



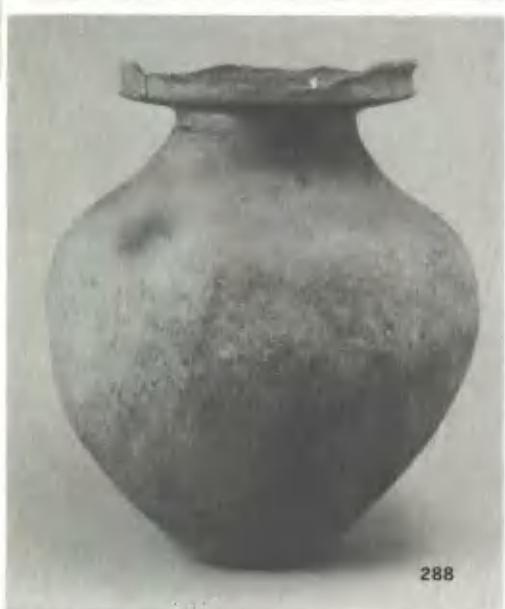
286



312



287



288



289



300

才の町調査区 P-ト出土遺物(1)



299



303



307



301



309

才の町調査区 ポート出土遺物(2)

図版36



317



327



324



329



325



330

才の町調査区 ポート出土遺物(3)



339



340



343



342



313

才の町調査区 ポート出土遺物(4)



東鬼川市第1側道 井戸-1 出土遺物(1)



626



625



664



644



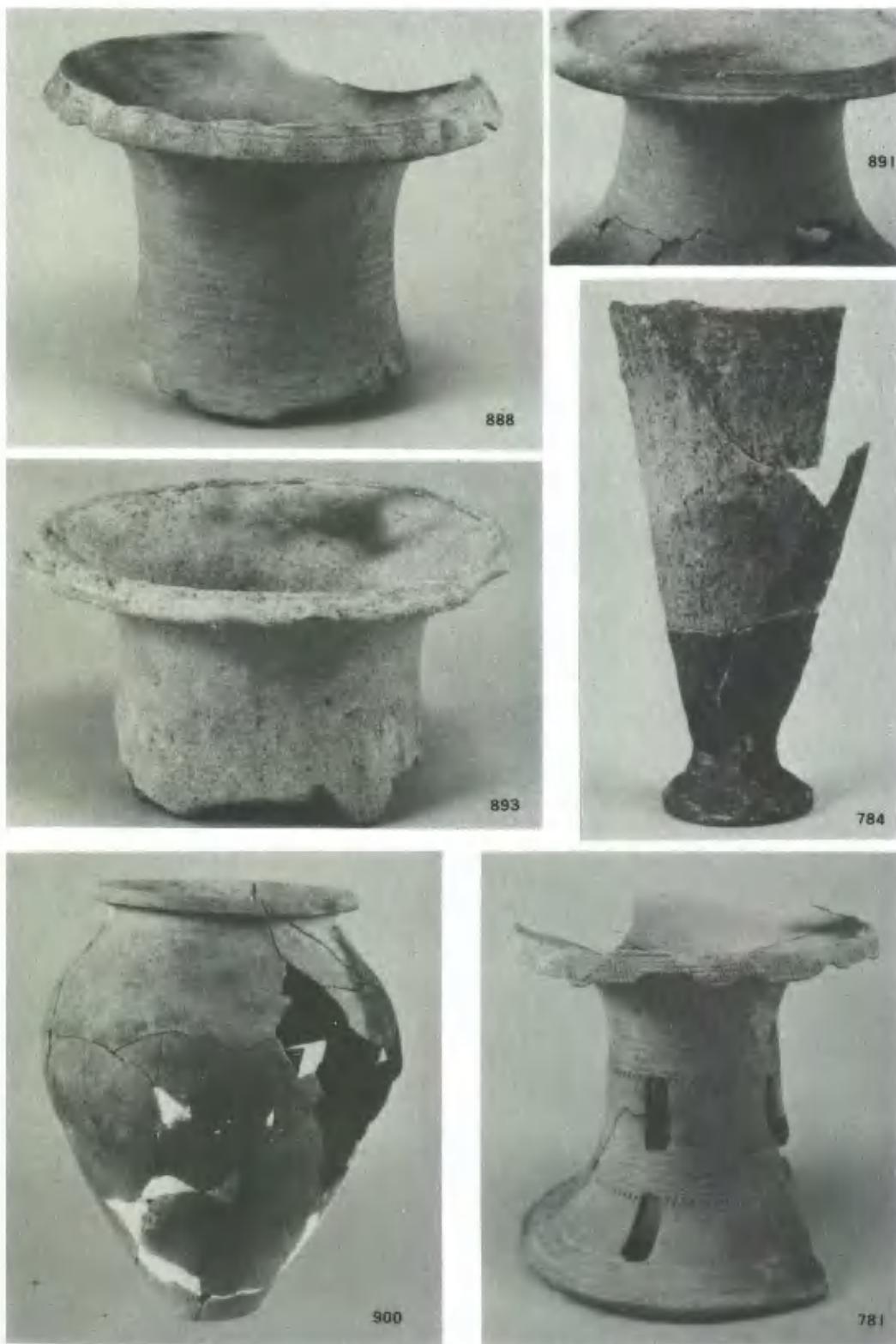
631

東鬼川市第1側道 井戸-1 出土遺物(2)

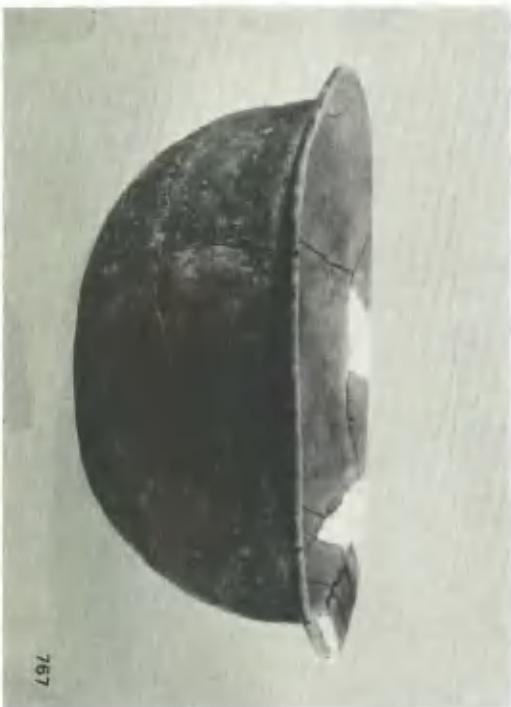


東鬼川市第1側道 井戸-1 出土遺物(3)

図版41



東鬼川市第2側道P-2(781,784)および第3橋脚位置P-10(888,891,893,900)出土遺物



東鬼川市第2橋脚位置戸-123（鍛金時代井戸）出土遺物

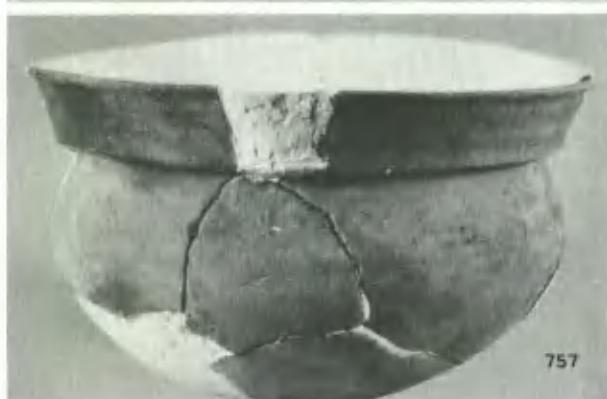




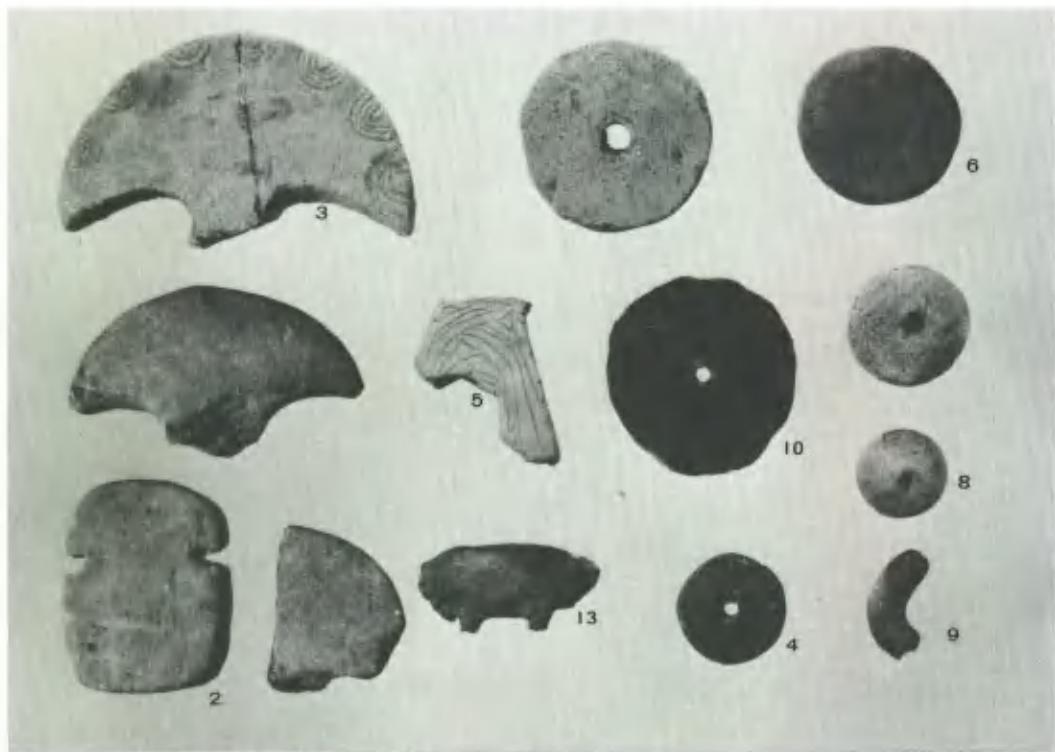
570 東鬼川市H-3

757 " H-7

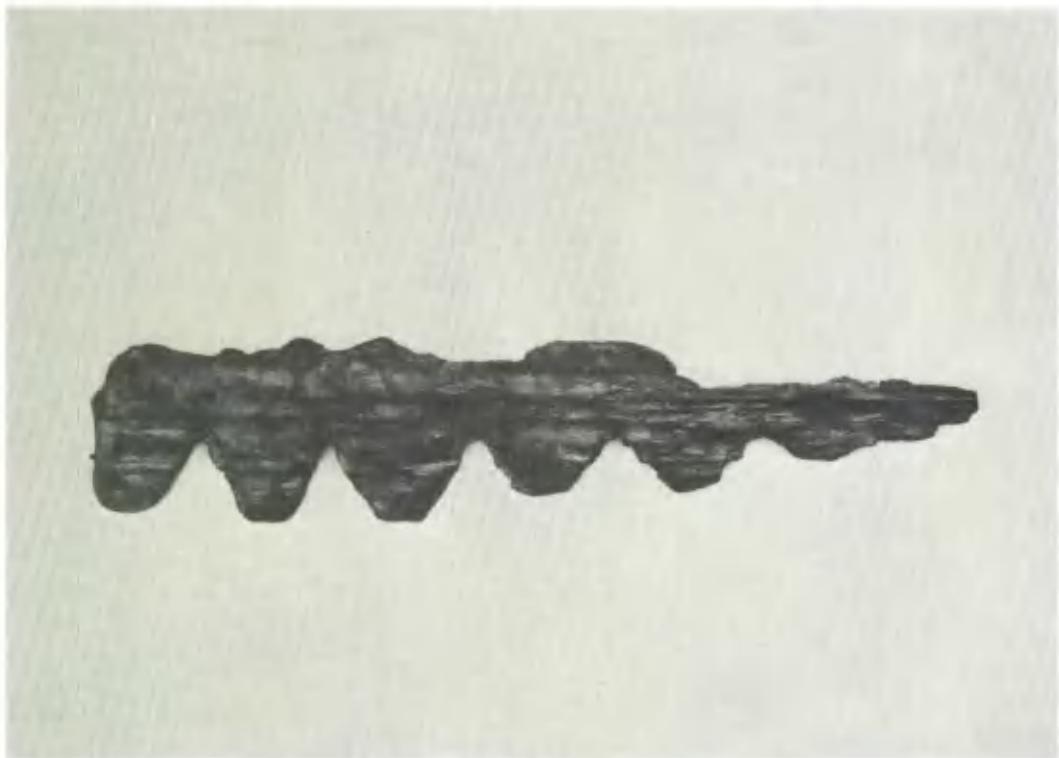
452 亀川下尺



43-1 東鬼川市微高地各出土遺物



43-2 東鬼川市微高地各出土 土製品



44-1 才の町調査区 P-1イ出土えふり



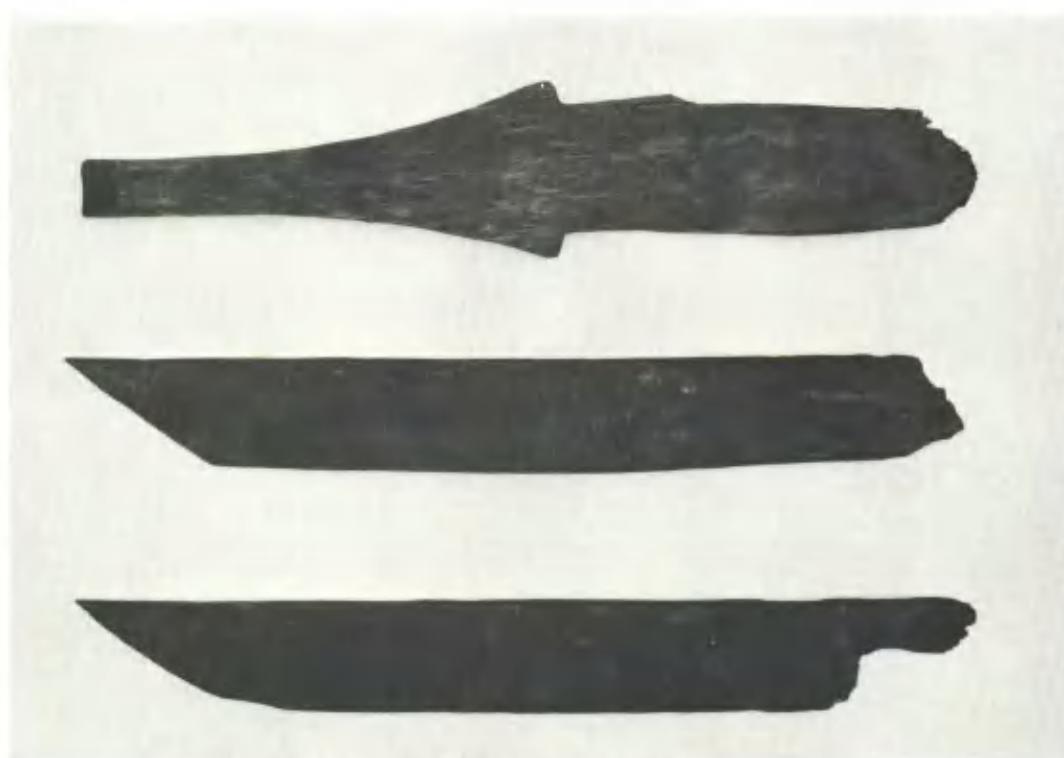
44-2 才の町調査区 P-1イ出土ニ又状鉤



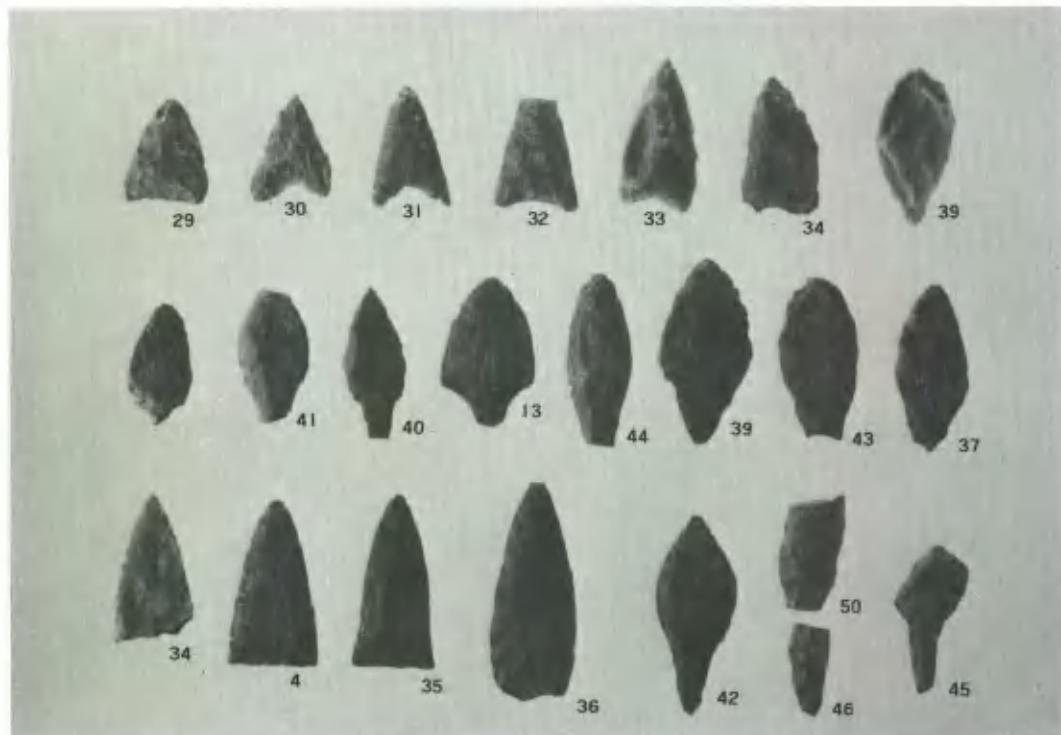
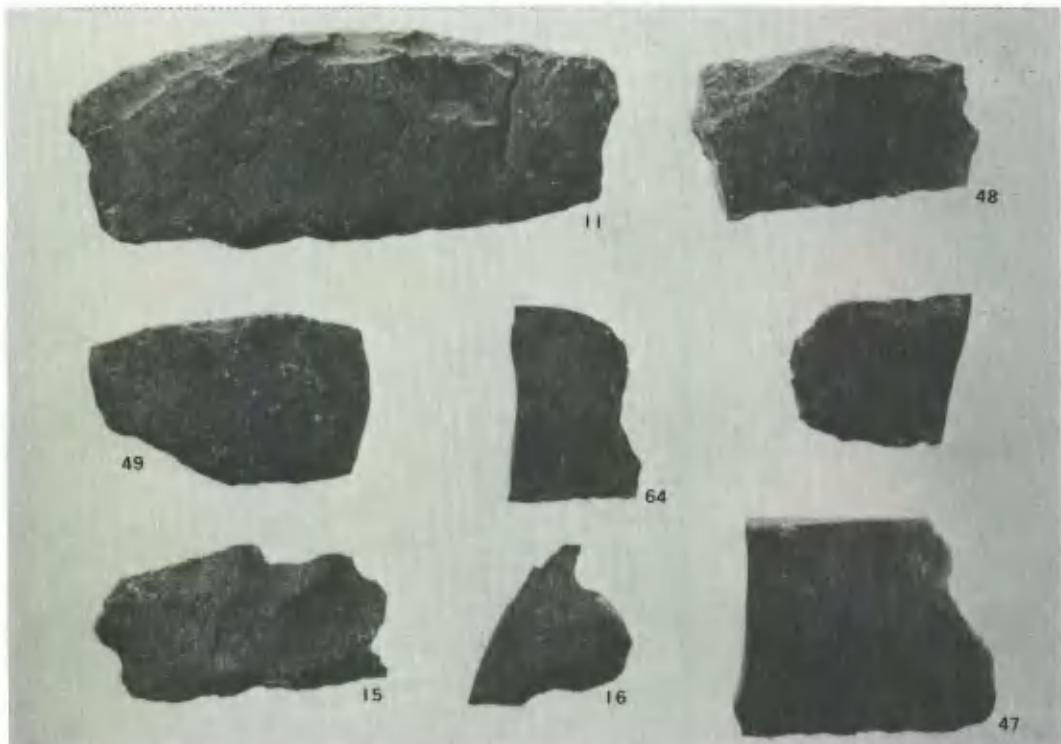
才の町調査区 P一八出土鋤（上一表、下一裏）



46-1 才の町調査区 P-ト出土木製容器



46-2 東鬼川市第2橋脚位置 P-69出土木製品



上東遺跡各地点出土石器



上東遺跡（才の町調査区）岩倉遺跡航空写真(I)（縮尺1/4000）

図版 2



上表遺跡（鬼川市鶴蓋区他）航空写真(2)（縮尺1/4000）



3-1 上東遺跡遠望（北側王墓山より望む）



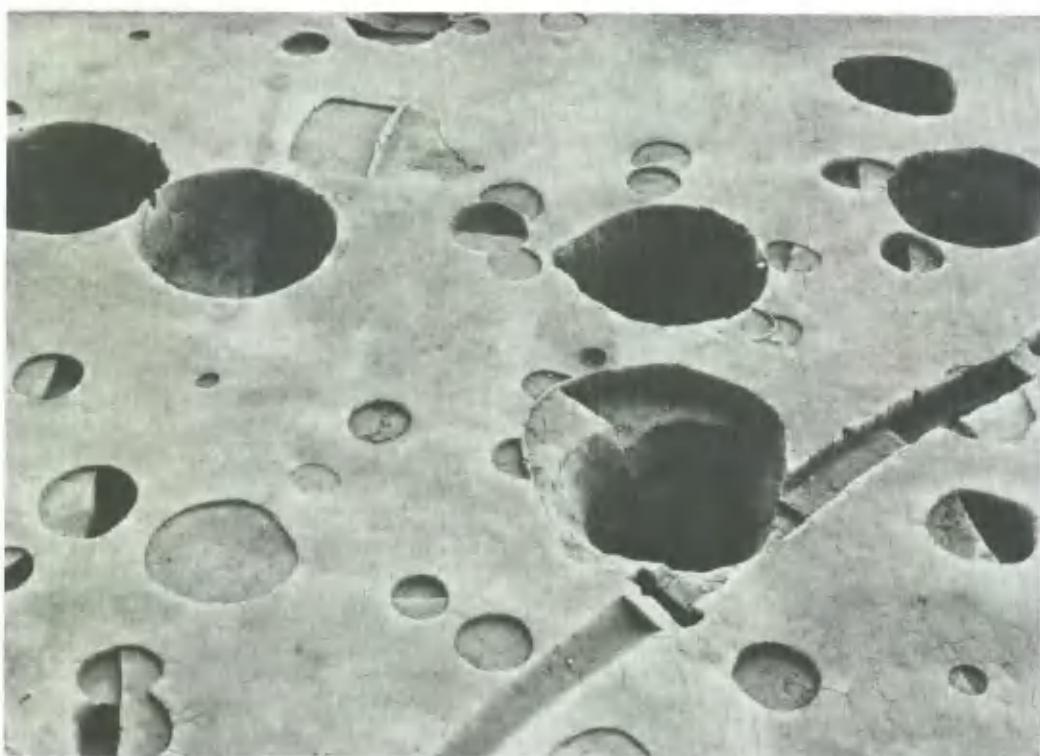
3-2 上東遺跡近景（足守川西堤より望む）



4-1 上東遺跡近景（発掘着手前—童川調査区より鬼川市の微高地以西を望む）



4-1 上東遺跡近景（発掘着手前—才の町調査区より以東を望む）



才の町調査区 大型土塹群

図版 6



6-1 才の町調査区 溝-Y



6-2 才の町調査区 溝-Y 断面



7-1 才の町調査区 P-ハ 鋤出土状況



7-2 才の町調査区 P-ハ 木製容器出土状況



才の町調査区 P-1へ 遺物出土状況



9-1 才の町調査区 P-へ 断面および遺物出土状況



9-2 才の町調査区 P-へ 壁面を鎌で掘りこんだあと



10-1 才の町調査区 P-ト 上部断面



10-2 才の町調査区 P-ト 上面遺物出土状況



才の町調査区 P-ト遺物出土状況各様



才の町調査区 P-ト遺物出土状況



13-1　亀川調査区近景（近世池状遺構他－西の農道から－）



13-2　東鬼川市第1橋脚位置遺構出土状況



亀川調査区 斜面製塩土器（脚部）出土状況



15-1 龜川調査区 P-イ



15-2 龜川調査区 堆積斜面



東鬼川第1橋脚位置第2号住居址



17-1 東鬼川第1橋脚位置 第3号住居址周辺



17-2 東鬼川市第1橋脚位置 第3号住居址



18-1 東鬼川第1側道遺構出土状況



18-2 東鬼川市第1側道 井戸-1 遺物出土状況



19-1 東鬼川市第1側道 井戸-1 遺物出土状況



19-2 東鬼川市第1側道 井戸1 木梓出土状況



20-1 東鬼川市第2橋脚位置 遺構出土状況（東から）



20-2 東鬼川市第2橋脚位置 遺構出土状況（西から）



21-1 東鬼川市第2橋脚位置 第8号住居址



21-2 東鬼川市第2橋脚位置 第7号住居址



東鬼川市第2橋脚位置 製塩炉

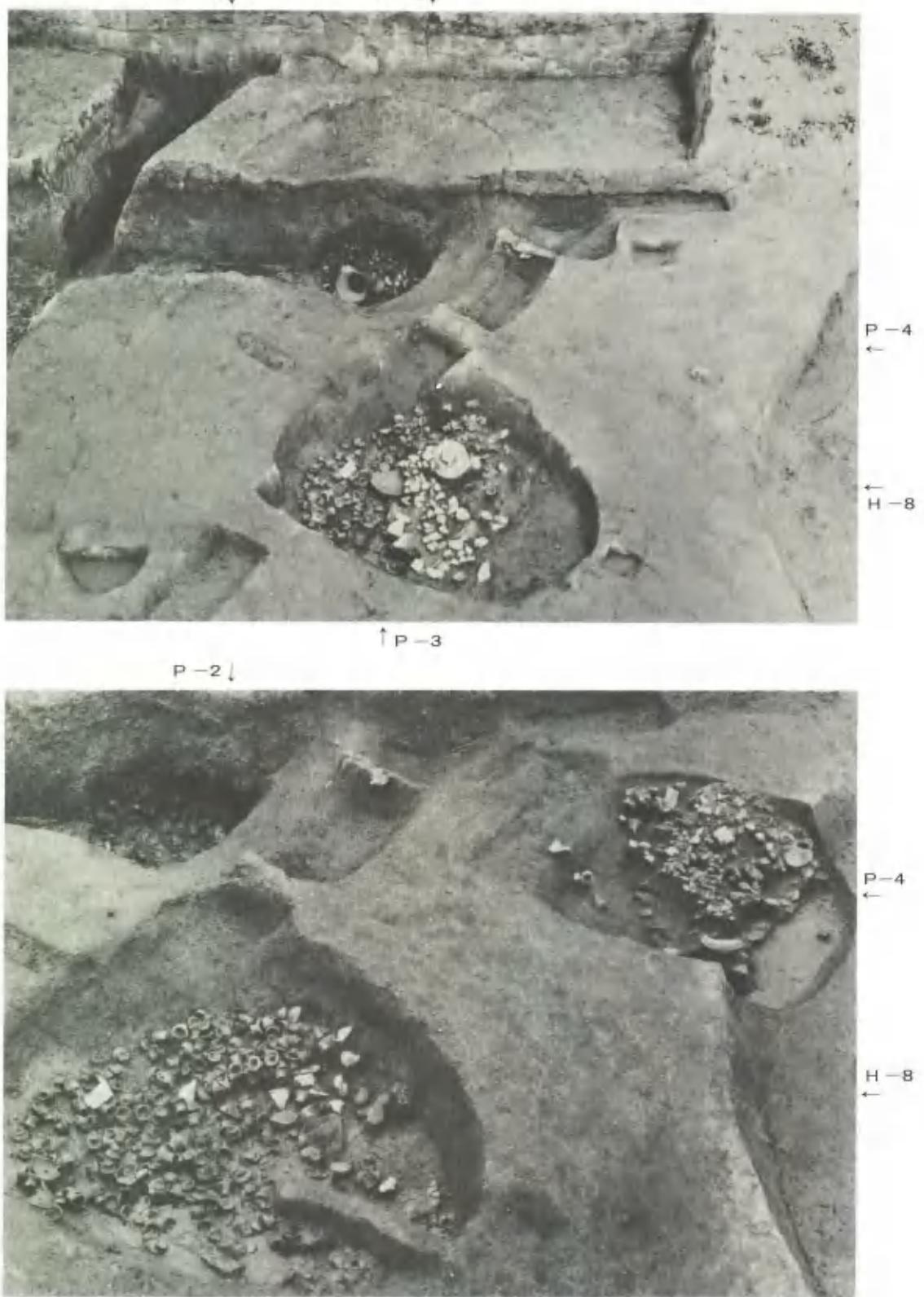


23-1 東鬼川市第2 橋脚位置 第7号住居址内土拠



23-2 東鬼川市第3 橋脚位置 P-10遺物出土状況

図版24



東鬼川市第2側道 P-2, 3, 4 遺構および遺物出土状況



25-1 東鬼川市第2側道 P-2



25-2 東鬼川市第2側道 P-3 製塙土器出土状況

第IV部 御 堂 奥 遺 跡

御 堂 奥 遺 跡

目 次

第1章 調査の経過（葛原克人・池畠耕一）	239
第2章 遺構と遺物（池畠・葛原）	241
第3章 まとめにかえて（池畠・葛原）	253

図 目 次

第1図 地形図（実測：村上幸雄・浅倉秀昭・池畠、製図：池畠）	241
第2図 建物平面図（実測・製図：池畠）	242
第3図 建物周辺出土遺物（実測・製図：池畠・葛原）	243
第4図 溝出土の土器（1）（実測・製図：池畠）	245
第5図 溝出土の土器（2）（実測・製図：池畠）	246
第6図 溝出土の土錘・石器（実測・製図：池畠）	250
第7図 ふいご口・石器（実測・製図：池畠）	251

図 版 目 次

図版1—1 御堂奥遺跡（西より）（撮影：池畠）	1
図版1—2 溝（西より）（撮影：池畠）	1
図版2—1 I—A区の塊・灯明皿出土状況（撮影：池畠）	2
図版2—2 柱穴内出土の塊（撮影：池畠）	2
図版3 土錘（撮影：上西節雄）	3
図版4 灯明皿・塊・かまと・土鍋（撮影：上西）	4

第1章 調 査 の 経 過

は じ め に

倉敷市二子（旧都窓郡庄村二子）荒神元に位置する本遺跡は、御堂奥廃寺あるいは二子の堂屋敷などとよばれていた。次に章を改めて報告する二子御堂奥古窓址群の約50m東にあたり、そこには、荒神様を祭る小社があり、この社から西の水田面一帯が発掘調査対象地にあたる。発掘地帯は若干の高低差があるとはいえ、標高5～8mの低地、一つの谷尻にあたる。したがって、50cmも掘ると湧水層となり豊富な水が伏流している。発掘前は旧地権者によって暗渠排水設備がほどこされ、畑地から水田への転用時には一定の削平と客土がなされ、旧来の地形はかなり変貌している。調査地のほぼ中央には南北に通じた農道が走り大池の堤防へ続く。

この遺跡が知られるまで

故玉井伊三郎氏によって刊行された「吉備古瓦図譜」（註-1）には御堂奥廃寺出土として、4種類の軒丸瓦（後に記す、二子1類、二子5類、二子6類、二子古窓址未出土のもの）、2種類の軒平瓦（二子2類と未出土のもの）が紹介され、丁寧に寺域想定線まで描かれ、それが挿入してある。また、故永山卯三郎翁の著わした「吉備郡史」（註-2）「岡山県通史」（註-3）「岡山県農地史」（註-4）などにも、二子堂屋敷として、同地出土瓦とともに詳細な紹介がなされている。

このたびの分布調査時には、瓦はむろん一般的に寺院址に共伴する何らの遺物も採集できなかったが、上記のとおり先学の業績にしたがい、普遍的な寺院址の範囲、方一町を想定して調査を実施したことである。

発掘日誌抄

二子窓址の発掘調査中、御堂奥廃寺推定寺域の北端からさらに北側を山陽新幹線倉敷隧道工事を請け負った業者が作業場の一部として使用したいという話が突然もちあがり、9月5日推定寺域に損傷をきたすかどうか、寺域確定のためのトレーニングを設定した。9月7日葛原文化財保護主事、池畠主事が立ち合い、エンボを利用して南北に一本の試掘溝を掘削し、土壤観察にそなえた。午後より翌日にかけて壁面清掃を行ったが、想定していた築地、廻廊線などを物語る土壤構造を看取することはできず、自然堆積層が続いている。ただ、トレーニングの南端付近に土師器を含む黒褐色の落ち込みがみられ、追求する必要を感じた。このトレーニングは8日、11日、13日の3日間で写真撮影及び断面実測を実施した。黒褐色の落ち込み付近を除き、トレーニング部分は業者の運搬用トラックの道路として使用することを許可したが、上記の落ち込みの性格をさぐるため、落ち込み付近に直交する東西方向のトレーニングをうがち、25日から4日間を費し、平・断面の観察を行った。その結果、この落ち込みは溝であることが判明した。遺構の存在が予想されることを業者に伝え、とりえず二子窓址の調査に専念することとした。19日、20日に草刈りのあと、25日より本格的な発掘調査を開始した。

10月25日～11月26日（実質19日）

西半分の田の掘り下げ作業。遺構の確認は非常に困難で、現代の暗渠排水路が縦横に巡り、遺構の

御 堂 奥 遺 跡

破壊も著しい。I—C—1からは平安末から鎌倉初期と考えられる埴・灯明皿が多量に出土する。溝は約6m幅で田の北側に沿って湾曲しつつほぼ東西に流れ、その埋土中より酒津式及び王泊6層期に相当する上器、土錘などを検出した。

11月27日～12月15日（実質16日）

東半分の田面において遺構確認を急ぐ。途中でこの田に調査対象を変更したのは、予想される排土量にみあう土置き場を用意するためで、西半分の田よりレベルがかなり下がっているところから、1mも掘らない部位に湧水層があり、その上層は最近の搅乱層であることがわかった。従って、遺構の存在は皆無で、近代の石組み暗渠廃水路が確認された。田の北西端には池の名残りもみられたが、これもごく最近のものであることが現代陶器の出土ならびに層位関係から断定できた。

12月20日～12月25日（実質6日）

ふたたび西半分の田に移る。今まで3m×3mのグリッドで掘り下げを続行したが、畦畔をくずして9m×9mのグリッドに広げ清掃する。並行して下の田の断面の写真撮影及び実測を行う。

昭和47年1月6日～2月2日（実質21日）

断面の写真撮影、実測図作成及び遺構の検出にかかる。山からの流水と湧水によって排水作業に長時間を要したため、調査が順調に進行しなかった。ピットも数多く検出されたが、建物としてまとまったのは、わずかに1棟だけで、後日図面上で再検討したが、その他に建物として一定のまとまりをもつ柱痕はみられない。現地で山陽新幹線埋蔵文化財対策委員会を開催し、以後の発掘方法などについて対策委員各位からご意見を賜わった。

（葛原、池畠）

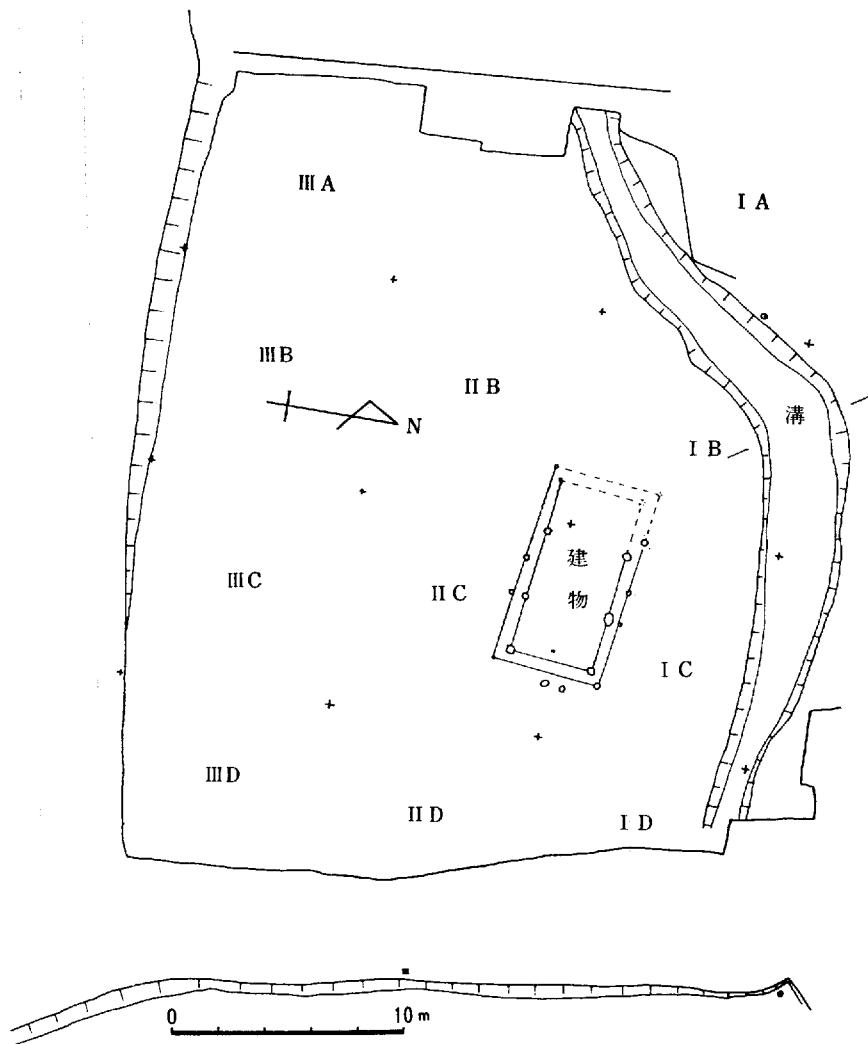
- 註一(1) 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』岡山県下出土の古瓦を集成したもので、第1集は写真集、第2集は拓本集となつておる、後進の手引書ともいえる。
- (2) 永山卯三郎『吉備郡史』上・中・下巻からなるが、上巻中に旧吉備郡を中心としその周辺地にある古代寺院址を紹介している。
- (3) 永山卯三郎『岡山県通史』上編・下編からなり、上編に県下古代寺院址の位置と出土瓦を掲載している。
- (4) 永山卯三郎『岡山県農地史』古代寺院址の位置図と一覧表がある。

第2章 遺構と遺物

建 物

一帯からかなり多くのピットを検出したがそれが確実に柱穴であるものは、数少い。小形の砂岩を礎石とした柱穴は2で、それを基準に全体の平面形態から、どうにかまとまる建物は1棟だけである。それは、N $82^{\circ}W$ に主軸をもつ1間×3間で東西に長い建物と考えられる。北西端の柱を検出できなかったがその

柱間は次の通りである。南北方向は、3.6mで天平尺に換算するとちょうど2間になり、東西方向の柱間は2.3m（約1.3間）2.8m（約1.5間）2.3m（約1.3間）となっている。また想定建物址の短辺東よりほぼ中間に柱穴が3個所あり、二つは建物址の外、他の一つは建物址の内にある。外の二つの柱穴は建物への階段または階段を支えた柱穴と思われる。内側の柱穴は、その支えではなかろうか。また、柱の外側には各々穴が一定の規格にもとづき配置され



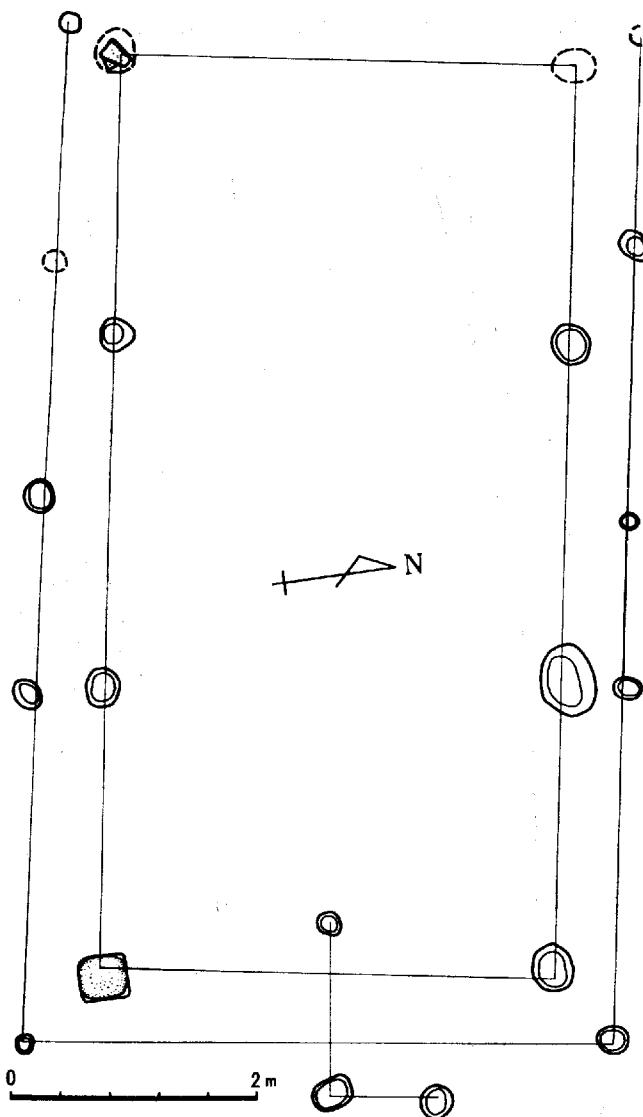
第1図 地形図

御 堂 奥 遺 跡

ている。建物の東側に建物と平行して位置する2本の柱は4.8m(約2.6間)を計る。建物の北側には、東西方向に2.8m(約1.5間), 1.3m(約0.7間), 2.2m(約1.2間)とあり、また建物の長辺南側には2.8m(約1.5間), 1.6m(約0.9間)と並ぶ。これら小穴の配列は上記建物址をとりまく縁を構成するものであろうか。後述する多くのわん・灯明皿が出たのはこの周辺であり、柱穴の中にも同種のわんがはいっていた。共伴遺物を列記すれば、次のとおりである。

塊

30個体以上の素焼きの塊が建物址の北辺部から出土している。器形には若干の個体差があるが、共



第2図 建物平面図 縮尺(1/60)

御 堂 奥 遺 跡

通点の方がむしろ多く、また一括遺物として取りあげた出土状況から同時期の碗と考えてよい。

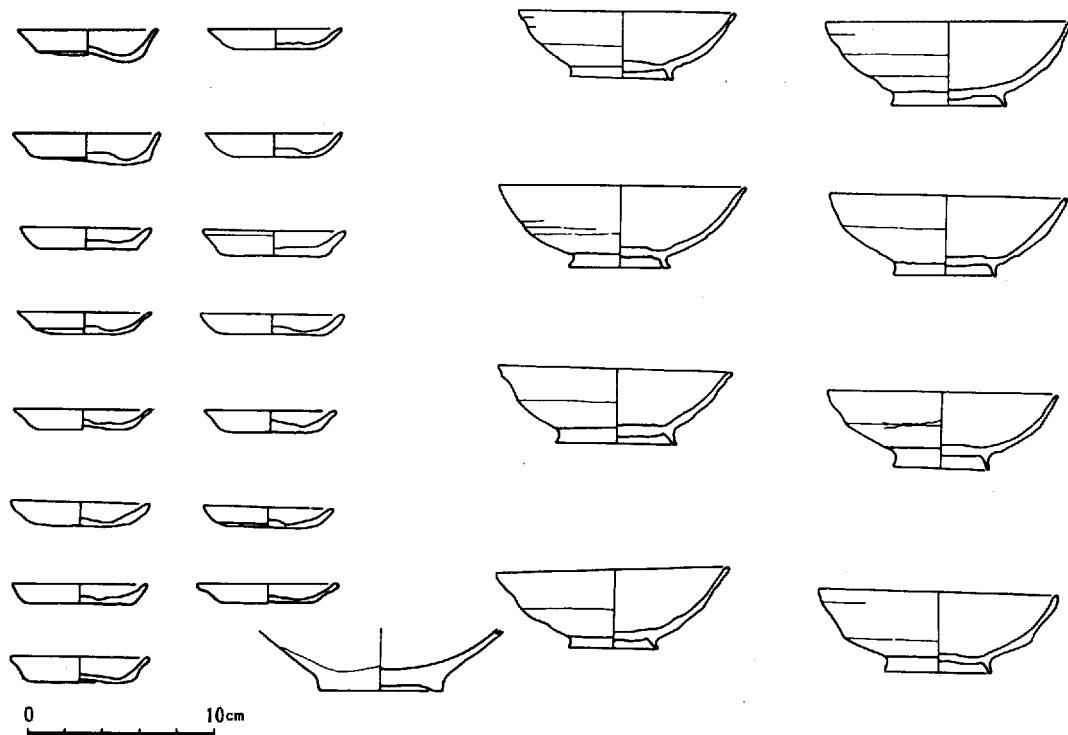
口径はかならずしも一様でなく、口縁端部の仕上げも幾分相異しているが、平均口径12cmで器高約4~4.5cmのうちにあり、高台はすべて「はりつけ高台」の形をとっている。高台はやや外方へふんばった形を保ち、その先端はやや尖形しているが、なおはっきりした底部をとどめている。体部は薄く引きだされ、口縁は丸くおさめられ、器肌は白灰色を呈し、胎土は細かい。こうした特徴は当地方で早島式土器としてしばしば紹介される土器にあたり、その時期は平安末期あるいは鎌倉初期に比定する。

灯 明 皿

多量の灯明皿が出土している。その形状は、口径7cm前後、器高1~1.5cmを測り、底部はヘラ切りに仕あげるなど、諸特徴は一様である。中には指圧痕のみられるものもあるが、胎土は細砂を多少含む良質粘土で、焼成も良好である。色調は白灰色で、上記の碗と同時期のものと考えられる。

白 磁

I-C区より白磁の底部が出土している。口縁部は欠失しているが、釉は内側全面と高台をのぞく外面にかかる。胎土は精製された粘土で焼成良好である。



第3図 建物周辺出土遺物 (1)

溝

調査区の北端近くに西から東へ流れる半月状の幅3mのU字溝が検出された。深さは約40cmをとどめるにすぎず、上部は過去に削平されたものと思われる。西側は宅造工事のコンクリート壁によって遮断され、続きを追求することができなかったが、おそらく、山裾をめぐり、谷頭へと通じていたものと思われる。東側は下の田で検出されずすでに底まで削平されていた。遺物は中央付近に集中していたがこれを層位的に分けることは不可能であった。西側に向け底がいくらか上昇しており西側には多くの礫が転がっていた。

ついで、溝中から発見した遺物について記述することにしよう。

土 器

多量の土器が出土した。磨滅しており文様不明のものも多い。

イ 壺形土器（第4図1～9）

器胴から、ゆるく外に曲がる短頸部に移り、外反する口縁部になるもの（1～4・6）と器胴上部から外反する口縁部になるもの（5）とがある。口縁端部の下方へのり出しへなく、口縁端はやや外反しながら上方に拡張され、面をつくる。口縁端内部に段をもつもの（1），ヘラ描沈線を施すもの（4）もある。底部はしっかりした平底を呈す。器胴内面はヘラけずりされているが、はけ目調整されているもの（7）もみられる。外面はヘラによってていねいになでられている。

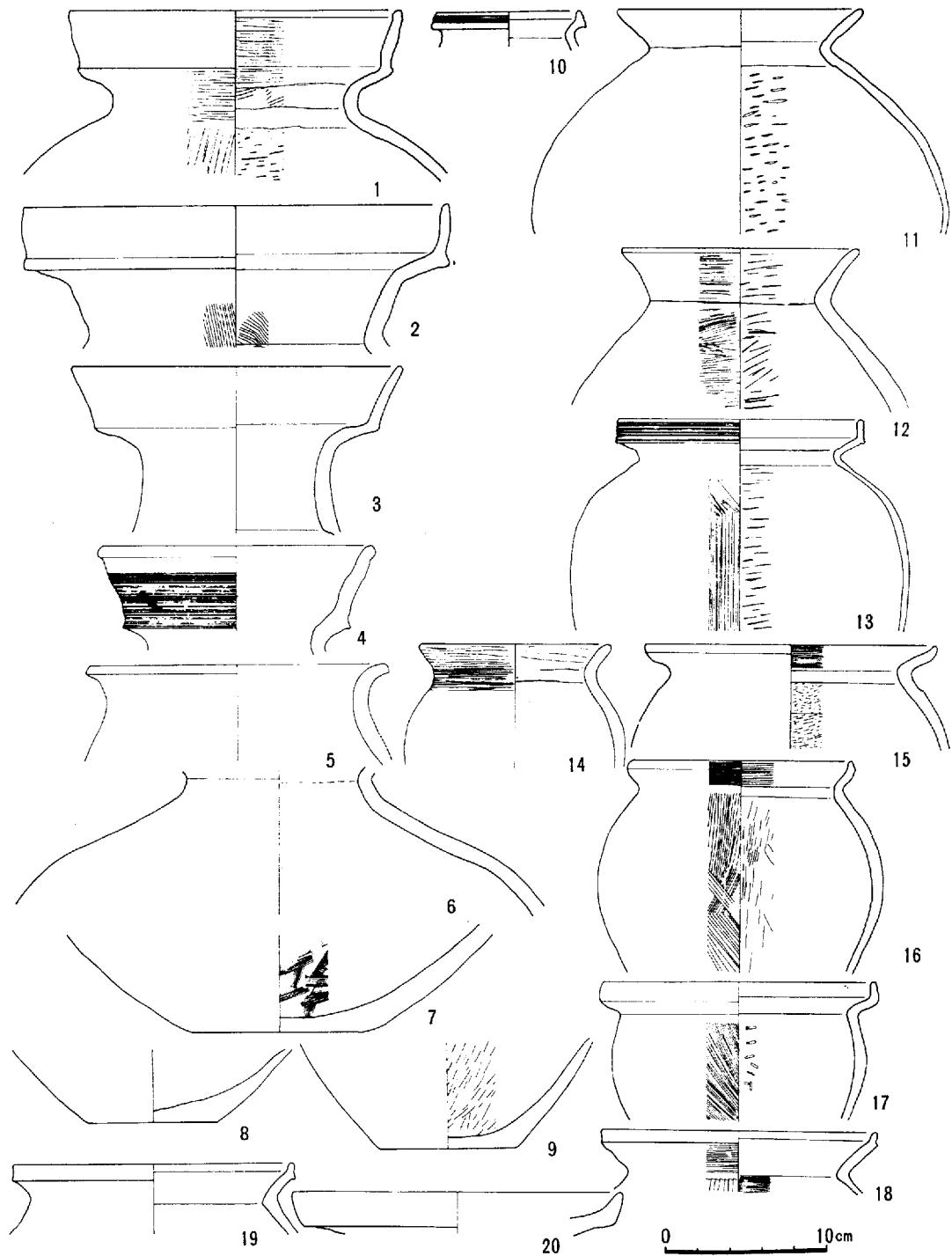
ロ 壺形土器（第4図・第5図10～35）

最大径が上方にある卵形の器胴から「く」の字状の外反する口縁部になる。口縁端は面をつくって上方に拡張されるもの（10・13・17～27）・わずかに上方へおれまがるもの（15・16）・丸みをもって終るもの（11・12・14）とがある。面をつくって上方へ拡張されるものの中には、その面に3本の凹線をほどこすもの（10）・7～8条の櫛描き沈線をほどこすもの（13・21～25）などがある。底部はしっかりした平底を呈すもの（29・30）とわずかに平底を残すもの（34）台付きのもの（35）がある。器胴内面はほとんどヘラけずりであるが、押圧整形のもの（34）・荒いはけ目のもの（28）もある。外面はヘラみがきのものがほとんどであり、はけなでのものもある。

ハ 高杯形土器（第5図36～44）

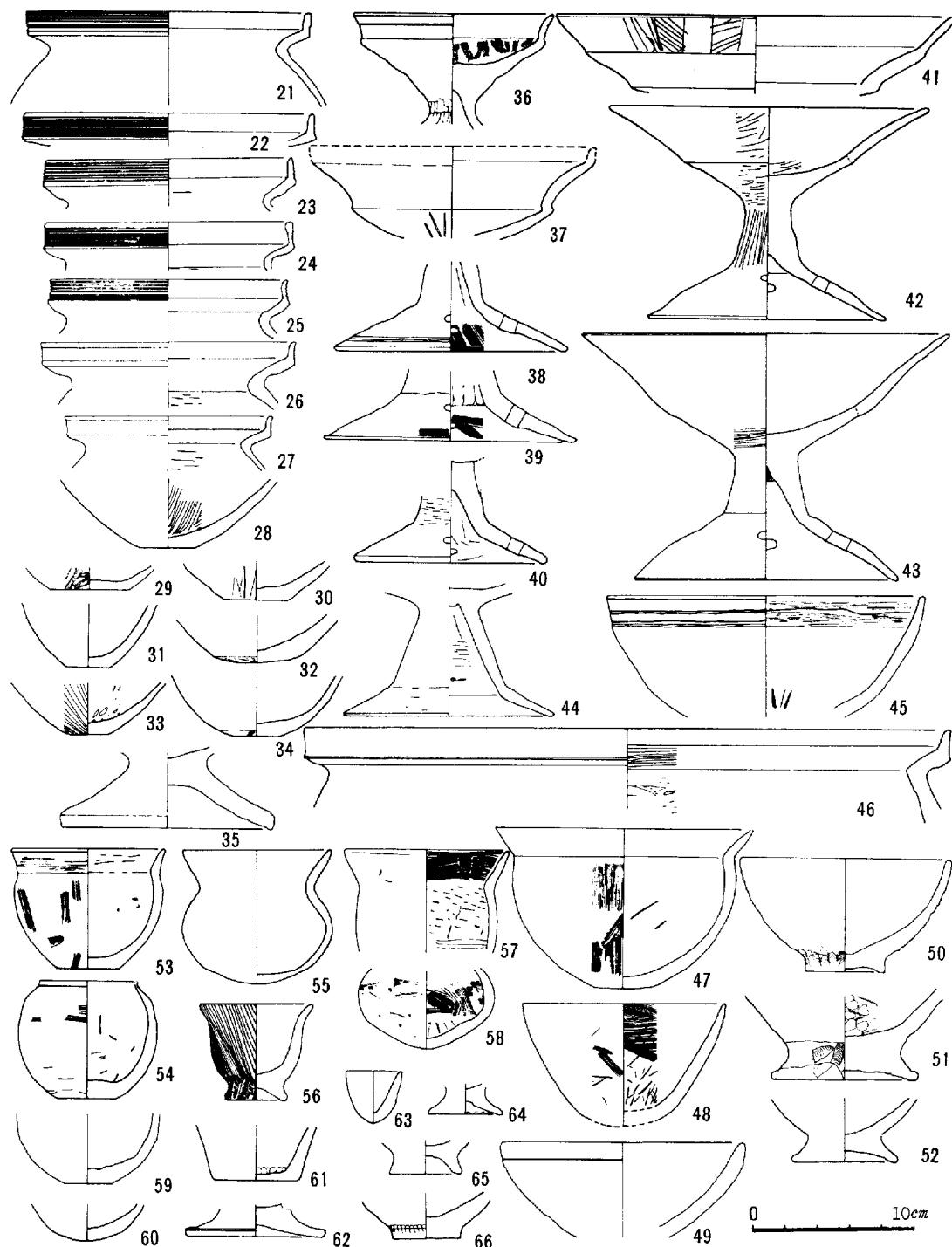
杯部はわん状の底部からやや外反しながらたちあがるもの（36）・下半部との間に稜をもち外反した口縁部の端が上方におれまがるもの（37）・三段にわたって外反の口縁にヘラ描き沈線による文様をもつもの（41）浅い下半部からやや外反しながらまっすぐのび、丸みをおびて終わるもの（42・43）がある。36の内面下半部のハケなどをのぞき、ヘラなでにより整形している。脚部は短脚でろうと状に開き4孔をもつもの（38～40）・筒状に近い支柱部から4孔をもち盤を伏せたように丸みをもった脚裾部へ移行するもの（42・43）・支柱部が外にまっすぐ開き、「く」の字状になって裾部へ移行するもの（44）がある。支柱部は全体が中空のもの（36・38・39・40・43・44）と下半が中空のもの（42）とがある。裾部は内外面はハケ目整形のもの（38・39）とヘラみがきのものがある。製作にあたっては杯部と脚部の2部分を接合したものと、杯部口縁と底面および脚部の3部分を接合したもの（42・43）がある。胎土は砂粒のすくない精選された土を使用したもの（38・39）・砂粒を含むものとがある。42は表面に化粧土を塗り、丹色を呈している。

御 堂 奥 遺 跡



第4図 溝出士の土器(1) 縮尺(1/4)

御 堂 奥 遺 跡



第5図 溝 出 土 の 土 器 (2) 縮尺 (1)

二 鉢形土器（第5図45～52）

口縁部が「く」の字に曲がるもの（46・47）とわん状にのびるもの（45・48～52）がある。底は丸みをもったもの（45・48）と小さい平底をもつもの（47）・台付きのもの（50～52）がある。内面はヘラけずりであるが51は底部近くを押圧で整形している。外面はヘラなで（46・48）・ハケ目整形（47）・押圧整形（45・49～52）がある。49には横位の沈線が1本ある。

三 小形土器（第5図53～62）

小形の土器が多く出土した。器形には壺形土器（54・55・58・59），甕形土器（53・56・57・62）鉢形土器（56）などがある。また，手づくね土器（63）・師塗式土器（註一5）（64）もある。

以上の土器のほとんどは酒津式土器（註一6）であり，その他に酒津式土器につづく古式土師器（註一7）（42～44・58・60・64）などが若干含まれている。

土 磬

溝の中より土磬が114点出土している。これらは孔のあけ方によって棒状両端穿孔土磬と管状土磬とに大別でき，さらに棒状両端穿孔土磬は両端の切断により片方ヘラ切りと両端ヘラ切りとに分れる。ここではこれらを各々1類・2類・3類と呼ぶことにする。その計測値は第1表に示したとおりである。（註一8）

1類は棒状両端穿孔土磬のうち一方のみをヘラ状工具で切り，片方は細くなっているものである。片方が折れ後述する類との区別がはっきりしないものもあるが焼成度等から考えその多くは1類に属するものと思われる。あわせて78点が出土している。細かい長石・石英・雲母粒を多量に含む砂質の胎土を使用し色調は褐色ないしは茶褐色を主体とし一部黒褐色を呈したものもある。一方の端はちぎったあと工具でなでて丸みを帯びているが，ちぎったままの形状を残しているものもある。他方の端部は，ちぎったままでなんら整形がなく細くなっている。整形は指でにぎりしめる程度であったと思われ，概して指の押圧痕を残している。穿孔はそのあと行われ孔の一端は盛りあがったままである。完形のものは62点で，長さは6.0cm～8.0cmの中にありその平均値は7.0cmである。幅は広いほうが1.6cm～2.5cm，狭いほうが0.8cm～1.7cmで幅の広狭の差は0.2cm～0.9cmである。重量は18.0g～39.1gのなかにあり平均28.5gである。孔は径が0.5cmないし0.6cmの円形のものがほとんどで一部0.7cmのものがある。0.7cmのものは第3類の穿孔径と同様である。

2類は1類と違い両端の径がほぼ同じである。両端ともちぎったあとで整形している。それは総数15点が出土している。全体の整形も1類よりていねいに工具でなでており，胎土・色調・焼成度は1類と大差ない。完形のものは12点で長さは6.7cm～9.2cmで平均値7.7cmと1類より少し長く，径は1.6cm前後のものが多い。重量は25.2～46.5gで平均32.2gである。孔径は1類とほぼ同一といってよい。

3類は管状土磬で出土数21点を数える。径が3.0cm前後で，両端はヘラ様工具をもって切っている。孔はヘラ切りのあとが穿孔され一方に土が盛りあがっている。色調は褐色を主体とし一部に黒褐色を呈する。胎土・焼成度は1類・2類と同様である。長さは4.0cm～5.0cmの中にあり平均4.63cmである。重量は52.7g～68.0gで平均58.4gである。孔径は一様に0.7cmで同一の工具が使用されたこ

御 堂 奥 遺 跡

とを示している。

石器および軽石製品（第6図13・14）

13は花崗岩製の叩き石である。半分欠けているが周辺には使用痕が残っている。中央部にはなにも使用痕はない。

14は軽石製品である。たて6.8cm、よこ5.2cm、厚さ3.8cmで凹凸のはげしいものである。ほとんど加工されていないが、数ヶ所にみがいたような痕跡がみられ、図の矢印ある2ヶ所にはひもずれのしたような痕跡がみられる。これは軽石であることと、ひもずれの位置からして浮子と思われる。

註—(5) 近藤義郎「能登式製塙土器の研究」『日本・塙業の研究』5 昭和37年

(6) 鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」「岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器」「弥生式土器集成」資料編 昭和33年

間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷出土の土器」『瀬戸内考古学』第2号 昭和33年

(7) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年において王泊6層、岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告』昭和47年において雄町14類と呼称されたものである。

(8) 重量は乾燥機にいれ、乾燥して計測した。その変化は次の通りであった。乾燥前29.5g、4時間後27.6g、6時間後27.3g(1)。乾燥前58.9g、5時間後56.5g、6時間後56.4g(97)。

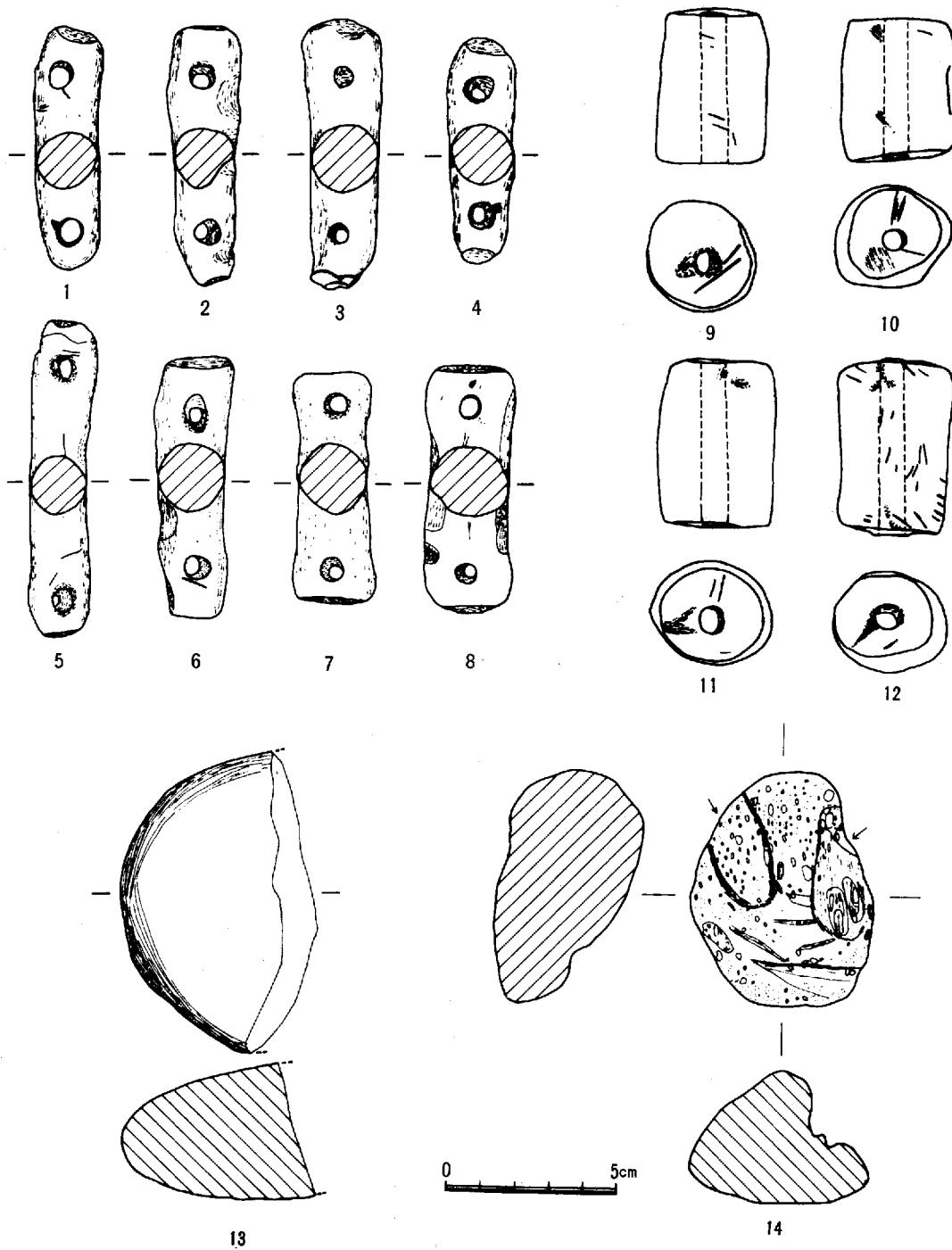
(土錘一覧表)

	類	長さ cm	径 cm	孔径 cm	重さ g		類	長さ cm	径 cm	孔径 cm	重さ g
1	1	6.7	1.3 2.2	0.5	27.3	22	タ	7.7	1.6 2.0	0.6	34.5
2	タ	7.7	1.5 1.7	0.55	29.7	23	タ	7.4	1.4 1.9	0.6	21.2
3	タ	7.4	1.3 2.0	0.6	26.3	24	タ	5.8(+α)	1.6 1.8	0.5	20.0(破)
4	タ	7.0	1.2 2.25	0.6	28.2	25	タ	6.5	1.2 2.0	0.65	24.9
5	タ	7.0	1.6 2.3	0.6	33.0	26	タ	6.1(+α)	1.7 1.7	0.55	20.1(破)
6	タ	7.5	1.4 2.3	0.5	37.1	27	タ	7.6	1.7 2.2	0.5	33.5
7	タ	5.6(+α)	1.8 ()	0.6	22.3(破)	28	タ	5.8(+α)	1.7 2.0	0.5	21.4(破)
8	タ	6.8	1.6 2.2	0.4	28.8	29	タ	7.8	1.6 2.1	0.6	39.1
9	タ	6.5	1.7 1.8	0.6	24.0	30	タ	6.9	1.5 1.8	0.55	25.5
10	タ	6.3	0.8 1.7	0.6	18.0	31	タ	7.0	1.7 2.0	0.6	25.0
11	タ	6.5	1.3 2.2	0.6	24.3(多少欠)	32	タ	6.5	1.5 2.2	0.65	29.9
12	タ	7.1	1.4 2.1	0.6	28.6	33	タ	6.3	1.4 2.0	0.7	26.5
13	タ	7.1	1.3 1.9	0.6	26.8	34	タ	6.7	1.3 2.0	0.6	27.0
14	タ	6.0	1.2 1.6	0.6	23.0	35	タ	7.6	1.5 2.0	0.55	27.5
15	タ	6.9	1.5 2.2	0.6	31.2	36	タ	6.5	1.4 1.9	0.6	23.7
16	タ	()	1.4 ()	0.5	11.5(破)	37	タ	7.1	1.3 1.9	0.6	30.2
17	タ	7.6	1.3 2.1	0.5	35.0	38	タ	7.5	1.3 1.8	0.5	24.3
18	タ	4.4(+α)	1.5 ()	0.6	14.0(破)	39	タ	7.1	1.4 2.2	0.5	28.0
19	タ	7.8	1.2 1.8	0.5	25.9	40	タ	7.4	1.3 2.0	1.0	26.5
20	タ	7.1	1.7 2.4	0.6	36.2	41	タ	6.75	1.6 1.9	0.65	23.6
21	タ	計測不能	—	—	3.5(破)	42	タ	6.4	1.3 1.9	0.6	20.5

御 堂 奥 遺 跡

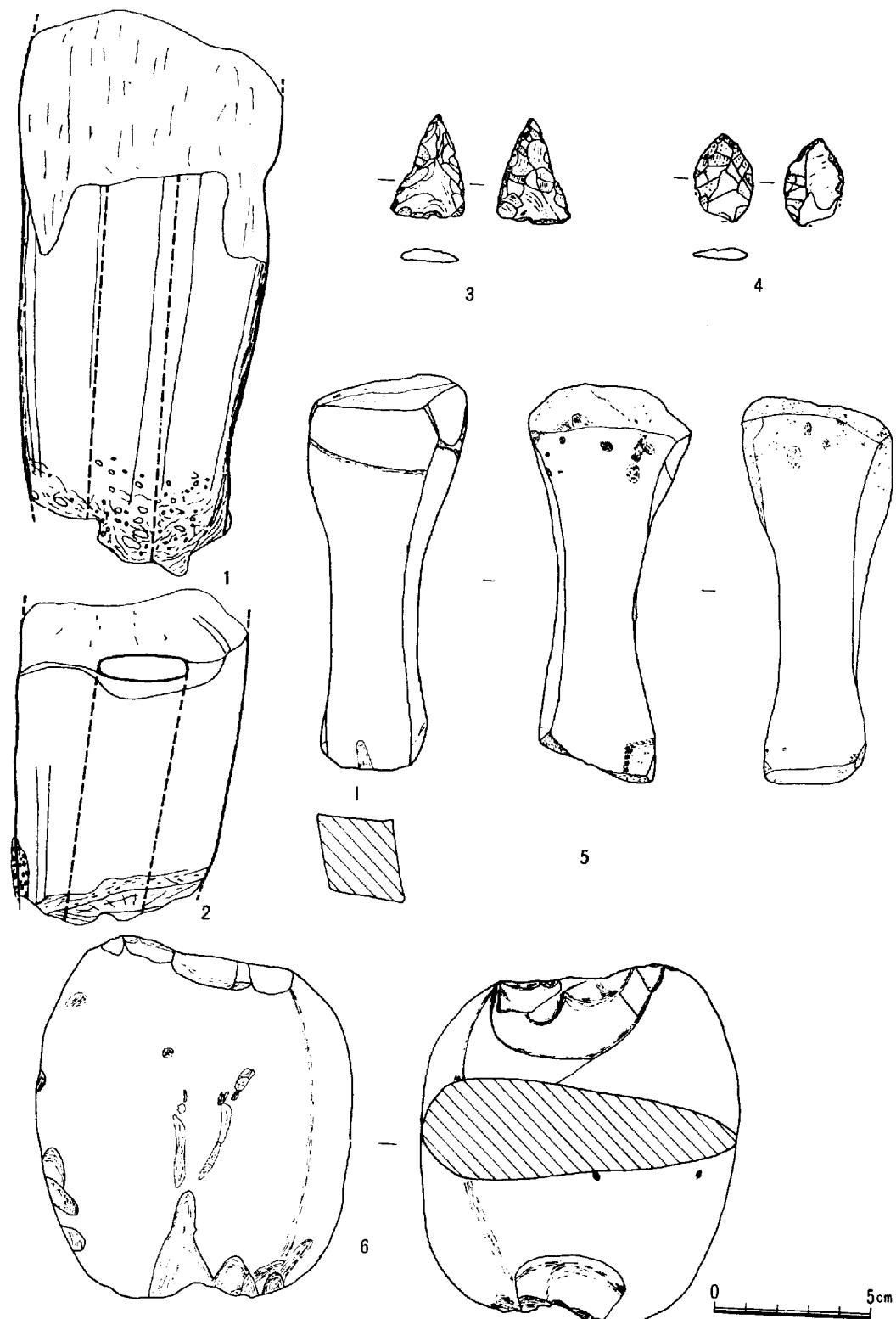
類	長さ	径	孔径	重さ	g	類	長さ	径	孔径	重さ	g
cm	cm	cm	cm	g	cm	cm	cm	cm	cm	g	cm
43	1	7.5	1.0	2.2	0.65	34.7	79	2	9.2	1.7	34.9
44	々	6.5	1.4	2.0	0.6	22.5	80	々	7.6	1.6 2.1×2.2	37.5
45	々	7.1	1.3	1.7	0.6	24.8	81	々	6.7	2.0×2.5	38.4
46	々	6.5	1.3	1.6	0.6	19.5	82	々	7.7	1.6×1.9	31.9
47	々	7.1	1.3	1.9	0.65	29.4	83	々	8.0	1.6×1.6	32.5
48	々	7.3	1.3	2.0	0.6	29.2	84	々	8.3	1.7×1.6	34.4
49	々	6.8	1.2	2.0	0.5	29.6	85	々	8.0(+α)	1.5×1.5	33.6(破)
50	々	7.6	1.4	2.3	0.6	31.8	86	々	7.2	1.9×2.6	46.5
51	々	7.9	1.1	2.0	0.55	35.4	87	々	8.1	1.5×1.5	26.5
52	々	6.4	1.5	2.4	0.5	30.1	88	々	7.4	1.7×1.9	26.7
53	々	6.8	1.2	1.9	0.7	27.0	89	々	8.2	1.6×1.6	33.2
54	々	6.4(+α)	1.6	1.6	0.55	20.3(破)	90	々	7.6	1.5×1.5	25.9
55	々	6.9	1.8	2.5	0.55	35.9	91	々	6.7	1.6×1.6	25.2
56	々	7.5	1.2	2.2	0.6	28.3	92	々	7.1(+α)	()×1.6	27.4(破)
57	々	7.0	1.3	1.6	0.6	25.3	93	々	7.2(+α)	1.3×1.6	24.3
58	々	6.8	1.1	2.1	0.7	28.0	94	3	4.45	3.1×3.0	56.4
59	々	7.5	1.3	2.2	0.55	32.1	95	々	4.2	2.9×3.2	52.7
60	々	6.3	1.4	2.2	0.7	27.6	96	々	4.9	3.0×3.25	64.7
61	々	8.0	1.7	2.3	0.6	39.1	97	々	4.8	3.1×3.6	68.0
62	々	6.3	1.6	2.4	0.7	29.5	98	々	4.5	3.2×2.9	54.4
63	々	7.0	1.4	1.8	0.7	28.5	99	々	4.4	3.0×3.2	53.1
64	々	7.6	1.3	2.2	0.6	29.2	100	々	4.75	3.2×3.4	66.8
65	々	7.2	1.7	2.3	0.6	32.7	101	々	4.5	3.1×3.4	60.3
66	々	7.2	1.5	2.2	0.6	35.4	102	々	4.8	3.3×3.0	60.8
67	々	7.1	1.4	1.8	0.5	25.5	103	々	4.0	3.2×3.1	54.6
68	々	6.3	1.3	2.1	0.6	25.1	104	々	4.7	3.3×3.1	62.3
69	々	7.3	1.1	2.1	0.6	29.6	105	々	5.0	3.2×3.0	66.5
70	々	6.2	1.3	2.0	0.7	25.9	106	々	4.4	3.2×2.9	54.6
71	々	6.9	1.0	1.7	0.55	23.2	107	々	4.9	3.2×3.1	65.6
72	々	5.9(+α)	1.9()	0.7	19.1(破)		108	々	5.0	3.0×3.1	61.6
73	々	6.0(+α)	2.2()	0.55	23.8(々)		109	々	4.5	3.2×3.1	60.0
74	々	5.5(+α)	1.6()	0.6	18.6(々)		110	々	4.7	3.2×3.0	56.5
75	々	4.8(+α)	1.6()	0.6	16.2(々)		111	々	4.4	3.0×3.2	53.5
76	々	5.1(+α)	2.0()	0.6	22.7(々)		112	々	5.0	3.3×2.9	58.9
77	々	4.1(+α)	1.8()	0.55	15.0(々)		113	々	4.8	3.0×3.0	56.6
78	々	3.4(+α)	1.8()	0.6	11.8(々)		114	々	4.6	2.9×3.0	52.8

御 堂 奥 遺 跡



第6図 溝出上の土錘・石器

御 堂 奥 遺 跡



第7図 ふいご口・石器 縮尺(½)

その他の遺物

ここに記述する遺物はかならずしも遺構に伴うものかどうか、発掘途上、判定し得なかつたものであるが詳細に報告して後日に備えたい。

ふ い ご 口

溝の南岸附近より4個体以上のふいご羽口が出土している。付近に遺構は検出できなかつたが、多くの鉄滓が出土していることから鍛冶工房が存在していた可能性がある。筒形を残している4個体はすべて溶融状態を示し、長さ7.5cm～17cmで折損している。径は先端がもっとも細くしたいに太くなっている。計測値を示すと以下のとおりである。孔径は2cmとほぼ一致しており孔の形は円形である。外面には木ないしは竹と思われる圧痕が残っており、いくらか凹凸がみられる。胎土は1mm位の石英粒を含む砂質土で少量植物せんいも含まれている。焼成度は普通であるが先端は高熱によっていくらかもろくなつておる、表面には鉄が溶けそれが付着している。他の小片は淡茶褐色をしており溶融状態を残していないが部位は不明である。

石 器

調査区域内には4点の石器の他に、若干の剥片がみられた。

石鎌は2点みられた。ともに平基式のもので、3が二等辺三角形、4は基部に最近の打痕がみられるが柳葉形を呈している。縁辺には細かい押圧剝離がみられ先端はするどい。サヌカイト製である。

砥石はI—A区のピット内から出土したものである。長さ12.5cm、幅2.5cmを測る。両端に自然面を残すものの、長軸に沿つて四面ともに使用痕跡がみられよく使われている。その使用痕跡からしてある程度の幅をもつたものを砥いだようである。花崗岩を使用している。

石錘はIII—A区から出土している。長径11.5cm、短径10.5cmの楕円形をした円礫の両端を両面から打ち欠き紐かけとしている。重量516gを測る。

(池畠・葛原)

第3章 まとめにかえて

前章で報告したとおり、本調査の地域における遺構の存在形態と性格は大きく二時期にわけられる。ひとつは当地が御堂奥廃寺、あるいは二子荒神元の御堂などと呼称されたように寺院址との関連においてとらえられる遺構である。この点についてまとめるならば、まさに荒神元の「御堂」という呼称が示すように「堂」としての性格が認められる。その建物は1間×3間を基本とし周囲に縁を巡らした建物で、必ずしも大規模な建築とはいがたいが柱の根ぐされをふせぐために柱穴の中には小さな礎石をもつものもみられた。この建物と共に伴する遺物は30個体以上のわんと数十個体の灯明皿でこれらの遺物は寺に普遍的にみられるものである。しかしながらその他の柱穴は規模が小さく七堂伽藍を備えた寺の存在は考えられない。まさに御堂の小字名に合致した遺構・遺跡である。なお、調査域の西方龍王山山頂に所在する二子堂屋敷遺跡—礎石若干と古瓦が存するという一との関係についても奥の院と別院といった関係があるいは想定されるかもしれないが、その存続の時期決定の検討を待たなければ正確な位置づけはむずかしい。

御堂がつくられた平安末期～鎌倉初期より以前、弥生終末期～古墳初頭に一定の集落が形成されていた事実がはっきりと認められた。必ずしも遺跡の残存状況は良好とはいえなかつたが主要には溝遺構の中から同期の遺物をかなり多量に採集することができ、土錘とともに石錘・浮子・師楽式土器などがみられこの集団が海浜の対象に対してかなりしばしば働きかけていたことをものがたっている。

114個という多量の出土をみた3種類の土錘について、その形態的特徴をまとめておこう。

先述した3種類の土錘を比較した場合、孔径においてほぼ同様の数値を示すこと、焼成度・胎土・色調が一致することなどによって、一時期に作られたことが考えられる。また、第1類と第2類のちがいは別として第3類はその形態のちがい・重量のちがいなどから考え、用途において他の2類と異なることが予想される。第1類・第2類のような棒状両端穿孔土錘は瀬戸内海沿岸（註-9）・大阪湾沿岸（註-10）・紀伊半島（註-11）を中心として出土し、鹿児島（註-12）でも出土している。そして時期的には弥生時代前期のもの（註-13）もみられるが多くは弥生時代後期から古墳時代前期にかけてみられるようである。岡山県では岡山市雄町遺跡（註-14）・同川入遺跡（註-15）・倉敷市上東遺跡（註-16）笠岡市王泊遺跡（註-17）などから出土している。本遺跡における伴出土器が示すとおり、また雄町遺跡例などから考え、これらの土錘は古墳時代前期に属するものと思われる。

（池畠・葛原）

註-9 福山市ザブ遺跡・同草戸千軒町遺跡などにみられる。

広島県教育委員会「福山市ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』昭和48年

広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡 第9・10次発掘調査概報』昭和48年

如) 兵庫県播磨大中遺跡・大阪府遠里小野遺跡・同勝部遺跡・同池上遺跡・同難波宮跡などにみられる。

播磨町教育委員会『播磨大中』昭和30年

瀬川芳則「住吉区の上代遺跡」『社会科と教育』昭和34年

豊中市教育委員会『勝部遺跡』昭和47年

御 堂 奥 遺 跡

中尾芳治「難波宮造宮前の遺跡調査報告」『難波宮址の研究』 昭和40年

(1) 和歌山県鷺島遺跡・関戸遺跡などにみられる。

巽三郎・中村貞史「鷺島遺跡発掘調査報告書」『熊野路考古』第5号 昭和44年

(2) 鹿児島市七社遺跡で10点出土している。

出口浩「吉野町七社遺跡」『鹿児島考古』第8号 昭和48年

(3) 勝部遺跡では前期の遺構に伴っている。

(4) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』第2集 昭和47年

(5) 本書 第II部所収

(6) 本書 第III部所収

(7) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 昭和31年



1 御堂奥遺跡（西より）



2 溝（西より）

図版 2



1 I-A 区の碗・灯明皿出土状況



2 柱穴内出土の 壺



土 鍾

図版 4



灯明皿・碗・かまと・土鍋

第Ⅴ部 二子御堂奥古窯址群

目 次

第1章	調査の経過 (葛原克人・池畠耕一)	257
第2章	遺跡の位置と環境 (葛原)	260
第3章	窯体の構造 (葛原・池畠)	266
第4章	付設遺構 (池畠・葛原)	278
第5章	出土遺物 (葛原・池畠)	283
第6章	むすびにかえて (葛原・池畠)	299

図 目 次

第1図	松島北口地内土壤柱状図 (作成: 葛原)	261
第2図	二子御堂奥古窯址群と備中南部古代寺院址 (作成: 葛原)	264
第3図	二子御堂奥古窯址群配置図 (実測: 葛原・池畠, 製図: 葛原)	265
第4図	第4号窯煙道部の平瓦 (拓影: 樋口啓子, 実測・製図: 池畠)	270
第5図	第4号窯出土の鉄器 (実測・製図: 池畠)	271
第6図	第1号窯平・断面図 (実測・製図: 葛原)	273
第7図	第2号窯平・断面図 (実測・製図: 葛原)	274
第8図	第3号窯平・断面図 (実測・製図: 葛原)	275
第9図	第4号窯平・断面図 (実測・製図: 池畠)	276
第10図	第5号窯平・断面図 (実測・製図: 葛原)	277
第11-1図	灰原主軸直交断面図 (東より) X-X' (実測・製図: 池畠)	279
第11-2図	灰原主軸直交断面図 (東より) Y-Y' (実測: 葛原, 製図: 池畠)	279
第12-1図	灰原縦断面図 (北より) U-U' (実測・製図: 葛原)	280
第12-2図	灰原縦断面図 (南より) V-V' (実測: 葛原, 製図: 池畠)	280
第13図	第4号窯前庭ピット平・断面図 (実測・製図: 池畠)	281
第14図	第4号窯前庭ピット出土の瓦 (拓影・実測・製図: 池畠)	282
第15図	軒丸瓦 (1) (拓影: 樋口・池畠, 実測: 葛原, 製図: 池畠)	283
第16図	軒丸瓦 (2) (拓影: 樋口・池畠, 実測: 葛原・池畠, 製図: 池畠)	284
第17図	軒丸瓦 (3) (拓影: 樋口, 実測: 伊藤晃, 製図: 池畠)	285
第18図	軒平瓦 (1) (拓影: 池畠, 実測: 伊藤・池畠, 製図: 池畠)	286
第19図	軒平瓦 (2) (拓影・実測・製図: 池畠)	287
第20図	軒平瓦 (3) (拓影・実測・製図: 池畠)	288
第21図	丸瓦 (拓影・実測・製図: 池畠)	289
第22図	平瓦 (1) (拓影: 樋口, 実測・製図: 池畠)	291
第23図	平瓦 (2) 塙 (拓影: 樋口, 実測・製図: 池畠)	292
第24図	須恵器 (1) (実測: 葛原・伊藤, 製図: 葛原)	296

- 第25図 須恵器（2）（実測：葛原・伊藤：製図：葛原） 297
 第26図 須恵器（3）（実測・製図：葛原） 298

図 版 目 次

図版 1—1	二子御堂奥古窯址群全景（東から）（撮影：葛原）	1
図版 1—2	第1号窯窯体（東から）（撮影：葛原）	1
図版 2—1	第1号窯煙道部（東から）（撮影：葛原）	2
図版 2—2	第1号窯焚口部（東から）（撮影：葛原）	2
図版 3—1	第2号窯窯体（東から）（撮影：葛原）	3
図版 3—2	第2号窯焚口及び前庭部（北西から）（撮影：葛原）	3
図版 4—1	第3号窯煙道部（上方から）（撮影：池畠）	4
図版 4—2	第3号窯窯体（東から）（撮影：葛原）	4
図版 5—1	第4号窯窯体（東から）（撮影：池畠）	5
図版 5—2	灰原主軸直交断面（東から）（撮影：池畠）	5
図版 6—1	第4号窯前庭ピット（上方から）（撮影：池畠）	6
図版 6—2	同ピット小孔（上方から）（撮影：池畠）	6
図版 7	軒丸瓦瓦当面表裏（1類・2類）（撮影：上西節雄）	7
図版 8	軒丸瓦瓦当面表裏（3類～6類）（撮影：上西）	8
図版 9	軒 平 瓦（1類～4類）（撮影：上西）	9
図版10	平 瓦 及 び 塼（撮影：上西）	10
図版11	須 恵 器（1）（撮影：上西）	11
図版12	須 恵 器（2）（撮影：上西）	12

第1章 調査の経過

都窪郡庄村二子地内の龍王様が祭られた山裾付近から古瓦が数多く出土することは、かなり以前から、地元郷土史家、板谷重郎治、吉田謙三、内田謙などの各氏をはじめ、中備史談会の会員の間ではひろく知られていたらしい。この事実を初めて公表したのは水原岩太郎氏で、昭和7年「吉備考古」(15号) (註一)に紹介されて以来、同遺跡の存在が周知されるに至ったといえる。もっとも、鎧瓦とともに窯壁の一部を採集した同氏は、その事実を紹介したにとどまり、発掘調査を実施したわけではなく、従って、遺跡の性格を問うまでの考察は当然なされていない状況であった。その後昭和20年代後半から30年代初頭にかけて、県内の考古学研究者の幾人かは、たびたび現地を踏査して、壁体、灰原などの確認を行い、確実に窯址であることを見極めその時期判定を試みている(註二)。その後急激に宅造ブームがおとずれ、一帯の山裾は、くり返し造成工事を受けたが、不動産業者の趨勢でもある資金ぐり、その他の理由によって、造成はなされながらも、地上物件が建設されるまでには至らない状況であった。そうして宅造工事を目のあたりにし、岡山県教育委員会としては、すでに消滅した遺跡であるとあやまった予測をしていたが、山陽新幹線建設に伴う遺跡の分布調査を実施したところ、一人の委員が非常に淡い灰層であったにもかかわらず遺構の存在を指摘し、また別の委員は須恵器の小破片を採集するなどの成果を得た。ところが、これらの発見・採集の地域は本線敷に近接しているものの全く路線敷外であったが、その事実確認を急ぐよう示唆され、国鉄折衝を重ねると倉敷隧道建設に伴う送電施設など付帯工事が集中する場所に付合していたため、事前に発掘調査することになったところである。上記分布調査がなされなかったなら、全く日の目をみることのなかった遺跡で、従前からのご指摘とともに分布調査に参加された研究者各位に、ここで深く謝意を表したいと思う。以下、発掘日誌にもとづき、主要な調査経過を略述しておこう。

発掘調査日誌抄

- 8月13日……測量器材、発掘機材等を搬入。最終的に作業員の人数等依頼。
- 8月16日……発掘用機材を搬入。一部草木の伐採。S = 1/20で地形の平板測量を開始。
- 8月17日……地元の作業員が参加して、本格的に発掘調査を開始。現地で二子窯址について予測される遺構のあり方や作業内容を説明した後、窯体周辺の清掃と伐採作業。崖の切断作業にかかり、窯体幅の確認を急ぐ。灰原には隧道工事による堆土が盛りつけてあったため重機によってこれを除去。
- 8月18日……3 × 3 mのグリッドを設定し、別添地形図に記入したとおり、1区～10区、01区～010区の区割りを行う。
- 8月19日……崖面の断面実測を実施。各区の掘り下げ続行。
- 8月21日……2区、3区、4区の掘り下げを続行。2区は窯体確認のため、窯体主軸線に沿いトレーナー掘りを行う。7区の西側にゆるやかなU字形をした厚い灰層を確認。窯と灰原の関係を追求する

ため宅造時の盛土を排除。

8月25日……窯体の方向確認のため1区のセンターラインの北側にトレンチをいれる。上師質土器と須恵器の焼出土。7区、03区、04区を灰原上面まで掘り下げる。各区より重孤文軒平瓦、03区より二子第5類の軒平瓦が出土。

8月26日……01区の窯体追求。有段式窯で瓦を下に敷いているらしい。1区は灰層を掘りあげ、2区、03区、04区は灰原上面まで掘り下げ。03区、04区は完了。5区、7区、05区の掘り下げを続行。窯体部周辺の地形測量を1/50の縮尺で実施。

8月29日……排水作業のあと、01区、6区の窯体を追求。6区の灰層が窯体中のものと確認されたため、北側を1号窯、南側を2号窯と仮称する。小野一臣教諭の引率のもとに玉島高校地歴クラブ員が応援。

9月2日……地元の人達により、龍王山麓の北側から谷の入口付近に古瓦の出土地点があるとの話を聞き、2ヶ所にトレンチを設定して掘り下げを開始。なお、1号窯および2号窯の灰原上には、まだ仮設小屋があるので業者の下請けによって小屋の撤去作業が進められる。

9月4日……第2地点の南北トレンチを除き、岩盤に到達したが、遺構は検出されなかった。

9月5日……新たに設定した8地区の排土作業。2基の窯の清掃をして、ほぼ完全に全容を出す。玉島高校地歴クラブ員12名応援。

9月10日……雨のため発掘作業は休み。遺物の整理。国鉄、業者と山陽新幹線岡山以西の埋蔵文化財発掘調査について会議を開く。

8月13日……8区の瓦層は再堆積で、その直下のプライマリーな灰原上層まで掘り進める。この区より東に向かって急傾斜。9区の黒灰色層は一時の地表らしい。

9月14日……3区灰原の瓦群を清掃のあと写真撮影をして取りあげ、さらに掘り下げを続行。4区の灰原を掘り下げ、二子第6類の軒丸瓦を検出。地山に近い面まで掘り下げを終了。

9月16日……04区と09区の掘り下げを続け、09区は地山まで掘り下げを完了。3区の灰原を清掃。グリッド位置と周辺を含む窯体などをS=1/50の平板におとす。

9月20日……3区、03区の断面図を完成。3区灰原の瓦を清掃のあと写真撮影をし、取りあげる。軒瓦など多量に出土。1号窯跡の煙道部の排土。04区の地山は北へ向かって傾斜。9区は地山までの途中に多量の礫を含み、地山はかなり深い。

9月23日……1号窯、2号窯の検出を急ぐ。両窯とも有段式であることが判明。窯を写真撮影。

9月24日……1号窯の煙出し部分を上から追求し確認。3区の灰原を掘り下げる。灰層は、炭を多量に含み黒色を呈している上部と焼土を包含して赤褐色色調の下部とに分かれ、上部より二子第2類の軒丸瓦が出土。

9月27日……3区灰原の掘り下げによって須恵器の単純層のあることが判明。

9月30日……1号窯前庭部の南半を掘り下げる。3区、4区の掘り下げにより3区に窯に伴う溝状の遺構を検出。

10月2日……8区の断面に窯壁があり、別の窯の残存を予測。2号窯の前庭部を半分掘り下げる。瓦の水洗い。今日と明日の両日を遺跡保護調査団の現地見学会とする。

10月3日……1号窯、2号窯の平面図作成のための割り付け作業。3区西壁を清掃し、写真撮影。全体写真の撮影。

10月5日……3区西壁の実測完了。畦畔除去。9区西壁の実測。1号窯前庭部を掘り下げ、平面実測を開始。瓦の水洗いと注記。

10月9日……2号窯の前庭部を清掃し、写真を撮影。1号窯と2号窯の間の排土、2号窯の前庭にはピットが4ないし5ある。遺物の水洗い。

10月11日……隧道工事のすぐ西にあるアーチ形をした層が窯らしいので検出を開始。灰原を地山確認のため掘り下げる。

10月12日……3号窯をほぼ検出。無段無階の窖窯で焼成室には21個の円形掘り込みを有す。

10月15日……3号窯の平面実測を開始。1号窯の煙道部、4号窯の掘り下げを進める。2号窯の焼成室をおおっている粘土をはぎとり床の検出に努める。

10月18日……3号窯の実測を続行。4号窯は煙道部に瓦の並べられた窯であるが、形態不明。1号窯断面の実測。

10月19日……1号窯の実測を続行。3号窯は実測を完了し、埋めもどしを始める。床面にはナイロンシート一面に敷き、2号窯東方にある細砂を埋める。

10月22日……図面整理と遺物の水洗い、注記。午後より周辺の分布調査を試みる。

10月25日……4号窯の掘り下げ。本日より御堂奥遺跡の本格的調査を開始。

10月26日……4号窯前庭にピットを発見。

12月15日……1号窯、2号窯の実測が完了したので、2号窯の瓦を全て取りあげる。

12月20日……4号窯の実測。

12月21日……4号窯前庭部のピットを清掃後写真撮影、実測。ピットの中には円形の小ピットがあり、東に向かって小さい別の溝がある。

12月22日……4号窯前庭部のピットの実測と写真撮影を終え、二子窯址群の発掘調査を完了。

1月22日……山陽新幹線埋蔵文化財対策委員会を現地で開催し、今後の保存方法などについて意見を聴取。

1月27日……遺物の水洗いと注記を完了。

(葛原、池畠)

- 註—(1) 水原岩太郎『吉備考古』第15号、昭和7年、歴史的な文献であり少しばかり引用しておこう。「夫ヨリ坪井氏等ノ嚮導ニヨリ字御堂ノ奥ト称スル所ヲ見ルニ、鎌倉期ノ古瓦破片散在セリ、其頃堂宇ノアリシモノノ如シ」次に「草屋敷ト称スル山上ニ登ル見ルニ、又古瓦破片ノ多数存在セルアル。其年代ハ平安期ノモナタリ。又窯壁ノ破片モアリ。此所ハ瓦ノ窯址タル事ヲ知ル可シ。案ズルニ此ノ山上ニ堂宇ヲ建立スルニ当リテ其用瓦ヲ製造シタルモノナル可シ、先年此所ヨリハ父鬼瓦ノ破片ヲ発見セラレアリ」云々。(・・一著者)
- (2) 春成秀爾氏の教示によれば、同誌16号においても奈良朝の古瓦を採集した記事を伝えているという。西川宏「吉備地方古瓦発見地名表(備中、補遺1)」「古代吉備」第3集 昭和34年表にまとめ、8番めに「御堂奥窯址」として紹介している。

第2章 遺跡の位置と環境

ここに報告する5基の窯体と若干の付属施設は、倉敷市二子地内に所在するところからかつて字名を付し二子窯址として略報した遺跡である（註一）。ところで、本調査は、山陽新幹線付帯施設の工事に伴って、龍王山東斜面約500m²を対象に発掘した結果検出した遺構・遺物の整理結果を報告するものであり、将来、付近から同種の遺跡が発見される可能性を有するとともに、先学による同地出土の遺物もしばしば紹介されているところから、以後の混乱を避けるため、二子御堂奥古窯址群と命名し、各窯体は二子御堂奥古窯址第1号窯～同第5号窯として記述することにしたい。

須恵器及び瓦を焼成した本古窯址群は、旧都窪郡庄村二子、龍王山東斜面の比高約15mの部位にあって、等高線と直交又は直交にちかい方位をもって構築されている。この地は、「倭名抄」（註二）あるいは「続日本紀」（註三）などの古代行政単位に従えば、備中國都宇郡深井（不加為・布加井）（註四）郷に所属すると考えられる（註五）。まず、周辺の環境について記すと、本窯址群の位置する龍王山東斜面の法足は300mばかり東方へのびて狭小ないくつかの階段状の山面となり、さらに広大で肥沃な水田が東方及び南方へ展開する。これがさきに報告のあったいわゆる上東平野で約1.5km東には「備中國足守庄絵図」（註六）に描かれた大井川（現在、通称足守川）が南流している。そして、南約1kmには、現在国道2号線がほぼ東西に走向し、その南には、早島、帶江、丹生などの集落地をのせた比高約30mの低丘陵が横たわり、さらに南方15kmにしてはじめて瀬戸内の海岸線にいたる。その間は、岡山における一大穀倉地帯であるが、児島湾をふくむ広義の岡山平野は、周知のとおり、河川の土砂運搬作用によって形成された単なる扇状地ではなく、時代をおって積み上げられた開拓の方向を示すもので、本格的には近世以降実施された人為的干拓による歴史的平野なのである。近世干拓地を除去した岡山平野は約5,000haで実に現状の5分の1にすぎない（註七）。したがって、本窯址群の操業した奈良時代前後における海岸線を巨視的にとらえるならば、上記低丘陵の南に施工された著名な「宇喜多堤」（註八）の築堤工事が16世紀であった史実は重要な手がかりとなり、低丘陵以南はなおこの時点まで海水の侵入を許していた状況が想定される。また、初期庄園の存在形態から遡り的に開田の画期を類推したばあい、たとえば絵図をとどめる備前国大豆川庄「荒沼一所」（註九）の比定地の等高線が早島低丘陵北側付近にあたることも注視されなければならない。そこで、足守川（大井川）の河口つまり児島湾の湾入線はまず庭瀬あたりに想定され、汀線と本窯址群所在の位置関係はきわめて至近距離にあったといえる。逆に陸部の土地利用状況から平野の南限を見極める指標としては、いうまでもなく阡線・百線を基調とした畦畔と水路及び田面などの条里制遺構の景観が注目されるが、それは国道2号線から南へこえることはない。そして、早島低丘陵北辺には若干のベルト状沼沢地が東西へ細長くのこっていたと思われる。この点については、日本建築学会にかかる「倉敷市の地盤」（註十）の報告内容によってより確かな状況をとらえることができる。本窯址群の所在地から南西約1kmにあたる倉敷市中庄松島北口地内の土壤柱状図の一例を示すと、次のとおりである。第1層黄褐色耕土（地表～0.95m），第2層黒色腐蝕物混入層（0.95～1.9m），第3層暗灰色シルト層（1.9～2.8m）第4層暗灰色貝交りシルト混入砂層（2.8～3.3m），第5層暗灰

色腐蝕物交り砂混入シルト層（3.3～6.6m）となり、地表下8.8mにして透水層にたどる結果を伝えている。おそらく第2層が生活層であることは、近接した上東遺跡・川入遺跡などの遺構存在面と比較してまず誤りない。そして、少くとも第4層・第5層は湿地帯への自然物堆積層と考えられるので、さきの想定とまったく矛盾しない。備中国南部の地勢を以上のように理解したとき、本窯址の立地する一帯は、小川——ベルト状クリーク——児島湾——足守川を経て備中の中枢地帯へ通じ、その製品はかなり広大な搬出先をひかえていた可能性がある。

一方、本窯址の西側は、日差山、仕手倉山、龍王山、高鳥居山と標高200m前後の山並みにさえぎられ、北側もまた日差山の余脈などによってとざされている。龍王山は、多くのばあい蛇を祭神として安置した雨乞行事の場で山塊自体が農民にとって圧倒的な信仰対象となる。それ故に、一般的には付近でやや比高の高い山が選定され、ここでも山頂からの見はらしはすこぶる良好で上東平野を一望の下におさめることができる。いずれにせよ、龍王山を含む当地の地質構造は花崗岩類で、その分布は倉敷市一帯から総社、玉島、矢掛、井原、笠岡一帯にみられる。とくに都窪郡一帯の地質は、中粘ないし細粘で均等の黒雲母花崗岩で、長石の風化物や石英粒などの堆積によってできた木節粘土や蛙目粘土が採掘されるといわれる（註-11）。これが築窯の基盤層であり、陶土の原料源でもあったに相違ない。付近一帯の植生は、県南の大部分がそうであるように、落葉広葉樹林のアカマツにおおわれている（註-12）。この樹林帶は、窯業の生産性を保障する要因の一つである熱エネルギー源、薪炭材の宝庫であった。以上のとおり、本窯址群の立地条件は、なによりも耐火度の高い良質な陶土の産地と付合し、薪炭材入手しやすい広大な山林をひかえ、絶えることのない豊富な水量にめぐまれ、そのうえ、当時限定的な建築様式の所在した備中国中枢地帯の需給地へも、水系を通して容易に運搬しうる位置を占めた事実はまず留意されなければ

深さ (m)	土質	記事	試料深度 (m)
0.95	---	粘土 黄灰色	
1.9	Ψ	フショク物交り " 黒色	
2.8	X X X X X	シルト 暗灰色	
3.3	Q	貝交り、シルト交り砂 "	
6.6	X X V V V V V V V V	フショク物交り	
7.3		砂交り "	
7.9		粘土交り砂 青灰色	
8.8		粘土質ローム 青乳灰色	
10.1	X X		透水層
10.5	X X	シルト交り砂 白灰色	
11.3	X X	シルト交り砂レキ "	
12.8	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	シルト交り砂 青灰色 砂レキ 灰色	
15.0		花崗岩 白灰色	

第1図 松島北口地内土壤柱状図

らず、それが備中国都宇郡深井郷の地内に所在することもふたたび明記しておこう。

ところで、瓦窯址は寺院址に付設の遺跡である場合がかなり普遍的あり方である(註-13)にもかかわらず、さきの御堂奥廃寺の報告で明らかのように、本窯址の近隣には、本窯址焼成の、あるいは同窓の古瓦を共伴する寺院址がない。そうであれば、本窯址群は遠隔地の寺院又は官衙、その他瓦ぶき建物を対象に焼成したものと考えるほかないであろう。この点に関しては終章でふれる予定である。

そこで、「和名抄」記載の備中國内における郡名及び郷名を整理し、「莊園志料」(註-14)にとどめられた庄園の中で、「郷が庄へ転化」したものをひろい、古代行政単位に一定の見とおしをたて、さらに、近世資料、備中國絵図を参照して、古代備中國9郡(賀夜郡、都宇郡、津屋郡、浅口郡、下道郡、小田郡、後月郡、英賀郡、哲多郡)の郡境を復原するならば、第2図のとおりである。また、先学が紹介した古瓦出土地はほとんど寺院址として記述されているが(註-15)、からずしも断定しえないものが含まれるとしても、厳密な性格については他日を期す以外にない現状からすれば、かりに寺院址と呼称して、復原古地図の中へその位置を示すことは故なきことではないと考える。同時に、今回検出した5基の窯体の位置関係をあらかじめ図示しておこう。

(葛原)

註-1(1) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』第2集で筆者らは「二子窯址群の調査」として速報した。

小野一臣「二子窯址」『日本考古学年報』 第24(1971年版)

(2) 池邊 弼「和名類聚抄郷名考證」吉川弘文館

豊 元国「吉備の古墳群と和名抄の地名」日本考古学協会 昭和44年度大会研究発表要旨は自然発生的村落と行政村落及び寺院址との関連性に視点をあてた研究として注目される。

(3) 黒板勝美「續日本紀」前編・後編、『國史大系』吉川弘文館

また、「備中國大税負死亡人帳」は当地方の行政単位を復原するうえにも、重要な資料で、終章においてさらに補うであろう。なお、同資料に基づく研究は藤間生大「吉備と出雲」『私たちの考古学』14号が著名であるが、最近の論考としては今井亮「備中國大税負死亡人帳について」『古代吉備』第7集がある。

氏は藤間論文を整理したのち「血縁的体制の大巾な崩解は一様な進行なのであろうか。」と疑問をなげかけ「職業部を中心に解体再編成が行われる」と考えている。

(4) 註(2)と同じ。「刊本」「高本」の和訓を示したにすぎない。

(5) 永山卯三郎『岡山県通史』で深井郷と明記されているが、根拠は示されていない。筆者らは備中國絵図をもとに、都宇郡内の各郷を比定する作業を試みたところ、永山の指摘はまず妥当と考えられる。

(6) 神護寺藏「備中國足守庄図」、岡山県立博物館『岡山県の古文書』所収 昭和48年

(7) 中国・四国農政局計画部編『岡山平野における農業発展と土地改良』 昭和42年

(8) 藤井 駿、谷口澄夫、水野恭一郎『岡山県の歴史』岡山県 昭和37年

茶屋町史刊行委員会『茶屋町史』昭和39年。

岡山城主喜多秀家によって築かれた早島町字塩津多聞ヶ鼻たもんがはなから旧中庄村白鳥ヶ鼻もすがはなまで約4kmに及ぶ汐止め垣堤。天正13年(1584年)。現在、県道になっている。

(9) 三好基之氏に教唆された。感謝の微意を表したい。

(10) 日本建築学会中国支部岡山支所『倉敷市の地盤一柱状図集一』 昭和39年

(11) 光野千春、大森尚泰『岡山県地質図説明書』岡山県 昭和38年

(12) 文化庁編『天然記念物緊急調査一植生図・主要動物植物地図一岡山県』

(13) 出宮徳尚、伊藤 晃『貫田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会、昭和46年

貫田廃寺例のほか、岡山市幡多焼寺例、浅口郡金光町占見廃寺例などがある。

(14) 清水正健『莊園志料』上・下、昭和40年、角川書店

竹内理三氏の解題によれば、著者は大正10年に稿了し13年経過したのち世に出されたが、師栗田寛「莊園

二子御堂奥古窯址群

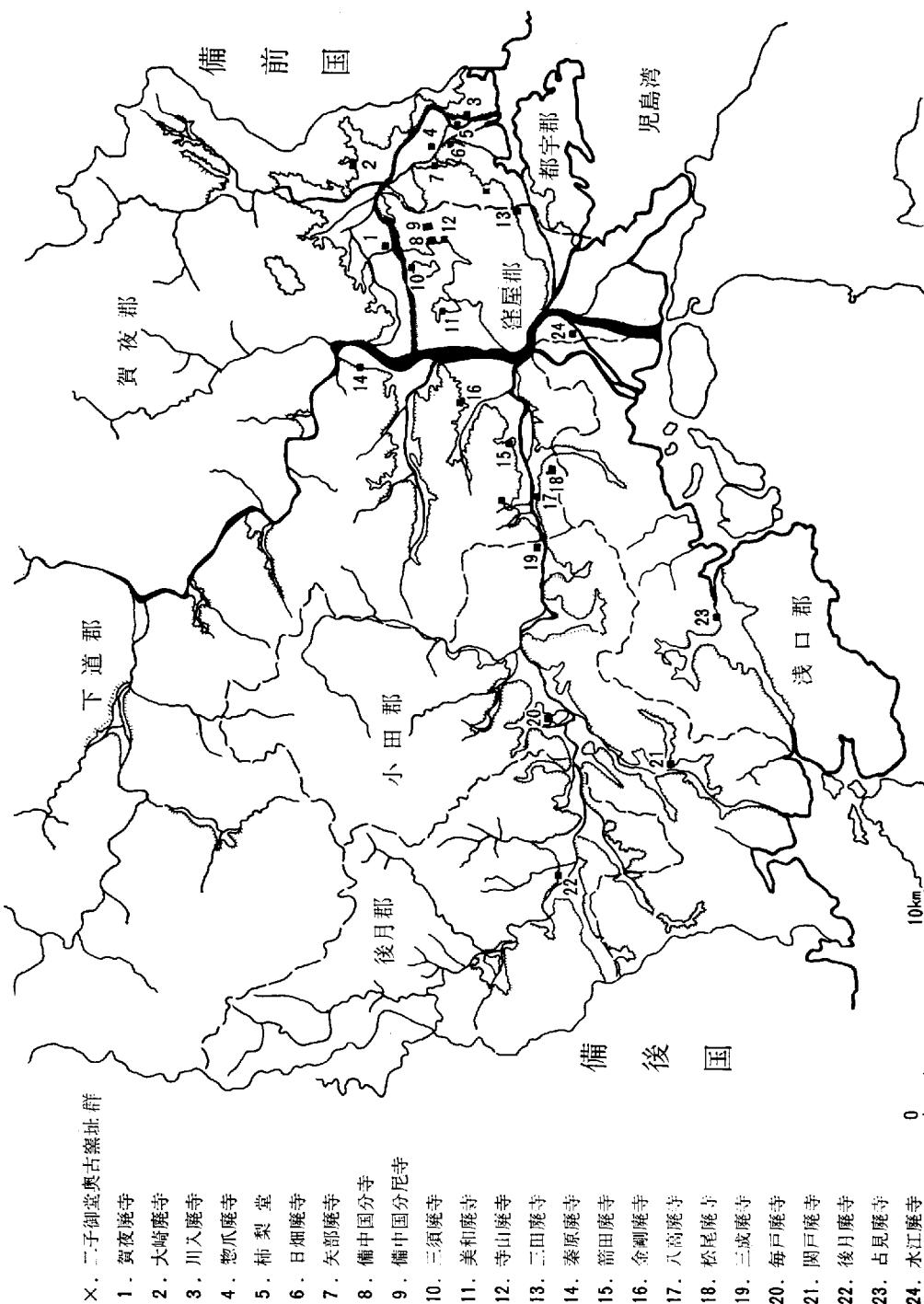
考」を補って余りある莊園地名辞典である、としている。岡山県総合文化センター郷土資料室 長光徳和氏から書物の貸与をえ、三好基之氏から教唆された。ここに、感謝の意を表したい。

⑯ 永山卯三郎「吉備郡史」「岡山県通史」など。

間壁葭子「官寺と私寺」『古代の日本』4 中国・四国、角川書店 昭和45年

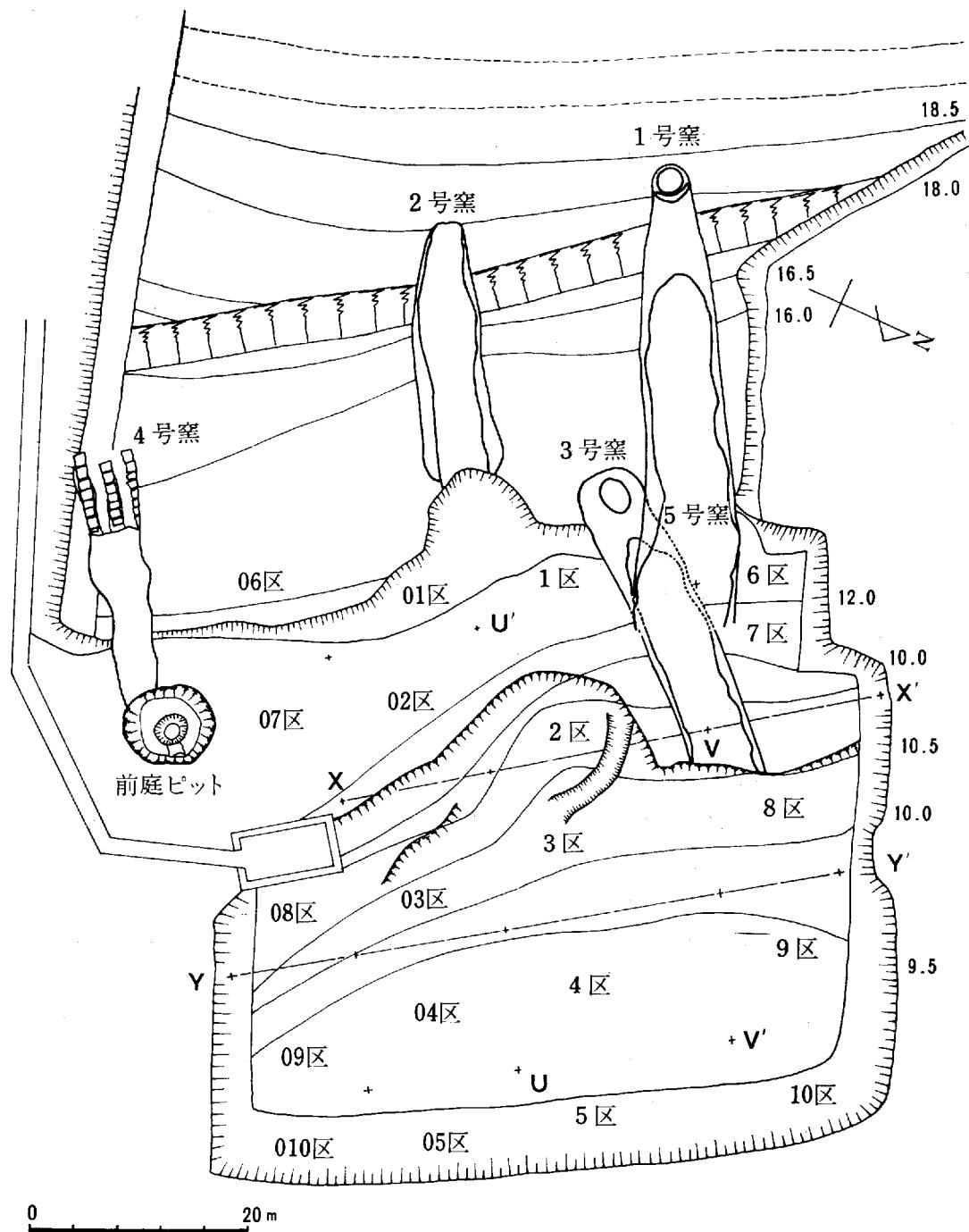
この中には奈良時代寺院址地名表があって、寺院址と窯址との選別にも意を注いだと聞く。

二子御堂奥古墳群



第2図 二子御堂奥古墳群と備中南部古代寺院址 緯尺(1/30万)

二子御堂奥古窯址群



第3図 二子御堂奥古窯址群配置図 単位 m 縮尺 (1/150)

第3章 窯体の構造

前章の経過報告の中で述べたように、分布調査の際、灰層と一部窯壁を確認したので、これにもとづき発掘計画は窯体一基の積算で開始したところ、合計5基の窯体と灰原および小溝、ピットなどの付帯施設を検出するにいたった。頭初、灰層がみられた窯は第2号窯で、その北には第1号窯を発見し、さらに、やや北の下る部位から第3号窯を検出し、最後に変型平窯の第4号窯を見つけることができ、第1号窯の下半部には別に燃焼室があるところから第5号窯の存在した事実が知られる。このようにごく限定された小範囲の中に、杯・高杯・罐・甕など後期古墳時代になお普遍的な須恵器を焼成した窯から、2種類の白鳳期の瓦を焼成した窯、平城宮6225様式の影響下に焼成された天平期の窯を含み、さらに、築成後、焼成されなかった奈良末から平安初期に比定しうる窯まで含括されている。そこで、順次、窯体の構造について記述しよう。

第1号窯（第6図）

1号窯は、龍王山斜面に直交するN60°Eに主軸をもつ半地下式有段状窯で（註一）、一部天井をとどめるほど保存良好な窯址である。焚口から煙道基底部上端までの長さは水平距離にして5.4mで、下方から窯体の機能別にその構造ならびに計数、諸特徴などを記すとつきのとおりである。

まず、焚口付近には表面が赤褐色に酸化した40×50cm大の花崗岩が6個以上あって、それらは、窯壁に密着しあるいは床上面に立った状態で検出され、窯詰め後の窯体末端、閉鎖施設の状況を示している。焚口の幅は、1.4mをはかり奥行1.3mまでが燃焼室にあたる。床の直上は厚さ約15cmの黒色木炭層によっておおわれ、床面はゆるいU字状のいわゆる舟底になっている。燃焼室から焼成室へ移る部位には、特別に付設された隔壁ではなく、ただちに焼成室の床および側壁へと続く。その部位における側壁はやや内傾してわずかに0.5mをとどめるにすぎない。ただ、煙道基底部をふくむ天井部の残存状態からその傾斜角がほぼ不变のまま焚口まで連続したとすれば、天井部はアーチ状にむすばれていたものと考えられ、燃焼室での推定高1.4mを尊くことができ、その容積は約3m³と推考しうる。

焼成室は、平均43度の勾配をもち、床には10個の階段がしつらえてあり、窯体幅は燃焼室との接続部で1.52m、煙道直下において0.5mと絞られ、全長は3.6mをはかる。各段のつくりは、主軸線と直交し両端がやや外開きに湾曲して側壁に接合する。各段は、立ちあがった「けこみ」と平坦な「ふみづら」からなるが、その形状は一般的に、燃焼室にちかいほど、けこみ・ふみづらとも長く広い。逆に煙道付近のそれは当然に狭く短い傾向にある。このことは煙のひきに対する反映であろう。ともかく、けこみの平均勾配は68度で、瓦を焼成するためにもっとも重要なふみづらの数値を示すと、最下段の幅136cm、最上段で50cm、その平均奥行35cmをはかる。これは、平瓦に限っていえば、一段に一列が立て並ぶ数値である。階段状床面は、きめのこまかい土質が堅く焼けしまり、色調は概して赤褐色を帶び部分的に灰褐色または黒褐色に酸化している。約2cmのこの層は、色調などによる分層は不可能で窯体築成後の仕上げ面といえる。その下層は一様に灰白色の間層をはさみ、さらにその下約10

cmまで赤褐色に還元しているが、これは地山への加熱侵透範囲を示すであろう。土質は上層より荒い砂粒を多量に含む。

厚さ約20cmの天井部は煙道基底部をとどめ、窯体長の3分1強にあたる約2mまで残存している。残存する天井部の最上端には、煙道がほぼ垂直に構築されたことを暗示するかのように、弧を描いた粘土紐が赤褐色で焼けてゆきしている。その幅は約13cmである。一方、階段状床面の最上端から約40cm奥の内壁にも焼けた礫を含む壁体が立っている。以上の状況から煙道の内径は約55cmであったと考える。

このような本窯体が操業した時期については、床面に密着して検出された遺物がその下限を物語っている。つまり、後に流れこんだと思われる白鳳期平瓦断片一を除き、他のおびただしい平瓦片および埠は表面に縦目の押圧痕をみる天平期のそれで廃棄の時期は明白である。ところが、燃焼室の前面における横断面（D—D'セクション）を観察すると、粘土の焼けしまった灰褐色または赤黄色の堅い面が4層看取でき、その間層として淡灰黒色層あるいは黄斑混入赤褐色土層などがみられ、それらの峻別と分層は硬度の点においてことのほか容易である。したがって、窯の開始期については詳細に検討されなければならない。仮りに最下層を第1次床面とすれば、第2、第3、第4と上層へ移り変るにしたがい、窯体は奥へ向かって順次前進したと考えられよう。あるいは、煙道部が固定的であったとすれば、一定期間内に窯体自身が縮少された反映とみなされよう。そこで、第3層床面と共に伴する瓦が、時期決定にことのほか重要な手掛りとなる。それは、次章で記す二子第3類軒丸瓦にあたり、成形手法・文様態から白鳳末～天平初期に比定しうる差替瓦であるから、それより以前に少くとも2回以上の操業がなされた事実は動しがたい。

第2号窯（第7図）

一方2号窯は、1号窯の南約5mの位置に1号窯とほぼ平行して所在し、1号窯と比較した場合、構造上の特徴に大差はなく、ふみづらの奥行以外各部の計測値はきわめて近似した窯である。窯の主軸線はN58°Eにあたり、半地下式の有段状窯窯で、焚口から煙道上端まで水平に計測して5.8mをはかる。

焚口の前面には、いうところの前庭部が形成され、そこには径約30cm、深さ40cm程度の穴3を検出した。ちょうどこの地点は宅造あるいは里道工事などによって一定の削平をうけているので、すでに消滅した幾本かの他の柱穴の存在が予測され、上記3本の柱とともに前庭部のおおい屋を支えた可能性が強い。

燃焼部の外側には、5個以上の花崗岩がある。赤褐色に還元したこれら花崗岩は焚口のごく接近した位置にあり、おそらく粘土塊とともに窯詰め後の閉鎖施設を構成したものであろう。燃焼室は、床の形状が1号窯とほぼ同様に窪みそこには約8cmの厚さで黒色の粒子の細かい炭層が堆積していた。焚口の幅1.0m、奥行1.6m、残存高1.34mを計測するが、窯体の全形態や構造から推して、燃焼室の容積は1号窯のそれとほぼ同様の3m³前後と考えられる。主軸断面にそって焼成室との接合部を観察すると、第1段めのふみづらに移る床面に、2段の屈曲したクセがある。接合部の床面下にはさらに別の堅い床面があってその床面にも瓦片が混入している。他の部位における加熱侵透層が赤褐色に還

元しているのにくらべ、その部位の地山（花崗岩性土壌）はたびたび火力をうけたことを物語り黒褐色を呈し固く焼けしまっている。こうした状況から燃焼室は、2回にわたりかなり大きな改修をうけたと判断される。

焼成室は、1.4m幅のものがしだいに狭まって煙道につづきその幅0.5mとつまって終る。水平距離で3.9mをはかり平均傾斜角43度で床面には10個の段を有する構造など第1号窯と近似している。燃焼室にちかい第1段めのけこみは65度でふみこみの奥行は約60cmを測りその部位における窯体幅は146cmである。若干幅を減じつつ第5段めまではこの形状で登り、第6段めから急に立ちあがり、最上段のふみこみは10×55cmを測るにすぎず、ふみこみの奥行は著しい差を示す。階段状床面は、厚さ1.5～2cmの赤褐色層によって被覆され、部分的に剥脱した箇所が灰黒色の色調を呈するが、全体としてきわめて堅牢な床の表面を形成している。そして、床の下方には約20cmの加热侵透層がみられ、赤褐色の色調は煙道付近で淡く、焚口付近で濃い。また、床の表面のふみづらと側壁との接合部には、粘土塊を押しつけたような補修が各所にあって、複数の操業回数を暗示している。ふみづらの直上には、多量の天平瓦片が堆積していたので、操業の下限は1号窯と同様天平期にあると考えてよい。この窯の側壁は、もっとも保存良好な部位で、1.2mを測るが、第1号と酷似した構造を考慮すれば、本来1.6m以上の内部空間をもつ、アーチ状の天井をそなえていたであろう。

煙道は、焚口から連続する床の立ちあがりの状態および煙道基底内壁の湾曲状況などによって、内径約50cmの円形の構造を想定させる。

第3号窯（第8図）

この窯は、1号窯及び2号窯の築成された場所の比高より約4m下位に構築されたもので、保存度が良好で一定程度天井部をとどめている。しかし、構築後、ふたたび大規模な修築ないし改修がなされ、床面及び側壁部に2次の補強面が認められるので、この点を念頭に置きながら記述したい。まず、最終窯体から記そう。

現存する窯の主軸線はN43°Eで、長さ7.5m、幅約1.4m、平均傾斜角15度をはかる。焚口付近は、宅造時点又はそれ以前に同工事あるいは自然崩壊その他の原因によってかなり破壊されている。残存する窯体の最下付近の状態を記すと、上方（煙道）から連続してくる側壁がやや外開きして切れるごと。同時に床面もそれ以上前面へ追求できること。その周辺部地山に炎をうけた痕跡がない点。これらから判断するならば、現存する窯体端部からそれほど前方への延長はなかったものと考えてよい。しかしながら、最終窯における床面には隔障その他の施設はなく燃焼室の確実な位置と規模を速断しがたい。現存する窯体の最下の幅は1.2mを測り、その部位における側壁の一部は、床面から30cm程度あるいはそれ以下の立ちあがりをとどめるにすぎない。平面形態からみると、最下端から1.5～2mの部位がもっとも狭く1.1m幅と絞られているので、燃焼室と焼成室との境はこの辺にあると思われる。通常、窯体の幅は煙道部に近づくにつれ狭くなるが、本窯址の場合、やや胴ぶくれに近い形狀で煙道直下においてもそれほど大きな長短は認められない。厚さ約4cmの堅い床面は、15度の傾斜をもって末端から奥へ4.6mまでつづき急に傾斜角が変つて、一つの段状を呈してくる。逆にいえば、煙道直下の床面上端から徐々に傾斜した床面が1.75m付近で急角度をもって落ち、そして前面か

らゆるやかに上昇してきた床面が急上昇して接続する。その結節部によって、いわば上段と下段とに床面が分離する。上段の $1.5 \times 1.75\text{m}$ の床面には、平均径 20cm 、深さ 10cm ぐらいの小孔が規則的に整然とうがたれている。その配列は、奥壁から下方へ向かって、主軸線に直交する方位でいえば、 $3 \cdot 5 \cdot 5 \cdot 5 \cdot 3$ と配され、その前後左右の間隔は $10 \sim 20\text{cm}$ である。最下に位置する 3 個の孔からさらに約 20cm 下向すると、先述の傾斜変更線にいたる。小孔のある床の一部又は全部の表面は赤褐色に焼けきわめて堅い。この小孔群をおおうように厚さ約 8cm の天井部が遺存しそこに $90 \times 62\text{cm}$ の楕円形空洞がある。これが煙道基底部である。

以上の窯体の下層 $10 \sim 30\text{cm}$ には、改修前の窯体が残存している。上記の窯体最下端から奥へ 1.5m のところの床面下には、径 $70 \times 100\text{cm}$ の穴があって、深さ 20cm の内部は木炭粒多数を含む粗砂によって充填されていた。この楕円形落ち込みは、ふつう舟底とよばれる燃焼室床面の状態を示す。(D—D'セクション) したがって、第 1 次の窯体の全長は 6.2m 以内であったといえる。同時に、上記の堅い床面は 2 次的に張りなおされたもので、修築後の窯体は第 1 次の舟底をおおって、若干前方へ延長されたことになる(註一2)。二回の大改修がなされた事実は、現存する窯体の側壁端部から約 3.5m 奥の部位でいっそう鮮明に観察しうる。窯体幅は床面において 1.32m を計測し、ここでは、2 次的側壁部が剥落寸前の状況で看取でき、黒褐色の壁面には竹材を組んで粘土を固着したような、幅約 2cm の縦の条痕がみられる(C—C'セクション)。第 1 次と 2 次との床面の高低差は 40cm である。第 1 次の安定した床面は段状結節部へ連続し、煙道直下にあたる上段部のみは、初窯から廃棄されるまで一貫して使用されたことを物語る。天井部の残存する範囲がほぼこの上段部床面に対応していることも改めて注目される。床面から天井までの高さは垂直に計測すると平均 1.2m である。本窯址からは須恵器のみが検出され、瓦はいっさい伴出していない。

第 4 号窯 (第 9 図)

稜線と直交、つまり $N55^{\circ}E$ の方向に主軸をとり、焚口床面の標高は 12.1m 、煙道端部の標高は 15.2m である。地山をくりぬいた半地下式の状態を残しているが、壁面は黄褐色の地山でまったく火をうけた痕跡がない。また窯壁の花崗岩には灰色をした粘土をはりつけ壁を固定している。この粘土は水分を多量に含んでやわらかい。これに火を通すことによって壁は固くしまることであろう。窯体の残存長は 5.7m で、燃焼室・焼成室・煙道部からなる。燃焼室・焼成室の床面はほぼ平坦で、煙道部は約 48 度の傾斜をもつ。燃焼室と焼成室の間には段があり、焼成室が約 0.2m 高い。

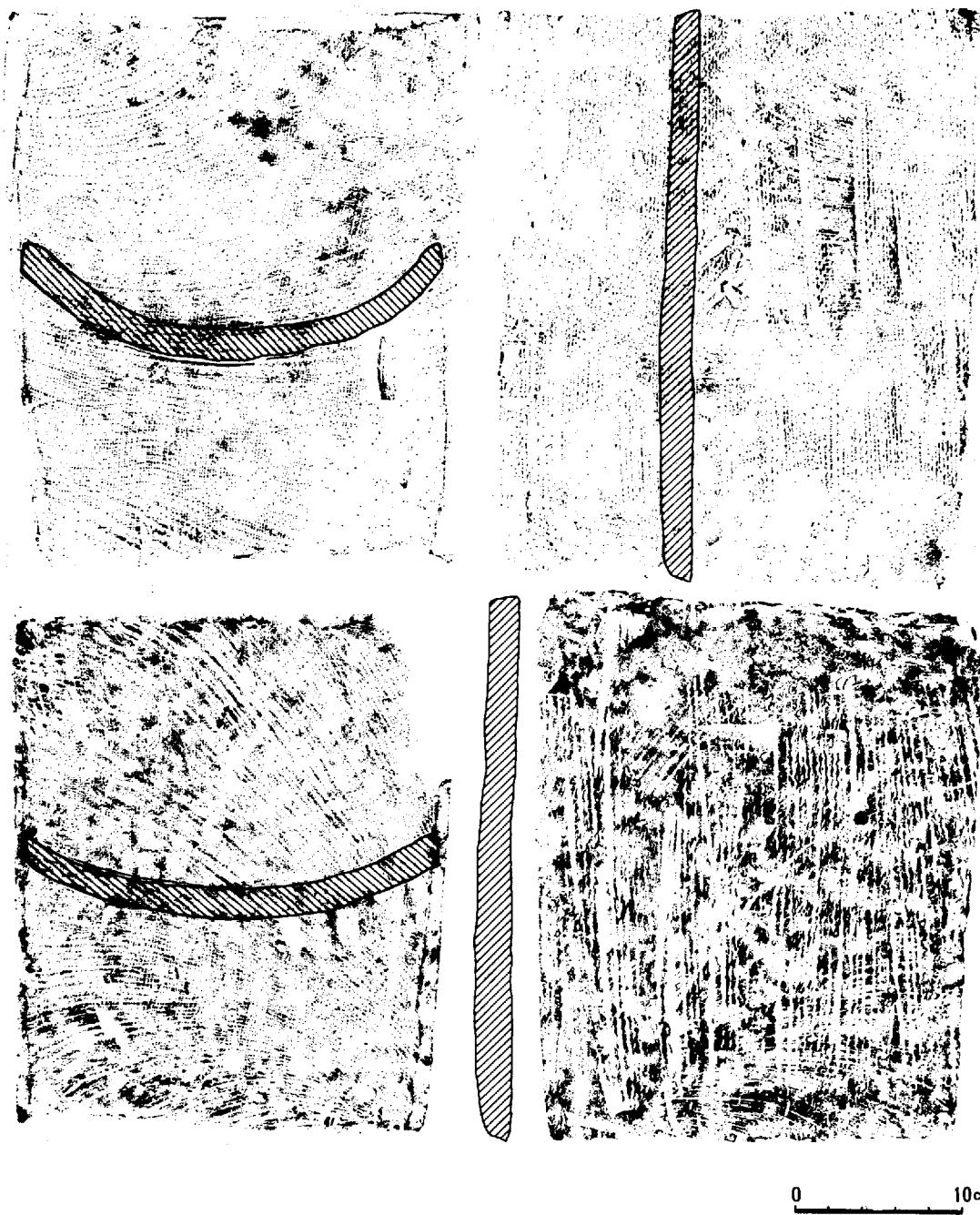
燃焼室は、床面よりほぼ 0.1m を残して、上半部が里道工事によって削平されている。奥行 2.3m で末広がりの構造をしている。焚口は狭く幅が 0.45m 、最大幅は焚口より約 1.95m 奥で 1.2m ある。焼成室・煙道部にくらべると主軸方向を若干北へふっている。主軸に直交する断面を観察すると、ほぼ平坦な床面から、側壁へ移り、天井部へゆくにしたがって内傾している。こうした傾向は、アーチ型の天井築造の意図をうかがわせる。現存高は 1.5m であるが、側壁のかたむきから考えると、築造後は床面から天井部まで推定約 2m と思われる。

焼成室は奥行が 1.4m あり床面は奥へゆくにしたがいゆるやかに上昇している。焚口から 2.5m 奥の幅は 1.2m あるが、ここで両壁とも急にひろがり 2.7m の部位では幅 1.5m を測る。 $3.1 \sim 3.3\text{m}$ あたり

二子御堂奥古窯址群

でもっとも広く $1.6m$ ある。そこよりだいに狭くなって、煙道の取り付け部分では $1.5m$ の幅となる。中央部には深さ約 $0.3m$ の方形に近い楕円形の落ち込みがある。この落ち込みの規模は、 $1.2 \times 1.3m$ である。落ち込み以外に特異な構造的特徴はみられない。平面積は約 $1.8m^2$ ある。

煙道部は奥行が水平に計測すると $2m$ あり傾斜角約48度で上昇している。幅は焼成部との接点で $1.5m$ 、そこから $0.6m$ 奥より狭くなり、 $1m$ はいった所では $1.2m$ の幅があってそこからはほぼ平行



第4図 第4号窯煙道部の平瓦 縮尺(1/4)

に端部へ抜けている。深さ約20cmの煙道は地山を削りとて20~30cm間隔に3本つくってある。深さは煙出し部分へ近づくにつれしだいに浅くなり1.5m奥では深さが5cm位しかなく、さらに南北の煙道は上端付近ではほとんど確認できない。

煙道には平瓦があつせてあり、その数は現存24個体分（うち1個体は破片）である。そのほとんどは完形であるが南端列の一番下にある平瓦は半裁の瓦である。これはその割れ口が整然としていること、および3列の下端が半分に割ってきちんと揃っていることから、後代に壊されたものでなく煙道部築造の段階で長さを揃えるための意図がうかがわれる。さらに24個体の内訳は南列が9枚、中央列7枚、北列8枚となっている。そして、焼成室に落ち込んでいる瓦が1個体分であること、中央列では最上端の瓦と次の瓦との間に1~2個体分の間隔があいていること、この状況から考えると中央列は現存する瓦数以上に、8枚ないし9枚の瓦があったものと思われる。南及び北の列は煙道からみても、これ以上瓦の置かれる余地はなくすべての瓦が揃っている。瓦はすべて裏返しになっており、煙道の床面と瓦の間は8~12cmある。瓦の配列についてさらに詳述すれば、中央列はたがいに重ならず接しているためその築瓦順序はうかがえない。しかし南においては3枚目と4枚目の重なり具合、1枚目の半裁瓦によって、その築瓦順序を知ることができる。つまり南列は上から下への築瓦順序である。北列においては6枚目から向きを変えており、この向きを変えている場所はつきあたりに花崗岩がある。もし上からつくってきたならこの向きの変更はありえなかつたであろう。つまり北列は上から下への築瓦順序である。次いで共伴遺物とともに築窯の時期にふれておこう。

瓦（第4図）

窯体内出土の瓦は煙道部の24個体及び焼成室の1個体、計25個体のみである。これらはすべて表面が布目、裏面が縄目の叩きになっており、標準寸法は、長径33cm短径25cm厚2cmで焼成良好な天平瓦であるが、本窯址で焼成した瓦ではなく、天平瓦を窯の一部にあてたものである。

三耳水瓶（第26図107）

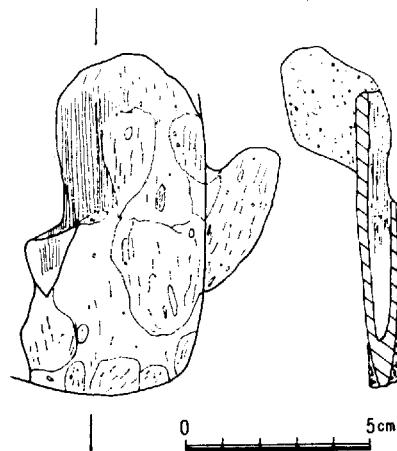
燃焼部の北壁に接し、横向きに出土したもので頸部より上を欠いている。推定器高30cm弱で、底部径10.5cm、腹部のやや上方に最大径があって約20cmを測る。三耳のうち、肩部に二個腹部に一個がしつらえてある。器壁は均一でほぼ約6cmを測る。内外面とも幅約1cm強のヘラ状工具で横なでした痕跡をとどめ、内面は特に著しい。底部から胴部にかかる部位に「×」の窯印がみられる。奈良末か、平安初期に比定される。

鉄器（第5図）

焼成室の北壁に接して出土した。錆化が激しく、形状ははっきりしないが、先端が直となり袋状をしたもので袋の中には木質を残している。刃はうすい。以上からして、この鉄器は唐鋤と思われる。

第5号窯（第10図）

この窯は、かつて第一号窯の「親窯」という表現で速報したが（註-3），詳細に検討した結果、



第5図 4号窯出土鉄器

まったく別の窯として紹介する方がよりふさわしいと思われるが、第5号窯と呼称したい。1号窯と峻別しうる決定的な事実は、一部焚口付近が破損しているとはいえ、床面に燃成室の舟底状窪みがほとんど完全に残存することである。しかも、1号窯とは主軸方位が若干異なり、本来約10度のずれがあったようである。幾度か窯体の修復がなされ、第1号窯初窯の燃焼室がこの窯体の煙道部と重複して構築されたために、側壁は一見したところ、連続したように看取できるものと思われる。燃焼室の幅は1.1m、奥行約1.5mで残存する側壁は0.5mを測り、それ以上の上部構造や内部空間はまったくわからない。連続する燃成室は、1.3~1.36mの幅でほとんど差はないが、それが3.9m奥まで追求できる。その上端は煙道部をふくめ、第1号窯の燃焼室部分と競合関係をきたし、頭初の形状を失っている。床面は約10度の傾斜をもつ。

(葛原、池畠)

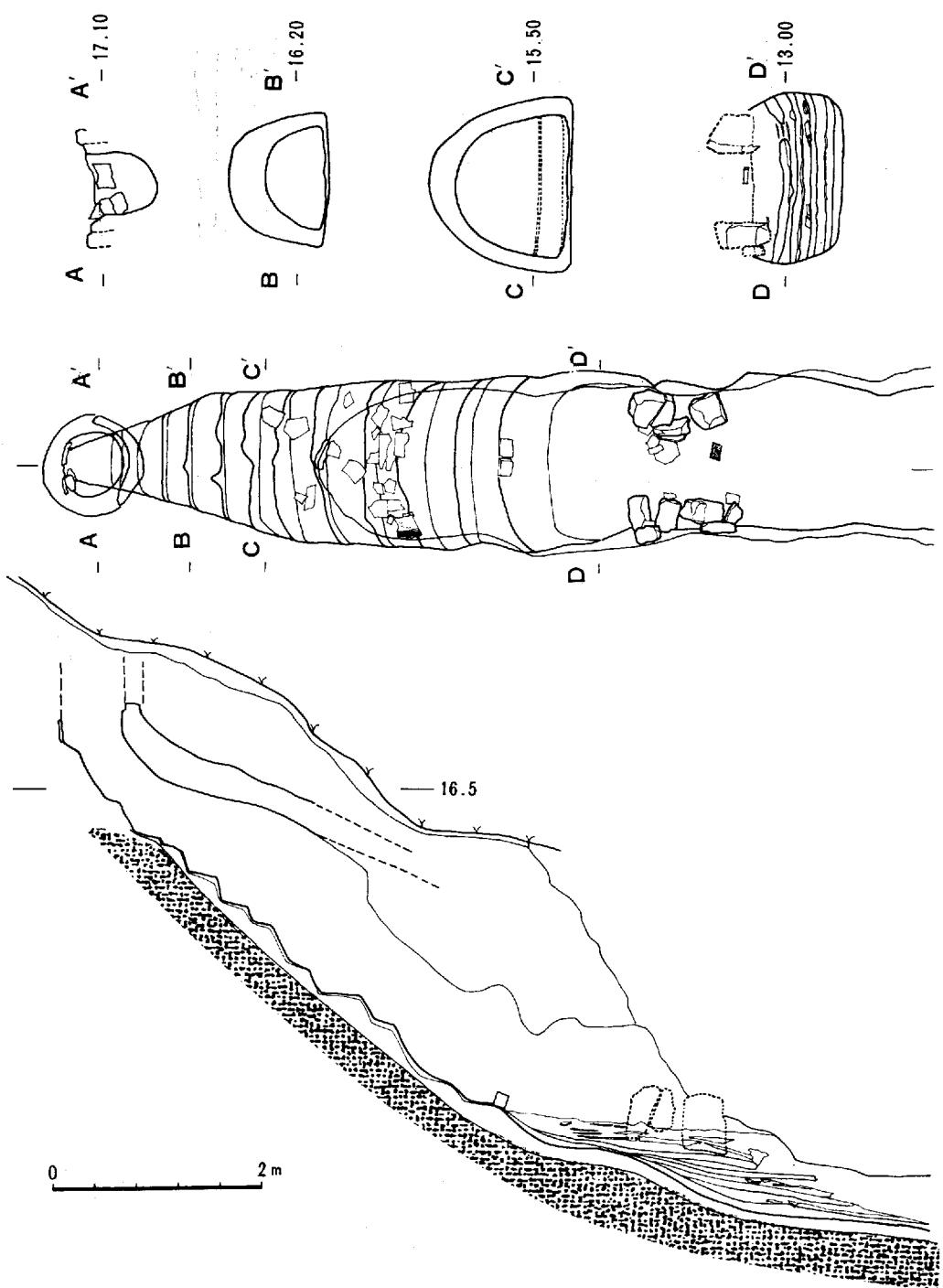
註一(1) 田辺昭三「窯の構造とその変遷—須恵器9—」『日本美術工芸』396号、「登窯とは、傾斜地を利用して、下から上へ連続して幾つかの独立した焼成室をもつ構造に対する呼称に限定すべきである。」という見解に従い筆者らは窯窯として報告する。かつての報告もその見地から行いやや詳細に記した。

河本 清・葛原克人「不老山古備前窯址」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 昭和47年

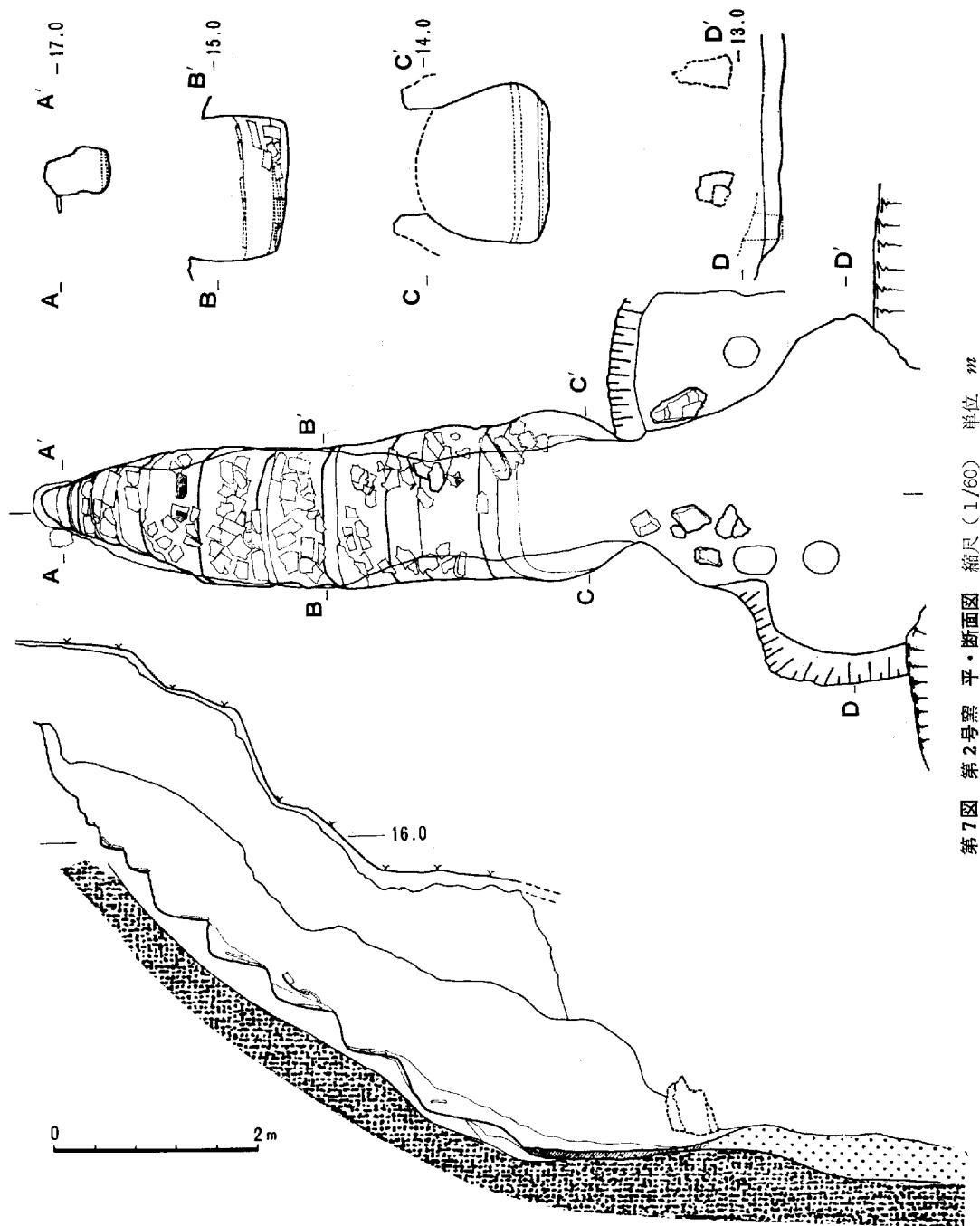
(2) 植崎彰一「猿投窯の変遷」『猿投窯』陶器全集31 平凡社 昭和41年 10世紀後半の窯体構造について「床面の傾斜は前代にくらべてだいにゆるやかとなり、焚口の『舟底』ピットもなくなった。さらに、灰原における灰の量がひじょうに少なくなっていることなどから、焼成技法が從来の還元炎焼成から、酸化炎焼成に変化したことを知るのである。」とし、そして「傾斜のゆるやかな床面に、『スサ』を混じた粘土塊をおき、そのうえに椀・皿類を十数枚も積み重ねて、生産単位をいちじるしく高めている。」と指摘している。時期は相異なるが、こうした傾向の端緒的構造であろう。

(3) 葛原克人・池畠耕一「二子窯跡群の調査」『岡山県埋蔵文化財報告』第2集 昭和47年

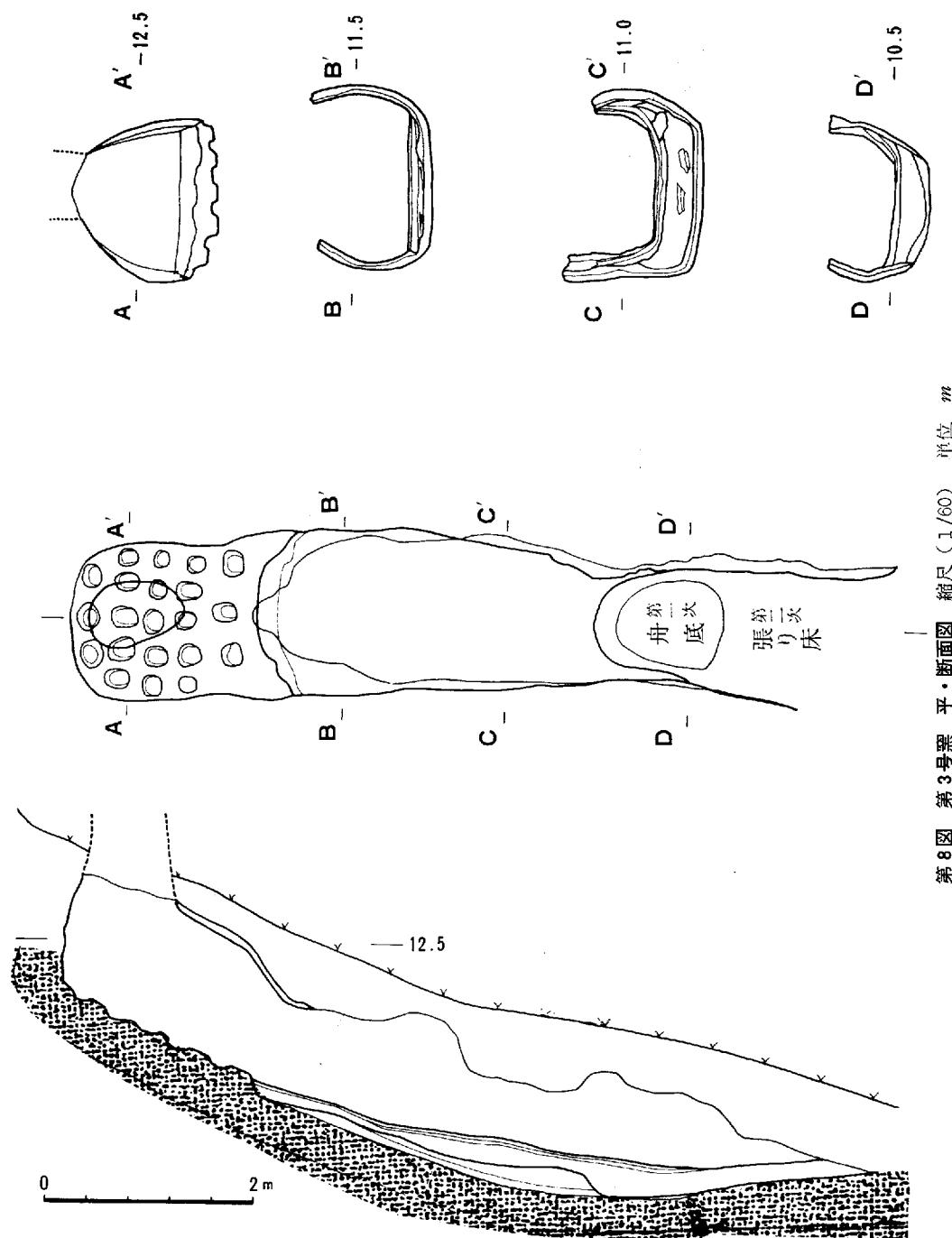
第6図 第1号窯 平・断面図 縮尺(1/60) 単位 m



二子御堂古窯址群

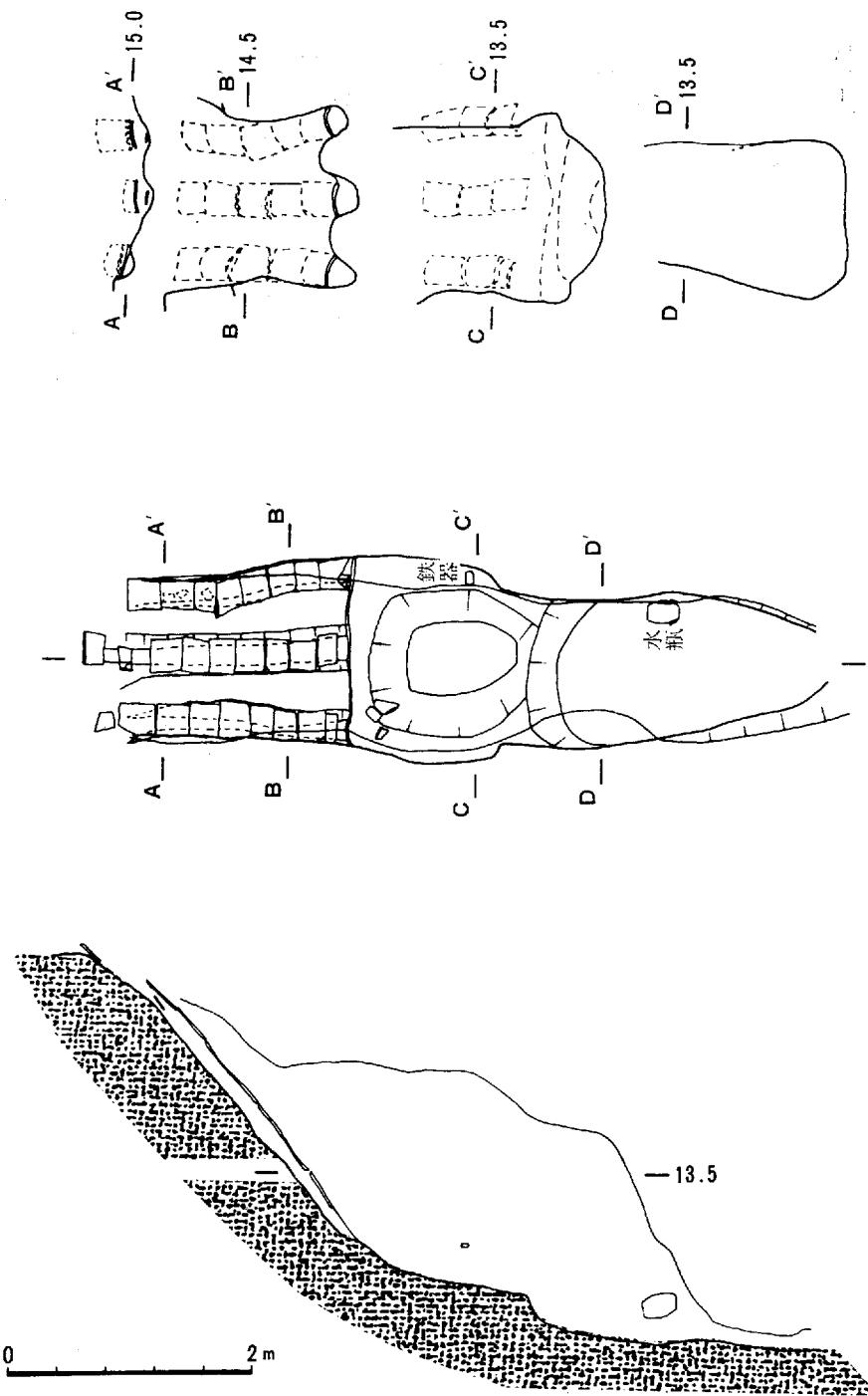


第7図 第2号窯 平・断面図 縮尺(1/60) 単位 m

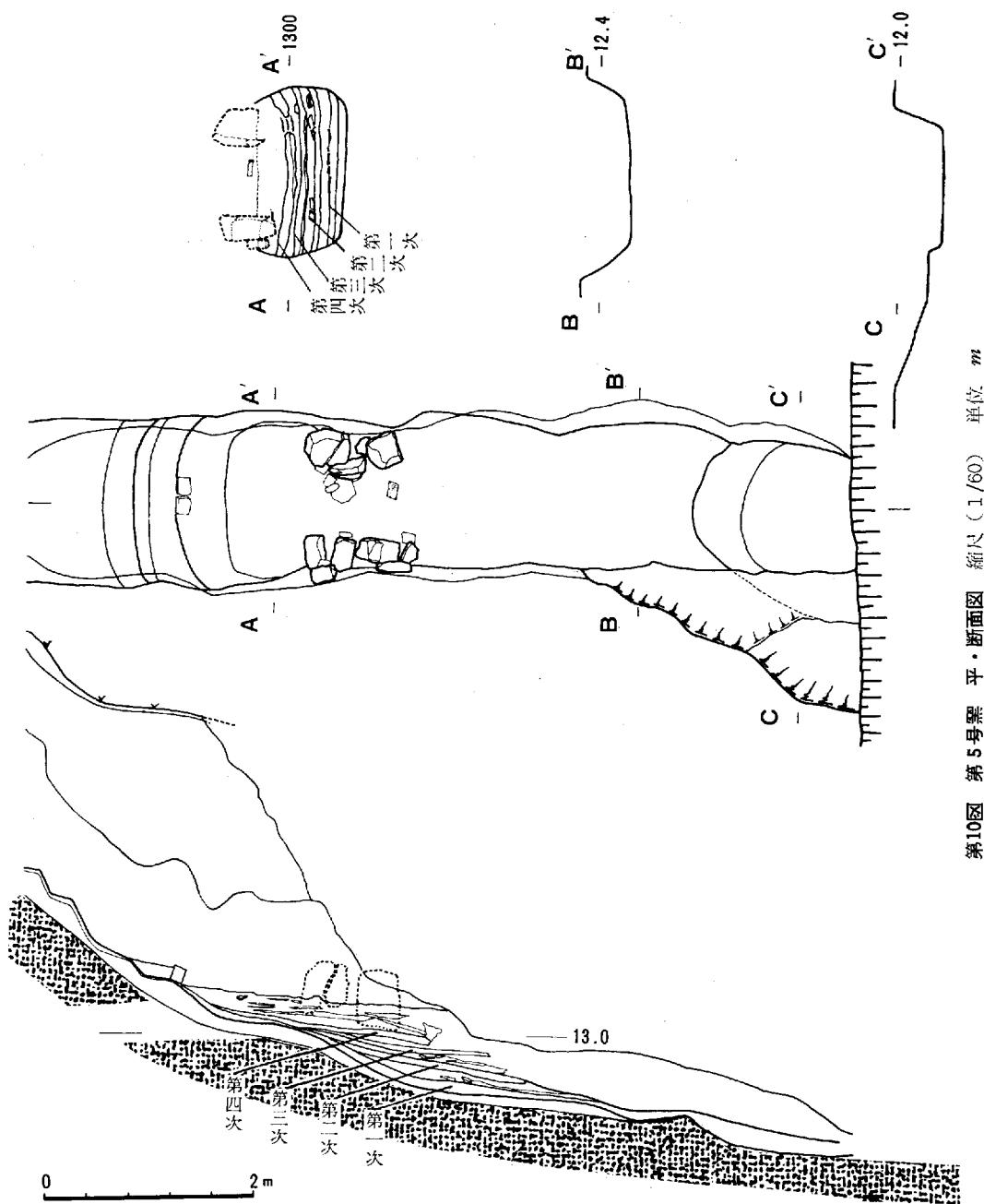


第8図 第3号窯 平・断面図 縮尺(1/60) 単位 m

第9図 第4号窯 平・断面図 縮尺(1/60) 準M m



二子御堂奥古窯址群



第10図 第5号窯 平・断面図 縦尺(1/60) 単位 m

第4章 付 設 遺 構

灰 原

灰原は第2号窯の前方付近を中心として、東西約6m、南北約8mの範囲がとくに濃密で調査対象地全面に広がっている。その灰原は位置をあまり変えず重層的な層位関係を示している。灰層は大別すれば4層になるが、それらの間には築窯作業の際に地山を抉りぬいて堆土した花崗岩を含む砂層が堆積している。灰層から検出した遺物は7世紀中葉から約120年にわたる時期を示し、大別すれば3期の窯業生産が行なわれている。

地山は西から東に向かって、あるいは南から北に向かって、急角度に傾斜し、灰原の南西端つまり4号窯の前庭部にあたる付近がもっとも高く、標高11.8mである。この付近が丘陵の先端にあたっており、丘陵末端はほぼ南北の方向につづいている。発掘地点の北東側は標高約9mまで掘ったが地山は現われておらず、その比高からして相当の傾斜で落ち込んでいるらしい。地山の上には人頭大以上の花崗岩が50cm以上の厚さで密に堆積している。この礫は北東端を中心にして堆積しており、龍王山の傾斜面を伝って落ちてきたものが丘陵末端に止まり堆積したものであろう。したがって、この礫は西側（つまり丘陵側）へ行くにつれ少なくなる。その上部には茶褐色の細砂が約10~50cmの厚さでおおっている。

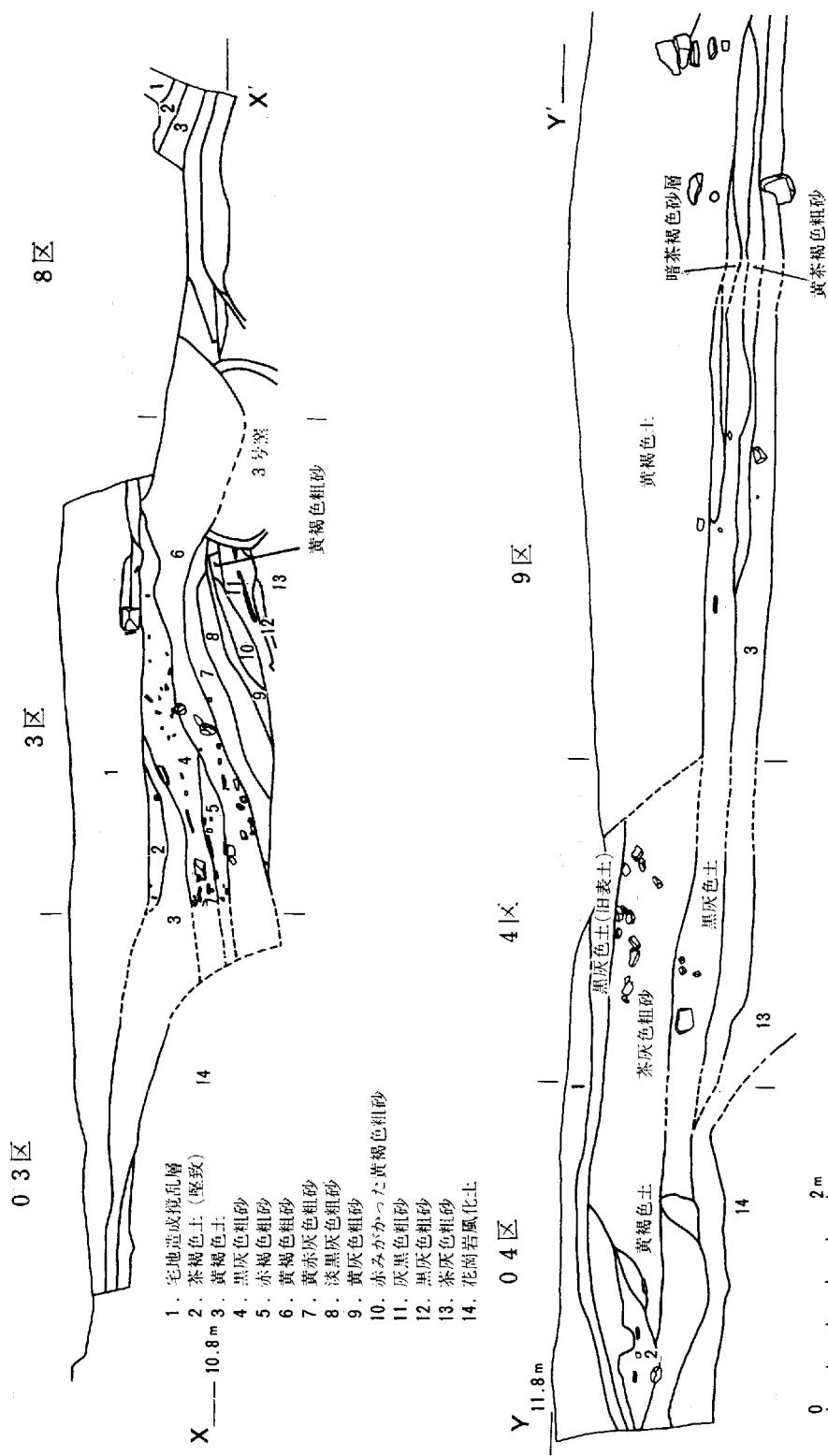
5号窯・3号窯の灰原は3区を中心として狭い範囲に堆積している。灰黒色粗砂層（11層）が5号窯のもので、黄赤灰色粗砂層（7層）及び淡黒灰色粗砂層（8層）が3号窯のものである。これら灰層には炭・焼土・須恵器などを含むが瓦はない。8層と11層の間には黄灰色粗砂・赤みがかった黄褐色粗砂の層があり、これらは3号窯築成時にできたものである。また、この時期に1号窯前庭付近の地山を切断して灰原を拡大するための造成をおこなっている。

白鳳期（2号窯）になっても3区を中心に灰原は展開しているが、その範囲は東へいっそう広がっている。灰層の下には黄褐色粗砂層（6層）があり、花崗岩を多量に含むが、この層は白鳳窯築成時のものである。灰層は黒灰色粗砂（4層）と赤褐色粗砂（5層）に分かれ、木炭・焼土とともに多量の瓦が含まれる。5層の広がりは狭く、軒平瓦第1類を含んでいる。4層は東へと広がっており、5層以下とその広がりにおいて大きなちがいがみられる。5層が軒丸瓦第1類、4層が軒丸瓦第2類の時期と思われる。

1号窯・2号窯（天平期）の灰原も4層と同じような堆積状況を示す。しかしながら、西側の高い部分は最近の宅地造成により、そのほとんどが削平されていたにもかかわらず、2号窯の前庭部には整地面としての堅い層がわずかにその痕跡をとどめていた。

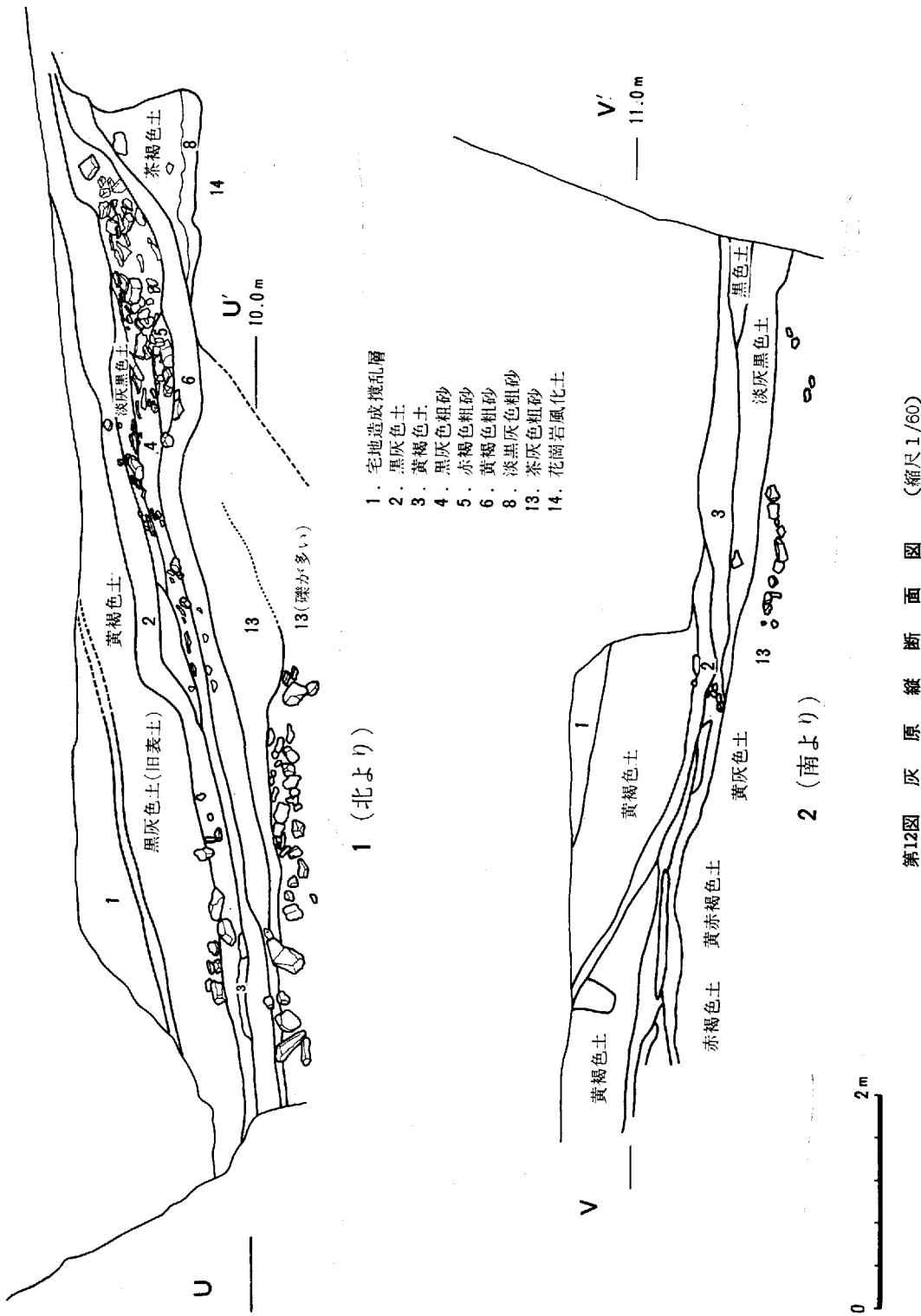
灰原の調査は約250m²にわたって行なわれたが、遺物散布の中心は3区にあった。また南側はもちろんのこと、北側においても9区では北に向かって上昇しており、灰原の範囲は調査区の中におさまっているものと思われる。

二子御堂奥古窯址群



第11図 灰原主軸道交断面図 (東上り) 縮尺 (1/60)

二子御堂奥古窯址群



第12図 灰原縦断面図 (縮尺1/60)

4号窯前庭ピット

遺構（第13図）

径約 $1.8m \times 2.1m$ の円形のピットで4号窯に接しているが、4号窯の主軸とは50cmほど北へずれている。この穴は、現地表下約1mまで垂直にちかい角度にうがたれ、中央部はさらに径 $80cm \times 70cm$ 、深さ25cmの落ち込みとなっている。ピット内には茶褐色の細砂が埋まっており瓦はほとんど見当らない。わずかに床面ちかくに平瓦3個体及び平瓦片数点、軒丸瓦片、礫が検出されただけである。平瓦3個体は1ヶ所にまとまっており、焼成が悪いためこわれているが、そのうち2個体は整然と重なっており、一見、自然埋没でないような出土状況を示している。平瓦3個体の配列は、約 $20cm \times 20cm$ 大の花崗岩砾の上に、表を上にした平瓦があり、その上に裏返しになった平瓦が一部重なり、そしてその上に最初の瓦と重なって表を上にした平瓦がある。その他の破片のうち一つのまとまりは壁の最下端に密着しており、あとの破片は瓦群の周辺に散在している。軒丸瓦は2片出土したにすぎないが、これらは同一個体である。2片とも穴の最下部の壁に接している。炭と灰は穴の最下部から上方約50cmにわたって、ぎっしりとつまっていたが、その中に瓦片などは一切含まれていない。綿密に観察すると、黒色の炭混入灰層は南半に密度が濃く、したがって南側から流れ込んだような状態を呈している。また、穴の東側壁面には、底部より約20cm上位に小孔がみられ、この小孔は、当初約 $60cm \times 40cm$ の橢円形の筒状孔として、さらに東へ下降しながら開通していることが確認できたが、それは、壁より $80cm$ 以上奥まで続くことがわかった。この筒状孔を埋めていた土も穴の埋土と同様茶褐色細砂であった。

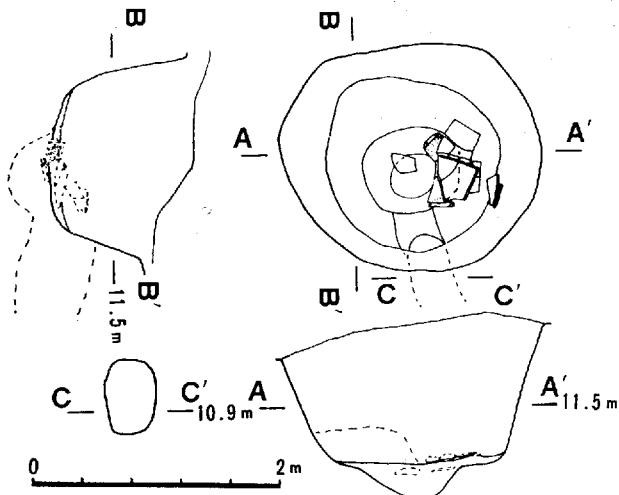
遺物（第14図）

① 軒 丸 瓦

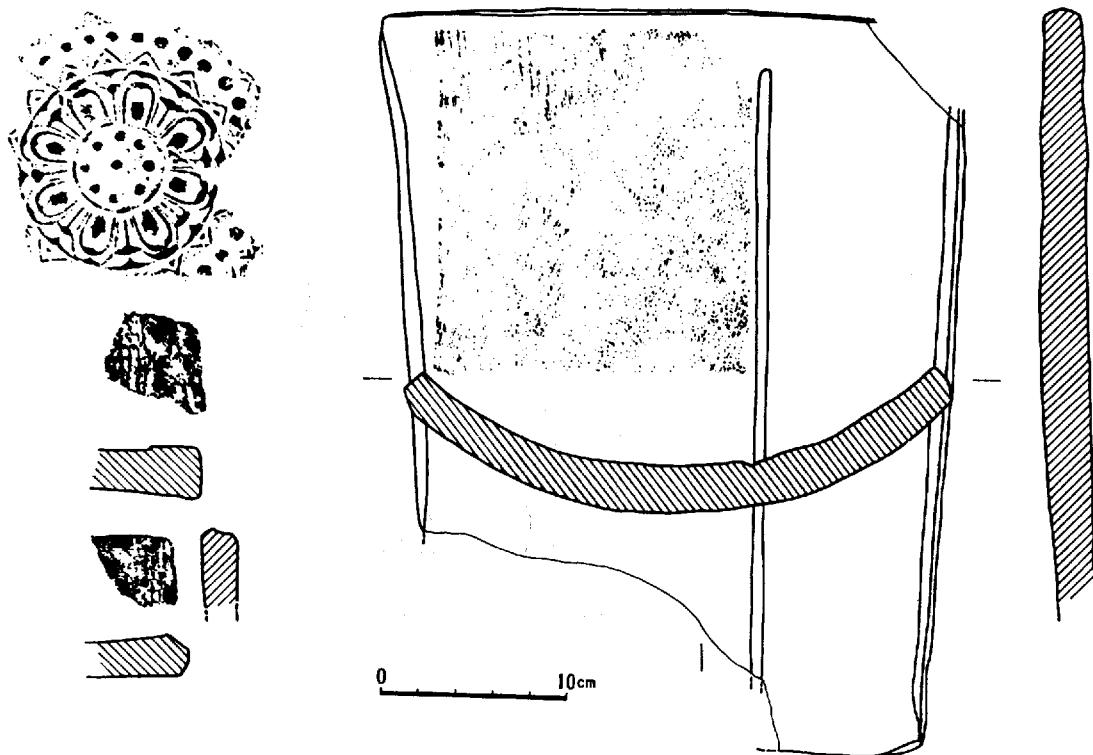
2つにわかれているがほぼ完形の二子軒丸瓦第2類である。灰色をした須恵質の焼成良好の瓦である。

② 平 瓦

平瓦は4個体と破片2がある。破片のうち1片だけが須恵質に焼かれているほかはすべて焼成度が低く軟質である。そのため、磨滅がひどく裏面の叩き文を、うかがうことはできない。ただ2の瓦は軟質の破片で、 $4mm \times 3mm$ の小形長方形格子目である。また、1個体は指圧のあと一部ヘラでなでただけで、叩きはおこなっていない。側面の化粧は2面で一枚造りと考えられる。大きさは4個体ともほぼ同じで3の瓦が示す長さ40cm、巾29cm、厚さ2.5cmを標準としている。



第13図 第4号窯前庭ピット平・断面図 縮尺(1/60)



第14図 第4号窯前庭ピット出土の瓦 (縮尺)

みぞ

2区から3区中央にかけて、黄褐色地山面に切り込まれた弧状溝を検出した。黒灰色土が充填していたこの溝は、長さ約2.4m、幅約0.5mで底部までの深さは5cm以下をとどめるにすぎず、溝の両端は把握できない。ところが、この溝は、「灰原」の項でふれた人為的崖面の直下にあり、灰層の層位関係からすれば、もっとも古い時期の、白鳳以前に機能したことが注目される。したがって、5号窯又は3号窯に付設した遺構といえるが、ほとんど底部のみを遺すこの構造遺構の方位と各窯体主軸線とを、直交又は平行の観点でとらえたとき、主軸線と平行関係にあるのは5号窯で、溝の両肩を想定復原して延長すれば、ちょうど5号窯の南側壁の外方に沿うこととなる。そうであれば、第5号窯窯体を防水するための排水路と考えることが自然ではなかろうか。

(池畠、葛原)

第5章 出 土 遺 物

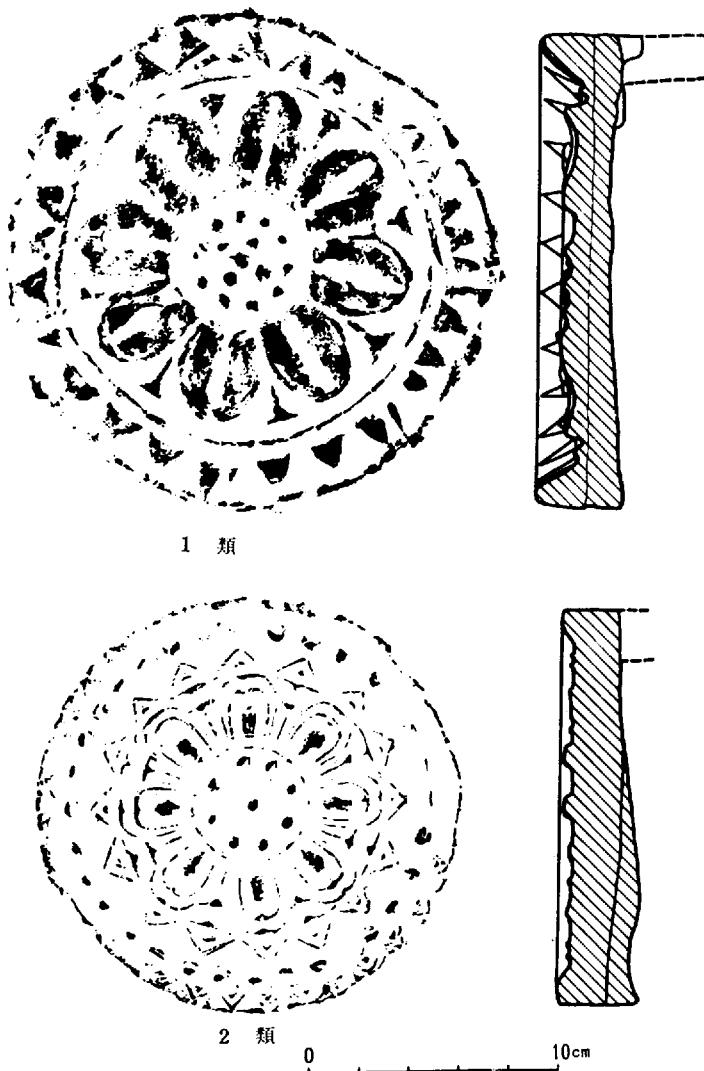
瓦

I 軒丸瓦（第15・16・17図）

軒丸瓦は6種類（白鳳期4種、天平期2種）が出土している。これらを層位的にまた形式的に分類するとかなり差異が認められるのでここでは古いところから時期別に二子御堂奥古窯址軒丸瓦第1類～同第6類と仮称する。

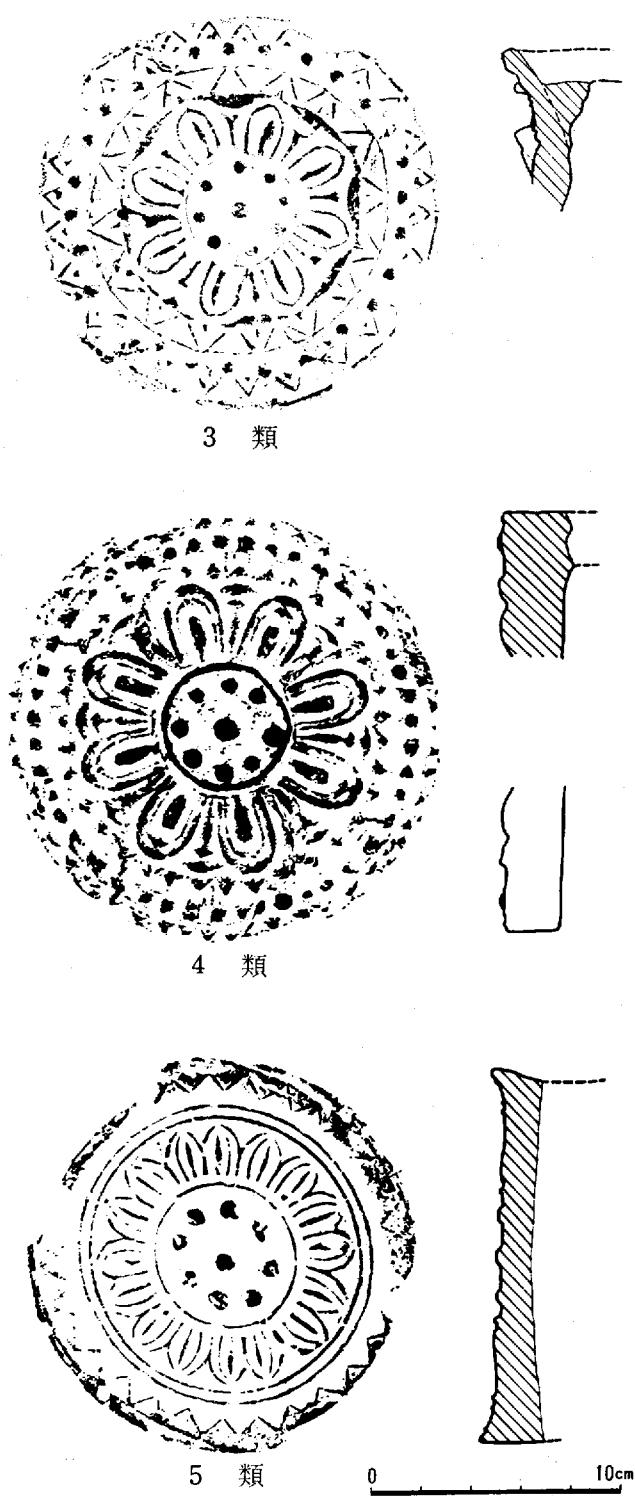
第1類（第15図一上）は白鳳期瓦である。径17.6cmで全体として肉厚で周縁端の厚さは3.5cmで内区画の厚さ2cmに比べるとかなり厚い。外区には26の外向鋸歯文をめぐらしている。その内側に1本の凸線の圈文がある。内区は8葉の高肉单弁に仕上げられその間、中房まで延びない細長い菱形の間弁が配されている。そして中房は弁より約5.5mm低く径約5.1cmでその中に1+4+10の蓮子がある。裏面はさしこみ式となっている。色調は多く茶褐色を呈するが一部灰色を呈するものもある。焼成度は悪く軟質である。灰原より20個体分以上が出土しており、今回の調査ではもっとも多く出土している。

第2類（第15図一下）も白鳳期であるが第1類よりやや時期が降ると考えられる。それは、灰原の層位からして第1類の直上に位すること、および形式的にも第1類より退化した様相を持つことから明らかであろう。径16.6cmで、周縁



第15図 軒丸瓦 (1) 縮尺 (1/2)

に32の外向鋸歯文、その内側に32の珠文、そしてまた、16の外向鋸歯文を配し、全体として外区を形成している。内区は8葉中肉重单弁に仕上げられ、厳密にいえば、子葉は先太りの橢円でその外側に二重の弁がある。そして、間弁は細長く延びて中房にまで達している。中房は第1類とは逆に突出した円形で1+8の蓮子がある。製作技法についていえば、まず裏面は帖りつけ式になっており、接合するための加工がほどこされている。つまり、瓦当を単独に作ったのち丸瓦と接合させるにあたり、瓦当裏面の外縁付近を数cm削り取ってそのうち接合予定部分のみに新たな格子文の叩きめをつけ接合時点での粘土の「つかみ」を助けるよう工夫している。さらに、接合裏面には粘土ひもの痕がみられ、瓦当と丸瓦との剥離現象をおしとどめるよう補強している。珠文は範から取り出す時点で部分的にくずれことがあるらしく外区の珠文および中房の蓮子などはその先端部分に帖りつけが認められる。このことは珠文の不揃いばかりではなく帖りつけ部分で剥落しているもののがかなりあることによっても窺われる。なお、裏面および周縁の整形はヘラ撫でである。灰原より約10個体分が出土しており、うち2個体は瓦当文が完



第16図 軒丸瓦 (2) 縮尺 (1/2)

全である。

第3類（第16図一上）は白鳳期の瓦と思われる。周縁に28の外向鋸歯文、その内側に28の珠文、そしてその内側へ1本の細い圈文に囲まれた16の外向鋸歯文がある。周縁端にも1本の細い圈文が巡っている。内区は8葉中肉重単弁に仕上げられ、萼は内縁の鋸歯文に接している。完全なものが出土していないために中房の様子は不明である。瓦当の厚さは

約1.6cmで、裏面には、指圧整形による指紋のあとが無数に残っており、部分的に布の押圧痕もみられ、周縁はヘラ状工具で切られている。これも帖りつけ式であるが瓦当裏面の、丸瓦接合下端部にはあらかじめ粘土ひもを帖りつけ段状の「受け」をしつけている。それに格子の叩き目をほどこし上から乗せている点で単なる帖りつけ手法の第2類とは異っている。色調は灰色で須恵質といってよい。

第4類（第16図一中）も白鳳期と考えられる。この鎧瓦は、周縁に44の外向鋸歯文、その内側に44の珠文、そしてその内側に32の外向鋸歯文、こうした第2類と同じ構成によるが、鋸歯文が小形化し、珠文が帶状の圈文の上にのるという特異性がみられる。内区は8葉中肉重単弁に仕上げられ、萼は中房に達している。中房は突出した円形で1+8の蓮子がある。製作技法は第2類と同じである。

第5類（第16図一下）は天平期に属するもので平城宮址で6225様式（註-1）と呼ばれているものに酷似している。直径15.3cmである。周縁には細線状外向鋸歯文を巡らし、外区に2重の圈文がある。内区は間弁のない8葉複弁と思われるが意匠が一部逆になっている。中房と内区は1重の圈文で区切られており1+8の蓮子がある。次に記述する第6類と同じくいわゆる瓦質に焼けている。

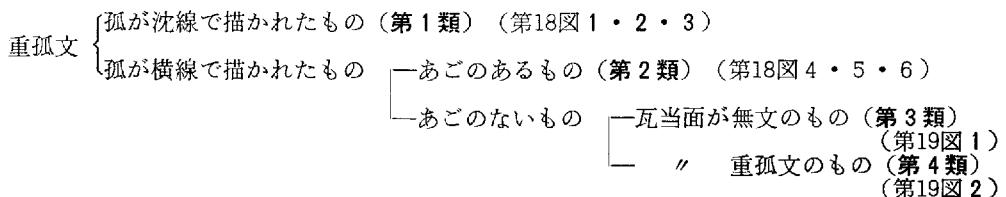
第6類（第17図）は平城宮址で6313式（註-2）と呼ばれているもので径13.3cmと小さい。周縁は26の細線状外向鋸歯文が巡り、外区は細い2本の圈文が24の珠文を囲んでいる。内区は4葉複弁で中房は蓮子1である。厚さ4.2cmと厚く裏面には1.1cm幅の弧状溝がつくられ丸瓦との接合意図を窺わせる。

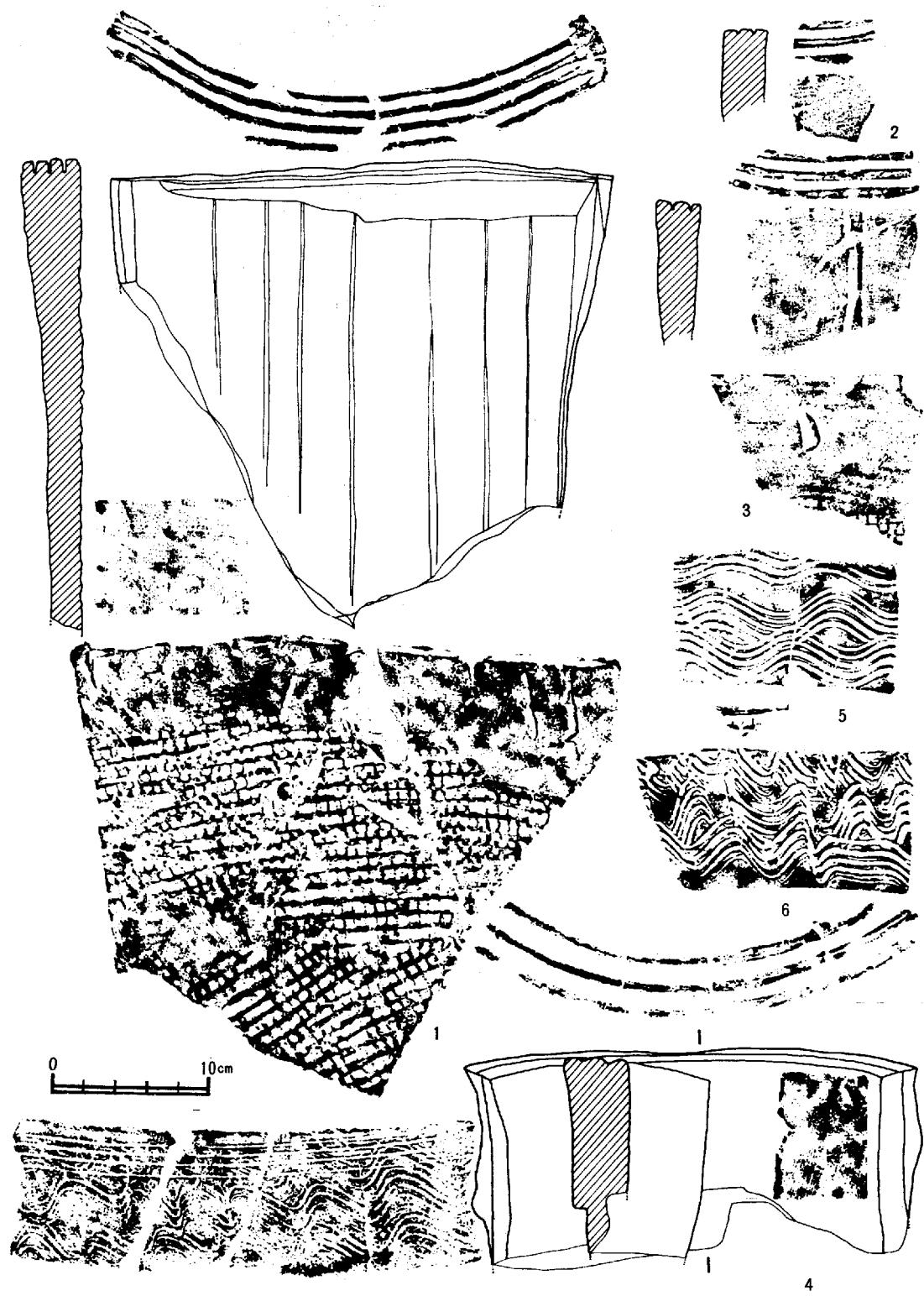
II 軒平瓦（第18, 19, 20図）

軒平瓦は大きく唐草文と重孤文とに分れる。

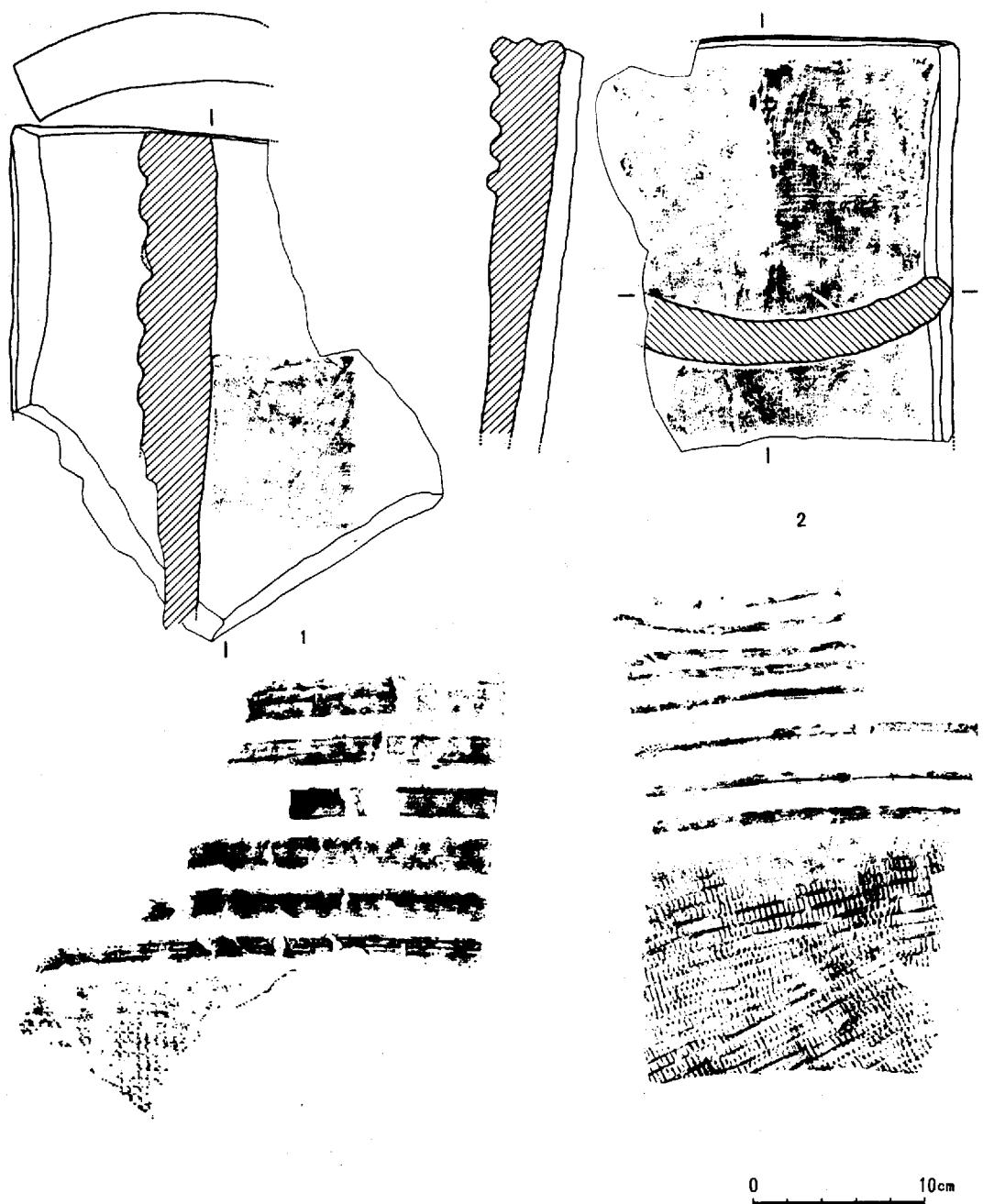
1 重 孤 文

重孤文は大きくわけて2類、細かく分けると4類になる。

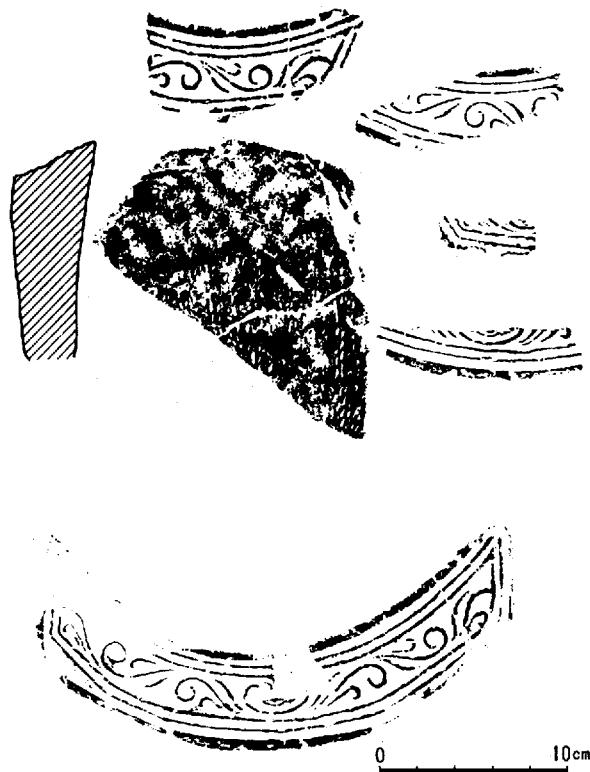




第18図 軒 平 瓦 (1) 縮尺 ($\frac{1}{4}$)



第19図 軒平瓦(2) 縮尺(1/4)



第20図 軒平瓦(3) 縮尺(寸)

わないままでそのままにされているものもある。これらを帖りあわせたあと瓦当面に2本の横線をいれ三重孤に仕あげている。あごの裏面は四条の櫛描き沈線で平行直線および波状文が描かれているが、多くは波状文の上に平行直線をひいている。これは軒丸瓦第2類に伴なうものと思われる。

第3類は瓦当面に文様のない点で特異であるがその大きさも他のものに比べ大きく重量感がある。無類形式であるが、あごに当たる所へハラけずりによる凸帯が6本平行に並んでいる。瓦当面はハラで丁寧にけずっている。表面は細かい布目であるがタルのあとはみられない。裏面はほぼ正方形の格子叩き目で須恵質の灰色を呈している。これも白鳳後期に属するものと思われる。

第4類も第3類とほぼ同様で、普遍的な大きさである。したがって裏面の凸帯も5本に減っている。瓦当面は第2類と同一の三重孤である。裏面の格子叩き目は長方形になっている。第4類はすべて1号窯の焼成室から縄目平瓦・埠などとともに出土しているが、須恵質に焼けていること、格子叩き目であること、重孤文であること、などから考え、白鳳後期に属するものと思われる。

2 唐草文(第5類)(第20図)

唐草文軒平瓦は4個体分出土しており重孤文軒平瓦の出土量に比べ非常に少ない。出土したものも小破片で全体をつかみにくいが、4個体とも忍冬均整唐草文の同一範の使用になるものである。その出土地は1号窯2個、3区上層1個、04区1個となっている。1は瓦当面だけでなくいくらか体部も残している。無あごで裏面には縄目が施されている。

第1類は灰原IV層に含まれるもので白鳳後期のものである。無あごで瓦当面は三重及び四重孤となり、2本あるいは3本のヘラ描き沈線が両端を少し残して左から右へひかれている。表面は細かい布目でタルのつぎ目を残している。瓦当付近はヘラで整形している。裏面はほぼ正方形の格子叩き目で瓦当付近はヘラで整形している。側面化粧は二面整形となっている。色調は灰色・茶褐色とあるが焼成は良好である。これは層位および形式からして軒丸瓦第1類に伴なうものと思われる。

第2類も白鳳後期のものである。いわゆる段頸形式で深頸の部類にはいる。あごの部分と平瓦とは別々につくられておりそれは指圧整形でつくられている。したがってあごの部分が剝離しているものが多い。また幅があ

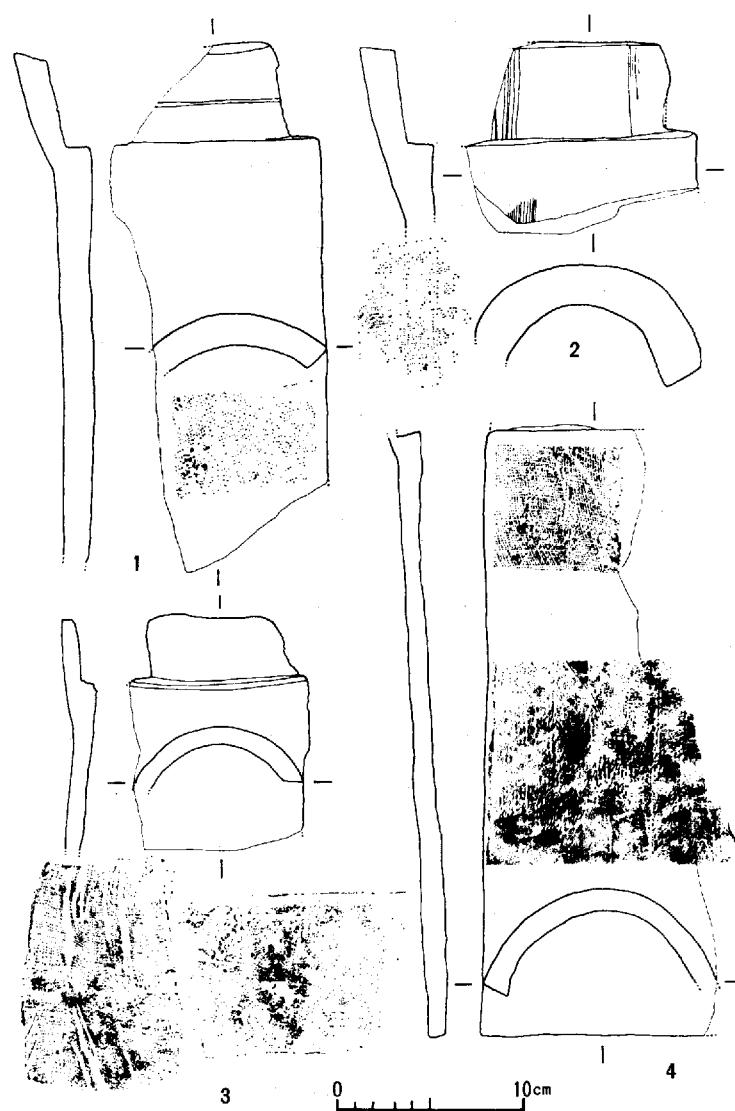
III 丸 瓦

多量の平瓦に比べて丸瓦は極端に少なく、灰原の中にもほとんどみられない。その形はすべて玉縁をつけた有段形式のもので、行基葺式のものはみられない。表面の意粧にはヘラなもの（第21図の2）と縄目叩きのもの（第21図の3・4）がある。2は玉縁にも荒いヘラなもので施されている。1・3も玉縁はヘラなものであるが2に比べていねいな整形である。1の玉縁には一条の沈線がある。裏面の布は細布を使用している。1・3・4が瓦質に焼けているのに対し、2は須恵器質である。

この中で1・3・4は縄目の叩き文・焼成などから考えて天平期に属するものと思われる。2は整形技法や焼成などが他のものと異なることより白鳳期に属するものと思われる。

IV 平 瓦

第1号窯・第2号窯・第4号窯および灰原より多量の平瓦が出土した。これらは裏面の叩き目を基準にすれば大きく3種に分類できる。ひとつは格子目の叩きで、第2には条痕の叩きで、第3には縄目の叩きである。さらに格子の叩き日のものは造瓦技術から一枚づくりとタルづくりとに分かれる（註-3）。説明の都合上、今、これらを第1類～第4類と仮称したい。



第21図 丸 瓦 縮尺 (1/2)

- 格子目
 - タルづくり（第1類）
 - 一枚づくり（第2類）
- 条痕（第3類）
- 縄目（第4類）

第1類（第22図1・4）は表面布目、裏面格子のものである。1は縦4.3cm、横2.3cm、厚さ2.5cmを測る。格子は概して大きく、4は格子の相互間隔が広い。側面化粧は一面であり、表面にタルづくりの痕跡を残している。これは軒平瓦第1類に並行しそうである。

第2類（第22図2・3）は表面布目、裏面格子のものである。完形のものはない。格子は第1類に比較して整っている。その1単位つまり原体は5cm四方である。側面化粧は一面あるいは二面であり、表面の布目からして一枚づくりと思われる。また3のように厚さ約1cmと薄いものもこの類にはみられる。これは4号窯前庭ピットの平瓦が一枚づくりであること、軒平瓦第2類に薄いものがみられることなどから軒平瓦第2類に並行するものと思われる。

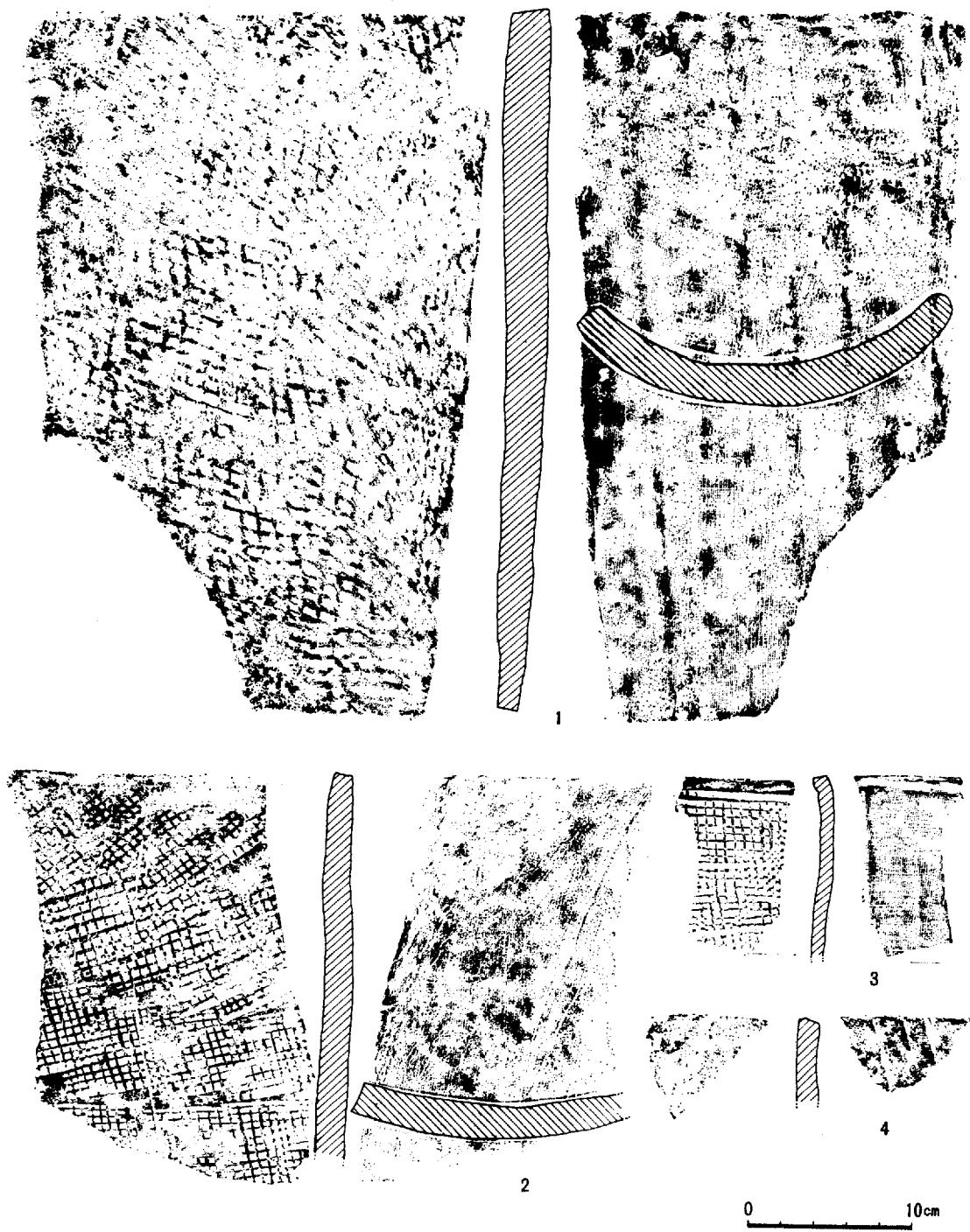
第3類（23図1）は表面布目、裏面条痕文のものである。出土量はそれほど多くない。叩きの単位は長さ4cmである。側面化粧は二面で、表面の布目から一枚づくりと思われる。

第4類（第23図2）は表面布目、裏面縄目のもので第1号窯・第2号窯の窯体内および第4号窯の煙道部から出土した。2は長さ32cm、幅21cm、厚さ1.5cmを測る。側面化粧は一面である。表面の布目からして一枚づくりと思われる。これは軒平瓦第5類に並行する天平期のものである。

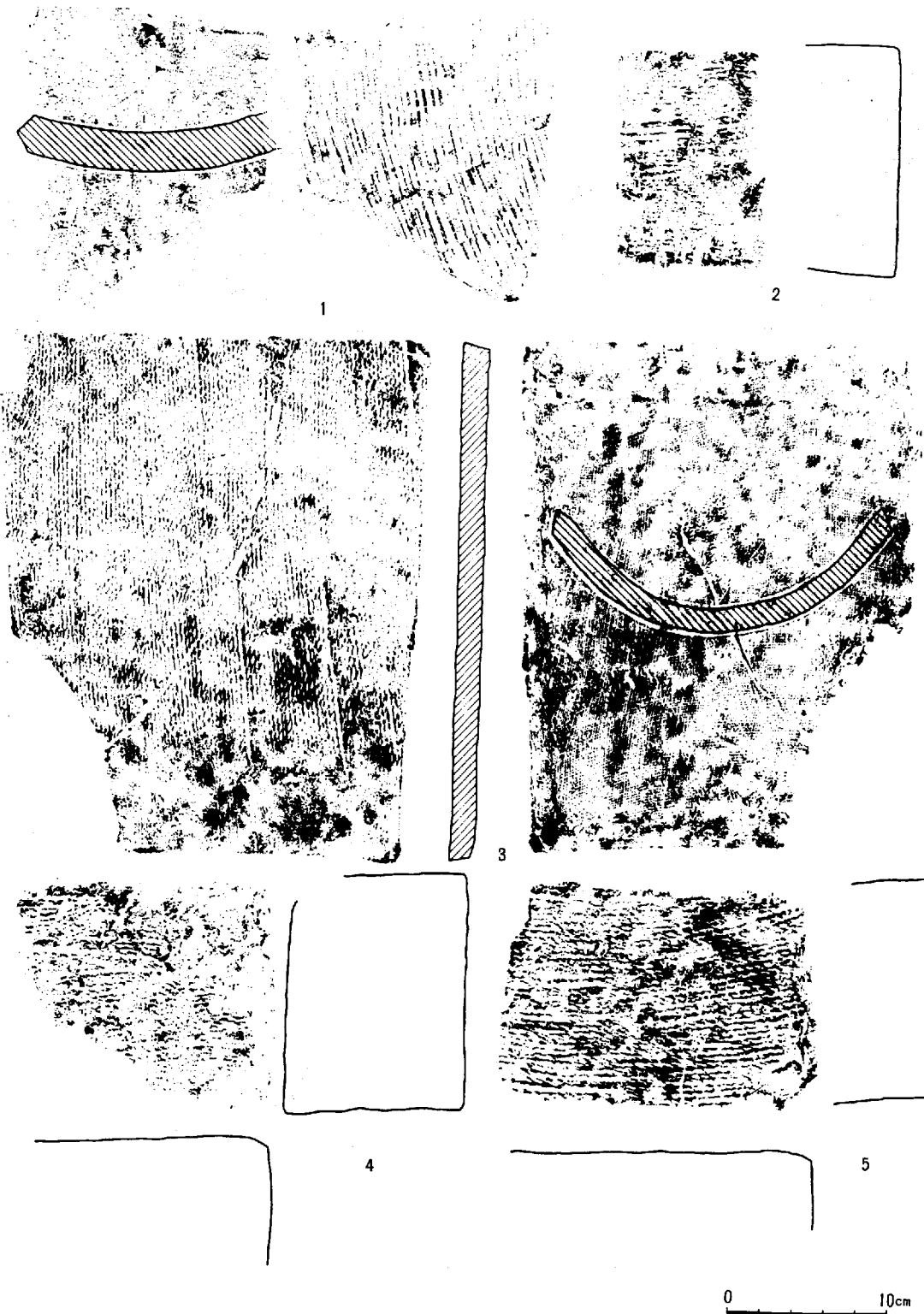
以上の事実より、白鳳から天平への移行期に裏面の叩きが格子目から縄目に変わること、第1類から第2類に移る時にタル造りから一枚造りに変わることが判明したといえる。

V 塼（第23図2・4・5）

塼は第1号窯焼成室から4個体出土している。完形のものではなく長辺は不明であるが、短辺14~15cm、厚さ11cmを測る。側面はへラ切り整形がなされており、表・裏面には縄目が残っている。第23図4を除いて他の3点は表と裏が剥離しており、その剥離面はこぶ状になっている。このことより塼は団子状の粘土塊を叩きつけながら造っていったことがうかがえる。これは表面の縄目が天平期の平瓦とまったく同一であり、その時期のものと思われる。



第22図 平 瓦 (1) 縮尺 ($\frac{1}{4}$)



第23図 平 瓦 (2) • 増縮尺 ($\frac{1}{4}$)

須 恵 器 (第24・25・26図)

各窯体と確実に照応して検出された須恵器は年代決定の基準になるが、それは、第3号窯床面に密着して出土した(1, 2, 3, 4, 5, 76)のほか、第3号窯煙道内の埋土中に白鳳期の二子2類瓦と共に伴した(95, 96, 97)、第1号窯第3層床面から二子3類瓦と共に発見した(84)、第4号窯窯体内から出土した(107)、計4種類を数え、他の各種須恵器は灰原の採集にかかるものである。順次、器形別に記すと、次のとおりである。

杯身A (4~18) 身は全体に浅く、口唇への立ちあがりがあまい。受部はやや上向きに外方へのびているものが多く、一部水平にちかいものもある。一般にヘラ削りがにぶく調整痕として明瞭な稜線をとどめるものは少ない。体部から口縁端への延びが異常に長い。口径は10~12cmで、深さは3~4cm程度である(註-4)。

杯身B (101~103) ほぼ平坦な底部から若干外へひらく体部、丸く仕あげた口縁部へつづく。体部の内面および外面に横なのでヘラ調整痕がみられ、器壁は薄い。

杯身C (87~90) すべて貼り付け高台の杯身である。全体の器形を知りうるのは87だけで高台は浅く外方へふんぱり、体部には明瞭な稜線をとどめないが、はっきりした横ナデ調整が内外面ともにみられる。

杯身D (98~100) 高台を伴わないので平坦な底部から丸味をもって体部へのびる。

蓋杯A (1~3) 口縁部はわずかに外へひらき、端部は丸味をもつ。天井部と口縁部とをわける凹線のあるものがみられる。

蓋杯B (76~79) 天井部中央に乳首形のつまみがつき、口縁部内面にかえりをもつ。かえりの先端が口縁端より若干突出している。口縁端部はほぼ平坦に短かくつまみ出している。器壁は概して薄い(註-5)。

蓋杯C (80~92) 天井部中央にお宝珠形のおもかげを残した扁平なつまみをもつ。つまみの径は一様に3.5cmである。口縁端部はやや内側へ短く屈曲し、屈折した内面に稜線が生じている。口径約20cmである。

蓋杯D (83, 84) 扁平なつまみは基石状になりその径は3.1cmで、口縁端部は短く下方へ屈曲している。84は二子御堂奥古窯址第3類軒丸瓦と共に伴したものである。口径約16cmをはかる(註-6)。

蓋杯E (85, 86, 94) 天井部を欠損しているが、おそらく扁平なつまみが付く器形と思われる。口縁端部への屈曲部が長く、総じてやや高い形をとり、口縁の厚みが感じられる。ただし94は大型盤あるいは台付大皿などの蓋であろう。

高杯A (19, 20, 31) 上半部を欠損したものが多い。脚底部径11cmで、脚の円筒部は長く、脚の中央、裾部にかかるあたりに2本の凹線をめぐらせ、無段無透の裾部は徐々にひらいて端部はやや尖形して終る。杯部との接合面は小さく、したがって焼きひずんでいるとはいえる、杯部として31が合致すると思われる。推定器高13cmぐらいであろう。

高杯B (21, 22) やはり上半部を欠いている。脚部のつくりは高杯Aとまったく同一手法といえるが、脚底部の径が10cmでひとまわり小さく底部から杯部までの長さも短い。いきおい裾部のひろが

りが激しい。

高杯C (27, 28, 35) 高杯Bと脚部底径は等しいが、杯部との接合部における脚の絞りがあまく、接合面は厚く広い。

高杯D (41) 高杯A・Bと同様の整形で脚部底径が極端に小さい点が異なる。

穢A (42~45) 口縁は外方へ大きくひらき、口縁部から頸部へ移る中間に一つの明瞭な段をつくり、頸部に2本の凹線を施し、胴部中央にも2本の凹線をめぐらせてている。頸部内面には強く絞りこんだ痕跡がみられる。

穢B (46, 47) 口縁部下端と頸部中央にそれぞれ一本の凹線がめぐる。段はない。

平瓶A (48, 49) 口縁は漏斗状にちかく、胴部とのはりつけが鮮明である。胴部に稜線はなく、底部は平坦で、器形はやや小形になっている。口縁部に凹線2がみられる。

平瓶B (95~97) すべて二子2類平瓦と共に伴したものである。95は口縁が漏斗状に外へ広くひらき口縁端部を丸く仕あげている。ほぼ水平にちかい底部から丸味をもった胴部が立ちあがり、体部上面は焼きひずんだものか多少陥没している。体部上面の両端に接合の痕跡がみとめられる。ヘラ痕跡は内面外面ともに横方向にあるが、それほど鋭くはない。96もほぼ同様のつくりで、体部上面が自然な形をとどめているにもかかわらず、底部が剥離している。器形は全体として丸味をもち、明瞭な稜線はない。97は口縁端部がやや内傾して体部上面が一段とふくらみ、胴部中央に1本の凹線がめぐっている。底部は水平にちかい。

台付椀 (73, 74, 75) 安定した短い脚部は、底部径8.2cmと10cmの二種類がある。いずれも、椀の底部と接合した下半部の脚のみで、脚は外方へ強く張り出している。あるいは54, 55などが脚の上に付く器形であるのかもしれない。

台付壺 (90, 91) 90は杯身の高台にはみられない形で、体部接合面から外側へ湾曲しつつ、張りの強い高台になっている。体部は不明ながら、91の蓋とともに、薬壺の器形を想定させる。91は天井がヘラで平坦にしあげられ、中央につまみをつけたらしい剥奪痕がある。天井下端に凹線1がめぐり、口縁はほぼ水平にちかいが、やや内側へ斜めに切られている。

壺 (50, 51) 口径は平瓶のそれに等しい。しっかりした口唇がやや内傾し、下方に2本の凹線がめぐる。小形壺の口縁ではないかと思われる。

長頸壺 (52, 53, 54) 口縁のみで確かな器形は断定しがたい。クセのない口縁のつくり頸部の残り具合などからすれば、頸部の細長い直口壺ではなかろうか。

鉢 (57, 58, 59, 60) 横ナデの整形痕がまったくみられない。一般に薄く均一な器壁で、口唇部が丸味をもつものとわずかに窪むものとがある。

甕A (62, 65) 胴部以下を欠損しているが、口頸部は外反度が大きく朝顔形を呈する。口縁端はやや厚くしあげ、口唇の外端には平坦ではなく緩U字状に整形している。体部は65のように肩部の張りがかなりきつい形状ではなかったかと思われる。65の内面には同心円印目がみとめられ、その原体はかなり大きい。

甕B (63, 64) 口頸部は極端に短く、口縁端部はヘラで外へ斜めに切って仕上げている。器壁は頸部から口縁端部まではほぼ均一で、64の表面には平行印目文、内面には同心円文をのこしている。そ

して、頸部から肩部へうつるあたりに一本の凹線がめぐる。

甕C (67) 短く外反する口縁部は緩U字状に仕上げられ、肩部の張りは著しい。肩部から胴部にかけて浅い凹線を密にめぐらせている。

甕D (66, 70, 71, 72) 口縁の外反度がきわめて大きい甕で、口径は各種あるが、70cm以上におよぶ例もある(71)。いずれも肩部以下が不明である。口縁端部のつくりや施文が多少相異するが、もっとも大きい破片70の拓影のように頸部外表に櫛描き波状文を施すのが特徴である。内面はヘラ削り痕が3, 4段みられ、外表には凹線が2, 3本つけられ、そのうえに波状文を施している。

甕E (68, 69) やや厚手の器壁で、頸部は短い。口縁部は粘土を折り曲げたのち整形しているが、それが稜線になっている。外表には櫛描き波状文がつけられている。

(葛原、池畠)

註一(1) 奈良国立文化財研究所『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報10冊 昭和36年

(2) 註(1)と同じ

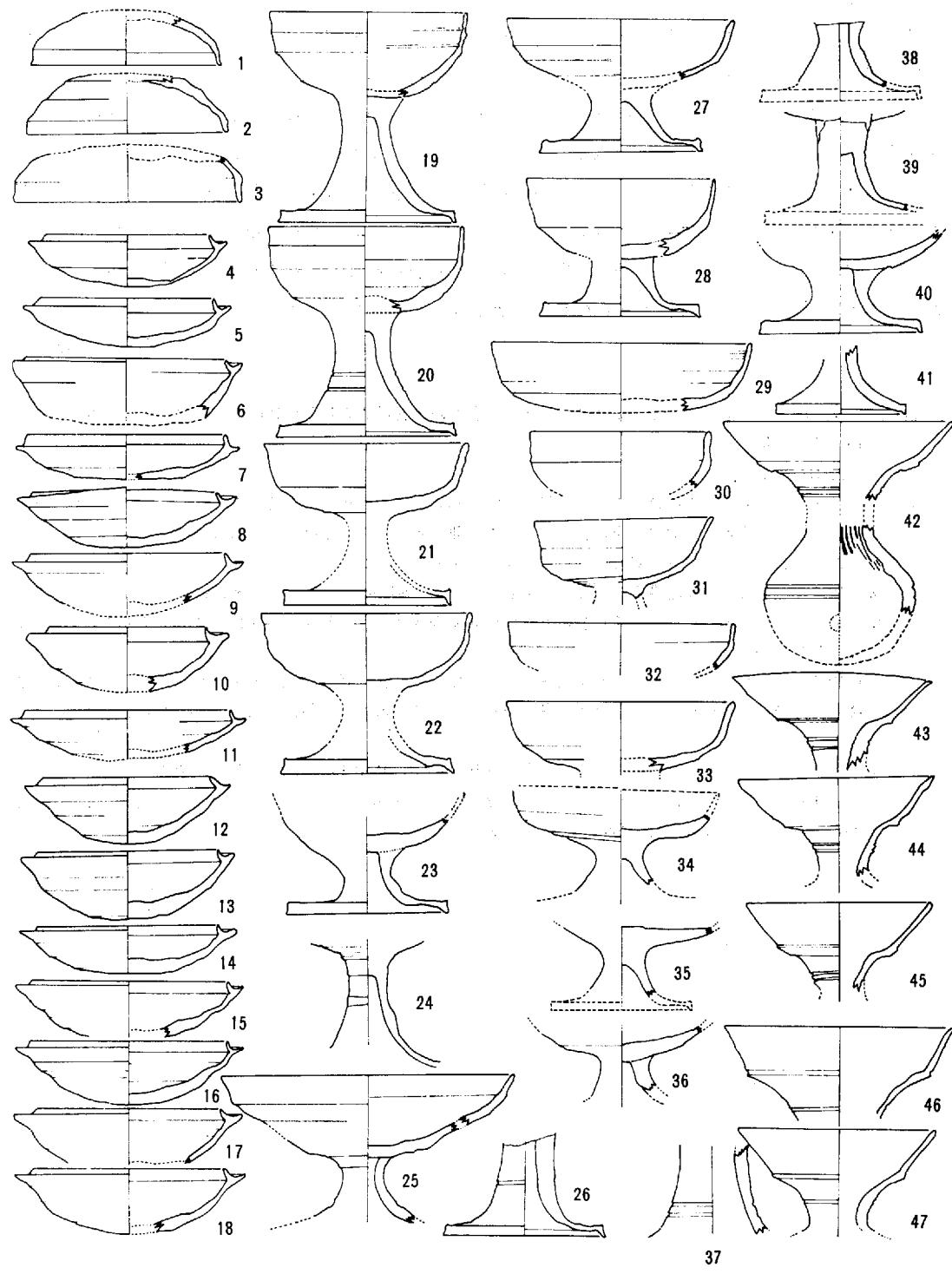
(3) 小林行雄『続古代の技術』堺書房、昭和39年、「造瓦技法」の項で「桶側様の者」について「四枚の半瓦によって構成される円筒は上下の径を異にした円錐台形のものでなければならない。」と記述している。なお、本書の記述を所々に参考にしたことを付記する。

(4) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ 昭和41年、本書のTK209、に近い。

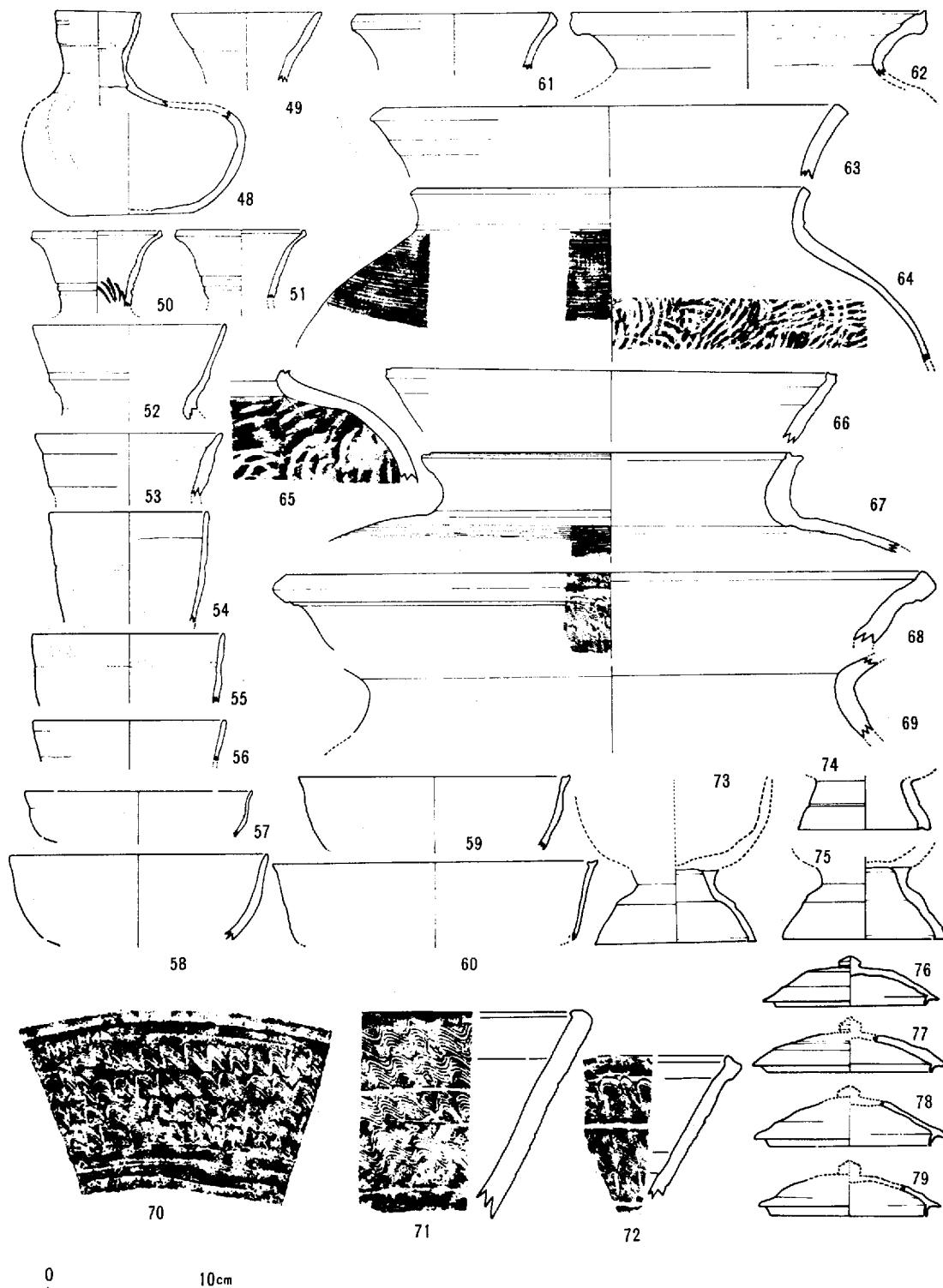
(5) 横山浩一・吉本亮俊「京都市蟠枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』昭和38年

岡田茂弘「難波宮址第十第十一次発掘調査出土遺物」『難波宮址の研究』研究予察報告第四、大阪市教育委員会内難波宮址顕彰会 昭和36年 須恵器について本文83頁、実測図第九において乳首状つまみにふれている。

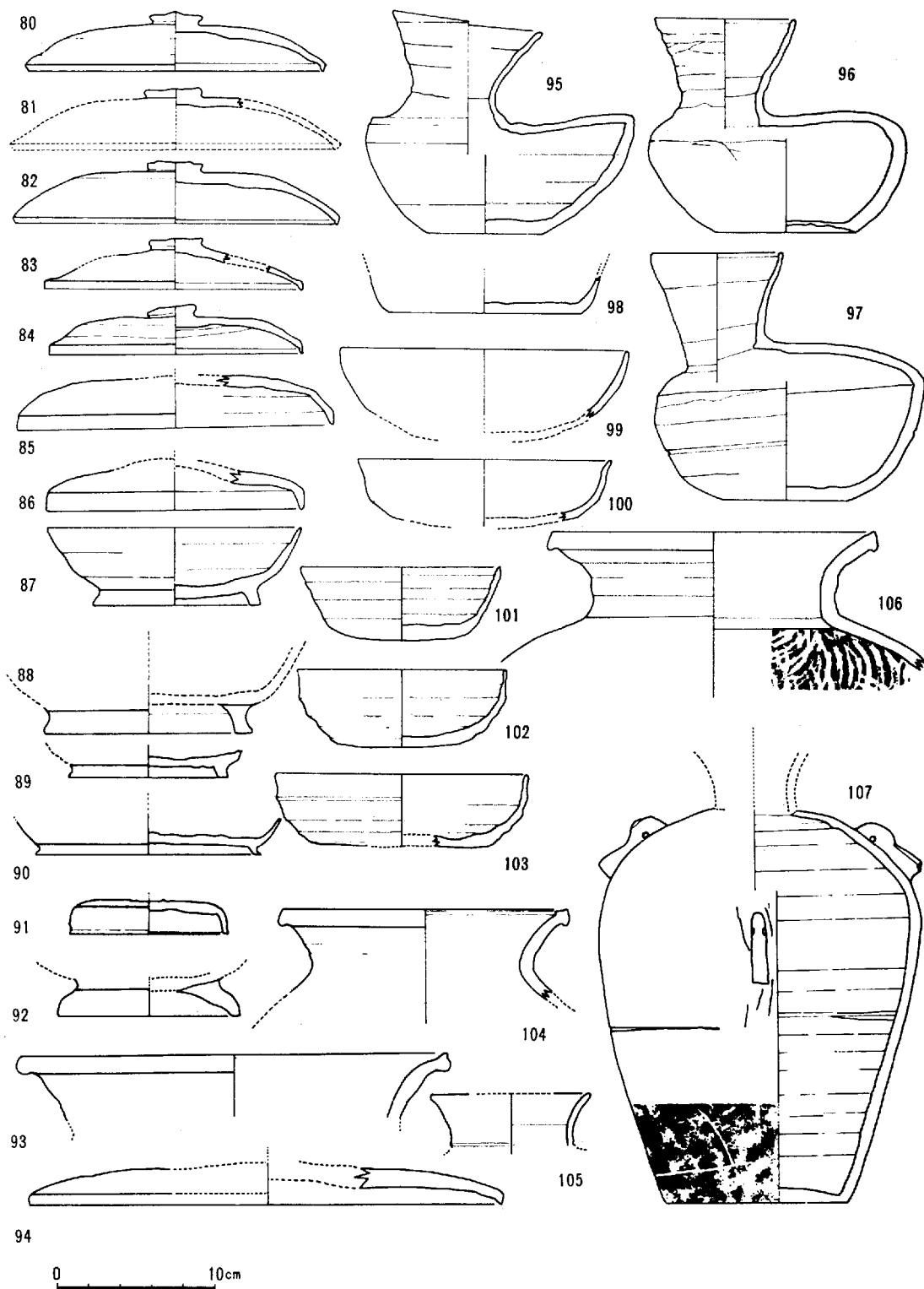
(6) 西川 宏「備前の古窯」『古代の日本』4中国・四国、角川書店 昭和45年。著者の言によれば、灰原の採集遺物にもとづき編年したもので、なお厳密な検討を用すといわれるが、つまみの形状が、「乳首形」から「碁石状」へ変遷する大綱は変わらないであろう。



第24図 須恵器 (1) 縮尺 ($\frac{1}{4}$)



第25図 須恵器(2) 縮尺(1/4)



第26図 須恵器 (3) 縮尺 ($\frac{1}{4}$)

第6章 むすびにかえて

岡山県下において、窯窓及び瓦窓の調査例は先学の手によっていくつか公表されているが(註一), 二子御堂奥古窯址群は、本格的な瓦窓の発掘ということで調査前からその結果と保存処置が注目された。調査の結果によれば、頭初予想していた以上に各窯体の保存状況が良好で、そのため窯体の構造的特色及び窯体と遺物との共伴関係、あるいは窯業体系の特質と推移など、一定程度今後の研究に寄与しうる収穫をえたと思われる。最後のまとめにあたり、調査結果を簡約しさらに周辺寺院との関連性にふれておこう。

遺構について

窯体1基の予想をうわまわる5基という多数の窯体が検出され、7世紀中葉頃、須恵器のみを焼成した第5号窯・第3号窯から平窓様の第4号窯まで約120年にわたる窯体の変遷をたどることができた。その保存状況は、第1号窯・第3号窯など天井部の一部が残存し5基のうち4基までが燃焼室から焼成室上端まで大きな破損をうけない形で確認した。しかしながら、白鳳期の窯体は、連続的に天平期まで継承されたものと思われ、初期の構造をそのまま把握できなかった点は無念というほかない。本窯址群中、最古の第5号窯の保存状況がきわめて劣悪で全体的な構造を看取しえなかつたとはいえ、窯体の構造は概ね次のような変遷をたどっている。即ち、無階無段斜床窯窓→有段式窯窓→変型平窓と。そして、この間、第3号窯煙道直下の床面に掘られた小孔配列の特異構造を見る。この小孔の機能については、たとえば、杯とか高杯などの小型品に対して焼成時の安定性を考慮してうがった孔で、それはまた、小型品の重ね焼き手法を介して、いいかえれば、分煙柱の役割を果たし、煙の対流をうながしたにちがいない。こうした異常な窯体構造は他に類例をみないが、地方窯における瓦窓の導入時点では工人の窯体に対する葛藤が当然予想され、こうした類例をつみあげることがことのほか大切であろう。また、無段式から有段式への変化は、須恵器窓から瓦窓への推移に対応している。問題は、白鳳瓦と天平瓦との間にみられる瓦の焼成度のちがい、つまり須恵質から瓦質への変化は、一定の窯体変化に起因する蓋然性が高いが、本窯址群中では明らかにしえなかつた点で今後の一つの課題となろう。とりあえず、今回検出した各窯体につき、構造別にその計数を表示すれば、下記のとおりである。

表1 窯 体 計 数 表

区分 窯址	窯体全長	方 位	燃 燒 室		焼 成 室			斜 角	煙 内 道 径	そ の 他 微
			(巾)	(長)	(高)	(巾)	(長)	(高)		
第1号	5.4	N60° E	1.4	1.3	1.6	1.52~	0.5	3.6	1.4	43°
第2号	5.8	N58° E	1.0	1.6	1.34+α	1.45~0.44	3.9	1.2+α		43°
第3号	7.6	N43° E	1.1	1.9	0.6+α	1.1	1.9	0.6+α		15°
第4号	5.7+α	N66° E	1.2	2.3	1.5+α	1.5	1.4	1.2+α	平坦	変 型
第5号	4.9+α	N70° E	1.1	1.5	1.0+α	1.1	1.5	1.0+α	10°	不 明

(註) 特に明記していない単位はmで、+αは破損度を加える必要性を示す

ついで、第1号窯・第2号窯などの瓦窯については、一時の焼成量が問題となろう。一寸のくるいも許されない瓦の焼成は、何よりも焼けひずみや破損率をさげることが大きな課題で、瓦を立て並べて焼成する方法が重要となり、平坦な「ふみづら」を形成するよう築窯されたと考えられる。第1号窯・第2号窯の各段の計数をまとめて比較すると表2のようになる。

表2 各 段 計 数 表

第1号窯

区分	各段	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ふみづら 幅		1.55	1.55	1.55	1.5	1.45	1.35	1.2	1.1	0.85	0.7
ク 奥 行		0.25	0.25	0.2	0.35	0.2	0.15	0.2	0.2	0.15	0.25
けこ 又 高		0.25	0.1	0.4	0.2	0.2	0.3	0.15	0.2	0.25	0.1
天 井 高		1.7	1.7	1.4	1.4	1.3	1.1	0.95	0.75	0.55	0.6

第2号窯

区分	各段	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ふみづら 幅		1.45	1.4	1.35	1.35	1.1	0.85	0.7	0.55	0.5	0.4
ク 奥 行		0.6	0.45	0.55	0.55	0.55	0.3	0.2	0.1	0.05	0.1
けこ 又 高		0.15	0.5	0.35	0.3	0.3	0.35	0.15	0.2	0.1	0.1
天 井 高		1.6	1.4	1.35	1.35	1.35	1.0	0.95	0.85	0.8	0.7

(注) 単位はm, 容積を計算する場合, 1段めのふみづらに対し第2段めの天井高が対応する。

天平期の平瓦の標準寸法は、 $21 \times 32 \times 1.5\text{cm}$ である。瓦幅 21cm がふみづらの奥行と、瓦厚 1.5cm がふみづらの幅と対応し、そして瓦長 32cm が天井までの高さに関連する。そこで、ふみづらの奥行の数値が示すとおり、各段に対応する瓦幅は一列又は二列を限度とし、三列以上を並べて焼成することは不可能である。また、天井までの高さによって、二段以上の重ね焼きも不可能ではないが、いまかりに、重ね焼きを無視して計算すれば、1号窯で約600枚、2号窯で約800枚の平瓦の焼成容量を示すことになる。しかしながら、瓦の並べ方が向き合った形をとった場合は、これらの数量の約半数になることはいうまでもない。

第4号窯の前庭部にみられたピットは、窯体以外の遺構がいかなる意味をもつかという点に関しきわめて重要である。

このピットは二子軒丸瓦2類が「中央落ち込み」の壁に接していたこと、また炭灰のほぼ最下端にあった事実とによって、白鳳期に造られたものと考えられる。さらに、位置・年代から推して、このピットは瓦製作に関するもので1号窯に並行する時期の遺構と考えられる。

このピットがどのような用途に使われたものか他に類例をみないが、東側下方にあいた筒状孔及び3個体の瓦の配置などから推考するにあたり、あらかじめこのピットのもつ特長を要約すれば、次の諸点にまとめえる。

①東側下方に延びた筒状孔は径が小さく、またその位置は穴の最下部でなくいくらかあがったところにある。

②平瓦は焼成が悪いとはいえる、製品である。

③炭及び灰はこのピットが廃棄されてから埋まったものである。

④地山の花崗岩風化土を掘りこんだ穴の壁体は、まったく火を受けておらず自然のままである。

⑤中央に凹みがある穴は、筒状孔と一体的にとらえられる。

今まで窯場の調査は窯本体及び灰原の検出に限られ、工房跡は若干の例（註一2）を除きほとんど検出されていない。しかし、瓦自体の重さや半製品の破損などから考え、工房跡と瓦窯址との距離的関係は、容易に想定しうる。瓦製作に際し、必要な工房としては、熱エネルギー源である薪炭材及び粘土、また焼きあがった瓦などを置く、いわば資材置場、粘土をこねたり瓦をつくりたりする作業場、水を得る井戸又は小溝を含む類似施設、生瓦を乾燥さす乾燥場、さらに瓦工の休息する小屋などが考えられる。上記の穴遺構がこれらのどれにもっともふさわしいか推定するならば、井戸ないし乾燥場が考えられる。しかし、井戸にしては削平部分を考慮してもなお浅すぎるし、筒状孔の存在理由がはっきりしない。乾燥にしてもしいて孔を掘る必要はなく栃木県岡瓦窯跡（註一3）にみられるような列状構造物のようなもので十分であろう。今後の類例を待ち、訂正される時点がくるにしても、井戸でないこの井戸状遺構について、われわれは、いまのところ粘土攪拌工場に必要な施設の一部と考えたい。

遺物について

主要な遺物は須恵器と瓦であるが、調査中又は整理段階で気づいた点を記すと、次の諸点をあげることができる。

まず、須恵器についていえば、灰原における須恵器単純層及び蓋杯の形態的特徴から、大きくは4期に分かれる。第1期の蓋杯は、口径や立ちあがりが若干小さいが、なお後期古墳時代にみるそれに似ている。第2期の蓋杯には、乳首状のぎぼしがつき、この形体は、京都市幡枝古窯址例（註一4）によってかなり厳密な時期が与えられる。幡枝古窯址例のそれは飛鳥時代の瓦を共伴しているが、本窯址例の場合、地方窯としての年代的幅が問題となる。おそらく7世紀中葉としてよいであろう。次いで、蓋杯の径が大きくなり、扁平な宝珠つまみの付く時期がある。これが第3期である。最後の第4期になると、蓋杯の宝珠は碁石状になり、先端の尖りをまったく失う。

次いで、二子軒丸瓦の変遷を記そう。

第1類→第2類→第4類→第5類
第6類

第3類は年代的には第4類の後にくるものと思われる。これらのうち第2類から第4類までは重弁蓮花文の周囲に鋸歯文・珠文を華麗に重ねていることから地方色ととらえられ一般的に吉備式又は吉備寺式と呼ばれているものである。第1類を含めこの4種の瓦を比較しこの形式の推移を簡単にみてみたい。

まず、第1類は彫りが深く、外区の文様は鋸歯文のみでその文様も大きい。これが第2類となると彫りが浅くなり外区に珠文が現われて、子葉も重弁となってくる。中房の蓮子も $1+4+10$ から $1+8$ へと減少する。また鋸歯文は、単に突起した三角形として表徴されないで、外周の線と内部の三角

とに分かれ複雑化する。この2種類に類似した瓦は古代吉備の中でも備中國に集中しており北房町赤茂（英賀）廃寺（註一5）でも出土している。第4類になるといよいよ平面化して周縁と外区の高底差がなくなり、鋸歯文は、外周線と内部の三角部が一体的になり、小形化する。内区、中房にはあまり変化がないのに対し周縁・外区に変化が現われる。この4類に類似した瓦は総社市門満寺（賀夜寺）真備町八高廃寺・倉敷市陶寒田瓦窯址などから出土している。

第3類は鋸歯文・間弁などが第2類と似ているが異なる点も多い。以下相異点を列挙しておこう。
 ①鋸歯文の外に圏文がある②鋸歯文が細線化している③珠文が高くなり、外の鋸歯文にくっついている④弁が単弁になっている⑤外面整形が粗雑である。したがって前述したように、鋸歯文の変化の過程からすれば、第3類は、第2類の後、第4類の前に位置づけられるが、鋸歯文の線が細いこと、あるいは弁形式が重弁でなくなること、等々を考慮するならば、この第3類は2類のさしかえ瓦として白鳳末に造られたものと推考しうる。つまり第3類は第4類より新しいか、並行する年代を与えられ第2類の亜種と考えてよい。

これが天平期になると第5類・第6類でみたように、鋸歯文の変化がすすみ外周線のみが残るようになる。

なお、二子御堂奥古窯址からは、かつて、今回見られなかった他の一種の軒丸瓦が出土している。それは、径18.5cmで周縁には29の細線状外向鋸歯文が巡り、外区は32の珠文を2本の細い圏文が囲んでいるものである。内区は8葉複弁で中房との境は1重の圏文で区切られている。中房には1+8+8の蓮子があり、これは、白鳳期最終末期あるいは天平期初頭と思われる。

以上を表にまとめると次のようになる。

表3 対象表

摘要 区分	相対年代	窯体	須恵器蓋坏等	共伴瓦
第1期	飛鳥期後半（7世紀中葉）	5号窯、3号窯古	5~18、1~4	なし
第2期	飛鳥期最終末期～白鳳期前葉 (7世紀中葉後半)	3号窯新	75~78	なし
第3期	白鳳期中葉（7世紀末～8世紀初頭）	1号窯古または2号窯古	79~81、103~104	軒丸1、軒平1、 平瓦1
第4期	白鳳期後葉（8世紀前葉）	2号窯古または1号窯古	82~86、102	軒丸2・3・4、軒平2・3・4、 平瓦2
第5期	天平期中葉（8世紀中葉以降）	1号窯新、2号窯新	?	軒丸5・6、軒平5、 平瓦4

(注) 一般にいう飛鳥(540～642)白鳳(645～704)天平期(708～781)を便宜的に3区分し、前・中・後葉とし、さらに細分して初頭、後半、以降などとした。

周辺寺院址との関連について

この窯址群は、7世紀中葉後半まで須恵器のみを焼成し、やがて瓦窯へと推移したと考えられる。7世紀代の須恵器の需給先としては、倉敷市日畑、矢部にまたがる王墓山古墳群あるいは二子古墳群などが推察されるが、この点についてはさらに他日を期して検討したい。ただ、二子軒丸瓦1類・同2類の同范瓦を使用した日畑廃寺は、旧都雀郡庄村大字日畑西組赤井地内の、王墓山古墳群の所在する山麓の東側に位置し、同古墳群中の盟主的位置を占める王墓山古墳ときわめて近い場所にある事実

二子御堂奥古窯址群

表 4 備考中古代華語院址一覽表

だけを記述しておこう。

最後に、本古窯址から出土した6種類の軒丸瓦を、現在知られている古代寺院址の出土瓦と照応すると次のとおりである。第1類と第2類はさきにふれたように日畠廃寺に限られ、第4類は秦原廃寺、第5類・第6類は矢部廃寺、第5類は柿梨堂、惣爪廃寺などにみられる。第3類は日差廃寺(註一6)で出土したものに似ているが、なお比較検討する機会をえていない。いずれにせよ、こうした関係は、古代行政単位の一つである「郡」を越えたあり方を示すので、古代郡名、郷名、廃寺名、所在地の順でまとめると表4のようになる。

さて、瓦窯の存在形態については、第2章でふれたとおり、寺院址と近接したあり方が一般的で、瓦窯のみならず多くの場合、製鉄あるいは製銅などの工房址を併設している。このことは、個別的な寺院勢力が、各種の工人を直接的に掌握している反映と考える以外にない。ところが、本窯址のあり方は、かならずしも普遍的なそれではなく、まったく孤立的に存在するのであって、瓦の配布関係からしても大きくは3つの流れがある。第1期は、距離的にかなり離れているとはいえ、同一郡内にある日畠廃寺と非常に緊密に結ばれた時期。これは、8世紀初頭、白鳳期中葉頃と考えられる。第2期は、いまだお日畠廃寺と強い関連をもちながら、一方においては、外向鋸歯文と珠文で装飾したいわゆる吉備式瓦に移行し、それが備中国一円にひろがる時期、8世紀前葉、白鳳期後葉にあたる。このことこそ窯の孤立的存在形態に起因する現象的特色で、備中國内にあって、都宇郡、下道郡などにおける寺院勢力の同族結合紐帶の反映ではなかろうか。そして、第3期には、平城宮6225様式の垂形式瓦が、以前からの文様形態を完全に駆逐してとてかわる。中央官衙の整備にみられるとおり、瓦工人を含む地方組織体制がより強固にゆるぎない状態になったことを物語っているのであろう。しかしながら、平城宮6225様式そのものではなく、あくまでその垂形式である点は興味深い。

小報をまとめるにあたり、対策委員各位をはじめ先輩・友人・知人から幾多の教示をえた。末筆ながら記して衷心より御礼申しあげるしだいである。

(葛原、池畠)

註(1) 近藤義郎「岡山県邑久郡美和村の一窯址」『日本考古学年報』3

永山卯三郎「陶の瓦窯址」『吉備郡史』上巻 岡山縣吉備郡教育會 昭和12年、旧吉備郡穂井田村大字陶、旧浅口郡船穂村大字船穂、同長尾町長尾の行政境のある赤埴山(赤羽山)の丘陵上に2基の窯体の所在したこと、発掘した1基は有段式窯窯であることなどを報じている。

宗沢節夫「占見瓦窯址の発見について」『土』12号 金光図書館 昭和25年

(2) 坂詰秀一「埼玉県入間郡谷津池瓦窯跡」『日本考古学年報』19 昭和46年 坂詰秀一編『武藏新久窯跡』雄山閣 昭和42年

(3) 前沢輝政「下野国足利・岡瓦窯址」『古代』49・50合併号 昭和42年

(4) 横山浩一、吉本堯俊 前掲書

(5) 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』昭和4年

玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第2輯 昭和16年

永山卯三郎「岡山縣通史」上編 昭和5年

永山卯三郎「吉備郡史」上巻 昭和12年

間壁忠彦、間壁葭子「古代吉備王国の謎」昭和47年

間壁葭子「倉敷市酒津一水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 昭和48年

以下、寺院名、古瓦の特徴などについて記述した個所は、標記文献に依るところが大きい。

(6) 大本逐壽「吉備古瓦選(三)」『吉備考古』第52号 昭和17年

大本逐壽「日差寺の瓦」『吉備文化』第57号 昭和18年



1 二子御堂奥古窯址群全景（東から）



2 第1号窯窯体（東から）



1 第1号窯煙道部（東から）



2 第1号窯焚口部（東から）



1 第2号窯窓体（東から）



2 第2号窯焚口及び前庭部（北西から）



1 第3号窯煙道部（上方から）



2 第3号窯窯体（東から）



1 第4号窯窯体（東から）



2 灰原主軸直交断面（東から）

図版 6



1 第4号窯前庭ピット（上方から）



2 同ピット小孔（上方から）



軒丸瓦瓦当面表裏（1類・2類）

図版 8



軒丸瓦瓦当面表裏 (3類～6類)



軒平瓦（1類～4類）



平瓦及び磚



須恵器(1)



須恵器(2)

第Ⅵ部 島地貝塚の調査

島 地 貝 塚

目 次

第1章 調査概要	307
第2章 出土遺物	311
第3章 むすびにかえて	314

図 目 次

第1図 位 置 図	307
第2図 島地貝塚地形図	308
第3図 IV地点・土層断面図	309
第4図 V地点・土層断面図	310
第5図 島地貝塚調査区設定図	折りこみ
第6図 島地貝塚出土遺物(1)	315
第7図 島地貝塚出土遺物(2)	316
第8図 島地貝塚出土遺物(3)	317
第9図 島地貝塚出土遺物(4)	318
第10図 島地貝塚出土遺物(5)	319

図 版

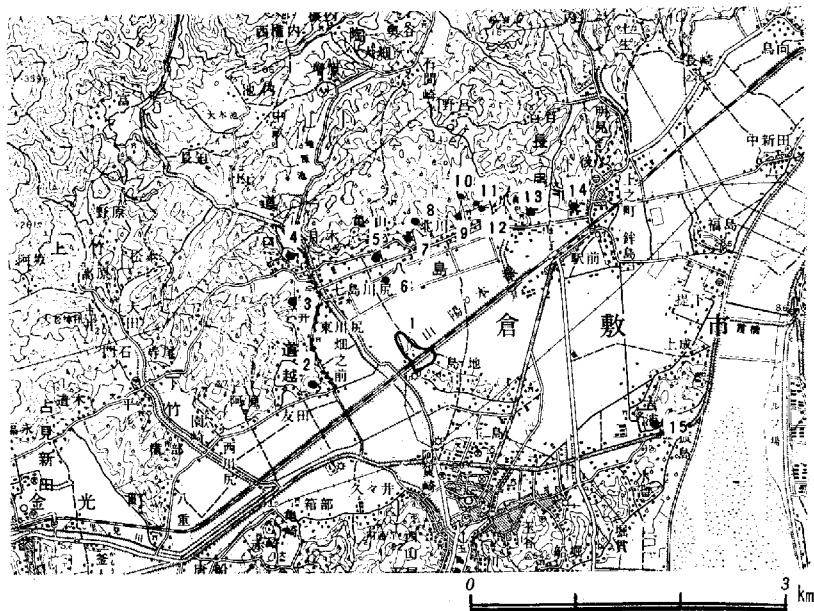
図版1 島地貝塚出土遺物	1
図版2—1 島地貝塚遠景	2
図版2—2 道口川より島地貝塚を望む	2
図版3—1 III地点よりII地点・I地点を望む	3
図版3—2 V地点グリッド	3
図版4—1 VI地点出土歯骨	4
図版4—2 VI地点貝層	4
図版5—1 V地点貝層	5
図版5—2 V地点貝層	5
図版6—1 V地点出土遺物	6
図版6—2 V地点出土遺物	6
図版7—1 V地点出土遺物	7
図版7—2 V地点出土遺物	7

第1章 調査概要

島地貝塚は山陽本線玉島駅より西へ約1.5キロメートルいった倉敷市玉島島地地内に位置する。

現在でも七島という地名が残るよう、島状の高みが七つあり、それらが連なって長さ約1.4キロメートル幅約0.2キロメートルの南西方向にのびる丘陵を形成している。

附近には道口川が流れれるが、山陽本線の踏切から約50メートルほどいった地点で、南西



第1図 位 置 図

- | | | | | |
|--------|------------|----------|-----------|-------------|
| 1 島地貝塚 | 2 要害山城跡 | 3 小浜遺跡 | 4 道口神社古墳 | 5 天王山古墳 |
| 6 浜貝塚 | 7 神崎神社古窯址群 | 8 大日古窯址群 | 9 川北一本松古墳 | |
| 10 古窯址 | 11 鳴谷古墳 | 12 伏起古墳 | 13 瓜崎貝塚 | 14 旧長尾中学校貝塚 |
| 15 貝塚 | | | | |

方向と北東方向に分流する。後者の流れは約1.5キロメートルほど流れ、さらに南へと流れを変えてゆく。この流れの南には溜川があり、この島地の丘陵を囲むように巡り、往時の景観をかいまみることができる。

まず遺跡の範囲を確認するため県道玉島成羽線を起点として東へ約300メートルの間に4メートル×2メートルのグリッドを設定する。調査区内には用水、農道、水田、畠等が存在しているので便宜的に、それらで分けられている所を東よりⅠ地点、Ⅱ地点、Ⅲ地点、Ⅳ地点、Ⅴ地点の5地点に分け、Ⅱ地点より調査を開始する。

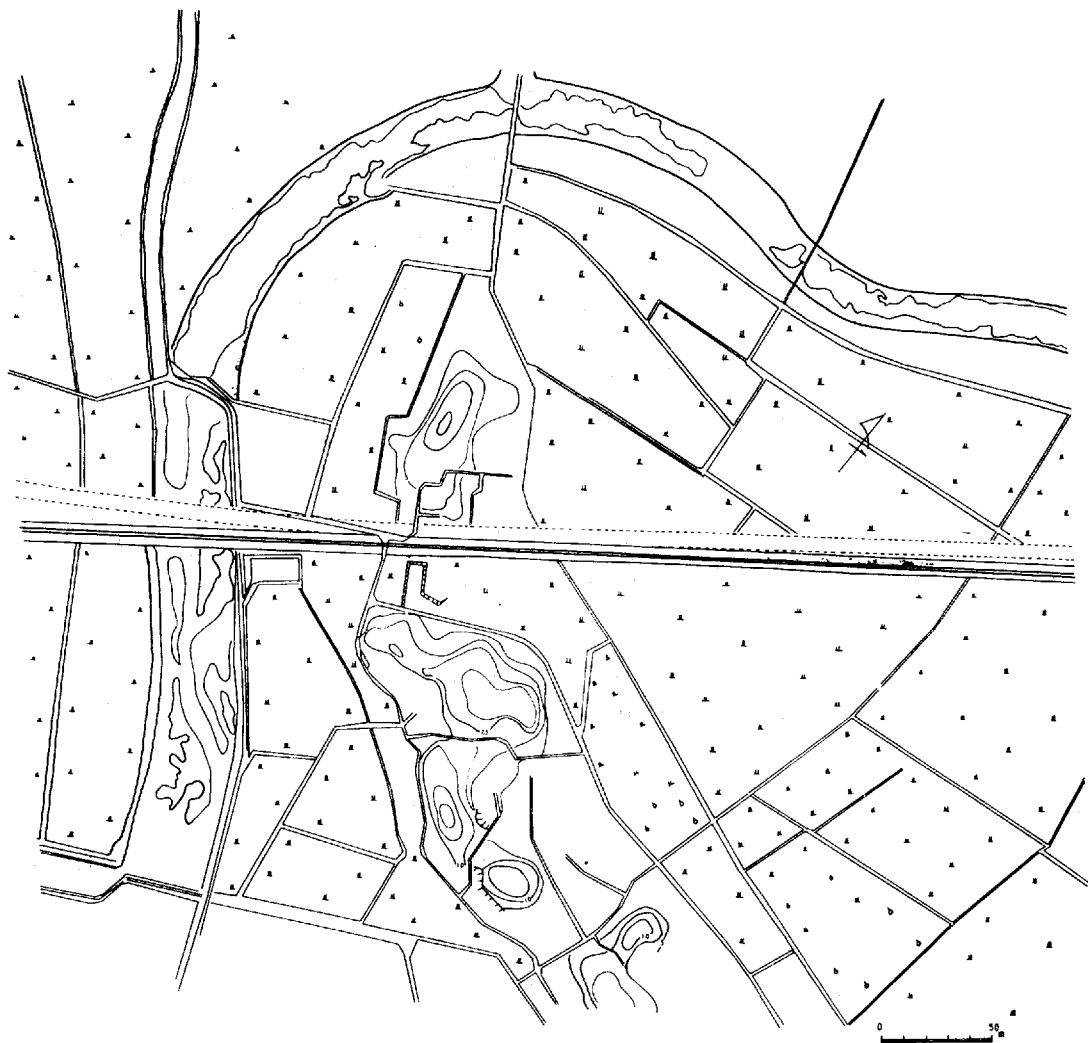
Ⅱ地点は全長82メートルあり、ハス畠ということもあって、常に滯水している状態であった。

4メートル×2メートルのグリッドを4メートルおきに設ける。グリッド番号では15から31までである。各グリッドとも地表より1メートル60センチほど掘り下げた段階で、出水が激しくそれ以上の掘り下げを中止する。

層序は耕作上一床土一茶褐色粘質層一灰褐色粘土層一青灰色粘土層の堆積がみられるが、青灰色粘土層のより低い部分の堆積状態は、砂質を多く含むようになる。これら各層からは、遺構及び遺物は全く検出されなかった。なおⅡ地点における青灰色粘土層のレベルは各グリッドともほぼ同一である。

Ⅰ地点は用水で分けられた45メートルの区間である。海拔高—20センチであるが、ブドウ畠として今まで使用されていた。用地の関係からセンターに沿って2本、側道部分に4本の計6本のグリッ

島 地 貝 塚



第2図 島 地 貝 塚 地 形 図

ドを設定する。グリッド番号では1から11までである。

当初この地点が洪積層の末端部分ではないかと推定されていたところであるが、現在ブドウ畠となっている耕土は、調査の結果、他から運んできた土であることが明らかになった。

層序についてもⅡ地点のそれと全く同一の内容を示している。遺構遺物の検出されなかった。

Ⅲ地点は全長59メートルあり、畠となっている。海拔高は40センチで、Ⅱ地点との比高差が大である。グリッド番号では34から46までである。

調査に入る以前の分布調査においては、洪積層の面が露出しており、貝層下の遺構が残在している可能性を考えた地点である。その為全面耕作上をはぐことを前提として、4メートル×4メートルのグリッドを設定し調査に入る。

耕作土直下より花崗岩のばいらん土のかなりしまった面を確認し、他のグリットにおいても認められた。しかしながら洪積層の面にしてはかなり平坦で、踏み固められた状態を示すうえに調査に参加している人夫さんより、『ここは畠にする為に土を持って来て埋め立てたという記憶がある』といふ

話などからして、この面を洪積層の面として扱うのには疑問ができた。確認のために一部を深く掘り下げた結果、花崗岩の下に非常に粒子の荒い砂と、さらにその下にはⅠ地点、Ⅱ地点で確認された青灰粘土層を検出した。さらにⅢ地点の46トレンチに洪積層の面を確認し、追跡するが、かなりの急傾斜をもって東へ落ち込んでいくことからも裏付けられた。

遺構は確認されなかったが、グリッド35及び36より縄文時代後期・晚期・土師器・須恵器・備前焼が少量ではあるが、花崗岩のばいらん土中より出土している。

Ⅳ地点は全長20メートルで、Ⅲ地点とは道で隔てられ、西へ傾斜している畑である。Ⅲ地点のⅥ地点よりに洪積層面を検出しているので何らかの遺物・遺構が残されていると考えられる地点である。

全面を調査するとの前提にたち、4メートル×4メートル、4メートル×2メートルのグリッドを13設定する。以下各グリッドについて述べてゆく。

A—2・B—2・A—3・B—3・A—4・B—4・C—4の7グリッドにおいては、洪積層の面までには耕作土一床土の2層のみの堆積層がみられる。表土より洪積層面までは60センチほどで達するが、洪積層面自体が削平を受けた状態を示し、さらに多くの攪乱坑が穿たれている。これらのグリッドからは遺構・遺物の出土はみられなかった。

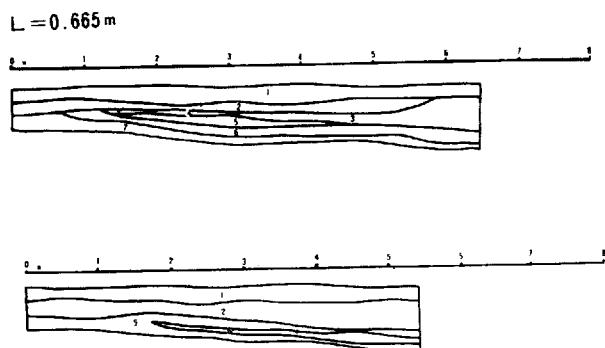
A—5・A—6・B—5・B—6・C—5・C—6の6グリッドにおいて貝層を確認する。層序は耕作土一床土一茶褐色土一小礫層一混土貝層の5層の堆積がみられる。混土貝層は、土層断面図を見る如く、5センチ大のハイ貝が厚さ約28センチの小礫層のはば中央に挿まれた格好で厚さ16センチほどで堆積しており、混土貝層中には小礫層と同様の礫が混入している。

当初この貝層は縄文時代のものと考えられたが、貝層を掘り下げてゆく過程で、縄文時代の遺物の出土は全くみられなかったこと、逆に土師器が出土の大半を占め、他に若干の須恵器が出土するという内容であったことからしてⅥ地点の貝層の形成時期は縄文時代ではなく、古墳時代以降に下がると考えざるを得なくなった。

Ⅴ地点はⅥ地点と私道によって隔てられた全長22メートルの畑地である。海拔高10センチを測り、同一平面上で水田となっている部分の海拔高は-20センチを測る。

Ⅴ地点はC地点と同様に事前の分布調査の時に、若干の貝片を採集した地点である。耕作土の状態もよく、今回の調査対象となった地点において調査の主体とした所である。

B—1・B—2・C—1・C—2・D—2・D—3の各グリッドでは耕作土一床土一小礫層一洪積



第3図 Ⅴ地点、土層断面図

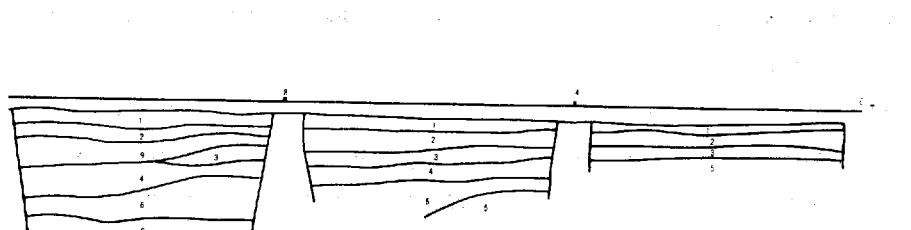
- 1 耕作土層
- 2 床土
- 3 茶褐色土層
- 4 灰褐色土層
- 5 小礫層 (3~5 cmの円礫)
- 6 混土貝層 (5 cm大のハイ貝)

島 地 貝 塚

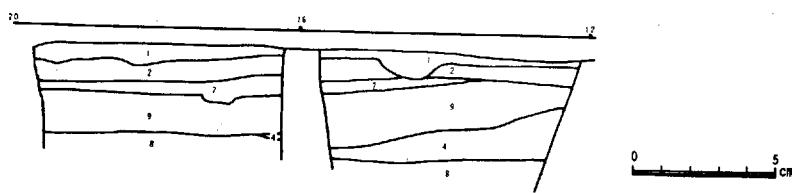
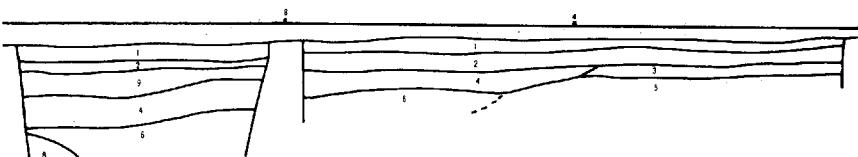
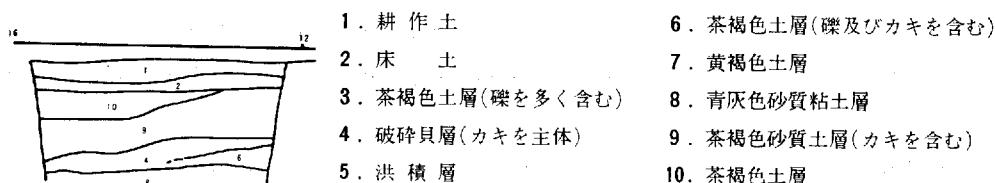
層の層序が認められたが、貝層は検出されなかった。遺物はB—2・C—1・C—2の洪積層に接して中世の土鍋（口縁部の破片から3個体分）と亀山焼が出土した。

B—3～6・C—3～6・D—4～6の各グリットにおいて貝層を検出する。貝層は第3層茶褐色土層下に存在し、破碎されたカキを主体としている。貝層上面の茶褐色土層中には（カニモリガイ）といった巻貝の種類が混入し、貝層下の土層は細砂粘土層—青灰色粘土層の層序を確認した。細砂粘土層中には多量の巻貝がさらに多くの死貝も検出している。青灰色粘土層はI地点・II地点・III地点で認められたそれとほぼ同一のものと想定され、特にこの地点では上面に多量の流木を検出している。さらにレベル的には高くなるが、洪積層の傾斜を考慮すれば前者と同一平面上にあると考えられるカキの殻のついた40センチ～60センチの円碟も確認している。

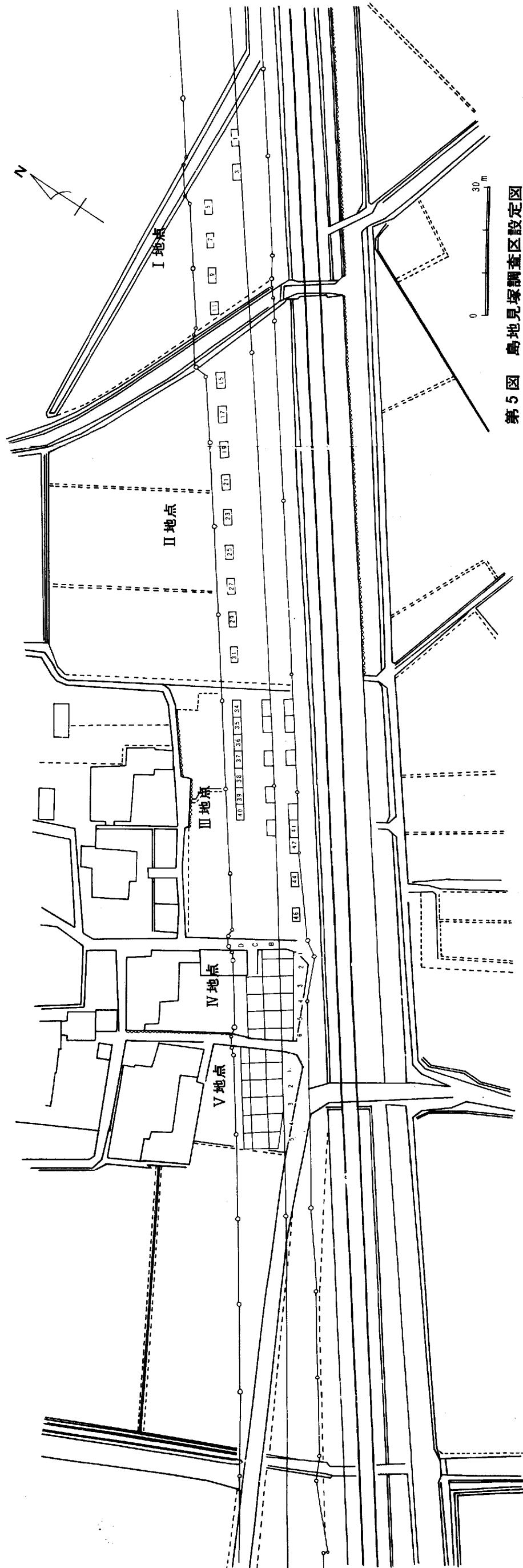
遺物の出土状態は、貝層上面より繩紋時代前期、そして貝層下に堆積している青灰色粘土層上面より須恵質土器を出土している。他の繩紋式土器（前器・中期・後期・晩期）は、弥生時代前期及び土師器と同様に貝層中に混在する形で出土し、その層位的分離は不可能であった。



第4図 V 地点、土層断面図



第5図 島地見塚調査区設定図



第2章 出 土 遺 物

前期繩紋式土器（第6図、図版1）

1は外面は水平からやや斜めに向って、アルカ条痕をつけたのちさらにその上から直行する感じで条痕で調整している。裏面は全体を横走する方向の条痕で整形している。胎土はやや大きいと感じる石粒を混入するが、焼成は非常に良い。底部の形は、平底になるか丸底になるか不明である。

3は器表面に縦、横の貼付細隆起帶文を施している。地文は、鉄分の付着が著しく確認することが出来なかった。裏面については、2で示した如く横走する貝殻条痕による調整がみられる。この土器の時期については、熊本県轟貝塚出土の轟式（註1）にみられる細隆起帶文と裏面の貝殻条痕において共通した要素がみられ、さらに羽島下層式の貝殻条痕による手法からして、前期に位置付けられると考える。

4は器壁の厚さ5センチ～7センチを測り、表面には棒状工具による方形の刺突文が施されている。裏面には貝殻条痕による調整はみとめられなかった。

5は器壁の厚さ6センチ～8センチで口縁に近づくにしたがって、内湾気味になる鉢形土器である。表裏とも文様はなく、口唇部に貝背面による押圧がみられる。

胎土は粒子の荒い石粒を多く含むために、内外面の整形において条痕状に残されている。焼成は非常によく、色調も黒褐色を示す。

後期繩紋式土器（第7図・図版1）

1は堆定口径21センチ・器高26.5センチを測る深鉢形土器である。器表面に鉄分の付着が著しいが、アルカ貝による条痕を口縁部に近い部分は平行し、胴部に近くなるにしたがって斜行する調整がみとめられる。しかしながら、アルカ貝による条痕の調整からすれば中期に入る可能性もある。

胎土は細砂を含む。焼成は良好であり色調は外面は黒褐色、内面は茶褐色を示す。

3は器壁の厚さ7センチ～8センチを測る。細繩紋の地文の上に沈線を引き、その区画内を磨消している。

4は器壁の厚さ6センチ～8センチを測る。3本の沈線を引いた部分のみに繩紋を残し、他は磨消すという手法をとっており、磨消する部分が広くなっている。磨消の部分と裏面の調整は、同様により丁寧に仕上げられている。

5は器壁の厚さ6センチ～7センチを測る。地文に繩紋を持たず、棒状工具により横走するための沈線を数条施したのちに縦の短い沈線を付している。内外面の整形は非常に丁寧に調整され、胎土・焼成とも良好である。

晩期繩紋式土器（第7図・第8図一図1版）

6は口唇部を若干外反気味に厚くさせた上に太めでしっかりした丁寧な沈線を施している。内外面の調整は剝離が著しく不明である。胎土は砂粒を多く含み、焼成はややあまい。

1は、器壁の厚さ5センチ～7センチを測る深鉢形土器である。胴部上半の内傾してゆく部分と内面の口唇部にも沈線を施している。

胴部上半は丁寧に磨かれているが、下半は箒削りのままである。内面には条痕による調整が顕著にみられる。

2・3は口縁端部に突帯を有する深鉢形土器である。口縁端部の突帯は10センチ～5センチの粘土紐をはり、その上端は平面菱形状の刻み目を密に施している。胴部は擦痕による調整がみられる。

両者とも粗い粒子を多く含んでおり、焼成もあまり良好とはいえない。特に2については、二次的な火を受けていると推定されるススの付着がみられる。

2は晩期に推定される底部である。この種の底部はこれ以外に一個出土している。

弥生式土器（第7図—7, 8, 9）

7は破片の状態からは壺形土器と考えられるものである。下に平行沈線を引いてからV字形に複線の斜線を施す。（他の前期の文様から推定すれば、複線の八字形になると考えられる。）

8は壺形土器の破片であるが、7のとほぼ同様の文様を有している。即ち、下に平行沈線文を引き、その上の部分に複線の八字形文を施している。

9は大形の壺形土器の肩部の破片である。文様は箒描きによる平行沈線文を認めるにすぎない。

7・8・9の土器片はいずれも弥生時代前期に属するもので、別地点からも同じようにこの期の土器の出土が報じられている（註2）ことも共に記憶される。7は茶褐色を示し、若干焼成があまい感を受けるが、8と9の破片は暗茶褐色で胎土も細密で焼成も非常によく、他の遺物と明瞭に判別できる。

その他の出土遺物（第9図—10図）

9—1は口縁端部に凹線といよりか沈線と思われるものが一本施されているために、端部が直立するような状態になる。頸部下半から肩部にかけて刷毛による調整がみられる。2の刷毛は1～2ミリおきの深い条の中にさらに細い条が観察されるために、刷毛による調整に一概にはいえない。胴部中位に箒状工具と推定される刺突文が巡っている。

内面の整形は頸部と胴部中位において、顕著な箒削りがみられる。

9—2は頸部が直立し、外反しながら口縁端部に移行し、そのまま円味をもって内傾気味の口縁部を有する壺形土器である。口縁端部には沈線を施している。頸部下半から胴部にかけて立方向の粗い刷毛による調整がみられる。

内面は胴部中位において、表面と同様な刷毛状工具と推定されるが、それよりさらに削りといえるほど荒くそして強く調整している。

9—3はくの字状の上端部がさらに外存する壺形土器である。口縁端部には横ナデが施されているために、明瞭な稜を作っている。胴部の中位に9—1の刷毛と同様な調整が施されている。

内面は頸部下半から胴部にかけて箒削りの痕を明瞭に残している。

9—4は口縁端部を下に拡張する壺形土器である。器面内外の剥離が著しく不明である。

9—5は須恵質土器といわれるもので、器面の凹凸からロクロの使用を推定させる。底部の状態は不明である。

9—6はくの字状に外反する小形丸底土器である。口縁部は横ナデによる調整がみられるが、胴部の調整は不明である。底部は箒によるものではなく、手によって調整されているために若干の凹凸が

みられる。

内面は頗著な削りがみられる。

9—7は直立する口縁部を有する壺形土器である。直立した部分に8本の櫛状工具による平行沈線を施している。

9—8は直立する口縁部を有する壺形土器である。頸部は「く」の字状にならず稜面を有し、口縁部に移行する。内外面の調整は不明である。

9—9は直立する口縁部を有する壺形土器である。頸部は稜を持って口縁部に移行する。頸部は横位の箒磨きを施し、頸部下半から肩部にかけて丁寧に箒磨きがなされている。

内面は頸部下半から肩部にかけて横位の箒削りがみられる。

9—10は外反する口縁部を有する椀形土器である。内面の口縁端部に沈線を有する。

9—11は脚部であるが、若干開き氣味である。櫛状工具による調整のあと、さらにその上から箒による調整をおこなっている。

9—13は11と同様の脚部である。そそには細い櫛毛による調整がなされている。

9—12は前述の二つの脚部より短かく、脚部の上端部に2本の平行沈線を施している。

以上が口径及び器面の調整が確認しうる遺物である。これ以外に第10図で示した小破片を出土している。

獣骨 (図版4—1)

D地点B 5グリットの貝層中より猪の牙が検出されている。

第3章 むすびにかえて

島地の丘陵を東一西に切断する格好で調査がなされた為に、洪積層の幅42メートルが確認された。しかしながら丘陵全面に渡って、山陽本線、市道、水田の地下げ等により削平を受けたことが明らかになった。又、V地点B 1・C 2のグリットから洪積層面に接して中世の土ナベが出土しており、削平の時期がより古くさかのぼることが考えられる。

貝層の遺存状態は、VI地点では5層の礫層中にはさまれた格好で貝層が存在する。この貝層が5世紀代の単純貝層を形成しており、同地点北側に接する宅地内より耕作土を若干掘り下げただけで同様な貝層が確認されている。このことからすれば、この時期以降に下がる貝塚が遺存していると推定される。

縄文期の貝層については前述したように、カキの破碎貝層がこの期に属すると考えられるが具体的な層序との関係と貝層そのものの遺存状態からして、他の自然貝層との分離は明確にし得なかった。このことは、近世頃までこの周辺まで潮が入ってきておりその影響が考えられる。

層序的な遺物の出土はなされなかつたが、縄文時代から弥生時代前期に渡り、ほぼ連続して生活の場となつたことは、周辺の地形からすれば、かなり漁貝類が豊富だったことを裏付けるものである。

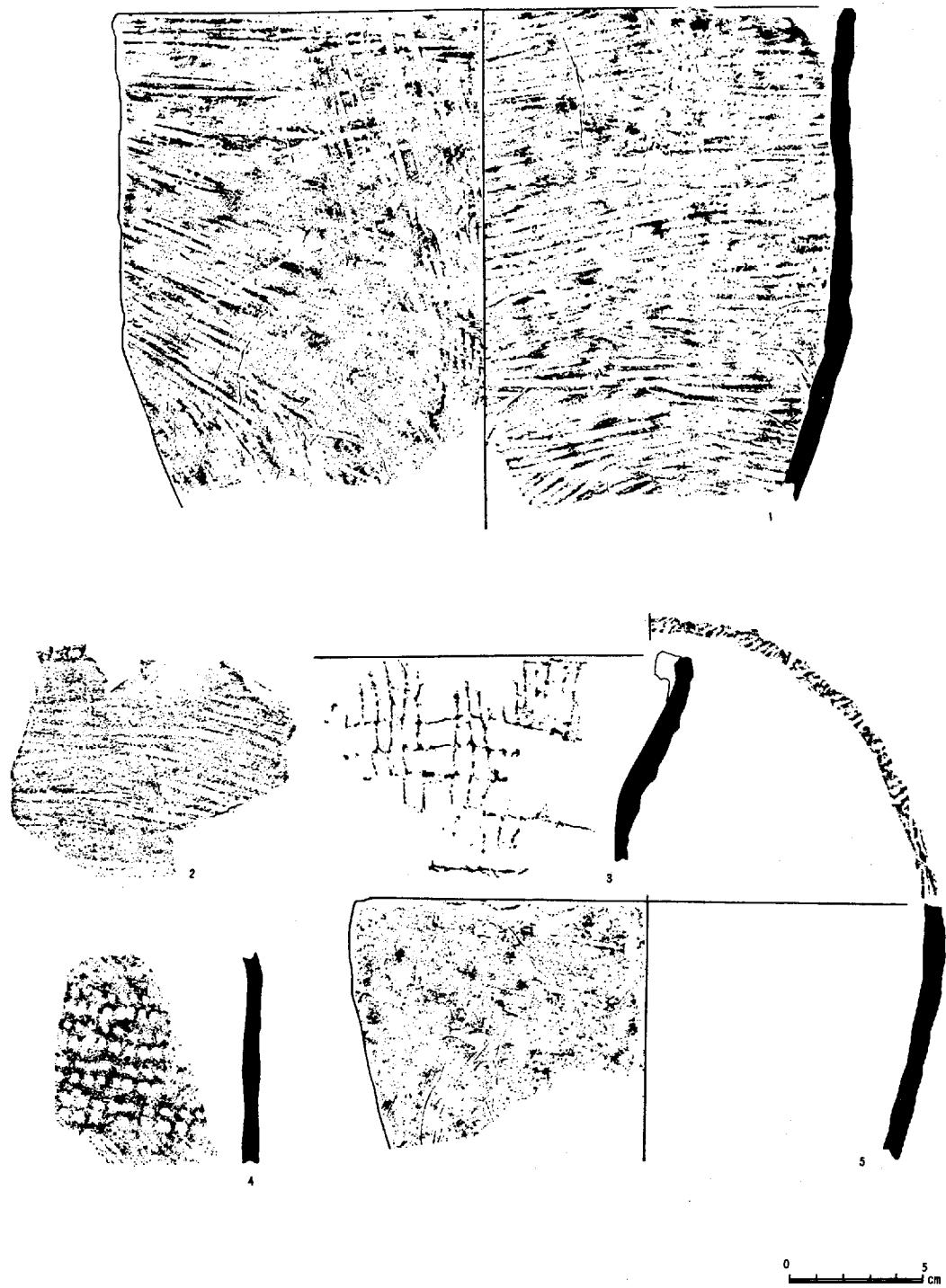
弥生前期の土器が出土したことは、即この地点で稲作という生産活動を行なつたことは言えないであろう。この前段階からの海退現象により海平面の底下にともない、湿地の形成がおこなわれ、稲作に可能な条件を生みだしていくが、前段階からの継続した生活の場としてきたものであり、稲作の生産ということではなく物の伝播としてあって、縄文期社会の範疇として把握すべきであろう。

以上が島地貝塚の調査の内容である。この周辺は、古くは山陽本線の開通、新しくは山陽新幹線の開通、さらに国道2号線バイパス、主要地方道玉島—成羽線の開通が予定されており、景観とともに貝塚そのもの大きく変動する時期の調査であった。

註—(1) 倉敷考古館「倉敷の古代」 1972年10月

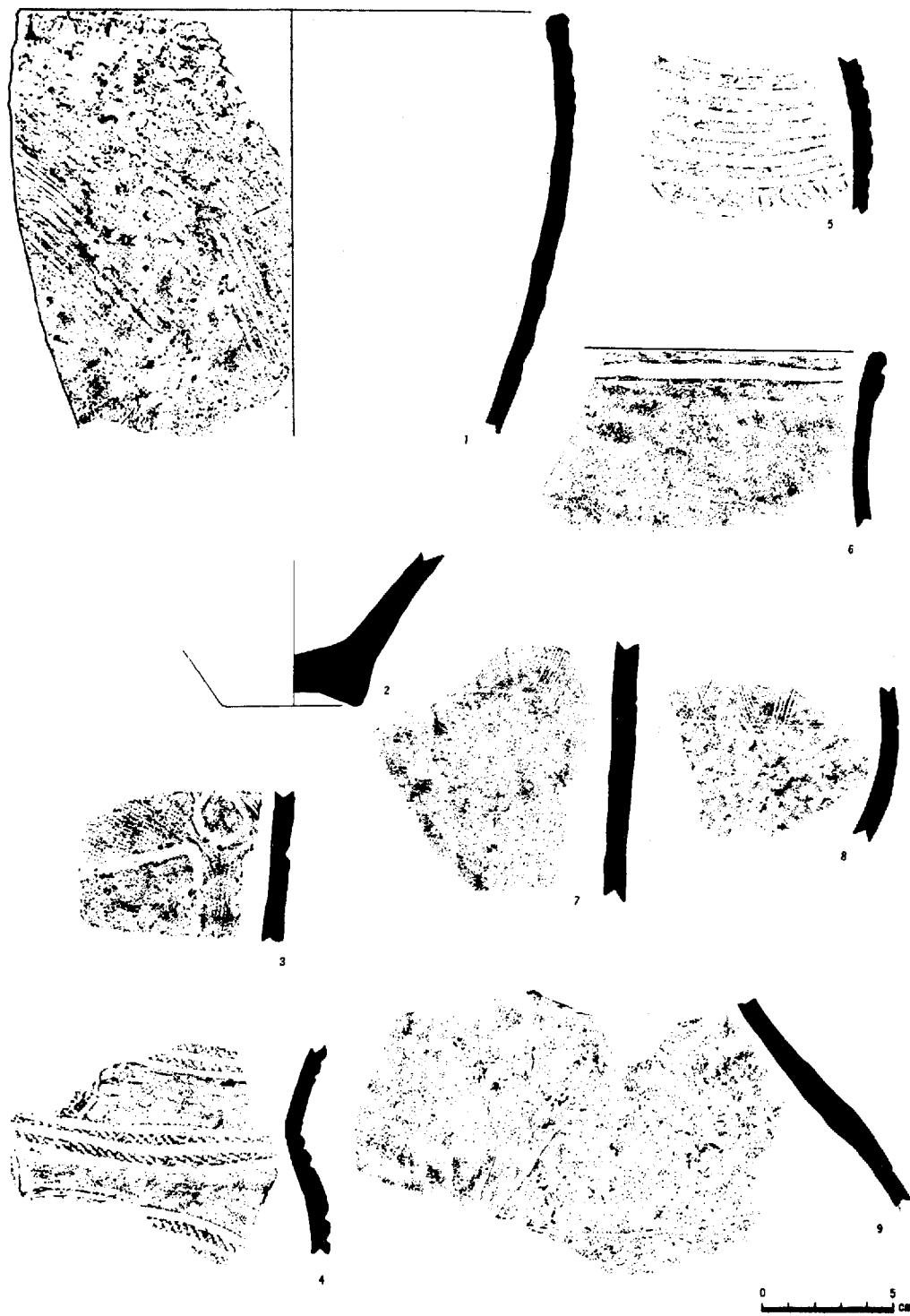
(2) 浜田耕作他「肥後森貝塚発掘報告」京都大学考古学研究報告5 大9・10

島地貝塚



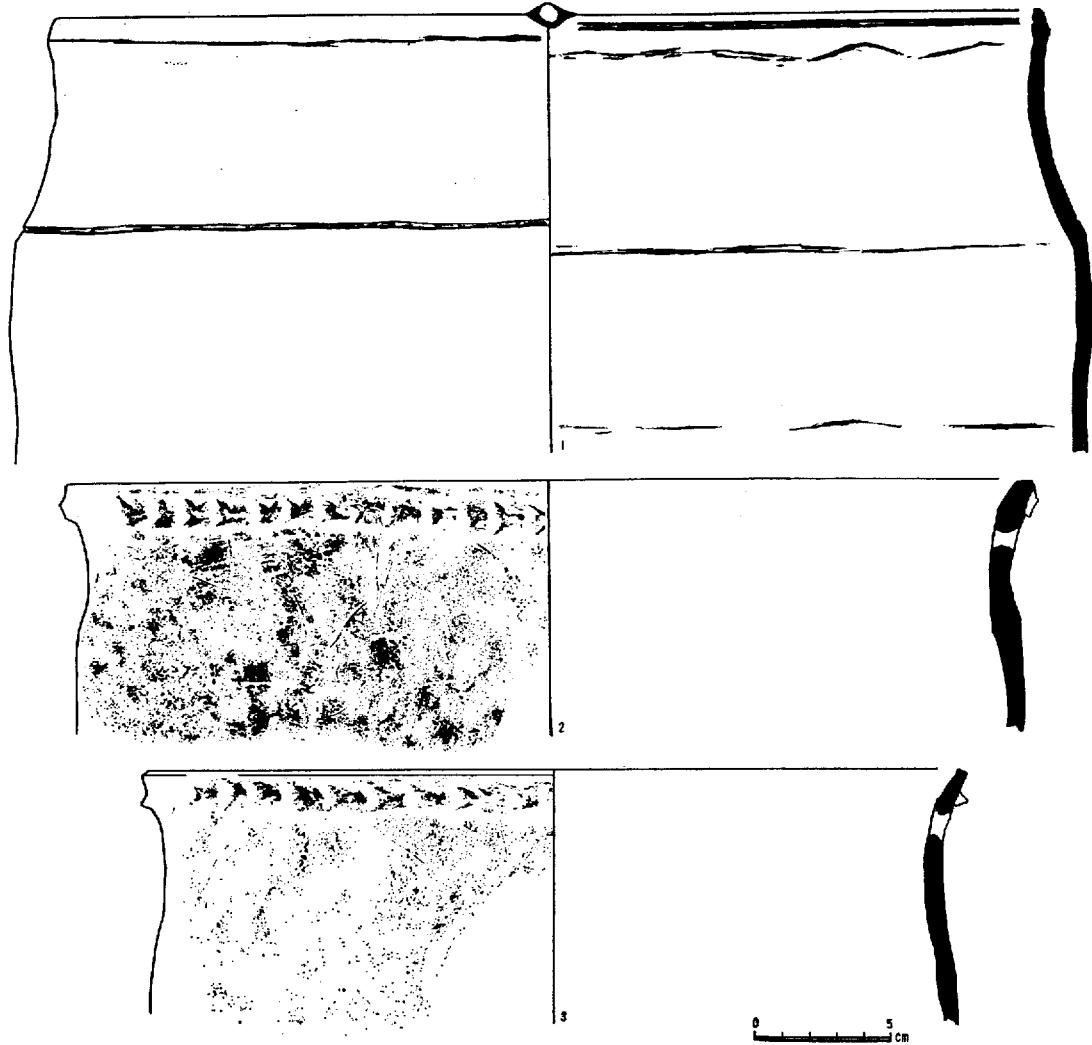
第6図 島地貝塚出土遺物 (1)

島 地 貝 塚



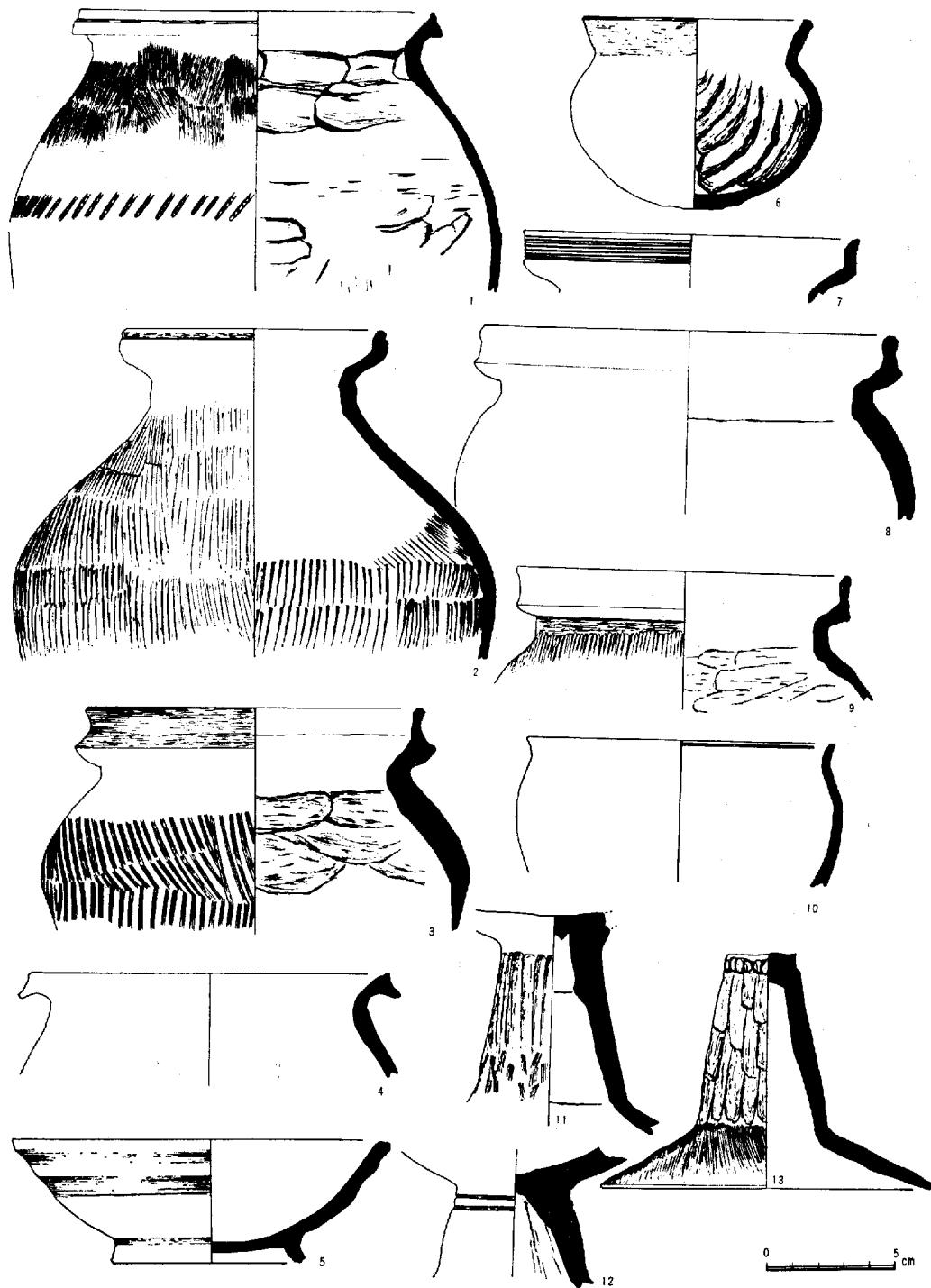
第7図 島地貝塚出土遺物 (2)

島 地 貝 塚



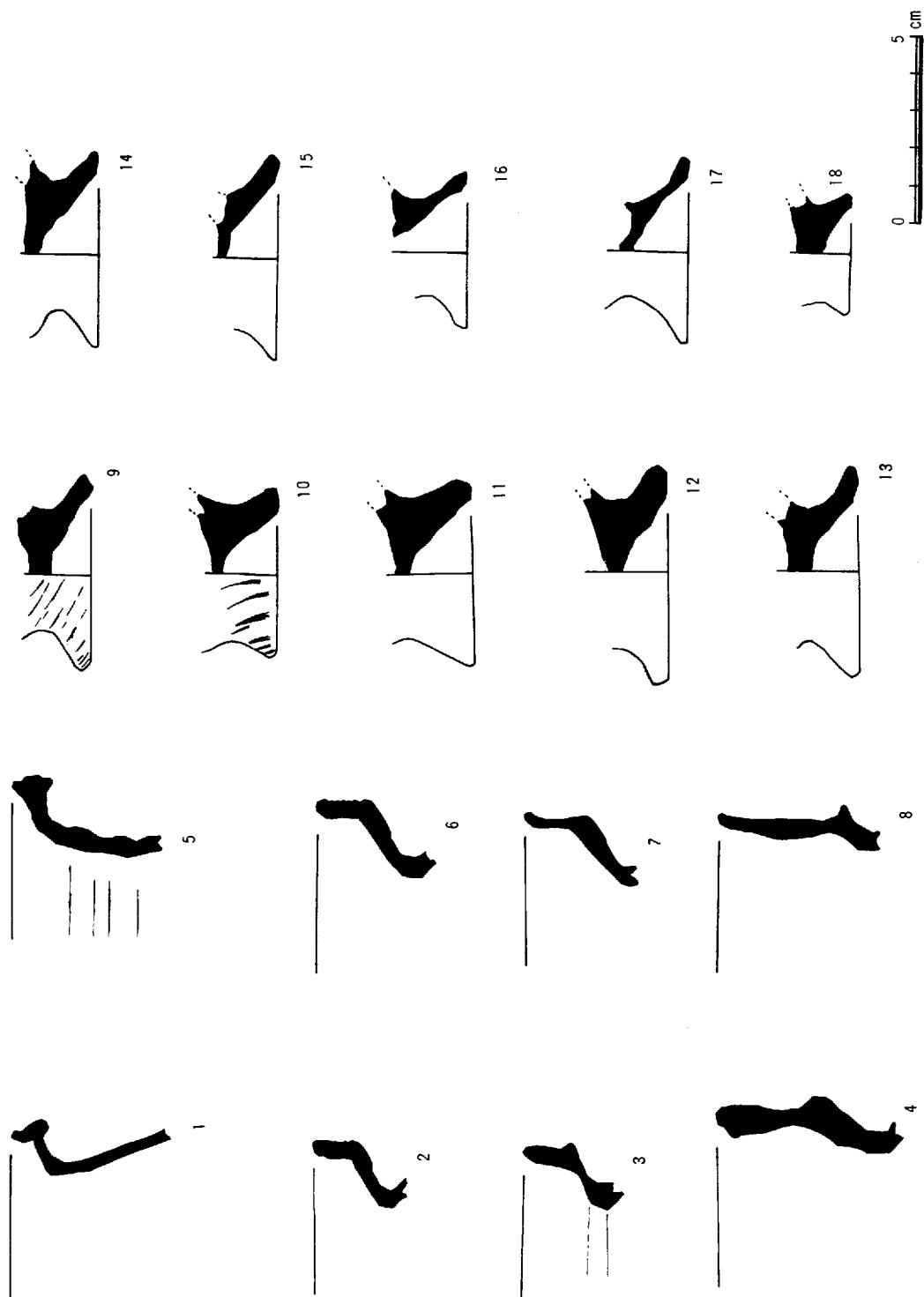
第8図 島地貝塚出土遺物 (3)

島 地 貝 塚



第9図 島地貝塚出土遺物 (4)

島 地 貝 墓



第10図 島地貝塚出土遺物 (5)



高地貝塚出土遺物

図版 2



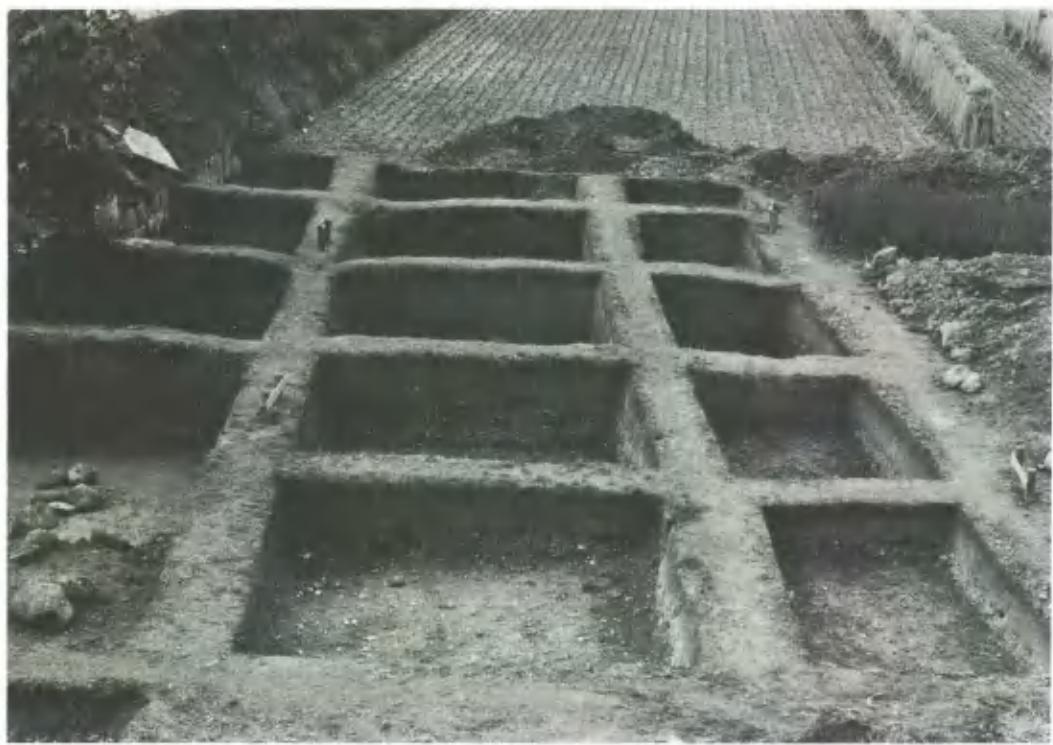
2-1 島地貝塚遠景



2-2 道口川より島地貝塚を望む



3-1 III地点よりII地点・I地点を望む



3-2 V地点グリット

图版 4



4-1 VI地点出土獸骨



4-1 VI地点貝層



5-1 V 地点貝層



5-2 V 地点貝層



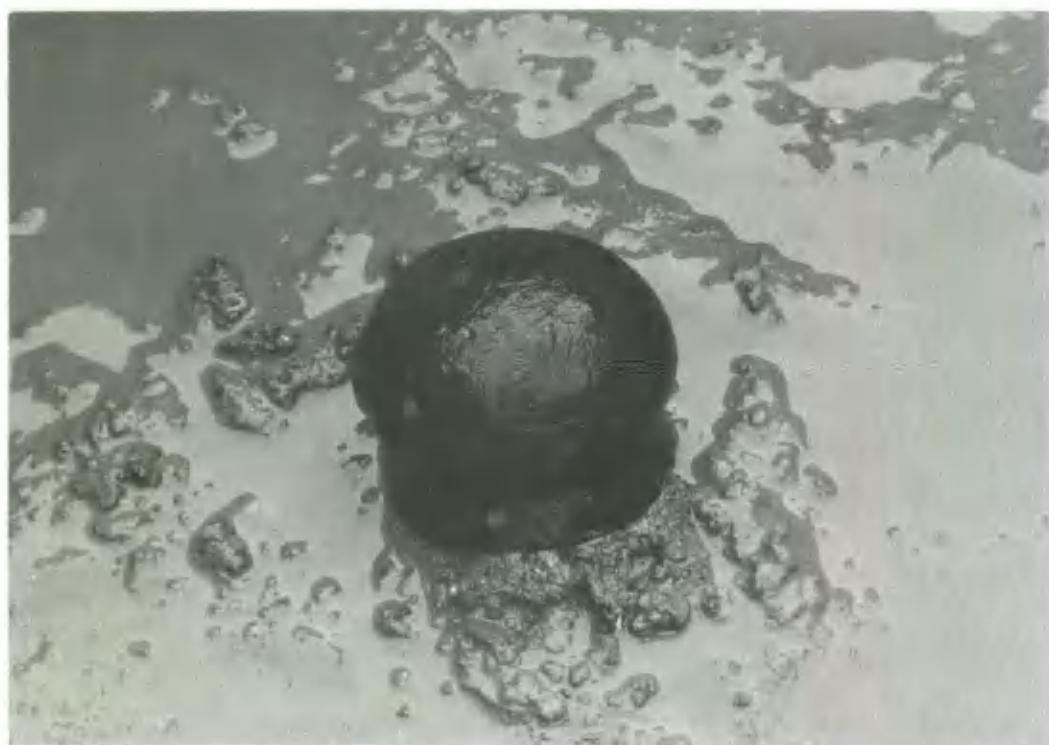
6-1 V 地点出土遺物



6-2 V 地点出土遺物



7-1 V地点出土遺物



7-2 V地点出土遺物

第Ⅶ部 加賀池・宮地池遺跡および 益坂散布地の調査

加賀池遺跡

目 次

第1章 宮地池散布地.....	321
第1節 立地および経過.....	321
第2章 加賀池遺跡.....	322
第1節 立地および経過.....	322
第2節 遺構.....	322
第3章 益坂散布地の調査.....	333

図 目 次

第1図 宮地池散布地地形図.....	321
第2図 加賀池第1地点地形図.....	324
第3図 加賀池第2地点地形図.....	325
第4図 加賀池第2地点出土繩文式土器.....	327
第5図 加賀池第2地点出土繩文式土器.....	328
第6図 加賀池第2地点出土石器.....	329
第7図 加賀池第2地点出土遺物.....	330
第8図 加賀池第1地点出土遺物.....	331

図 版 目 次

図版1の1 加賀池第1地点.....	1
図版1の2 加賀池第1地点土壤.....	1
図版2 加賀池第1地点甕棺出土状況.....	2

第1章 宮地池散布地の調査

第1節 立地および経過

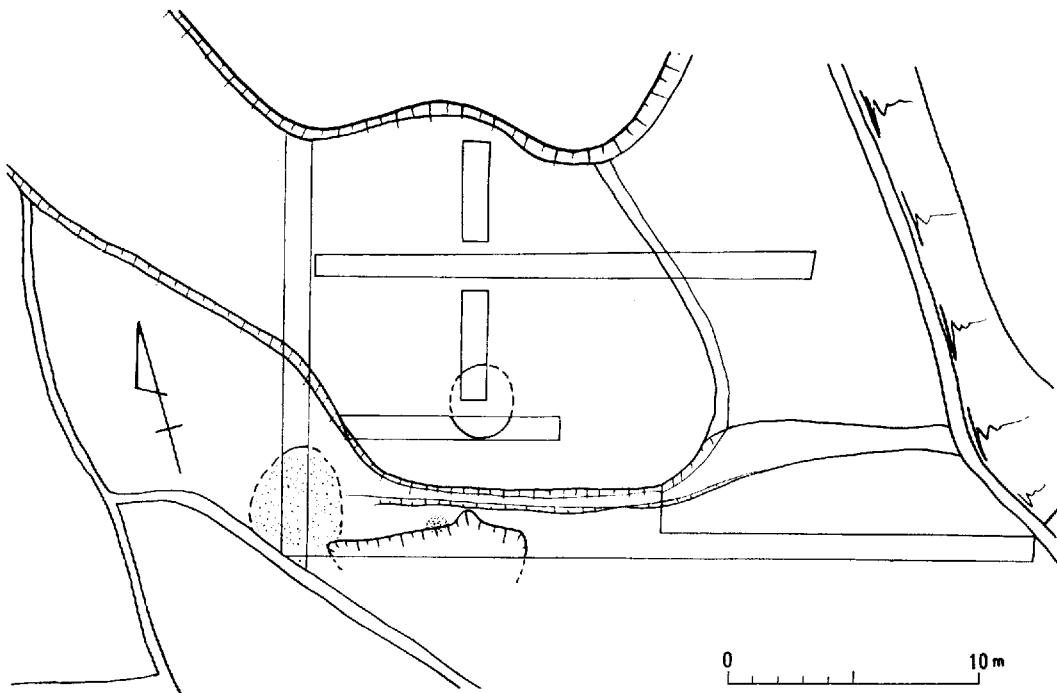
浅口郡金光町占見新田に存し、この地方に多く散在する農業用溜池の一つ宮地池の南西、標高15m前後の段丘上に須恵器が散布していた。山陽新幹線埋蔵文化財分布調査において散布地として取りあげられた所である。

昭和45年度、金光町教育委員会により、金光トンネルおよびその付帯工事に伴い、取付け道路敷の第一次遺跡確認（トレンチ）調査が実施された。

昭和46年度末、2～3月にかけて加賀池散布地の調査と併行して第二次調査を行った。

新幹線中心杭に沿って東西、南北縦横にトレンチを設定し、遺構確認を行ったが、部分的に須恵器、中～近世の焼物等を包含する層、凹凸を持った不整形な落ちこみがみられた他は、人工的な遺構はみられなかった。

耕作土下は全域にわたって、非常に固い黒褐色花こう岩風化層であった。 (池畠・伊藤)



第1図 宮地池散布地地形図

第2章 加賀遺跡の調査

第1節 立地および経過

宮地池と同じ浅口郡金光町古見新田に存し、山陽本線「金光駅」から2km程北にいった山裾に加賀池と呼ばれる江戸時代に作られた農業用溜池が存する。

この池の北側は、果樹園、植木畠、畠として利用され、一帯に縄文～中近世の土器片の散布がみられた。

山陽新幹線埋蔵文化財分布調査の際、新しく発見された散布地である。(今回の調査で遺構等も確認されたので、加賀池散布地と呼称していたのを加賀池遺跡とした。)

宮地池散布地の調査と併行して2～3月15日にかけて調査を行った。背後の山塊から加賀池に注ぎこむ小川によって、西方を第1地点、東方を第2地点と呼称して調査を進めた。

第2節 遺構

第1地点：新幹線中心杭に沿って、東西トレンチを設定し、遺構確認調査を行った所、トレンチ内において、亀山焼の大甕を使用した棺が見られ、南北に拡大した。

また7世紀代の土壤、亀山焼甕棺7基、江戸時代初め以後と思われる貝層（はい貝、はまぐりが中心）を確認した、貝層内からは寛永通宝2枚と土器多数を採集した。

第2地点：この地点は、大正時代まで民家が存し、その施設、それ以降の耕作のため深く堀り返され、亀山焼の大甕、縄文式土器多数、石器数点、近、現代の焼物がみられた他は、路線敷内においては遺構の存在は確認できなかった。

1) 縄文式土器の広がり

調査地のほぼ中央附近、東西トレンチの北に1ヶ所、南に2ヶ所、計3ヶ所に集中している。東西トレンチ北側の広がりはせいぜい3m²位で量も少ない。遺物の多くは南側の隣接した2ヶ所に集中していた。1ヶ所が各々6m²位づつで、石片も同じ様な出土状況を示している。縄文式土器は用地内ではこの3ヶ所以外になかった。層序でも述べたように縄文時代の生活面を形成しているⅥ層上面は東西トレンチ附近では東西巾が約25mしかない。この生活面は南へ向かってゆるやかに下降しながら扇形に広がっている。したがって用地内はせいぜい扇のかなめにしかあたらない。破片の大きさ、出土量などからしてこの遺跡の中心はさらに南へ延びることが予想される。

縄文式土器は細片が多く、器形をみれるものはない。少量の口縁部・底部などがある。時期的には後期初頭の中津式土器を中心としており、一部に早期の押型文、後期の他型式などみられる。

押型文（1・2） 山形押型文が2片出土しているが、これらはその色調・胎土・文様・形態などか

らして同一個体であろうと思われる。表面はだいぶ磨滅しているが押型は横位で全面に施文されている。裏面も調整されているが、調整具は不明である。指ナデ調整であろうか。器厚は9mmである。胎土は1mm～3mm程度の石英・長石粒を多く含んでおり色調は表面が黄褐色、裏面が赤みをおびた黄褐色で内面は褐色を呈する。1の一部と2は裏面が剝脱しており、色調などからして焼成温度のひくいことを示している。胎土・焼成温度とも他の縄文式土器とのちがいがうかがえる。表土からの出土で、2片しか出ていないが磨耗はしていない。

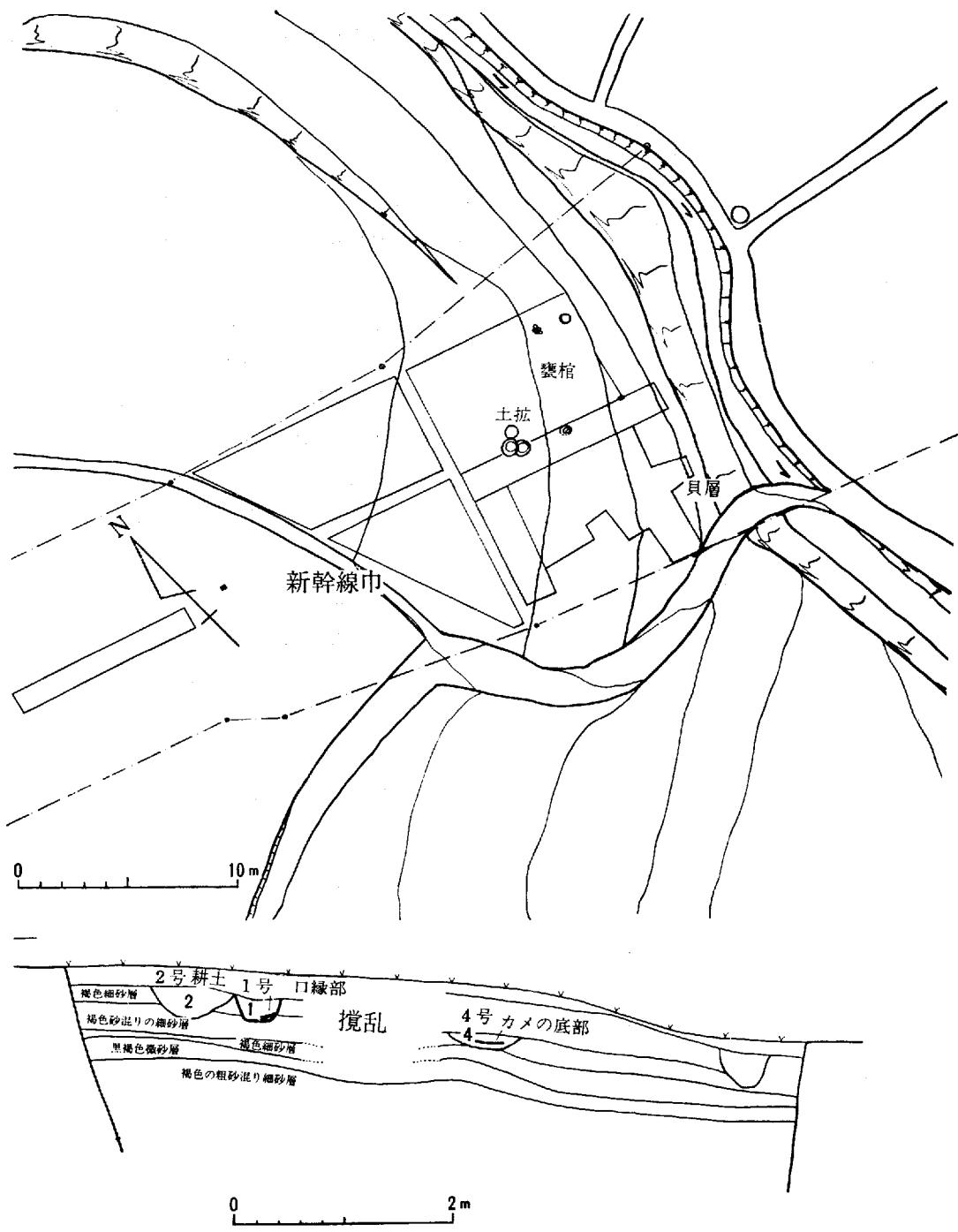
後期の土器 この遺跡の主流を示めるのは後期の土器であり、その多くは中津式土器であろうと思われる。文様には二枚貝条痕・巻貝条痕・磨消繩文（又は擬繩文）・貝殻凹線文・沈線文・羽状繩文・繩文（擬繩文）・巻貝刺突文などがある。

口 縁 部 (3～21) 3は口縁端が内反りしている。左斜方向で細かい繩文が全面に施されている。口縁端及び内面の磨滅がひどく文様ははっきりしないが丸みをもつ口縁端まで繩文は及ぶようである。口径は約22cmである。他の多くが灰褐色系の色調をしているのに対し、これは赤みがかかった黄褐色を呈している。こうした口縁端まで繩文を施す手法は船元I式にみられる特徴であり、中期の土器かもしれない。4～7は沈線文・磨消繩文が施文され口縁端は丸みをもっておわるものである。裏面は4のみが段をもち巻貝条痕文が施されている。他の3片は不明である。4は磨消擬示繩文で、口縁端近くの巻貝条痕地の所に一条の横位沈線（施文具は巻貝）が施されている。5は口縁端近くまで、繩文の地に沈線文が施されている。6・7は無地に横位の沈線が施されており、細片のため不明であるあるいは4みたいな手法であろうか。これらは中津式土器に属するものである。8・9は口縁がくの字状に内傾し、口縁部には繩文地に巻貝による山形の二条沈線文が施されたものである。8における沈線は9に比べ深いので、あるいは施文具が異なるかもしれない。口縁部につづく胴部と裏面は巻貝によって横位に調整されている。10・11は口縁端が段をもち、そこには、擬示繩文が施されている。そして段の端には刺突文がある。裏面は巻貝により横位に調整されている。10は巻貝条痕地に沈線が施されているが11では沈線がみられない。これらも中津式土器である。12～14は巻貝条痕文のある土器である。口縁端は丸みを帯びてはいるが直線の部分を残している。13は口縁近くでかすかに段をもち、表面及び裏面に紅色がうすく彩文されている。15は乳房状突起をもつ波状口縁である。乳房状突起の左側にも長方形様の突起がある。裏面の調整具は不明であるが、表面は突起の下に巻貝による横位の調整がある。こういった突起をもつ類例がみあたらないけれども、巻貝条痕の存在、他の伴出土器からして、これも中津式土器の一例であろう。16～21は二枚貝条痕文のある土器である。これらも変化のない口縁をしているが21は口縁に巻貝の圧痕が施されている。16は裏にわずかに段をもっている。17～18の裏面整形具は不明であるが20・21は巻貝で調整されている。

口縁は自然にたちあがるものがほとんどであって、時に波状口縁のもの（15）、口縁の肥厚するもの（10・11）、口縁にきざみのあるもの（21）、くの字状に内反するもの（8・9）などがある。器形としては深鉢、浅鉢ともあるようである。

胴 部 (22～23) 22は深鉢の胴部で、頸部の部分には左さがりの繩文があり、その下には巻貝によって横位の調整がなされている。23は深鉢の底部附近で二枚貝条痕文が縦位に施されている。底部への曲折が下部にうかがえる。

加賀池遺跡



第2図 加賀池第1地点地形図及び甕棺断面土層図

加賀池遺跡



第3図 加賀池第2地点地形図

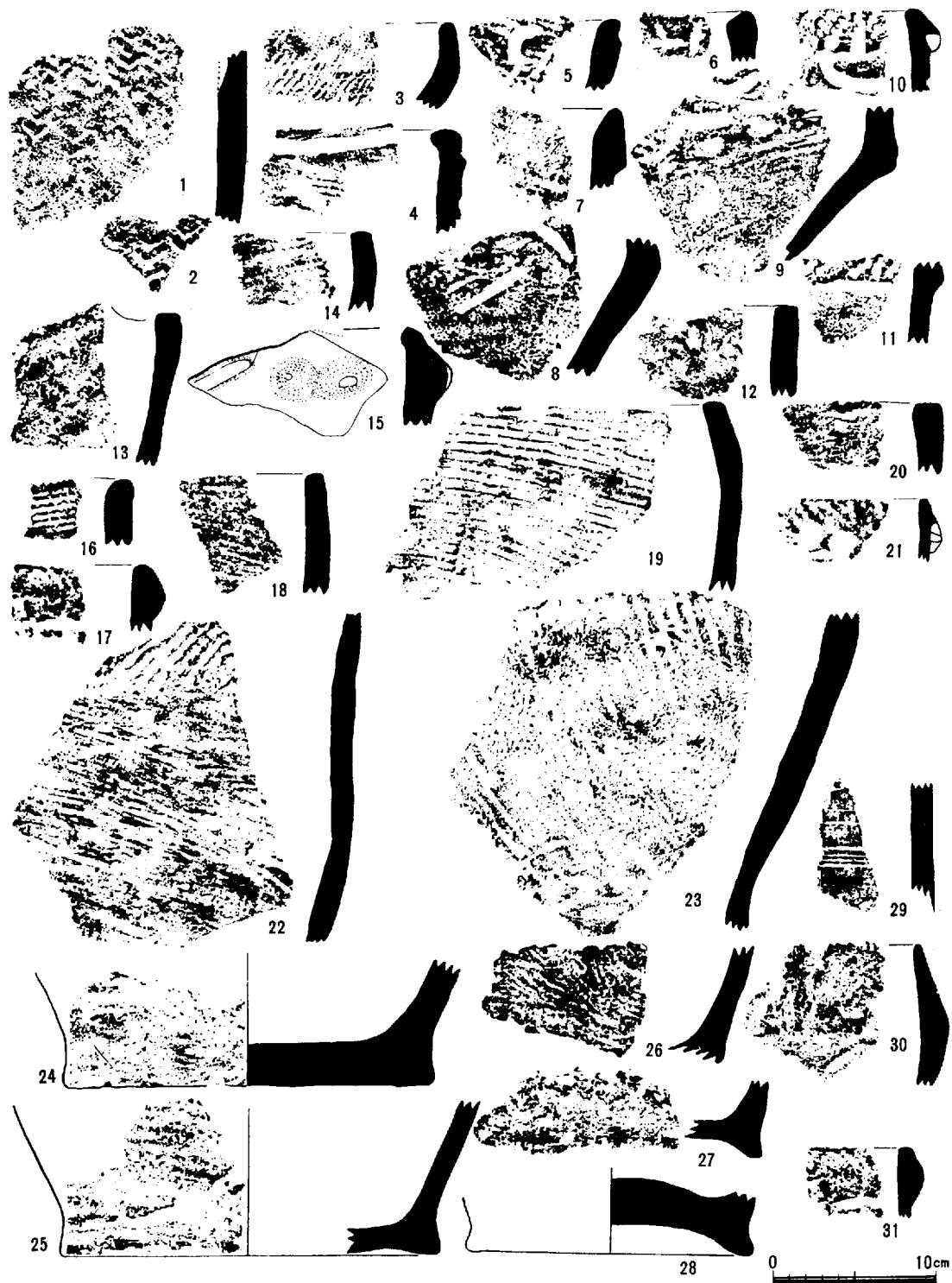
加賀池遺跡

底 部 (24~28) 平底のもの (24~26) とあげ底のもの (27・28) とがある。底部近くでゆるやかに外反し丸みをもっておわる。底部径は8.6cm~11.2cm, 底部厚は25・27が0.6~0.7cm, 24・28が1.3~1.4cmあり、厚めのものと薄めのものとの二様を呈している。底はヘラ様のもので削られている。

文 様 (29~60) 29は細い沈線を呈したものである。沈線幅は0.5mm~1mmあり、沈線間は不規則である。こういった細い沈線を施したものは中期の船元式、後期の彦崎K I式にみられる。30・31は口縁近くに繩文を施す。ゆるやかなくの字状に内反する頸部は上部が繩文、下部がすり消し繩文で形成される。32~36は羽状繩文を呈する。これらは胴部であり、あるいは22のように部分的な文様かもしれないが、全面に施されたものらしい。ほぼ6~7条が1組になって構成されている。36は繩文というより櫛状刺突文というべきものである。37は頸部と胴部の境にひとつの段があり、その段の下、つまり胴部のいちばん上に刺突文のめぐらされたものである。この施文具がどういうものか観察できないが三角形をしていることから考え巻貝ではなかろうか。さらにこの土器は他のものとちがい、赤褐色をしている。38は口縁部近くでやはり刺突文がめぐらされている。しかし37とちがい刺突文のまわりに段がない。口縁端のすぐ下には巻貝と思われる施文具で一条の沈線があり、刺突文との間には二枚貝の圧横位痕文がある。刺突文の下の文様は不明である。39・40は繩文地に沈線が施されている。沈線の施文具は巻貝で曲線的な線をしている。41・42は磨消繩文である。41の磨消部は特によくみがかれている。43~45は磨消凝繩文である。凝繩文の施文具は二枚貝と思われ、43には二枚貝の背による圧痕もみられる。沈線は直線的であるが43のコーナーのようにゆるやかな曲線をしているものもある。45~51も沈線文あるいは磨消繩文・磨消凝繩文と思われるが、文様部分が磨滅しているためはっきりしない。47は口縁部で直線的な沈線を呈している。これらの他に多くの条痕文があり、二枚貝条痕文と巻貝条痕文の二種類に分けられる。52~55が二枚貝条痕文・56~70が巻貝条痕文でその多くは横位に施文され縦位はほとんどない。

石 器 多量の削片が出土しているが石器といえるものは石鏃10点、スクレーパー状石器2点の計12点である。石材は削片・石器ともすべてサスカイトであって、他の材質は含まれない。製作技術は粗雑で、剥片にわずかな加工をしただけのものもある。これらの年代は2点の押捺文を含むものの、その他多くの土器が示している繩文時代後期初頭と考えてよかろう。

加賀池遺跡

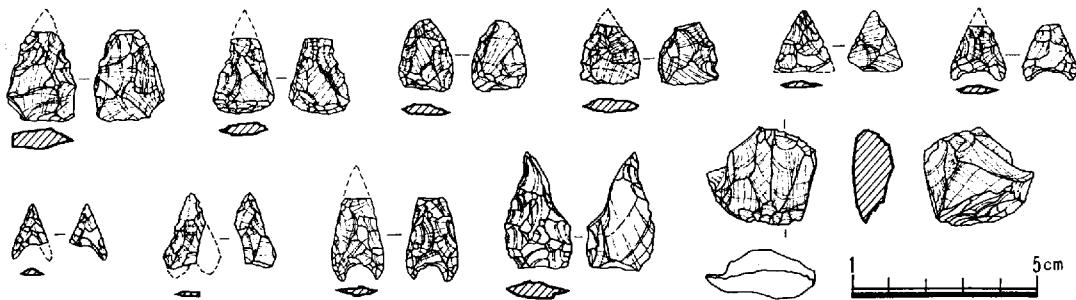


第4図 加賀池第2地点出土縄文式土器

加賀池遺跡



第5図 加賀池第2地点出土縄文式土器



第6図 加賀池第2地点出土土器

2) 土 塚

東西トレーナーで検出された3基のかめ棺墓の東側に、黒色粗砂の円形及び楕円形をした2つの落ち込みがある。この円形落ち込みと、楕円形落ち込みの境付近は、モモの根により攪乱されているため、切りあい関係など確認できなかった。ただ周囲の状況からして、この二つの落ち込みは、いくつかの時期差が考えられる。円形落ち込みは、径70~80cmで、現存深は約15cmである。落ち込み内には、一片の遺物もみられず、時期は不明である。楕円形落ち込みは、長径190cm、短径60cmで、東へ向ってゆるやかに傾斜しており、東端と西端の比高は約5cmである。この傾斜は、ほぼ等高線に沿っており、現存の深さは約5cmである。長径の向きは、E Sとなっており、長径にそって西より杯身・高杯・杯蓋の順で須恵器三点がほぼ等間隔に並んでいた。この須恵器より7世紀中頃の土壌と思われるが墳形等は削平されて不明である。

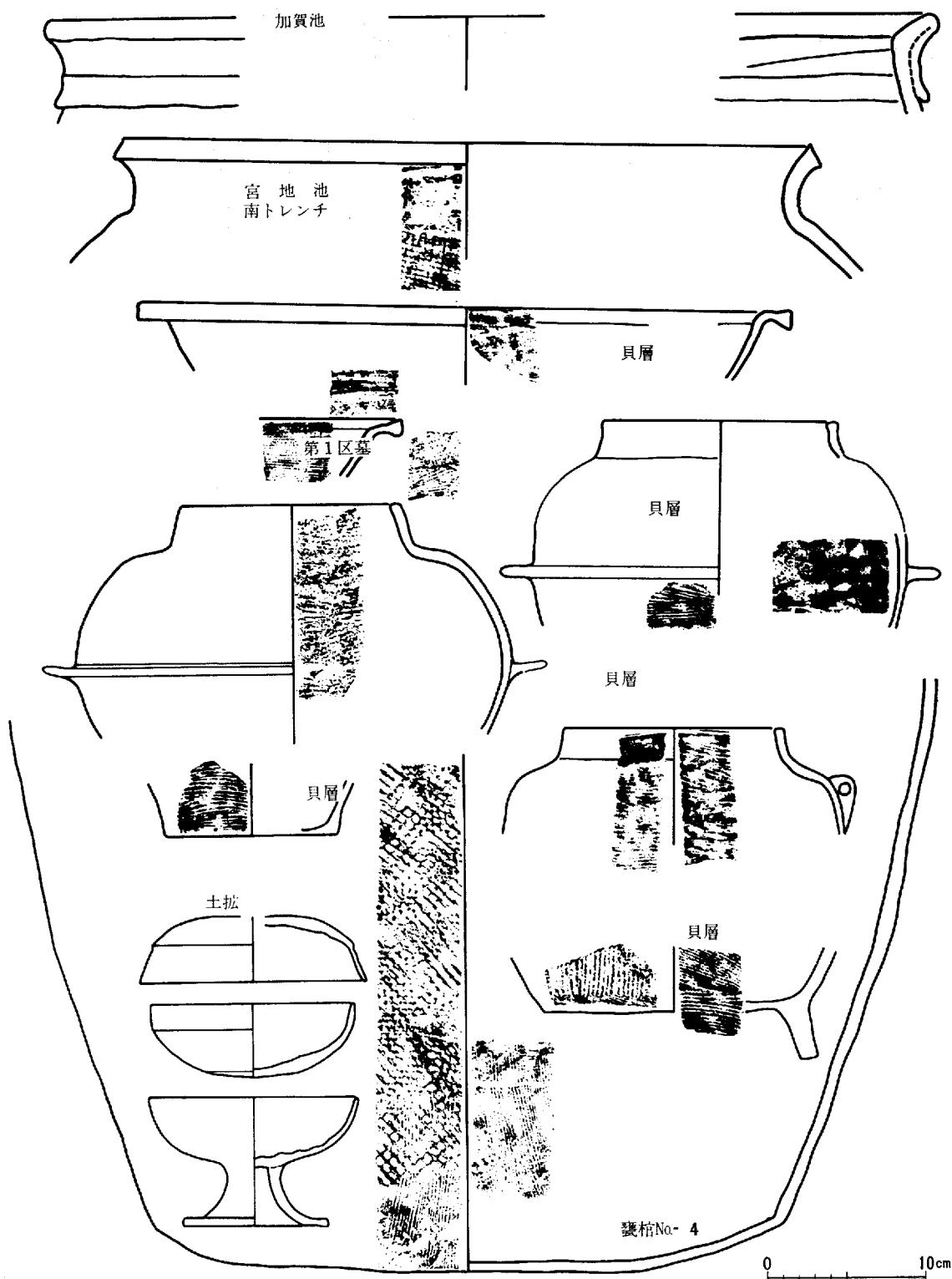
3) 土壌内出土の土器

高 杯 無蓋高杯である。杯部はひすんでおり、口縁部の径は12.9~13.8cmである、器高は8.2cmで、脚高3.7cmをはかる。杯部口縁はほぼ垂直にのび丸味をもっておれる。体部は丸味をおびて脚柱部へいたる。杯部の整形は磨滅のためよく判らない。内面には、杯部整形時に回転させた時の凸凹が時計まわりの方向に残る。脚柱部は外反しながら裾部へとつづき、裾部は平坦となっている。脚端径は9.4cmである。脚端部は上下に0.5cm位のび段をなす。透孔及び沈線はない。焼成がよくないため硬度もやわらかい感じである。色調は淡い灰黄白色をしている。しかし現在でも部分的に灰白色を残しており、器面はうすい灰白色を呈している。胎土は、1~2mmの長石などの小石及び微石を僅かに含んでいる。

杯 蓋 復元口縁径14.6cm、復元器高4.2cmの杯蓋である。天井部は径8cmほどの平らな面をつくるが稜線に向かいゆるやかに丸みをおびる。天井部と口縁部の境界は丸みをもった稜線がまわる。口縁部は比較的高く、稜線から端部まで2.2cmある。ゆるやかに外反し、口縁下端部は丸みをおびておちる。口縁部は横なので仕上げられている色調は灰白色をしており、焼成も良好である。胎土は良好で1~2mmほどの小石及び微石をわずかに含む。さらに雲母も含んでいる。

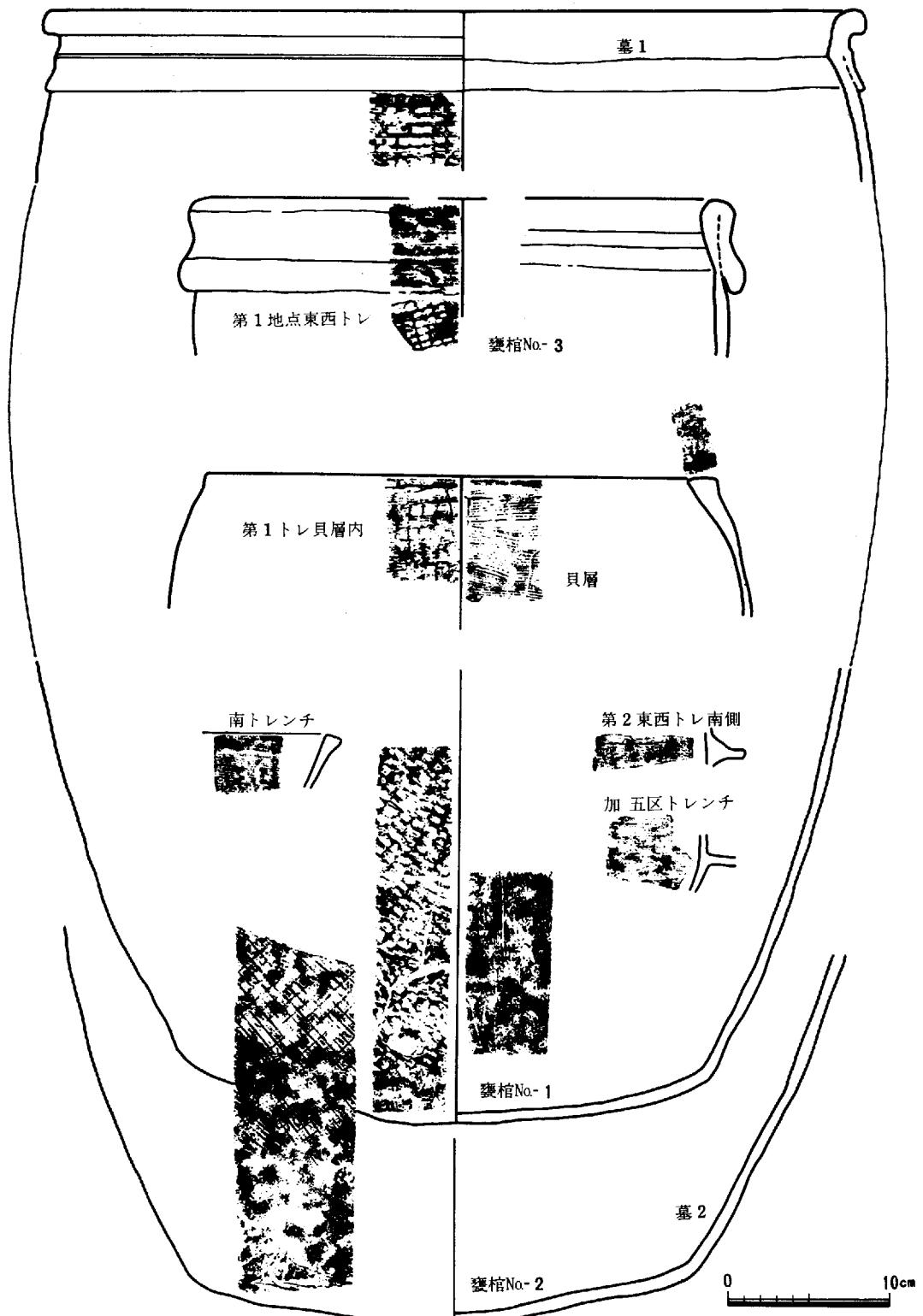
杯 身 口縁部径13cm、器高4.2cmの杯身である。口縁部はほど直線的に上方へのび端部は味をおびておわる。体部は、口縁より1.6cmほどからはじまり湾曲し底部へいたる。底部は径6cmほどの不安定な平底を呈する。ヘラで削られている口縁部、体部の外面は、ハケで横になでて仕上げている。内面の底には凹凸が時計まわりの方向に残る。凹凸が時計まわりの方向に残る。

加賀池遺跡



第7図 加賀池第1地点出土遺物

加賀池遺跡



第8図 加賀池第1地点出土遺物

加賀池遺跡

内面は焼成も良好であるが、外面はあまりよくない。外面の色調は灰白色であるが、うすく部分的に残っているのみで、ほとんどはこれがはがれ、白灰色を呈している。

内面は焼成の関係か淡茶灰色をしている。胎土は良好で1～3mmの長石などの小石及び微石をわずかに含む。さらに雲母を含んでいる。

4) 棺

第1地点から出土した龜山焼の甕棺をさす。五個体分出土している。大きさは底部径が1号33.4cm・2号31.5cm・4号30.0cm・5号30～35cm・7号29.1cm・でほぼ30cm前後と考えられる。口縁部径を測定しうるのは、1号と7号のみでそれぞれ52.2cm, 49.6cm, 全体の高さは共に70cm前後、胴部推定径55cmと51cm前後と思われる。底部はやゝ丸味をおびたもの（1・2号）を平らなもの（4・5・7号）の二様がみられる。胴部の張りは弱く、ゆるいカーブをえがいて口縁部にいたる。ただし7号は例外的で、底部から直線的な立上がりが強い。口縁部は、折りかえしの口縁で、折りかえし部は4cm程（1号、7号は5cm）薄くたれさがっている。二条の凹部（1号、7号は一条）は、指頭整形であろうと思われる。底部外面の器面調整はヘラ・ハケおよび指圧で調整を行っている。胴部は巾7～10cm前後の数段の輪積み成形で、表面には格子目状のタタキ調整・裏面は粗いハケ・指頭・ヘラ整形の併用である。底部と胴部の接合部には、長さ3～4cm位の刻みが、3～5cm間隔で全体をめぐっている。

（伊藤・池畠）

第3章 益坂散布地の調査

山陽本線鴨方駅より北方へ約2.5キロメートル行った浅口郡鴨方地益坂に位置する。

当遺跡は分布調査の折に数片の中世土器を採集していたが、国鉄との接渉の時には調査対象として取扱はなかった。しかしながら、対策委員より一応は調査の必要があるということで、急遽調査対象としたものである。

調査対象面積は約1,600m²で、水田と畑とになっており、両者の高低差は平約して約1.5mで、各畑も高低差があるために一応全ての面にトレングチを設ける。以下各トレングチの調査概要を記。

第1トレングチ

各土層とも細砂を含み、マンガンを含む赤褐色土層の下は粒子の荒い砂層であり、表土より90cmほどで出水する。

第2トレングチ

第1トレングチに見られた粘土層はみられず赤褐色土層の下は、粒子の荒い砂層がありやはり出水する。

第3トレングチ

第2トレングチと同様の内容を示す。

第4トレングチ

第2トレングチと同様の内容を示す。

第5トレングチ

第2トレングチと同様の内容を示す。

第6トレングチ

地山が地表から1mほどの所で確認される。この地山は後世池を掘るためかなり削平されていると思われる。

第7トレングチ

第2トレングチと同様の内容を示す。

第8トレングチ

第2トレングチと同様の内容を示す。

第9トレングチ—第10トレングチ

崖状になっている為に、地山を検出するために設けたトレングチである。

その結果両トレングチとも版築を確認した。

第11トレングチ

50cmほど掘り下げると地山に達するが、その間の土層は耕作土である。

以上各トレングチを見た如く、版築以外の遺構は認められなかった。

この遺跡周辺が昔『イケノハタ』と呼ばれていたという話が残されており、又益坂川より90mほど東へ行った所に土堤状のものが存在しているところからトレングチ9、トレングチ10にみられる版築は、

加賀池遺跡

堰堤の一部と考えられる。

遺物は、第6トレンチの耕作土中から土師器細片、第5トレンチ耕作土中より須恵器一片が主な出土遺物であり、他に目立った遺物は出土しなかった。



1-1 加賀池第一地点



1-2 加賀池第一地点土塗



加賀池第一地点甕棺出土状況

第Ⅷ部 川入・上東遺跡、出土資料の 自然科学的鑑定および考察

川入、上東遺跡より出土した作物 および雑草種子の同定について

農学博士 笠原安夫

(岡山大学農業生物研究所教授)

はじめに

1972年6月17日～'73年2月7日の期間に、岡山県教育委員会文化課によって発掘された岡山市川入遺跡福井調査区法万寺、同遺跡川入調査区大道西、同八幡西入溝、倉敷市上東遺跡才の元地区、才の町、亀川地区での各地層よりの土塊、井戸の底土、井戸水に埋った土器の中の土塊に含まれている植物種実および土器から採集された炭化種実などについて、1973年3月および10月にそれらを送付されて種類の同定を依頼された。著者は同年4月から本年3月上旬の間、次に述べる方法でそれらを検出し同定した結果について、ここに報告する。

1 調査試料と方法

岡山県教育委員会で採土された地層よりのサンプル番号は、図1～5、表1に概記したのとおり、弥生中期または後期に属する3世紀から8世紀の奈良期または平安期まで及ぶ地層または土器中に入っていた土塊や種子である。また参考までに、一部はそれから上層の現在の層まで採土したものがある。

土塊よりの種子の検出は、大部分は水分を含んだ土塊を100g、試料の少ないものは50gをビーカーに取って、水道水を入れ、まぜながら碎いて、シャク子状の金網にガーゼを敷き、小石、砂、粘土と有機物、植物種実を実体顕微鏡下でよりわけ、分折検出した。

それらの種実は血清管瓶で水中に保存し、'73年12月から本年3月まで前述の顕微鏡を用いて種子の種類の同定と同時に描図した。

2 調査結果と考察

川入から福井にひろがる本遺跡は、その概要②によれば両者とも微高地にあり、弥生時代後期から奈良、平安、鎌倉時代にわたる遺跡で、岡山県教育委員会文化課によって新幹線工事の施行に先立って、1972年5月からトレンチ調査による発掘が開始され、川入、大道西Ⅰ調査区では、築地状遺構と弥生時代以降の溝が検出された。また微高地の表土が掘り下げられて堅穴住居跡、その内部の炉跡、ピット、各時代の土器が検出された。また台地では2.9mの井戸が見つかり、弥生時代期末の壺とかめの各1個が出土し、その微高地の斜面を少し下ったところに西に灰色粘土が水平に延びる水田跡が認められた。法万寺の微高地の井戸は直径1.5m、深さ1.7mで内に7世紀後半の木器（キヌタ、斧の柄）があり、自然遺物にはカキ、シジミ、ハイ貝、センナリビヨウタン、モモなどが出土したといい、上東遺跡はこれらより1km西にあり、殆んど同時期に発掘され、微高地、その他の環境条件は大体同様と考えられる。

直良博士の書『日本古代農業発達史(1)』には多くの遺跡から、農、園芸作物の出土例として写真、描図があり、それによれば、弥生時代の炭化米、モミ、アズキ、大豆、縁豆、クルミ、モモ、マクワウリ、ヒヨンタン、センナリビヨウタン、ユウガオ、トウナス、マグワ、ブドウ、スイカ？ 土師器時代のスモモ？ ウメ、小麦、大麦、カキ、エンドウ、ソラマメなどがある。そのうち千葉県下北原遺跡（奈良、平安期）からの果菜描図（103頁），写真（204頁）にはアンズ、ウリ、ヒヨウタン、ウメ、トウナスの他に不詳とあるのは、本遺跡から出土した中国人などがよく食べる種子用スイカと推定される。なお出土例は少ないが、アワ粒の写真（198頁）がある。野生植物の遺体としてノビエ、ミヅソバ、カナムグラ、ノブドウ、イタドリ、タウコギ、オナモミなどの種名が例示されている（89～95頁），しかし耕地雑草の種実については、アワとその炭化稈中に雑草ヌカキビが共に混在していたという他には記載がない。

次に本調査の試料の扱い方と精度について、表①に見られるように、同一試料の土塊を100タづつ4つに区分して分析検出し、その種実の種類と粒数を記述した。その結果、出現頻度の多いモミ、イヌビュ、タカサブロウ、スペリヒュ、スズメノカタビラなどは4試料とも見られ、つぎに多いイヌホオズキ、ナズナ、メヒシバなどは3試料に出て、それぞれ1試料には欠けている。その他、ハコベ、ツメクサ、コアカソ、アカザ、トウバナ、ノミノフスマ、タネツケバナ、カナムグラなど、は2乃至1試料づつに出ていている。またモミの粒数は4試料に、それぞれ25、104、161、293が検出され、かなり変差があっても、大同小異と認められる。種子の検出には500タを1回または100タを3回繰返し分析し、平均値を出すのが望ましい。しかし分析および同定には1試料で1～3日を必要とする場合も少なくないので、本調査のように59サンプルとかなり多数の場合には、多くの調査時間が必要なので、本調査では1サンプル100タに1回のみの分析、検出とした。

長年地層内で保持された種実には、新しいものや、現代の地層にあるものに比べて、その外部の果皮などはかなり損傷されている。このため同定時の注意には、たとえば、種子の外面の凹凸の深いスペリヒュがザクロソウと見違うようにきわめて浅くなり、模様のみが残っている（図13）。またタカサブロウのように特徴的な模様をもつ果皮の大部分が消滅し、内部の種皮を残すのみとなったもの（図15），元来花被で被われているサナエタデなどの種実は、長年の間にその葉肉と細い葉脈とが腐って太い葉脈のみが残り、それが果実の基部から出ていて、あたかも刺針状の花被をもったホタルイやウキヤガラと同定さそるおそれがある（図16参考）。

表1の川入遺跡の法万寺よりのサンプル101～124および大道西のサンプル125～141では、地層図3～5で示されるように、それらは3～14地層からの採土のうち灰～暗灰色、淡黄色～灰褐色、暗茶褐色の粘土および若干のものが砂まじり粘土で、それらは乾燥状態のためか種実や有機物は分解し残物が見られなくなったと考えられる。しかし灰青色のサンプル123（4C後半～5C初期）では、水田雑草のコナギとイネ科種子、同116のキイチゴSP、その他サンプル103（平安期）の炭化玄米片、同118の穀粒アワ、同119のオトギリソウ？などがわずかに残っている（図6）。また表1C No.5の黒色粘土では、水田草のコナギ25粒、タマガヤツリ6粒、他には水中生のホタルイ、イバラモと湿地性のハコベ4粒、タネツケバナ3粒、コゴメガヤツリ2粒、コウガイゼキショウなどが出土した（図7、10）。それらは水田地層で、その当時の生えていた水田雑草と湿生、畑生の種実が湿った状態のまま続いた

ため長く保存されたと考えられた。また表1 b での井戸底や井戸から出た土器中には多くの穀類、果物種実があり水田の雑草種子はヤナギスブタが1粒のみで畠地雑草や人里植物の種子が多く出土したことは、きわめて興味が深い(図8, 9)。すなわち、穀物ではモミ419粒、アワ116粒が多い。エノコログサはアヒに近縁で形がやや円くアワより小形、とくに幅と厚さが小さく、アワの先祖と考えられている(図8, 13)。果菜ではスイカ(種子が大きく、現在の中国産の種子用スイカに似ている)とユウガオとが6粒、果物としてはモモとカキなどが16粒認められた。一方人家付近に群って生えていたと考えられる人里植物や畠地雑草のイヌホオズキ67粒(イヌホオズキは有毒植物であるが、古来漢方薬として利用され、安江博士によればニーギニア高地族はタロイモ畠の雑草である本種を食用のために残しておくという、笠原:日本雑草図説(3)123頁), ナズナが43粒、イヌビュ16粒、イヌビエ2粒、アザミ2粒、スズメウリ、タデ類3粒、カタバミ2粒などが、その他はミミナグサ、クワクサ、アゼガヤ、カモジグサ?などの出土例で、前者の粒数が後者よりも多く出土するのは、恐らく前者のそれら茎葉を当時野菜として食用または薬として利用していたためと思われる。

また溝中から得られた土塊では、水田雑草の外に畠地生の雑草や人里植物の種実も流入していて、とくに、イヌホオズキが145粒と最も多く、次にコナギの70粒が多い。その他水生のスブタや湿性のイヌビエ、スゲ、ノミノフスマ、タネツケバナ、水田のイヌノヒゲ、タマガヤツリ、アゼトウガラシ、ヒエガエリ、畠地のナズナなどが少數見られた。(図10, 11)

つぎに表1 C での現代の地層からの検出は、モミ、コムギの他に、多くの水田、畠地の雑草種子が出土した。すなわち、畠生の5科6種20粒と水田生の10科21種106粒の多数が検出されそれらのうち5種は調査中に発芽した。しかし第2層では4種4粒、第3層では1種1粒にすぎない。(図12)

埋土進草種子の発芽(寿命)について、著者の実験では50余年間埋った水田層からイグサ、アゼナなど数種が発芽した(農学研究51(1) 1965)。実験的に有名なのは A.Kivilean(1973) らの発表(5), それは1879年に土とまぜて瓶に入れ、土中に埋た Dr.Beal の試料であって90年後にモウズイカが20%発芽した。遺跡ではコペンハーゲンの S.ø Dum (1955) がB.P.1700年の遺跡の土からシロザ、ノハラツメクサの発芽を報告した(4)。最長記録では、一昨年の秋田下堤遺跡の縄文中期(B.P.3990±105) から200余粒のタデ種子が発見され、ビニール袋中で100余粒が一齊に発芽した。その未発芽種子について著者の研究では、外皮は損傷が甚しいが胚が健全のため、同年9月から15°Cで7ヶ月保存後にも、ハルタデで60%の発芽生育を確認した(1973年日本作物学会、第156回講演会要旨資料集), さらに出土タデ種子を走査電子顕微鏡で観察した。

また第5層から得られたハムシは新しい感じもするので偶状に後からついたとも考えられる。

表1 b の上東遺跡からの検出では、才の元の井戸内と亀川地区の川底の地層からのもので、前者が畠生6種10粒、水田生3種8粒、湿地生2種2粒、後者では畠生6種8粒、水田生2種2粒、湿地生3種5粒であり、才の町ではアワ、モミが数粒の外、タネツケバナ、スズメノテッポウ、オオバコ?などの雑草が9種見られた(図13, 14)。また表1 a では、上東亀川ピットからの土塊についての検出であるが、前述したように、それは100gを4回反復し、計400gの土から検出された。それら種実にはモミ(内外エイ)が586粒と炭化玄米3粒と畠地雑草の種、果皮が17種168粒と多いのに比べて、水田雑草は1種19粒にすぎない。このピットはモミなどの貯蔵穴かとも考えられ、またその付近に生えていたいからかは利用していた植物体の混入ではなかろうか。なおヒノキの葉片の多数が出てくるのは、これを覆としたか、または付近にヒノキが生えていたと推定できた(図15)。

以上、井戸土器中、井戸の底、川の底、またはピット内での残存種子が灰色地層よりも多く、そし

てそれらの種実の内容は分解しても、比較的に固い果種皮が残り、種実の種類同定をなし得るまでに、割合によく保存されている。そしてそれらの溝、井戸中、井戸底、川底の黒色粘土や土器中の雑草種実の種類には、畠生のものが多く、それらは陸地より流入しおち込んだと考えられる。一方栽培植物の種子には、モミを除いて他には畠地栽培でのアワ、スイカ、ユウガオ、モモ、カキの残存が見られた。井戸の土器中には、モミ、アワ粒の破片が多いのは、これらを保存した土器を誤って落したものかとも考えられた。それらは焼米など除いて内容は腐敗しているが、外皮が比較的よく保存されその種の特徴を残している。なお栽培植物の種実については、参考までに先年、雄町遺跡から発掘されたものを、ここに描図すれば、アズキ、センナリビヨウタン、マクワウリ、ヒメグルミ、ウメなどがあった（図16）。

以上、本遺跡から出土した植物種実は21サンプルの1860gの土から栽培植物4科、7種、1144粒、人里植物、畠畠雑草など26科、46種、997粒であった。

ま　と　め

前述のように、弥生後期から鎌倉時代にわたる本遺跡で取出された黒色粘土層や溝、井戸底やとくに井戸中の土器から多くの植物種実が検出された。それらは、著者が以前調査した津島、雄町または久米庵寺跡の弥生前期の農耕初期の水田層や溝跡の出土種実には、カナムグラ、コアカソ、ヤブジラミなどの林縁のソデやマット群落の種類、また水生、湿生植物のイバラモ、スブタ、ホタルイ、ハリイなどの検出が多いのに比べて、本遺跡ではそれらの出土はないかきわめて少なかった。

本調査の結果から見て、本遺跡での川入、上東付近ではきわめて多数のモミが検出され、すでに相当広い面積で乾田でのイネづくりが行われていたことが推定できる。そして水田にはコナギ種子がやや多く検出され、少数だが水生のイバラモ、スブタ、イヌノヒゲ、タガラン、湿地生のカヤツリグサ類、タカサブロウ、ヒエガエリ、イヌビエ、アゼガヤ、コウガイゼキショウなどの他に、麦の検出がないので裏作田の確認はできないが、裏作田に生える幹田雑草のナズナ、タネツケバナ、ノミノスマ、ハコベ、スズメノテッポウなど10数種が出土したので、裏作の可能性は十分考えられる。これら水田地帯において以外なことは、畠生のイヌホオズキ、イヌビュ、スペリヒュ、ナズナなどが多く検出されたことである。

それらは上東遺跡の才の町から出土した弥生期終末から古墳初期時代の甕の底に焦ついていた炭化粒が米よりきわめて小形なので、ヒエ、キビまたアワの何れかとされていたが、それ自体の遺物では鑑別ができなかった（図14）。しかし井戸内から得られた弥生期末の土器中にきわめて多数のアワの内外殻が検出されたので、甕の焦つき粒はアワと推定される。よって当時から水田でのイネ作りの外に、住居付近の畠でアワが栽培されて米と共に常食されていたと見てよからう。（また井戸水の土器中にモミ、アワ共に陸産の昆虫の蛹の遺体が2匹見出され、うち小形のものは穀類の害虫コクヌストモドキ類縁とも疑われた）。

またモミ、アワの他に果菜としてのスイカ、ユウガオ、果樹としてのモモ、カキの外、多種類の雑草種子が検出された。それらが栽培されていた畠には、古来から相当数の雑草が生えていたと考えられた。すなわち、各種作物には随伴雑草がセットで移動渡來して来たと推定される。古くからイネとイヌビエやコナギ、また畠ではエン麦と野生エンバク、後代のアマとアマドクムギなどその例があ

る。そして雑草は耕地に適応した特性をもつため、人間が雑草の除去に努力を重ね、精を出しても、耕地の耕起、施肥作業を繰り返す限りはいつまでも絶えることがなく、旺盛な生育を続けることができる。ある。

なお本遺跡の調査結果から見て母畑や住居付近での雑草、人里植物のうちできわめて多くが検出されたものには、畑地のイヌホオズキと水田でのコナギ※がある。それらとともに粒数はそんなに多くなかったが、イヌビュ、スバリヒュ、アカザ、ハコベ、タデなどの種子が検出されたが、それらはただ雑草としての存在だけではなくて、茎葉が野菜または薬として利用されていたとも考えられた。

(※イヌホオズキの薬用または食用の他に、コナギの若い葉は現在でも東南アジア地方では野菜として食用にされているといい、またイヌビュ、アカザ、タデなどはかつて栽培されていたし、スバリヒュ、ハコベなども食用されされていた。(笠原:日本雑草図説9—10, 359頁)

文 献

- 1 直良 信夫: "日本古代農業発達史" さ・ら・え書房 (1956)
- 2 岡山県教育委員会文化課: "山陽新幹線に伴う埋蔵文化財調査概要" 川入遺跡 (1973)
- 3 笠原 安失: "日本雑草図説" 養賢堂 (1968)
- 4 S, Ø Dum : "Germination of Ancient Seed" Dansk, Bot, ARKIV, 24(2), 9—68 (1965)
- 5 A, Kivilean, etc : The Ninety-year period fr Dr. Beal's seed viability experiment, Amer. J. Bot. 60 (2) 140—145 (1973)

謝 辞

本調査のサンプルを送られた岡山県教育委員会文化課および検出昆虫の同定につき教示を受けた当所安江安宜教授ならびにサンプルの検出分析、描図に助力せられた武田満子、木村美智子氏など各位に対して深謝の意を表します。

後記:著者が古代遺跡からの出土種子に関心をもった動機は、今から35年前の昭和13年ごろであったと記憶している。それは東大理学部長川部言人教授から故近藤万太郎先生のもとに多数の種実の遺物が送付され、その同定に従事したのが始まりである。戦後には昭和35年に三重県鈴鹿市の弥生式遺跡の地下2m下の黒色粘土の泥炭層より検出された種実について発掘者加藤次雄氏の依頼で、ヒョウタン、モミ、クルミ、マクワウリ、クスノキ、エゴノキなどを同定したことがある。岡山県下の遺跡については、昭和43年から岡山市津島、雄町、久米郡久米廃寺跡より出土物について調査し、ついで本報告のものである。これらについては近い将来一括して発表したいと考えである。

自然科学的鑑定および考察

図 版 正 誤 表

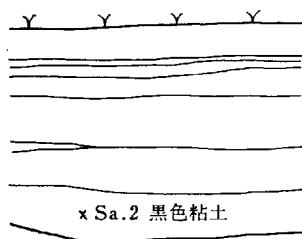
頁	誤	正	頁	誤	正
341	第1図 2 (挿入)	第一層 耕土 (1) 第二層 灰青色微砂混 り粘土 (2) 第三層 黄色粘土 (3)	345	図10 a イヌノヒビ イヌビュ	イヌノヒゲ イヌビニ
342	第4図 4 Sa-121	Sa-124	346	第12図 イヌビュ	イヌビニ
343	図7 シソ ココメカヤツリグサ	シソ ? コゴメガヤツリ	347	図14 C フワ ? (挿入)	(炭化粒)
344	図9 a タネシケバナ	タネツゲバナ	348	図16 雑草2種 (参考図) (挿入) サイエダテ	(弥生~土師器) サナエダテ

表1 川入遺跡、上東遺跡より出土植物種子の種類と粒数

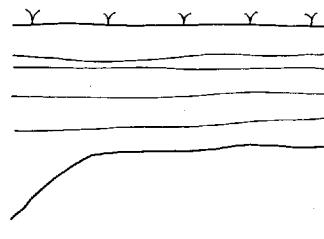
遺跡名とサンプル		水洗土のg 総数	水洗土のg 総数	備考																	
a ピット内	b 周り、溝及び川底			○印 水田(イネ)の雑草						△印 湿生又は田畑共通、畦畔雑草											
上東遺跡龜川ピット(弥生後期)		100g	236	●モ玄米	△ノミノフスマ	△タネツバナ	△イヌホオズキ	△タカサゴ	△トウバナ	△カタバナ	△イヌビエ	△スベリヒユ	△ハコベ	△カタバナ	△カヌマダラ	△タカシバ	△メヌカ	△スカタビラ	ヒノキの果実	不明	
(標高+20cm)		100g	352	●モ玄米	△ノミノフスマ	△タネツバナ	△イヌホオズキ	△タカサゴ	△トウバナ	△カタバナ	△イヌビエ	△スベリヒユ	△ハコベ	△カタバナ	△カヌマダラ	△タカシバ	△コアシダ	△カシバ	△エノコログサ	ツブライ	不
●モ. 1		161	8	●モ玄米	1	-	2	4	3	1	2	23	16	-	2	3	1	2	1	1	-
●モ. 2		293	7	●モ玄米	-	1	-	2	-	1	2	16	2	-	1	2	21	-	1	1	-
●モ. 3		133	-	●モ玄米	-	1	2	3	-	1	16	1	-	-	-	-	1	1	3	-	
●モ. 4		78	-	●モ玄米	-	1	-	-	1	3	-	1	29	-	2	-	1	11	-	1	-
合計		799	3	●モ玄米	583	19	2	1	2	5	6	2	2	77	3	2	1	1	5	36	1
合計		799	3	●モ玄米	583	19	2	1	2	5	6	2	2	77	3	2	1	1	5	36	1
遺跡名とサンプル		総数	総数	△モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス
a ピット内		236	236	18	2	-	1	-	2	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
標高+20cm		352	352	30	3	2	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
●印 栽培植物 4科		133	133	582	108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
+印 スペリヒユにはサクヨソウの混在も考えられる。		78	78	100g	72	53	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
●印		100g	100g	100g	57	1	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
●印		100g	100g	100g	183	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
●印		100g	100g	100g	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
●印		100g	100g	100g	41	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計		1052	43	114	5	1	2	9	1	3	1	2	78	3	1	1	1	1	213	3	3
遺跡名とサンプル		総数	総数	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス
b 周り、溝及び川底		236	236	18	2	-	1	-	2	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡井戸—1底付近 8C (種子のみ)		50g	582	364	108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡井戸 2-B 8C		50g	582	364	108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡井戸器中 3C末		50g	582	364	108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡井戸土器 2-小かめの中 3C末		100g	100g	100g	57	1	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
上東遺跡、●印の元井戸内(弥生後期)		100g	100g	100g	183	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡溝中サンブル1,暗灰色粘土 3C末		100g	100g	100g	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡溝中サンブル2,暗灰色～黒色粘土 7C末		100g	100g	100g	41	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡溝中サンブル4 黒色粘土 7C末		100g	100g	100g	41	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
上東遺跡川地区川底、●印 古墳時代初期		1052	43	114	5	1	2	9	1	3	1	2	78	3	1	1	1	1	213	3	3
合計		1052	43	114	5	1	2	9	1	3	1	2	78	3	1	1	1	1	213	3	3
遺跡名とサンプル		総数	総数	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス	●モアス
c 水田跡の粘土層		236	236	18	2	-	1	-	2	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡サンブル123灰粘土(平安)		100g	100g	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡T40~41川岸サンブル3 黒色粘土		100g	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡T1サンブル4.5~80cm黑色粘土 7C末		100g	38	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
上東遺跡、●印の町P⑤(9葉、弥生後、古墳初期)100g		44	6	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡1耕土 現代		166	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡2灰青色微砂まじり粘土		4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
川入遺跡3 黄色粘土		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計		290	8	7	1	2	2	2	9	5	24	2	19	1	4	52	1	1	2	3	1
																					39

○印 水田(イネ)の雑草
△印 湿生又は田畑共通、畦畔雑草
■印 河岸の雑草
●印 栽培植物 4科
▲印 不明
△印 次の不明また1, 2種少數粒の出士サンプルから後の種類の粒数は除外した。すなわち岡山市川入遺跡サンブル101, 103, 105, 111, 116, 117, 118, 119, 133, 倉敷市上東遺跡A.4才の町P①焼化層、同A.5才の町P①焼化層の底に焦げたアワ?は省略し、また種子の出なかつたサンブルは102, 104, 106~108, 112~115, 120~122, 124, 125~141であった。

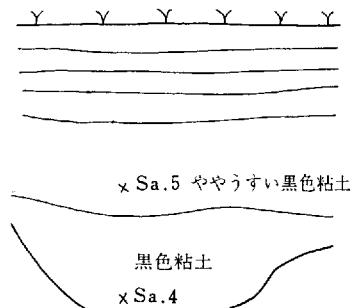
第1図1 入溝調査区土層断面図



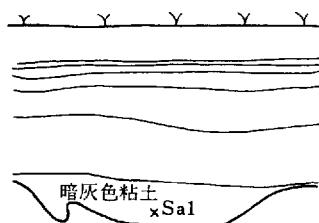
第1図2 八幡西土手状遺構土層断面図



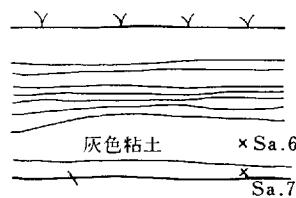
第1図3 八幡西調査区溝断面



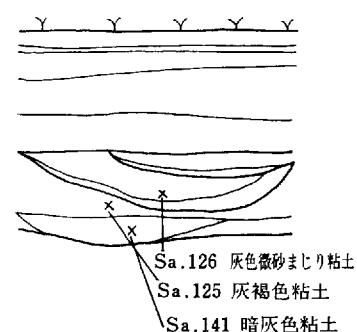
第1図4 入溝調査区溝状遺構土層断面図



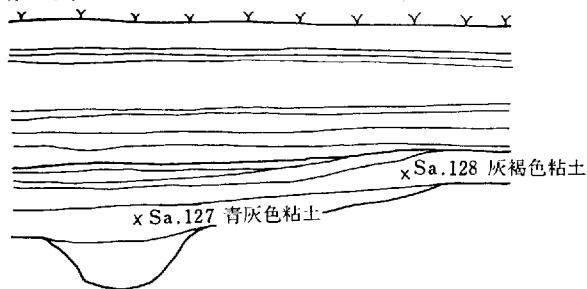
第2図 大道西I 土層断面図(No.25)



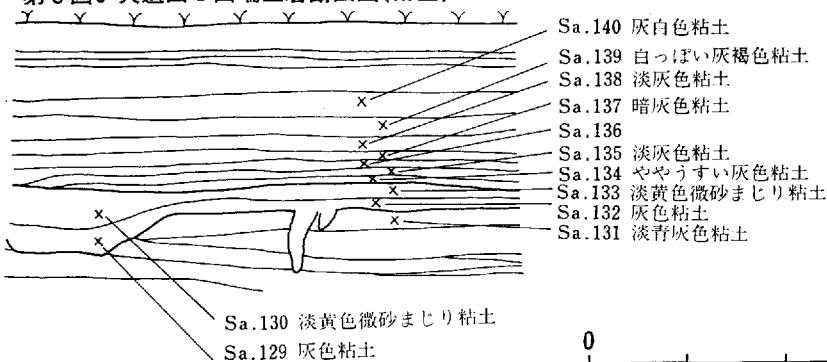
第3図1 大道西I 溝103、104土層断面図



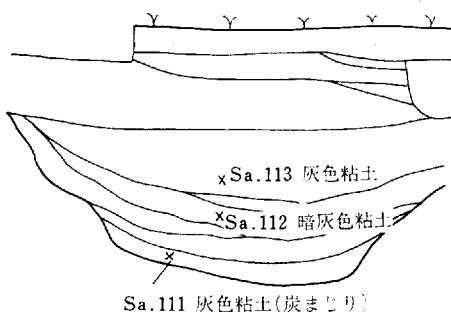
第3図2 大道西I 微高地西端土層断面図(北壁)



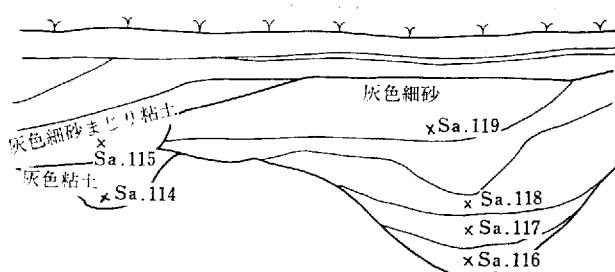
第3図3 大道西I 西端土層断面図(南壁)



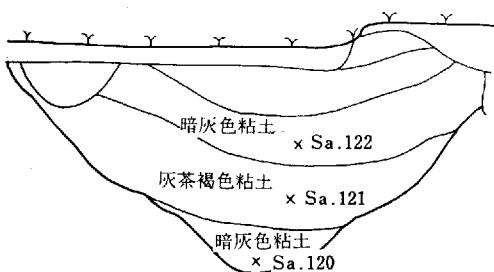
第4図1 法万寺溝314土層断面図



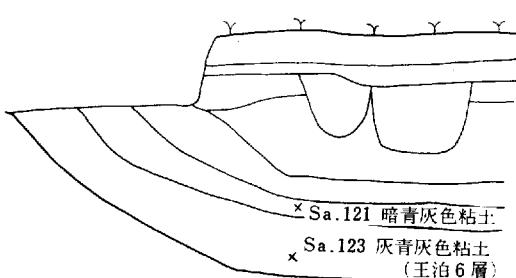
第4図2 法万寺溝312~316土層断面図



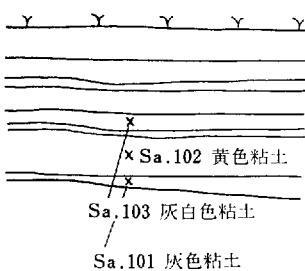
第4図3 法万寺溝320土層断面図



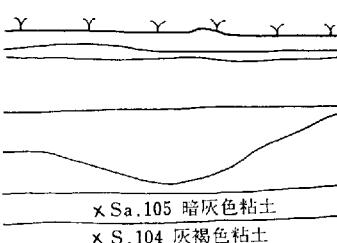
第4図4 法万寺溝321,322土層断面図



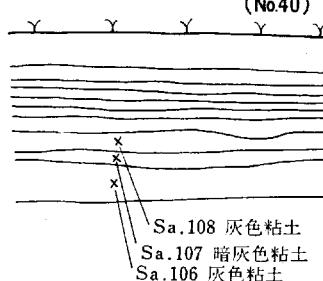
第5図1 法万寺西端土層断面図



第5図2 法万寺西端土層断面図



第5図3 法万寺東端土層断面図
(No.40)



第5図4 法万寺東端土層断面図

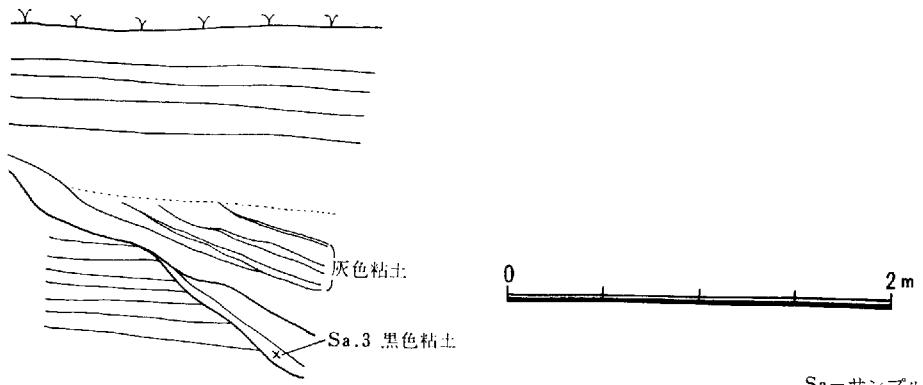


図6 岡山市川入遺跡 法万寺調査区

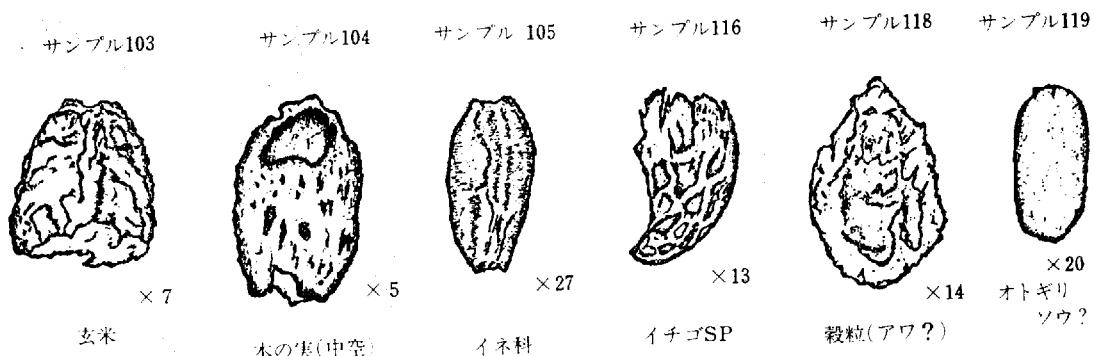


図7 岡山市川入遺跡 法万寺調査区川入T 40~41 川岸サンプル 3

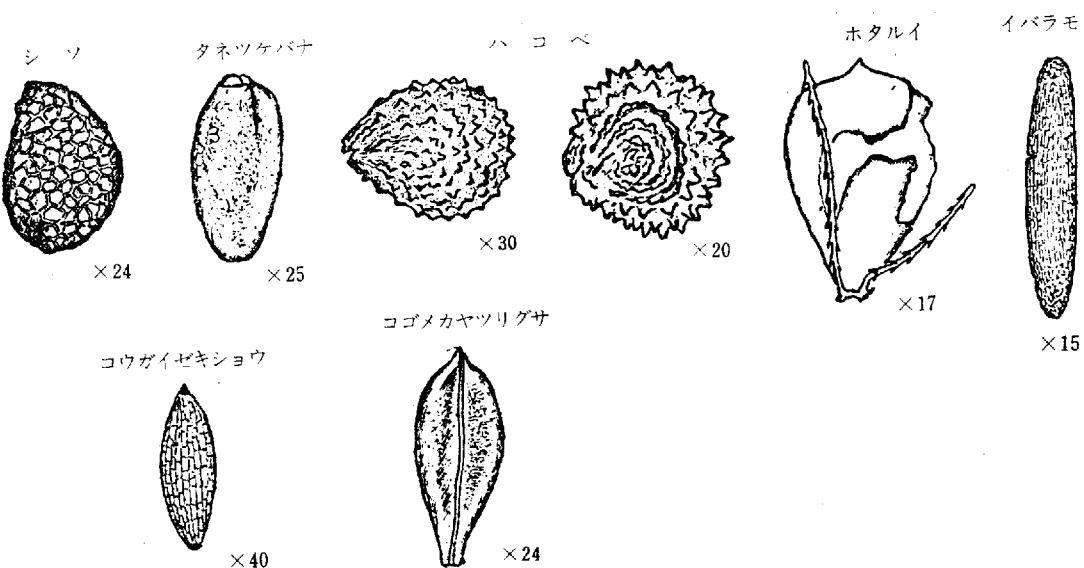


図8a 岡山市川入遺跡 法万寺調査区 <井戸 301底付近>

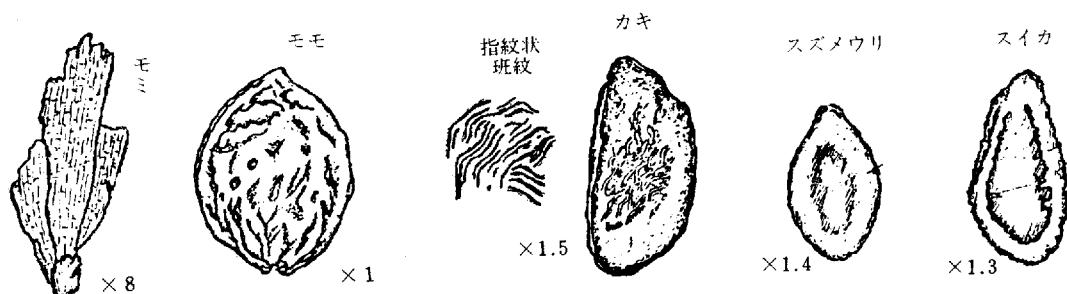


図 8b 岡山市川入遺跡 法万寺調査区

〈井戸302-B〉

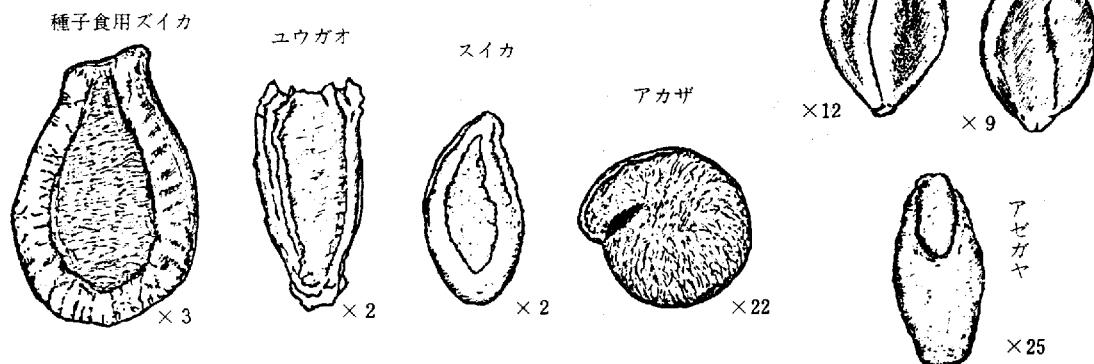


図 9a 岡山市川入遺跡大道西調査区 〈井戸101土器中〉

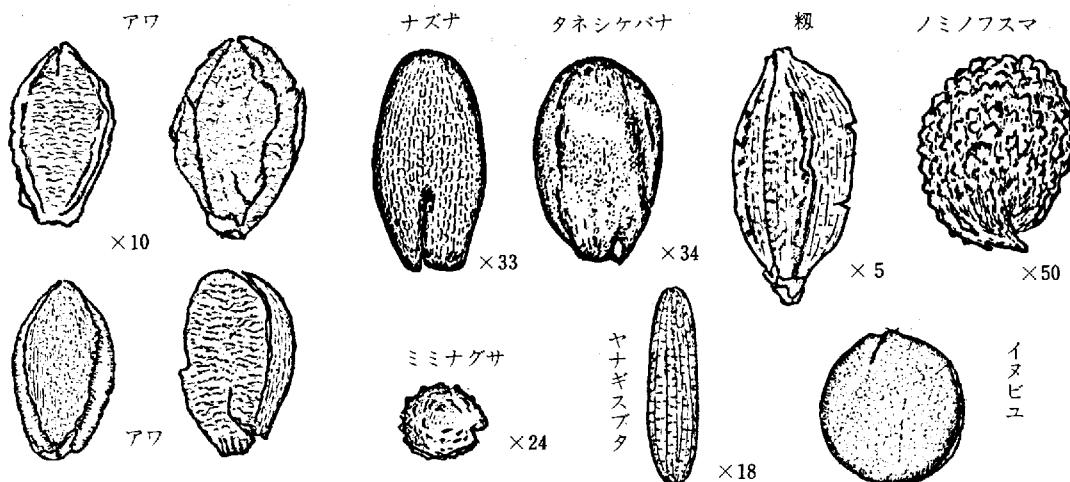
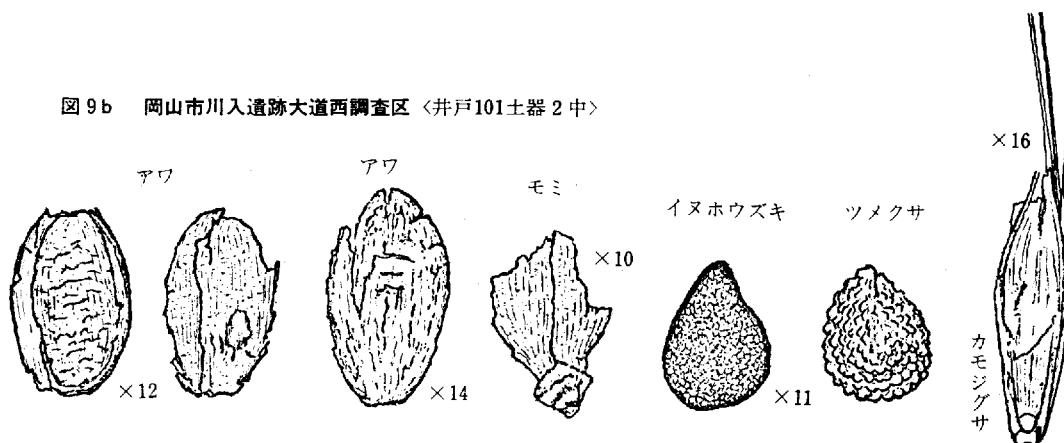


図 9b 岡山市川入遺跡大道西調査区 〈井戸101土器 2 中〉



自然科学的鑑定および考察

図10a 川入遺跡八幡西入溝（川入サンプル4）〈川入T, 溝中〉

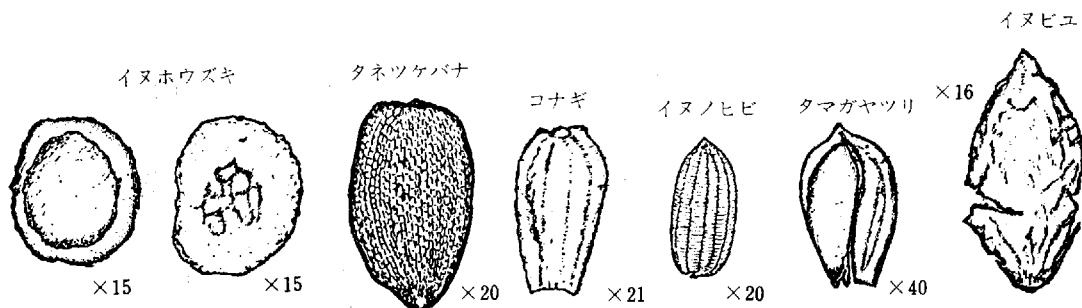


図10b 岡山市川入遺跡 八幡西, 入溝（川入サンプル5）〈川入T, -80cm〉

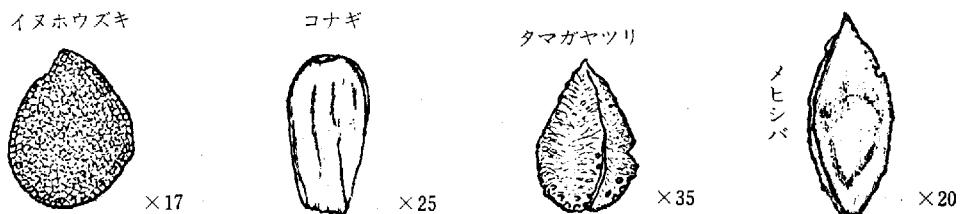


図11a 岡山市川入遺跡 八幡西, 入溝（川入サンプル1）〈川入17W-18cm溝中〉

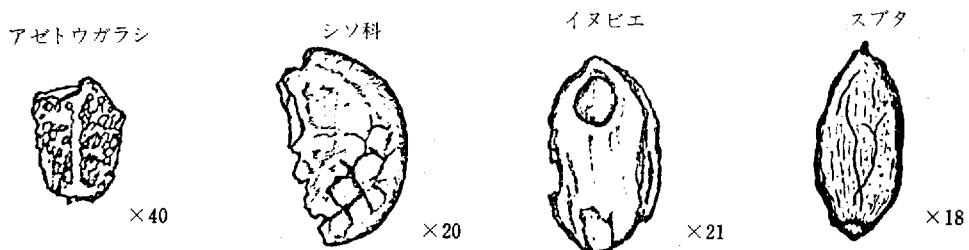
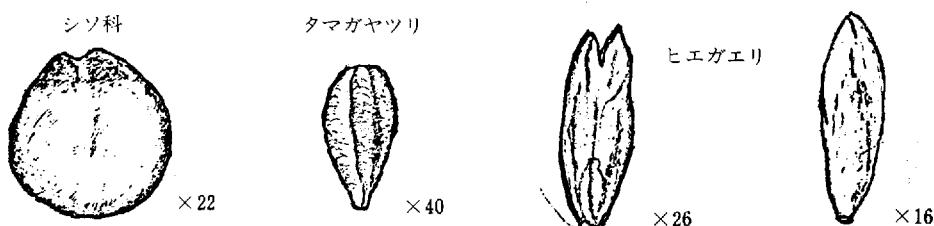
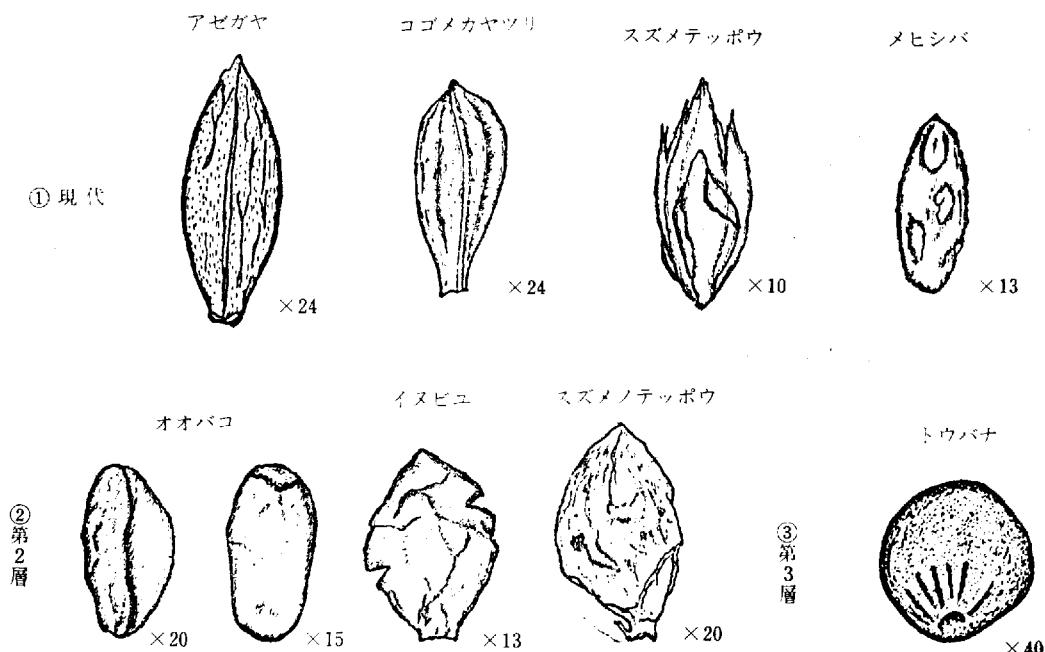


図11b 岡山市川入遺跡 八幡西, 入溝（川入サンプル2）〈川入17W-3m50〉



自然科学的鑑定および考察

第12図 岡山市川入遺跡 八幡西、入溝



第13a 倉敷市上東遺跡 No.1 才の元地区 井戸田内（弥生後期）

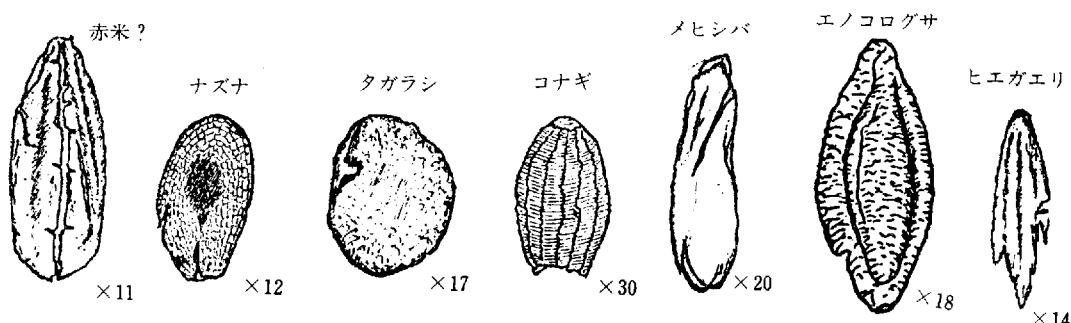


図13b 倉敷市上東遺跡 No.2 才の町P-1ホ（弥生後期末）



図14a 倉敷市上東遺跡 No.3 龜川地区川底（古墳時代初期）

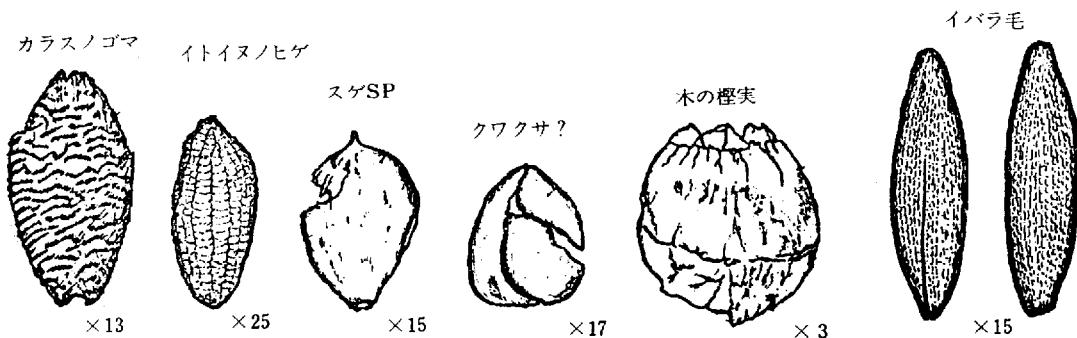


図14b No.4 才の町P-④ 炭化層（弥生終末）

図14c No.5 才の町P-① (弥生後末～古墳初)

アワ?



図15 倉敷市上東遺跡 龜川P-④ (弥生後期)

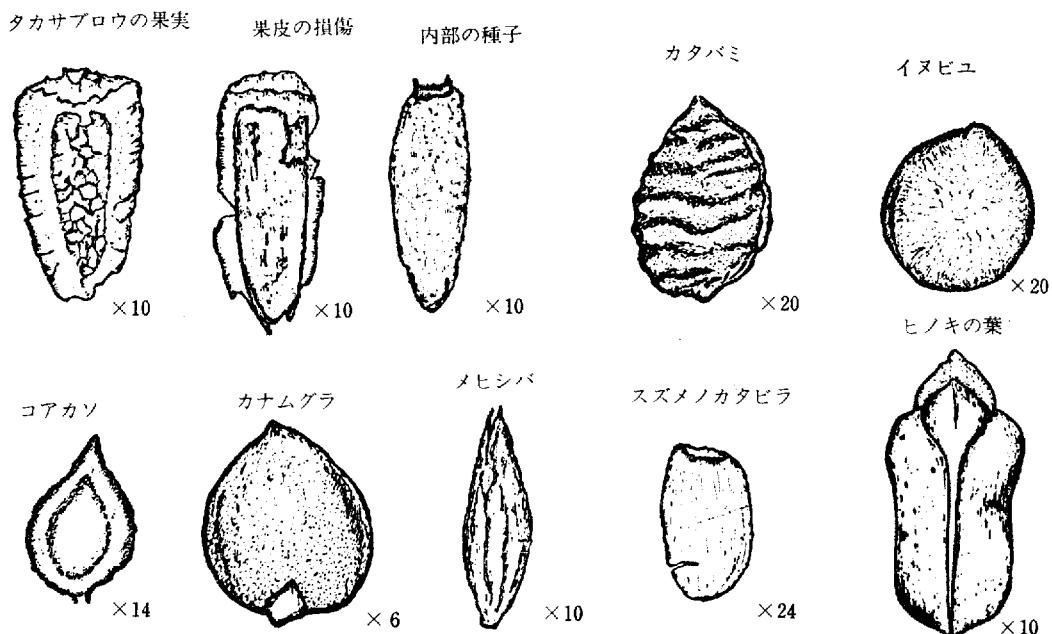
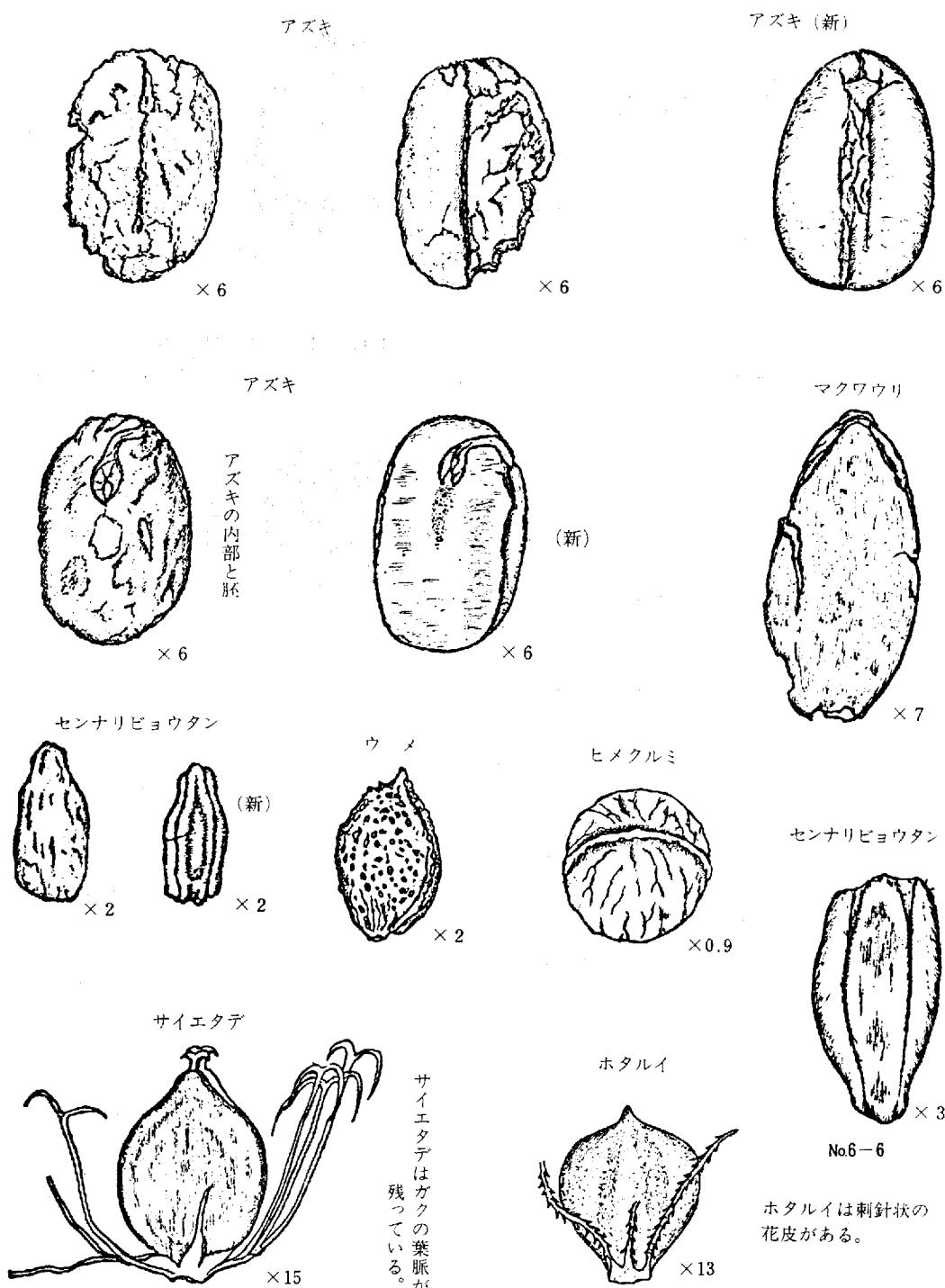


図16 雄町遺跡よりの作物種子と雑草2種(参考図)



川入・上東遺跡出土木器類 樹種鑑定総合所見

岡山大学農学部 教授 畑 柳 鎮

- (1) 使用木材の樹種について、一般に郷土樹種が多く、集落周辺の山野に自生しているものが使われた。
- (2) 加工器具については、一般に、ナタかノミ、または小刀の類によるもの多く、技術も幼稚なものが多い。しかし、¹²の曲物11の板状木製品、38の曲物などには精巧な器具と技術の存在を認められる。
- (3) 樹種の選択については、使用器具の目的に応じて、それぞれ適する硬木、軟木が選ばれているが、その選択の基準は器具によってまちまちである。したがって以下2、3順を追って各出土木器ごとに気付く点を列記する。
- イ 井戸材④、⑦、¹²にクスノキが選ばれている点について、特に大木で井戸桶に適した形状を持っていたという点で選ばれたものであろう。材は比較的硬く、くされ難い点もあるがクスノキの成分の樟脑について多少清浄作用があるが消毒、殺菌作用があると信じられて使用されたものかもしれない。
- ロ きぬた¹⁵斧板¹⁶については、共に硬さ強度を考えて、周辺の林の中から選ばれたものであろう。
- ハ 曲物¹²はヒノキ材の弾力と可塑性に富む性質を利用したもので選択眼は勝れたものを持っている。
- ニ 中世井戸内木器¹⁸の原型はよくわからないが、垣根などに多く使用されているイヌ、マキの枝か幹をそのまま使用したものようである。
- ホ 3、4、6、7、9は、それぞれ硬木で強い性質を要する点から、周辺の林の中のアラカンや、コナラ、クロガネモチが用いられた。
- ビ 1と12について、軽く加工し易い点からキリが選ばれたものと思うが、9のようにクスも使われている。木製品出土中、その形態といい、加工法の点においても貴重な標本である。
- ヘ 2と5にトチノキが使われていることは、キリよりも強度が大で、加工性に富む点から選ばれたと思うが、食器類や日用器具にかなりトチノキが使われていたことが想像される。
- ト 13、14は、その用途は孤あみの際の孤あみの際の繩かと断定してよいと思う。米俵、炭俵を作る際に使ったものであろう。漁具の浮きではその硬さ、浮力に疑問が多い。
- チ 26、27、28の男性性器型木製品については、その形態上、適当な太さの枝が、その材料として使われたものであろう。特に樹種的特性を尊重して選ばれたものでなさそうである。
- リ 19、20と、25は、共に山林内から、比較的細くて、強力に富む点から、その目的に応じて切り取り利用されたものと思う。

自然科学的鑑定および考察

ヌ 34のつる状繊維については、断面構造は、ノブドウであるが、丸い茎そのままでなく、中の芯を除き、四つ割か八つ割に割って多少角を落として編み込まれたものである。

ル 35の加工、木取りには、柾目を生かし強度を考えて削ったおり、材の性質をよく考え、その特性を生かす工夫があったことを知らせてくれる。

ヲ 36、37の形状と用途については、不明である。南方材を思わせる光沢と材質を肉眼的には感じさせられたが、精密顕鏡の結果は、周辺に自生するアラカシであった。

ワ 47の柄もへ、に述べたようにトチノキが使われている。

(4) 以上鑑定結果の大要を述べたが、今後の保存については、これを水中から取り出して乾燥することは亀裂や反張、変色、変形を生ずるので、できるだけ水中で保存するよう留意して欲しいと思う。

川入遺跡

地区	遺構	番号	遺物名	樹種	地区	遺構	番号	遺物名	樹種
大道西Ⅰ調査区 弥生時代井戸	①	井戸杭材	アベマキ	大道西Ⅱ調査区 中世井戸	中世	⑨	井戸の横板	スギ	
		②	井戸板材	アカマツ			井戸の横板	スギ	
	③	曲物の底	ヒノキ	井戸	11	はりつけ板	クスノキ		
		④	ヘラ状板			スギ	12	曲物	ヒノキ
		⑤	板材			クロマツ	13	井戸内出土木器	イヌマキ
大道西Ⅱ調査区 中世井戸	⑥	井戸材(上)		法万寺調査区 末井戸	7世紀末	14	井戸材	スギ	
		⑦	井戸材(下)	クスノキ			きぬた	アラカシ	
	⑧	井戸角材	モミ	16		斧柄	アベマキ		

上東遺跡

地区	遺構	番号	遺物名	樹種	地区	遺構	番号	遺物名	樹種
才の町地区 P	1	スプーン状木製品	キリ	才の町地区 P	12	片口容器	キリ		
		2	スプーン状木製品	トチノキ		13	おもり状木製品	アラカシ	
	3	えぶり	アラカシ	14		おもり状木製品	アラカシ		
		4	枝状木製品	クロガネモチ		ト	15	建築材片	イティガシ
	5	棒状木製品	トチノキ	16			くさび状木製品	イティガシ	
		6	二又鋤	コナラ			17	二又鋤片	コナラ
	7	くさび状木製品	アラカシ	P-イ 亀川地区 斜面	18	きぬた	ウバメガシ		
		8	鋤			アラカシ	19	ちきり	コバノミツバツツジ
	9	片口容器	クスノキ			20	ちきり	ヤマツツジ	
		10	台状木製器			サワグルミ	21	楕形木製品	クロマツ
	11	板状木製品	ヒノキ			22	板状木製品	モミ	

自然科学的鑑定および考察

地区	遺構	番号	遺物名	樹種	地区	遺構	番号	遺物名	樹種
亀川地区	底	23	建築材	キリ	J	P	36	刀状木製品	アラカシ
		24	弓状木製品	ザイフリボク		I	69	刀状木製品	アラカシ
		25	弓状木製品	ザイフリボク		P	123	曲物	ヒノキ
		26	男性性器形木製品	ネムノキ	J	P-3	39	井戸板材	アラカシ他
		27	男性性器形木製品	コナラ	I		40	杭材	スギ
		28	男性性器形木製品	ウバメガツ		P-4	41	井戸板材	スギ他
		29	加工木	ホウノキ			42	杭材	アベマキ
		30	加工木	リヨウブ	J	P-1 (井戸)	43	横板材	アカマツ
		31	籠状木製品	アカマツ	I	II	44	杭材	コナラ
		32	板状加工材	アカマツ	才の元地区	井戸	45	井戸材	
		J-20	井戸板材	モミ他			46	杭材	ネムノキ
J 15	井戸 I	33	つる状纖維	ノブドウ		III	47	柄	トチノキ
		P-69	35	剣状木製品	アラカシ	鼻川	斜面	48	

川入遺跡出土の馬骨について

林 田 重 幸
鈴 木 孝 司

(東京農工大学農学部家畜解剖学教室)

岡山市川入、福井（旧吉備町）にひろがる川入遺跡は、彌生時代後期から奈良、平安、鎌倉時代にわたるものといわれる。山陽新幹線建設に伴い、昭和47年5月から調査が行われた。同48年1月にはほぼ1頭分の馬骨が出土した。6～7世紀のものといわれる。

筆者らは岡山県教育庁の依頼により、昭和48年6月14～16日、現地において調査を行った。考古学的出土状況については、発掘者により記載されると考えるから、既にとり上げられていた馬骨について所見を述べることにする。

1) 馬骨の状況

出土当初の写真(2)によって、各骨の分布状態がわかる。残存していた骨は(図71)が示すように、脊柱を形成する椎骨は腐蝕し、頸椎の初めの2～3個が腐蝕しながらも頭蓋骨に連結していたに過ぎない。四肢の長骨は前後左右入れ乱れているが、右前肢に属する互に関節する肩甲骨、上腕骨、桡骨、左後肢の踵骨、距骨、中足骨、基節骨(第1趾骨)は小範囲にまとまっていた。左の肩甲骨と桡骨、左の脛骨は1群(写真2の右上)をなし、それらに関節する上、下の諸関係骨とは離れて存在した。

また、各骨には刀の類により切り離された形跡は見られない。骨の存在した場所は狭い溝といわれるから、斃死した馬の軟部組織が腐蝕し、韧帯がはずれた時点で、流水で多少移動し、その上に土砂が被ったものと考えられる。



写真1 馬骨出土状況土層との関係

2) 各骨に対する所見と測定値

A 頭蓋骨

下顎骨はこの地域から少しく離れて存在した。発掘当時は下顎骨を除いて保存状態は良かったと言われるが、掘り起こされる段階で頭蓋および顎面背部諸骨に破損をきたした。よって、測定可能な主要部位を測り、骨を反転して、歯と口蓋面が判るように土を除いた。(写真3、4参照)

上顎切歯は、中間歯が永久歯に脱換し、その咬面が磨滅し始め、隅歯が脱換の時期に当たる。大歯が現われ始め、また第3後臼歯が脱換、咬面に達し、やや磨滅をみることから、溝4才半と推定さ

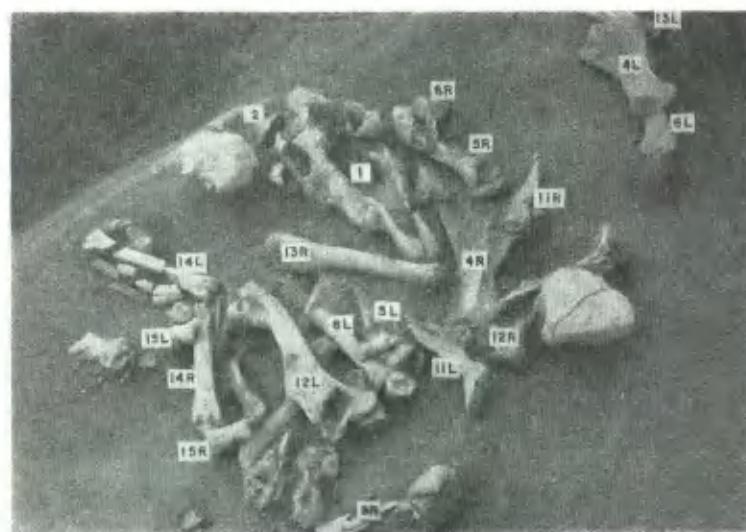
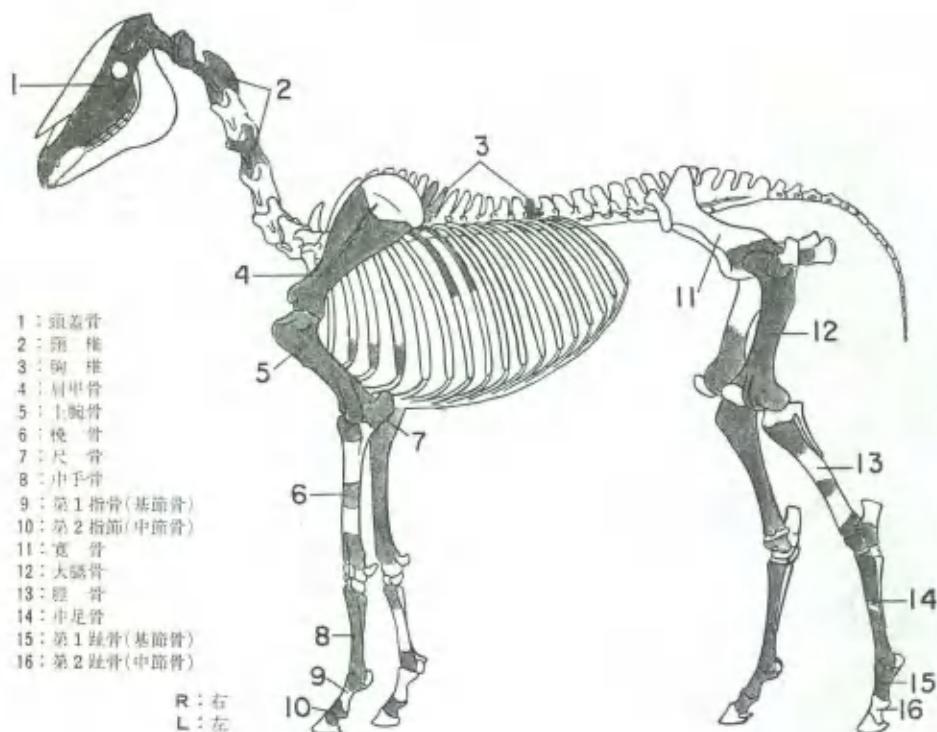


写真2 馬骨出土状況

第71図 残っていた骨



れ、犬歯が存在することからオス馬と判定される。

頭蓋は薄い扁平骨であるため破損が甚だしく、頭頂骨、前頭骨、鼻骨の大部分は欠除する。幸なことに馬体の体高を推定できる基底長と最大長は測定できる。

測定に当って、本邦在来馬である御崎馬と比較するため齊藤らの測定方法に従った。齊藤らは岡部の木曾馬について行った測定方法に準じているから、木曾馬とも比較ができる。測定可能な主要部位の測定値を次に掲げる。括弧内の測定値は、トカラ馬、メス、4才半、体高109.5cmのものである。測定点を明確にするため図73を掲げておく。



写真3 頭蓋骨

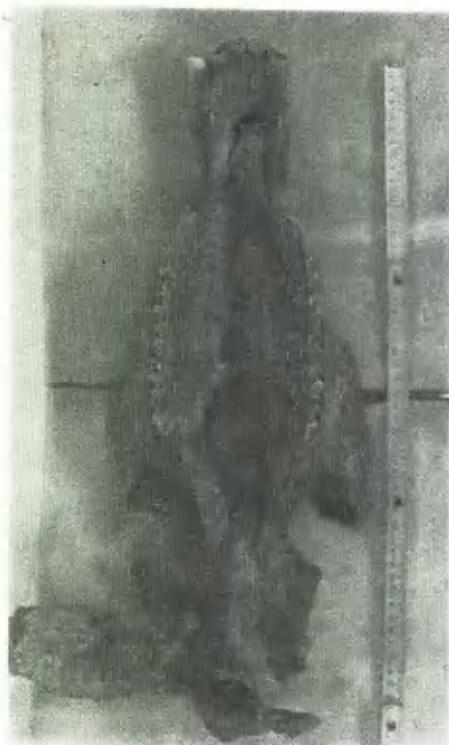


写真4 頭蓋骨、口蓋面

第72図 頭蓋骨の測定点

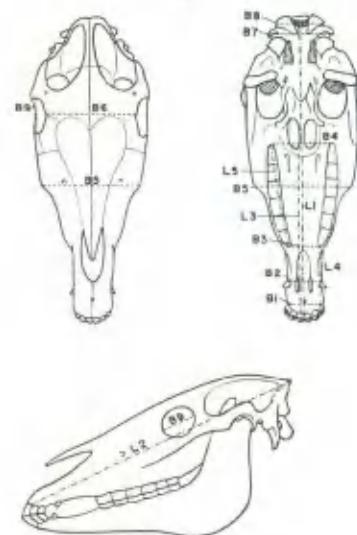




写真5 肩甲骨 左……左側(4L)
右……右側(4R)



写真6 上腕骨 右側(5R)

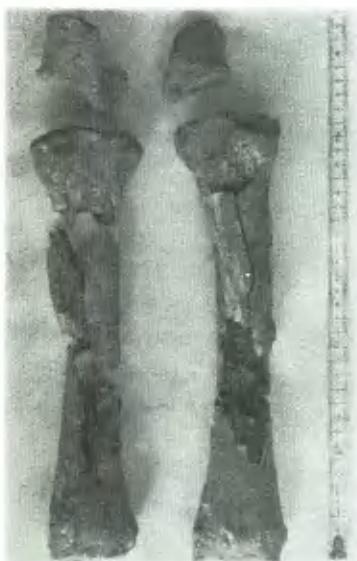
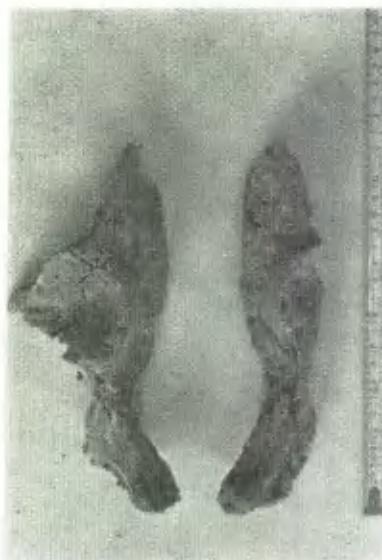


写真7 尺骨及桡骨
左……左側(6L)
右……右側(6R)
上の小片は尺骨頭



写真8 中手骨
左……右側(8R)
右……左側(8L)
左下…右第2指骨(10R)
右下…左第1指骨の
近位部(9L)

写真9 寛骨 左……左側(11L)
右……右側(11R)写真10 大腿骨
左……右側(12R)
右……左側(12L)

L 1	頭蓋基底長—一切歯中央縁から大(後頭)孔の腹縁中央部まで	450mm (412mm)
L 2	頭蓋最大長—一切歯中央縁から項稜の後部中央部まで	491mm (455mm)
L 3	口蓋前部の長さ—一切歯中央縁から口蓋骨正中口蓋縫合の後端まで	239mm (213mm)
L 4	歯槽間縁の長さ—J ₃ (隅歯)の歯槽後縁からP ₂ (俗称大1前臼歯) の歯槽前縁まで	85mm (67mm)
L 5	臼歯列長—P ₂ の歯槽前縁からM ₃ の歯槽後縁まで	161mm (157mm)
B 1	口の幅—J ₃ の外側後縁を結ぶ距離	60mm (55mm)
B 2	犬歯間の幅—犬歯の附着する歯槽後縁間	48mm (44mm)
B 3	P ₂ 間の幅—P ₂ 歯槽前縁間	67mm (65mm)
B 4	M ₃ 間の幅—M ₃ 歯槽後縁間	101mm (95mm)
B 5	顎幅—顎稜前端間	190mm (142mm)
B 6	前頭幅—眼窩縁の前頭涙骨縫合間	147mm (125mm)
B 7	側頭骨乳様突起下端間	102mm (84mm)
B 8	後頭窩の幅—後頭頸外側縁間	84mm (68mm)
B 9	眼窩最大幅	72mm (63mm)

以上各部の測定値から、川入遺跡の馬は体高109.5cmのトカラ馬より大きい。筆者および山内が考案した馬における骨長から体高を推定する公式(Ⅲ)により、基底長および最大長から体高を推定すると、それぞれ127.71cm、127.80cmとなる。

御崎馬について、齊藤らは4才以上のもの8頭(オス1、メス7)について、頭蓋骨を測定しその基底長を46.44±1.39cm、最大長を50.96±1.36cmとしているから、本例の45.0cm、49.1cmは御崎馬の平均値よりやや小である。本例はトカラ馬のような小形馬ではなく、中形馬に属する御崎馬の大きさ



写真11 胫 骨
左……左側 (13L)
右……右側 (13R)



写真13 第1趾骨と第2趾骨

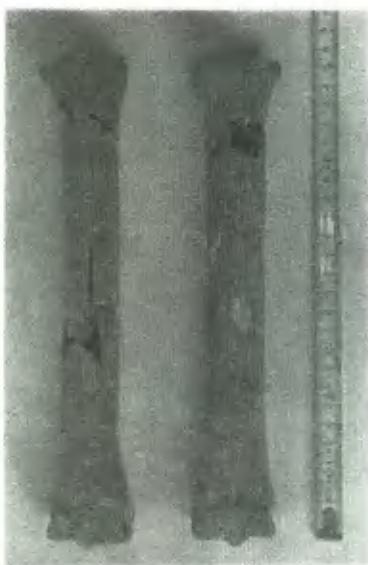


写真12 中足骨
左……左側 (14L)
右……右側 (14R)

の範囲にある。

B 主要四肢骨

測定に当っては、主としてDUPERSTの方法、DUPERSTの方法に従っている岡部及び齊藤の方法に準じた。

肩 甲 骨 (左)

近位部欠除する現長290mmにして、肩甲頭幅 (60mm)、遠近最大幅 (83.5mm) が測られる。

上 腕 骨

左右ともあるが、骨表面の腐蝕甚だしく、現長右 (263mm)、左 (257mm) である。右は近位部の大、小結節欠除のため最大長は測られないが、上腕骨頭が完全なのでここからの長さ DUPERSTの3—4 (以下Dと略す)、すなわち生理的長さは252 mmである。なお、遠位幅73mm、同径 (70mm) である。

橈 骨

右は完全にして、左は近位、遠位部だけが測定できる。測定

値を表5に示す。

これらと比較するために、本邦の小形在来馬であるトカラ馬および宮古馬（沖縄）、同じく小形馬に属する韓国济州島馬、小、中形共存する対州馬（対馬の在来馬）の小なるもの、中形馬に属する宮崎県御崎馬（M₁は御崎馬のうち小なるもの）、木曾馬（岡部による測定個体7のうち最小、最大のもの）、北海道和種、蒙古馬、および日本古代馬の数値を掲げておく。

測定値が示すように川入馬は小形馬より大で、中形馬の小なる部に入る。なお、日本古代馬は出水

貝塚（鹿児島県、縄文後晩），平出遺跡（長野県、土師期）出土のものである。

中 手 骨

左は完全，右は近位だけ測られる。測定値は表6のようであり，前者と同様，中形馬の小なる部に入ることがわかる。日本古代馬は野上遺跡（栃木県、縄文），原ノ辻（長野県壱岐，彌生），高倉貝塚（名古屋，熱田，彌生）出土のものである。

大 跛 骨

左は概して原型を保つが，近位部大転子，遠位部上顎の1部を欠くので最大長は測られないが，大腱骨頭からの長さ（D5—2）は340mm，骨体最大幅（D24—25）は38mm。

脛 骨

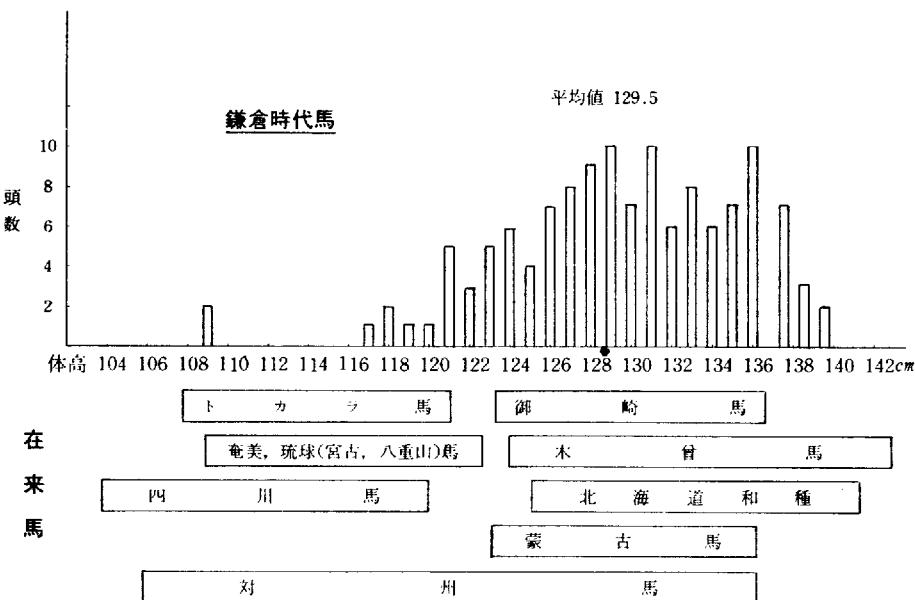
右の外側最大長（340mm）は完全である。骨体表面は腐蝕するが，骨体中央径（32.5mm），骨体最小幅（34mm），遠位幅（66mm），遠位径（42mm）。

中 足 骨

右は完全，左は骨体中央部やや腐蝕するが測定可能である。測定値を表3に示す。測定値が中形馬の小さいものに属する。日本古代馬は瓜郷貝塚（愛知県，彌生），カラカミ貝塚（長崎県，壱岐，彌生）出土のものである。

第1趾骨（基節骨）

左，右ともに完全，最大長（76mm），近位幅（48mm），同径（34mm），中央幅（30mm），同径（21mm），最小幅（29mm），最小径（17mm），遠位幅（40.5mm），同径（23mm）。



第73図 中世鎌倉時代馬の推定体高と在来馬の体高の範囲図
に示された川入遺跡の推定体高（・印）

3) 体高の推定

前項において、川入馬は諸骨の測定値の上から、本邦の小形在来馬のそれより大きく、中形在来馬のうち小なる部に入るであろうと述べたが、筆者および山内による骨長から体高を推定する公式(III)により計算すると下のようになる。その平均をとると推定体高は 128.7cm となる。

トカラ馬の体高は 107~121cm の範囲、平均約 115cm、中形馬である御崎馬、木曾馬は多少の差はあるが 123~142cm、平均 132cm 程のものであるから、川入遺跡の馬は中形馬に入り平均よりやや小さい。

中形日本在来馬のうち、宮崎県都井岬の御崎馬が最も純粹性を保って、現在天然記念物に指定されている。その骨の測定値について筆者の行った 2 例は既に表記したが、最近崎大学農学部齊藤、黒木教授らは、その遺骨を蒐集、測定を行った貴重な資料がある。これによると成馬 19 頭についての推定体高を、最低 122.37cm、最高 134.77cm、平均 129.73cm としている。川入遺跡馬が推定体高 128.71cm であるから、その平均値よりやや小さい。齊藤らによる測定値のうち、同氏らの行った推定体高順に、川入遺跡馬の関係諸骨と比較したのが表 4 である。表中 No.29 の中手骨最大長 251mm は大に過ぎ誤記と考える。中手骨は中足骨より遙かに小なるものである。

次に、元弘 3 年(1333)、新田義貞の鎌倉攻めの際に斃死埋没されたと考えられる鎌倉市材木座遺跡出土の馬の四肢骨 128 本をもとに計算された推定体高は 109~140cm、平均 129.5cm であるから、川入馬は鎌倉時代馬の平均値よりやや小さい。各在来馬の体高範囲、鎌倉時代馬 128 本からの推定体高馬数を棒グラフにして図 73 に示し、川入遺跡馬の推定体高をプロットしておく。

要 約

- 岡山市川入遺跡から、ほとんど 1 頭分の馬骨が出土した。6~7 世紀のものといわれる。遺骨の散在状態から狭い溝で斃死、または死後溝に棄てられ、軟部組織が腐蝕、靱帯が腐った時点で流水により、骨が多少移動し、その上に土砂を被ったものであろう。
- 歯の状態から満 4 才半のオス馬にして、推定体高は 128.7cm 前後のものである。鎌倉時代馬の平均値に近く、現在残存する中形在来馬である御崎馬の大きさの範囲にあり、その平均体高よりやや小さい。

参 考 文 献

- J. Ulrich Duerst (1926) : Vergleichende Untersuchungsmethoden am Skelett bei Saugern, Handbuch der biologischen Arbeitsmethoden Abt. V11
- 岡部 利雄 (1953) : 日本在来馬の研究、学術振興会
- 林田 重幸・山内 忠平 (1955) : 九州在来馬の研究 I トカラ馬について、日本畜産学会報、26巻 4 号、P.231~236
- 林田 重幸 (1956) : 日本古代馬の研究、人類学雑誌、64巻 4 号、P.197~211

部 位	測 定 値 mm	推定体高 cm
頭蓋骨基底長	450	127.71
頭蓋骨最大長	491	127.80
橈骨最大長	319	127.21
中手骨最大長	217	131.70
胫骨最大長	340	129.22
中足骨最大長	257	128.63
平 均		128.71

自然科学的鑑定および考察

林田 重幸 (1957) : 中世日本の馬について, 日本畜産学会報, 28巻 5号, P.301~306,

林田 重幸・山内 忠平 (1957) : 馬における骨長より体高の推定法, 鹿児島大学農学部学術報告, 第6号, P.146~156,

林田 重幸 (1966) : 本邦家畜の起源と系統, 「日本民族と南方文化」金閥丈夫博士古稀記念委員会編, 平凡社, P.375~402

齊藤 勇夫・黒木 正雄・村上 隆之 (1972) : 御崎馬の死亡調査と遺骨の測定 第3報 骨の測定値について, 宮崎大学農学部研究報告, 第19巻 1号, P.295~304

齊藤 勇夫・黒木 正雄・村上 隆之 (1972) : 御崎馬の死亡調査と遺骨の測定第4報 頭蓋の測定結果について, 宮崎大学農学部研究報告, 第19巻 2号, P.505~515

表5 機 骨

mm

区分	川入		トカラ馬		対州馬		宮古馬	濟州島馬	御崎馬		木曾馬		北和海道種	蒙古馬	古代馬	
	右	左	T ₂	T ₃	M ₁	M ₂	K ₂	K ₇	出貝水塚	平遺出跡						
体高 cm			109.5	115.0					136				133.5	132		
最大長	319	—	287	299	287	305	283	319	345	320	334	337	314 (290)	—	292	
近位幅	74	78	66	69	71	68	67	82	81	81	81	81	82	—	69	
中央幅	42	42	35	40	40	39	38	46	48	47	47	48	48	35	39	
遠位幅	37	—	29	30	34	32	29	35	39	41	39	35	40	30	32	
外径	25	—	20	21	23	22	21	24	26	26	27	27	30	21	23	
中央幅	66	63	57	62	65	65	60	71	74	78	75	73	76	—	—	
遠位幅	40	39	33	35	39	40	35	42	46	43	46	45	49	—	—	
中央幅 × 100	11.59	—	10.10	10.03	11.85	10.49	10.25	10.97	11.30	12.81	11.67	10.35	12.72	10.34	10.95	
最大長 × 100	—	—	10.10	10.03	11.85	10.49	10.25	10.97	11.30	12.81	11.67	10.35	12.72	10.34	10.95	

表6 中 手 骨

mm

区分	川入		トカラ馬		対州馬		宮古馬	濟州島馬	御崎馬		木曾馬		北和海道種	蒙古馬	古代馬		
	左	右	T ₂	T ₃	T ₄	M ₁	M ₂	K ₄	K ₇	海道種	蒙古馬	野貝上塚	原貝辻塚	高塚倉熱貝田	平遺出跡		
体高 cm			109.5	115	118				136				133.5	132			
最大長	217	—	185	196	204	194	193	183	214	225	218	229	229	215	192	202	208 228
外側長	213	—	178	188	197	190	192	176	213	220	212	220	219	208	188	192	200 221
内側長	203	—	176	186	193	187	190	175	207	218	209	218	218	205	187	191	198 219
近位幅	50	49	41	42	44	42	41	40	50	50	47	50	49	50 (40)	46	45	47
外径	32.5	30	28	28	30	—	—	28	33	33	32	33	35	34	—	29	30 32
中央幅	30	—	26	28	27	28	28	26	29	32	29	31	30	34	28	29	31 32
内側幅	25	—	19	20	20	—	—	20	23	25	23	24	23	25	20	22	24 23
遠位幅	45	—	39	43	41	40	41	38	49	49	45	47	47	48	37	43	43 45
外径	—	—	30	31	32	—	—	28	35	36	35	36	35	37	—	32	34 35
半火薙 最大長 × 100	13.82	—	13.78	14.29	13.23	14.43	14.14	13.93	13.56	14.22	13.30	13.58	13.10	15.81	14.55	14.36	14.90 14.04

表7 中足骨

mm

区分	川入		トカラ馬			対州馬	宮古馬	済州島馬	御崎馬		木曾馬		蒙古馬	古代馬			
	左	右	T ₂	T ₃	T ₄				M ₁	M ₂	K ₄	K ₃		野貝上塚	瓜貝郷塚	カミ貝塚	原貝辻塚
体高 cm			109.5	115	118						136		132				
最大長	257	257	225	236	246	234	240	227	262	267	260	274	263	—	(235)	248	250
外側長	254	254	221	227	240	227	236	221	253	262	255	267	261	—	—	—	245
内側長	249	249.5	217	225	239	227	234	219	250	258	253	265	259	—	—	—	243
近位幅	45	47	41	43	43	41	41	41	50	51	48	48	51	—	—	—	45
々径	37	38	36	37	40	39	39	37	41	42	41	40	41	—	—	—	37
中央幅	(28)	29	25	26	26	25	27	25	28	30	29	30	30	32	27	25	28
々径	28	28	23	23	—	24	24	22	27	30	28	28	31	25	25	28	—
遠位幅	43	42	39	44	44	41	42	38	48	51	47	47	50	41.5	41	43	46
々径	33.5	31	30	32	33	33	33	30	36	39	—	—	38	33	30	34	35
中央幅 × 100 最大長	10.89	11.28	11.11	11.02	10.57	10.68	10.61	11.01	10.69	11.24	11.15	10.99	12.16	—	10.64	11.29	11.60

表8 御崎馬との比較

mm

区分	川入遺跡馬	御崎馬						馬	
		No. 6 9才以上 ♂	No. 29 13才 ♀	No. 5 15才以上 ♀	No. 23 9才 ♂	No. 18 9才 ♀	No. 15 6才半 ♀		
推定体高(cm)	cm	128.7	126.4	128.2	128.3	130.1	130.9	—	134.1
頭蓋基底長		450	459	460	478	465	485	—	474
頭蓋最大長		491	501	490	507	510	522	—	514
橈骨最大長		319	314	319	325	319	323	—	335
中手骨最大長		217	213	(251)	217	217	220	—	215
胫骨最大長		340	334	331	336	333	333	—	350
中足骨最大長		257	250	251	260	266	266	—	263
第1趾骨最 大長		76	70	77	73	76	78	—	82

倉敷市上東遺跡出土の馬歯について

(川入遺跡の馬下頬歯を含めて)

林 田 重 幸

鈴 木 孝 司

(東京農工大学農学部家畜解剖学教室)

まえがき

昭和48年6月、岡山市川入遺跡から出土した6～8世紀のものであろうというほとんど1頭分の馬骨を調査したが、その際、川入遺跡の西方約1kmの地にある上東遺跡からの馬の歯を包含する土塊を示されたのでこれを調査した。

上東遺跡は弥生期から古墳期の初めにわたるものといわれ、昭和47年12月4日、7号住居跡の東南肩に馬歯らしきものが現われたという。出土層、伴出遺物の状態から、古墳期の初めのものであろうといわれる。

出土の状況と標本の作成

上顎を上、下顎を下に、つまり頭蓋骨の下顎基底部を地平面においていた形で存在した。左の上顎、下顎臼歯はたがいた咬み合全臼歯が残っている(写真1参照)。右臼歯も出土時には残っていたと思われるが、堀り起される時点で破損し、ただ後臼歯(M_1, M_2)が不完全な形で左後臼歯(M_1, M_2)から約4cm距って存在する。また幸なことに、下顎切歯と下顎左犬歯はほぼ原状の位置にある。

よって、破損の甚だしい上顎後臼歯の基部を石膏で固めて一括除去し、下顎臼歯、犬歯および切歯は、それらの基部に地をつけたまま石膏で固めて標本を作成した(写真2, 3)。骨は腐蝕して全く見られない。歯の内外側表面のセメント質は腐蝕消失、象牙質は僅かに残っているが、エナメル質のヒダはしっかりとしている。

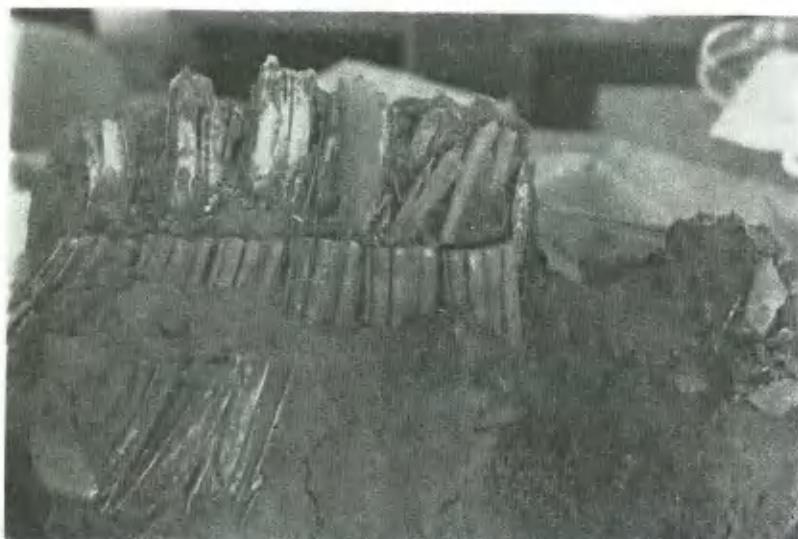


写真1 上東遺跡出土の馬歯 出土の状態

歯に対する所見

切歯・・・左鋸歯
(J₁), 中間歯 (J₂),
隅歯 (J₃)は右の J₁,
J₂とともに完全である。
いずれも永久歯であって歯次から
かん満7才前後と判定される。
測定値を示せば下表のようになる。

区分	J ₁	J ₂	J ₃
長	14.08.4	16.08.6	18.08.0
幅	—	—	—
左	14.28.4	16.08.8	—
右	—	—	—

馬では通常、歯次
エナメルヒダは回の字

状に中央部に小円形輪をなし、外側のエナメルヒダから独立しているものである。ただ J₃ の永久歯がはえ、咬面に達し、摩滅し始めた初期には凹の字状を呈することがあるが、本例のように、成長した壯令の段階ですべての切歯の歯次が四字状に、外エナメルヒダの連続として入り込んでいるのは珍らしい例であるので特に記載しておく(写真4 参照)。

犬歯・・・下頬に明らかに認められた(写真3 参照)切歯と臼歯のほぼ中に見られる黒いところ)が破壊消失した。犬歯の存在することによりオスと判定される。

臼歯・・・上頜左臼歯は全歯とも残ってはいるが、エナメルヒダの破損が甚だしく測定には堪えられない。

下頬左の全臼歯は完全に原形に近く、配列状態も多少のズレはあるが、ほぼ原位置に近い。右は後臼歯 (M₁, M₂) の一部が残っている。

よって、左臼歯を測定の対象とし、各歯の歯冠咬面の長さと、幅を測定した。幅はセメント質がないため、エナメルヒダの最大幅であり括弧で示した。それらの測定値を示すと別表のようになる。



写真2 上東遺跡出土の馬歯 上顎左臼歯



写真3 上東遺跡出土の馬歯 下顎臼歯及び切歯



写真4 上東遺跡出土の馬歯

切歯 (左から J₃, J₂, J₁,J₁, J₂, J₃ (破損)

左下の黒い部は犬歯存在場所

$P_2 \sim M_3$, $P_3 \sim M_2$ はそれぞれ P_2 , P_3 の咬面前端から, M_3 , M_2 の咬面時端までの長さである。

下顎臼歯の比較

mm

区分	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3	$P_2 \sim M_3$	$P_3 \sim M_2$
	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	長 幅(ニナメ) 幅(ル幅)	臼歯全長	歯冠長
上 東 遺 跡 馬	30.5 (14.7)	26.5 (16.0)	25.0 (16.0)	24.0 (16.0)	25.0 (13.0)	27.0 (12.0)	156	102
川 入 遺 跡 馬	31.0 14.0(13.0)	28.0 17.0(15.0)	28.0	27.0 -15.0(14.0)	27.0 15.0(13.5)	28.0 13.0(12.0)	161	108
多々良遺跡馬	-	27.0 16.0	25.0 16.0	24.0 16.0	24.0 15.0	14.0 14.0	-	100
L	31.5 13.4	25.5 17.0	25.7 17.2	22.7 17.2	22.5 16.7	29.0 15.5	156.9	95
五島宇久島馬	R	31.3 16.4	25.1 17.2	24.6 17.5	22.8 16.0	23.1 15.3	29.9 14.2	95.6
トカラ馬	31.0 16.0(14.0)	27.0 17.5(16.0)	25.0 17.5(15.5)	24.0 17.0(15.0)	25.0 14.5(13.0)	26.0 13.5(11.0)	157	100
御崎馬	33.0 16.0(14.0)	32.0 18.0(17.0)	31.0 17.0(16.0)	26.0 16.5(15.0)	31.0 15.5(14.0)	-	166	113

次に表に示した川入遺跡馬の臼歯は(写真5.6参照), 別章に「川入遺跡出土の馬骨について」と記した馬骨群の近くにあり, 右下顎骨の一部と右全臼歯が残っていたもので, その臼咬面の全長($P_2 \sim M_3$)が161mmであって, 既に別章で述べた上顎臼歯の全長と一致するから同一個体のものと判定される。



写真5 川入遺跡出土の馬歯 下顎右歯側面



写真6 川入遺跡出土の馬歯 下顎右歯咬面

以上の馬歯と比較するために次の材料を用いた。

在来馬であるトカラ馬はメス4才半、体高109.5cm、御崎馬は体高不明であるが、オス3才半のものである。

多々良遺跡馬（福岡県）は鎌倉時代のものといわれ、8～10才で性別不明である。P₃、P₄、M₁、M₂の4臼歯だけ残しているので、比較上、表にP₃～M₂の歯冠長を設けた。

五島宇久島馬は直良信夫氏の測定によるもので、本標本は昭和26年4月長崎県宇久島神ノ浦小松林（海拔約100m）を開墾中に赤土層から得られたもので、時代不詳であるが、馬歯そのものの化石状態は貝塚時代に近いものと述べ、年令8～10才としている。五島列島には明治中葉まで小形馬がいたから、時代不詳ではあるが、小形馬と思われる所以ここに掲げた。

考 察

臼歯歯冠部の幅はセメント質の有無、腐蝕の度によって多少異なるが、長さはその影響がない。したがって、長さの点からみると、上東遺跡馬は川入遺跡馬より小さく、また臼歯全長は156mmにして、川入遺跡馬の161mmより小さく、体高109.5cmのトカラ馬の157mmに近く、五島宇久島の小形馬と推定されるものの数値に近い。また、P₃の前縁からM₂の後縁までの歯冠長を比較すると、上東遺跡馬の102mmは御崎馬より遙かに小、多々良馬およびトカラ馬の100mmに近い。よって上東遺跡馬はトカラ馬のような小形馬の大きさの範囲にあると考えられる。

川入遺跡馬は、上東遺跡馬、トカラ馬より大、比較に用いた御崎馬よりは小さい。筆者らは前章で、川入遺跡馬の推定体高と128.7cmとし、御崎馬の体高平均よりやや小の部に入ると述べた。また齊藤らは御崎馬の臼歯全長の平均を163.8mmとしているから、川入遺跡馬はこの平均値よりやや小なることがわかる。

ま と め

1 古墳期の初めのものであろうといわれる上東遺跡の馬は、オス、満7才前後と推定され、トカラ馬のような本邦の小形在来馬の大きさであると思われる。その切歯歯坎壁のヒダ形成は凹の字状の特異な形態を示している。種の特異性か、個体差かはわからない。

2 川入遺跡馬の下顎臼歯は前章に述べた川入遺跡馬の遺骨群と同一個体に属するものであり、上東遺跡馬より大きく、中形馬の平均よりやや小なるものであろう。

参 考 文 献

林田重幸（1972）：中世馬——多々良遺跡出土の馬歯を中心に、多々良遺跡調査報告書、福岡市埋蔵文化財調査報告書二十集、P.81～89福岡市教育委員会

直良信夫（1970）：日本および東アジア発見の馬歯・馬骨、P.77～82

齊藤勇夫・黒木正雄・村上隆之（1972）：御崎馬の死亡調査と遺骨の測定、第4報、頭蓋の測定結果について、宮崎大学農学部研究報告、第19巻、第2号、P.505～515

上東遺跡の泥土の花粉分析（予報）

安 田 喜 憲

（東北大学理学部地理学教室）

遺跡は海拔1m前後の足守川の沖積平野に立地している。遺跡の立地する沖積平野の南部と北部には、海拔80~100m前後の丘陵が連なっている。この地域の現植生は、*Pinus densiflora*（アカマツ）、*Quercus serrata*（コナラ）、*Cryptomeria japonica*（スギ）などが丘陵部に生育し、沖積平野は水田に利用されている。

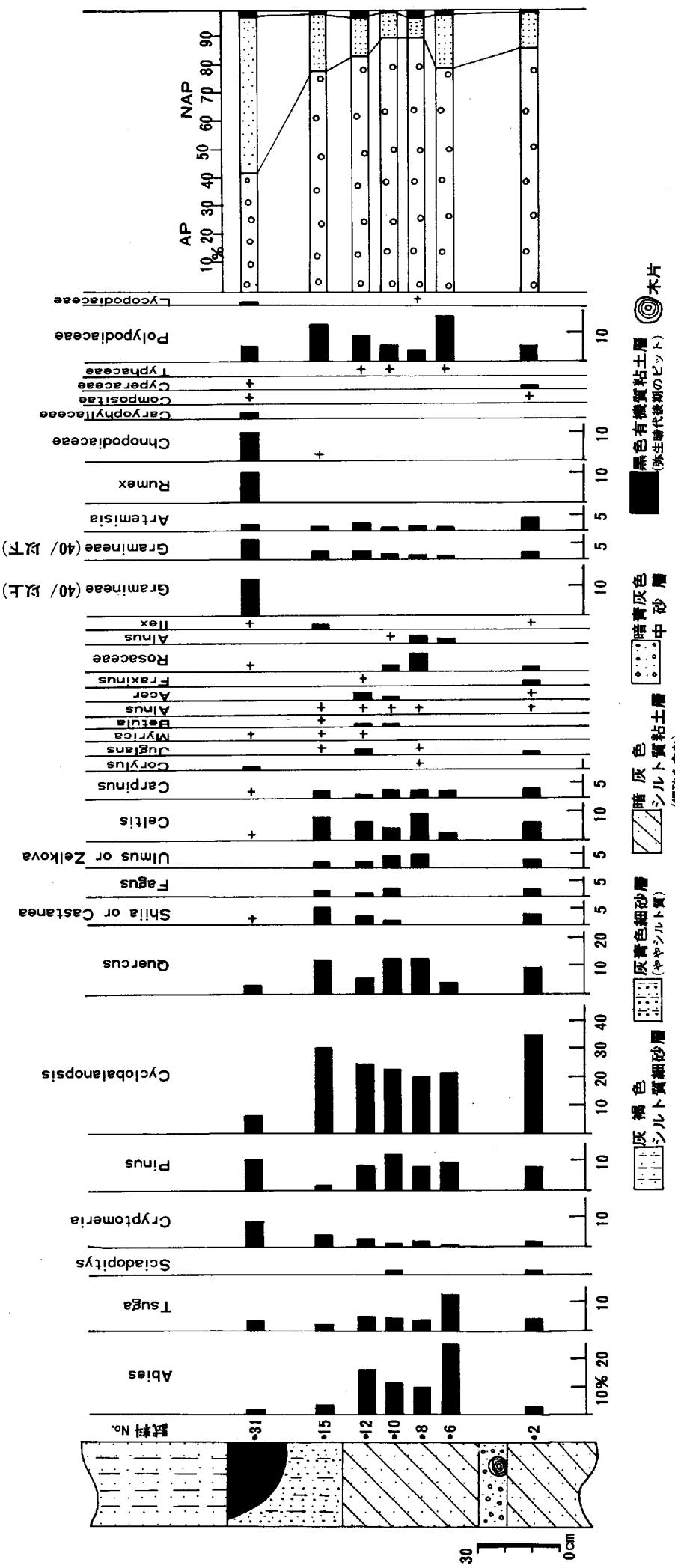
花粉分析の試料を採取した上東遺跡の亀川地区のトレンチの断面を第1図に示す。トレンチの断面は、下部より地表下240~170cm前後には暗灰色のシルト質粘土層が堆積し、特に地表下210cm前後の層準には、木片を含む暗青灰色の中砂層をはさむ。地表下170~130cm前後には灰青色の細砂層が堆積する。この灰青色細砂層の上面が弥生時代後期の生活面に当たり、黒色有機質粘土層によって充填された弥生時代後期のピットが掘り込まれている。弥生時代後期のピットの上部には、灰褐色シルト～シルト質細砂が100cm以上の層厚で堆積している。

花粉分析の試料は、このトレンチの断面から5cm間隔に採取した。今回の報告では、その内特に有機物に富む試料を選び分析を行なった。分析方法は、KOH処理—水洗—アセトトリシス処理—水洗—ZnCl₂処理—水洗—マウントの順に行なった。木本花粉（AP）を200個以上同定することに努めた。しかし、試料No.6とNo.31では木本花粉を200個以上同定することはできなかった。このため、花粉ダイアグラムは、全出現花粉・胞子の出現数に対する割合で示してある。その結果は第1図に示す如くである。

弥生時代後期の人々がこの地に居住を開始する以前の堆積層の分析結果（試料No.2~No.15）において最も高い出現率を示すのは *Cyclobalanopsis*（アカガシ属）で、その出現率は20~30%前後に達する。続いて *Quercus*（コナラ属）、*Pinus*（マツ属）、*Abies*（モミ属）、*Tsuga*（ツガ属）、*Shii*（シイ属），or *Castanea*（クリ属）、*Celtis*（エノキ属）などが比較的高い出現率を示す。草本花粉・胞子においては、*Polypodiaceae*（ウラボシ科）が5~10%の出現率を示す他は、顕著な出現は認められない。それはΣAPとΣNAPの出現比率にも明白に示されている（第1図）。

一方、弥生時代後期のピット内の黒色有機質粘土層の分析結果（試料No.31）では、これまで優占していた *Cyclobalanopsis*（アカガシ属）が急減し、7%にまで減少する。それ以外の *Abies*（モミ属）、*Tsuga*（マツ属）、*Quercus*（コナラ属）、*Shii*（シイ属）or *Castanea*（クリ属）、*Celtis*（エノキ属）などの木本花粉も同様に急減する。ただ *Cryptomeria*（スギ属）と *Pinus*（マツ属）はやや増加する。これに対し、草本花粉・胞子においては、栽培種が多く含まれると考えられる40μ以上の*Gramineae*（イネ科）、*Rumex*（ギシギシ属）、*Chenopodiaceae*（アカザ科）、*Caryophyllaceae*（ナデシコ科）、*Artemisia*（ヨモギ属）などが、この弥生時代後期のピットの分析結果に入ると、一斉に出現してくれる。弥生時代後期のピット内の黒色有機質粘土層の分析結果において、このように草本花粉・胞子の出現率が顕著に増加することは、ΣAP/ΣNAPの出現比率のグラフからも明白に読み取れる。

第1圖 上東遺跡亀川地區の花粉ダイアグラム



以上の分析結果から、弥生時代後期の人々が居住する以前、周辺には *Cyclobalanopsis* (アカガシ属)を中心とし、それに *Quercus* (コナラ属), *Shiia* (シイ属) or *Castanea* (クリ属)などを伴う広葉樹林と *Abies* (モミ属), *Tsuga* (ツガ属), *Pinus* (マツ属)などの針葉樹が生育していた。特に、現在この地域の丘陵部には顕著に生育しない *Abies* (モミ属), *Tsuga* (ツガ属)が比較的高い出現率を示すことから、弥生時代後期以前の気候は、現在よりやや冷涼であったと考えられる。ところが、弥生時代後期のピット内の分析結果では、これまで優占していた木本花粉が減少し、かわって *Gramineae* (イネ科), *Rumex* (ギシギシ属), *Caryophyllaceae* (ナデシコ科), *Chenopodiaceae* (アカザ科), *Artemisia* (ヨモギ属)など、主に人類の農耕活動によって作られた荒地などに生育する草本花粉が急増した。また栽培種と想定される40 μ 以上の *Gramineae* (イネ科)も出現した。このことは、上東遺跡での弥生時代後期の人々の居住と農耕の開始に伴って、これまで周辺に生育していた前述の森林にかわって、あらたに上記の草本類が生育するような荒地が形成されたものとみることができる。

今回の分析結果はいまだ予察的段階であり、遺跡周辺の詳細な自然環境の復原、あるいは弥生時代前期の津島遺跡との比較検討などについては明白にしがたい。この点については目下分析を継続中であり、後日あらためて報告したいと考えている。

なお、浅学・未熟の筆者に心よく花粉分析の資料採取をご許可下さった上東遺跡調査会の諸氏に厚くお礼申し上げます。

埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

山陽新幹線建設に伴う調査 II

(岡山以西)

昭和49年3月10日 印刷

昭和49年3月31日 発行

発行 岡山県教育委員会

印刷 岡山県出納局用度課